

茨城県教育財団文化財調査報告第257集

大戸下郷遺跡 2

主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

茨城県教育財団文化財調査報告第
257集

大戸下郷遺跡 2

財団法人

茨城県教育財団

平成 18 年 3 月

茨城県水戸土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第257集

おお どの しも ごう 大戸下郷遺跡 2

主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

平成 18 年 3 月

茨城県水戸土木事務所
財団法人 茨城県教育財団



第159号住居跡出土遺物



第86号住居跡出土遺物

序

茨城県は、保険・医療・福祉サービスや世代間交流などの機能を備えたまちづくりのモデルとして、茨城町において、やさしさのまち「桜の郷」整備事業を推進しています。その一環として、一般国道6号から桜の郷へのアクセス道路建設として主要地方道内原塩崎線道路改良事業が計画されました。

その事業予定地内には、埋蔵文化財包蔵地である大戸下郷遺跡をはじめ多くの遺跡が存在しております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財の発掘調査事業についての委託を受け、平成16年6月から同年11月まで発掘調査を実施しました。

本書は、大戸下郷遺跡の調査成果を収録したものです。本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県水戸土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、茨城町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し感謝申し上げます。

平成18年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 稲葉 節生

例 言

- 1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成16年度に発掘調査を実施した、茨城県東茨城郡茨城町大字大戸 1284 番地ほかに所在する大戸下郷遺跡おおどしもごうの発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。
調 査 平成16年6月1日～平成16年11月30日
整 理 平成17年6月1日～平成18年3月31日
- 3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長 荒井 保雄
主任調査員 綿引 英樹
同 杉澤 季展
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理第一課長瓦吹堅のもと、以下の者が担当した。
主任調査員 綿引 英樹 第1章～第3章2節、第3節2～4・6、第4節、写真図版
主任調査員 松本 直人 第3章3節1・5

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、 $X = +34,760\text{m}$ 、 $Y = +52,800\text{m}$ の交点を基準点 (A 1 a1) とした。なお、この原点は日本測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1 区」、「B 2 区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して、「A 1 a1 区」、「B 2 b2 区」のように呼称した。

2 抄録の北緯及び東経の欄には、世界測地系に基づく緯度・経度を () を付けて併記した。

3 本文及び実測図、遺物観察表で使用した記号は、次のとおりである。

遺構 SI—住居跡 SB—掘立柱建物跡 SK—土坑 SE—井戸跡 SD—溝跡

PG—ピット群 P—柱穴

遺物 P—土器 DP—土製品 Q—石器・石製品 M—金属製品 T—瓦 TP—拓本土器

土層 K—攪乱

4 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

5 土層解説中の含有物については、各々総量で記述した。

6 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は500分の1、遺構実測図は60分の1・80分の1、陥し穴配置図は150分の1に縮尺して掲載した。

(2) 遺物実測図は原則として3分の1で掲載した。種類や大きさにより異なる場合があり、それらについては個々に縮尺を表示した。

(3) 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

 焼土・火床面・赤彩・施釉

 炉

 竈部材・粘土・黒色処理

 柱痕・煤

● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 △ 金属製品 - - - - 硬化面

7 遺物観察表及び遺構一覧表の作成方法については、次の通りである。

(1) 遺物番号は通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

(2) 計測値の単位はcm及びgで示したが、大きさにより異なる場合もありそれらについては個々に単位を表示した。

(3) 文字資料のうち、焼成前に線刻されたものを「箋書」、焼成後に線刻されたものを「刻書」と分けて記述した。

(4) 遺物観察表及び遺構一覧表とも () は現存値、[] は推定値であることを示している。

(5) 備考欄には、土器の現存率及び写真図版番号の他に、必要と思われる事項を記した。

8 「主軸」は、竈（炉）を持つ竪穴住居跡については竈を通る軸線とし、他の遺構については長軸（径）を主軸とみなした。「主軸」及び「長軸」方向は、それぞれの軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-E）。

抄 録

ふりがな	おおどしもごういせきに								
書名	大戸下郷遺跡2								
副書名	主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書								
巻次	IV								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告								
シリーズ番号	第257集								
著者名	綿引 英樹 松本 直人								
編集機関	財団法人 茨城県教育財団								
所在地	310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 Tel 029-225-6587								
発行日	2006(平成18)年3月24日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因	
おおどしもごういせき 大戸下郷遺跡	いばらきけんひがしいばらきぐんいばらき 茨城県東茨城郡茨城 まちおおどしもおおど 町大字大戸1284番地 ほか	08302 — 077	36度 18分 34秒 (36度 18分 50秒)	140度 25分 35秒 (140度 25分 23秒)	10 ~ 24m	20040601 ~ 20041130	6,208㎡	主要地方道内 原塩崎線道路 改良工事に伴 う事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
大戸下郷遺跡	猟場	縄文	陥し穴 8基						
	集落跡	弥生	竪穴住居跡 21軒 土坑 1基		弥生土器(高坏・広口壺・片口壺), 土製品(紡錘車・球状土錘・管状土 錘), 石製品(磨製石斧・磨石)				
			古墳時代		竪穴住居跡 37軒		土師器(坏・椀・高坏・甕・甑), 須恵 器(坏・提瓶・短頸壺), 手捏土器, ミニチュア土器, 土製品(紡錘車・ 球状土錘・支脚), 鉄製品(鎌・鉄鏃・ 不明鉄製品), 石製品(紡錘車)		
		奈良時代	竪穴住居跡 4軒		土師器(甕), 須恵器(坏・高台付坏・盤・ 高盤・蓋・短頸壺・円面硯), 鉄製品(鉄斧)				
		平安時代	竪穴住居跡 7軒		土師器(坏・高台付坏), 石製品(砥 石), 鉄製品(鎌・不明鉄製品), 銅 製品(帯金具)				
	墓地	近世	墓坑 2基		土師質土器(内耳鍋・小皿), 瓦質土 器(火舎), 陶・磁器(碗類), 銅製 品(小柄・分銅)				
			井戸跡 4基						
その他	時期不明	方形竪穴遺構 2基 土坑 25基 溝跡 5条 ピット群 2か所		縄文土器(深鉢類), 弥生土器(壺類), 須恵器(坏類・甕類), 陶・磁器(小 皿・碗), 土製品(球状土錘), 石器(磨 石・敲石)					
要約	古墳時代後期を中心とする縄文時代から近世の複合遺跡である。弥生時代後期後半の住居跡21軒が確認され、十王台式土器の他に、二軒屋式土器や吉ヶ谷式土器も出土している。古墳時代後期の住居跡からは紅殻を入れていたミニチュア土器が出土している。また、奈良時代の住居跡からは円面硯が出土している。								

目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	9
1 縄文時代の遺構	9
陥し穴	9
2 弥生時代の遺構と遺物	13
(1) 竪穴住居跡	13
(2) 土坑	72
3 古墳時代の遺構と遺物	73
竪穴住居跡	73
4 奈良時代・平安時代の遺構と遺物	163
(1) 竪穴住居跡	164
(2) 掘立柱建物跡	200
5 近世の遺構と遺物	205
(1) 墓坑	205
(2) 井戸跡	207
6 その他の遺構と遺物	210
(1) 方形竪穴遺構	210
(2) 土坑	211
(3) 溝跡	215
(4) ピット群	218
(5) 遺構外出土遺物	220
第4節 まとめ	226
付章	249
写真図版	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県は、東茨城郡茨城町大戸地区において、一般国道6号から「桜の郷」へのアクセス道路として、主要地方道内原塩崎線の道路改良事業を進めている。

平成8年9月17日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、主要地方道内原塩崎線道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。

これを受けて茨城県教育委員会は、平成12年10月10日に現地踏査、同年11月27～29日に大戸地区の試掘調査を実施し、大戸下郷遺跡の所在を確認した。平成13年1月17日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長に対して、事業地内に大戸下郷遺跡が所在する旨を回答した。

平成13年2月9日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、同年2月26日、茨城県水戸土木事務所長に対して、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成16年2月6日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、主要地方道内原塩崎線道路改良事業地内に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。同年2月13日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長に対して、大戸下郷遺跡についての範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成16年6月1日から11月30日まで大戸下郷遺跡の第2次発掘調査を実施することになった。

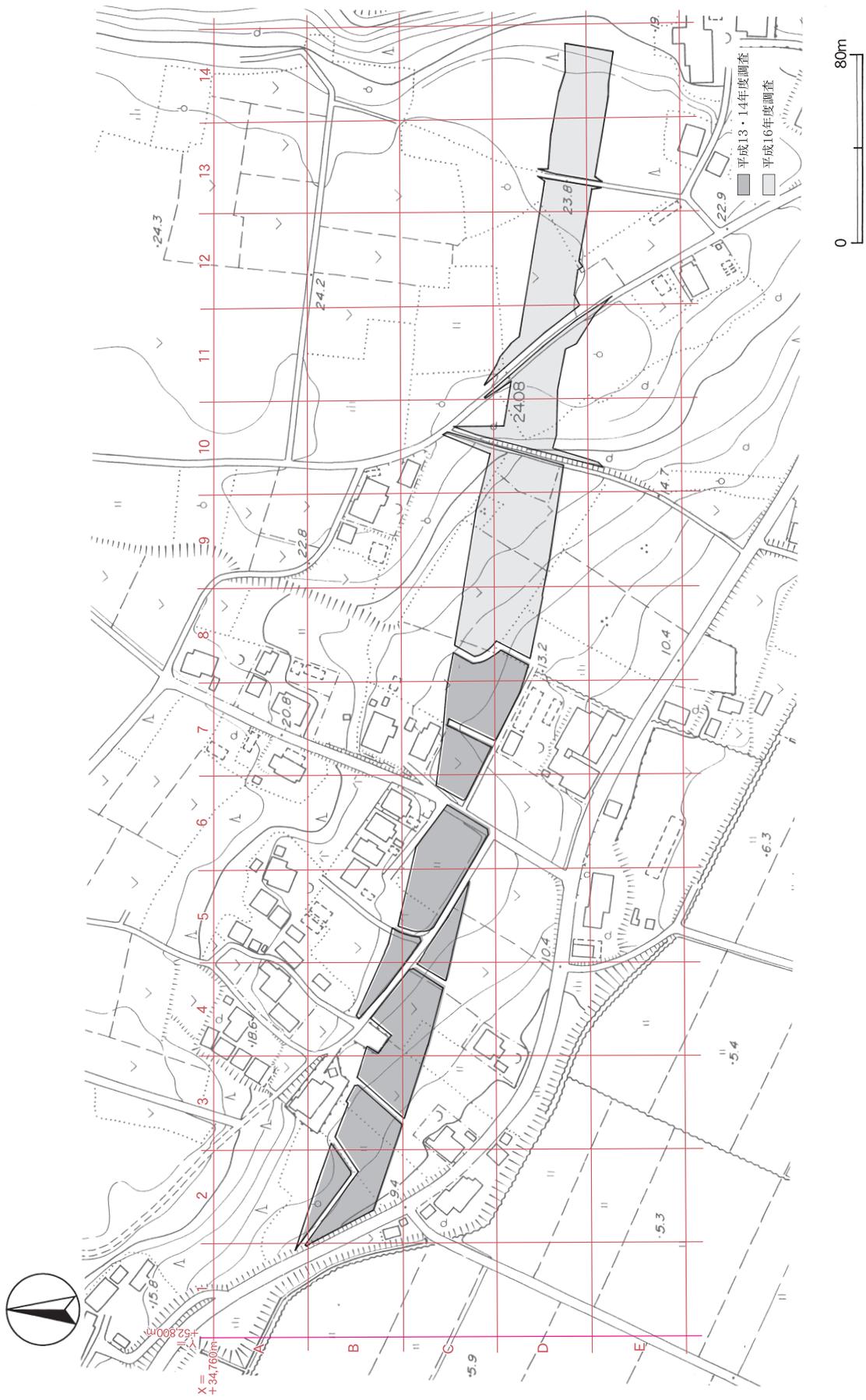
第1次調査は、平成14年1月1日から3月31日、同年5月1日から10月31日まで行われている。

第2節 調査経過

大戸下郷遺跡の調査は、平成16年6月1日から11月30日まで実施した。

以下、その概要を表で記載する。

工程	期間	6月	7月	8月	9月	10月	11月
調査準備 表土除去 遺構確認		■					
遺構調査		■	■	■	■	■	■
遺物洗浄 写真整理 浄業		■	■	■	■	■	■
補足調査 撤収							■



第1図 大戸下郷遺跡調査区設定図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

大戸下郷遺跡は、茨城県東茨城郡茨城町大字大戸1284番地ほかに所在している。

茨城町は、町のほぼ中央部を東流する涸沼川の氾濫原と、その東に展開する涸沼の低湿地によって台地が南北に二分されている。台地の北部は、標高25～30mの東茨城北部台地の先端部にあたり、南東に流れる涸沼前川を含む多くの支谷が涸沼を中心に南方向に開口している。南部に発達している台地は、大谷川、寛政川が涸沼に流入し、その間に大小の支谷が台地深くまで樹枝状に侵入しており、起伏に富み、一層複雑な地勢を形成している。

地質をみると、台地を形成している最も古い地層は新生代第三紀の地層で、岩質は泥岩で水戸層と呼ばれている。水戸層の上には第四紀の地層が不整合に堆積している。さらに、粘土・砂からなる見和層、礫からなる上市層、灰褐色の常総粘土層、関東ローム層の順にほぼ水平に堆積している。

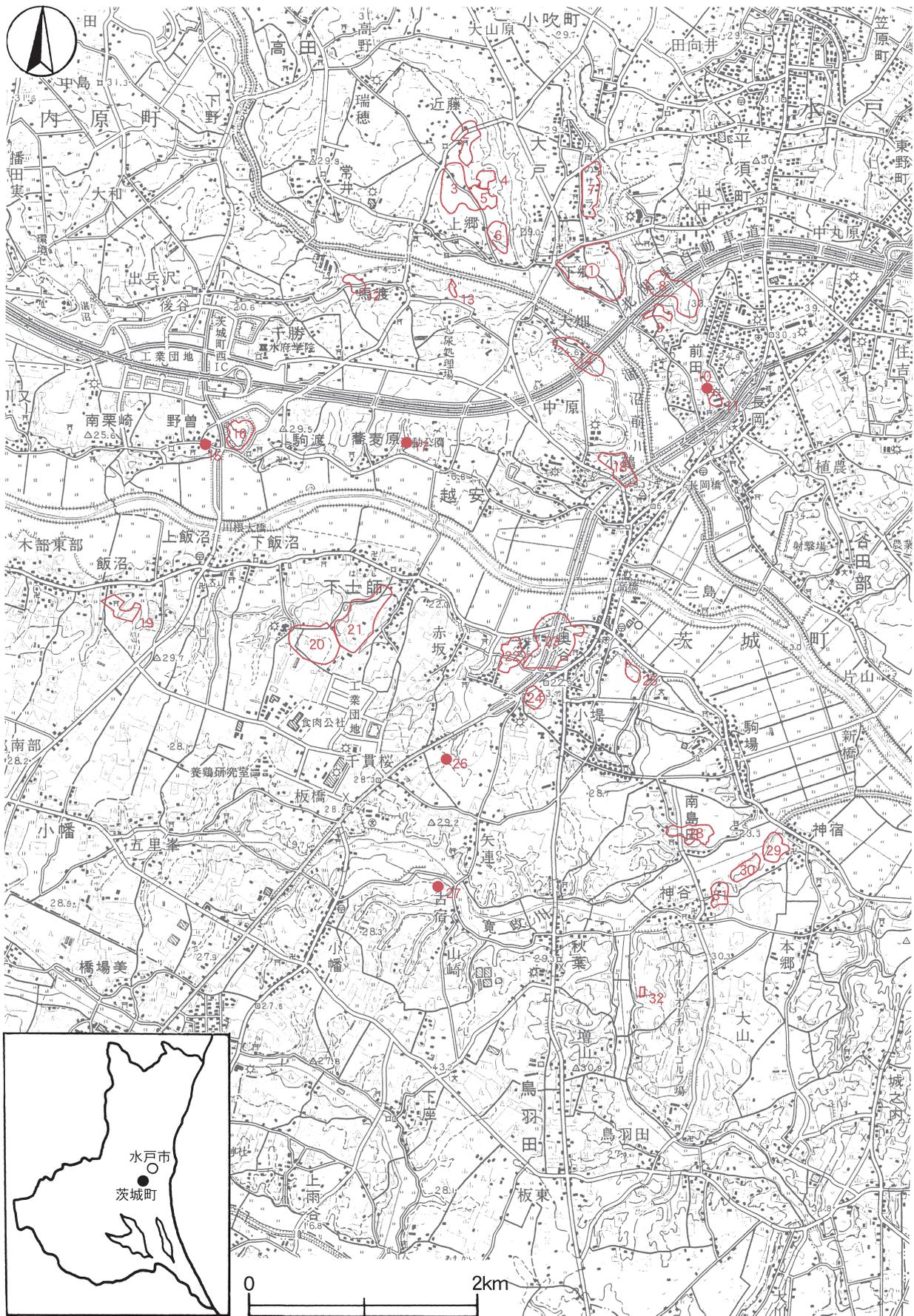
当遺跡は、茨城町北西部の大戸地区にあり、涸沼川の支流、涸沼前川左岸に位置し、標高約10mほどの低位段丘から標高24mほどの台地上に立地している。調査区の西端は涸沼前川とその支流である小橋川の合流地の沖積低地へとつながり、東端は赤穂川によって開削された支谷に面している。段丘及び台地上は、主に畑地・宅地として利用され、涸沼前川流域の沖積低地は水田として利用されている。遺跡の現況は、畑地であった。

第2節 歴史的環境

当町周辺は、涸沼を中心として、涸沼川、涸沼前川など水運に恵まれ、古代から人々が生活を営む場としては絶好の舞台であり、縄文時代から中・近世にかけての遺跡が数多く存在している（第2図）。ここでは、大戸下郷遺跡に関連する主な遺跡について時代を追って述べる。

縄文時代早期の遺跡は、涸沼南岸の台地上に^{なかおち}中落遺跡がある。前期では、涸沼川及び涸沼前川流域に^{みやうしろ}宮後遺跡²〈2〉、^{ひがしやま}シッペイ沢遺跡〈12〉、^{おくのや}東山遺跡〈13〉、^{おくのや}奥谷遺跡³〈23〉などがあり、^{こやす}越安貝塚〈17〉、^{ごんげんみね}権現峯遺跡、^{みなみこ}南小割遺跡⁴〈16〉などでは小規模な貝塚が形成されている。中期の遺跡は、^{つかし}塚越遺跡、^{あかさかみづつぼ}赤坂南坪遺跡〈22〉、^{あまこざき}天古崎遺跡〈28〉など、町内全域にみられる。後期になると、^{おつみ}小堤貝塚〈25〉が形成され、晩期では、^{しもはじ}下土師遺跡〈21〉、^{かんや}小堤貝塚、^{かんや}神谷遺跡〈31〉などがある。

弥生時代では、中期後半の土器片が^{かんやひがし}神谷東遺跡〈30〉、^{にしだい}西台遺跡〈29〉などで土器片が採集されている。また、後期前半の遺物としては、^{おおびたけ}東中根式並行の土器片が^{おおひたけ}大畑遺跡⁵〈14〉から採集され、^{ながおか}長岡遺跡〈11〉や^{おおく}奥谷遺跡、^{こつる}小鶴遺跡〈18〉などから出土した長岡式土器は標式土器となっている。後期後半（十王台式期）の遺跡としては、^{やぐら}当財団によって調査された^{いしはら}矢倉遺跡⁶〈8〉、^{いしはら}大畑遺跡、^{つなやま}石原遺跡⁷〈5〉、^{おおつか}綱山遺跡⁸〈4〉、^{おおつか}大塚遺跡⁹〈3〉、^{おおつか}宮後遺跡¹⁰の他、^{とうかみや}稲荷宮遺跡〈6〉、^{だいばけ}台畑遺跡〈19〉などがあり、当遺跡でも集落跡が確認され、この時期に涸沼川流域を中心とした小文化圏の存在が想定されている。また、当遺跡と矢倉遺跡からは、群馬県を中心に分布が認められる樽式土器が出土している。その他にも、十王台式土器と異なる文様を有する二軒屋式土器や上稲吉式土器が出土しており、他地域との交流が想定される。



第2図 大戸下郷遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院5万分の1「石岡」)

表1 大戸下郷遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平			中・近	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近
①	大戸下郷遺跡		○	○	○	○	○	17	越安貝塚		○				
2	宮後遺跡	○	○	○	○	○	○	18	小鶴遺跡		○	○			
3	大塚遺跡		○	○	○	○	○	19	台畑遺跡			○			
4	綱山遺跡		○	○	○	○	○	20	面山遺跡		○		○	○	
5	石原遺跡		○	○	○	○		21	下土師遺跡		○		○	○	
6	稻荷宮遺跡			○	○	○		22	赤坂南坪遺跡		○		○	○	
7	大戸神宮寺遺跡		○		○	○		23	奥谷遺跡		○	○	○	○	
8	矢倉遺跡		○	○	○	○		24	富士山遺跡		○		○	○	
9	坏戸遺跡		○	○	○		○	25	小堤貝塚		○	○	○		○
10	上ノ山古墳				○			26	小幡北山埴輪製作遺跡				○		
11	長岡遺跡			○	○			27	小幡城跡						○
12	シッペイ沢遺跡		○		○			28	天古崎遺跡		○		○	○	
13	東山遺跡		○	○	○	○		29	西台遺跡		○	○	○	○	
14	大畑遺跡	○	○	○	○	○	○	30	神谷東遺跡		○	○	○	○	
15	宝塚古墳				○			31	神谷遺跡		○	○	○		
16	南小割遺跡	○	○		○	○	○	32	大峯遺跡					○	

古墳時代では、弥生土器と土師器が共存する住居跡が確認されている石原遺跡、綱山遺跡、大塚遺跡などがあり、当遺跡で確認された同様の共存関係とあわせ、弥生時代から古墳時代への移行期におけるこの地域の様相を知る手がかりになると思われる。また、奥谷遺跡からは、前期の豪族居館跡や住居跡群が、南小割遺跡からも前期の小波状口縁をもつ土器や住居跡群が確認されている。古墳では、茨城町域で最も古い時期（4世紀末～5世紀初頭）に位置づけられる前方後方墳の宝塚古墳(15)をはじめ、中期から後期にかけての古墳が61基ほど確認されている。また、前方後円墳の上ノ山古墳¹¹⁾(10)からは、南へ4kmほどの小幡北山埴輪製作遺跡¹²⁾(26)で生産された埴輪（6世紀後半頃）が出土している。

奈良・平安時代の当地方は、那賀郡八部郷、茨城郡嶋田郷・白川郷・安侯郷、鹿島郡宮前郷に属していた。この時期の遺跡は、町内全域で確認されており、石原遺跡、綱山遺跡、大塚遺跡、宮後遺跡、大戸神宮寺遺跡(7)、大戸下郷遺跡、矢倉遺跡、大畑遺跡、奥谷遺跡など、100遺跡を数える。奥谷遺跡では、百数十点の墨書土器の他に、円面硯や刀子が出土している。特に、墨書の「曹カ司」は、官衙の庁舎などの意味があり、奥谷遺跡が官衙的な公共施設を含む集落であったことを示している。また、面山遺跡(20)からは「土師神主」と書かれた墨書土器が、大塚遺跡(32)でも墨書土器や円面硯が出土している。大塚遺跡からも墨書土器や円面硯・灰釉陶器なども出土しており、「コ」の字状に並ぶ掘立柱建物跡群も確認され、官衙的な様相を示すものとして注目される。さらに、綱山遺跡でも掘立柱建物跡が確認され、円面硯・灰釉陶器、墨書土器などが出土しており、隣接する宮後遺跡でも円面硯や墨書土器が出土していることから三遺跡の関連も注目されている。

中世の遺跡は、主に城館跡であり、小幡城跡(27)、宮ヶ崎城跡、海老沢館跡、奥谷館跡、飯沼城跡などが所

在している。小幡城跡は現存する町内の城館跡の中では最大規模で、初期の城主については小田一族や大掾一族などの説があるが、詳細については不明である。奥谷遺跡からは堀、地下式墳、方形竪穴状遺構、井戸跡などが確認され、土師質土器や陶器が出土している。また、常陸大掾氏系の大戸氏一族の所領であった大字前田の万東山地区からは、13世紀前半と考えられる「青白磁蓮牡丹文梅瓶」が出土しており、中世においても涸沼川・涸沼前川沿岸に有力な氏族が存在していたことがうかがえる。

近世になると、町の中心部を南北に通ずる水戸街道沿いの長岡・小幡は宿駅として発展し、徳川期には水戸藩主の休憩・宿泊のために御殿が造られていた。近世中期以降になると、水戸街道は五街道に次ぐ脇往還として栄え、最盛期には23藩の大名が参勤交代のつどこの道を通じた。また、海老沢・網掛は水上交通の要衝として河岸を中心に栄え、水戸藩をはじめ、仙台藩や奥州諸藩と江戸を結ぶ輸送経路の中継基地として重要な役割を果たすようになった。

※ 文中の〈 〉内の番号は、第2図及び表1の該当遺跡番号と同じである。

註

- 1) 近藤恒重「大戸下郷遺跡 主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第216集 茨城県教育財団 2004年3月
- 2) 川又清明・野田良直・吹野富美夫・浅野和久「宮後遺跡1 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第188集 茨城県教育財団 2002年3月
- 3) 鯉淵和彦「一般国道6号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書 奥谷遺跡・小鶴遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第50集 茨城県教育財団 1989年3月
- 4) 中村敬治・江幡良夫「茨城中央工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 南小割遺跡・権現堂遺跡・親塚古墳・後原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第129集 茨城県教育財団 1998年3月
- 5) 長谷川聡「北関東自動車道(友部～水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 大作遺跡・大畑遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第136集 茨城県教育財団 1998年3月
- 6) 飯島一生「北関東自動車道(友部～水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 矢倉遺跡・後口原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第135集 茨城県教育財団 1998年3月
- 7) 村上和彦「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 石原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第163集 茨城県教育財団 2000年3月
- 8) 荒蒔克一郎・田中幸夫「綱山遺跡 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅵ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第243集 茨城県教育財団 2005年3月
- 9) 長谷川聡・田中幸夫・小野克敏「大塚遺跡1 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第242集 茨城県教育財団 2005年3月
- 10) 川又清明・浅野和久「宮後遺跡3 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第241集 茨城県教育財団 2005年3月
- 11) 茨城町史編さん委員会『茨城町上ノ山古墳』茨城町 1994年3月
- 12) 茨城町教育委員会『小幡北山埴輪製作遺跡』茨城町 1989年2月

参考文献

- ・ 茨城町史編さん委員会「茨城町史 地誌編」茨城町 1995年2月

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

大戸下郷遺跡は、茨城県東茨城郡茨城町大字大戸1284番地ほかに所在し、涸沼前川左岸の標高約10mほどの低位段丘から標高約24mほどの台地上に位置している。平成13・14年度には6,418㎡が調査され、竪穴住居跡62軒（縄文5，弥生8，古墳39，奈良6，平安4），墓坑20基（古墳1，近世19），土坑106基（弥生2，平安1，中世1，近世7，時期不明95），近世の井戸跡6基，時期不明の溝跡3条，ピット群4か所が検出され，古墳時代後期の集落跡を主体とした縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。遺物は，縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，陶・磁器，土師質土器の他，土製品（球状土錘・支脚），石器・石製品（砥石・磨石・敲石），古銭などが出土している。また，弥生時代後期後半の十王台式土器と古墳時代前期の土師器が共伴した住居内の墓坑からは，ガラス製の小玉31点が出土して注目された。

今回の調査は6,208㎡で，平成13・14年度調査部分の東側に位置し，調査前の現況は山林及び畑地である。調査の結果，縄文時代の陥し穴8基，弥生時代の竪穴住居跡21軒，土坑1基，古墳時代の竪穴住居跡37軒，奈良時代・平安時代の竪穴住居跡11軒，掘立柱建物跡3棟，近世の墓坑2基，井戸跡4基の他に，方形竪穴遺構2基，土坑25基，溝跡5条，ピット群2か所が確認された。遺物は，縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，手握土器，ミニチュア土器，土師質土器の他，土製品（紡錘車・球状土錘・管状土錘・支脚），鉄製品（鎌・鉄鍬・不明鉄製品），石器・石製品（磨製石斧・石鍬・炉石・敲石・磨石・砥石・紡錘車），金属製品（鎌・不明鉄製品・帯金具・小柄・分銅）などが，遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に120箱分が出土している。

第2節 基本層序

平成13・14年度の調査では，調査区中央部，中位段丘上のC6c2区にテストピット1を設定し，基本土層の堆積状況の観察を行っている。テストピット1の地表面の標高は15.3mで，地表から約3.5mほど掘り下げて第3図（左）のような堆積状況を確認している。

今回の調査区は，中位段丘から台地上にかけて位置しており，比高差があるため台地上のD12j5区に新たにテストピット2を設定し，基本土層の堆積状況を観察した。テストピット2の地表面の標高は24.0mで，地表から約3.3mほど掘り下げ，第3図（右）のような堆積状況を確認した。

以下，テストピット2の観察から層序を説明する。

第Ⅰ層は，黒褐色の耕作土で，層厚は58cm前後である。

第Ⅱ層は，明褐色のソフトローム層で，赤色粒子を少量含んでいる。粘性・締まりは共に強く，層厚は8～24cmである。

第Ⅲ層は，褐色のソフトローム層で，赤色粒子を微量含んでいる。粘性・締まりは共に強く，層厚は最大で17cmほどである。

第Ⅳ層は，明褐色のハードローム層で，赤色粒子を微量含んでいる。粘性・締まりは共に強く，層厚は4～20cmである。

第Ⅴ層は，褐色のハードローム層で，黒色粒子を微量含んでいる。粘性は強く，締まりはやや強い。層厚は

35～46cmで、第1黒色帯と考えられる。

第VI層は、褐色のハードローム層で、赤色粒子・黒色粒子を微量含んでいる。粘性は強く、締まりはやや強い。層厚は18～34cmである。

第VII層は、黄褐色のローム層で、鹿沼パミスの中量含むことから鹿沼層への漸移層と考えられる。粘性・締まりは共に強く、層厚は最大で11cmほどである。

第VIII層は、橙色の鹿沼層で、粘性は弱く、締まりは強い。層厚は18～33cmである。

第IX層は、褐色のハードローム層で、赤色スコリア・鹿沼パミスを微量含んでいる。粘性・締まりは共に強く、層厚は11～22cmである。

第X層は、褐色のハードローム層で、黒色粒子を微量含んでいる。粘性は強く、締まりはやや強い。層厚は25～33cmである。

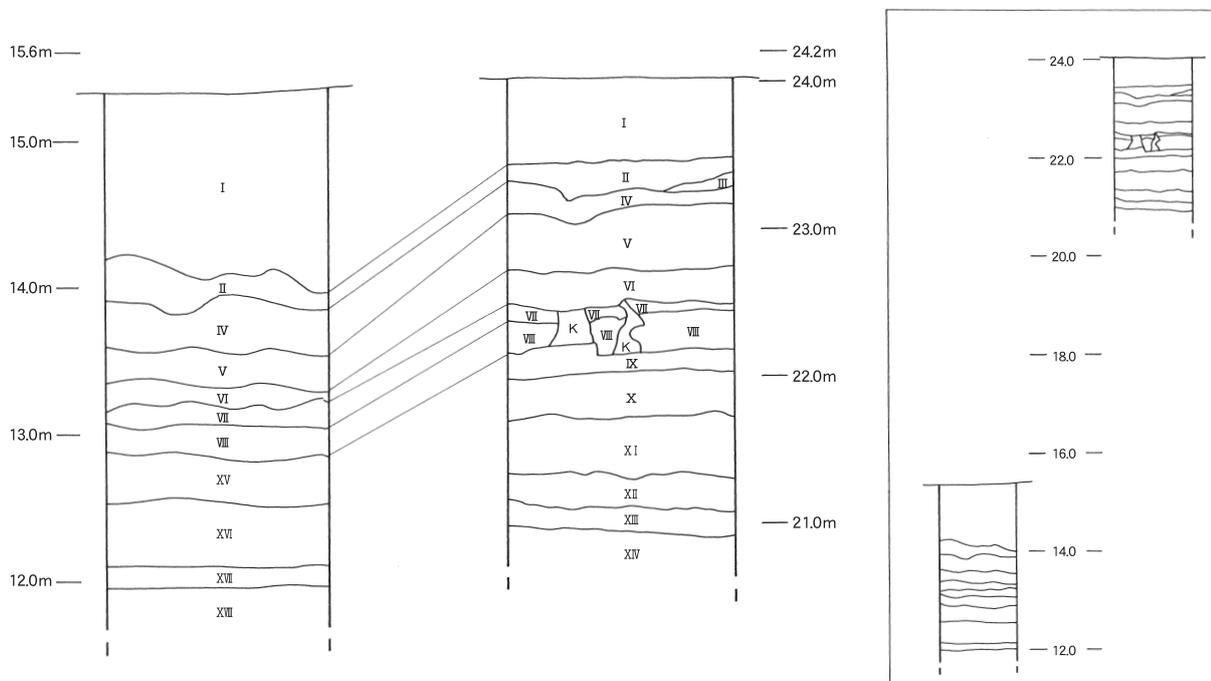
第XI層は、褐色のハードローム層で、黒色粒子を微量含んでいる。粘性・締まりは共に強く、層厚は35～44cmで、第10層と共に第2黒色帯と考えられる。

第XII層は、褐色のハードローム層で、赤色粒子・黒色粒子を微量含んでいる。粘性・締まりは共に強く、層厚は18～26cmである。

第XIII層は、淡い褐色のハードローム層で、粘土粒子を少量、赤色粒子・黒色粒子を微量含んでいる。粘性は強く、締まりはやや強い。層厚は15～21cmで、常総粘土層の漸移層と考えられる。

第XIV層は、にぶい黄褐色の粘土層で、鉄分を微量含んでおり、粘性・締まりは共に強い。層厚は未掘のため確認できなかったが、第13層よりも粘土の含有量が多いことから常総粘土層と考えられる。

中位段丘上では第2層から、台地上では第2層及び第3層で遺構が確認された。



第3図 基本土層図・高低差模式図

テストピット土層解説

- XV 灰褐色の粘土層
- XVI 灰黄褐色の粘土とシルトの層

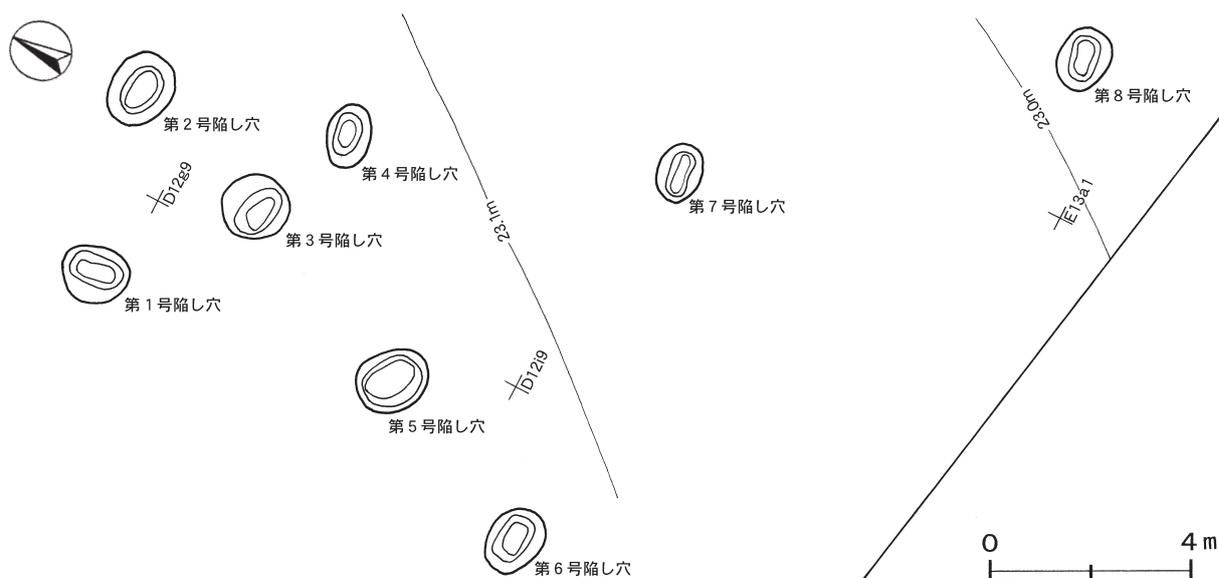
- XVII にぶい黄褐色のシルトと礫の層
- XVIII 明黄褐色の礫層

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構

調査区東部の台地平坦部に、8基の陥し穴が集中して確認された。第8号陥し穴が南東側にやや離れて位置しているが、その他の7基は10mほどの範囲内に分布している（第4図）。第2・3・5・6号陥し穴は、標高23.1mラインにほぼ等間隔で直行して並んでいる。以下、遺構について記載する。

陥し穴



第4図 陥し穴配置図

第1号陥し穴（第5図）

位置 調査区東部北寄りのD12f 8区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置している。

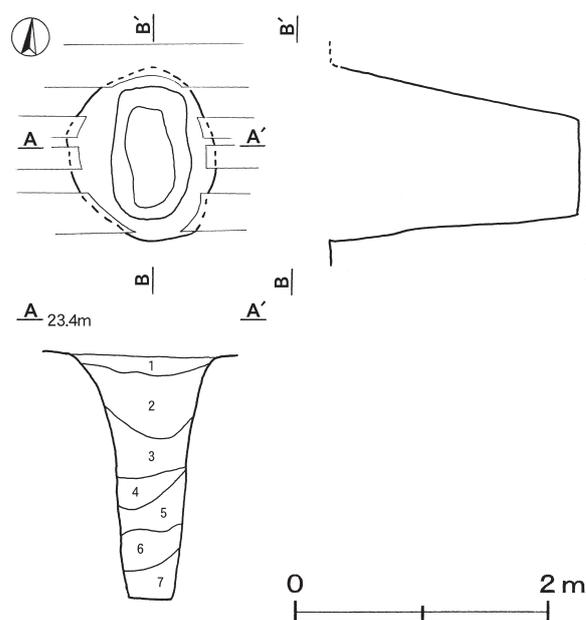
規模と形状 長径1.38m、短径1.16mの楕円形状を呈している。深さは1.97mで、長径方向はN-4°-Wである。壁はいずれも直列ぎみに立ち上がり、東西の壁は上部で外傾して立ち上がっている。横断面はほぼU字状で、底面は平坦である。

覆土 7層に分層される。ロームブロックを含んでいるが、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 極暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 6 極暗褐色 ロームブロック中量、鹿沼パミス微量
- 7 黒褐色 ロームブロック少量、鹿沼パミス微量

所見 遺物が出土していないため、時期は明確でないが、遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。

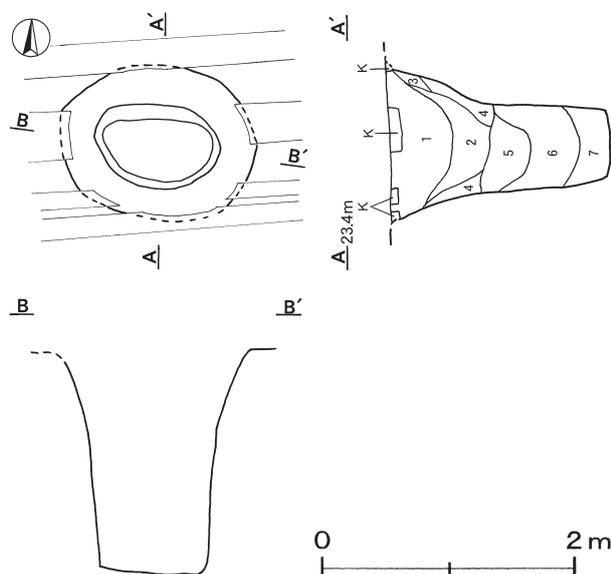


第5図 第1号陥し穴実測図

第2号陥し穴 (第6図)

位置 調査区東部北寄りのD12f9区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.57m、短径1.23mの楕円形である。深さは1.78mで、長径方向はN-81°-Wである。壁は



いずれも直立ぎみに立ち上がっており、上部はやや外傾している。横断面はほぼU字状で、底面は平坦である。

覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|------|----------------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 4 | 極暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 6 | 黒褐色 | ロームブロック少量、鹿沼パミス微量 |
| 7 | 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子・鹿沼パミス微量 |

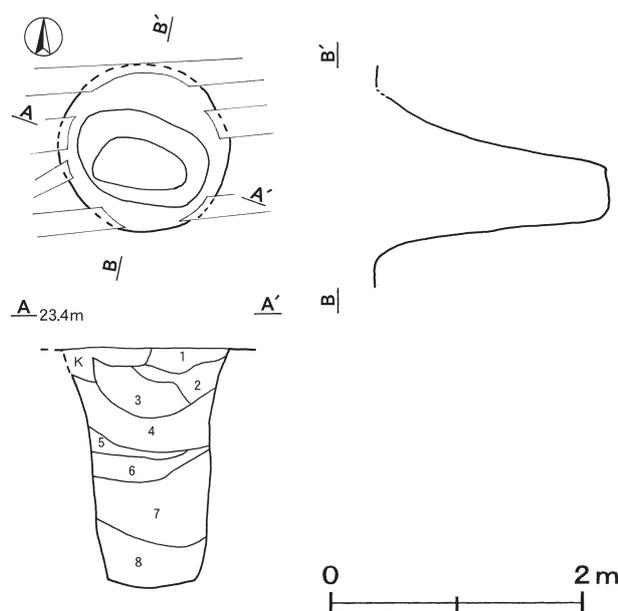
所見 遺物が出土していないため、時期は明確でないが、遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第6図 第2号陥し穴実測図

第3号陥し穴 (第7図)

位置 調査区東部北寄りのD12g9区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置し、ほぼ同じ標高ラインに第2・5・6号陥し穴が並び、第2号陥し穴の南2mほどに構築されている。

規模と形状 長径1.36m、短径1.33mの円形状を呈しているが、下部は楕円形を呈している。深さは1.89mで、



長径方向はN-75°-Wである。壁はいずれも直立ぎみに立ち上がり、上部は外傾している。横断面はほぼU字状で、底面はほぼ平坦である。

覆土 8層に分層される。中層まではレンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられ、上層はブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|-------------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 | 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 | 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 5 | 褐色 | ロームブロック中量 |
| 6 | 暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 7 | 褐色 | ロームブロック中量、鹿沼パミス微量 |
| 8 | 褐色 | ロームブロック少量、鹿沼パミス微量 |

所見 遺物が出土していないため、時期は明確でないが、遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第7図 第3号陥し穴実測図

第4号陥し穴 (第8図)

位置 調査区東部北寄りのD12g9区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置し、第3号陥し穴の東1mほどに

構築されている。

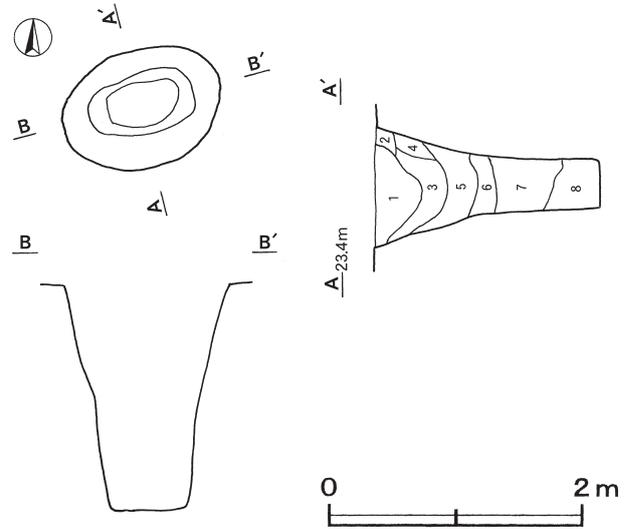
規模と形状 長径1.28m，短径0.94mの楕円形である。深さは1.79mで，長径方向はN-76°-Eである。壁は直立ぎみに立ち上がり，上部は外傾する。横断面はほぼU字状で，底面は平坦である。

覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 極暗褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量
- 6 黒褐色 ロームブロック微量
- 7 黒褐色 ロームブロック少量，炭化粒子微量
- 8 黒褐色 炭化粒子少量，ロームブロック・鹿沼パミス微量

所見 遺物が出土していないため，時期は明確でないが，遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第8図 第4号陥し穴実測図

第5号陥し穴 (第9図)

位置 調査区東部北寄りのD12h8区で，標高23.1mほどの台地平坦部に位置し，第3号陥し穴の南3mほどに構築されている。

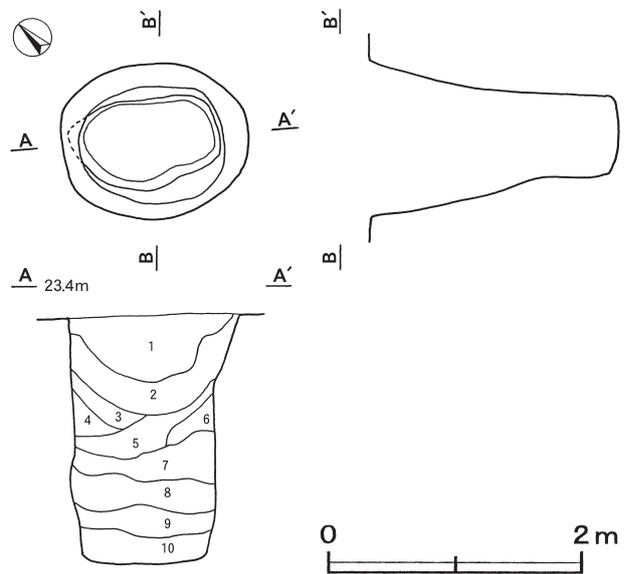
規模と形状 長径1.46m，短径1.24mの楕円形である。深さは1.98mで，長径方向はN-62°-Wである。壁は一部内傾しているが，他は直立ぎみに立ち上がっている。横断面はほぼU字状で，底面は平坦である。

覆土 10層に分層される。下層と上層はレンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられ，中層は不規則な堆積状況を呈することから人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量，炭化粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック中量，炭化粒子微量
- 6 極暗褐色 ローム粒子少量
- 7 褐色 ロームブロック中量，鹿沼パミス微量
- 8 黒褐色 ロームブロック・鹿沼パミス少量
- 9 褐色 ロームブロック中量，鹿沼パミス少量
- 10 黒褐色 ローム粒子少量，鹿沼パミス微量

所見 遺物が出土していないため，時期は明確でないが，遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。



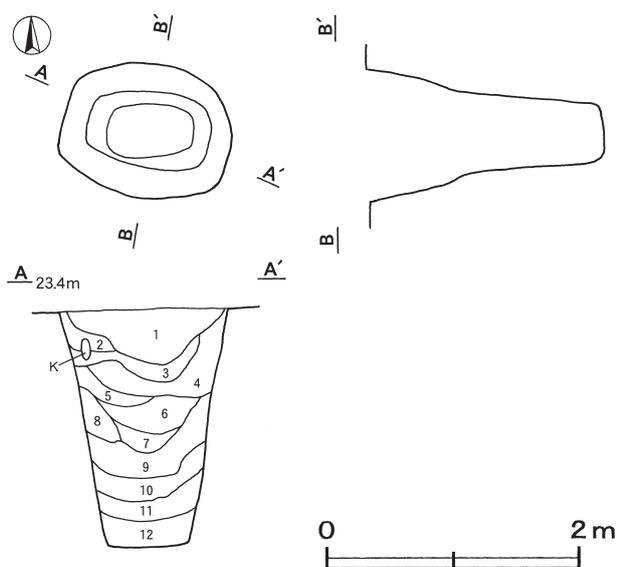
第9図 第5号陥し穴実測図

第6号陥し穴 (第10図)

位置 調査区東部北寄りのD12i8区で，標高23.1mほどの台地平坦部に位置し，第5号陥し穴の南3mほどに構築されている。

規模と形状 長径1.33m，短径1.08mの楕円形である。深さは1.90mで，長径方向はN-89°-Wである。壁は

直立ぎみに外傾して立ち上がり、上部でやや外傾する。横断面はほぼU字状で、底面は平坦である。



覆土 12層に分層される。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量
- 3 黒色 ロームブロック微量
- 4 極暗褐色 ロームブロック中量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量
- 6 極暗褐色 ロームブロック少量
- 7 褐色 ロームブロック多量
- 8 褐色 ロームブロック中量
- 9 暗褐色 ロームブロック少量
- 10 褐色 ロームブロック多量、鹿沼パミス微量
- 11 黒褐色 ロームブロック・鹿沼パミス微量
- 12 暗褐色 ローム粒子中量

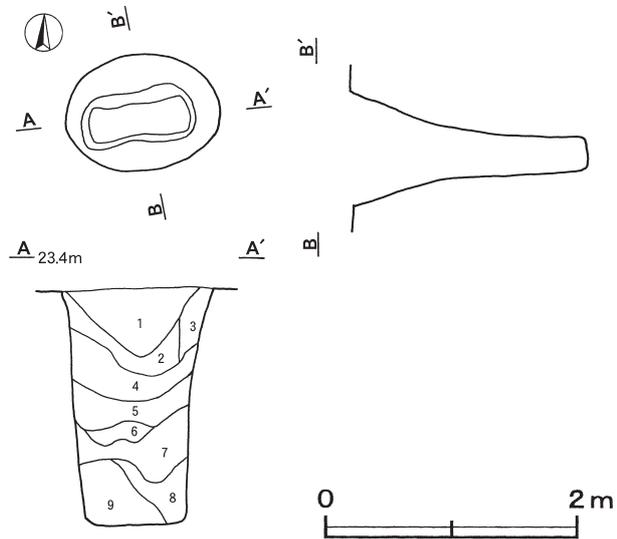
所見 遺物が出土していないため、時期は明確でないが、遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第10図 第6号陥し穴実測図

第7号陥し穴 (第11図)

位置 調査区東部北寄りのD12i0区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置し、第5号陥し穴の南東6mほどに構築されている。

規模と形状 長径1.23m、短径0.94mの楕円形である。深さは1.88mで、長径方向はN-83°-Eである。壁は



直立ぎみに立ち上がっており、横断面はほぼU字状で、底面は平坦である。

覆土 9層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量
- 7 褐色 鹿沼パミス少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 8 暗褐色 ローム粒子・鹿沼パミス微量
- 9 褐色 ローム粒子中量

所見 遺物が出土していないため、時期は明確でないが、遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第11図 第7号陥し穴実測図

第8号陥し穴 (第12図)

位置 調査区東部南寄りのD13j1区で、標高23.0mほどの台地平坦部に位置し、陥し穴群の南東に構築されている。

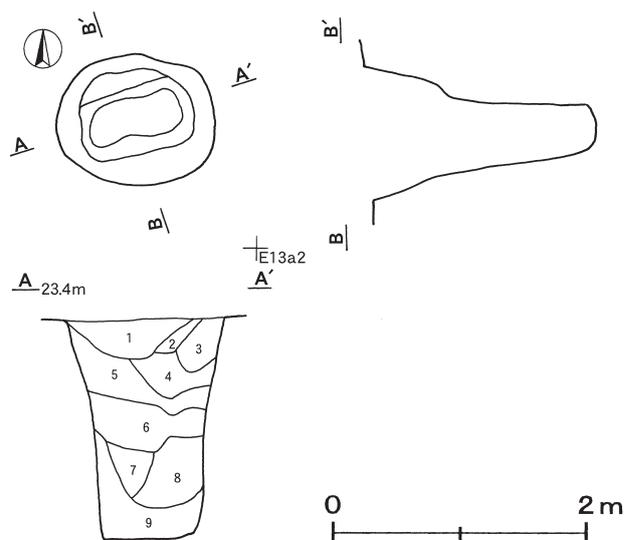
規模と形状 長径1.25m、短径1.06mの楕円形である。深さは1.76mで、長径方向はN-74°-Eである。壁は直立ぎみに立ち上がり、横断面はほぼU字状で、底面は平坦である。

覆土 9層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック微量
- 6 極暗褐色 ロームブロック・炭化物微量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量
- 8 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 9 極暗褐色 ローム粒子少量

所見 遺物が出土していないため、時期は明確でないが、遺構の形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第12図 第8号陥し穴実測図

表2 縄文時代陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
1	D12f8	N-4°-W	楕円形	[1.38]×1.16	197	直立・外傾	平坦	自然	—	
2	D12f9	N-81°-W	楕円形	[1.57 × 1.23]	178	直立・外傾	平坦	自然	—	
3	D12g9	N-75°-W	円形	[1.36 × 1.33]	189	直立・外傾	平坦	自然・人為	—	
4	D12g9	N-76°-E	楕円形	1.28 × 0.94	179	直立・外傾	平坦	自然	—	
5	D12h8	N-62°-W	楕円形	1.46 × 1.24	198	直立	平坦	自然・人為	—	
6	D12i8	N-89°-W	楕円形	1.33 × 1.08	190	外傾	平坦	自然	—	
7	D12i0	N-83°-E	楕円形	1.23 × 0.94	188	直立	平坦	自然	—	
8	D13j1	N-74°-E	楕円形	1.25 × 1.06	176	直立	平坦	人為	—	

2 弥生時代の遺構と遺物

今回の調査では、中位段丘から台地上にかけて弥生時代後期後半の住居跡21軒と土坑1基が確認された。以下、遺構と遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

第88号住居跡 (第13～15図)

位置 調査区西部のD9a5区で、標高15.1mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第167号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.53m、短軸4.12mの隅丸長方形で、主軸方向はN-29°-Wである。壁高は14～48cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部のやや北西寄りに位置している。長径82cm、短径57cmの楕円形で、床面を9cmほど掘りくぼめた地床炉であるが、熱による赤変や硬化は確認できなかった。炉石の代わりとして使われていた粘土塊が、炉の長軸に直交して炉床中央部に据えられていた。

炉土層解説

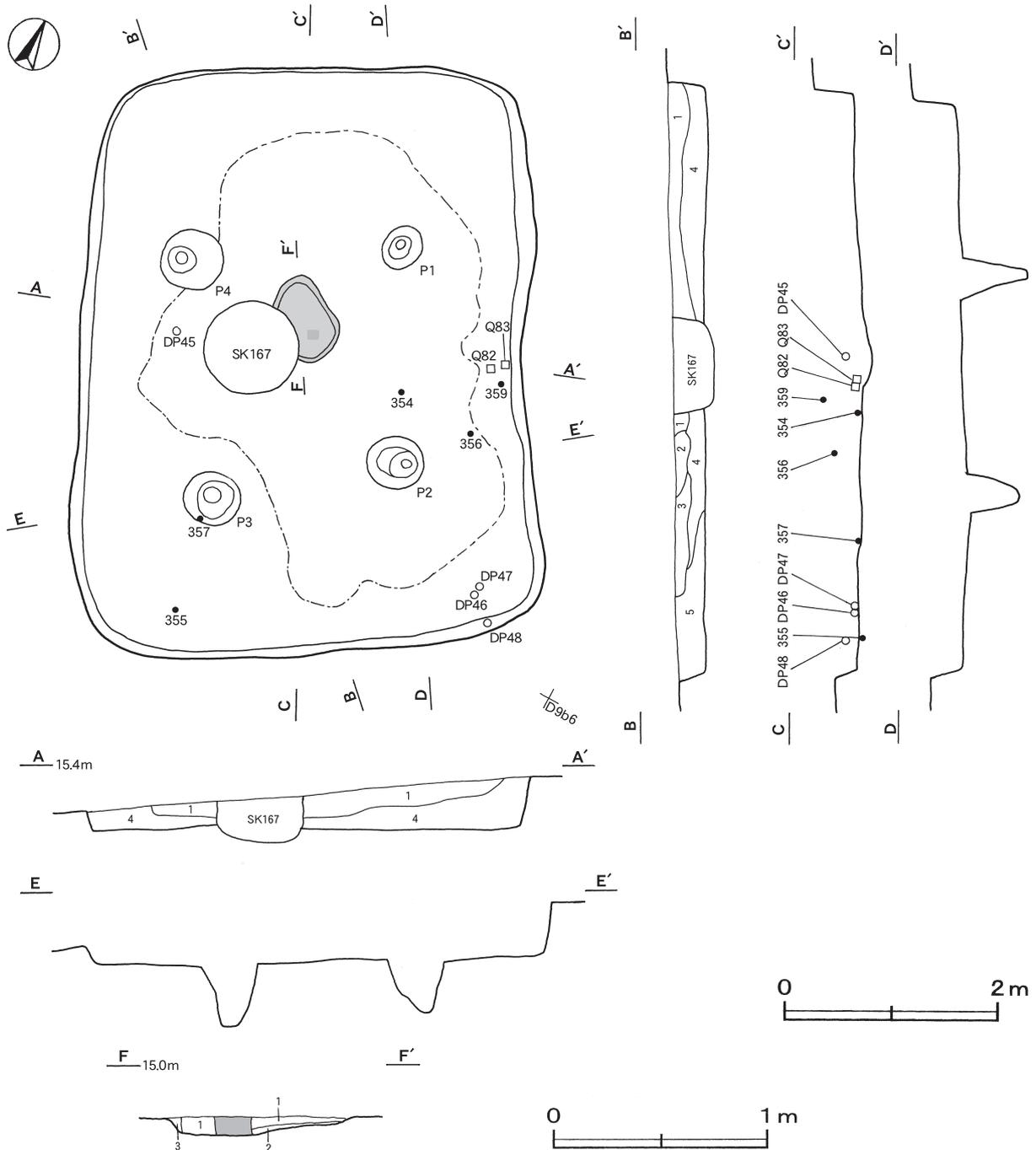
- | | |
|------------------------|--------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 3 黒褐色 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量 | |

ピット 4か所。深さは48~63cmで、配置から主柱穴と考えられる。

覆土 5層に分層される。第2・3層はブロック状の堆積状況を示す人為堆積であるが、その他は自然堆積と考えられる。

土層解説

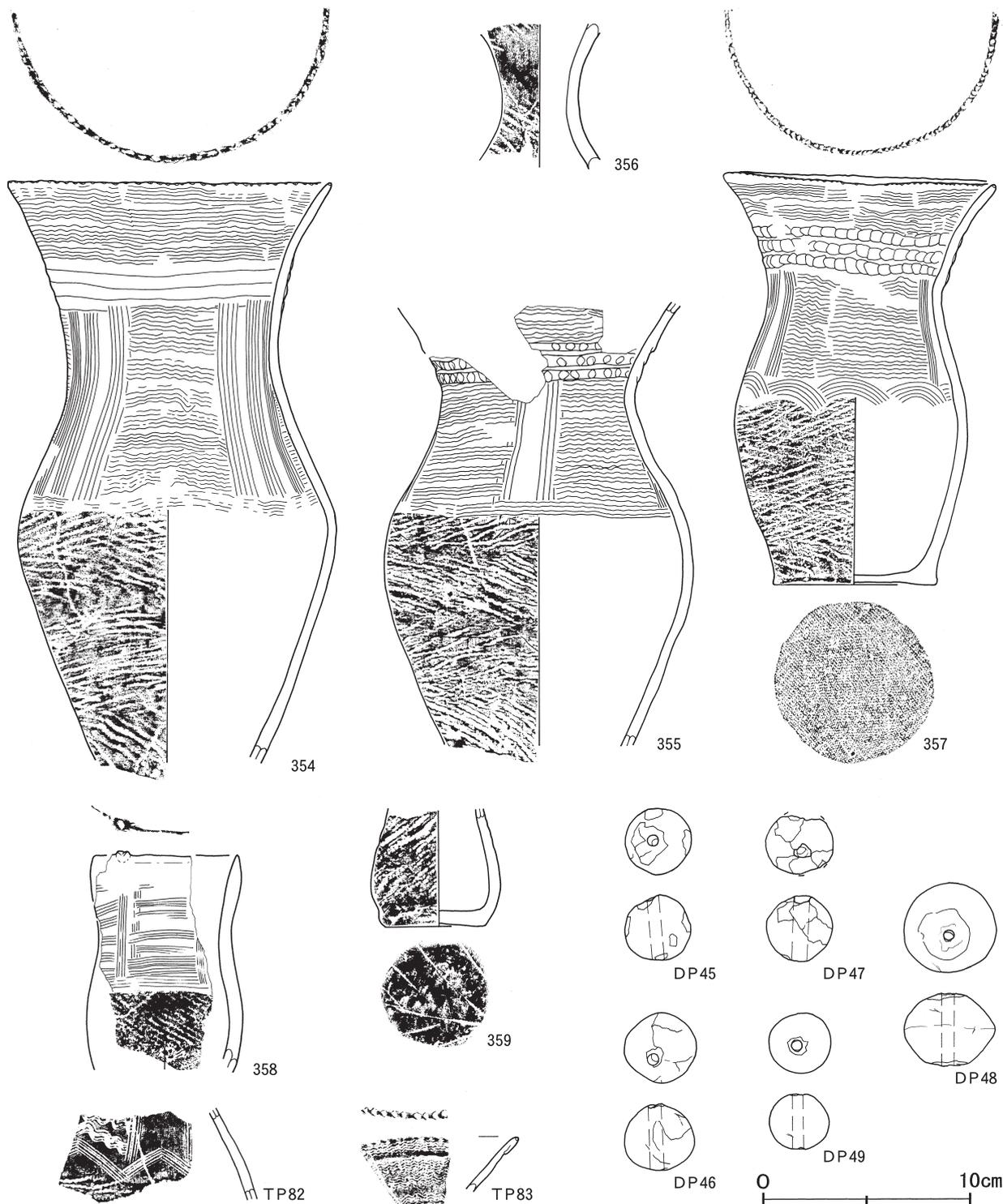
- | | |
|---------------------------|--------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 ローム粒子微量 |
| 2 極暗褐色 ローム粒子少量, 焼土ブロック微量 | 5 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | |



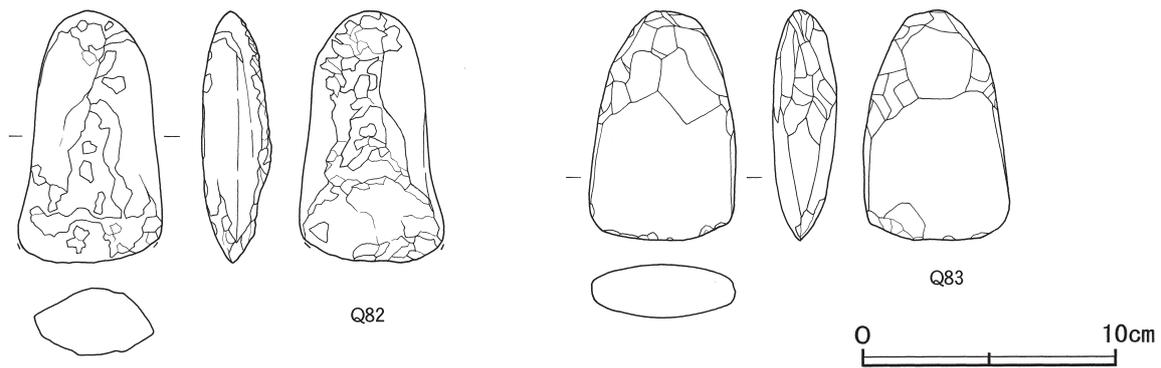
第13図 第88号住居跡実測図

遺物出土状況 弥生土器片298点（広口壺），土師器片301点（坏2，高坏7，器台2，甕類290），土製品5点（紡錘車1・球状土錘4），石器2点（磨製石斧），粘土塊の他に，混入した縄文土器片11点も出土している。354は中央部やや東寄り，355は南寄りの床面からそれぞれ出土している。土師器片は，第1層から散在した状態で出土しており，住居の廃絶後に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は，出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第14図 第88号住居跡出土遺物実測図(1)



第15図 第88号住居跡出土遺物実測図(2)

第88号住居跡出土遺物観察表(第14・15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
354	弥生土器	広口壺	15.5	(28.1)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部に原体押圧 口辺部に櫛歯状工具(5本)による波状文 頸部上位に軽い押圧のある隆帯4条 櫛歯状工具による3条を一単位とする縦区画(4分割)内に波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成	床面	70% 頸部外面煤付着 PL17
355	弥生土器	広口壺	—	(21.6)	—	長石・石英・雲母	暗赤褐	良好	口辺部に櫛歯状工具(4本)による波状文 頸部上位に押圧のある隆帯3条 櫛歯状工具による縦区画(4分割)内に波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成	床面	40%
356	弥生土器	片口壺	—	(7.0)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	頸部に附加条一種(附加2条)の縄文	覆土中層	10%
357	弥生土器	広口壺	12.7	20.1	7.9	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部に刻み 口辺部に櫛歯状工具(5本)による波状文 頸部上位に軽い押圧のある隆帯3条 櫛歯状工具による縦区画(3分割)内に波状文充填 頸部下位に下向きの連弧文 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部布目痕	床面	100% PL22
358	弥生土器	小形壺	[6.8]	(10.6)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口辺部内外面ナデ 小突起 櫛歯状工具(4本)による縦区画内に横走文充填 胴部附加条二種(附加1条)の羽状構成	覆土中	20%
359	弥生土器	小形壺	—	(5.7)	4.9	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部木葉痕	覆土上層	20% 胴部内面炭化物付着
TP82	弥生土器	広口壺	—	(4.3)	—	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	良好	櫛歯状工具(5本)による縦区画内に波状文充填 頸部下位に山形文 胴部に附加条二種(附加1条)の縄文	覆土中	5% PL39
TP83	弥生土器	高坏カ	—	(2.2)	—	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部に刻み 口縁部に櫛歯状工具(5本)による波状文	覆土中	5%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP45	球状土錘	3.2	0.6	(3.1)	(27.9)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	
DP46	球状土錘	3.5	0.6	3.2	32.7	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP47	球状土錘	3.3	0.8	3.2	(23.2)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP48	紡錘車	4.5	0.6	3.5	61.1	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	PL40
DP49	球状土錘	3.0	0.6	2.7	18.7	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q82	磨製石斧	(10.1)	5.7	2.6	(178.5)	ホルンフェルス	定角式 両刃 器面剥離多い	覆土下層	PL42
Q83	磨製石斧	9.2	5.8	2.6	(193.4)	ホルンフェルス	定角式 両刃 丁寧な研磨	覆土下層	PL42

第90号住居跡(第16~19図)

位置 調査区西部のD9d9区で、標高15.5mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第79・80号住居に掘り込まれている。

規模と形状 遺構全体の確認はできなかったが、主軸方向をN-2°-Wとする一辺が5.00mほどの隅丸方形と推定される。壁高は6~66cmで、外傾して立ち上がっている。

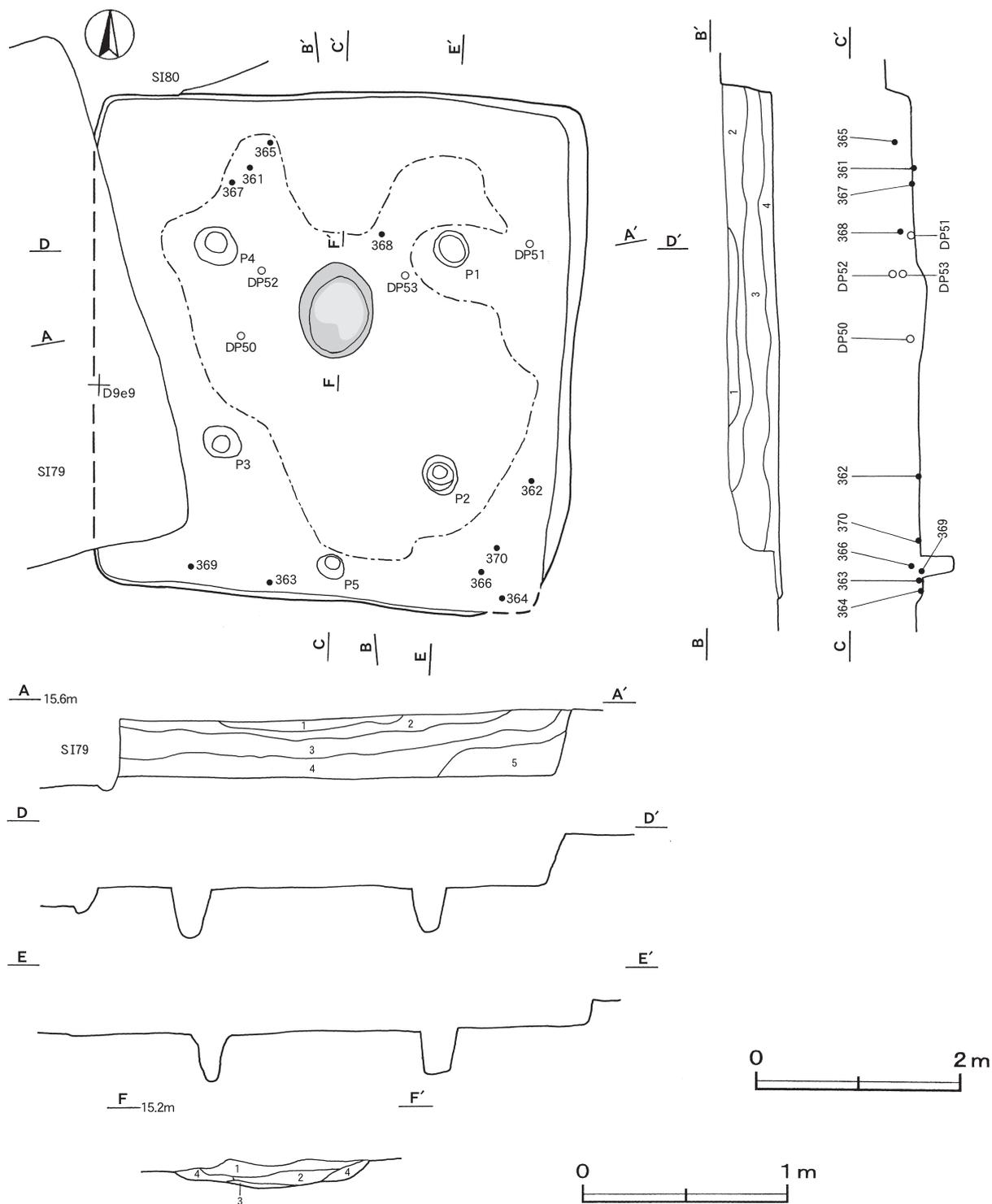
床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部に位置している。長径93cm、短径71cmの楕円形で、床面を13cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|------------------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色 炭化物・焼土粒子少量, ローム粒子微量 | 3 暗赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量 |
| 2 極暗赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量 |

ピット 5か所。P1～P4は深さ42～50cmで、配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ31cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第16図 第90号住居跡実測図

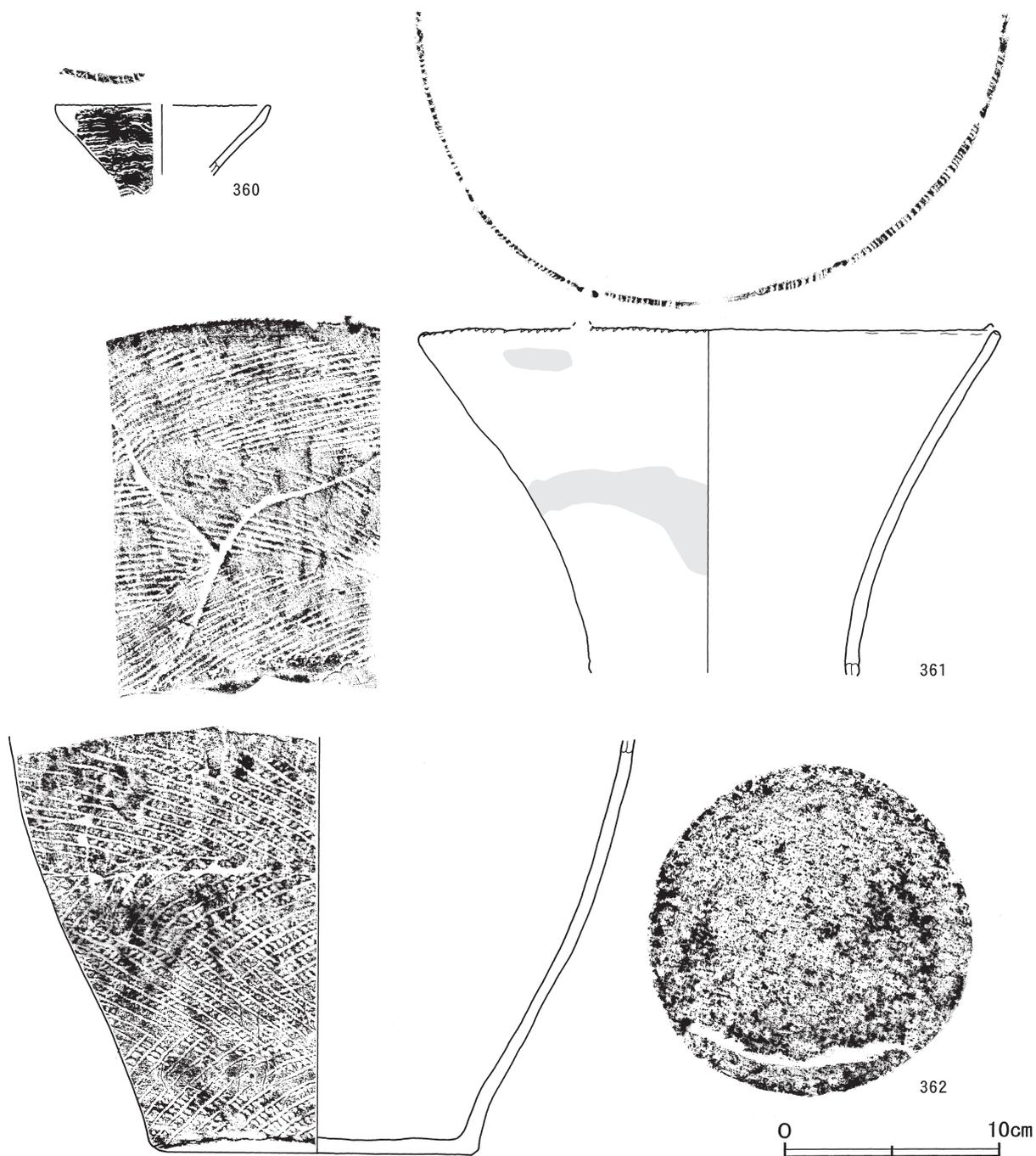
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

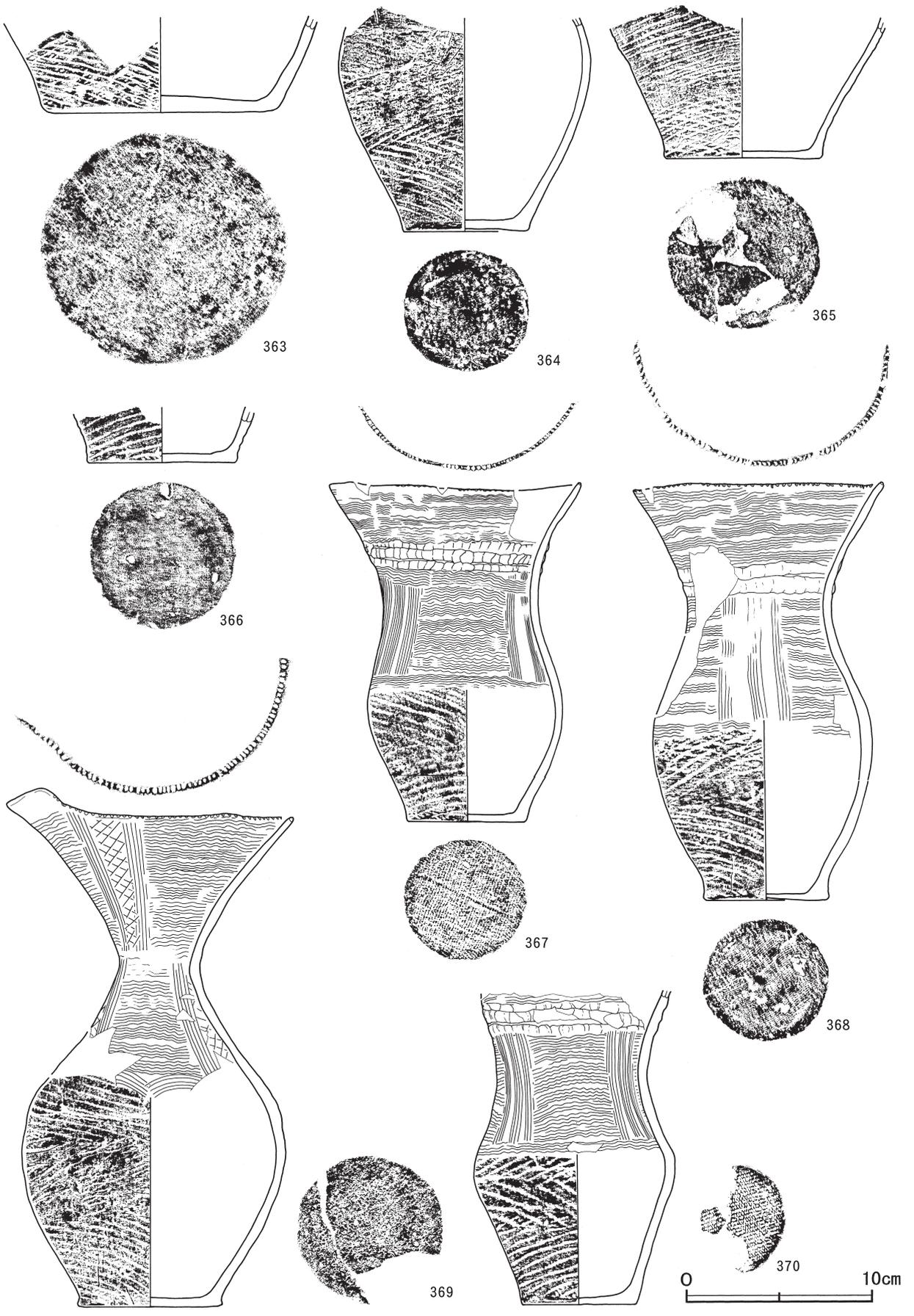
- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 1 黒色 炭化粒子少量, ローム粒子微量 | 4 極暗褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 黒色 ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 弥生土器片496点（広口壺），土製品5点（紡錘車1，球状土錘2，不明土製品2）の他に，土師器片32点も出土している。361・367は北西寄り，369は南西寄りの壁際，362・370は南東寄りの床面からそれぞれ出土している。土師器片は，第2層より上から出土しており，住居廃絶後の窪地に流れ込んだものである。

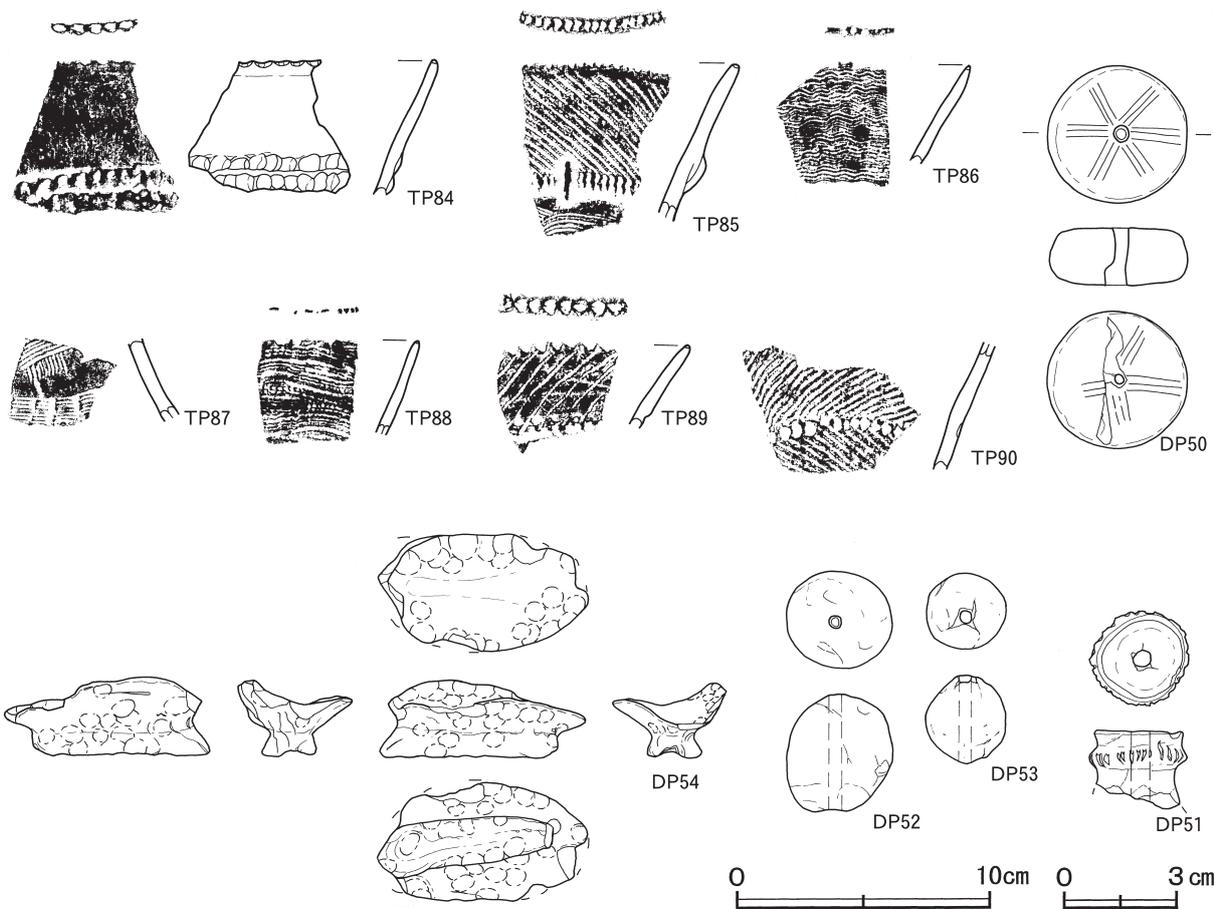
所見 時期は，出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第17図 第90号住居跡出土遺物実測図(1)



第18图 第90号住居跡出土遺物実測図(2)



第19図 第90号住居跡出土遺物実測図(3)

第90号住居跡出土遺物観察表(第17~19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
360	弥生土器	高坏	[10.0]	(3.3)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部に刻み 口縁部に櫛歯状工具(4本)による波状文	覆土中	5%
361	弥生土器	広口壺	26.6	(16.6)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部に刻み 小突起5単位以上 口辺部から頸部に附加条二種(附加1条)の羽状構成	床面	20% 一部赤彩 PL21
362	弥生土器	広口壺	—	(19.5)	15.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰白	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部砂目痕	床面	20% PL21
363	弥生土器	広口壺	—	(5.2)	12.4	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部に附加条二種(附加2条)の縄文 底部砂目痕	覆土下層	5%
364	弥生土器	広口壺	—	(11.6)	6.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部布目痕	床面	25% 外面煤付着 内面炭化物付着
365	弥生土器	広口壺	—	(7.7)	8.3	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部布目痕	覆土中層	20% 内面炭化物付着
366	弥生土器	広口壺	—	(3.0)	8.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部布目痕 初痕	覆土下層	5% 内面炭化物付着
367	弥生土器	広口壺	[13.1]	18.5	6.3	長石・石英・雲母	にぶい橙	良好	口唇部に刻み 口辺部に櫛歯状工具(6本)による波状文 頸部上位に軽い押圧のある隆帯3条 櫛歯状工具による3条を1単位とする縦区画(3分割)内に波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部布目痕	床面	90% 頸部から胴部外面に煤付着 内面炭化物付着 PL22
368	弥生土器	広口壺	13.6	22.7	6.8	長石・石英・雲母	明褐灰	普通	口唇部に刻み 口辺部に櫛歯状工具(5本)による波状文 頸部上位に軽い押圧のある隆帯2条 櫛歯状工具による3条を1単位とする縦区画内に波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部布目痕	覆土下層	50% 頸部外面煤付着 内面炭化物付着
369	弥生土器	片口壺	15.4	28.4	7.9	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	良好	片口部を除く口唇部に棒状工具による押圧 口辺部から胴部上位にかけて櫛歯状工具(5本)により縦区画(3分割)され格子状文施文 区画内に波状文充填 頸部下位に下向きの連弧文 胴部中位から下位に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部砂目痕	床面	80% PL17
370	弥生土器	広口壺	—	(17.1)	[6.2]	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口辺部に櫛歯状工具(本数不明)による波状文 頸部上位に軽い押圧のある隆帯3条 櫛歯状工具(4本)により3条を1単位とする縦区画(4分割)内に波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部布目痕	床面	80% 頸部外面煤付着 内面炭化物付着 PL23
TP84	弥生土器	広口壺	—	(5.3)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部に原体押圧 口辺部無文 頸部上位に押圧のある隆帯	覆土中	5%
TP85	弥生土器	広口壺	—	(6.3)	—	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口唇部に原体押圧 複合口縁 口辺部に附加条一種(附加2条)の縄文 縮貼付 口辺部下端に原体押圧 櫛歯状工具(本数不明)による下向きの連弧文	覆土中	5% PL38

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
TP86	弥生土器	広口壺	—	(4.0)	—	長石・石英・雲母	橙	良好	口唇部に刻み 小突起 口辺部に櫛歯状工具(4本)による波状文	覆土中	5%
TP87	弥生土器	広口壺	—	(3.3)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	頸部に櫛歯状工具(10本)による下向きの連弧文 頸部下位に廉状文	覆土中	5% PL39
TP88	弥生土器	広口壺	—	(3.8)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部に刻み 口縁部に櫛歯状工具(5本)による波状文	覆土中	5%
TP89	弥生土器	広口壺	—	(3.3)	—	長石・石英・雲母	赤褐	普通	口唇部に棒状工具による押圧 口辺部に附加条一種(附加2条)施文 口辺部に下端棒状工具による押圧	覆土中	5%
TP90	弥生土器	広口壺	—	(5.1)	—	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口辺部に附加条一種(附加2条)の羽状構成 原体結節部に原体による刺突	覆土中	5%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP50	紡錘車	5.5	0.6	2.3	(83.1)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	両面に櫛歯状工具(3本)による放射状の直状文 側面ナデ	覆土下層	PL40
DP51	不明土製品	2.7	0.5	(2.1)	(10.2)	土(長石・石英・雲母)	側面にヘラ状工具による刺突	床面	紡錘車カ PL40
DP52	球状土錘	4.2	0.5	4.7	75.7	土(長石・石英・雲母・針状鉱物)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	
DP53	球状土錘	3.2	0.5	3.5	28.3	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	高さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP54	不明土製品	8.3	4.7	3.0	(41.7)	土(長石・石英・雲母)	全面ナデ 指頭痕	覆土中	祭祀具カ PL41

第92号住居跡 (第20～22図)

位置 調査区西部のD9c7区で、標高15.5mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第80・93・96号住居に掘り込まれている。

規模と形状 遺構全体の確認はできなかったが、主軸方向をN-43°-Wとする長径8.30m、短径7.90mほどの円形と推定される。壁高は20～48cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部のやや北西寄りに位置している。長径79cm、短径56cmほどの楕円形で、床面を6cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|---------|-------------------|-------|---------|
| 1 極暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子微量 | | |

ピット 6か所。P1～P4は深さ70～81cmで、配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ31cm、P6は深さ42cmで、配置からいずれも出入り口施設に伴うピットと考えられるが、土層断面からP6が新しいことが確認された。

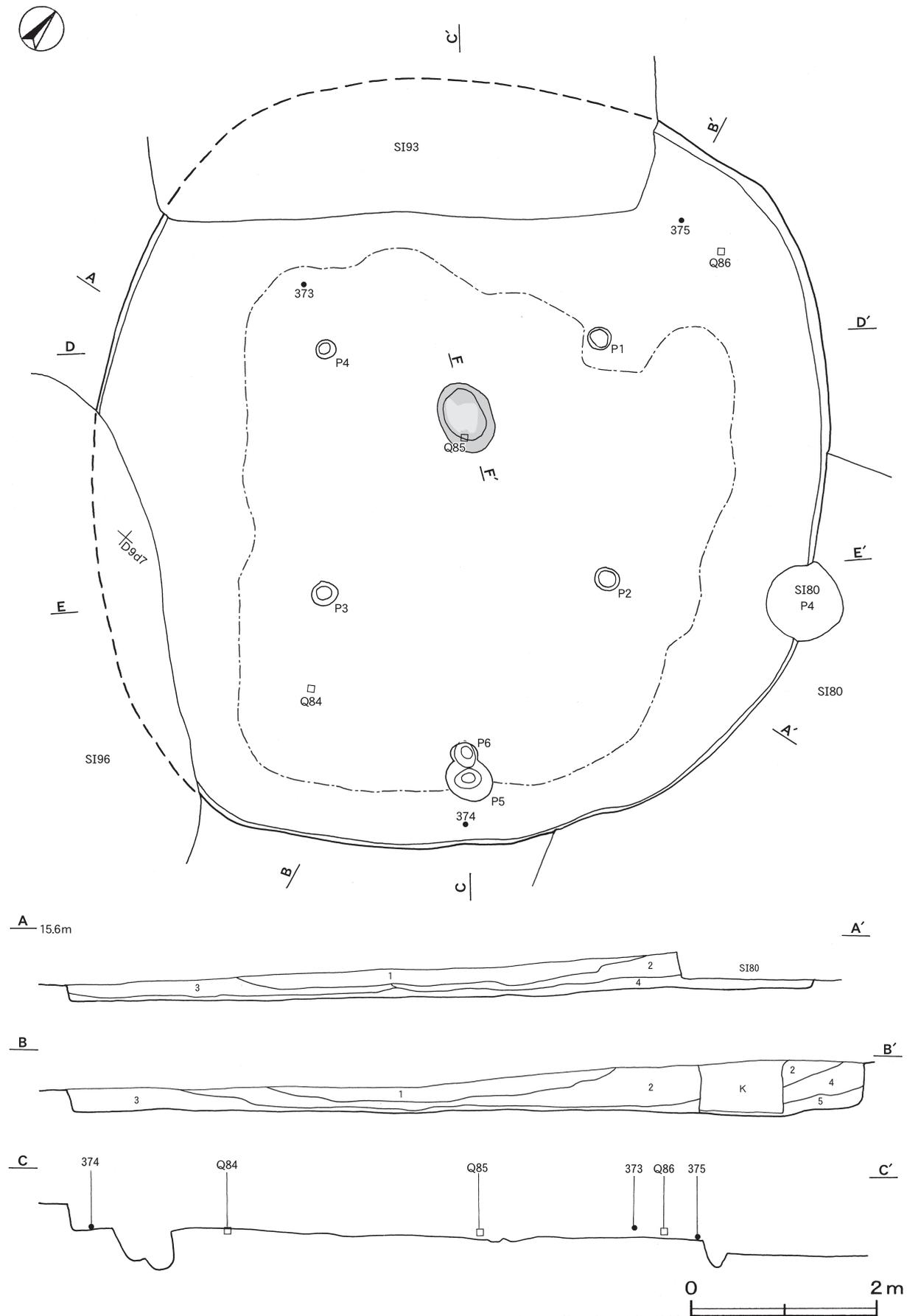
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

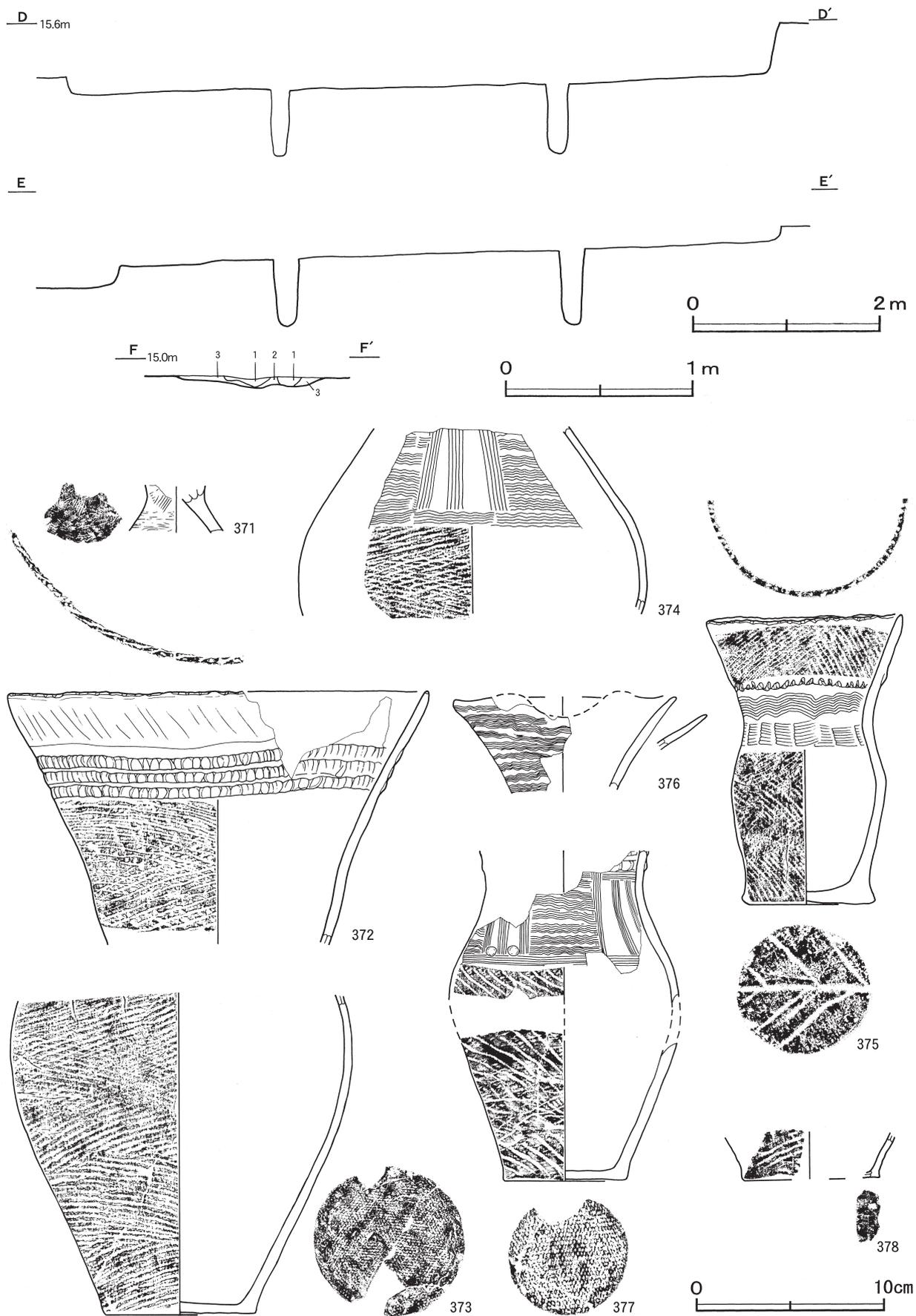
- | | | | |
|--------|-------------------|-------|---------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子・炭化物微量 |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 弥生土器片1143点(高坏1, 広口壺1141, 片口壺1), 土製品5点(球状土錘4, 管状土錘1), 石器3点(敲石, 砥石, 炉石), 礫5点の他に、混入した縄文土器片12点, 土師器片60点も出土している。375は、北側コーナー付近の床面から逆位で出土している。377は、東寄りの覆土中から出土しており、第96号住居跡の北東寄りの覆土上層から出土した破片と接合関係にある。遺物はほとんどが細片であり、復元できるものが少ない。また、弥生土器片や土師器片は、ほとんどが第2層より上で出土しており住居廃絶後の窪地に投棄されたものと考えられる。

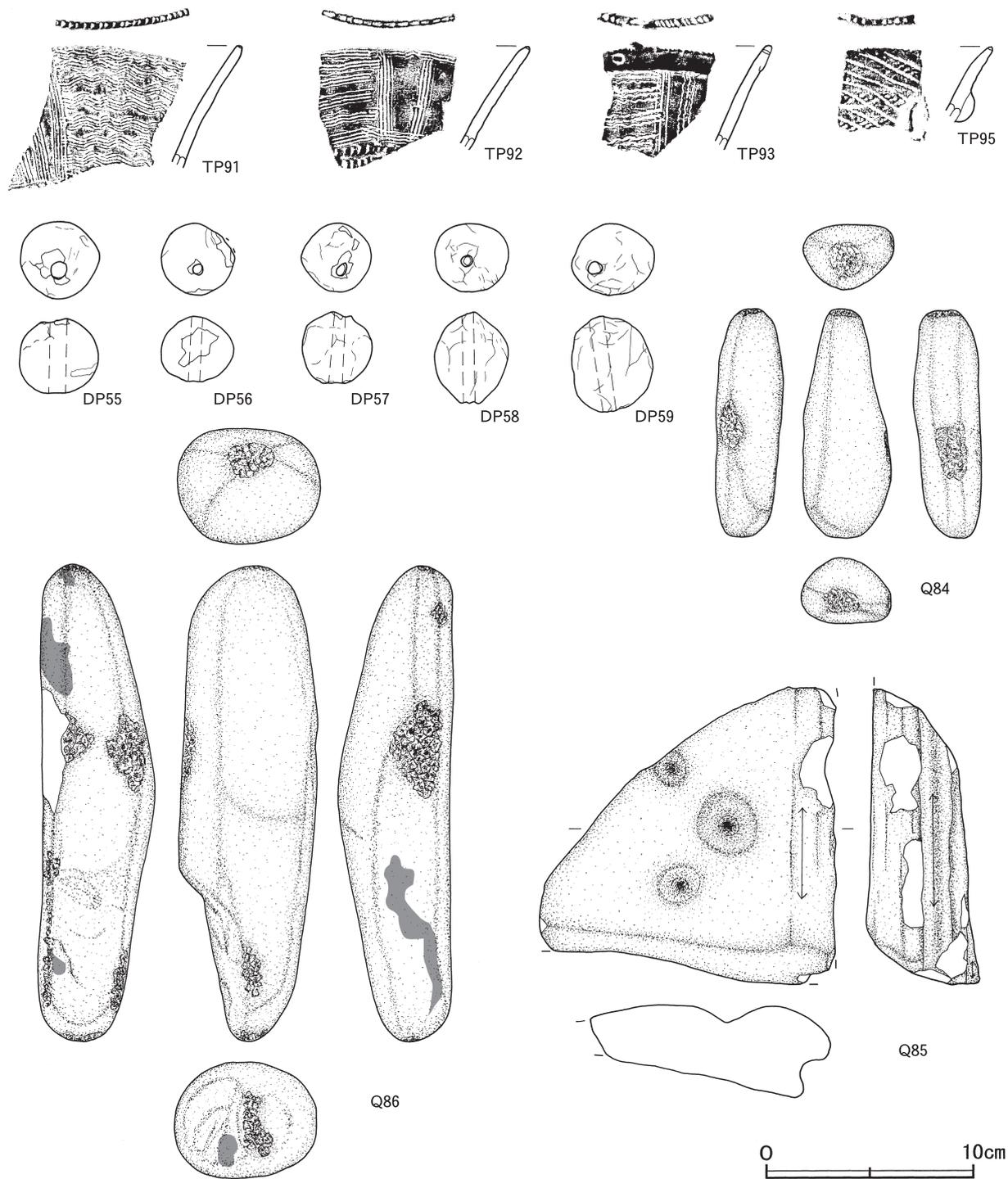
所見 当遺跡で調査された弥生時代の住居跡の中では最大規模であり、形状も他の住居跡とは異なり円形状を呈している。時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第20图 第92号住居跡実測図



第21图 第92号住居跡・出土遺物実測図



第22図 第92号住居跡出土遺物実測図

第92号住居跡出土遺物観察表(第21・22図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
371	弥生土器	高坏	-	(2.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	脚部から胴部に櫛歯状工具(6本)による施文	覆土中	5%
372	弥生土器	広口壺	22.4	(13.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部に原体押圧 口辺部ヘラナデ 頸部上位に押圧のある隆帯3条 頸部に附加条二種(附加1条)の羽状構成	覆土中	15%
373	弥生土器	広口壺	-	(17.1)	8.1	長石・石英・雲母	橙	普通	文様帯の境に櫛歯状工具(本数不明)による波状文 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部布目痕	覆土下層	30%
374	弥生土器	広口壺	-	(9.9)	-	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	櫛歯状工具(5本)による3条を一単位とする縦区画内に波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成	覆土下層	5% 頸部外面煤付着

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
375	弥生土器	広口壺	13.0	15.5	7.1	長石・石英・雲母	にぶい 褐	普通	口唇部に原体押圧 複合口縁 口辺部下端に縄文原体による押圧 頸部に櫛歯状工具（8本）による波状文 頸部下位に櫛歯状工具による廉状文 胴部に附加条一種（附加2条）の羽状構成 底部木葉痕	床面	100% PL23
376	弥生土器	広口壺	[13.5]	(5.0)	—	長石・石英・雲母	灰白	普通	口辺部に櫛歯状工具（5本）による波状文	覆土中	5%
377	弥生土器	広口壺	—	[18.4]	6.6	長石・石英・雲母	黒褐	普通	頸部上位に軽い押圧のある隆帯2条以上 櫛歯状工具（5本）による3条を一単位とする縦区画内に波状文充填 区画毎対のボタン状瘤貼付 胴部に附加条二種（附加1条）の羽状構成 底部布目痕	覆土中	30%
378	弥生土器	広口壺	—	(2.5)	[7.4]	長石・石英・雲母	にぶい 橙	普通	胴部に附加条一種（附加2条）の縄文 底部砂目痕 粉痕	覆土中	5%
TP91	弥生土器	広口壺	—	(5.5)	—	長石・石英・雲母	褐	良好	口唇部に刻み 口辺部に櫛歯状工具（4本）による縦区画内に波状文充填	覆土中	5%
TP92	弥生土器	広口壺	—	(5.0)	—	長石・石英・雲母	にぶい 褐	普通	口唇部にヘラ状工具による波状文 口辺部に櫛歯状工具（5本）による縦区画内に波状文充填 頸部上位にヘラ状工具による刺突のある隆帯	覆土中	5% PL38
TP93	弥生土器	広口壺	—	(5.0)	—	長石・石英・雲母	にぶい 橙	普通	口唇部に刻み 小突起 複合口縁 口辺部に櫛歯状工具（3本）による縦区画内に波状文充填	覆土中	5% PL38
TP95	弥生土器	広口壺	—	(3.6)	—	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口唇部に刻み 口辺部に附加条一種（附加2条）施文 瘤貼付	覆土中	5%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP55	球状土錘	3.9	0.8	3.6	(45.3)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	
DP56	球状土錘	3.6	0.5	3.2	(33.4)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	
DP57	球状土錘	3.4	0.5~0.7	3.5	(31.0)	土(長石・石英・雲母・黒色粒子)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	
DP58	球状土錘	3.6	0.6	4.4	43.8	土(長石・石英・雲母・黒色粒子)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	
DP59	管状土錘	4.0	0.6~0.7	4.7	58.4	土(長石・石英・雲母・針状鉱物)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q84	敲石	11.0	4.3	3.2	204.8	砂岩	敲打痕4か所	床面	
Q85	砥石	(14.5)	(14.4)	(5.6)	(942.3)	砂岩	側面に砥面2か所 凹石を砥石に転用 くぼみ3孔	覆土下層	PL42
Q86	敲石	23.2	6.8	5.6	1134.6	砂岩	敲打痕6か所 炉石から敲石に転用 火を受けて赤変	覆土下層	

第96号住居跡（第23～26図）

位置 調査区西部のD 9 d6区で、標高15.1mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第92号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸6.08m、短軸4.89mの隅丸長方形で、主軸方向はN-53°-Wである。壁高は30～44cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部のやや北西寄りに位置している。長径83cm、短径61cmの楕円形で、床面を11cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。凝灰岩の炉石が、炉の長軸に直交して炉床中央部に据えられていた。

炉土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗赤灰色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ34～56cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ20cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

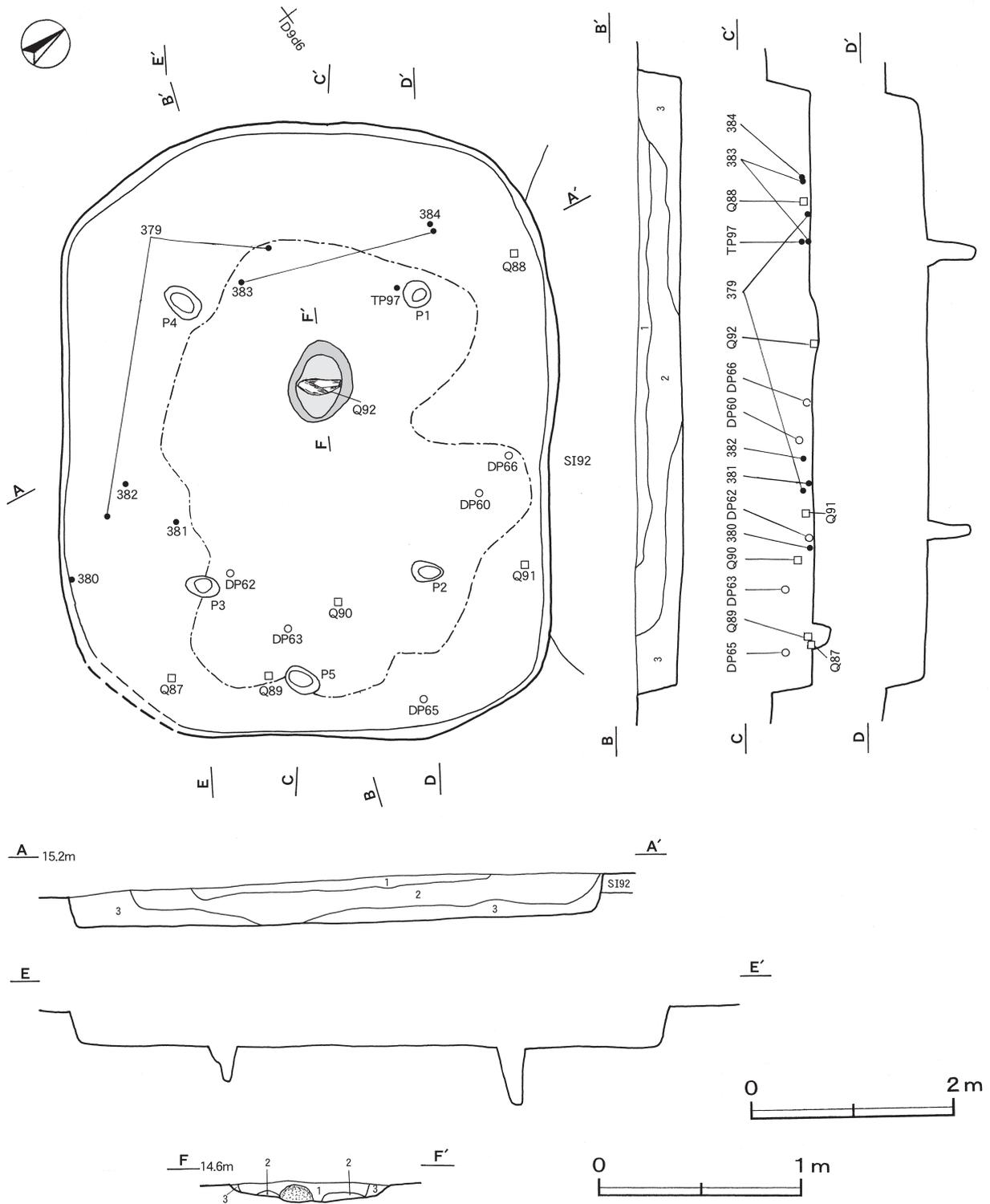
土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

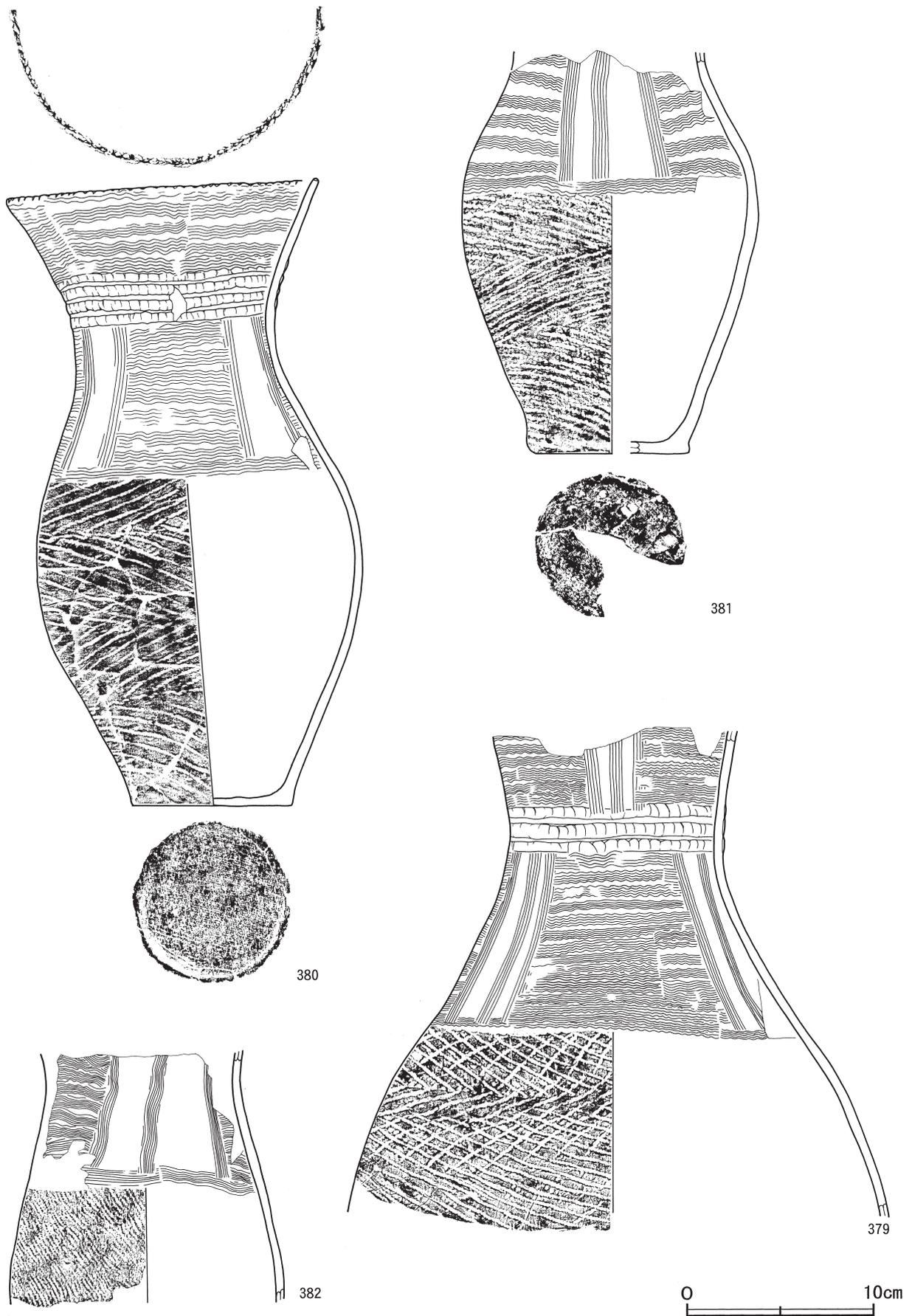
遺物出土状況 弥生土器片324点（広口壺）、土製品7点（紡績車1、球状土錘2、管状土錘4）、石器6点（磨石2、炉石4）の他に、混入した縄文土器片1点、土師器片31点も出土している。380は南西壁に倒れかかる

ようにして出土し、381はP3付近の床面から出土している。第92号住居跡の377と接合した破片は、北東寄りの覆土上層から出土しており、第92号住居跡との重複部分にあった弥生土器片が本住居構築の際に掘り起こされ、周堤帯などに紛れ込んでいたものが住居廃絶後に流れ込んだものと考えられる。土師器片は第2層上面から上で出土しており、住居廃絶後の窪地に投棄されたものと考えられる。

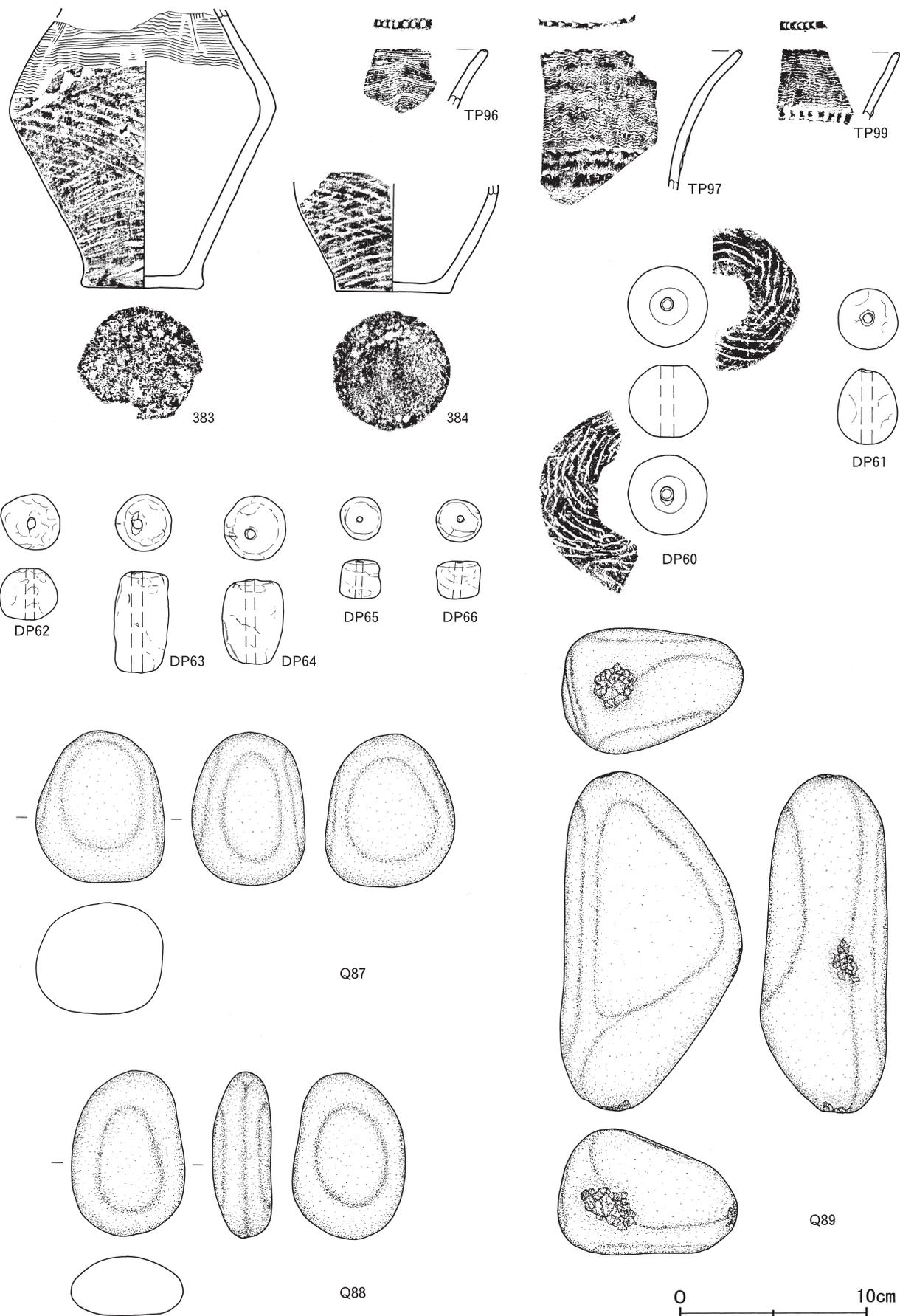
所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



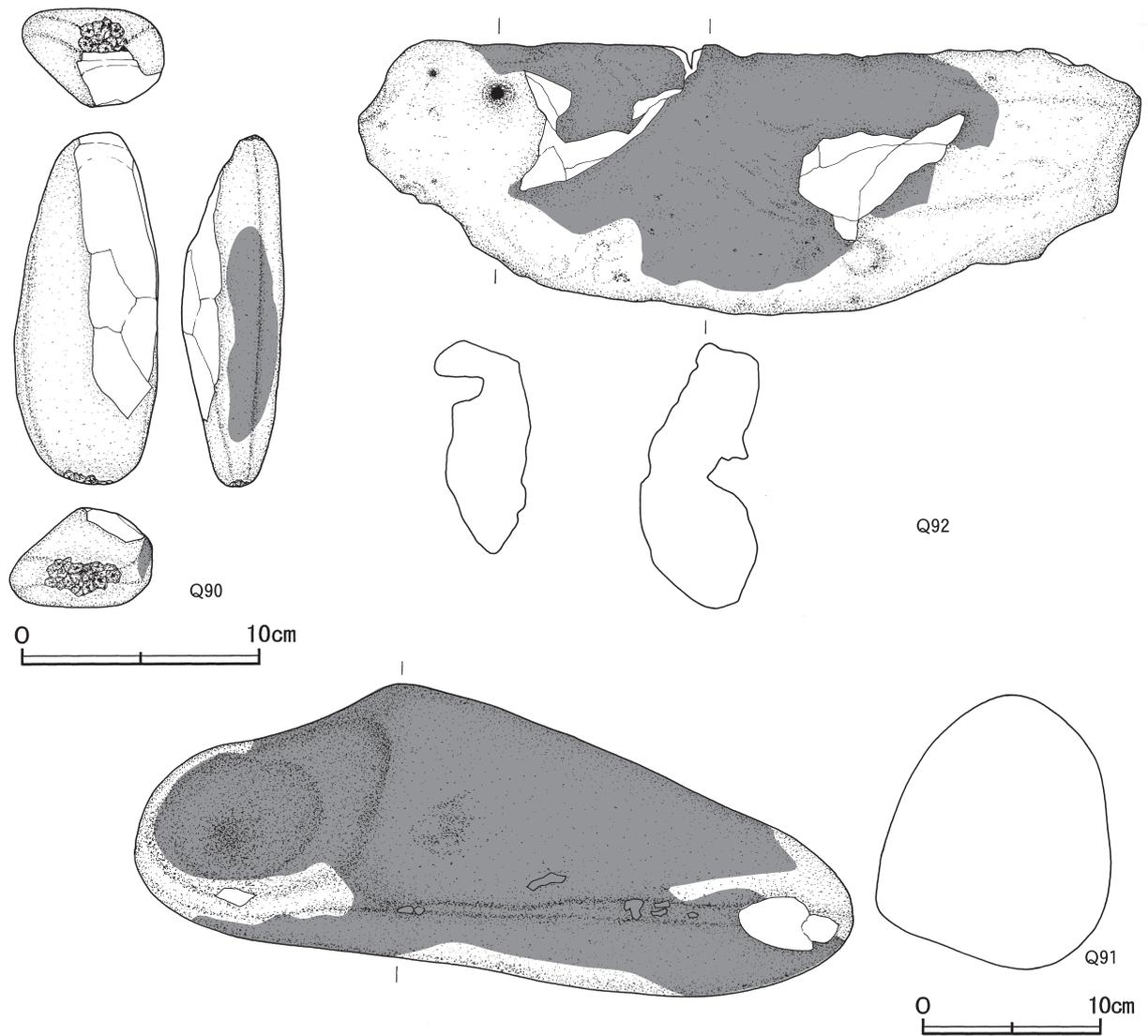
第23図 第96号住居跡実測図



第24图 第96号住居跡出土遺物実測図(1)



第25図 第96号住居跡出土遺物実測図(2)



第26図 第96号住居跡出土遺物実測図(3)

第96号住居跡出土遺物観察表(第24~26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
379	弥生土器	広口壺	-	(26.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	頸部に櫛歯状工具(5本)による3条を一単位とする縦区画(4分割)内に波状文を充填し、頸部中位に軽い押圧のある隆帯3条で文様帯を分割 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成	覆土下層 ~床面	25% PL21
380	弥生土器	広口壺	16.8	33.7	8.6	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口唇部に原体押圧 口辺部に櫛歯状工具(5本)による波状文 頸部上位に軽い押圧のある隆帯4条 櫛歯状工具による縦区画(4分割)内に波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部布目痕	床面	95% 口辺部・頸部外面煤付着 内面炭化物付着 PL17
381	弥生土器	広口壺	-	(22.5)	8.0	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	頸部に櫛歯状工具(5本)による3条を一単位とする縦区画(3分割以上)内に波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部布目痕	床面	50%
382	弥生土器	広口壺	-	(13.5)	-	長石・石英・雲母	灰褐	普通	頸部に櫛歯状工具(8本)による3条を一単位とする縦区画内に波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の縄文	覆土下層	10%
383	弥生土器	壺	-	(15.1)	6.6	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	頸部に櫛歯状工具(5本)による縦区画後直状文充填 直状文で頸部文様帯と区画 胴部附加条二種(附加1条)の縄文 底部布目痕	覆土下層 ~床面	65% PL23
384	弥生土器	広口壺	-	(5.8)	6.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部布目痕	覆土下層	5%
TP96	弥生土器	広口壺	-	(3.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部棒状工具による押圧 口辺部櫛歯状工具(6本)による波状文	覆土中	5% PL39
TP97	弥生土器	広口壺	-	(7.7)	-	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口唇部に刻み 口辺部櫛歯状工具(5本)による波状文 頸部上端軽い押圧のある隆帯3条 頸部櫛歯状工具(本数不明)による波状文	覆土下層	5%
TP99	弥生土器	広口壺	-	(3.6)	-	長石・石英・雲母	褐	普通	口唇部に刻み 口辺部櫛歯状工具(5本)による波状文 頸部上端ヘラ状工具による刺突のある隆帯	覆土中	5%

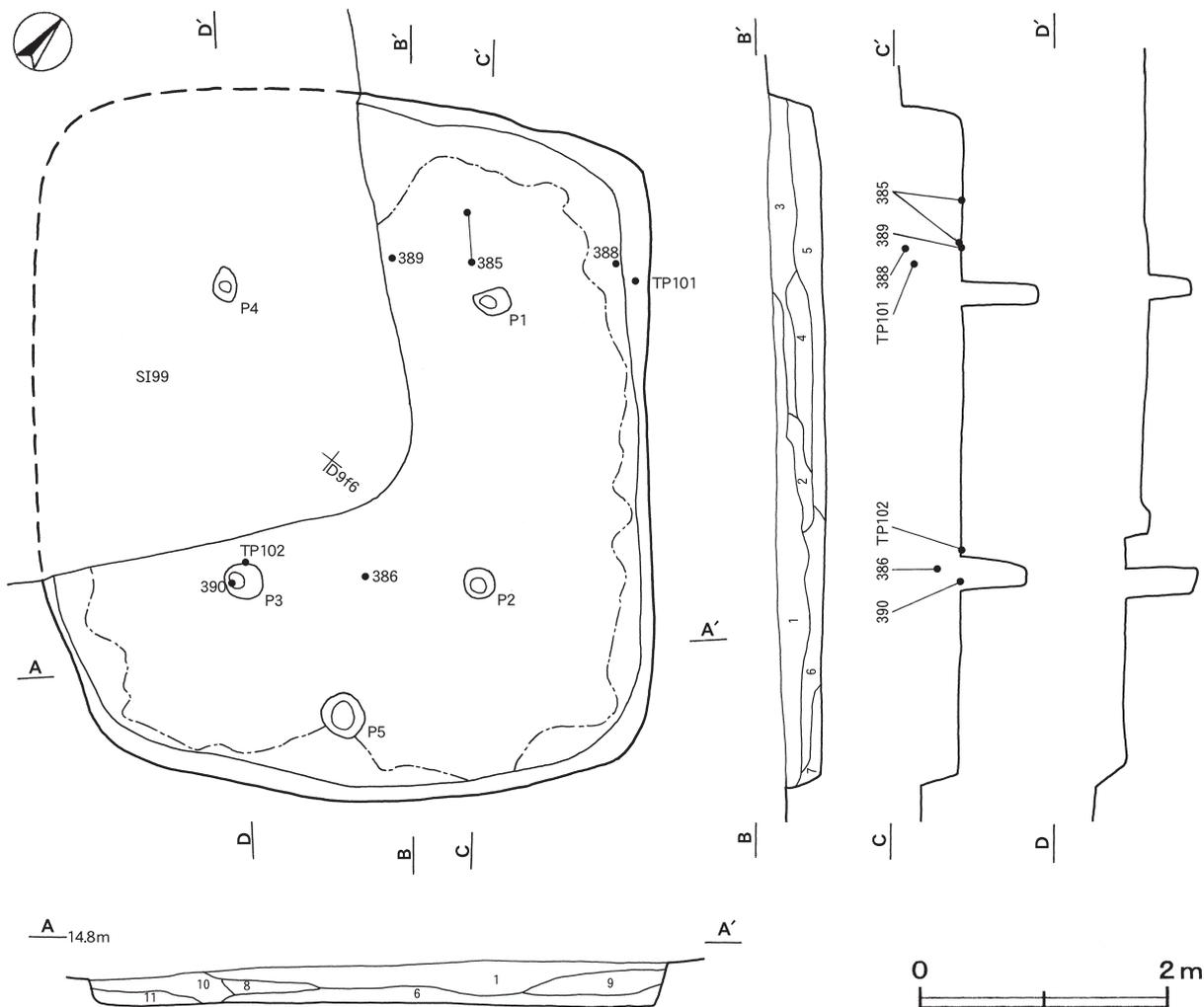
番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP60	紡錘車	4.3	0.6~0.7	3.8	71.9	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔 附加条二種(附加1条)の縄文施文	覆土下層	PL40
DP61	球状土錘	3.2	0.6	4.0	39.7	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	
DP62	球状土錘	3.1	0.4~0.5	2.8	25.9	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP63	管状土錘	3.1	0.6	5.5	(58.3)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子・針状鉱物)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	
DP64	管状土錘	3.4	0.5	4.6	57.7	土(長石・石英・雲母・赤色粒子・針状鉱物)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	
DP65	管状土錘	2.3	0.3	2.0	10.7	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	
DP66	管状土錘	2.4	0.4	2.0	11.6	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q87	磨石	8.2	7.0	6.1	513.5	半花崗岩	全面に擦痕 両端部に顕著な擦痕	床面	
Q88	磨石	8.9	5.6	3.3	271.5	砂岩	全面に擦痕	覆土下層	
Q89	敲石	18.1	9.8	6.8	1490.8	砂岩	敲打痕3か所 炉石を敲石に転用 火を受けて赤変	覆土下層	
Q90	敲石	15.0	6.1	4.3	(491.9)	砂岩	両端に敲打痕 炉石を敲石に転用 火を受けて赤変 煤付着	覆土下層	
Q91	炉石	41.7	17.4	13.2	(10200.0)	砂岩	底面以外の3面に煤付着	覆土下層	
Q92	炉石	44.5	15.5	6.7	(1898.8)	凝灰質泥岩	上面, 火を受けて変色	炉石床面	

第100号住居跡 (第27~29図)

位置 調査区西部のD 9 e6区で、標高14.6mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第99号住居に掘り込まれている。



第27図 第100号住居跡実測図

規模と形状 遺構全体の確認はできなかったが、主軸方向をN-38°-Wとする長軸5.76m、短軸4.92mの隅丸長方形と推定される。壁高は20~36cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

ピット 5か所。P1~P4は深さ34~60cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ22cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

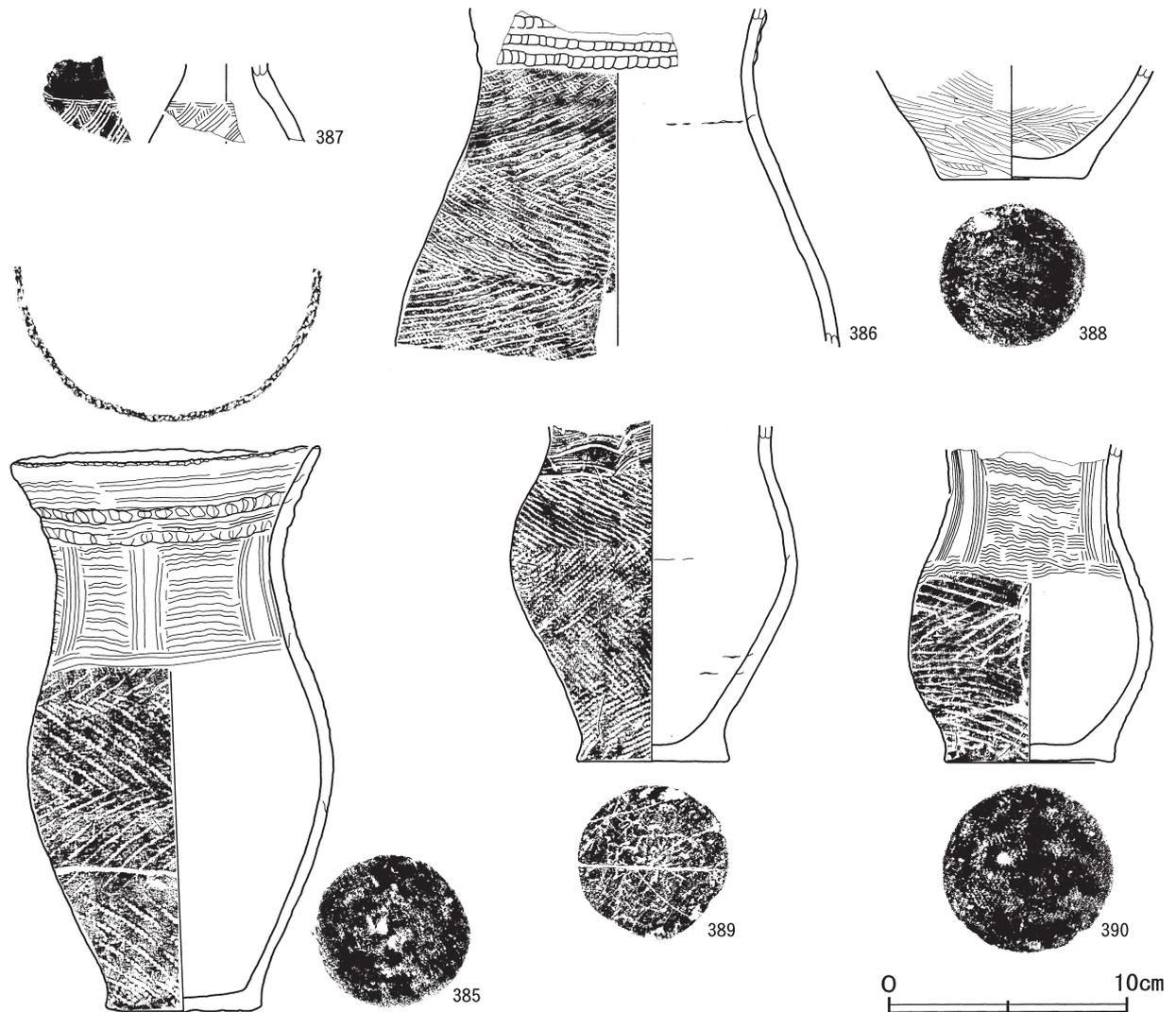
覆土 11層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられるが、第1層は自然に堆積したと考えられる。

土層解説

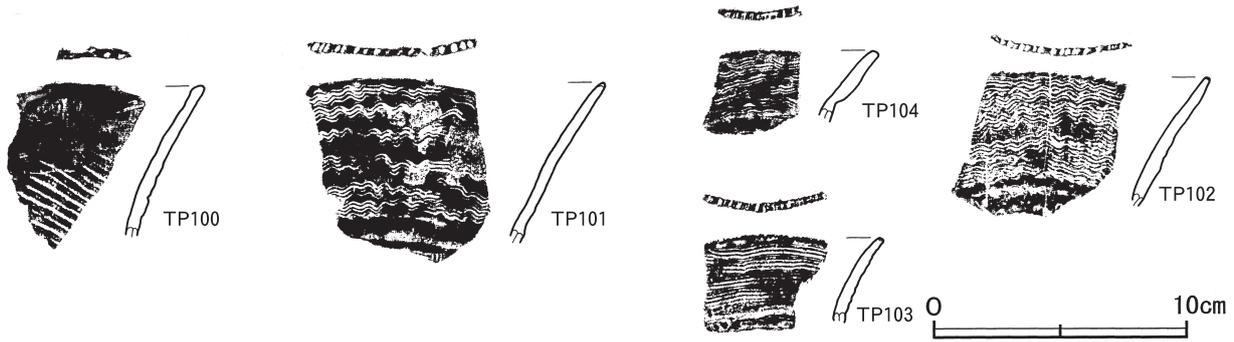
- | | | | |
|--------|---------------------|--------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック微量 | 7 極暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量 | 8 黒褐色 | ローム粒子・炭化物微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 9 極暗褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量 |
| 4 極暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | | |

遺物出土状況 弥生土器片216点（広口壺）、礫3点の他に、混入した土師器片8点も出土している。385・389は、北側コーナー付近の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第28図 第100号住居跡出土遺物実測図(1)



第29図 第100号住居跡出土遺物実測図(2)

第100号住居跡出土遺物観察表(第28・29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
385	弥生土器	広口壺	12.6	23.8	6.5	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部に原体押圧 口辺部に櫛歯状工具(3本)による波状文 頸部上位に押圧のある隆帯2条 隆帯間に櫛歯状工具による施文 櫛歯状工具による縦区画(5分割)内に波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 輪積痕 底部砂目痕	床面	100% 胴部外面煤付着 内面炭化物付着 PL22
386	弥生土器	広口壺	-	(14.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	頸部上位に軽い押圧のある隆帯3条 頸部から胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 輪積痕	覆土中層	10% 外面煤付着
387	弥生土器	広口壺	-	(3.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	頸部無文帯 頸部下位に櫛歯状工具(5本)による直状文 斜位の施文	覆土中	5%
388	弥生土器	広口壺	-	(4.8)	6.2	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部内・外面下端へラ磨き 底部へラ磨き	覆土上層	10%
389	弥生土器	広口壺	-	(14.1)	6.3	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	頸部下位に下向きの連弧文 胴部に附加条一種(附加2条)の羽状構成 輪積痕 底部木葉痕	床面	70% 胴部外面煤付着
390	弥生土器	広口壺	-	(13.3)	7.1	長石・石英・雲母	灰褐	普通	頸部に櫛歯状工具(5本)による3条を一単位とする縦区画(3分割)内に波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部布目痕	床面	65% 頸部外面煤付着 内面炭化物付着
TP00	弥生土器	広口壺	-	(5.7)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	口唇部に原体押圧 口辺部無文 頸部上位に附加条一種(附加2条)施文 輪積み痕	覆土中	5% PL38
TP01	弥生土器	広口壺	-	(6.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部に刻み 小突起 口辺部に櫛歯状工具(4本)による波状文 頸部上位に軽い押圧のある隆帯	覆土上層	5%
TP02	弥生土器	広口壺	-	(5.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部に刻み 小突起 口辺部に櫛歯状工具(5本)による波状文 頸部上位に軽い押圧のある隆帯	床面	5%
TP03	弥生土器	広口壺	-	(3.3)	-	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口唇部に刻み 口辺部に櫛歯状工具(4本)による直状文 隆帯	覆土中	5%
TP04	弥生土器	甕形土器	-	(2.8)	-	長石・石英・雲母	灰黄	普通	口唇部に刻み 口辺部に櫛歯状工具(4本)による波状文	覆土中	5%

第105号住居跡(第30・31図)

位置 調査区西部のD9d2区で、標高15.1mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第106号住居、第1・2号掘立柱建物、第166号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.93m、短軸4.70mの隅丸長方形で、主軸方向はN-54°-Wである。壁高は30~44cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 炉は中央部に2か所検出された。炉1は、長径74cm、短径52cmの楕円形で、床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。炉2は、長径33cm、短径49cmほど確認され、検出状況から炉1より古いものと考えられる。

炉1土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子・灰微量 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物・灰微量

炉2土層解説

- 3 黒褐色 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子・灰微量 4 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化物・灰微量

ピット 18か所。P1~P3は深さ24~61cmで、配置から主柱穴と考えられる。また、P4~P18は配置から壁柱穴と考えられる。

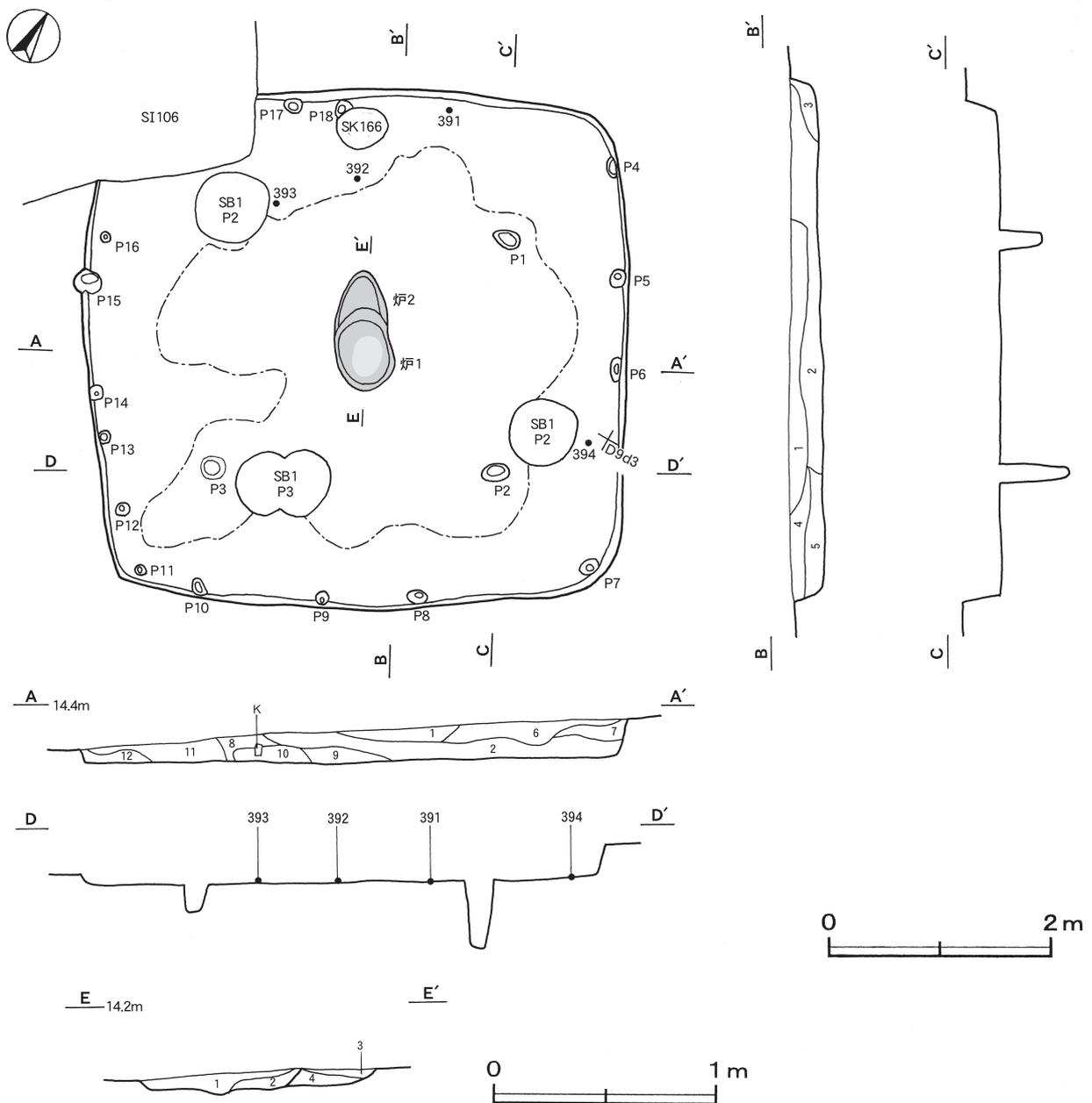
覆土 12層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

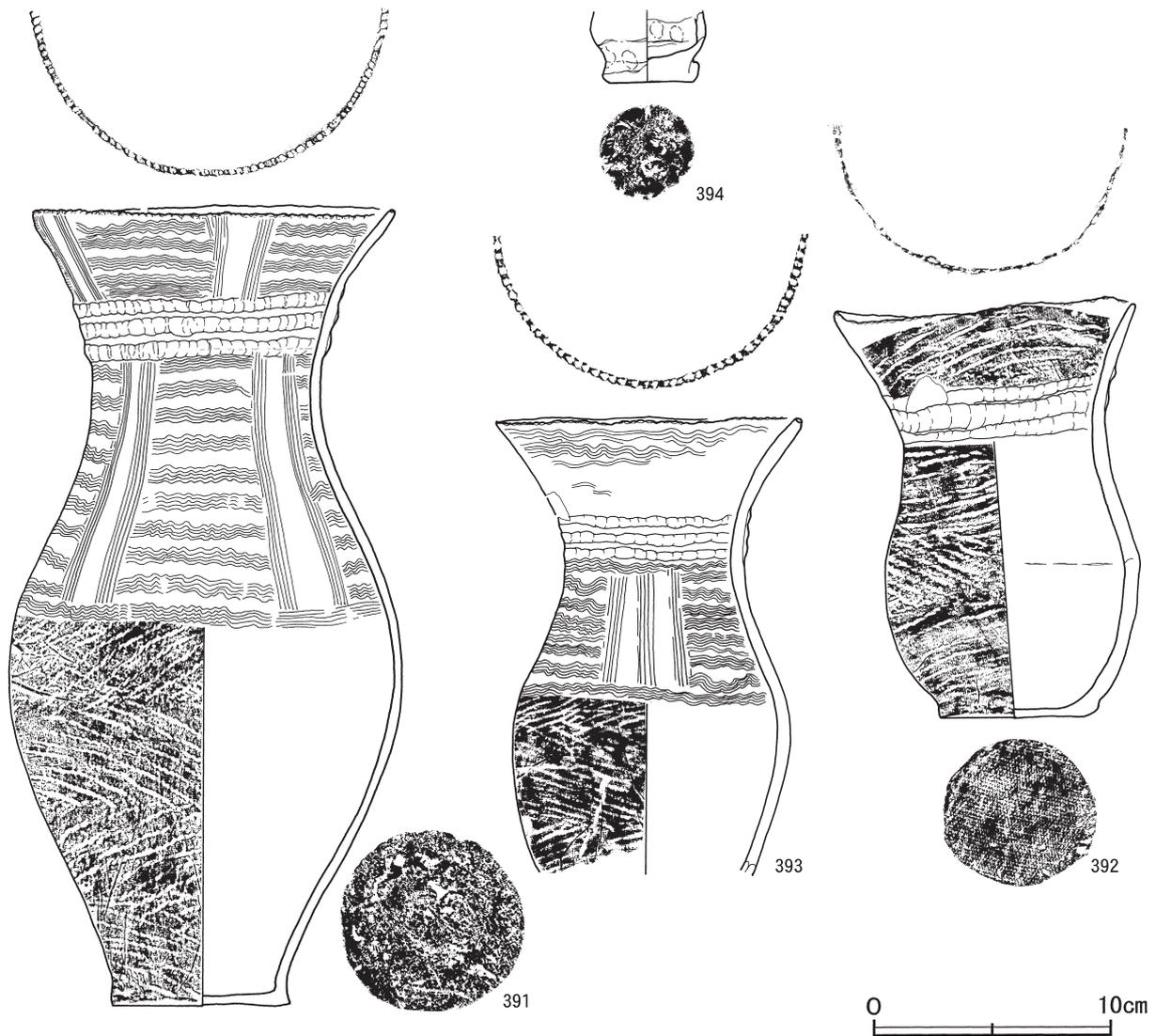
- | | | | |
|--------|----------------------|--------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 7 極暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 | 9 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 5 極暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 11 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 6 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 12 暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 弥生土器片82点（広口壺），手捏土器1点（壺類），礫1点の他に，混入した土師器片30点も出土している。391は北西壁に倒れかかるようにして出土し，392・393は中央部北西寄り，394は北東壁際の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は，出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第30図 第105号住居跡実測図



第31図 第105号住居跡出土遺物実測図

第105号住居跡出土遺物観察表(第31図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
391	弥生土器	広口壺	15.1	33.8	7.7	長石・石英・雲母	灰黄褐	良好	口唇部に刻み 口辺部・頸部に櫛歯状工具(5本)による縦区画(5分割)内に波状文を充填 頸部上位の軽い押圧のある隆帯3条で文様帯を分割 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部砂目痕	床面	95% 胴部外面煤 内面炭化物 付着 PL17
392	弥生土器	広口壺	12.6	17.8	6.4	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部に原体押圧 口辺部に附加条二種(附加1条)の縄文施文 頸部上位に軽い押圧のある隆帯3条 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 輪積痕 底部布目痕	床面	95% 胴部外面煤 付着 PL22
393	弥生土器	広口壺	12.8	(19.3)	—	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部に刻み 口辺部に櫛歯状工具(5本)による波状文 口辺部の一部剥離 頸部上位に軽い押圧のある隆帯3条 櫛歯状工具による縦区画(3分割)内に波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成	床面	60% 頸部外面煤 付着 PL22
394	手捏土器	壺形カ	—	(3.0)	3.9	長石・石英・雲母	灰褐	普通	胴部外面ナデ 胴部下端に指頭痕 輪積痕 底部砂目痕	床面	20%

第112号住居跡(第32・33図)

位置 調査区西部のC9j1区で、標高14.5mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第110・111号住居に掘り込まれている。

規模と形状 遺構全体の確認はできなかったが、主軸方向をN-34°-Wとする長軸5.23m、短軸3.94mの隅丸長方形と推定される。壁高は12~37cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部のやや北西寄りに位置している。長径83cm、短径66cmの楕円形で、床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

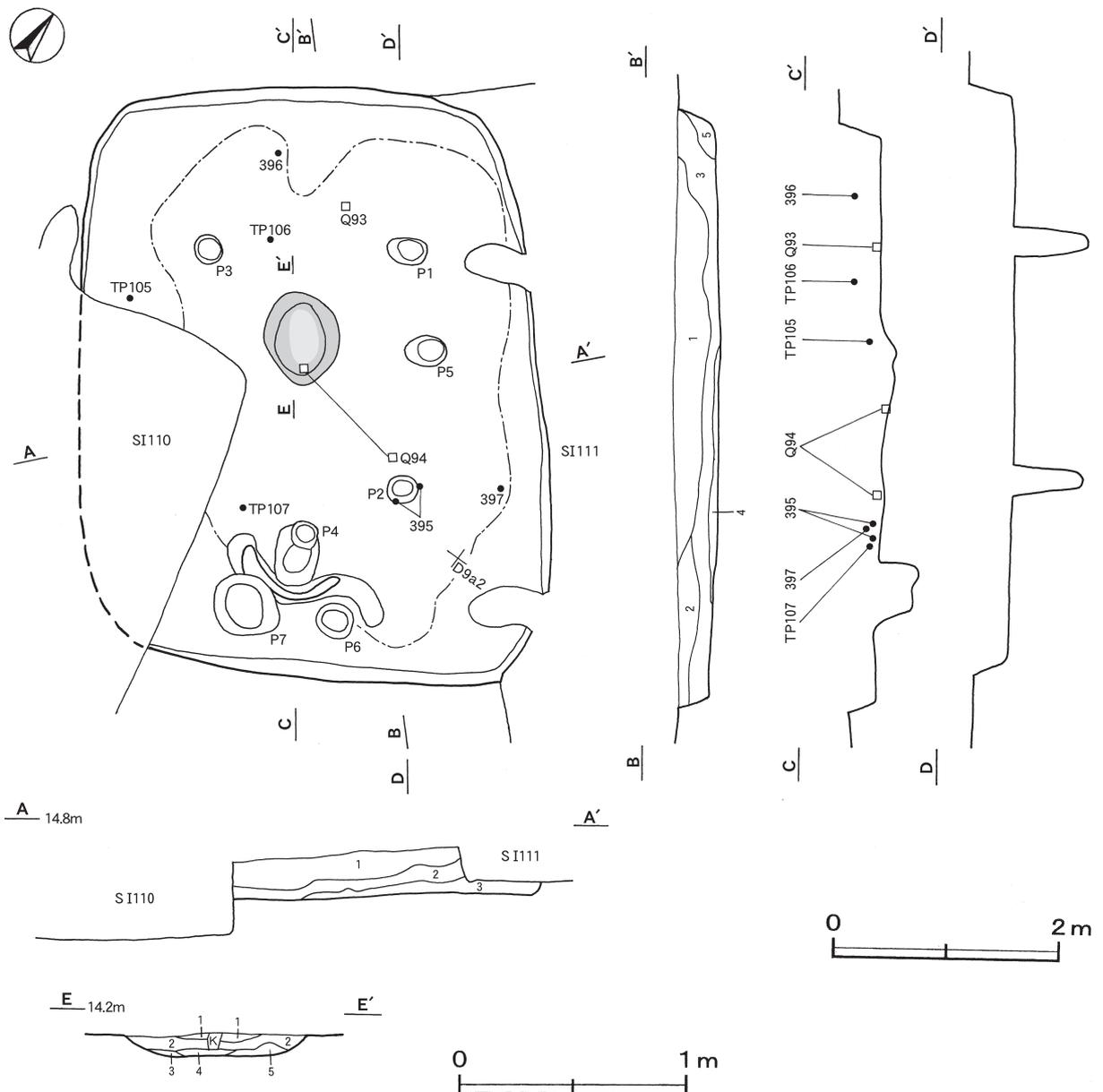
- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 極暗赤褐色 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 焼土粒子少量, ロームブロック微量 | |

ピット 7か所。P1～P3は深さ54～66cmで、配置から主柱穴と考えられる。P4は深さ31cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P5～P7の性格は不明である。

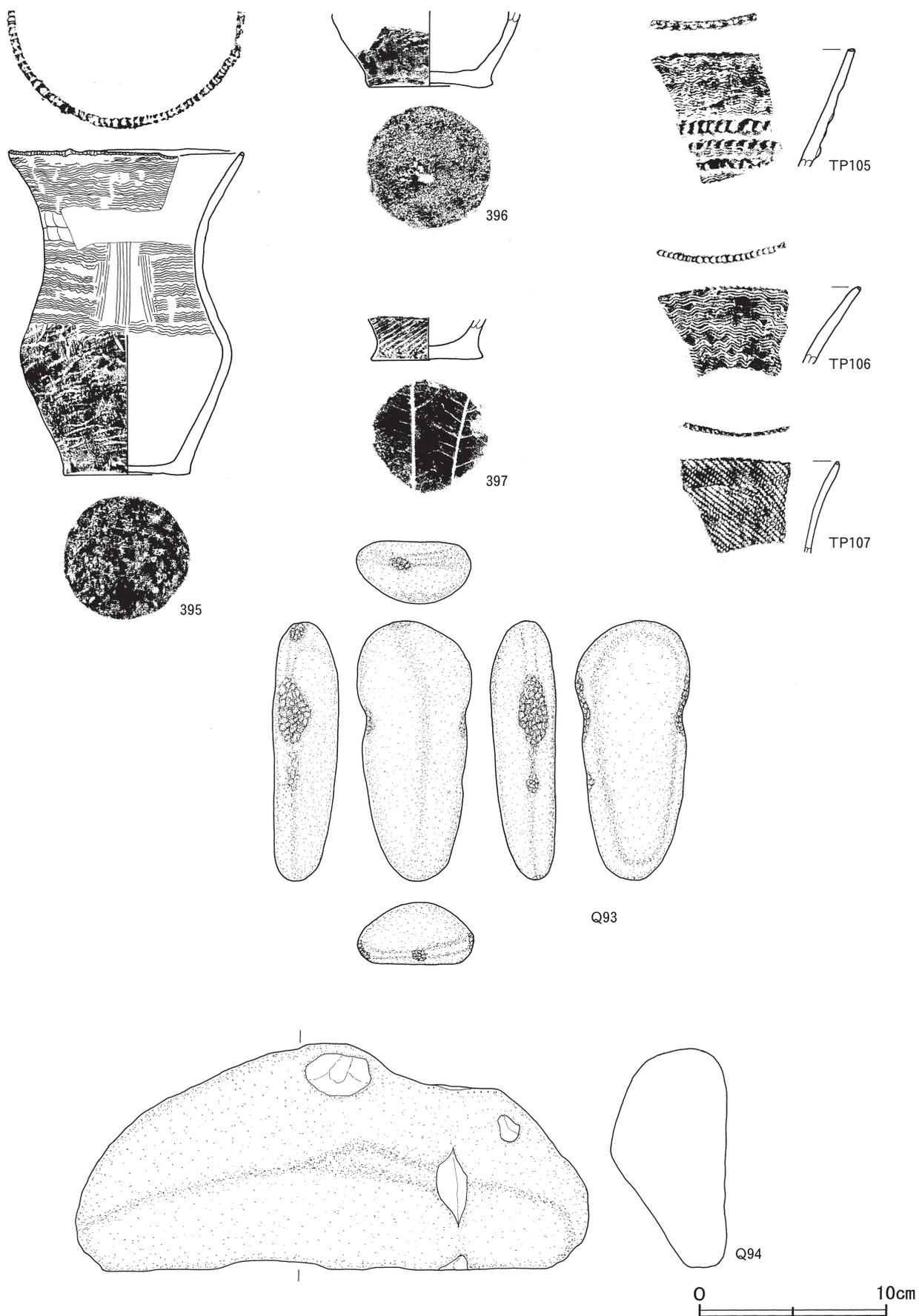
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

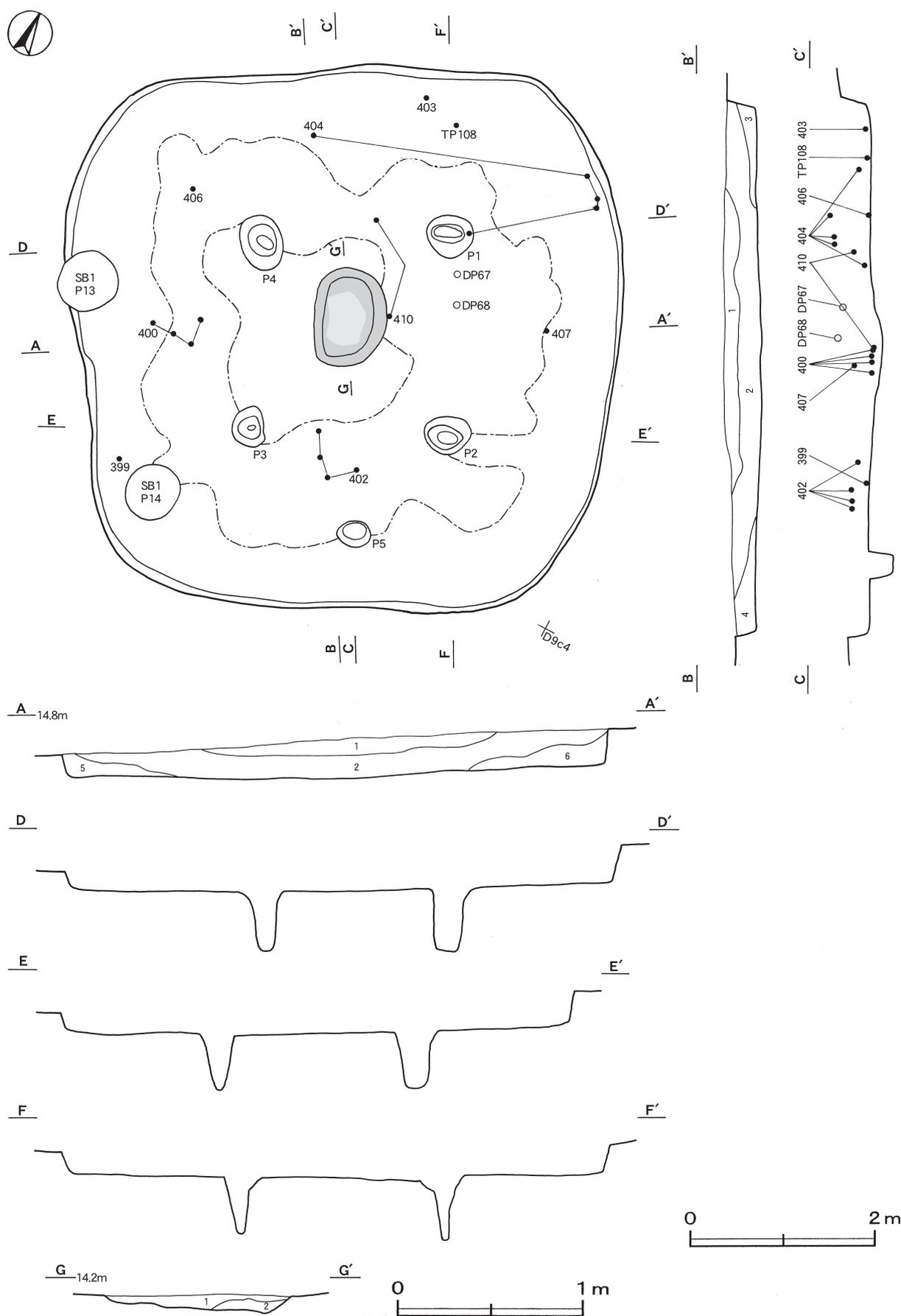
- | | |
|--------------------------|--------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 ロームブロック微量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子少量 | |



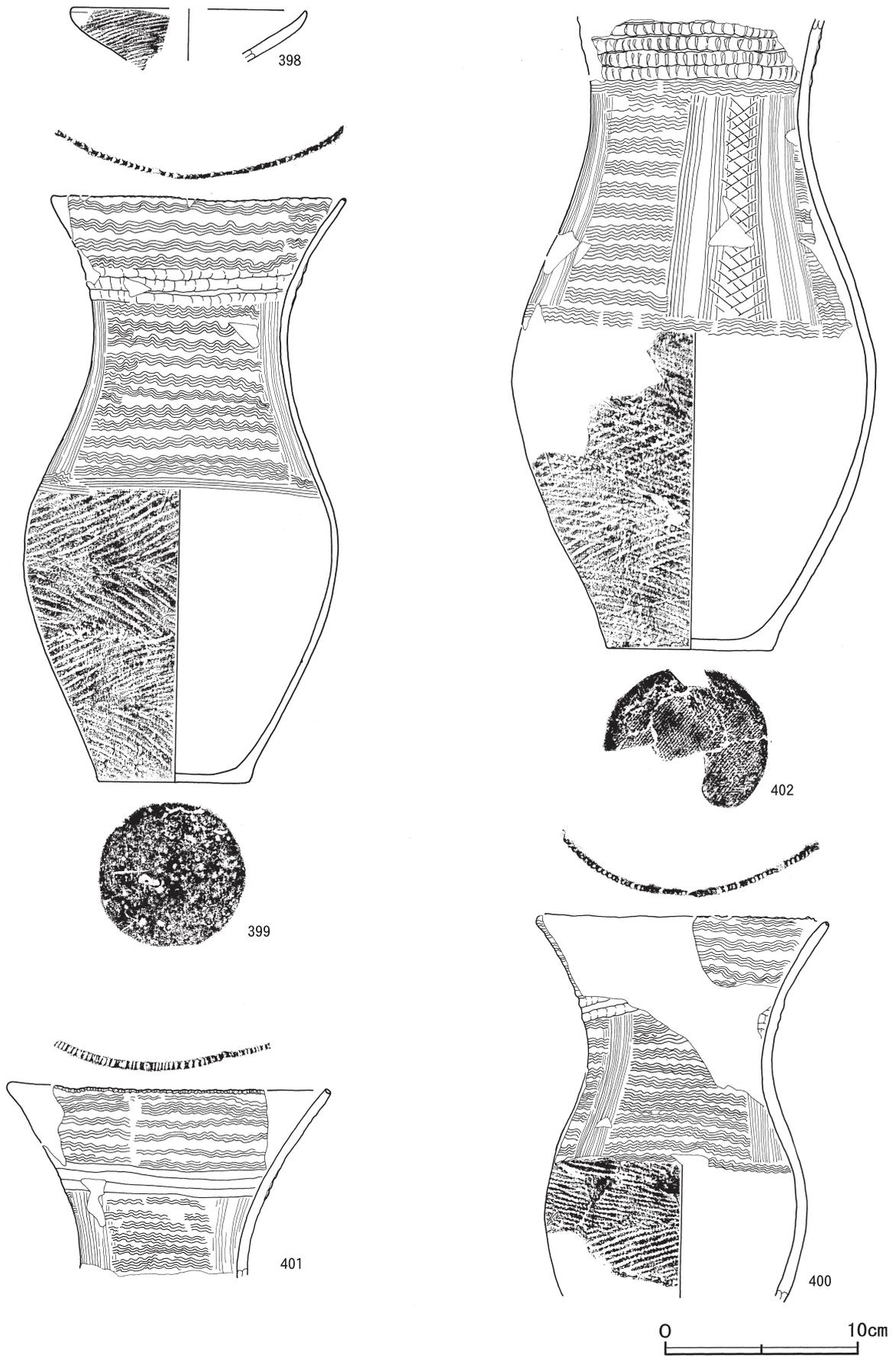
第32図 第112号住居跡実測図



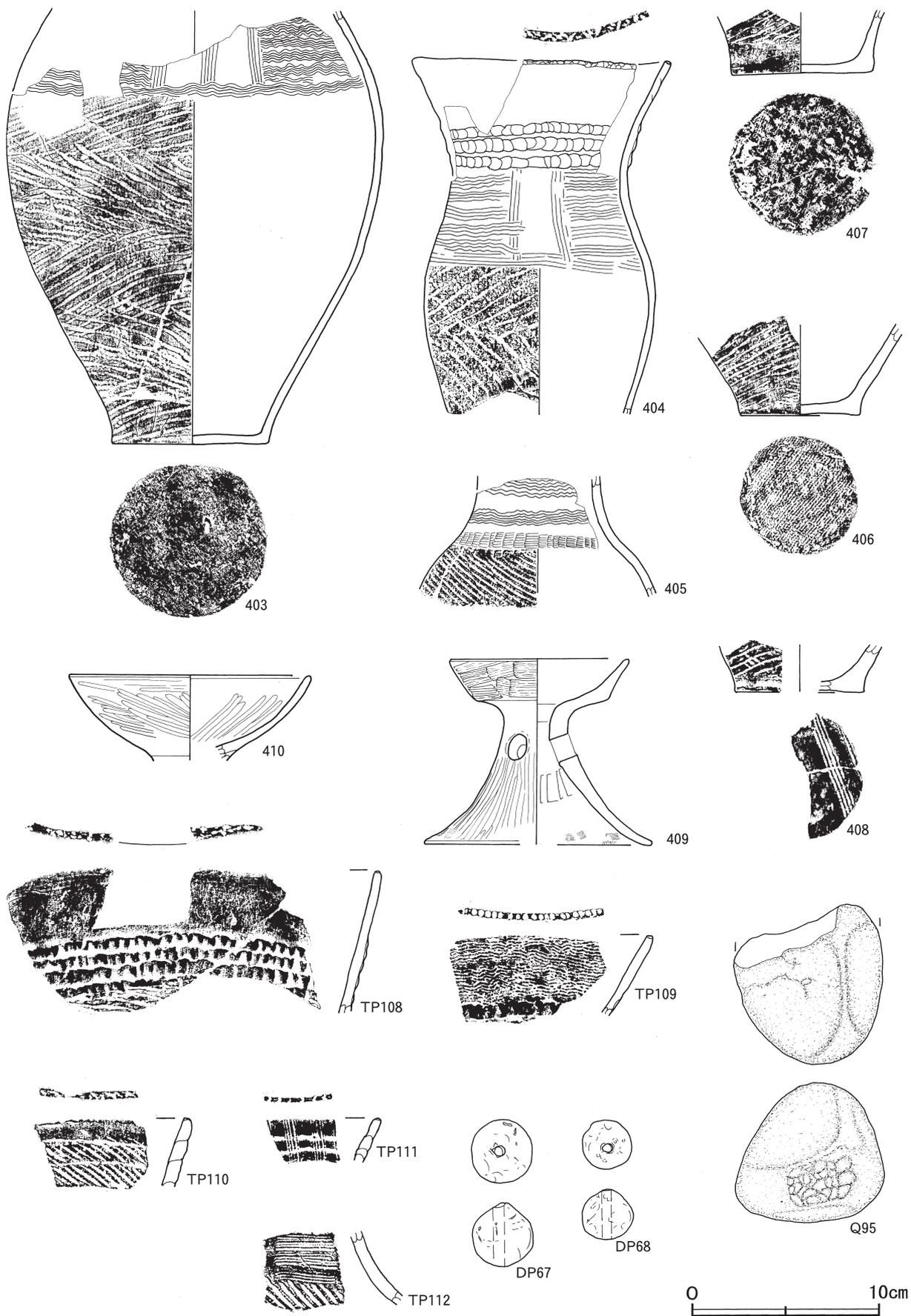
第33图 第112号住居跡出土遺物実測図



第34图 第114号住居跡実測図



第35图 第114号住居跡出土遺物実測図(1)



第36图 第114号住居跡出土遺物実測図(2)

第114号住居跡出土遺物観察表(第35・36図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色 調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備 考
398	弥生土器	高坏	[12.2]	(2.7)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部に附加条一種(附加2条)の縄文	覆土中	5%
399	弥生土器	広口壺	[15.4]	31.0	7.9	長石・石英・雲母	灰黄褐	良好	口唇部に刻み 口辺部に櫛歯状工具(4本)による波状文 頸部上位に軽い押圧のある隆帯3条 櫛歯状工具による4条一単位の縦区画(3分割)内に波状文充填 頸部下位に波状文と直状文 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部布目痕	床面	80% 胴部外面に煤付着 内面炭化物付着 PL18
400	弥生土器	広口壺	15.4	(20.1)	—	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口唇部に刻み 口辺部に櫛歯状工具(4本)による波状文 頸部上位に軽い押圧のある隆帯3条 櫛歯状工具による3条一単位の縦区画(4分割)内に波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成	覆土下層	60% 頸部外面煤付着
401	弥生土器	広口壺	[16.4]	(10.0)	—	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部に刻み 口辺部に櫛歯状工具(5本)による波状文 頸部上位に沈線を巡らし隆帯3条を表出 櫛歯状工具による3条一単位の縦区画(3分割以上)内に波状文充填	覆土中	10%
402	弥生土器	広口壺	—	(33.3)	8.8	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	頸部上位に半截竹管による刺突のある隆帯4条 櫛歯状工具(5本)による縦区画(2分割以上)され、ヘラ状工具による格子状文施文 区画内に波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部布目痕	覆土中層	40% 頸部外面煤付着 内面炭化物付着 PL18
403	弥生土器	広口壺	—	(23.4)	8.3	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	櫛歯状工具(5本)による3条一単位の縦区画(2分割以上)内に波状文充填 頸部下位に波状文 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部布目痕	覆土下層	40% 頸部・胴部 外面煤付着
404	弥生土器	広口壺	[13.3]	(19.1)	—	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部に原体押圧 口辺部無文 頸部上位に軽い押圧のある隆帯3条 櫛歯状工具(4本)による縦区画(4分割)内に波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成	覆土上層 ～下層	40% 口辺部外面煤付着 PL20
405	弥生土器	広口壺	—	(6.4)	—	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	頸部に櫛歯状工具(6本)による波状文 頸部下位に糜状文 胴部に附加条一種(附加2条)の縄文	覆土中	5%
406	弥生土器	広口壺	—	(4.9)	6.2	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部布目痕	床面	5%
407	弥生土器	広口壺	—	(3.3)	7.5	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 胴部下端横ナデ 底部布目痕	覆土中層	5%
408	弥生土器	広口壺	—	(2.6)	[7.0]	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部布目痕、原体による圧痕	覆土中	5%
409	土師器	器台	9.5	10.0	[12.2]	長石・石英・雲母	橙	普通	坏部外面ハケ目調整 内面ナデ 脚部外面ヘラ磨き 脚部内面ハケ目調整後ヘラナデ、ナデ 3窓	覆土中	60%
410	土師器	高坏	12.8	(4.6)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	坏部内・外面ヘラ磨き	覆土中層 ～下層	50%
TP108	弥生土器	広口壺	—	(7.6)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部に原体押圧 頸部上位に押圧のある隆帯4条 頸部に附加条二種(附加1条)施文	覆土下層	5%
TP109	弥生土器	広口壺	—	(4.3)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部に棒状工具による押圧 口辺部に櫛歯状工具(4本)による波状文 頸部上位に押圧のある隆帯	覆土中	5%
TP110	弥生土器	広口壺	—	(3.7)	—	長石・石英・雲母	明褐	普通	口唇部に原体押圧 口辺部に附加条一種(附加2条)施文 輪積み痕	覆土中	5% PL39
TP111	弥生土器	広口壺	—	(2.4)	—	長石・石英・雲母	明褐	普通	口唇部に原体押圧 口辺部に櫛歯状工具(5本)による縦区画 輪積み痕	覆土中	5%
TP112	弥生土器	広口壺	—	(4.0)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	頸部下位に櫛歯状工具(4本)による直状文 胴部に附加条一種(附加2条)施文	覆土中	5% PL39

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
DP67	球状土錘	3.4	0.6	3.4	32.4	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土上層	
DP68	球状土錘	2.7	0.5~0.6	2.7	20.1	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q95	敲石	(8.6)	7.8	7.5	(544.9)	石英斑岩	敲打痕1か所 火を受けて赤変	覆土中	

第134号住居跡(第37~39図)

位置 調査区西部のD 8 d0区で、標高14mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第133号住居、第1・2号掘立柱建物、第6号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による削平を受けているため遺構全体の確認はできなかったが、長軸6.62m、短軸2.32mほどが確認され、炉や柱穴の位置などから判断して、N-29°-Wを主軸方向とする隅丸方形または隅丸長方形と推定される。確認された壁高は8~12cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦と推定され、北側コーナー付近の一部が踏み固められている。

炉 柱穴との位置関係から、中央部のやや北東寄りに位置していると考えられ、長径82cm、短径は38cmほどが確認された。形状は楕円形と推定され、床面を8cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面に赤変硬化は確認できなかった。

炉土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 3か所。P1・P2は深さ32~49cmで, 配置から主柱穴と考えられる。P3の性格は不明である。

覆土 3層に分層される。覆土はわずかではあるが, ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

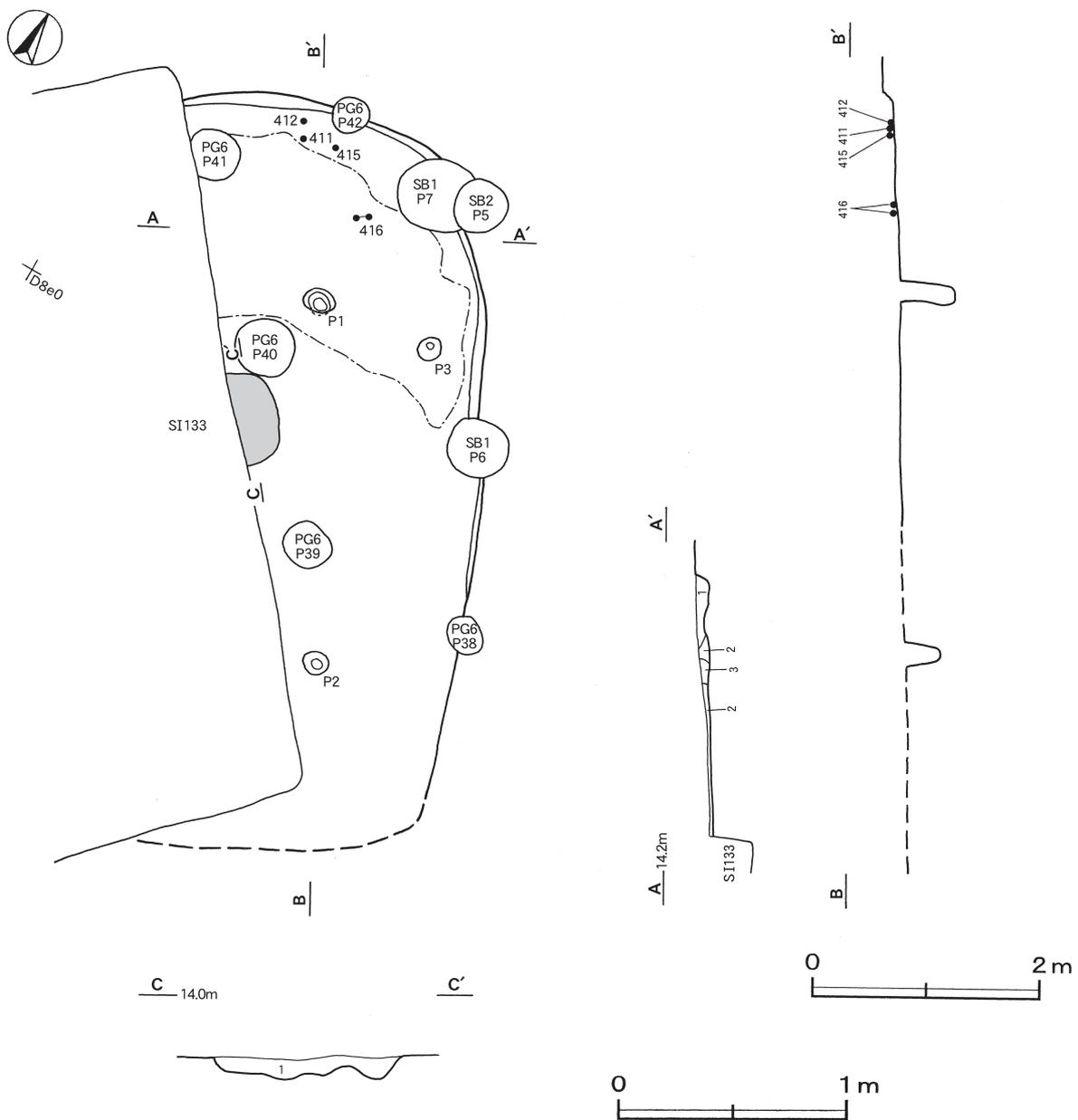
1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

3 黒色 ローム粒子・炭化粒子微量

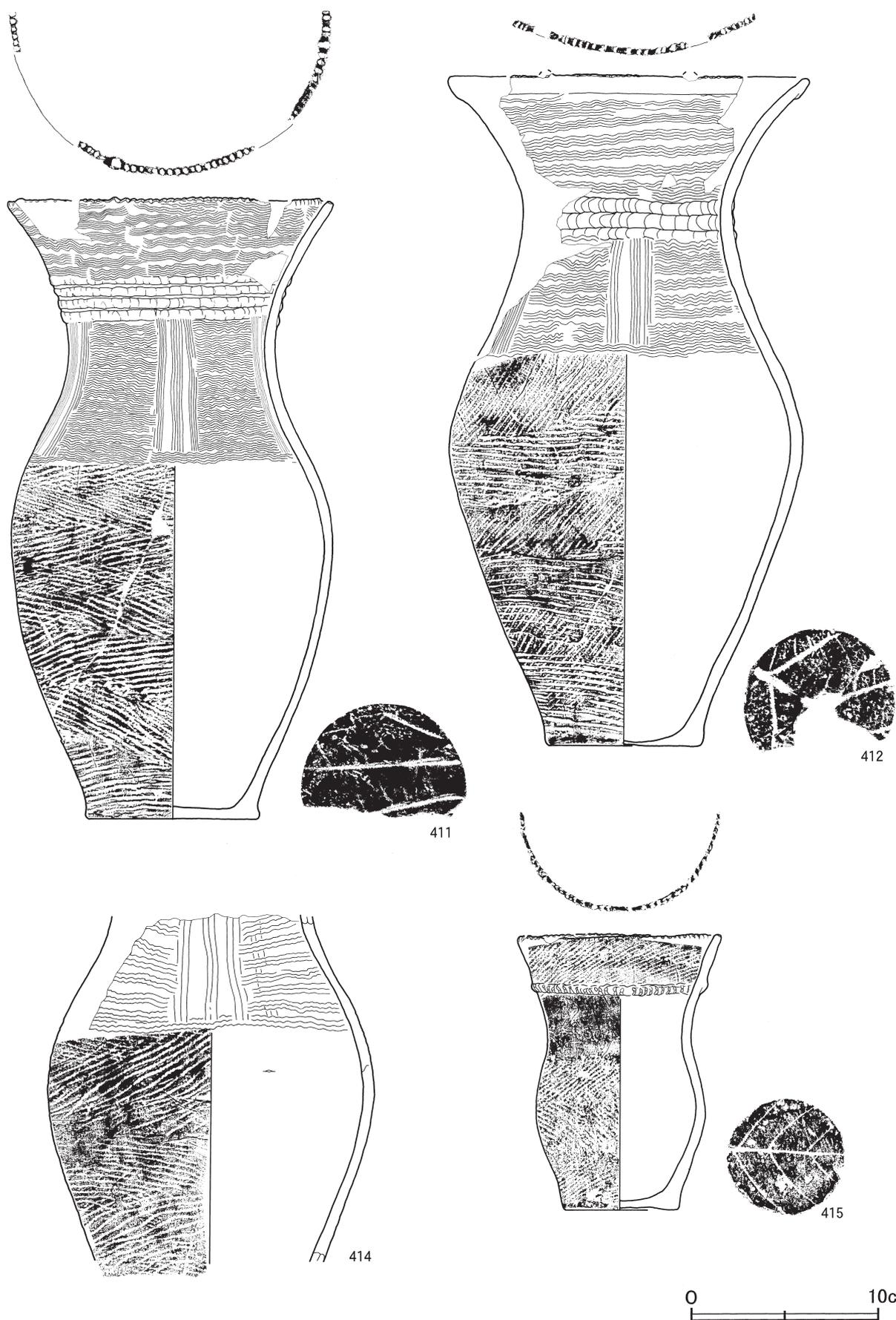
2 極暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片51点 (広口壺), 礫1点が出土している。411・412・415・416は北側コーナー寄りの床面からそれぞれ出土している。

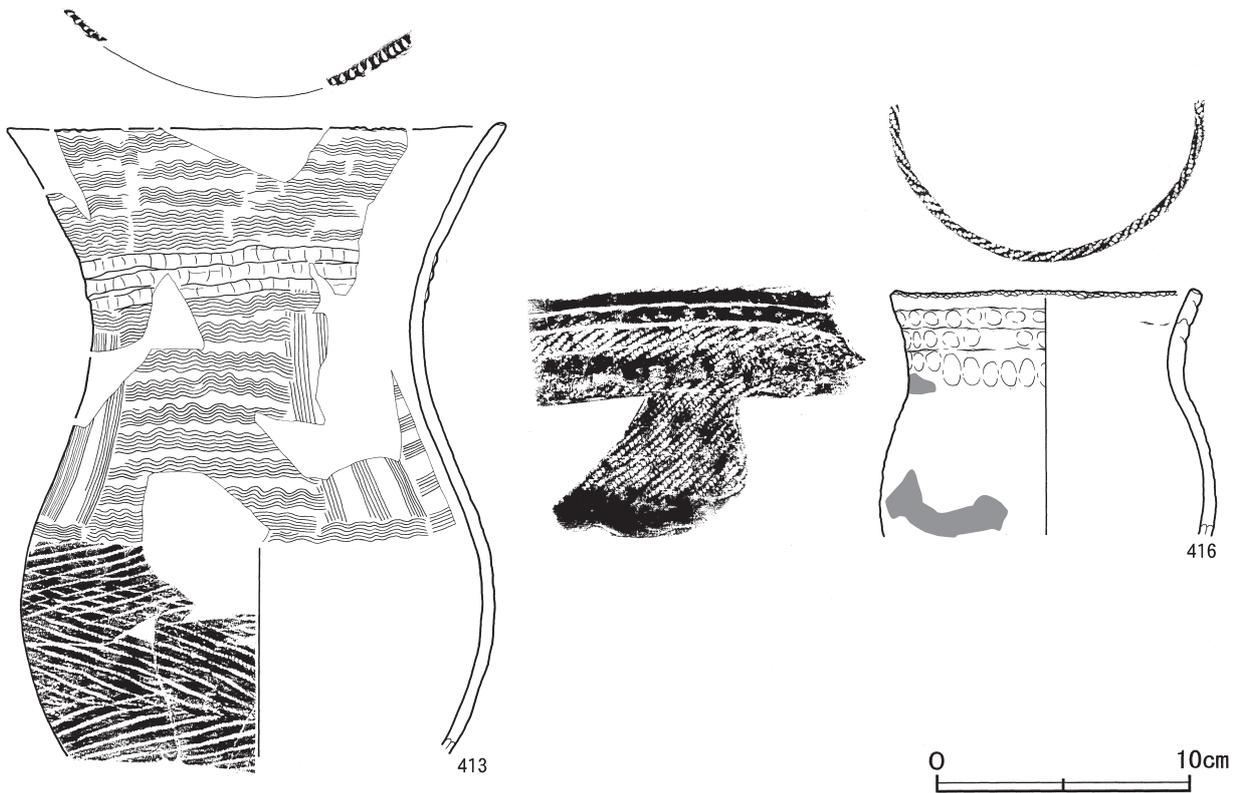
所見 時期は, 出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第37図 第134号住居跡実測図



第38图 第134号住居跡出土遺物実測図(1)



第39図 第134号住居跡出土遺物実測図(2)

第134号住居跡出土遺物観察表(第38・39図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
411	弥生土器	広口壺	17.2	33.4	9.0	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口唇部に刻み 口辺部に櫛歯状工具(5本)による波状文 頸部上位に軽い押圧のある隆帯4条 櫛歯状工具による3条一単位の縦区画(5分割)内に波状文充填 胴部に附加条一種(附加2条)の羽状構成 底部木葉痕	床面	60% 頸部・胴部外面煤付着 内面炭化物付着 PL18
412	弥生土器	広口壺	36.0	[19.0]	8.0	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口唇部に刻み 小突起(2単位以上) 複合口縁 口辺部に櫛歯状工具(4本)による波状文 頸部上位に軽い押圧のある隆帯3条 櫛歯状工具により3条一単位の縦区画(3分割以上)内に波状文充填 胴部に附加条一種(附加2条)の羽状構成 底部木葉痕	床面	50% 頸部・胴部外面煤付着 内面炭化物付着 PL18
413	弥生土器	広口壺	[19.8]	(25.2)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部に刻み 口辺部に櫛歯状工具(6本)による波状文 頸部上位に軽い押圧のある隆帯3条 櫛歯状工具による3条一単位の縦区画(3分割以上)内に波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の縄文	覆土中	35% 頸部外面煤付着 PL18
414	弥生土器	広口壺	—	(18.6)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	櫛歯状工具(3本)による3条一単位の縦区画内に波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 羽状構成 輪積痕	覆土中	10% 頸部・胴部外面煤付着 内面炭化物付着
415	弥生土器	広口壺	10.8	14.8	6.1	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口唇部に原体押圧 複合口縁 口辺部に附加条一種(附加2条)の縄文 下端に縄文原体による刺突 頸部無文 胴部に附加条一種(附加2条)の縄文 羽状構成 底部木葉痕	床面	100% 口辺部・頸部外面煤付着 PL23
416	弥生土器	広口壺	11.7	(9.8)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口唇部に原体押圧 口辺部内・外面横ナデ 輪積み痕 口辺部に下端から胴部上位にかけてLRの単節縄文 内面丁寧なナデ 輪積痕	床面	10% 頸部・胴部外面煤付着 PL21

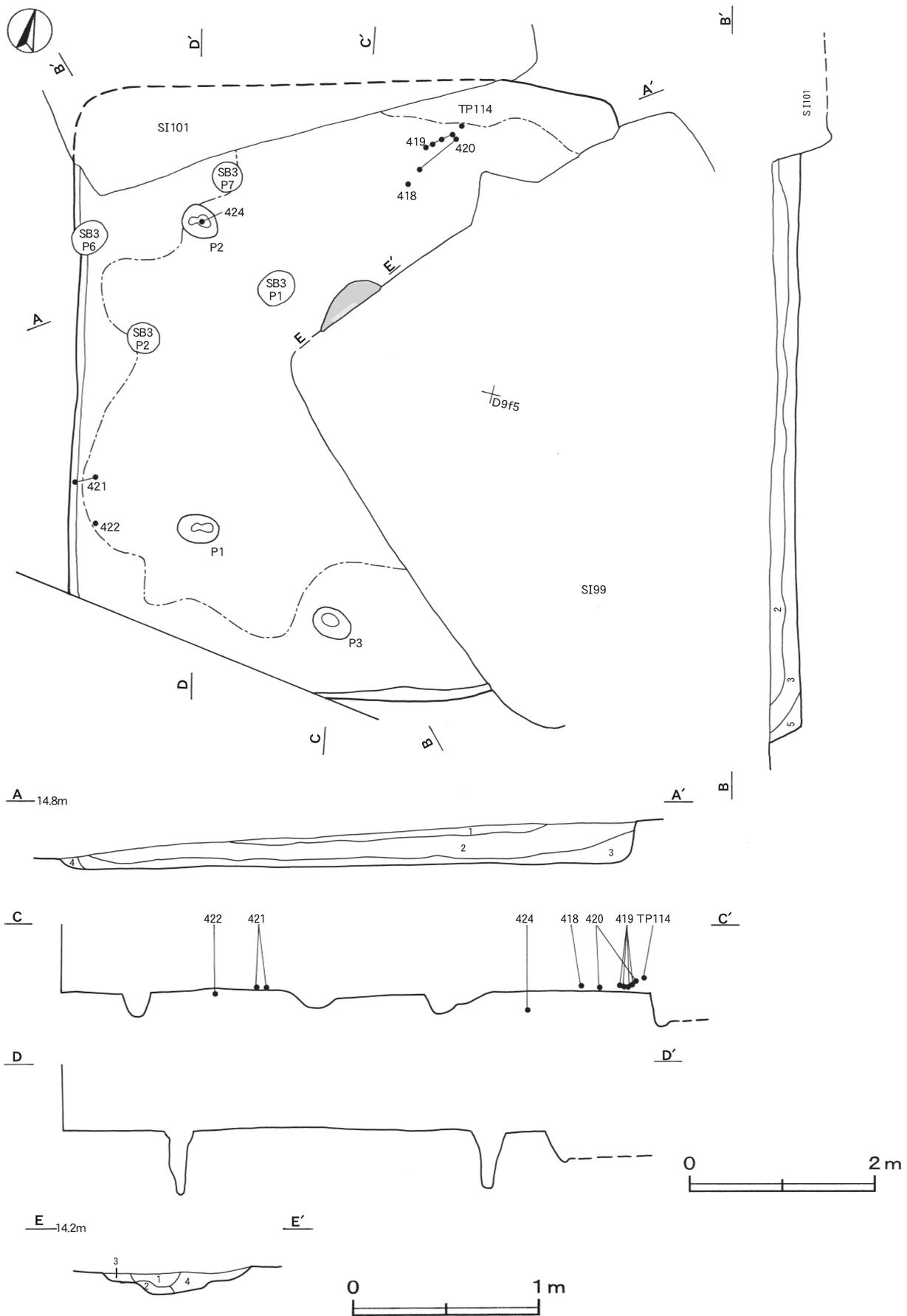
第137号住居跡(第40～42図)

位置 調査区西部のD 9 e4区で、標高14.4mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第99・101号住居、第3号掘立柱建物、第21号墓坑に掘り込まれている。

規模と形状 南側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、長軸6.50m、短軸5.86mほどが確認され、検出された炉や柱穴の位置などから判断して、N-8°-Wを主軸方向とする隅丸長方形と推定される。確認された壁高は12～46cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。



第40图 第137号住居跡実測図

炉 柱穴との位置関係から、中央部のやや北寄りに位置していると考えられ、一部が確認されたのみである。形状は楕円形と推定され、床面を11cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|-------------------------|----------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 3 黒褐色 炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 赤褐色 焼土ブロック中量 | 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量 |

ピット 3か所。P1・P2は深さ62~66cmで、配置から支柱穴と考えられる。P3は深さ24cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

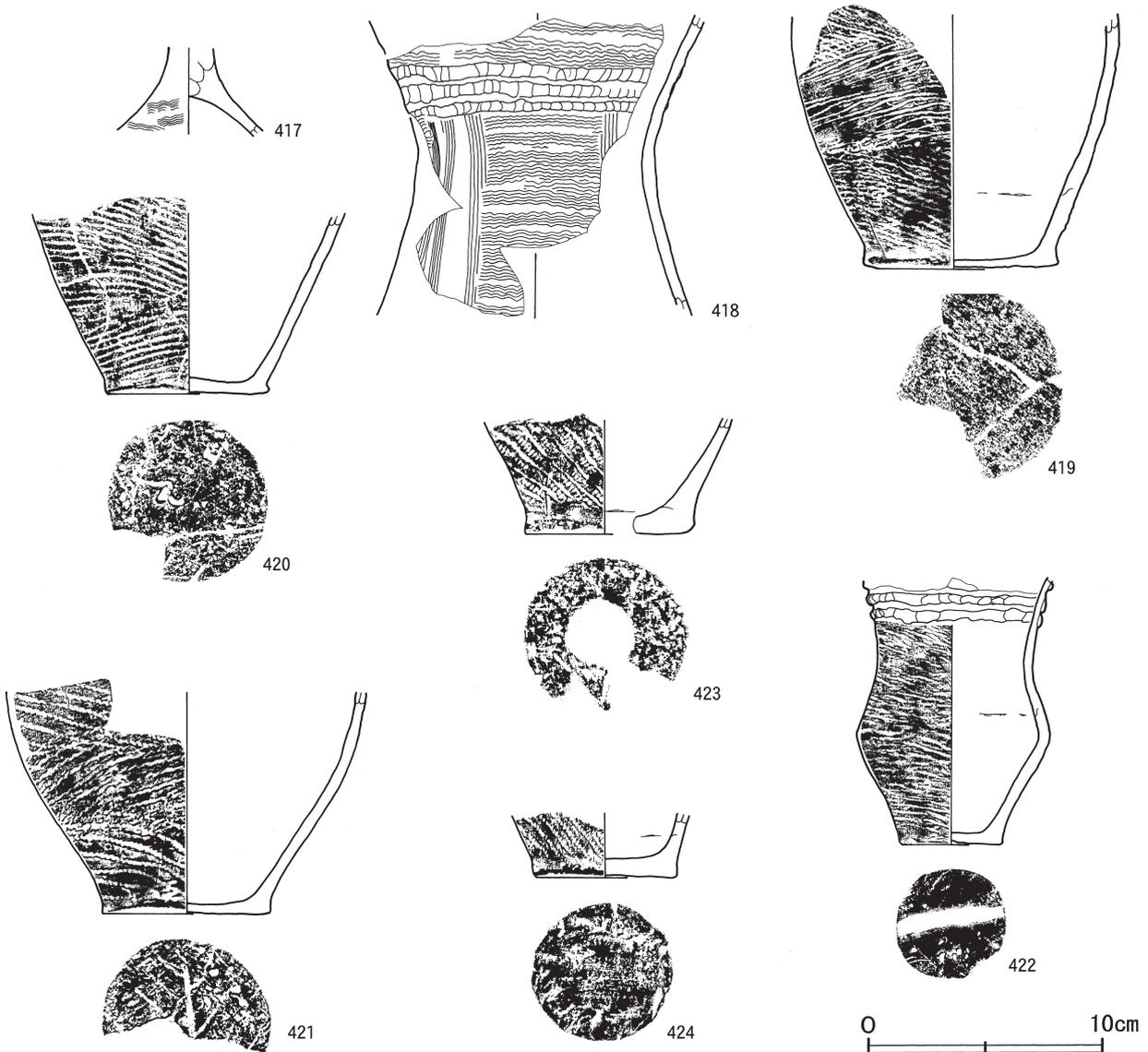
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|--------------------------|---------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 ローム粒子少量 |
| 3 極暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 弥生土器片269点(広口壺), 礫1点の他に、混入した土師器片23点も出土している。421・422は、西側壁付近の床面から出土し、424はP1の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第41図 第137号住居跡出土遺物実測図(1)



第42図 第137号住居跡出土遺物実測図(2)

第137号住居跡出土遺物観察表(第41・42図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
417	弥生土器	高坏	-	(3.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	脚部外面櫛歯状工具(5本)による波状文 内面ナデ	覆土中	5%
418	弥生土器	広口壺	-	(12.9)	-	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口辺部に櫛歯状工具(5本)による波状文 頸部上位に軽い押圧のある隆帯3条 櫛歯状工具による3条一単位の縦区画内に波状文充填	覆土下層	5% 頸部外面煤付着
419	弥生土器	広口壺	-	(10.9)	[8.4]	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 輪積痕 底部砂目痕	覆土下層	30%
420	弥生土器	広口壺	-	(7.7)	7.0	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部布目痕を疑似木葉痕に調整	覆土下層	20% 内面炭化物付着
421	弥生土器	広口壺	-	(9.5)	7.2	長石・石英・雲母	暗褐色	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部木葉痕	床面	15% 内面炭化物付着
422	弥生土器	広口壺	-	(11.6)	4.4	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	頸部上位に軽い押圧のある隆帯3条以上 頸部から胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 輪積痕 底部削り	床面	90% 頸部外面煤付着 PL23
423	弥生土器	広口壺	-	(4.9)	6.8	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 輪積痕 底部砂目痕 底部焼成後穿孔	覆土中	10% 内面炭化物付着
424	弥生土器	広口壺	-	(2.8)	6.0	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 輪積痕 底部木葉痕をナデ調整	P1中層	10%
TP13	弥生土器	高坏カ	-	(3.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	脚部下端櫛歯状工具(3本)による波状文	覆土中	5%
TP14	弥生土器	高坏カ	-	(2.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	脚部下端櫛歯状工具(3本)による波状文	覆土下層	5%
TP15	弥生土器	広口壺	-	(4.4)	-	長石・石英・雲母	褐色	普通	口唇部に刻み 口辺部に櫛歯状工具(6本)による波状文 頸部上位にへら状工具による押圧のある隆帯	覆土中	5%
TP16	弥生土器	広口壺	-	(4.2)	-	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	口唇部に原体押圧 口辺部に附加条一種(附加2条)施文 羽状構成 頸部上位に縄文原体による刺突	覆土中	5%
TP17	弥生土器	広口壺	-	(4.4)	-	長石・石英・雲母	暗褐色	普通	口唇部に原体押圧 頸部上位に附加条一種(附加2条)施文	覆土中	5%

第141号住居跡(第43図)

位置 調査区中央部のD10e0区で、標高23.4mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第142号住居、第186・187号土坑、第7号溝に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による削平が激しく、遺構全体の確認はできなかったが、検出された炉や柱穴の位置などからN-8°-Wを主軸方向とする、一辺が5.00mほどの隅丸方形と推定される。確認された壁高は5cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦であったと考えられ、炉跡南東部が踏み固められているのが確認された。

炉 柱穴との位置関係から、中央部に位置していると考えられる。形状は楕円形と推定され、長径68cm、短径50cmが確認され、床面を9cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 4 暗赤褐色 焼土粒子少量、炭化粒子微量 |

ピット 4か所。深さは48~64cmで、配置から主柱穴と考えられる。

覆土 単一層であるため、堆積状況は不明である。

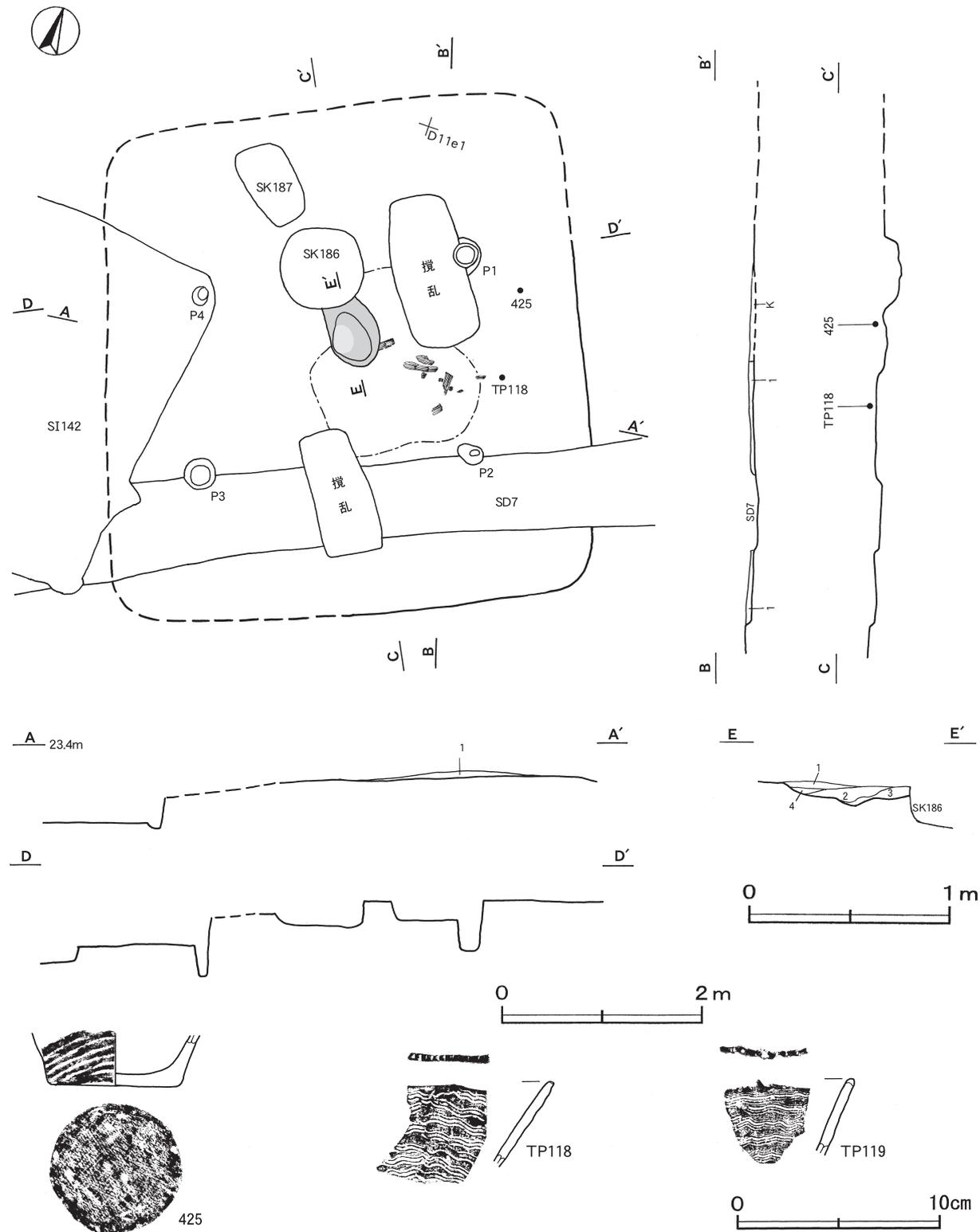
土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量

遺物出土状況 弥生土器片13点(広口壺)が出土している。425は床面から出土している。また、床面から焼土とともに炭化材が出土していることから、焼失住居と考えられるが、火を受けて赤変した床面や焼土を確認

することはできなかった。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器と遺構の形状から弥生時代後期後半と考えられる。また、炭化材の科学分析の結果、樹種はケヤキ、カヤ、コハダの3種類が認められ、丸材であることが判明している。これらは住居構築材であると考えられるが、同様に炭化材樹種同定を行った第143・156号住居跡と樹種が異なっており、住居・部材などにより樹種利用が異なっている可能性が指摘されている。



第43図 第141号住居跡・出土遺物実測図

第141号住居跡出土遺物観察表(第43図)

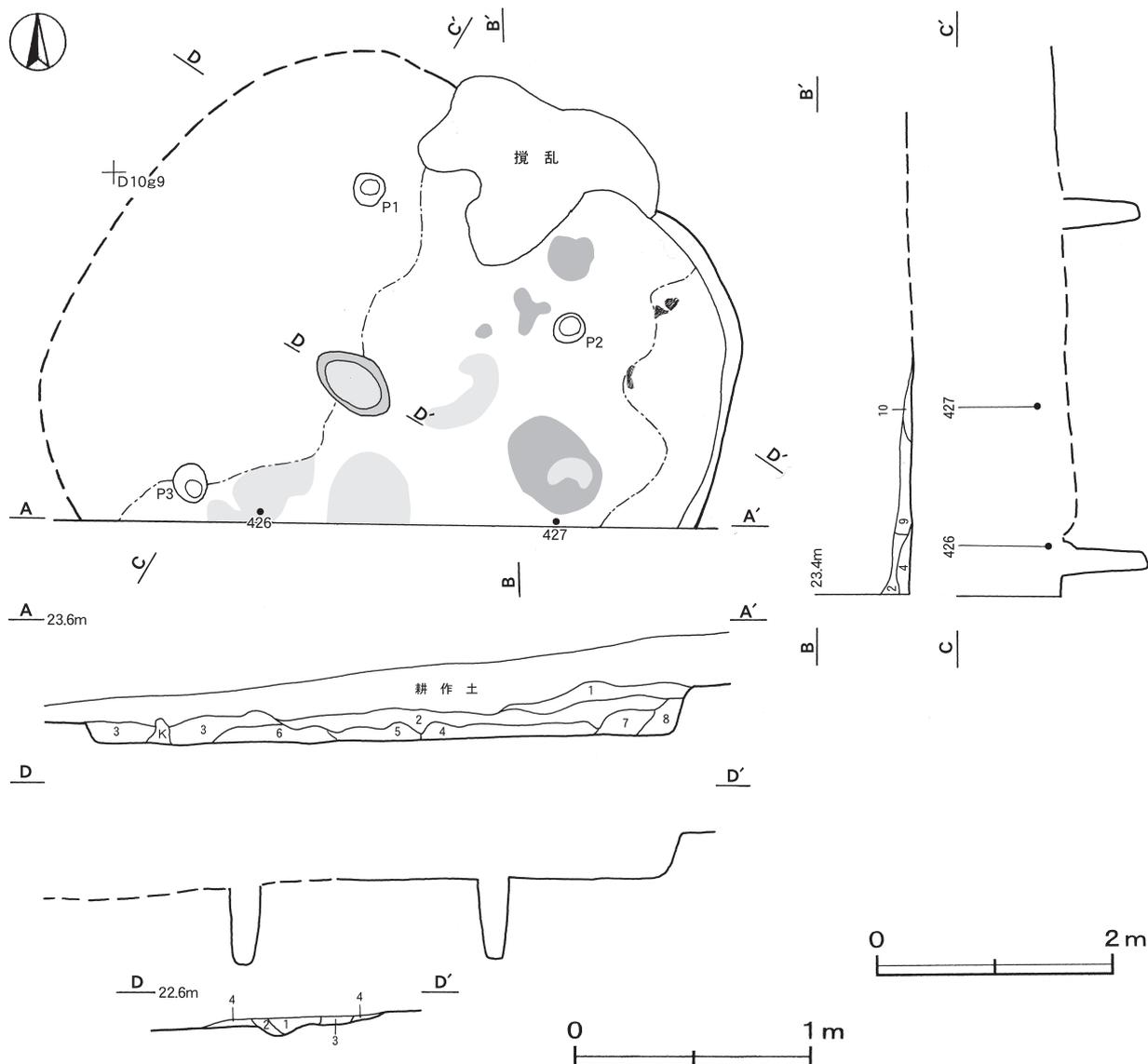
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
425	弥生土器	広口壺	-	(2.6)	6.6	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部布目痕	床面	10%
TP18	弥生土器	広口壺	-	(4.2)	-	長石・石英・雲母	褐	普通	口唇部に刻み 口辺部櫛歯状工具(4本)による波状文	覆土下層	5%
TP19	弥生土器	広口壺	-	(3.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部に刻み 小突起 口辺部櫛歯状工具(6本)による波状文	覆土中	5%

第143号住居跡 (第44・45図)

位置 調査区中央部のD10g9区で、標高23mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 南側は調査区域外へ延び、さらに耕作による削平を受けているため長軸5.60m、短軸4.70mほどが確認された。検出された床面の広がりや炉の配置、柱穴の位置関係などから判断して、N-50°-Wを主軸方向とする隅丸長方形と推定される。確認された壁高は20~45cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦と推定され、南東側が踏み固められている。



第44図 第143号住居跡実測図

炉 柱穴との位置関係から、中央部のやや北西寄りに位置していると考えられ、長径73cm、短径45cmの楕円形で、床面を14cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック微量 | 3 極暗赤褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 オリーブ褐色 粘土ブロック少量, 焼土粒子微量 | 4 にぶい黄褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック微量 |

ピット 3か所。深さ67~72cmで、配置から支柱穴と考えられる。

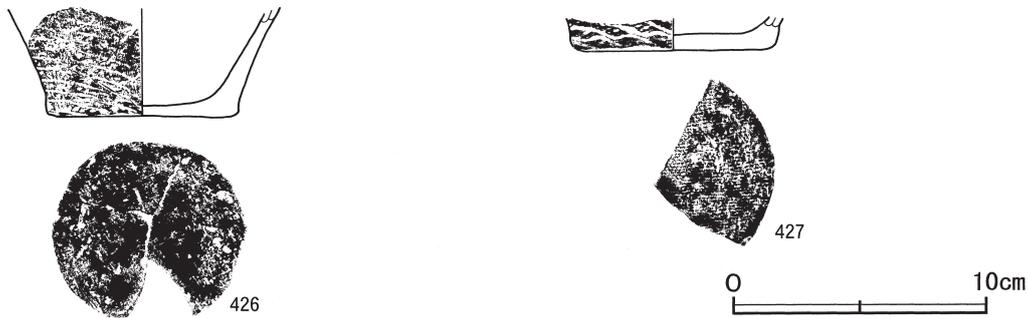
覆土 10層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------------------------------------|-------------------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量 | 7 暗褐色 炭化物・ローム粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化物・焼土粒子・鹿沼パミス微量 | 8 黒褐色 焼土ブロック・炭化物少量, ローム粒子・鹿沼パミス微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量, 焼土ブロック・鹿沼パミス微量 | 9 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子・鹿沼パミス微量 |
| 4 暗褐色 炭化粒子中量, ローム粒子少量, 焼土ブロック微量 | 10 黒褐色 炭化粒子中量, ローム粒子・焼土粒子・鹿沼パミス微量 |
| 5 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化物・焼土粒子微量 | |
| 6 極暗褐色 炭化物少量, ローム粒子・焼土粒子・鹿沼パミス微量 | |

遺物出土状況 弥生土器片92点（広口壺）が出土している。426・427は覆土下層からそれぞれ出土している。また、床面から焼土とともに炭化材が出土しており、床面には火を受けて赤変した部分を確認され、焼失住居である可能性が高い。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器と遺構の形状から弥生時代後期後半と考えられる。また、炭化材の科学分析の結果、樹種はカヤで、丸材であることが判明している。これらは住居構築材であると考えられるが、同様に炭化材樹種同定を行った第141・156号住居跡と樹種が異なっており、住居・部材などにより樹種利用が異なっている可能性が指摘されている。



第45図 第143号住居跡出土遺物実測図

第143号住居跡出土遺物観察表(第45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
426	弥生土器	広口壺	-	(4.3)	7.6	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部調整 内面剥離	覆土下層	10%
427	弥生土器	広口壺	-	(1.3)	[8.0]	長石・雲母	灰黄褐	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部布目痕	覆土下層	5% 内面炭化物付着

第148号住居跡（第46図）

位置 調査区中央部のD11j9区で、標高23.6mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第146号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北東側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、東西長3.40m、南北長3.70mほどが確認された。平面形は隅丸方形または隅丸長方形と推定され、検出された壁から想定して、主軸方向はN-44°-Wと考えられる。壁高は14cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、南東壁から中央部にかけてが踏み固められているのが確認できた。

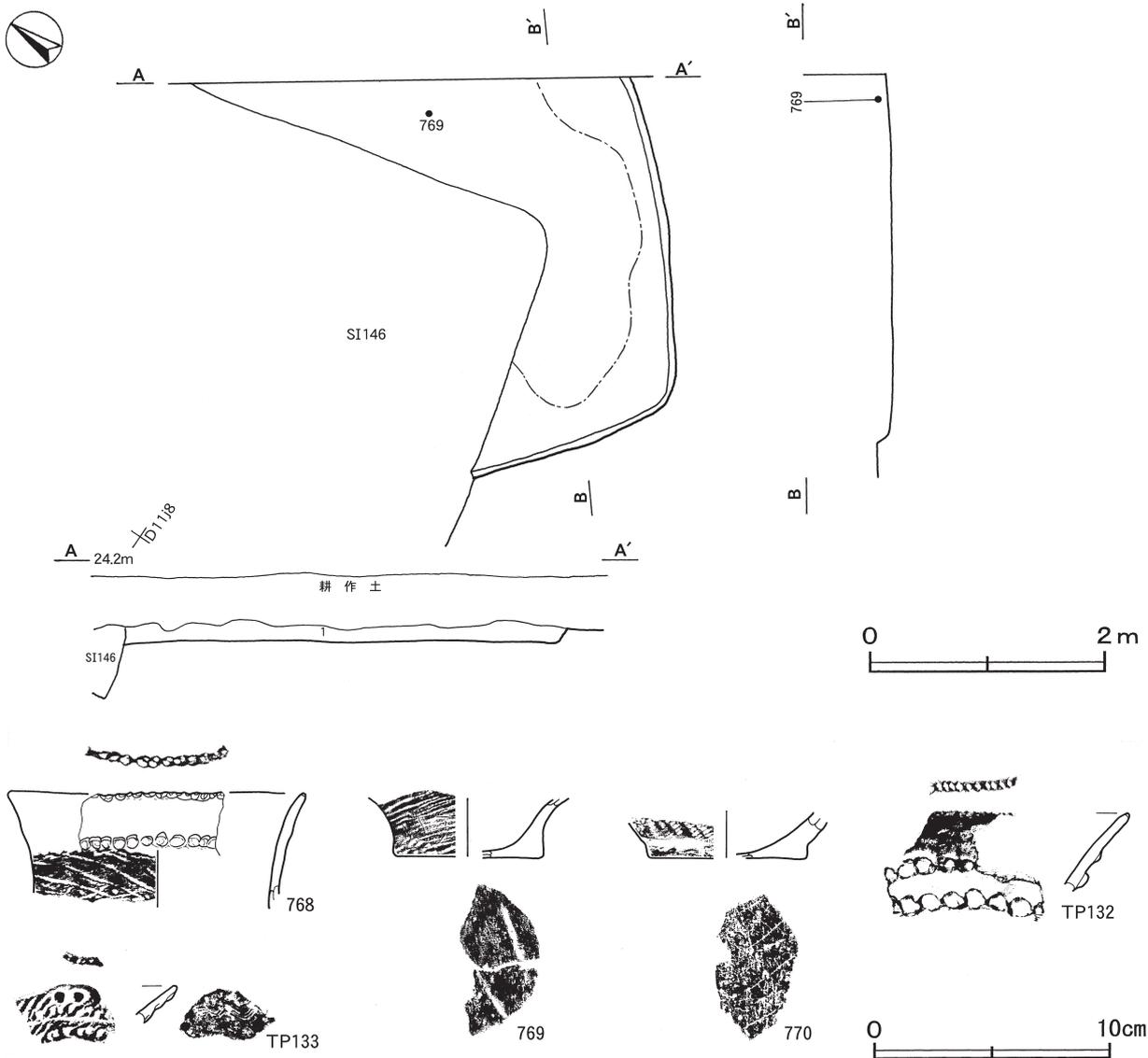
覆土 単一層で、堆積状況は不明である。

土層解説

1 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片58点（広口壺，礫1点）が出土している。769は南東側の覆土下層から出土している。

所見 遺構の大部分を第146号住居に掘り込まれているため、炉跡や柱穴を確認することができなかった。時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第46図 第148号住居跡・出土遺物実測図

第148号住居跡出土遺物観察表(第46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
768	弥生土器	広口壺	[12.4]	(4.9)	—	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	口唇部に原体押圧 口辺部無文 頸部上位に縄文原体による刺突のある隆帯1条 頸部に附加条二種(附加1条)の縄文	覆土中	5%
769	弥生土器	広口壺	—	(2.5)	[6.4]	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部木葉痕を調整	覆土下層	5%
770	弥生土器	広口壺	—	(2.0)	[6.6]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部木葉痕	覆土中	5%
TP132	弥生土器	広口壺	—	(3.4)	—	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口唇部に原体押圧 頸部上位に指頭による押圧のある隆帯2条以上	覆土中	5%
TP133	弥生土器	広口壺	—	(1.5)	—	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部に原体押圧 2段の複合口縁 口辺部にLRの単節縄文施文後、対のボタン状瘤貼り付け 半截竹管による刺突 口辺部内面櫛歯状工具(5本)による波状文	覆土中	5% PL38

第149号住居跡（第47図）

位置 調査区中央部のD11j7区で、標高23.6mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第146号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南西側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、東西長1.30m、南北長5.90mほどが確認された。平面形は隅丸方形または隅丸長方形と推定され、検出された壁から想定して、主軸方向はN-53°-Wと考えられる。壁高は16cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、北東壁際が踏み固められているのが確認できた。

覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

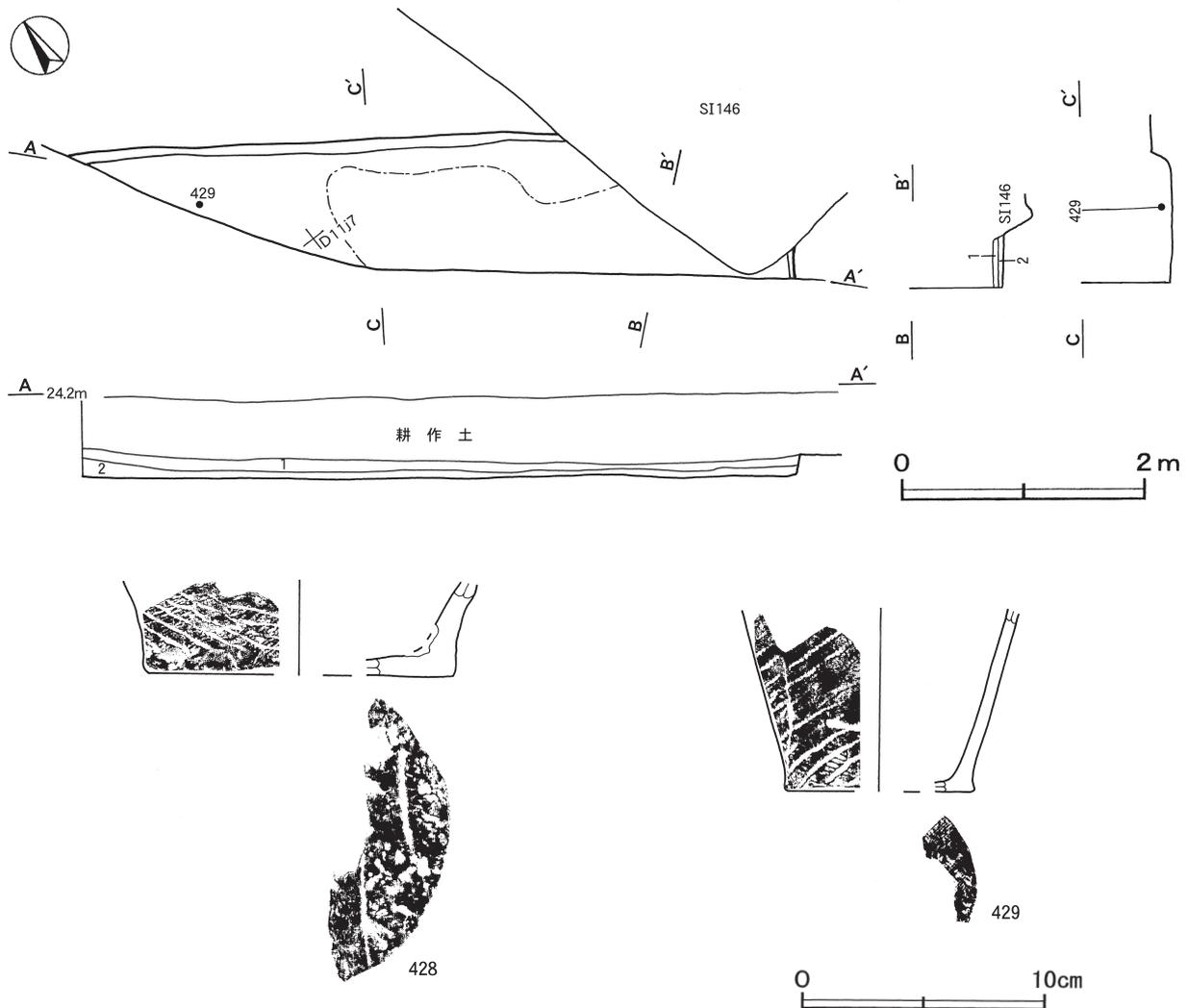
土層解説

1 極暗褐色 ロームブロック微量

2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 弥生土器片33点（広口壺）、礫1点が出土している。429は北東側壁付近から出土している。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第47図 第149号住居跡・出土遺物実測図

第149号住居跡出土遺物観察表(第47図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
428	弥生土器	広口壺	-	(3.9)	[12.6]	長石・雲母・赤色 粒子	にぶい橙	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部木葉痕	覆土中	5%
429	弥生土器	広口壺	-	(7.6)	[7.8]	長石・雲母・赤色 粒子	灰黄褐	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部布目痕	覆土下層	5% 内面炭化物 付着

第152号住居跡 (第48・49図)

位置 調査区中央部のD11i0区で、標高23.4mほどの台地平坦部に位置している。

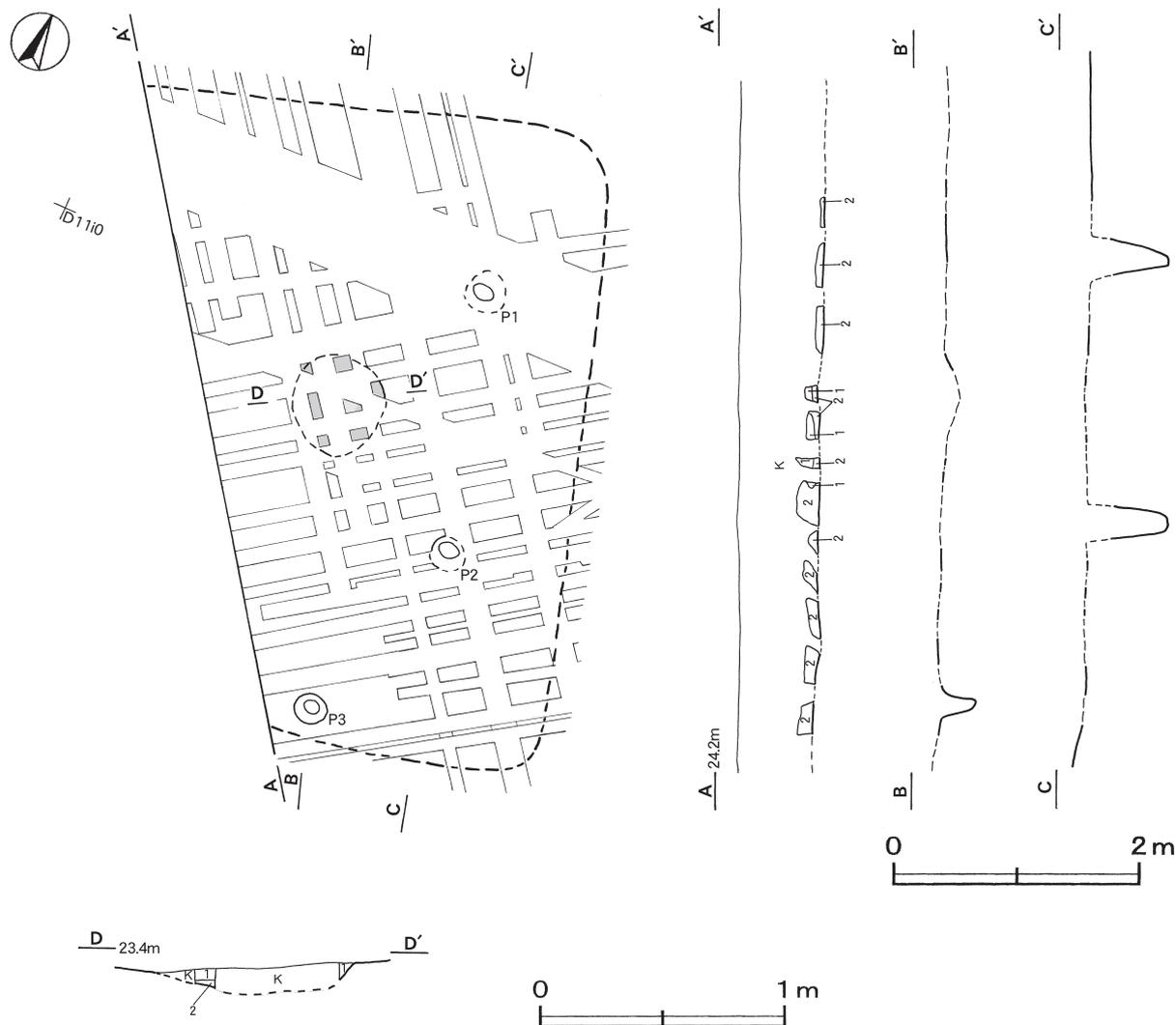
規模と形状 南西側は調査区外へ延びるため遺構全体を確認することができなかった。また、耕作による攪乱のため床面が露出した状態で、長軸5.30m、短軸3.60mほどが確認された。検出された炉や柱穴の位置などから判断して、N-15°-Wを主軸方向とする隅丸長方形と推定される。

床 平坦であったと考えられる。

炉 柱穴との位置関係から、中央部に位置していたと考えられる。長径84cm、短径78cmの楕円形と推定され、床面を11cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量



第48図 第152号住居跡実測図

ピット 3か所。P1～P2は深さ65～67cmで、配置から支柱穴と考えられる。P3は深さ30cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

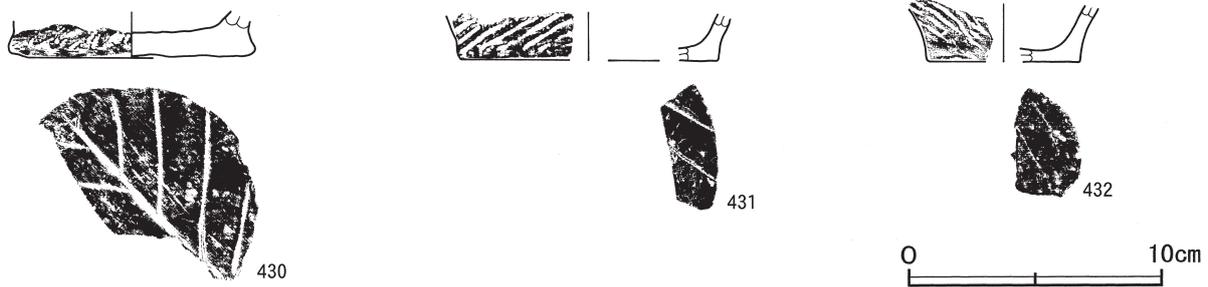
覆土 2層に分層されるが、耕作による攪乱が激しいため堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片71点（広口壺）が出土している。耕作による攪乱が激しく、一部は床下まで達しており、出土した遺物はすべて攪乱の影響を受けている。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器と遺構の形状から弥生時代後期後半と考えられる。



第49図 第152号住居跡出土遺物実測図

第152号住居跡出土遺物観察表(第49図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
430	弥生土器	広口壺	-	(1.8)	[9.8]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部木葉痕	覆土中	5%
431	弥生土器	広口壺	-	(1.9)	[10.2]	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部木葉痕	覆土中	5%
432	弥生土器	広口壺	-	(2.2)	[6.0]	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部木葉痕	覆土中	5%

第153号住居跡（第50図）

位置 調査区中央部のD12h2区で、標高23.4mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 耕作による攪乱のため、床面が露出した状態で、長軸5.10m、短軸4.70mほどが確認された。検出された炉の位置や床面の広がりなどから判断して、N-79°-Wを主軸方向とする隅丸方形と推定される。

床 平坦であったと考えられ、硬化面の一部が確認された。

炉 確認された床面の広がりから、中央部に位置していたと考えられる。確認された径は40cmほどで、楕円形と推定され、床面を16cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

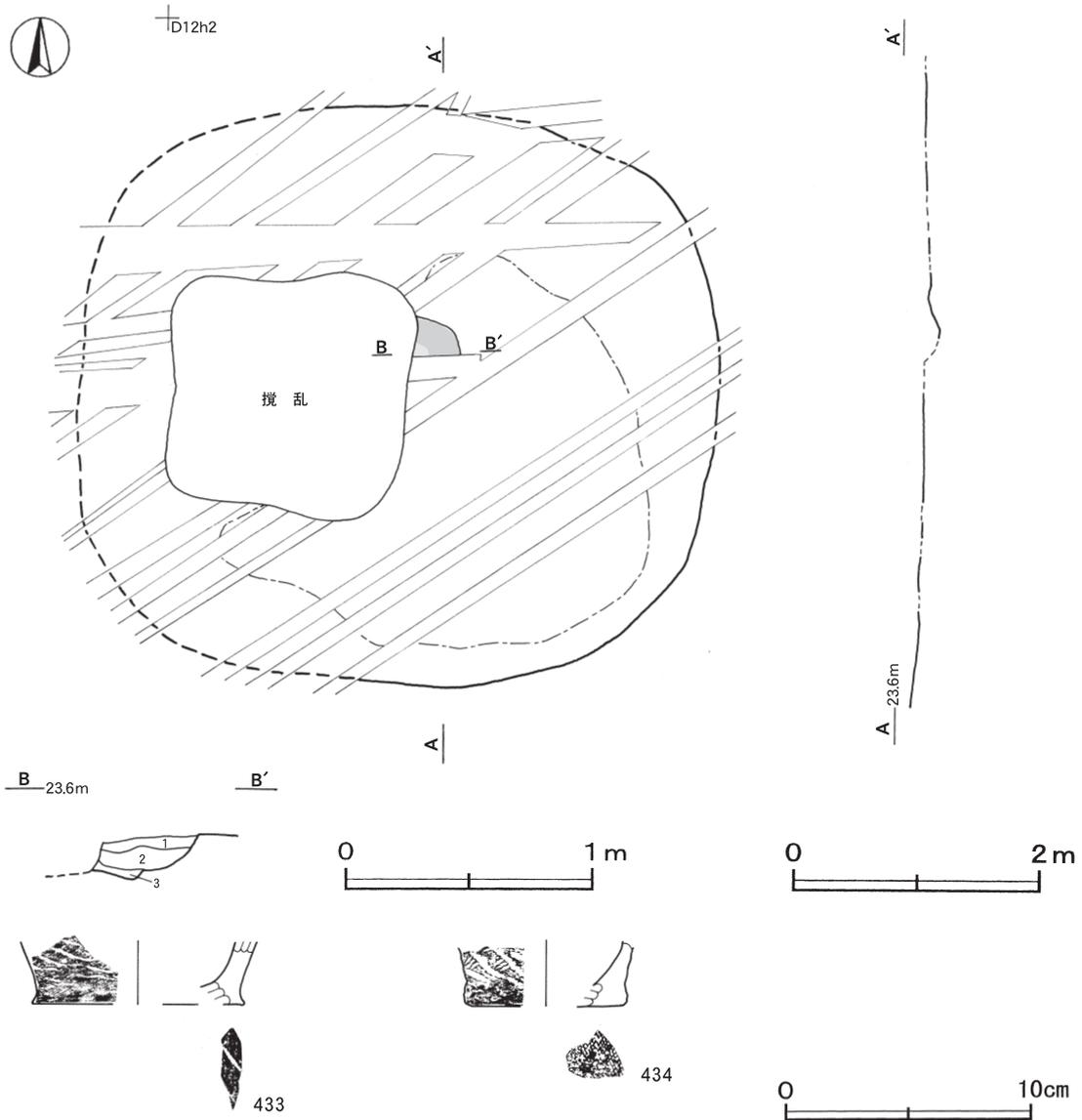
炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子微量
2 黒褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量

覆土 不明である。

遺物出土状況 弥生土器片43点（広口壺）が出土している。耕作による攪乱が激しく、一部は床下まで達しており、出土した遺物はすべて攪乱の影響を受けている。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器と遺構の形状から弥生時代後期後半と考えられる。



第50図 第153号住居跡・出土遺物実測図

第153号住居跡出土遺物観察表(第50図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
433	弥生土器	広口壺	—	(2.6)	[8.6]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部木葉痕	覆土中	5%
434	弥生土器	広口壺	—	(2.7)	[6.6]	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部布目痕	覆土中	5%

第154号住居跡 (第51図)

位置 調査区東部のD12g1区で、標高23.3mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 耕作による攪乱のため、床面が露出した状態で、長軸4.30m、短軸3.90mほどが確認された。検出された床面の広がりや炉の位置などから判断して、N-31°-Eを主軸方向とする隅丸長方形と推定される。

床 平坦であったと考えられ、硬化面の一部が確認された。

炉 確認された床面の広がりから、北西部に位置していると考えられる。長径76cm、短径56cmが確認され、楕円形と推定される。床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉で、炉床面は火を受けて赤変硬化している。砂岩の炉石が炉床のやや東寄りから出土している。

炉土層解説

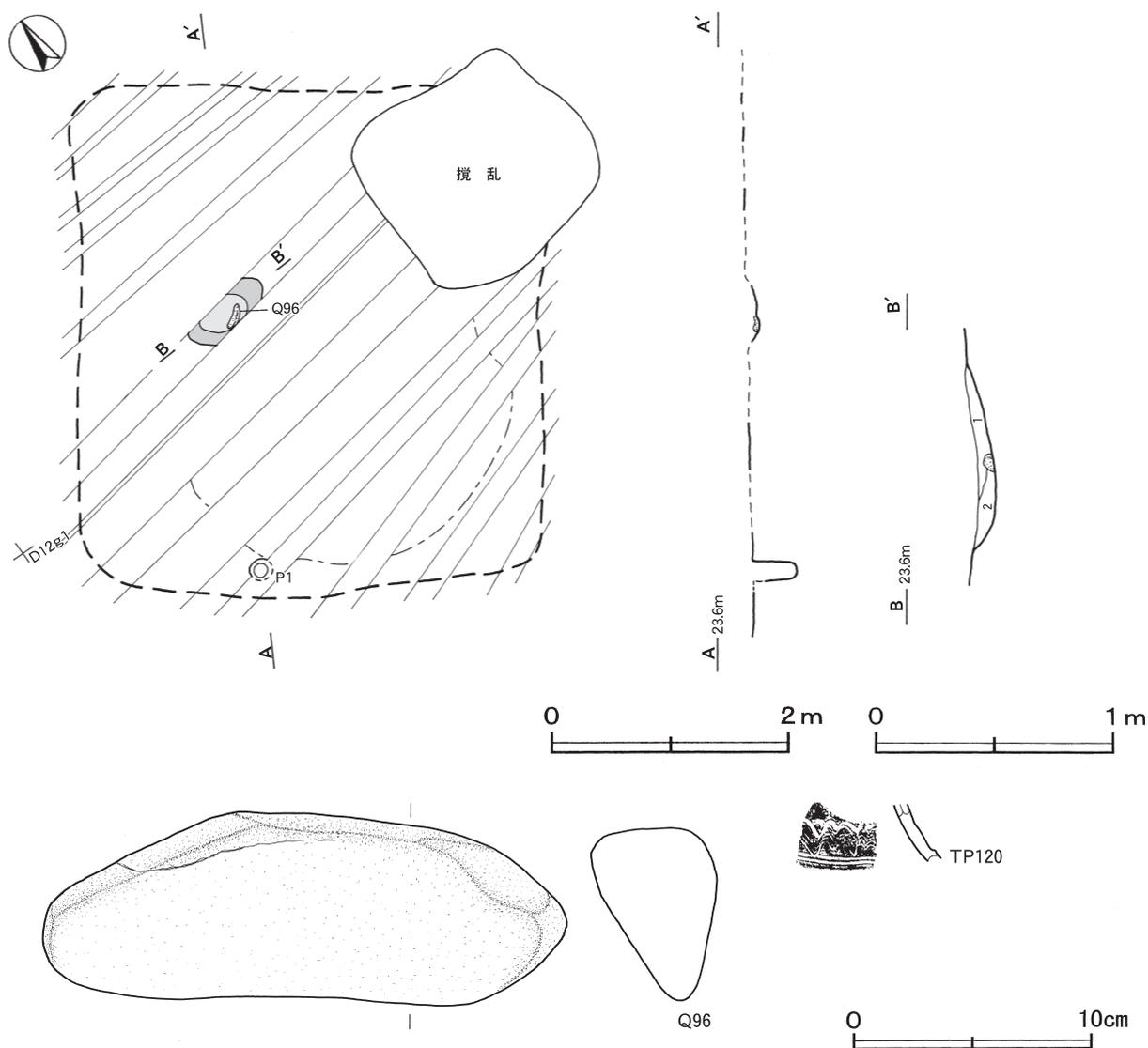
1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 2 暗褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量

ピット 1か所。P1は深さ38cmで、性格は不明である。

覆土 不明である。

遺物出土状況 弥生土器片22点（広口壺）、石製品1点（炉石）の他に、攪乱によって混入したと考えられる瓦質土器1点、不明鉄製品1点も出土している。耕作による攪乱が激しく、一部は床下まで達しており、出土した遺物はすべて攪乱の影響を受けている。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器と遺構の形状から弥生時代後期後半と考えられる。



第51図 第154号住居跡・出土遺物実測図

第154号住居跡出土遺物観察表(第51図)

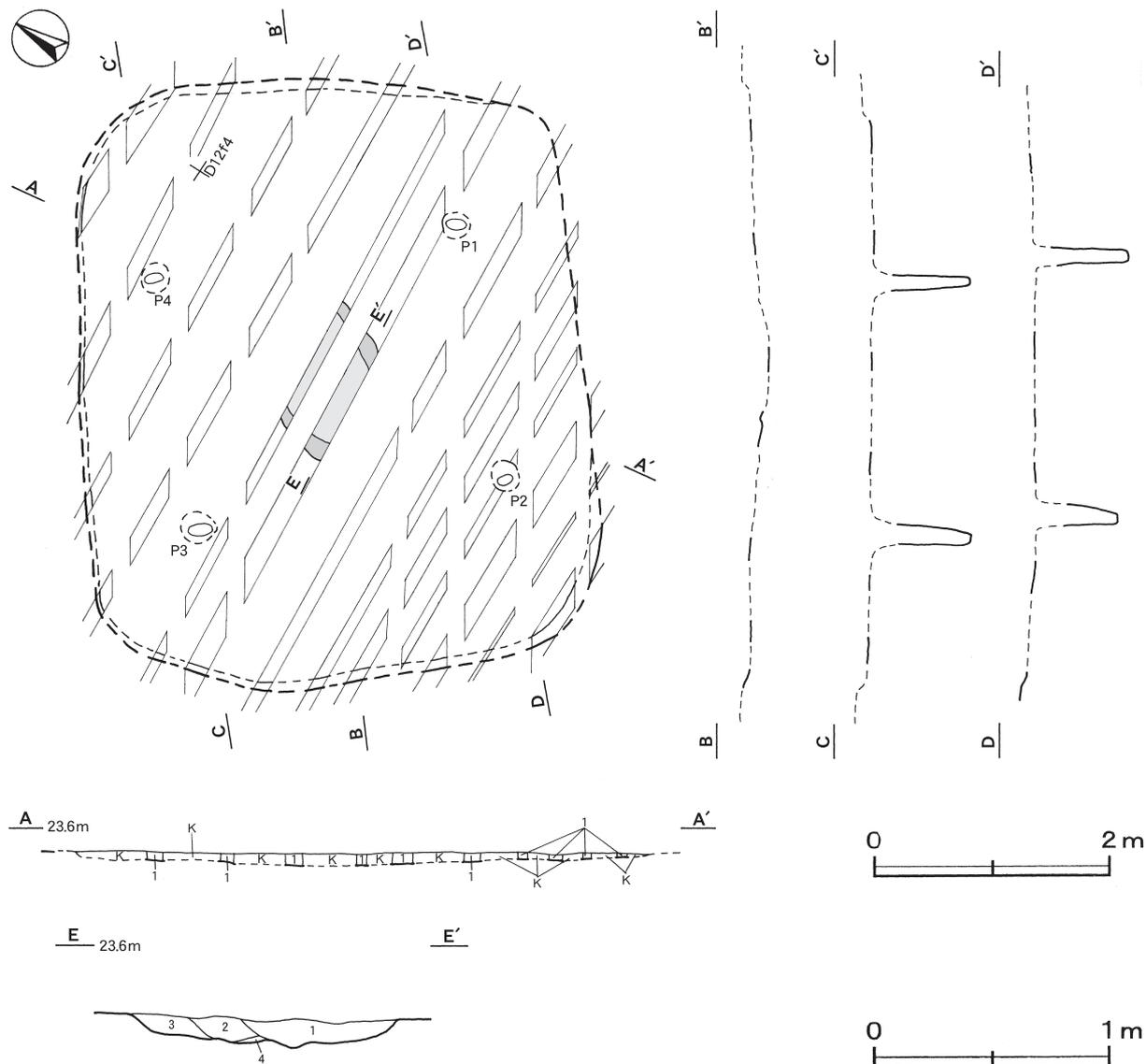
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
TP20	弥生土器	広口壺	-	(2.8)	-	長石・石英・雲母	褐灰	普通	頸部に櫛歯状工具(6本)による波状文 頸部下位に直状文	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q96	炉石	22.0	8.2	5.2	1059.1	砂岩	火を受けて赤変	炉床面	

第155号住居跡(第52・53図)

位置 調査区東部のD12f3区で、標高23.5mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.26m、短軸4.30mの隅丸長方形で、主軸方向はN-55°-Eである。耕作による攪乱のため、南東側の床面が露出した状態で検出されたが、遺存している壁高は7cmほどで、外傾して立ち上がっている。
 床 ほぼ平坦である。



第52図 第155号住居跡実測図

炉 中央部に位置している。長径140cm，短径80cmほどの楕円形と推定され，床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|---------------------------|-----------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 | 4 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量 |

ピット 4か所。深さは75～86cmで，配置から支柱穴と考えられる。

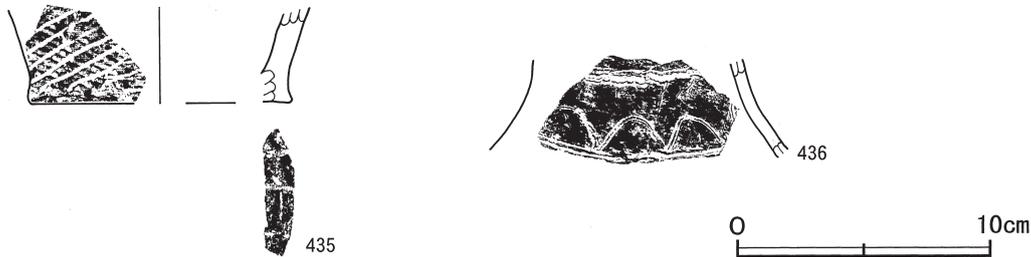
覆土 単一層であるため，堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 弥生土器片90点（広口壺）が出土している。耕作による攪乱が激しく，一部は床下まで達しており，出土した遺物はすべて攪乱の影響を受けている。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが，出土土器と遺構の形状から弥生時代後期後半と考えられる。



第53図 第155号住居跡出土遺物実測図

第155号住居跡出土遺物観察表(第53図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
435	弥生土器	広口壺	-	(3.8)	[10.4]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部木葉痕	覆土中	5%
436	弥生土器	広口壺	-	(3.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	頸部に櫛歯状工具(3本)による波状文 頸部下位に下向きの連弧文と直状文	覆土中	5%

第156号住居跡（第54～56図）

位置 調査区東部のD12g5区で，標高23.3mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.10m，短軸4.26mの隅丸長方形で，主軸方向はN-50°-Wである。壁高は20～32cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。

炉 中央部に位置している。長径76cm，短径58cmの楕円形で，床面を8cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|-----------------------------|-------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量 | 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量 |
|-----------------------------|-------------------|

ピット 5か所。P1～P4は深さ79～84cmで，配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ30cmで，配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

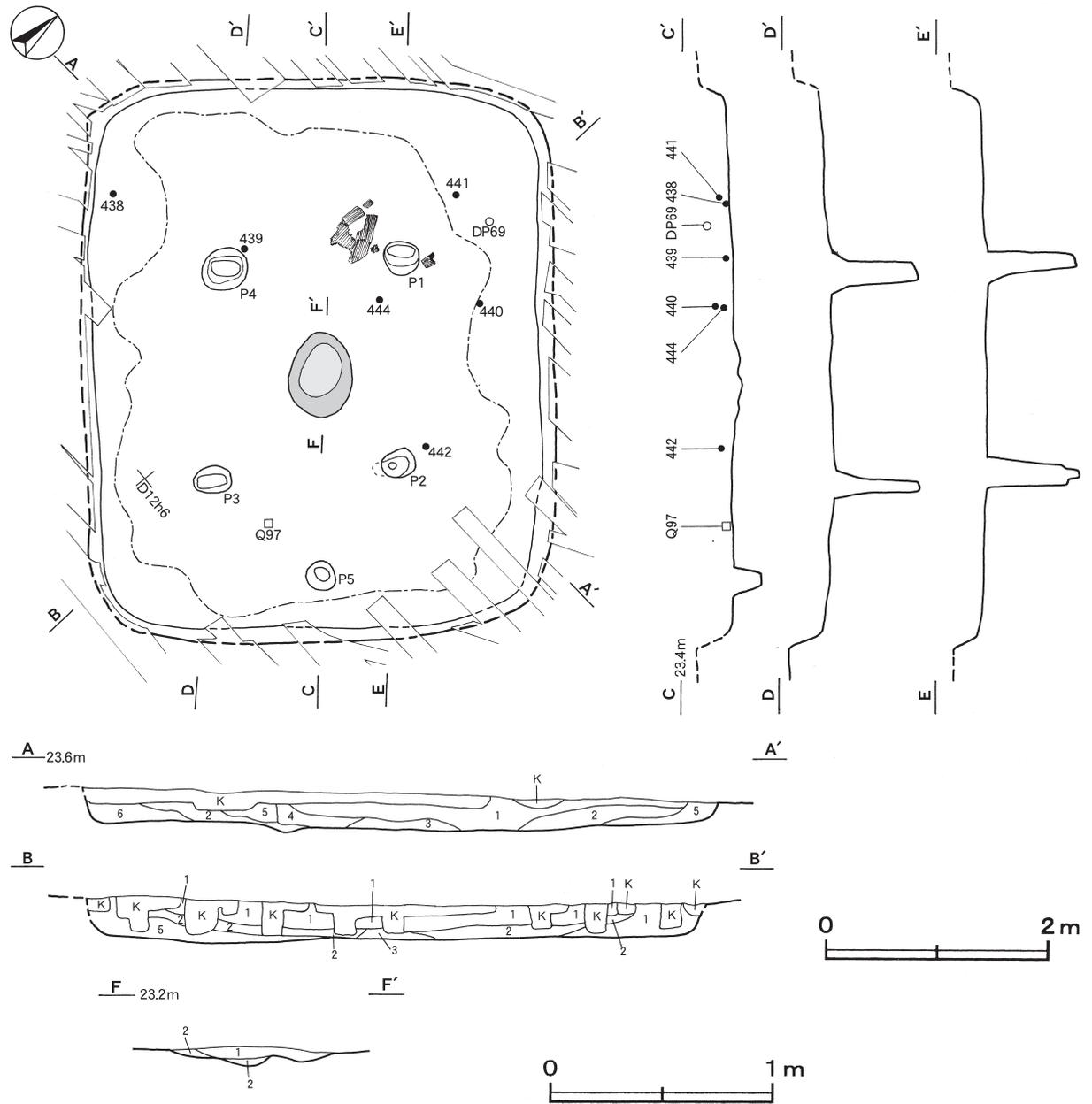
覆土 6層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

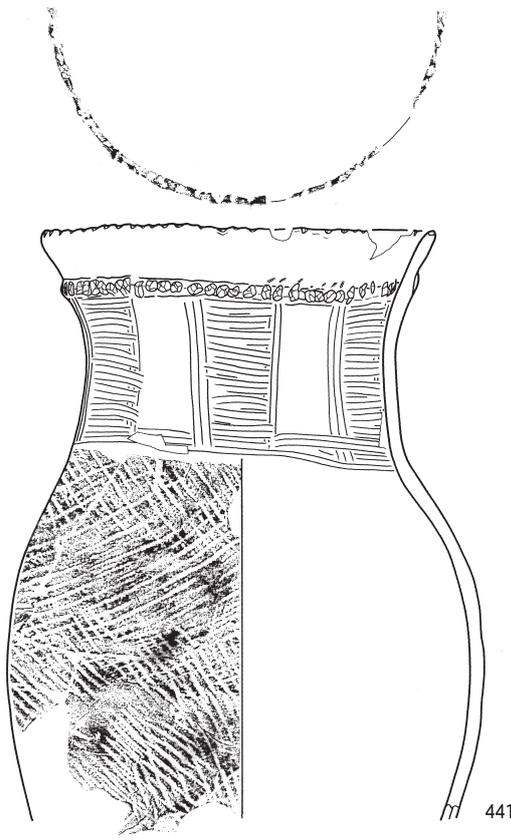
- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | 炭化物・ローム粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 焼土粒子少量, ロームブロック・炭化粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 |

遺物出土状況 弥生土器片384点（広口壺），土製品1点（紡錘車），石製品1点（不明石製品），礫4点も出土している。また，覆土下層の床面近くから炭化材が検出されていることから，焼失住居と考えられるが，火を受けて赤変した床面や焼土を確認することはできなかった。439はP4付近，440は北東壁寄り，441は北東コーナー寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。

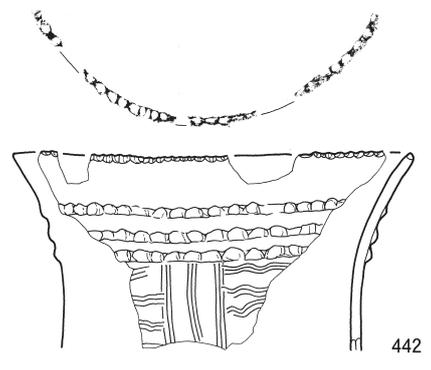
所見 時期は，出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。また，炭化材の科学分析の結果，樹種はケヤキで，板材であることが判明している。これらは住居構築材と考えられるが，同様に炭化材樹種同定を行った第141・143号住居跡と樹種が異なっており，住居・部材などにより樹種利用が異なっている可能性が指摘されている。



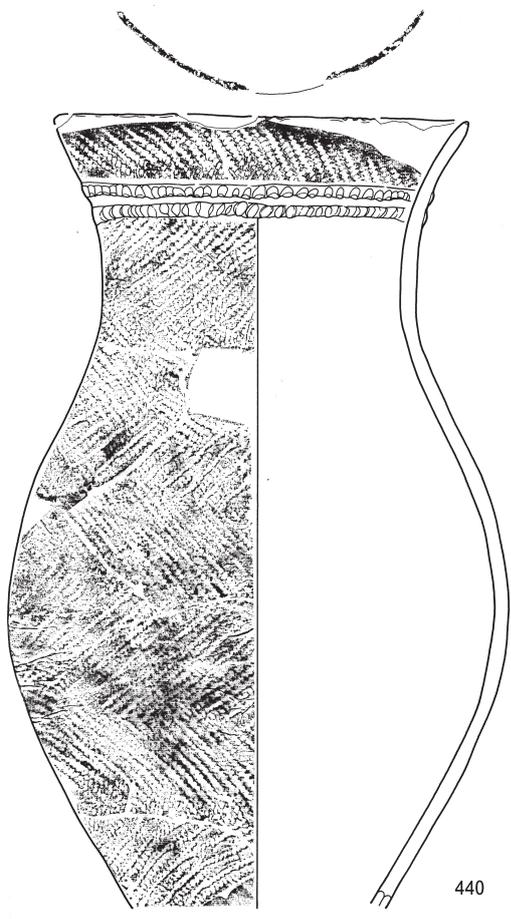
第54図 第156号住居跡実測図



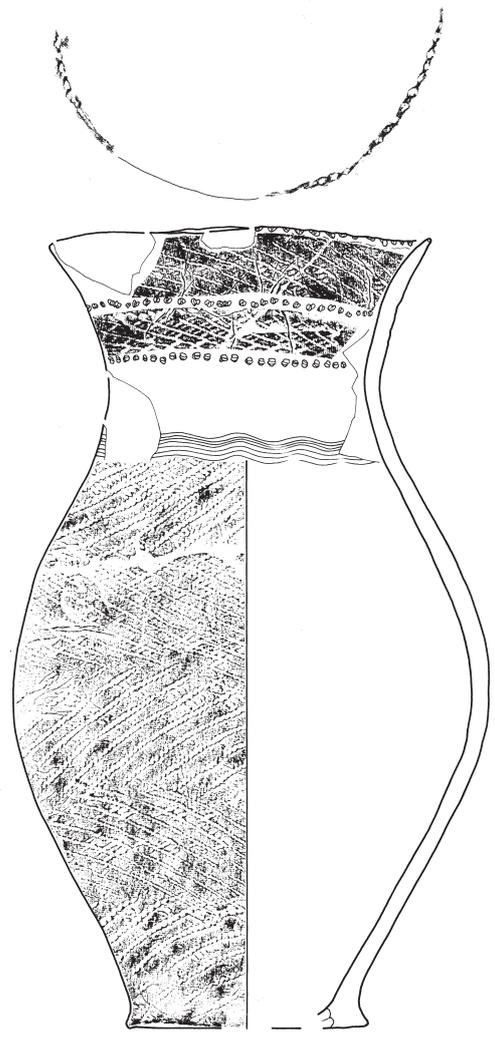
441



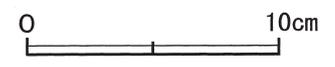
442



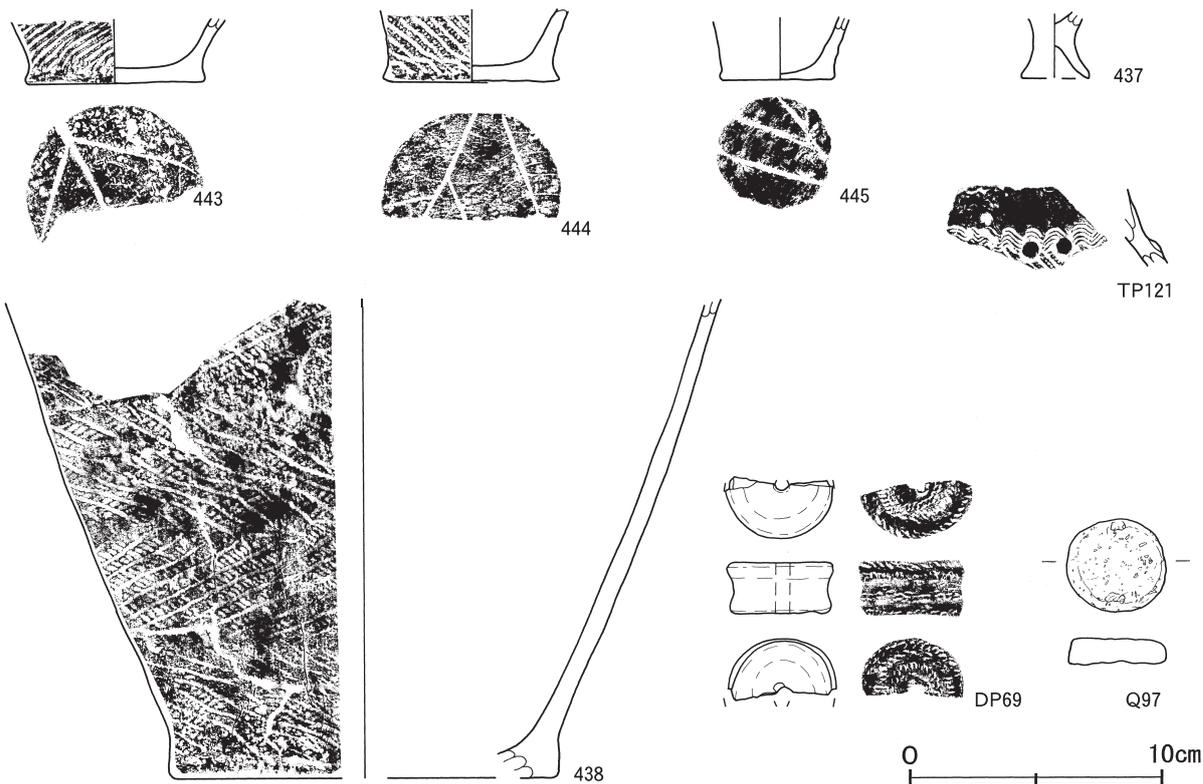
440



439



第55图 第156号住居跡出土遺物実測図(1)



第56図 第156号住居跡出土遺物実測図(2)

第156号住居跡出土遺物観察表(第55・56図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
437	弥生土器	高坏	-	(2.6)	[2.8]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	脚部ナデ	覆土中	30% ミニチュアカ
438	弥生土器	広口壺	-	(19.5)	[15.4]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 輪積痕	床面	20%
439	弥生土器	広口壺	14.9	32.0	[9.6]	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部に原体押圧 口辺部から頸部上位に附加条二種(附加1条)の縄文後縄文原体による刺突列2条 頸部無文帯 頸部下端に櫛歯状工具(7本)による波状文施文 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部木葉痕 胴部外面一部剥離	覆土下層	80% 胴部外面煤付着 PL19
440	弥生土器	広口壺	[16.2]	(31.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部に付附加条一種(付加2条)を施文後口唇部を横ナデ 口唇部に原体押圧 頸部上位に半截竹管による刺突のある隆帯2条 胴部に附加条一種(附加2条)の羽状構成	覆土下層	70% 頸部・胴部 外面煤付着 内面炭化物付着 PL19
441	弥生土器	広口壺	15.4	(23.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部に原体押圧 口辺部無文 頸部上位に縄文原体による刺突のある隆帯1条 櫛歯状工具(3本)による縦区画(7分割)内に直状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成	覆土下層	45% 頸部・胴部 外面煤付着 PL19
442	弥生土器	広口壺	[15.6]	(7.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部に棒状工具による押圧 口辺部無文 頸部上位に指頭による押圧のある隆帯3条 櫛歯状工具(3本)による縦区画(2分割以上)内に波状文充填	覆土下層	5% 口辺部から 胴部外面煤付着
443	弥生土器	広口壺	-	(2.6)	7.2	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	胴部に附加条一種(附加2条)の縄文 底部木葉痕	覆土中	5%
444	弥生土器	広口壺	-	(3.0)	7.2	長石・石英・雲母	灰褐	普通	胴部に附加条一種(附加2条)の縄文 底部木葉痕	覆土下層	5%
445	弥生土器	ミニチュア	-	(2.5)	4.5	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部ナデ 底部木葉痕	覆土中	10%
TP121	弥生土器	広口壺	-	(3.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	頸部下位に櫛歯状工具(5本)による波状文 対のボタン状瘤貼付 胴部に附加条一種(附加2条)の縄文	覆土中	5%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP69	紡錘車	4.4	0.6	2.1	(23.5)	土(長石・石英・雲母)	両面及び側面に半截竹管による刺突	覆土上層	PL40

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q97	不明石製品	4.1	3.7	1.2	4.5	軽石	全面にわずかな研磨痕	床面	

第158号住居跡 (第57～60図)

位置 調査区東部のD13h3区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置している。

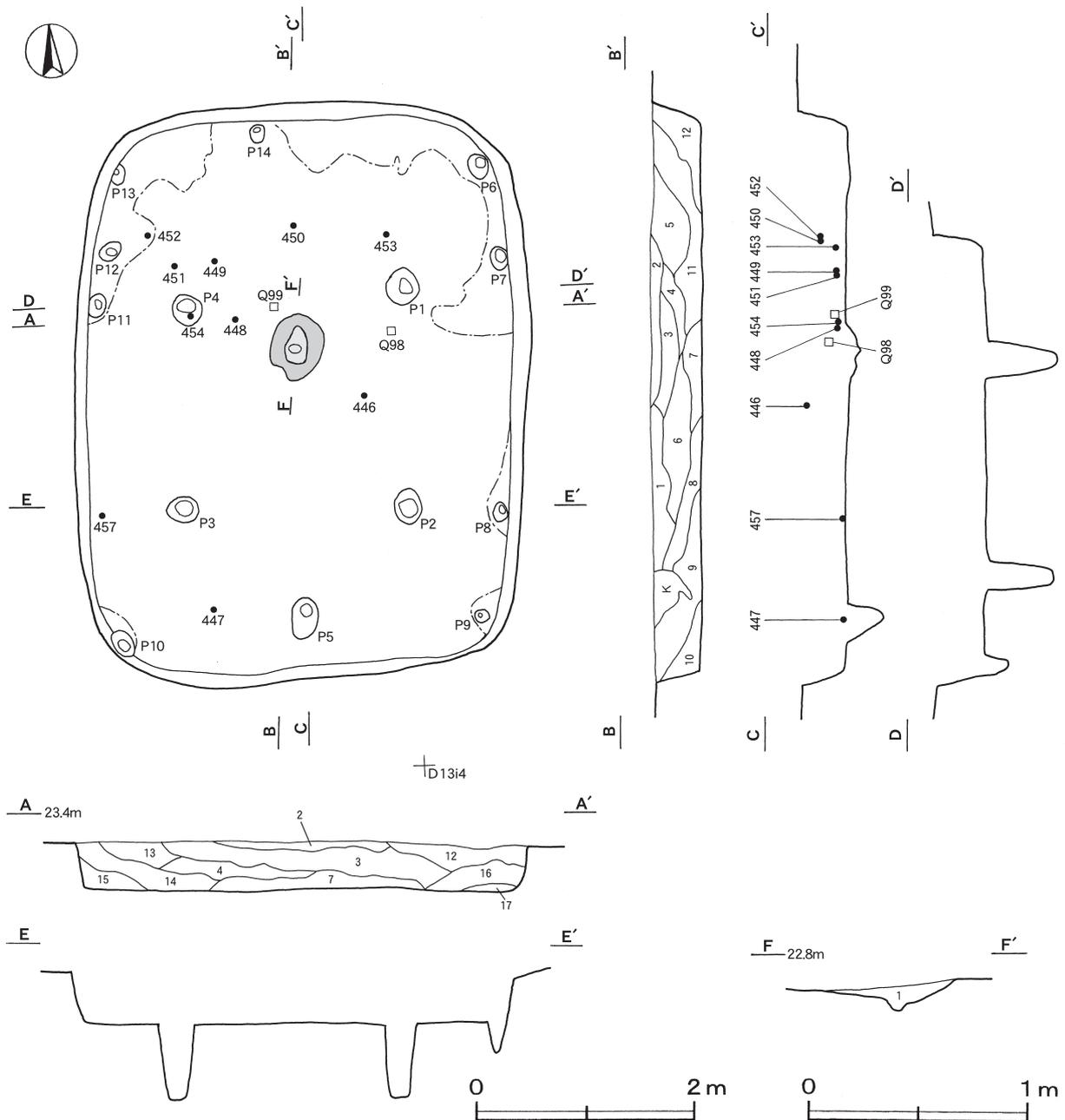
規模と形状 長軸5.35m、短軸4.18mの隅丸長方形で、主軸方向はN-2°-Eである。壁高は40～48cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部から壁際までが広く踏み固められている。

炉 中央部のやや北寄りに位置している。長径62cm、短径47cmの楕円形で、床面を11cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。また、炉石を据えていたと思われる5cmほどの窪みを確認することができた。

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量、炭化物微量



第57図 第158号住居跡実測図

ピット 14か所。P 1～P 4は深さ61～68cmで、配置から支柱穴と考えられる。P 5は深さ34cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6～P 14は15～37cmで、住居を取り囲むように壁際に配置されていることから、壁柱穴と考えられる。

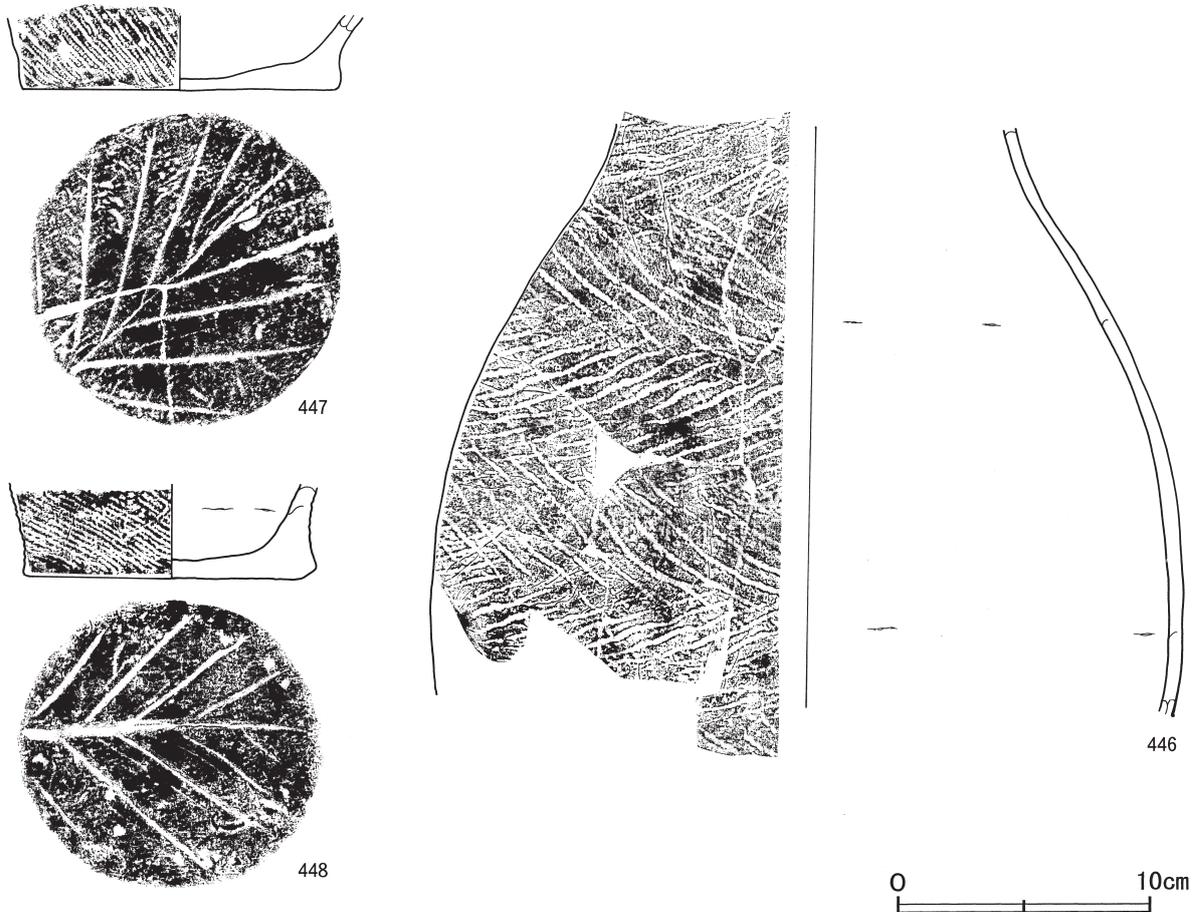
覆土 17層に分層される。第1～6層、第12・13層はブロック状の堆積状況を示す人為堆積であり、それ以外は自然堆積と考えられる。

土層解説

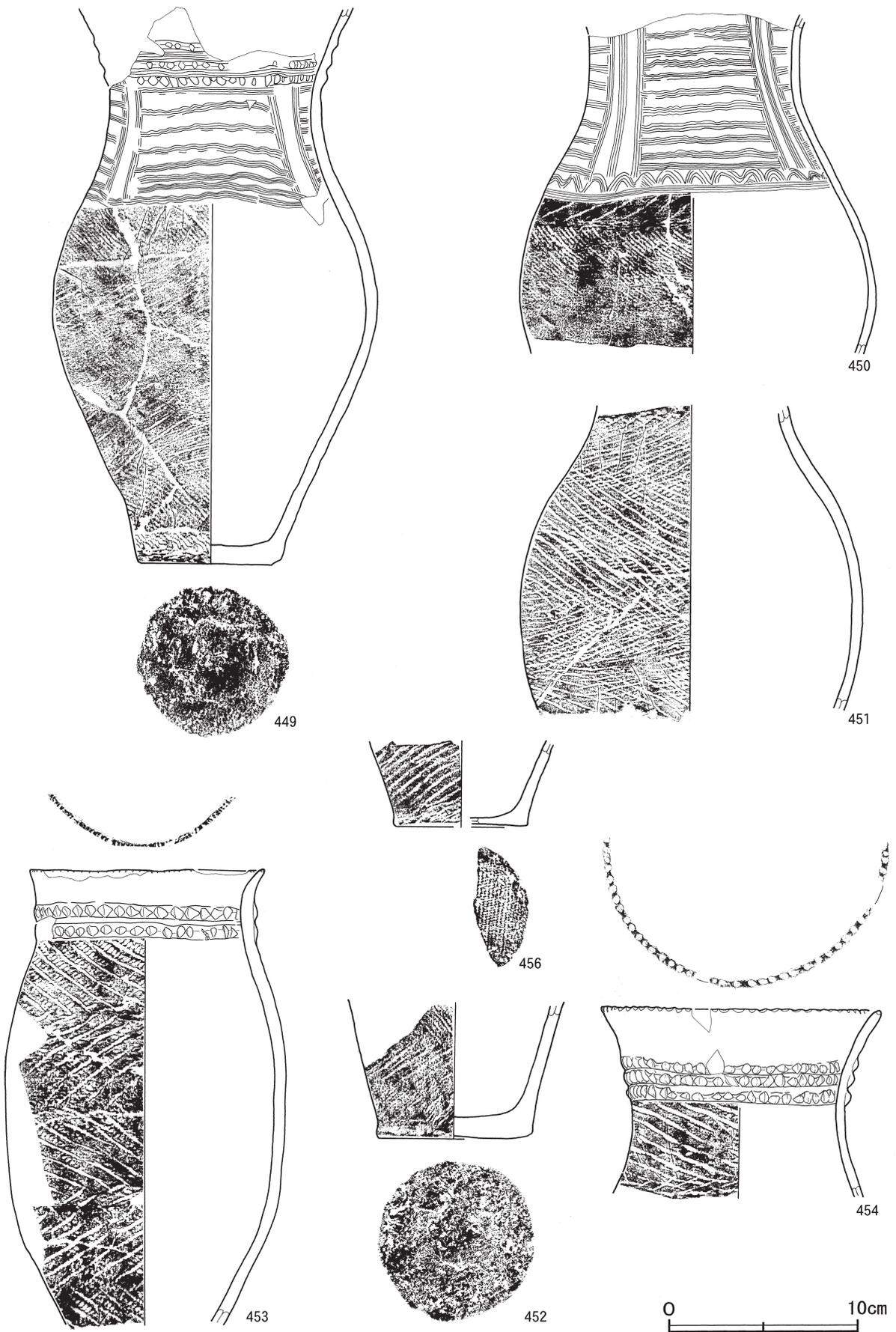
- | | | | |
|--------|------------------------|---------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 10 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 11 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 12 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 13 暗褐色 | 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 5 黒褐色 | 炭化物少量、ロームブロック・焼土ブロック微量 | 14 極暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 6 極暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 15 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 7 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 16 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 8 暗褐色 | ロームブロック少量 | 17 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化物微量 |
| 9 暗褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 弥生土器片729点（広口壺726，片口壺3），石製品4点（磨石1，敲石2，砥石1）が出土している。449はP 4付近の覆土下層，450は中央部北寄りの覆土中層から斜位の状態でそれぞれ出土している。また，457は西側壁際の床面から出土している。これらは，ほとんど北寄りの覆土中・下層から破片で出土しており，住居廃絶後の早い時期に投棄されたと考えられる。

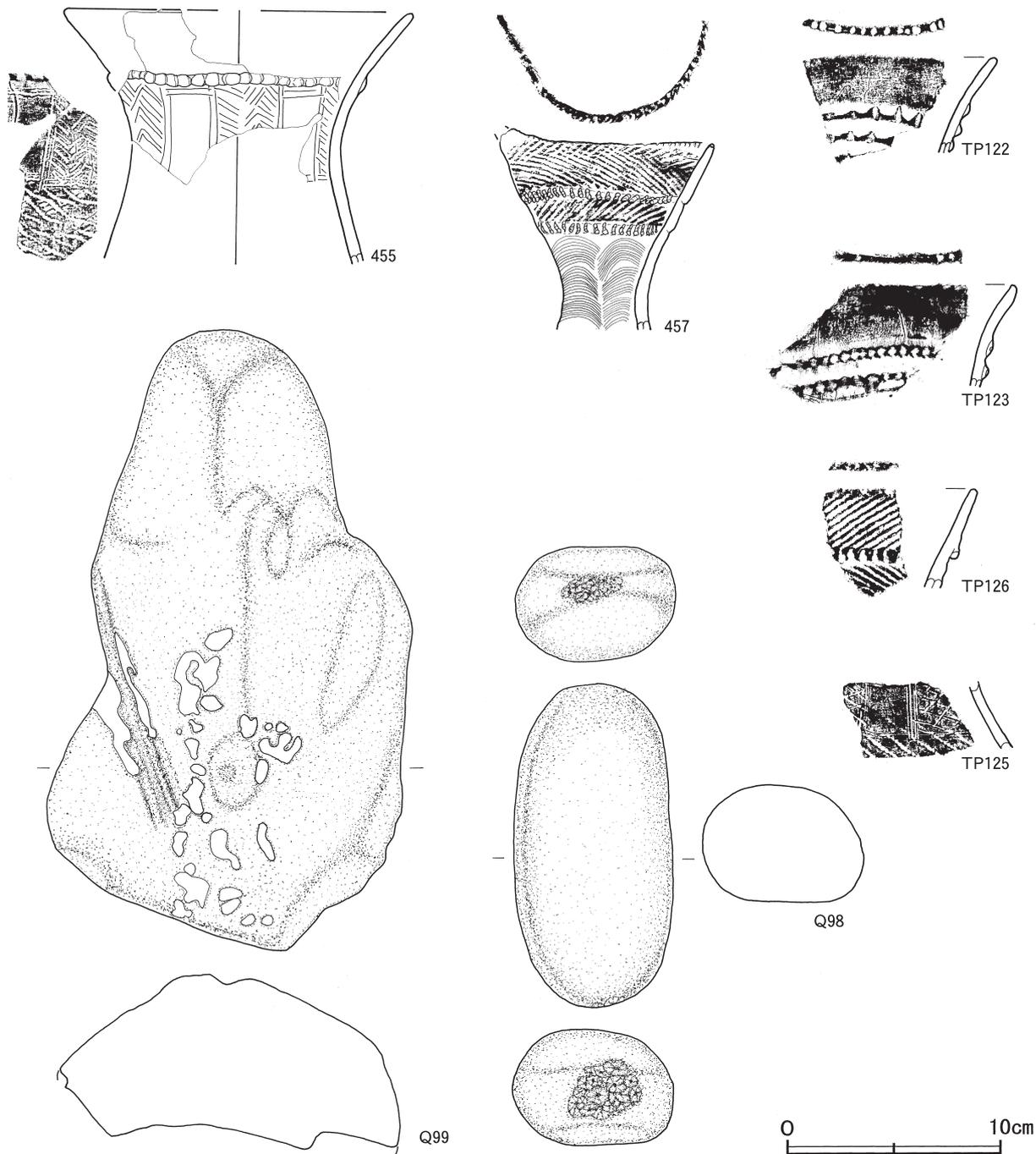
所見 時期は，出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第58図 第158号住居跡出土遺物実測図(1)



第59图 第158号住居跡出土遺物実測図(2)



第60図 第158号住居跡出土遺物実測図(3)

第158号住居跡出土遺物観察表(第58~60図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
446	弥生土器	広口壺	-	(20.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	頸部から胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 羽状構成 輪積痕	覆土上層	15%
447	弥生土器	広口壺	-	(3.0)	12.5	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	胴部に附加条一種(附加2条)の縄文 輪積痕 底部木葉痕	床面	10%
448	弥生土器	広口壺	-	(3.9)	11.7	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部に附加条一種(附加2条)の縄文 輪積痕 底部木葉痕	覆土下層	10%
449	弥生土器	広口壺	-	(29.7)	7.7	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部無文 頸部上位に棒状工具による押圧のある隆帯3条 隆帯間に櫛歯状工具(4本)による施文 同工具による縦区画(4分割)内に波状文充填 胴部に附加条一種(附加2条)の羽状構成 底部調整痕	覆土下層	80% 胴部外面煤付着 PL19
450	弥生土器	広口壺	-	(13.0)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明黄褐	普通	櫛歯状工具(4本)による3条一単位の縦区画(4分割)内に波状文充填 頸部下位に波状文と直状文 胴部に附加条二種(附加1条)と附加条一種(附加2条)の羽状構成	覆土中層	30% 胴部外面煤付着 PL21

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
451	弥生土器	広口壺	—	(16.1)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	頸部及び胴部に附加条二種（附加1条）の縄文	覆土下層	10% 胴部外面煤付着
452	弥生土器	広口壺	—	(7.2)	8.3	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	胴部に附加条一種（附加2条）の縄文 底部調整痕	覆土中層	10%
453	弥生土器	広口壺	12.3	(24.2)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰褐	普通	口唇部に刻み 口辺部無文 頸部上位に押圧のある隆帯2条 胴部に附加条二種（附加1条）の縄文	覆土下層	30% 口辺部・頸部外面煤付着
454	弥生土器	広口壺	14.8	(10.0)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰褐	普通	口唇部に刻み 口辺部無文 頸部上位に押圧のある隆帯3条 胴部に附加条二種（附加1条）の縄文	覆土下層	20% 口辺部から胴部外面煤付着 PL21
455	弥生土器	広口壺	[16.2]	(4.8)	—	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	口辺部無文 頸部上位に指頭による押圧のある隆帯1条 櫛歯状工具（2本）による縦区画（2分割以上）内に山形文充填 胴部に附加条二種（附加1条）の縄文	覆土中	5% 胴部外面に煤付着
456	弥生土器	広口壺	—	(4.6)	[7.2]	長石・石英・雲母	灰褐	普通	胴部に附加条二種（附加1条）の縄文 底部布目痕	覆土中	5%
457	弥生土器	片口壺	—	(9.4)	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口唇部に原体押圧 2段の複合口縁 口辺部に附加条一種（附加2条）の羽状構成 下端に縄文原体による刺突 頸部に櫛歯状工具（10本）による下向き連弧文	床面	15%
TP22	弥生土器	広口壺	—	(4.5)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	口唇部棒状工具による押圧 押圧のある隆帯	覆土中	5% PL38
TP23	弥生土器	広口壺	—	(4.9)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原体による押圧 ヘラ状工具による刺突のある隆帯	覆土中	5% PL38
TP25	弥生土器	広口壺	—	(3.2)	—	長石・石英・雲母	明褐	普通	頸部下端櫛歯状工具（4本）による縦区画内にヘラ状工具による格子状文 胴部附加条二種（附加1条）施文	覆土中	5% PL39
TP26	弥生土器	広口壺	—	(4.7)	—	長石・石英・雲母	褐	普通	口唇部縄文原体による押圧 複合口縁 口辺部附加条一種（附加2条）施文 下端に縄文原体による押圧	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q98	敲石	15.3	7.5	5.5	1020.0	砂岩	両端部に敲打痕 側面全体にわずかな擦痕 火を受けてわずかに赤変 磨石を敲石に転用か	覆土下層	
Q99	砥石	29.2	17.1	8.4	(4360.0)	砂岩	上面に砥面1か所 凹石を砥石に転用 敲打痕1か所	覆土下層	

第159号住居跡（第61～65図）

位置 調査区東部のD13i3区で、標高23.1mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.10m、短軸4.60mの隅丸長方形で、主軸方向はN-1°-Eである。壁高は18～30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が広く踏み固められている。

炉 中央部のやや北寄りに位置している。長径101cm、短径66cmの楕円形で、床面を6cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。砂岩の炉石がL字状に炉床中央部に据えられていた。

炉土層解説

1 黒褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量

ピット 13か所。P1～P4は深さ32～53cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ31cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6～P13は16～25cmで、住居を取り囲むように壁際に配置されていることから、壁柱穴と考えられる。

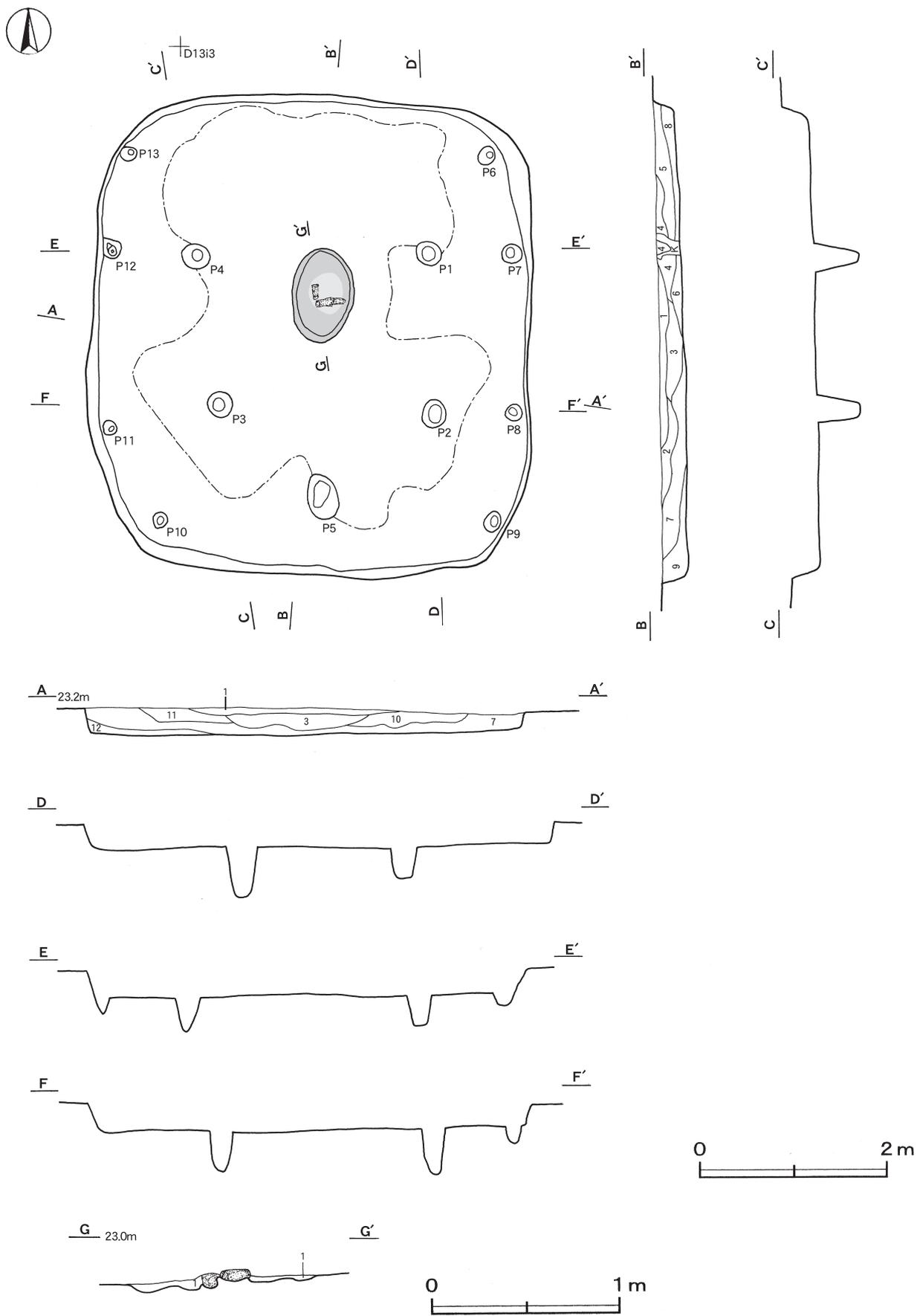
覆土 12層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

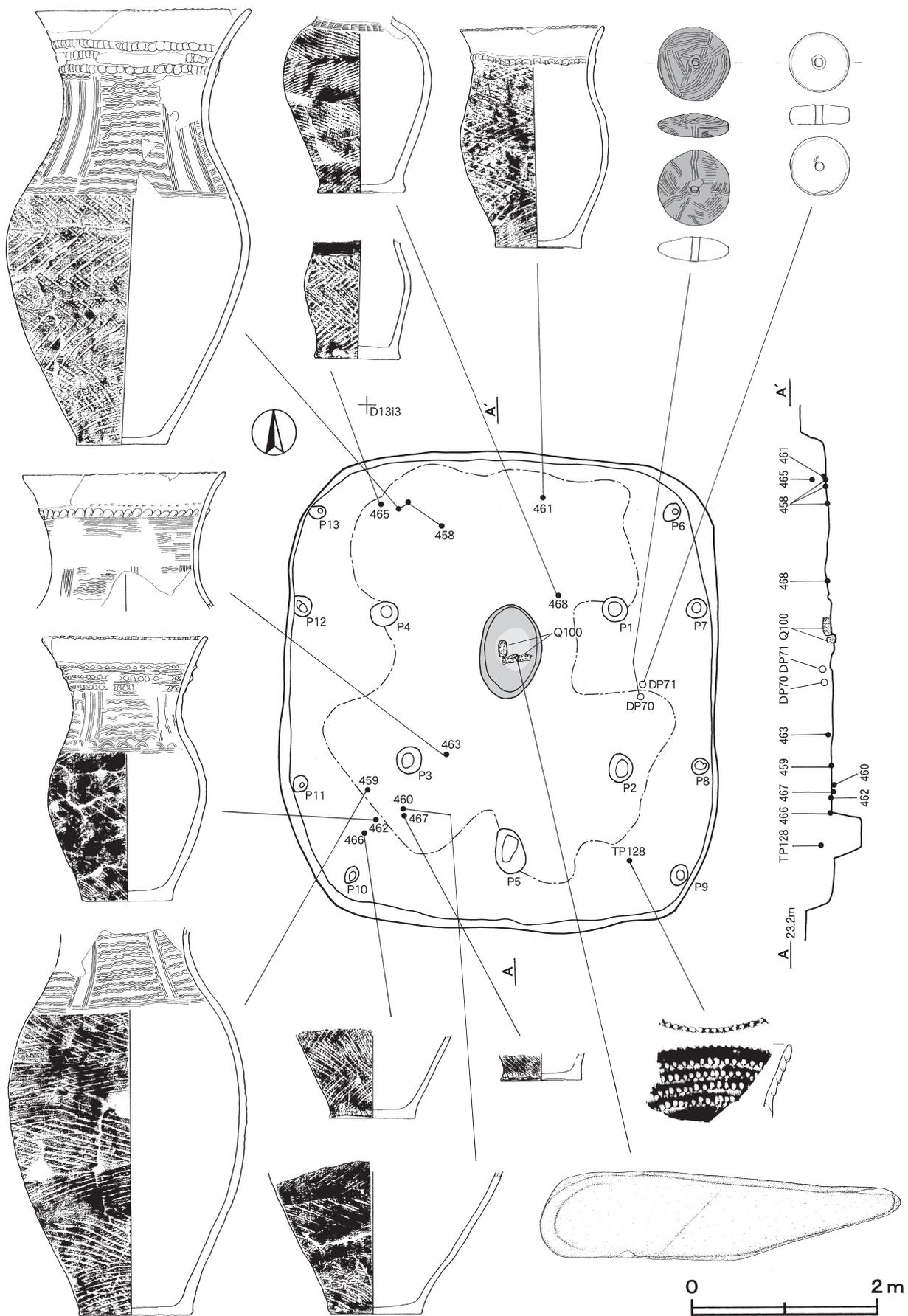
- | | |
|-------------------------------|-------------------------------|
| 1 黒色 炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 7 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック微量 | 8 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 9 黒褐色 ロームブロック微量 |
| 4 黒褐色 ロームブロック・炭化物微量 | 10 極暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子微量 |
| 5 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 | 11 極暗褐色 ロームブロック・炭化物微量 |
| 6 黒褐色 焼土ブロック少量、炭化物・ローム粒子微量 | 12 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量 |

遺物出土状況 弥生土器片91点（広口壺）、土製品2点（紡錘車）、石製品4点（磨石1、炉石1）、礫2点の他に、混入した縄文土器片1点も出土している。458は北西コーナー部の床面、465は北西コーナー覆土中層、459・462は南西コーナー部の床面、461は北側壁寄りの床面からそれぞれ出土している。また、DP70・DP71は東壁寄りの覆土下層から出土している。

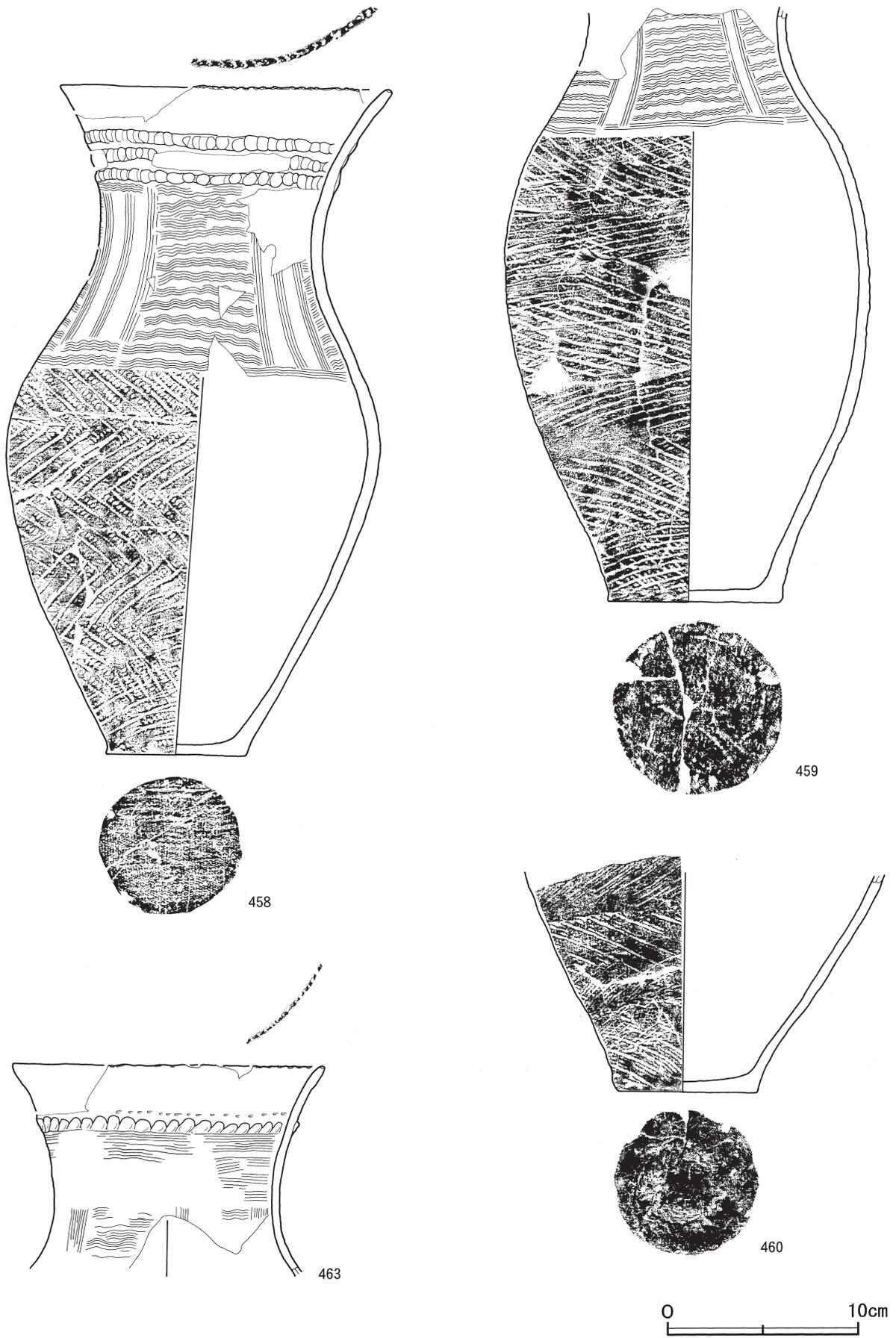
所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



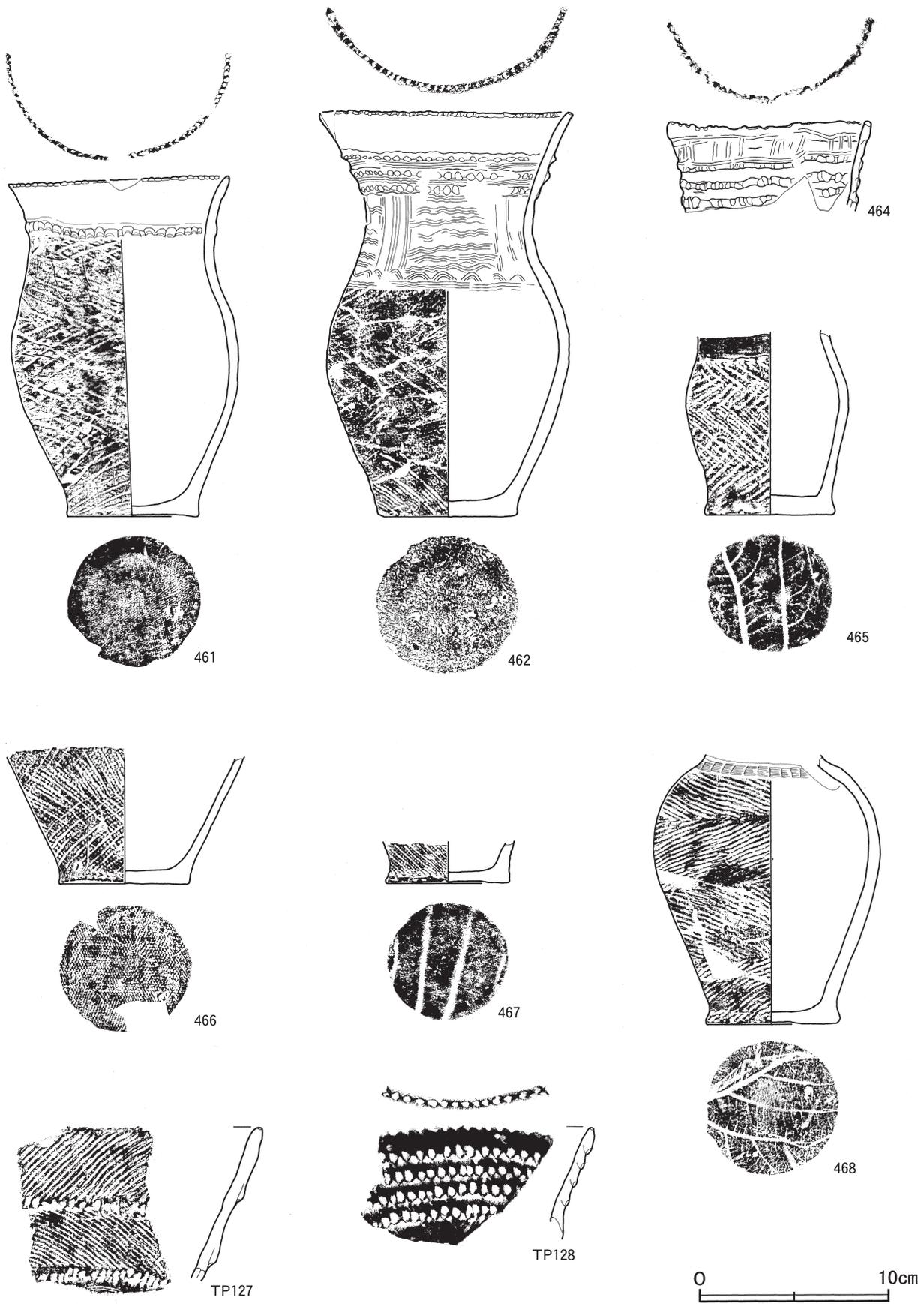
第61图 第159号住居跡実測図



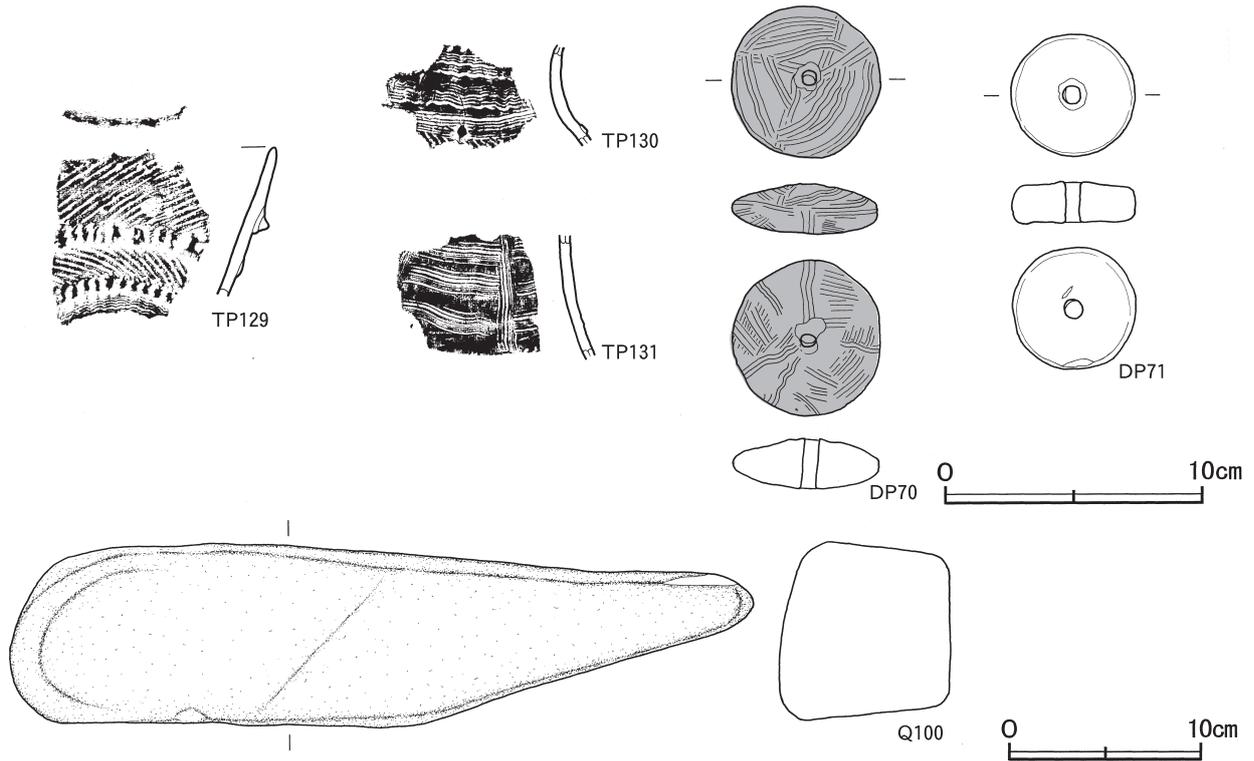
第62图 第159号住居跡遺物出土状況図



第63图 第159号住居跡出土遺物実測図(1)



第64图 第159号住居跡出土遺物実測図(2)



第65図 第159号住居跡出土遺物実測図(3)

第159号住居跡出土遺物観察表(第63~65図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
458	弥生土器	広口壺	[17.2]	35.4	7.4	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部に原体押圧 口辺部無文 頸部上位に軽い押圧のある隆帯3条 櫛歯状工具(4本)による3条一単位の縦区画(4分割)内に波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部布目痕	床面	95% 頸部・胴部外面煤付着 内面炭化物付着 PL20
459	弥生土器	広口壺	-	(31.5)	9.1	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	櫛歯状工具(3本)による縦区画(6分割)内に波状文充填 胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 羽状構成 底部布目痕	床面	80% PL20
460	弥生土器	広口壺	-	(11.5)	7.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部調整痕	床面	20% 内面炭化物付着
461	弥生土器	広口壺	11.4	18.0	6.8	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部に原体押圧 口辺部無文 頸部上位に半截竹管による刺突のある隆帯1条 胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部布目痕	床面	95% 胴部外面煤付着 PL20
462	弥生土器	広口壺	13.0	21.5	7.3	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部に刻み 口辺部無文 頸部上位に棒状工具による押圧のある隆帯3条 隆帯間に櫛歯状工具(3本)による施文 櫛歯状工具による3条一単位(一部2条)の縦区画(4分割)内に波状文充填 頸部下位に波状文と直状文 胴部に附加条一種(附加2条)と附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部調整痕 初痕	床面	80% 胴部外面煤付着 内面炭化物付着 PL20
463	弥生土器	広口壺	[16.2]	(10.9)	-	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	口唇部に原体押圧 口辺部無文 頸部上端に指頭による押圧のある隆帯1条 頸部上位に櫛歯状工具(4本)による波状文 頸部に櫛歯状工具による縦区画後波状文充填	覆土下層	10%
464	弥生土器	広口壺	[10.4]	(4.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部に原体押圧 口辺部に櫛歯状工具(2本)による施文2条 任意に縦区画に分割 頸部上位に棒状工具による押圧のある隆帯3条以上	覆土中	5% 外面煤付着
465	弥生土器	広口壺	-	(9.7)	6.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	頸部下端無文帯 胴部に附加条一種(附加2条)の羽状構成 底部木葉痕	覆土中層	80% PL23
466	弥生土器	広口壺	-	(6.7)	6.8	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部に附加条一種(附加2条)と附加条二種(附加1条)の羽状構成 底部布目痕	床面	10% 胴部外面煤付着
467	弥生土器	広口壺	-	(2.2)	6.5	長石・石英・雲母	灰褐	普通	胴部に附加条一種(附加2条)の縄文 底部木葉痕	床面	5%
468	弥生土器	壺	-	(14.3)	6.6	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	頸部下端に櫛歯状工具(7本)による廉状文 胴部に附加条一種(附加2条)の羽状構成 底部木葉痕	床面	50%
TP27	弥生土器	広口壺	-	(8.0)	-	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	口唇部に刻み 2段の複合口縁 口辺部附加条1種(附加2条) 施文 上段下端に対する瘤貼付 上下段とも下端に縄文原体による押圧 櫛歯状工具(本数不明)による下向きの連弧文	覆土中	5%
TP28	弥生土器	広口壺	-	(5.9)	-	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	口唇部に原体押圧 4段の複合口縁 各段とも下端に縄文原体による押圧	覆土下層	5% PL38
TP29	弥生土器	広口壺	-	(5.8)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	2段の複合口縁 口辺部に附加条1種(附加2条)の縄文 上段下端に瘤貼付 上下段とも下端に縄文原体による押圧 櫛歯状工具(本数不明)による波状文	覆土中	5% PL38
TP30	弥生土器	片口壺	-	(3.9)	-	長石・石英・雲母	黒褐	普通	頸部下端櫛歯状工具(7本)による波状文 頸部下端同工具による横走直状文 ボタン状瘤貼付	覆土中	5%
TP31	弥生土器	片口壺	-	(4.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	頸部下端櫛歯状工具(7本)による縦区画内に波状文	覆土中	5%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP70	紡錘車	6.0	0.6	2.0	64.5	土(長石・石英・雲母)	両面に櫛歯状工具(3本)による不規則な施文 側面に同工具による横走文 一方向からの穿孔	覆土下層	PL40
DP71	紡錘車	4.8	0.7	1.6	49.8	土(長石・石英・雲母)	丁寧なナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	PL40

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q100	炉石	38.7	9.7	8.9	4220.0	砂岩	火を受けて赤変	炉床面	

表3 弥生時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	新旧関係 (旧→新)
							主柱	出入口	ピット	炉				
88	D9a5	N-29°-W	隅丸長方形	5.53 × 4.12	14~48	平坦	4	—	—	1	人為・自然	弥生土器, 土製品, 石製品, 縄文土器, 土師器	後期後半	本跡→SK167
90	D9d9	N-2°-W	[隅丸方形]	5.00 × [4.70]	6~66	平坦	4	1	—	1	自然	弥生土器, 土製品, 土師器	後期後半	本跡→SI79・80
92	D9c7	N-43°-W	[円形]	[8.30] × 7.80	20~48	平坦	4	2	—	1	自然	弥生土器, 土製品, 石器, 礫, 縄文土器, 土師器	後期後半	本跡→SI80・93・96
96	D9d6	N-53°-W	隅丸長方形	6.08 × 4.89	30~44	平坦	4	1	—	1	自然	弥生土器, 土製品, 石器, 縄文土器, 土師器	後期後半	SI92→本跡
100	D9e6	N-38°-W	隅丸長方形	5.76 × 4.92	20~36	平坦	4	1	—	—	人為・自然	弥生土器, 礫, 土師器	後期後半	本跡→SI99
105	D9d2	N-54°-W	隅丸長方形	4.93 × 4.70	30~44	平坦	3	—	15	2	人為	弥生土器, 手捏土器, 礫, 土師器	後期後半	本跡→SI106・SBI・2・SK166
112	C9j1	N-34°-W	隅丸長方形	5.23 × [3.94]	12~37	平坦	3	1	3	1	自然	弥生土器, 土製品, 石器, 礫, 土師器	後期後半	本跡→SI110・111
114	D9b3	N-26°-W	隅丸方形	6.00 × 5.92	23~41	平坦	4	1	—	1	自然	弥生土器, 土製品, 石器, 礫, 縄文土器, 土師器	後期後半	本跡→SB1
134	D8d0	N-29°-W	[隅丸長方形]	[6.62 × 2.32]	8~12	平坦	2	—	—	1	人為	弥生土器, 礫	後期後半	本跡→SI133, SBI・2・PG6
137	D9e4	N-8°-W	[隅丸長方形]	[6.50 × 5.86]	12~46	平坦	2	1	—	1	自然	弥生土器, 礫, 土師器	後期後半	本跡→SI99, I01・SB3・第21号墓坑
141	D10e0	N-8°-W	[隅丸方形]	[5.00 × 4.72]	5	平坦	4	—	—	1	不明	弥生土器, 炭化材	後期後半	本跡→SI42・SK186・187・SD7
143	D10g9	N-50°-W	[隅丸長方形]	[5.60 × 4.70]	20~45	平坦	3	—	—	1	人為	弥生土器, 炭化材	後期後半	
148	D11j9	N-44°-W	[隅丸方形・隅丸長方形]	(3.70 × 3.40)	14	平坦	—	—	—	—	不明	弥生土器, 礫	後期後半	本跡→SI146
149	D11j7	N-53°-W	[隅丸方形・隅丸長方形]	[5.90 × 1.12]	16	平坦	—	—	—	—	自然	弥生土器, 礫	後期後半	本跡→SI146
152	D11i0	N-15°-W	[隅丸方形]	[5.30 × 3.60]	—	平坦	2	1	—	1	不明	弥生土器	後期後半	
153	D12h2	N-53°-W	[隅丸方形]	[5.10 × 4.70]	—	平坦	—	—	—	1	不明	弥生土器	後期後半	
154	D12g1	N-31°-E	[隅丸長方形]	[4.30 × 3.90]	—	平坦	—	1	—	1	不明	弥生土器, 石製品, 瓦質土器, 不閉鉄製品	後期後半	
155	D12f3	N-55°-E	[隅丸長方形]	5.26 × [4.30]	7	平坦	4	—	—	1	不明	弥生土器	後期後半	
156	D12g5	N-50°-W	隅丸長方形	5.10 × 4.26	20~32	平坦	4	1	—	1	人為	弥生土器, 土製品, 石製品, 礫, 炭化材	後期後半	
158	D13h3	N-2°-E	隅丸長方形	5.35 × 4.18	40~48	平坦	4	1	9	1	人為・自然	弥生土器, 石製品	後期後半	
159	D13i3	N-1°-E	隅丸長方形	5.10 × 4.60	18~30	平坦	4	1	8	1	自然	弥生土器, 土製品, 石製品, 縄文土器	後期後半	

(2) 土坑

第174号土坑 (第66図)

位置 調査区東部のD12e2区で、標高23.4mほどの台地上に位置している。

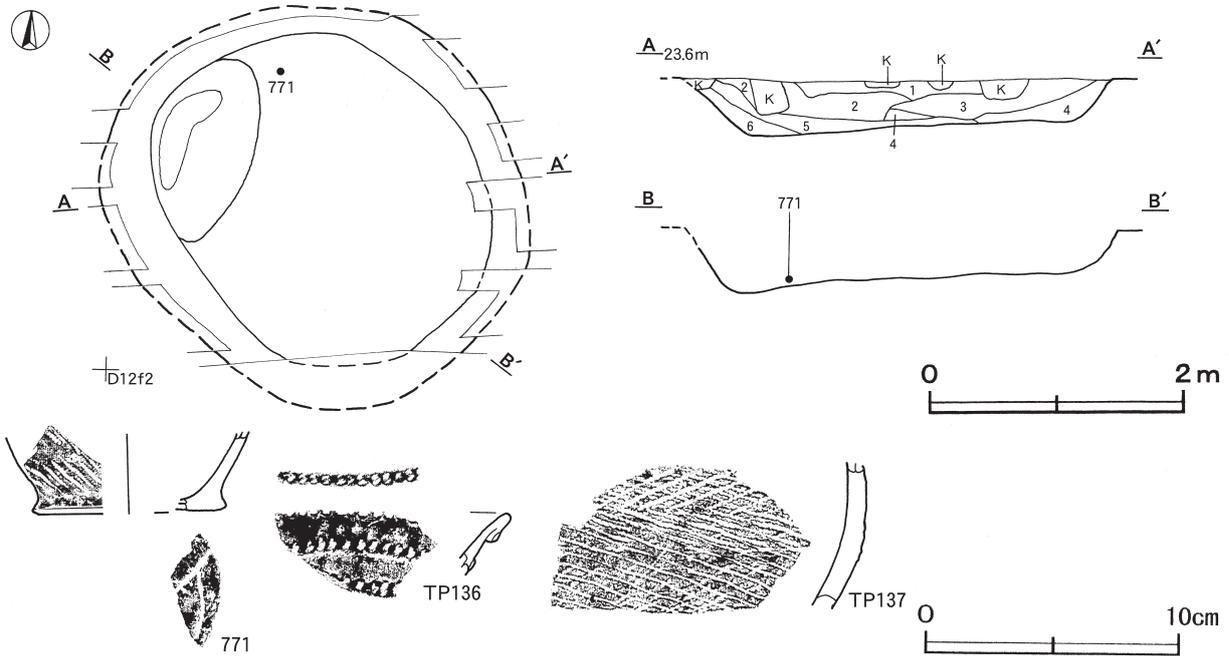
規模と形状 長径3.36m、短径3.00mの楕円形で、深さは32~50cmである。主軸方向はN-73°-Wで、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、北西方向に緩やかに傾いている。

覆土 6層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|--------------------------|
| 1 灰褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 灰褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | 粘土ブロック多量, ロームブロック・炭化物微量 |
| 3 灰褐色 | ロームブロック少量, 炭化物・焼土粒子微量 | 6 暗褐色 | 粘土ブロック多量, ローム粒子中量, 炭化物微量 |

遺物出土状況 弥生土器片31点（広口壺）が出土している。771は北側壁際の覆土下層から出土している。
所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第66図 第174号土坑・出土遺物実測図

第174号土坑出土遺物観察表(第66図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
771	弥生土器	広口壺	-	(3.1)	[7.8]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	胴部附加条二種（附加1条）の縄文 底部木葉痕	覆土下層	5%
TP136	弥生土器	広口壺	-	(2.5)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部・口辺部に原体押圧 複合口縁	覆土中	5%
TP137	弥生土器	広口壺	-	(5.7)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部附加条二種（附加2条）の縄文 羽状構成	覆土中	5%

3 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では、中位段丘から台地上にかけて古墳時代後期の住居跡 37 軒が確認された。以下、遺構と遺物について記載する。

竪穴住居跡

第72号住居跡（第67図）

位置 調査区西部のD10g3区で、標高17.2mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 耕作による攪乱が激しく、全体を検出することはできなかったが、N-5°-Eを主軸方向とする長軸3.00m、短軸3.46mほどの方形と推定される。壁高は50cm前後で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 火床部や袖、煙道部の掘り込みなどは検出できなかったが、北壁の中央部付近に砂質粘土の散らばりが確認されたことから、北壁中央部に付設されていたと想定される。

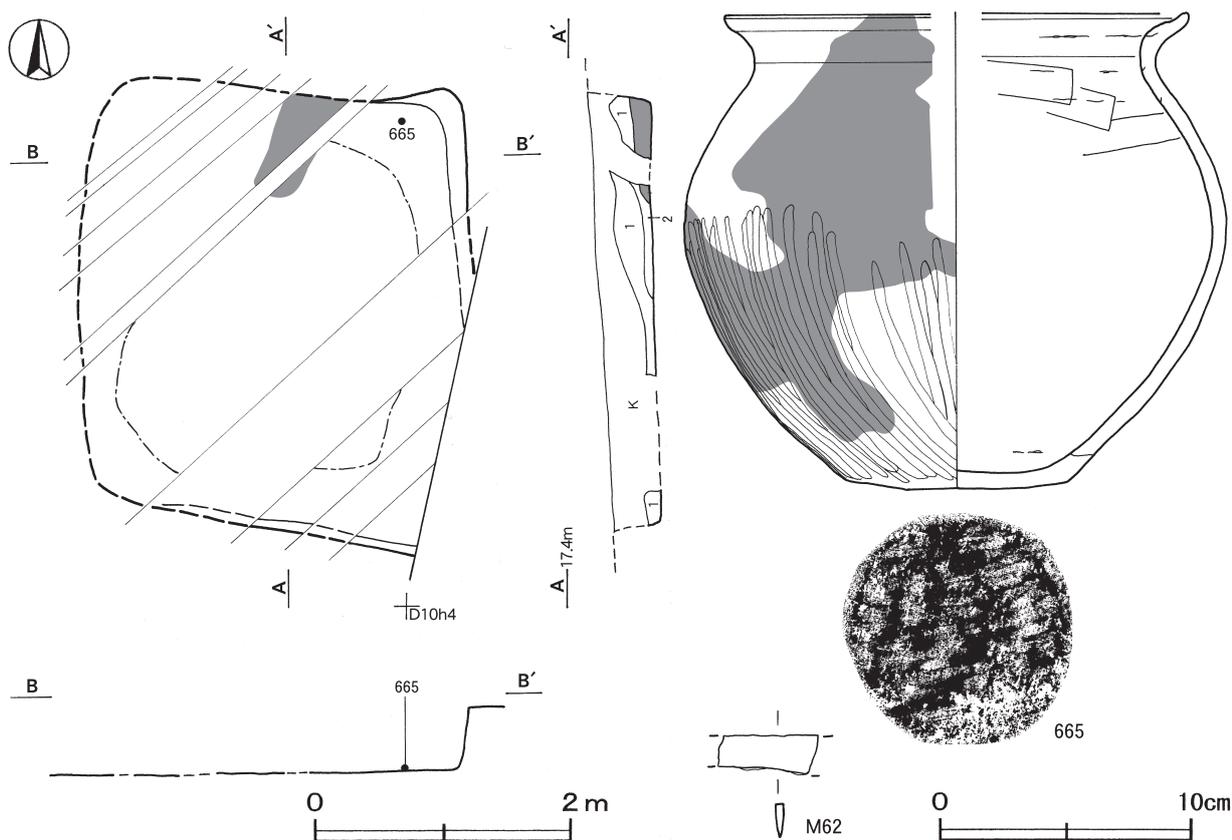
覆土 2層に分層されるが、耕作による攪乱が激しいため堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片20点（坏2，甕18）の他に、耕作による攪乱で混入した弥生土器片9点，須恵器片12点，灰釉陶器片1点も出土している。665は北東コーナー部の床面，M62は覆土中からそれぞれ出土している。その他は細片のため図示できない。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが，出土土器と遺構の形状から時期は7世紀前半と考えられる。



第67図 第72号住居跡・出土遺物実測図

第72号住居跡出土遺物観察表(第67図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
665	土師器	甕	[18.2]	18.9	9.0	長石・石英・雲母・砂粒	にぶい赤褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部中位から下端へラ磨き 内面へラナデ 輪積痕	床面	50% 外面煤付着

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M62	刀子	(4.0)	1.6	0.4	(5.5)	鉄	刀身の一部 切先・茎尻欠損	覆土中	

第77号住居跡 (第68・69図)

位置 調査区西部のD 9 f9区で、標高15mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第98号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.60m，短軸3.52mの方形で，主軸方向はN-28°-Wである。壁高は4～12cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されており，焚口部から煙道部まで112cmである。袖部幅は85cmほどで，床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は，地山面を皿状に掘りくぼめて使用しているが，赤変や硬化部分は確認されなかった。煙道部は，壁外へ34cm掘り込まれ，火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

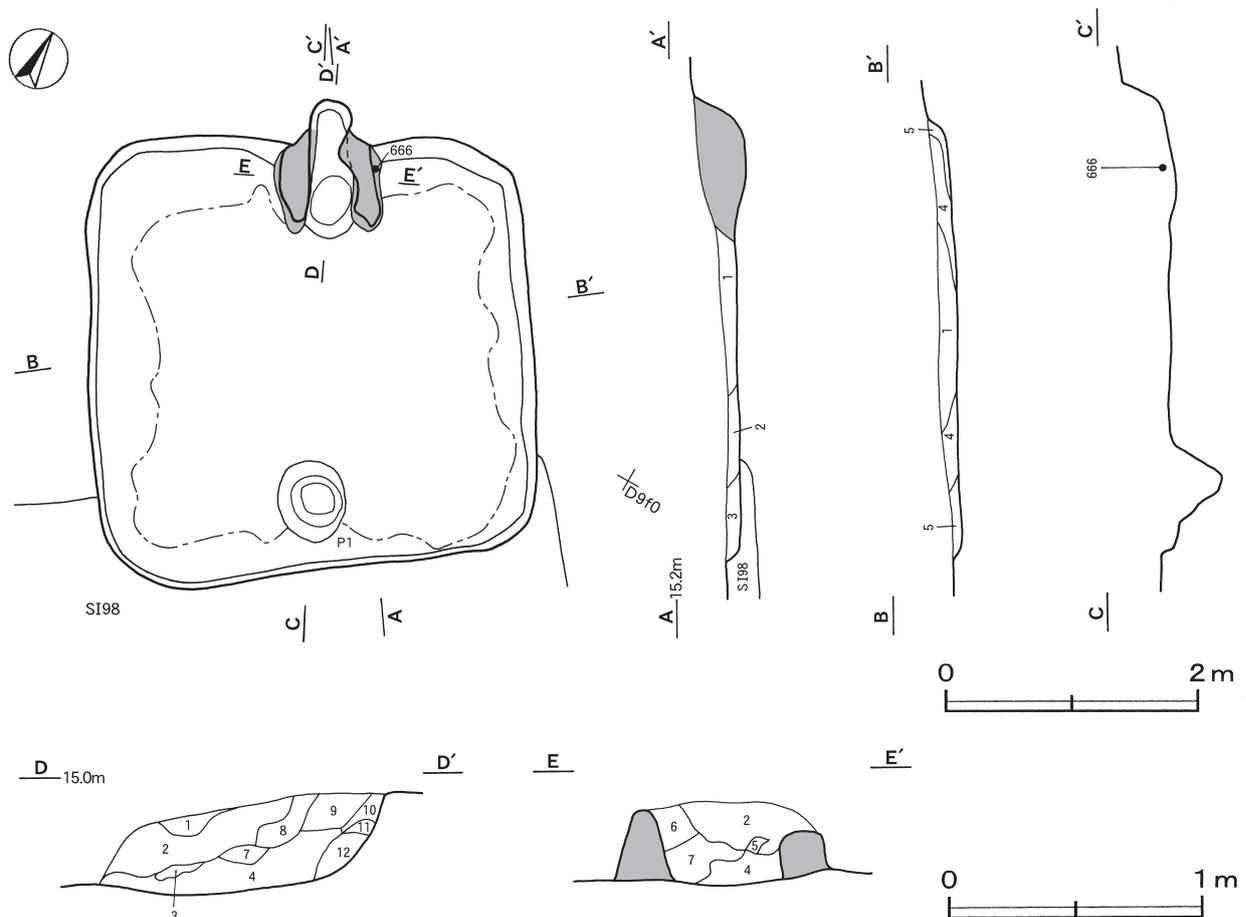
- | | | | | | |
|---|--------|----------------------------|----|-----|--------------------------------|
| 1 | にぶい橙色 | 砂質粘土粒子多量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 | 褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 2 | 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量，ローム粒子微量 | 8 | 褐色 | 砂質粘土粒子多量，焼土ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子微量 |
| 3 | にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量，炭化粒子少量，ローム粒子微量 | 9 | 黒褐色 | 炭化粒子中量，焼土粒子・砂質粘土粒子少量，ローム粒子微量 |
| 4 | 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 | 10 | 褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量，ローム粒子微量 |
| 5 | 黒褐色 | 砂質粘土粒子中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 | 黒褐色 | 炭化粒子中量，ローム粒子微量 |
| 6 | 明褐色 | 炭化粒子・砂質粘土粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量 | 12 | 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量 |

ピット 1か所。深さは40cmで，配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

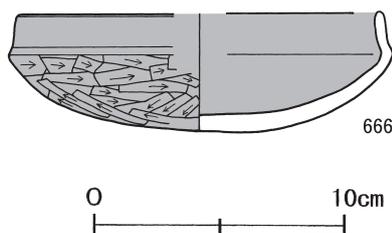
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|---------------------|---|-----|----------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 | 黒褐色 | ローム粒子少量，炭化粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 | 黒色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 | 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | | | |



第68図 第77号住居跡実測図



第69図 第77号住居跡出土遺物
実測図

第77号住居跡出土遺物観察表(第69図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
666	土師器	坏	[14.3]	4.7	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	床面	60%

遺物出土状況 土師器片86点(坏類15, 甕類71), 手捏土器1点, 礫2点の他に, 流れ込んだ弥生土器片39点も出土している。666は竈右側の床面から出土しているが, その他は細片のため図示できない。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが, 時期は, 出土土器から6世紀後葉と考えられる。

第79号住居跡(第70~73図)

位置 調査区西部のD9d8区で, 標高15.2mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第80・90号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 一辺が4.80mほどの方形で, 主軸方向はN-18°-Wである。壁高は20~66cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められており, 壁溝が周回している。

竈 北壁中央部に付設されており, 焚口部から煙道部まで116cmである。袖部幅は84cmほどで, 床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は, 地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており, 火を受けて赤変硬化している。煙道部は, 壁外へ16cm掘り込まれ, 火床面から外傾して立ち上がっている。第3層は天井部の崩落層であると考えられる。

竈土層解説

1 黒褐色	砂質粘土粒子少量, ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	5 にぶい赤褐色	焼土粒子中量, 砂質粘土粒子少量, ローム粒子微量
2 にぶい黄褐色	砂質粘土粒子中量, 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量	6 黒褐色	焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量
3 灰黄褐色	砂質粘土粒子多量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	7 にぶい黄褐色	砂質粘土粒子中量, 炭化粒子少量, 焼土ブロック微量
4 褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量, 炭化物微量	8 黒褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子微量
		9 黒褐色	砂質粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量
		10 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量

ピット 5か所。P1~P4は深さ48~54cmで, 配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ22cmで, 配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

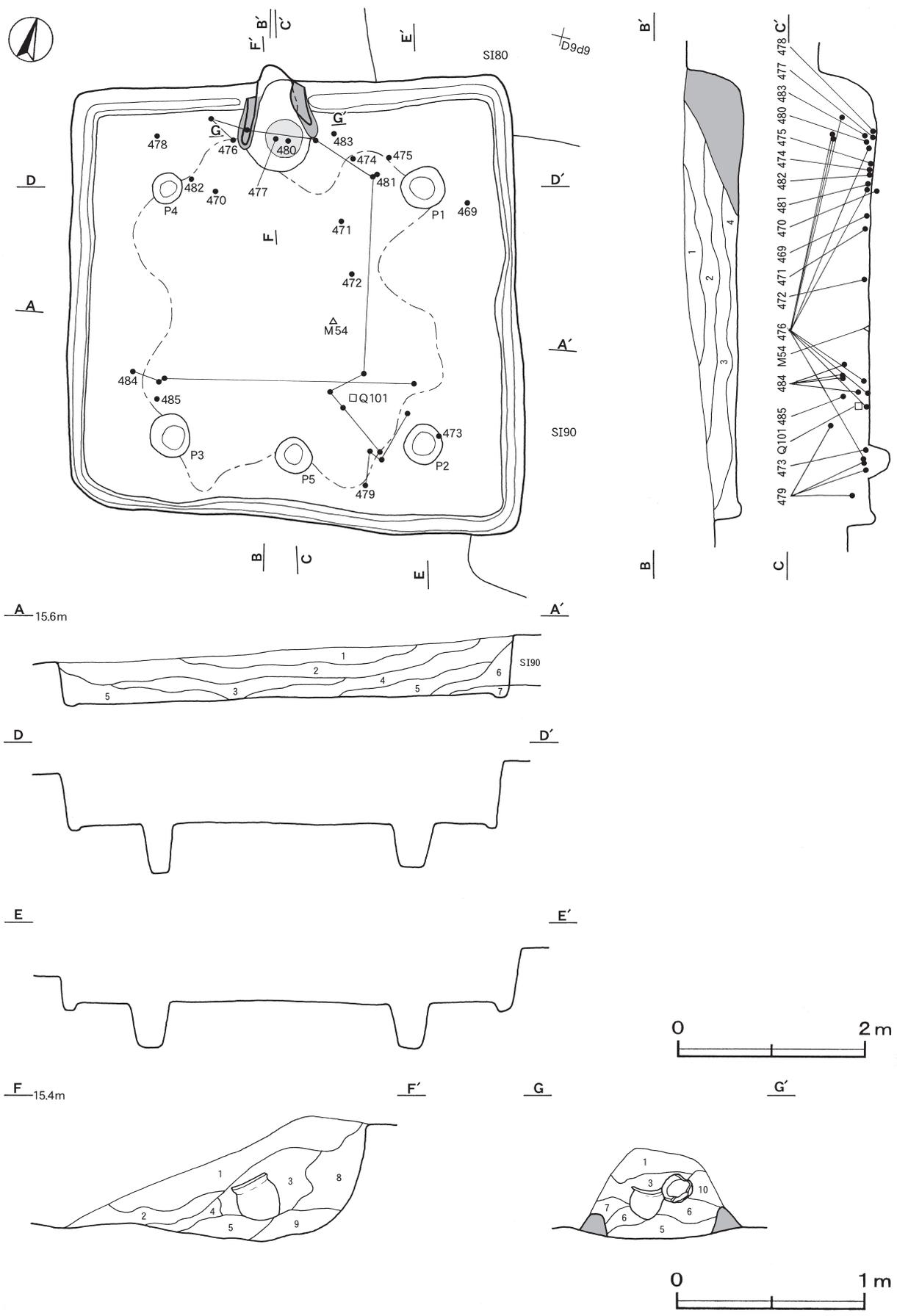
覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示しているが, 遺物の出土状況や接合関係などから人為堆積と考えられる。

土層解説

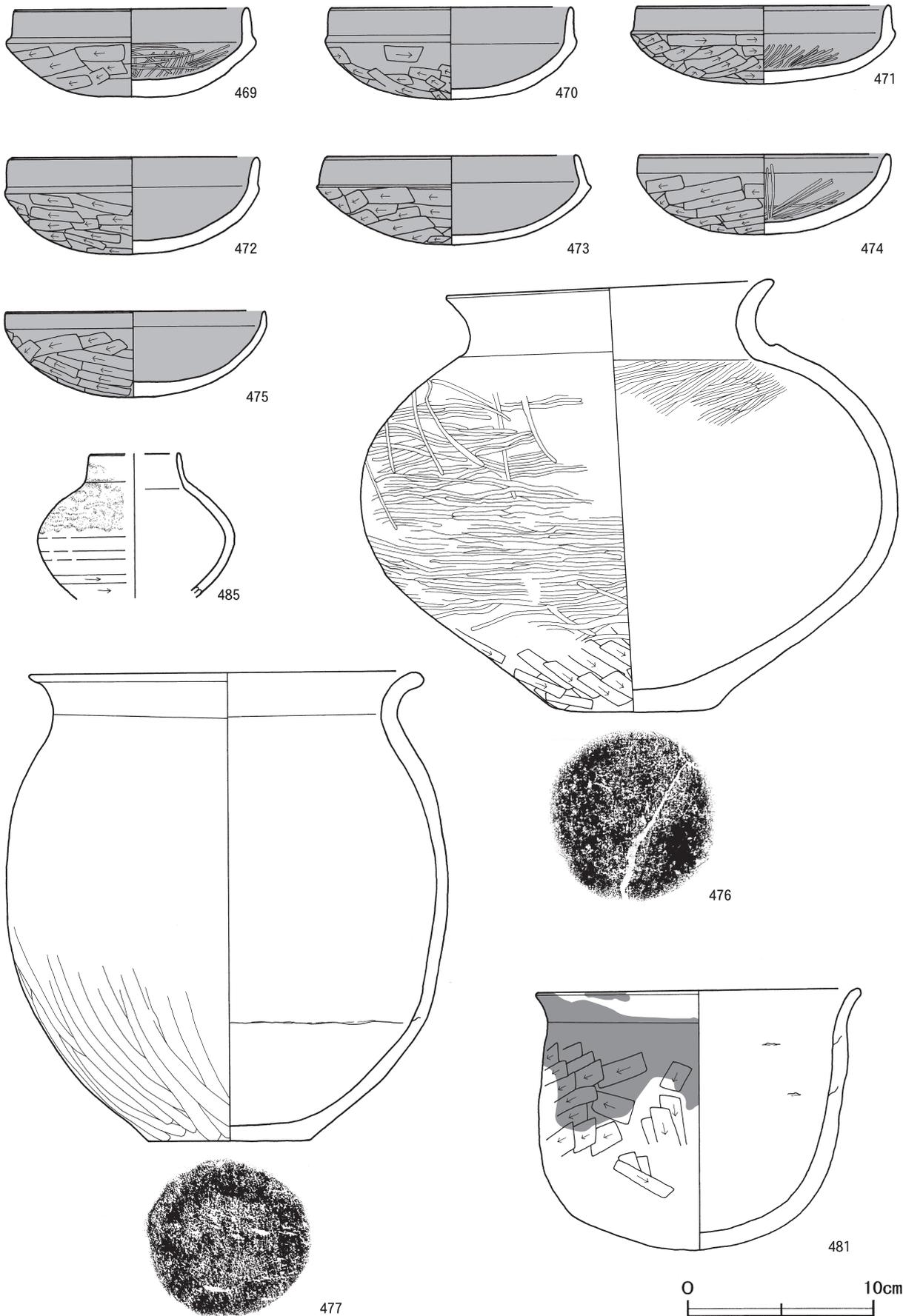
1 暗褐色	焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量	5 黒褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	6 黒褐色	炭化粒子少量, ローム粒子微量
3 黒褐色	炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量	7 黒褐色	炭化粒子少量, ロームブロック微量
4 暗褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片421点(坏類78, 高坏6, 壺1, 甕334, 甗2), 須恵器片5点(壺類1, 瓶類4), 土製品1点(支脚), 石器1点(砥石), 鉄製品1点(刀子), 礫1点の他に, 混入した弥生土器片53点, 須恵器片10点も出土している。469は東壁のやや北側, 470は北西コーナー寄り, 472は中央部, 471・474は中央部のやや竈寄りの床面からそれぞれ出土している。477・480は竈内からの出土で, 住居廃絶時には竈に掛けられた状態で遺棄された可能性が高い。

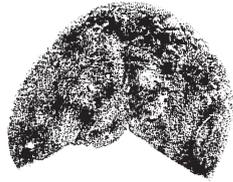
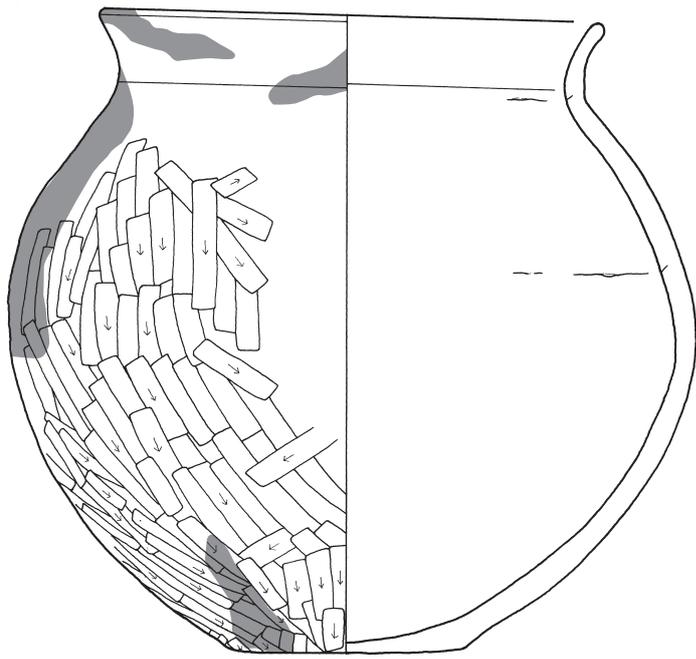
所見 時期は, 出土土器などから6世紀中葉と考えられる。



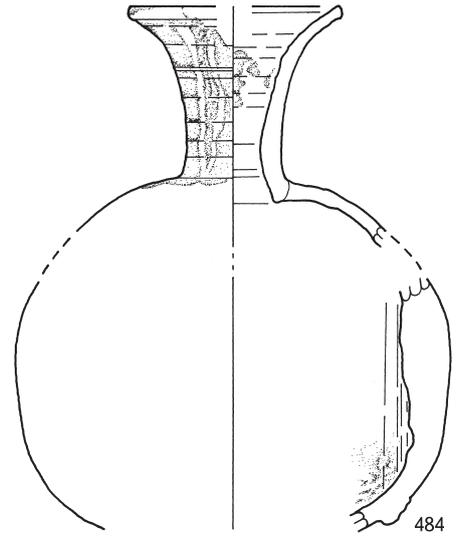
第70图 第79号住居跡実測図



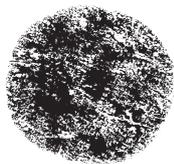
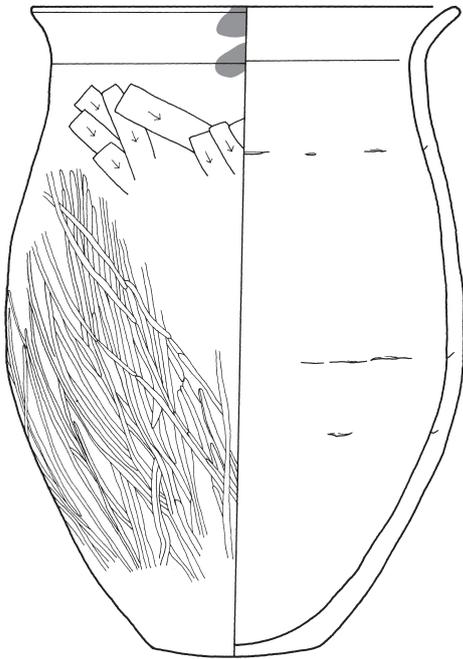
第71図 第79号住居跡出土遺物実測図(1)



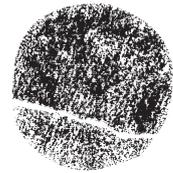
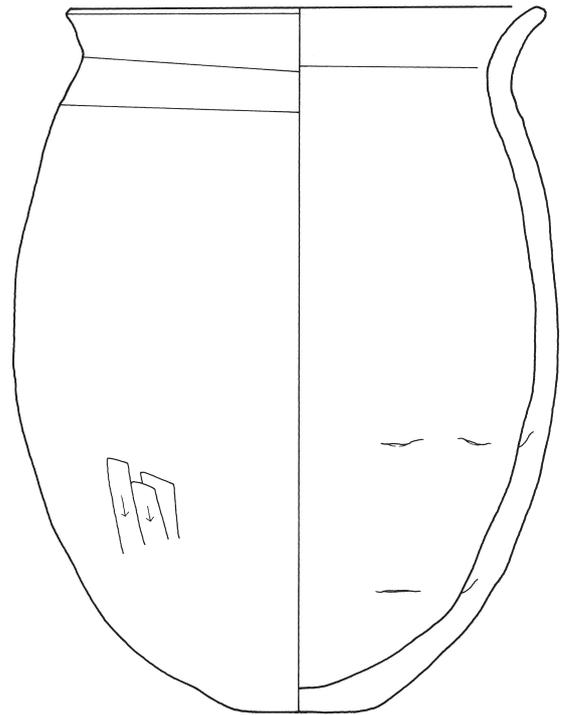
478



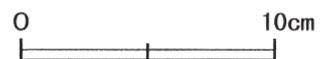
484



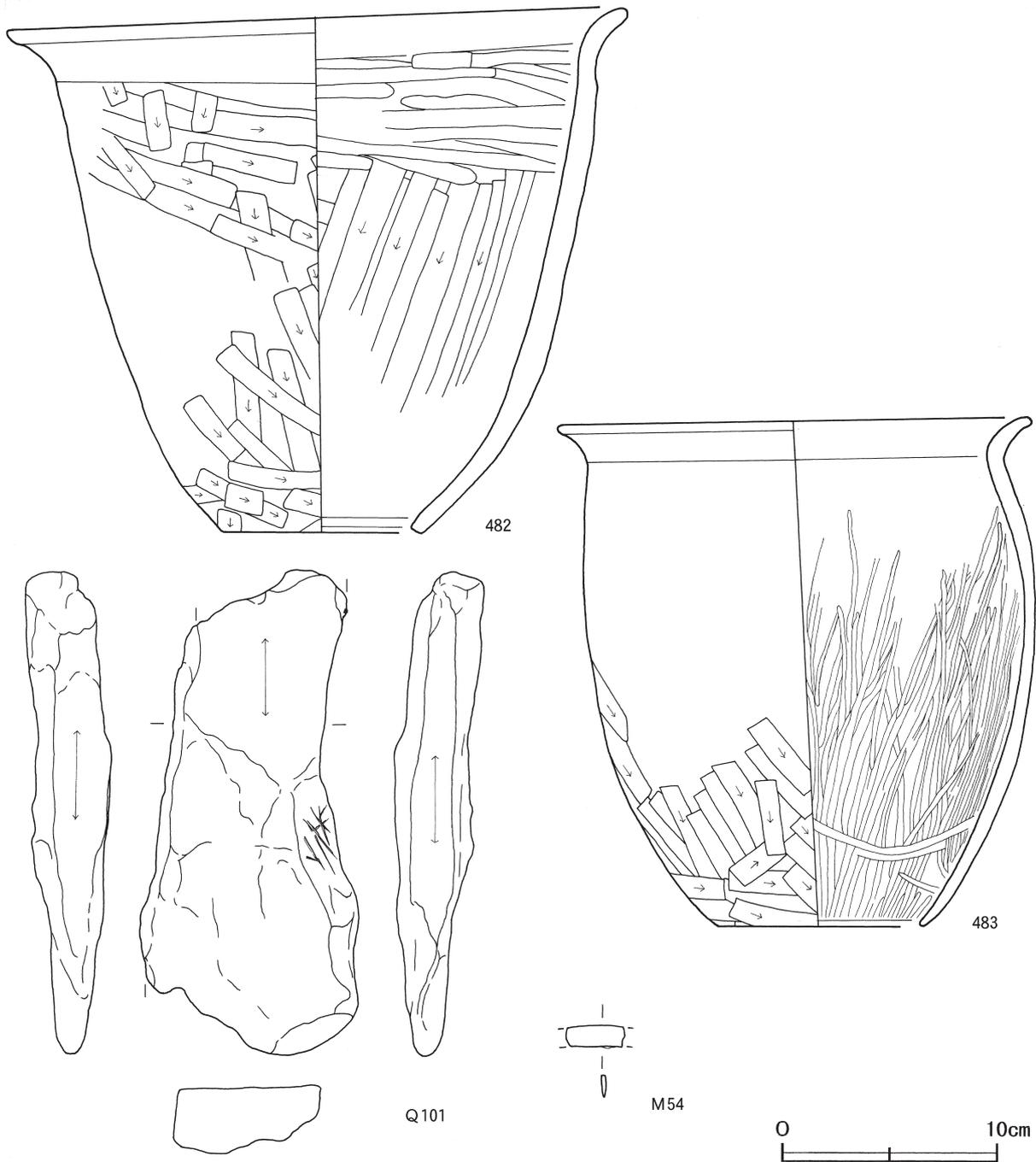
480



479



第72図 第79号住居跡出土遺物実測図(2)



第73図 第79号住居跡出土遺物実測図(3)

第79号住居跡出土遺物観察表(第71~73図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
469	土師器	坏	12.4	4.8	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	床面	100% PL24
470	土師器	坏	13.0	5.0	—	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ	床面	95% PL24
471	土師器	坏	13.4	4.2	—	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	床面	95%
472	土師器	坏	13.3	5.2	—	長石・石英・赤色粒子	暗赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ	床面	95%
473	土師器	坏	13.3	4.8	—	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ	床面	60% PL24
474	土師器	坏	13.2	4.3	—	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	床面	100% PL24
475	土師器	坏	13.9	4.6	—	長石・石英・礫	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ	床面	60%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
476	土師器	壺	17.2	23.3	8.6	長石・石英・礫	にぶい橙	良好	口辺部内・外面横ナデ 一部内面ヘラ磨き 口辺部内・外面横ナデ 一部内面ヘラ磨き	体部外面ヘラ削り 体部上位から 覆土上層～下層	80% PL30
477	土師器	甕	20.6	25.3	8.6	長石・石英・礫	明赤褐	良好	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ヘラナデ 内面ヘラナデ 輪積痕	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ 内面ヘラナデ 輪積痕	覆土上層 100% PL31
478	土師器	甕	19.8	25.8	9.0	長石・石英・赤色 粒子・礫	褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ナデ 輪積痕	体部外面ヘラ削り 内面ナデ 輪積痕	床面 50% 口唇部・頭 部・外面煤付着
479	土師器	甕	18.3	28.1	6.4	長石・石英・礫	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面下位ヘラ削り 内・外面 輪積痕	体部外面下位ヘラ削り 内・外 面摩滅 輪積痕	覆土上層 ～下層 85%
480	土師器	甕	16.8	26.0	6.7	長石・石英・雲母・ 礫	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き 輪積痕	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き 輪積痕	覆土上層 ～下層 95% 口辺部外面 煤付着 PL31
481	土師器	小形甕	17.1	14.0	—	長石・石英・雲母・ 礫	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ナデ 輪積痕	体部外面ヘラ削り 内面ナデ 輪積痕	床面 100% 口辺部外面 煤付着 PL33
482	土師器	甕	28.6	24.6	9.2	長石・石英・雲母・ 赤色粒子・礫	にぶい黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部内・外面ヘラ削り 内面ナデ	体部内・外面ヘラ削り 内面ナデ	床面 95% PL32
483	土師器	甕	21.7	23.8	9.7	長石・石英・礫	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	床面 95%
484	須恵器	提瓶	[8.2]	[20.9]	—	長石・礫	灰オリーブ	良好	ロクロ成形 口辺部外面に沈線 内・外面降灰による自然 釉	口辺部外面に沈線 内・外面降灰による自然 釉	覆土上層 ～中層 15%
485	須恵器	短頸壺	[4.8]	(7.8)	—	砂粒	明褐灰	良好	体部下端回転ヘラ削り 口辺部・体部上位、降灰による 自然釉	口辺部・体部上位、降灰による 自然釉	覆土上層 20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q101	砥石	(22.6)	10.1	3.1	(900.5)	凝灰岩	砥面3面	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M54	刀子	(2.2)	0.7	0.2	(0.9)	鉄	刀身の一部 切先・茎尻欠損	床面	

第80号住居跡（第74～77図）

位置 調査区西部のD9c9区で、標高15.7mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第90・92号住居跡を掘り込み、第79号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.70m、短軸7.40mの方形で、主軸方向はN-20°-Wである。壁高は8～58cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで115cmである。袖部幅は86cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ36cm掘り込まれ、火床面から急激に立ち上がっている。

竈土層解説

1	黒褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子・ローム粒子微量	9	極暗褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
2	褐色	砂質粘土粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量			
3	極暗褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	10	黒褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
4	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	11	黄褐色	砂質粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
5	暗赤褐色	焼土ブロック中量、砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量			
6	暗褐色	炭化粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子微量	12	暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量、砂質粘土粒子微量
7	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	13	極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量
8	黒褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量			

ピット 5か所。P1～P4は深さ56～70cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ37cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 14層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	8	黒褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
2	黒褐色	炭化物少量、ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子微量	9	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
3	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量	10	黒褐色	砂質粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量
4	黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量	11	黒色	ローム粒子・炭化粒子微量
5	黒褐色	炭化粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量	12	黒褐色	炭化物・ローム粒子微量
6	黒褐色	ローム粒子微量	13	黒褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
7	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	14	黒色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量

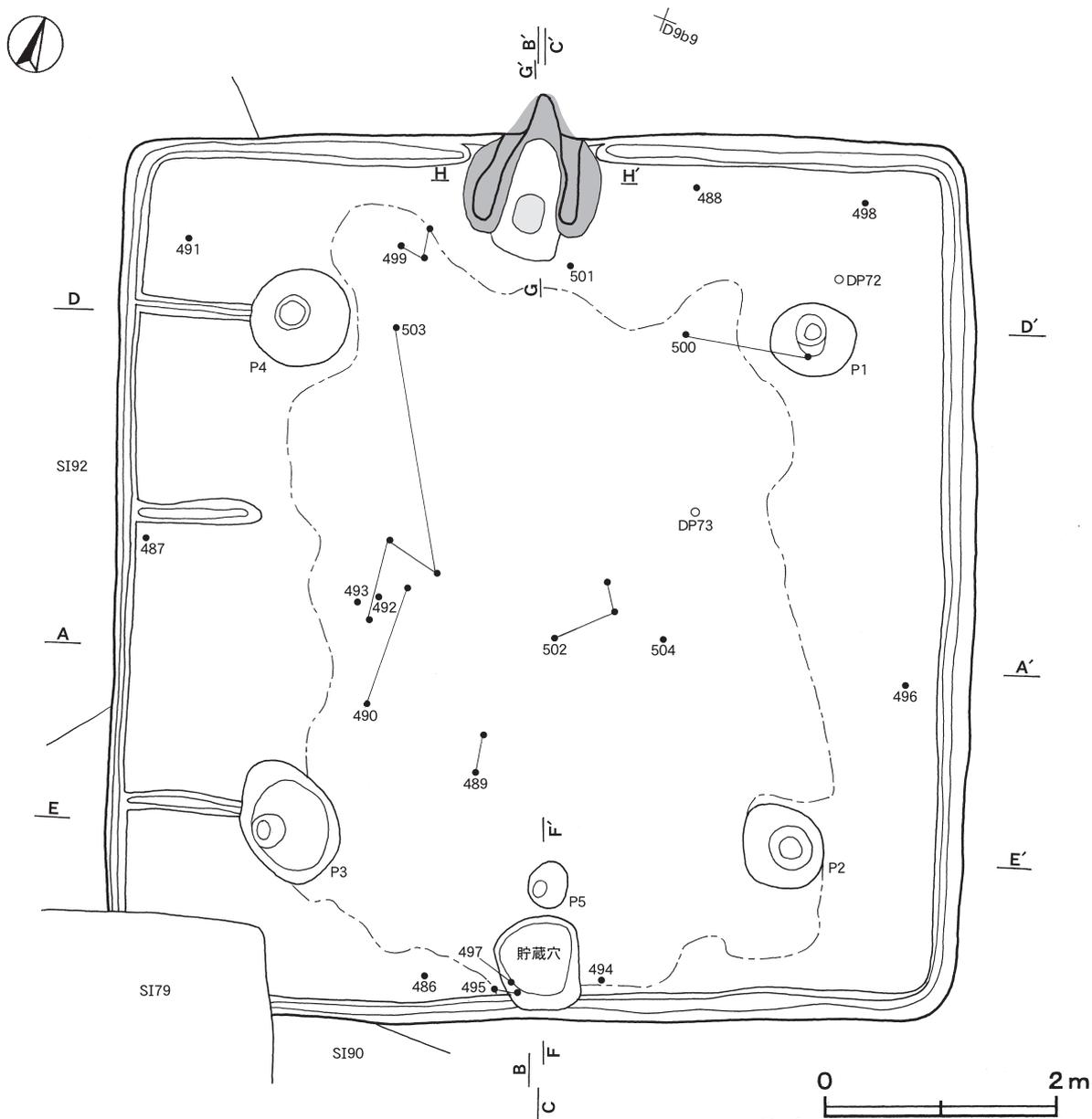
貯蔵穴 南壁中央部の壁際に位置し、長軸81cm、短軸74cmの長方形で、深さは22cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

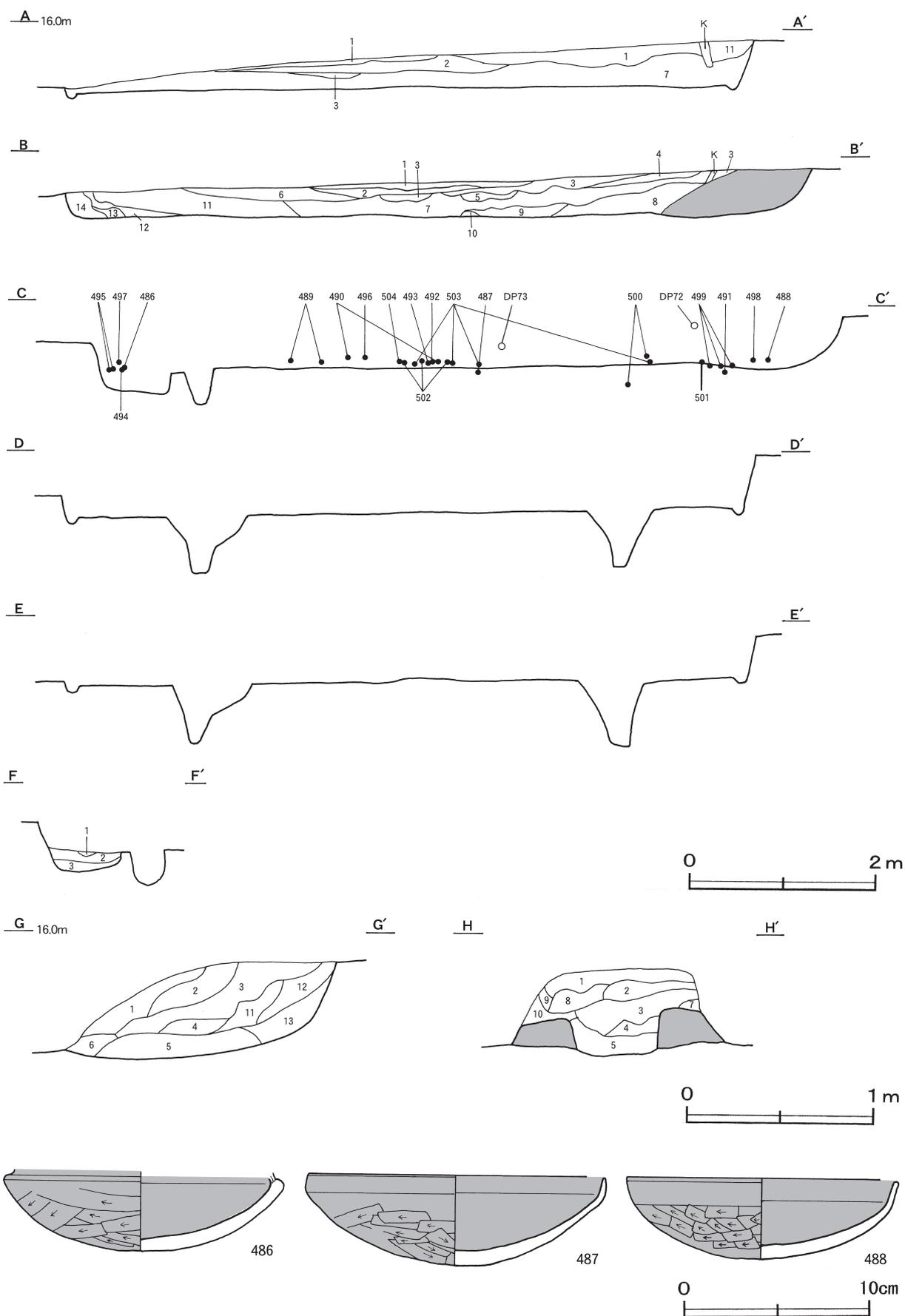
- 1 黒色 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片1352点(坏457, 高坏31, 椀12, 鉢3, 壺1, 甕847, 甌1), ミニチュア土器1点, 土製品7点(球状土錘), 礫8点の他に、流れ込んだ縄文土器片5点, 弥生土器片256点, 須恵器片8点も出土している。486・494・495は南壁際から, 487は西壁際から488は北壁際から, 499・501は竈付近の床面からそれぞれ出土している。

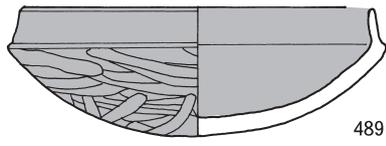
所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



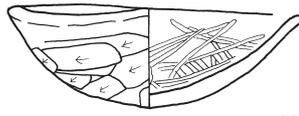
第74図 第80号住居跡実測図



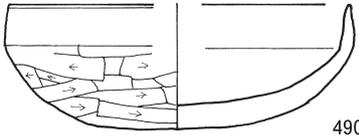
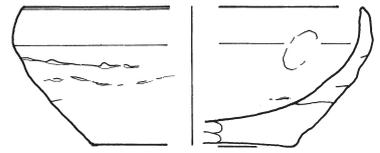
第75图 第80号住居跡・出土遺物実測図



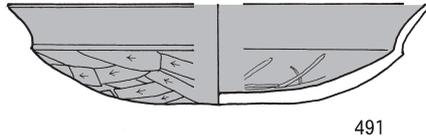
489



493



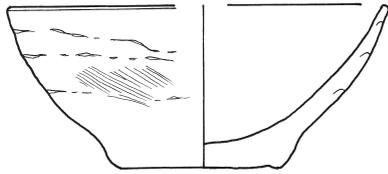
490



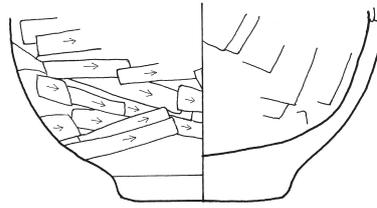
491



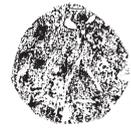
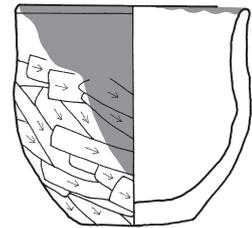
492



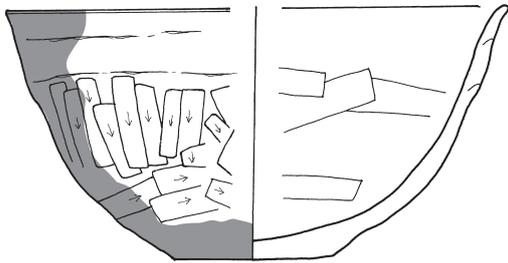
494



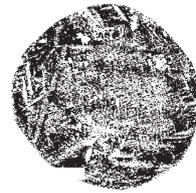
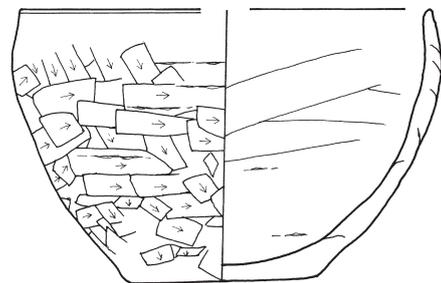
497



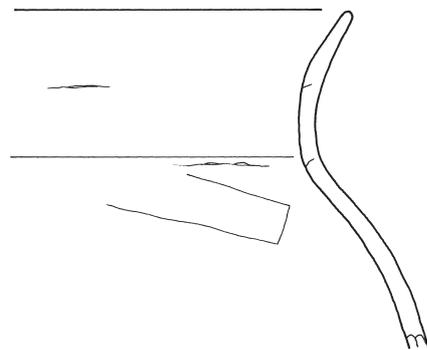
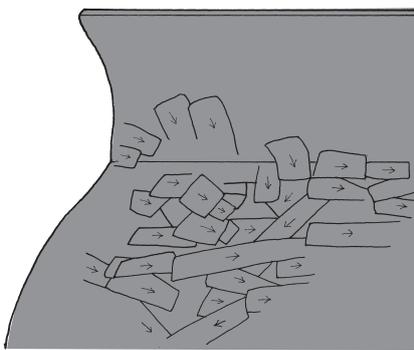
498



496



495

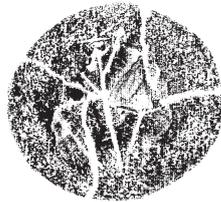
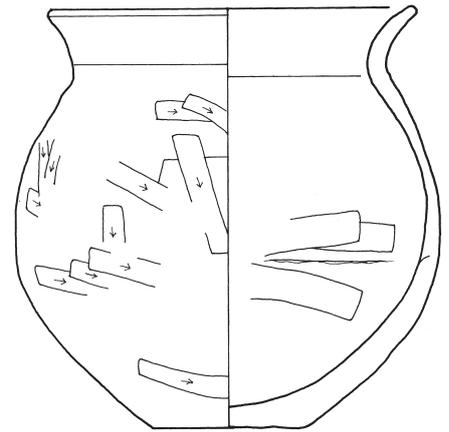
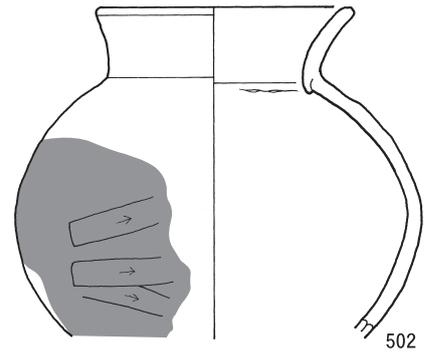
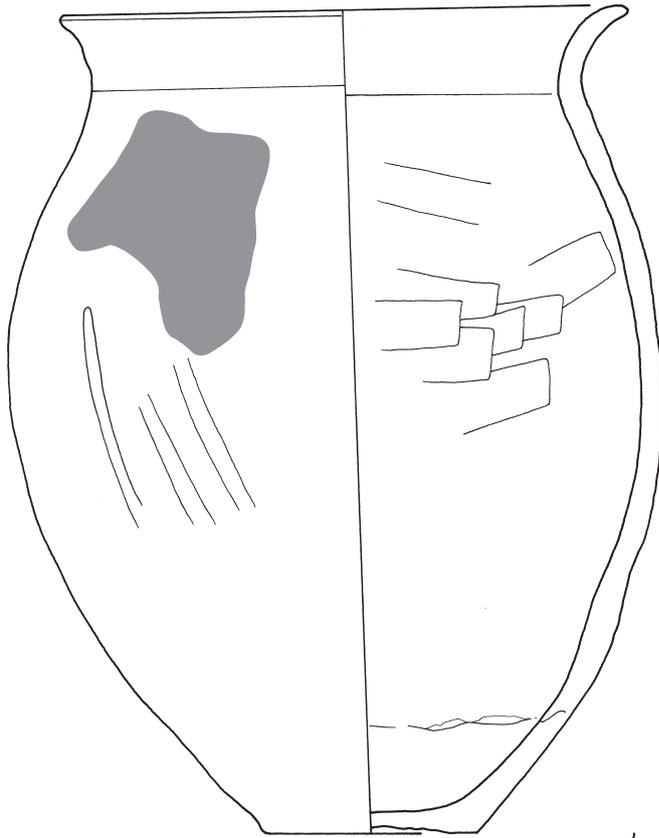


500

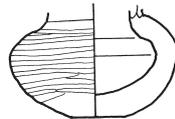
0

10cm

第76图 第80号住居跡出土遺物実測図(1)



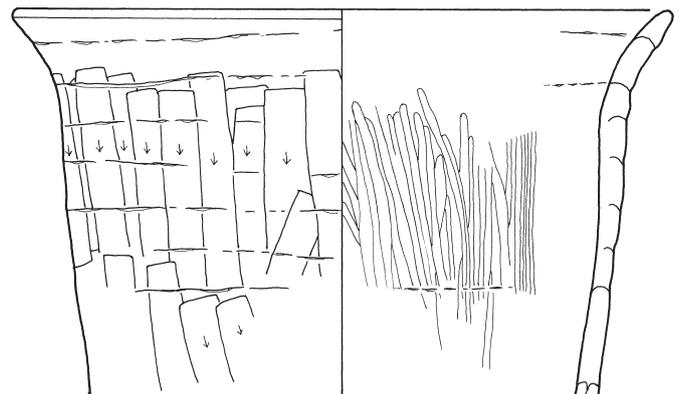
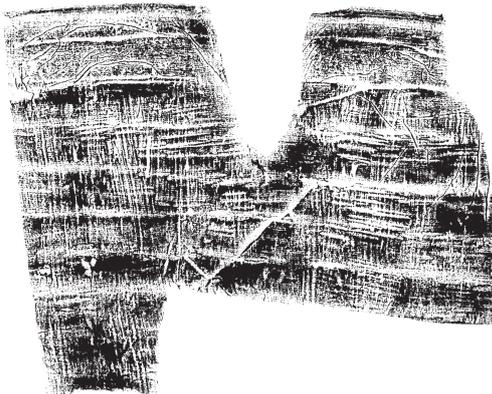
499



504



501



503



DP72



DP73



DP74



DP75



DP76



DP77



DP78



第77图 第80号住居跡出土遺物実測図(2)

第80号住居跡出土遺物観察表(第75～77図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
486	土師器	坏	—	(4.2)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へら削り 内面ナデ	床面	90%
487	土師器	坏	15.9	4.8	—	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へら削り 内面ナデ	床面	95% PL25
488	土師器	坏	14.6	4.3	—	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へら削り 内面ナデ	床面	90% PL24
489	土師器	坏	13.7	5.2	—	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へら削り後ナデ 内面ナデ	覆土下層	80% PL24
490	土師器	坏	[13.3]	4.9	—	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へら削り 内面ナデ	覆土下層	70%
491	土師器	坏	[16.4]	4.0	—	長石・石英・礫	灰黄褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へら削り 内面へら磨き	床面	40%
493	土師器	坏	11.4	4.0	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	口唇部内・外面横ナデ 体部外面へら削り 内面へら磨き	覆土下層	85% PL24
492	土師器	鉢	[13.2]	5.5	[8.0]	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面指頭によるナデ 内面ナデ 指頭痕 輪積痕 底部木葉痕	覆土下層	40%
494	土師器	鉢	[14.8]	6.5	6.2	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面ナデ 輪積痕 体部外面に削痕	床面	95% PL33
495	土師器	鉢	[15.9]	11.0	7.5	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へら削り 内面へらナデ 底部へら削り 輪積痕	床面	70% PL27
496	土師器	鉢	[19.6]	10.0	6.6	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へら削り 内面へらナデ 底部へら削り 輪積痕	覆土下層	60% PL27
497	土師器	鉢	—	(7.8)	6.3	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面へら削り 内面へらナデ 底部へら削り	覆土下層	50%
499	土師器	甕	21.6	32.7	8.5	長石・石英・礫	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へら磨き 内面へらナデ 輪積痕	床面	95% PL31
500	土師器	甕	[28.2]	(13.5)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へら削り 内面ナデ 輪積痕	覆土下層 ～P1内	20% 外面煤付着
498	土師器	小形甕	8.8	8.9	4.9	長石・石英・雲母・礫	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へら削り 内面ナデ 底部へら削り	床面	100% 口唇部内・外面煤付着 PL33
501	土師器	小形甕	14.2	16.6	6.0	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へら削り 内面ナデ 輪積痕	床面	90% PL28
502	土師器	小形甕	9.8	(13.1)	—	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へら削り 内面ナデ 輪積痕	覆土下層	40% 外面煤付着
503	土師器	甌	25.6	(15.3)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へら削り 内面へら磨き 輪積痕	覆土下層	20%
504	土師器	ミニチュア	—	(4.4)	2.2	長石・石英・雲母	赤褐	普通	体部外面へら削り後へら磨き 内面ナデ	覆土下層	60% PL33

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP72	球状土錘	2.6	0.6	(2.9)	(15.1)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土上層	
DP73	球状土錘	3.4	1.5	2.4	22.9	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	
DP74	球状土錘	3.4	0.6～0.8	3.1	29.5	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	
DP75	球状土錘	3.7	0.6	(4.0)	(26.3)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	
DP76	球状土錘	(2.9)	0.9	2.1	(13.8)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	
DP77	球状土錘	2.8	[0.6]	(2.7)	(11.8)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	
DP78	球状土錘	(2.6)	[0.7]	2.5	(8.9)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	

第 81 号住居跡 (第78～80図)

位置 調査区西部のC 9 j8区で、標高16.4mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第84号住居跡を掘り込んでいます。

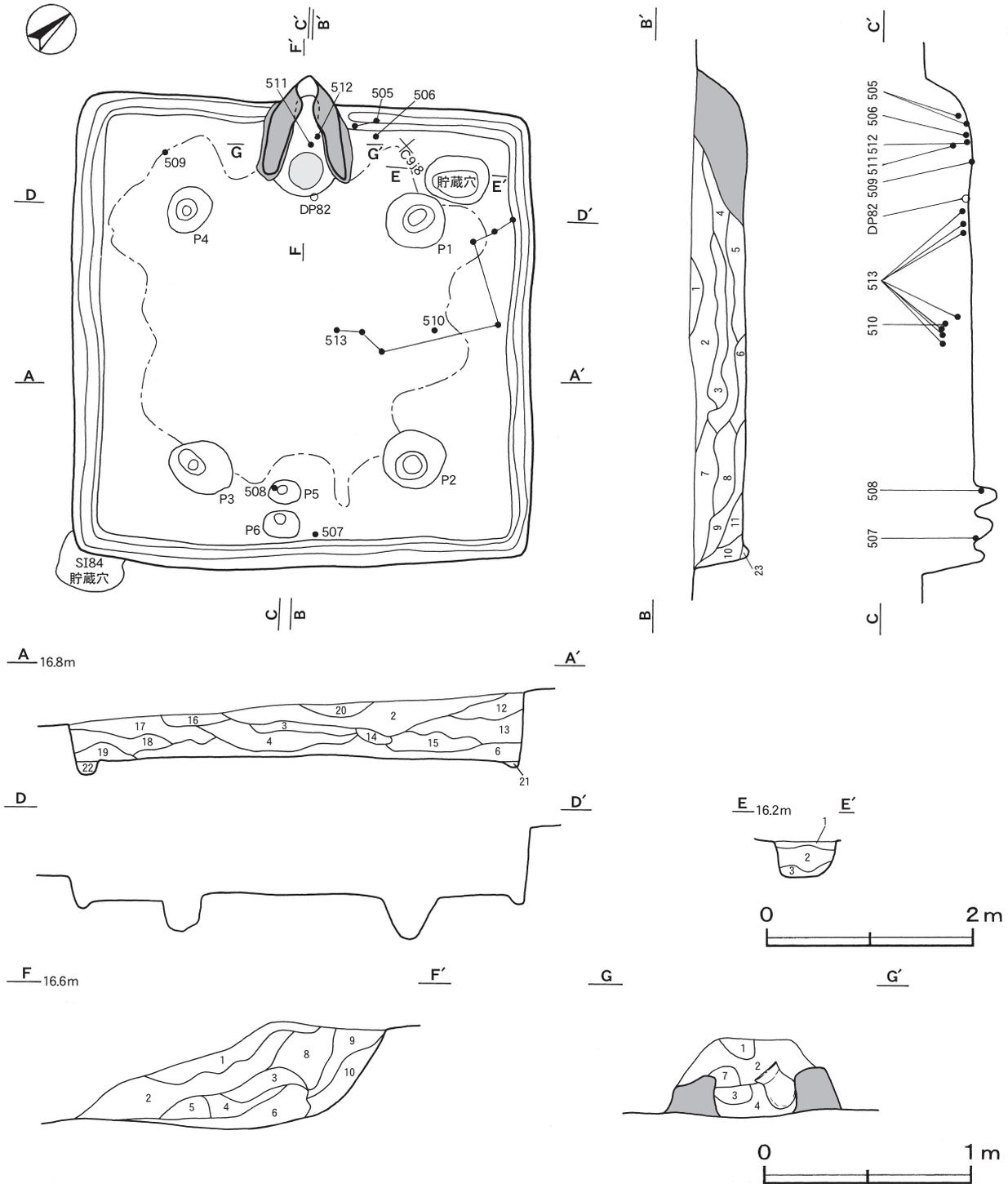
規模と形状 長軸4.55m、短軸4.42mほどの方形で、主軸方向はN-47°-Wである。壁高は24～66cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北西壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで118cmである。袖部幅は86cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ26cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|----------------------------------|----------|-------------------------------|
| 1 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量, ロームブロック・砂質粘土粒子微量 | 6 にぶ赤褐色 | 焼土ブロック少量, 炭化粒子・ローム粒子微量 |
| 2 褐色 | 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 7 暗褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量, ローム粒子微量 |
| 3 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 9 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 5 にぶ赤褐色 | 焼土ブロック中量, 炭化粒子・砂質粘土粒子少量, ローム粒子微量 | 10 にぶ黄褐色 | 砂質粘土粒子少量, ロームブロック・焼土粒子微量 |



第78図 第81号住居跡実測図

ピット 6か所。P 1～P 4は深さ32～48cmで、配置から支柱穴と考えられる。P 5は深さ18cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6は深さ21cmで配置から出入り口施設に伴うピットと考えられるが、P 5との新旧関係は不明である。

覆土 23層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	13 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	14 褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	15 極暗褐色	ローム粒子少量、炭化物微量
4 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	16 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
5 極暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	17 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
6 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	18 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
7 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	19 暗褐色	ローム粒子・炭化物微量
8 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	20 極暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
9 褐色	ロームブロック少量	21 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
10 黒褐色	ロームブロック微量	22 暗褐色	ローム粒子微量
11 暗褐色	ロームブロック微量	23 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
12 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量		

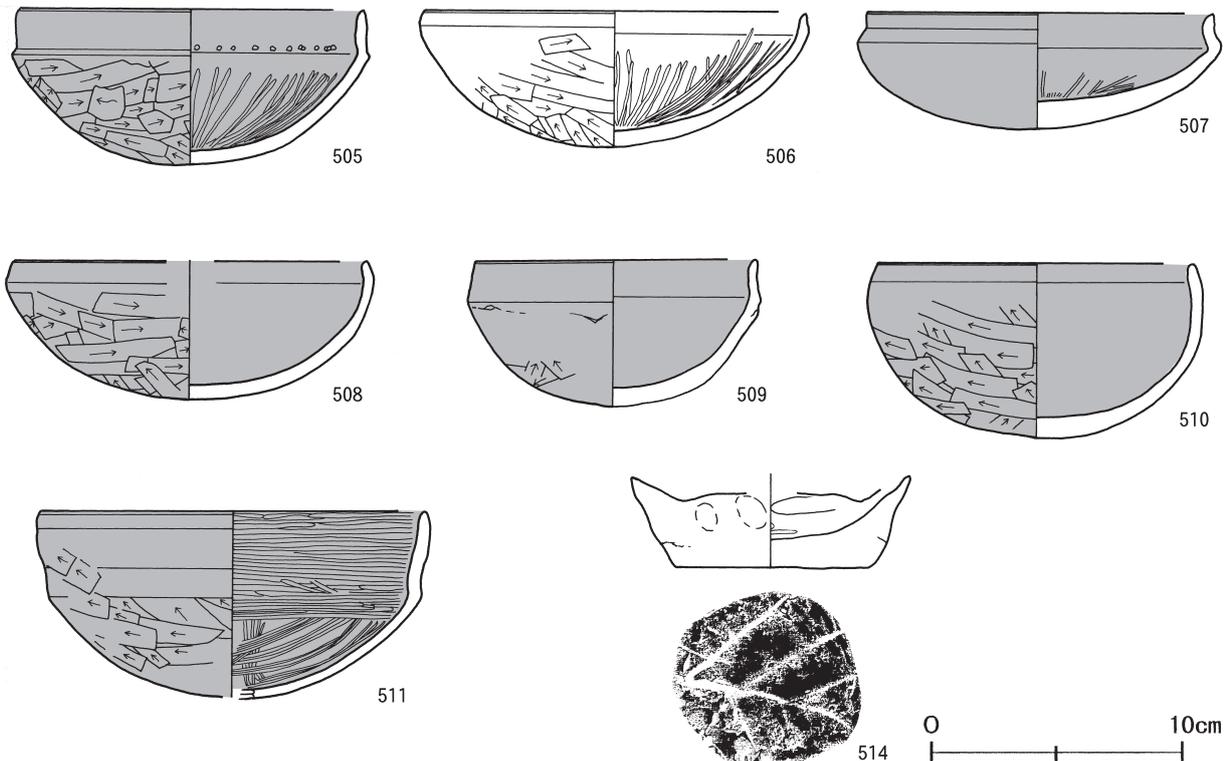
貯蔵穴 北側コーナー部に位置し、長径61cm、短径46cmの楕円形で、深さは42cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

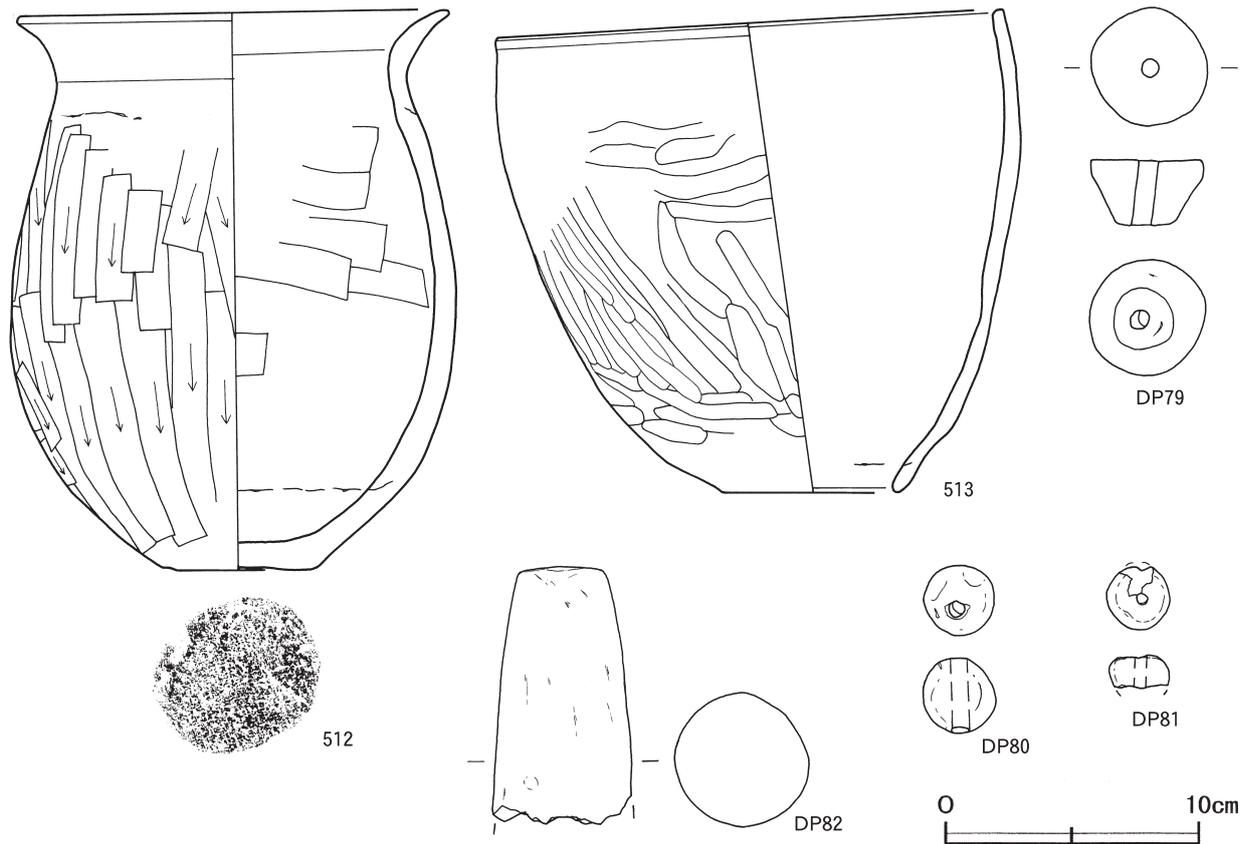
1 褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	3 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
2 褐色	ロームブロック・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土器器片664点（坏164、高坏1、甕496、甔3）、手捏土器1点、土製品4点（球状土錘、管状土錘、紡錘車、支脚）の他に、混入した弥生土器片81点、須恵器片7点も出土している。505・506は竈右側、507が南東壁際、509は西側コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。508はP 5内、511・512は竈内からの出土で、住居廃絶時には竈に掛けられた状態で遺棄された可能性が高いと考えられる。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第79図 第81号住居跡出土遺物実測図(1)



第80図 第81号住居跡出土遺物実測図(2)

第81号住居跡出土遺物観察表(第79・80図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
505	土師器	坏	13.6	6.1	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい 橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデへラ磨き	床面	100%
506	土師器	坏	15.1	5.4	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデへラ磨き	床面	95% PL25
507	土師器	坏	13.7	4.6	—	長石・石英・赤色粒子・礫	にぶい 赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面剥離調整不明 内面へラ磨き	床面	90% PL24
508	土師器	坏	[14.0]	5.5	—	長石・石英・雲母	にぶい 赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後ナデ 内面ナデ	P5内	60%
509	土師器	坏	11.0	5.9	—	長石・石英・雲母・礫	にぶい 橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ 輪積痕	床面	80% PL24
510	土師器	椀	12.5	6.9	—	長石・石英・赤色粒子	にぶい 黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	覆土中層	95% PL29
511	土師器	椀	15.2	7.4	—	長石・石英・雲母	にぶい 赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後ナデ 内面へラ磨き	竈内	90% PL29
512	土師器	甕	16.7	22.2	6.1	長石・石英・雲母	にぶい 橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ 輪積痕	竈内	100% PL31
513	土師器	甗	19.8	19.1	6.9	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口唇部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面ナデ 輪積痕	覆土中層～下層	60%
514	土師器	手握土器	[11.0]	3.7	7.6	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	体部内・外面指頭によるナデ 輪積痕 木葉痕	P1覆土中	80%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP79	紡錘車	4.6	0.7	2.5	56.1	土(長石・石英・雲母)	丁寧なナデ 片面穿孔 断面は台形	覆土中	PL40
DP80	球状土錘	2.8	0.7	3.0	21.9	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	
DP81	球状土錘	2.5	0.4	(1.2)	(7.5)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP82	支脚	(10.2)	3.4 ~ (5.5)	(292.0)	土(長石・石英・雲母)	全面丁寧なナデ	床面	

第84号住居跡（第81・82図）

位置 調査区西部のD 9 a8区で、標高16.0mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第81号住居に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による削平が激しく、東西長3.10mほど、南北長2.20mほどが確認された。主軸方向は、竈の位置や貯蔵穴の配置などからN-62°-Eと考えられる。

床 確認された床面はほぼ平坦で、竈前付近が踏み固められている。

竈 遺存している床面から判断して、東壁中央部に付設されていると考えられる。袖部幅は77cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子少量，炭化物・ローム粒子・砂質粘土粒子 2 極暗赤褐色 焼土ブロック中量，炭化物・砂質粘土粒子微量

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量 3 黒褐色 焼土ブロック少量，炭化物・ローム粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

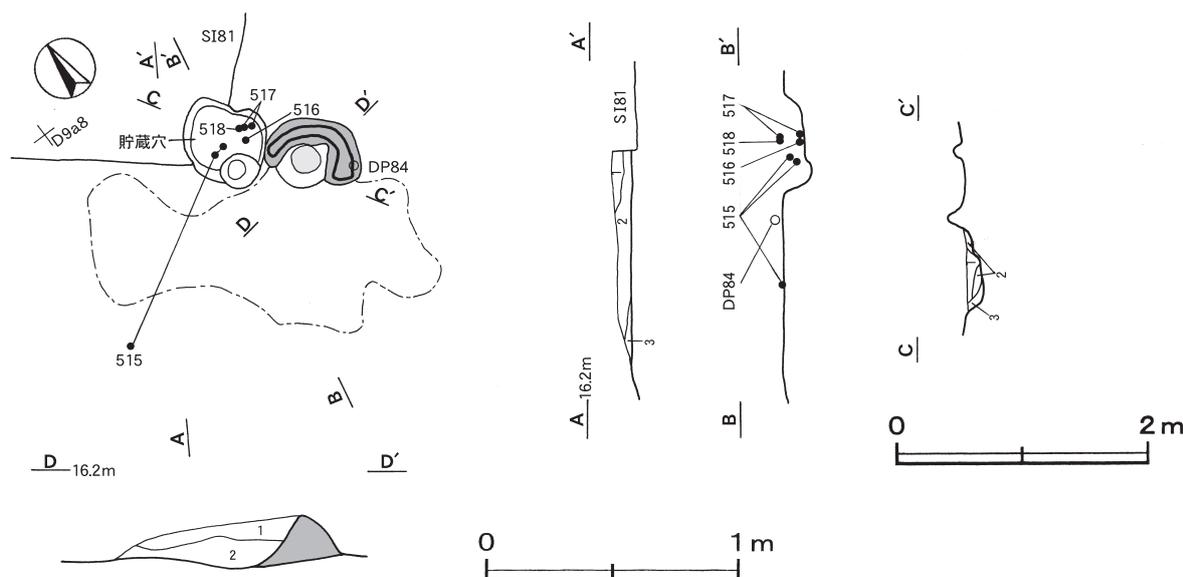
貯蔵穴 北側コーナー部に位置し、長径68cm、短径60cmの楕円形で、深さは12cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土中に焼土粒子や焼土粒子ブロック、白灰などが混じっている。

貯蔵穴土層解説

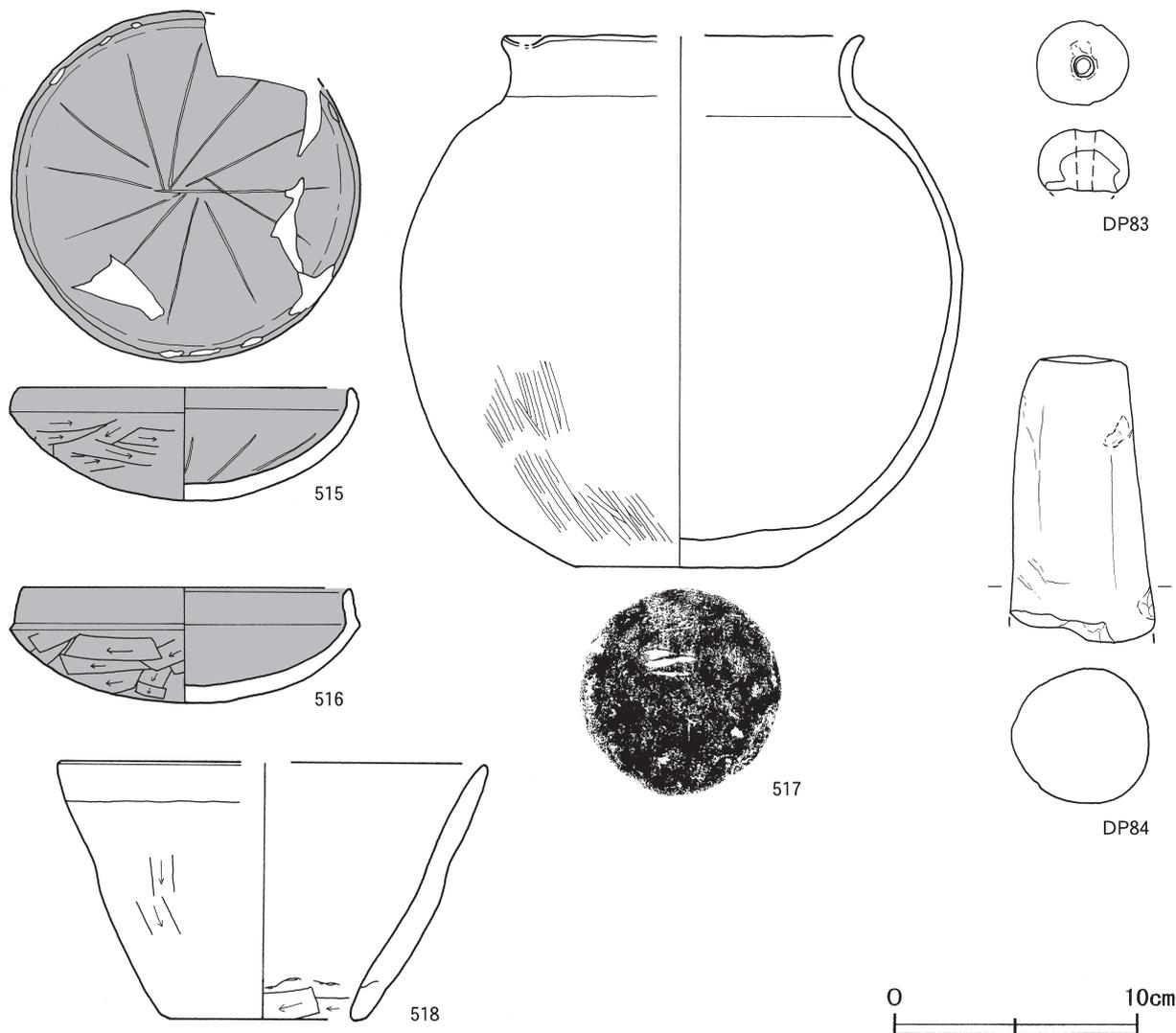
- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 3 極暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子・砂質粘土粒子・灰微量
2 極暗褐色 焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片43点（坏9，甕34），土製品2点（球状土錘，支脚），礫2点の他に、流れ込んだ弥生土器片81点も出土している。517・518は貯蔵穴内から出土しており、518は517の内部から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第81図 第84号住居跡実測図



第82図 第84号住居跡出土遺物実測図
第84号住居跡出土遺物観察表(第82図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
515	土師器	坏	13.6	4.7	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 内面放射状の削痕 体部外面へラ削り後丁寧なナデ	床面～貯蔵穴内	90% PL25
516	土師器	坏	13.3	4.8	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	貯蔵穴内	80% PL24
517	土師器	甕	[14.4]	21.9	8.2	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面ナデ	貯蔵穴内	60%
518	土師器	甕	[17.3]	10.6	8.4	長石・石英・赤色粒子・礫	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 単孔部へラ削り 輪轂痕	貯蔵穴内	70%

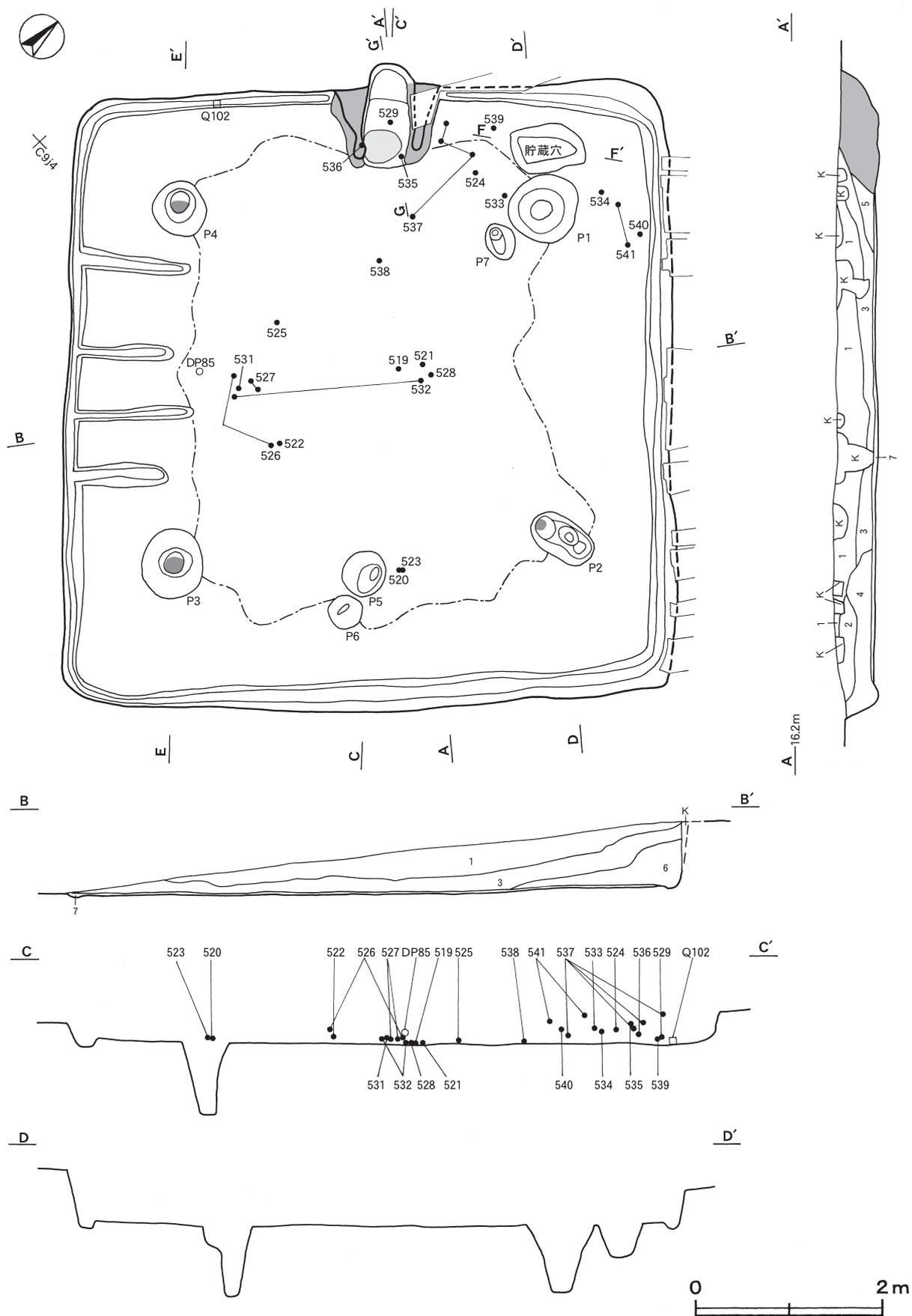
番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP83	球状土錘	3.8	0.6~0.8	(2.6)	(31.4)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP84	支脚	(11.8)	3.2~(5.9)	(382.1)	粘土(長石・石英・雲母)	丁寧なナデ	覆土下層	

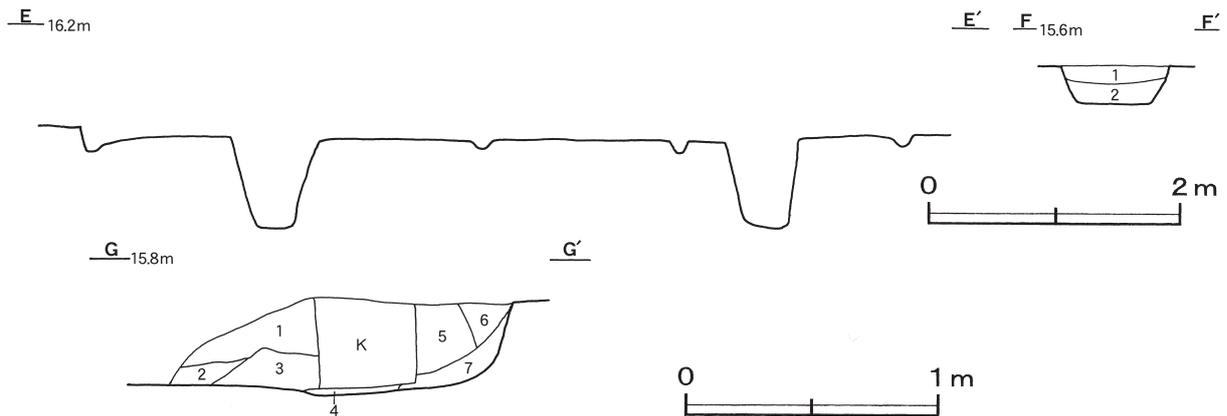
第86号住居跡 (第83~87図)

位置 調査区西部のC9i5区で、標高15.8mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 長軸6.68m、短軸6.46mほどの方形で、主軸方向はN-46°-Wである。壁高は24~66cmで、外傾して立ち上がっている。



第83图 第86号住居跡実测图(1)



第84図 第86号住居跡実測図(2)

床掘り方を調査した結果、床面は2面あることが確認された。廃絶時の床面(第2次面)は、ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、第1次面上に覆土土層第7層を客土して構築している。第1次面も中央部が踏み固められていた。壁溝が竈部分を除いて周回しており、第2次面の南西壁側には間仕切り溝が4条確認された。竈北西壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで112cmである。耕作による攪乱を受けており、袖部幅は112cmほどと考えられ、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、床面とほぼ同じ高さの地山面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ24cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | | | |
|---|--------|-------------------------|---|------|----------------------|
| 1 | にぶい赤褐色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 5 | 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化物・砂質粘土粒子少量 |
| 2 | 暗赤褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 6 | 褐色 | 砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 | 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量 | 7 | 暗赤褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 4 | にぶい赤褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量 | | | |

ピット 7か所。P1～P4は深さ70～74cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ78cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられ、P1以外は柱痕跡が確認できた。また、P2は拡張されたような状態で柱穴が確認されたことから柱を差し替えた可能性があるが明確ではない。P6・P7の性格は不明である。

覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。第7層は1次面の床材である。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|----------------------|---|-----|-----------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 | 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 3 | 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量 | 7 | 褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量 | | | |

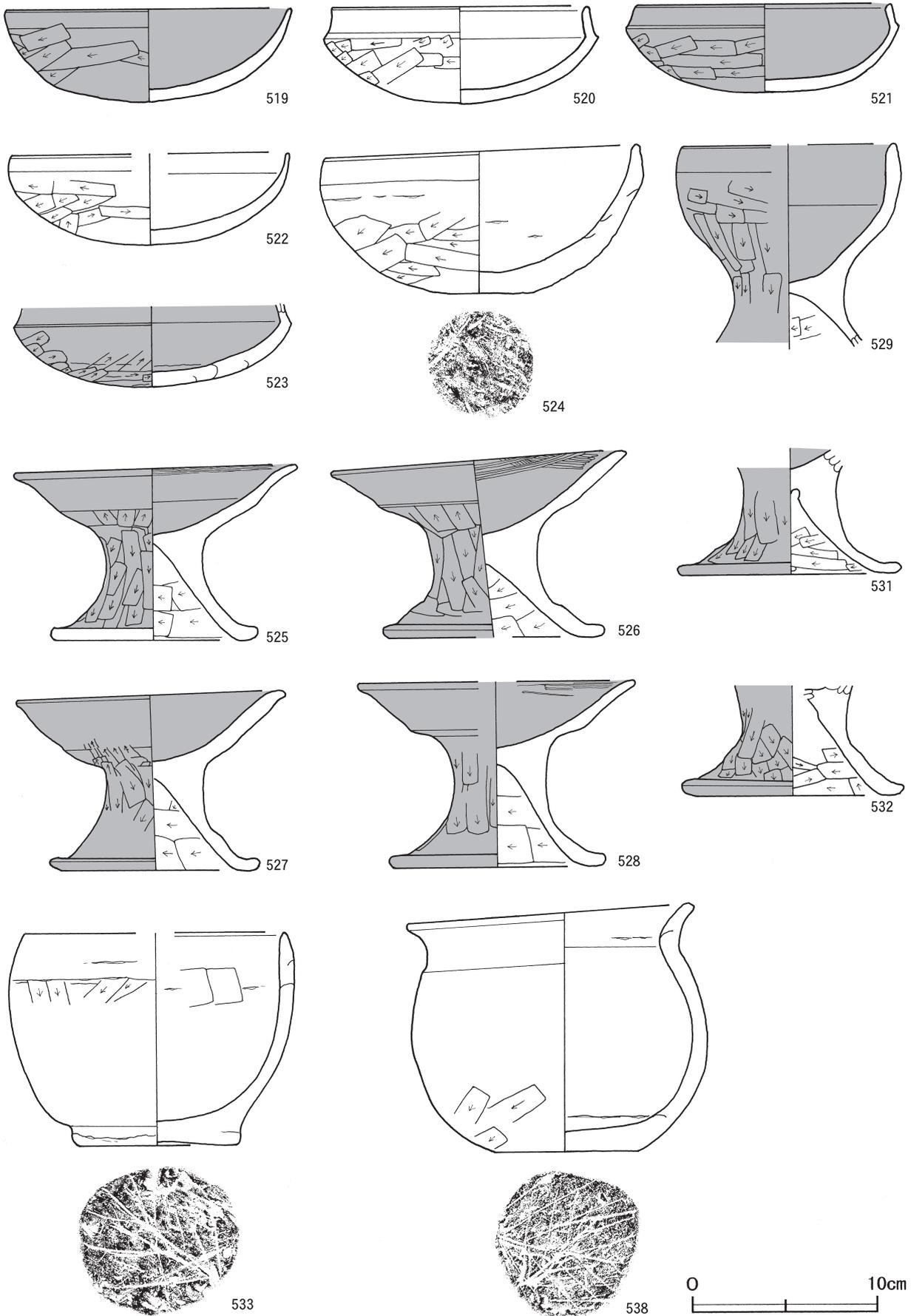
貯蔵穴 北側コーナー部に位置し、長径76cm、短径50cmほどの不整楕円形で、深さは35cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

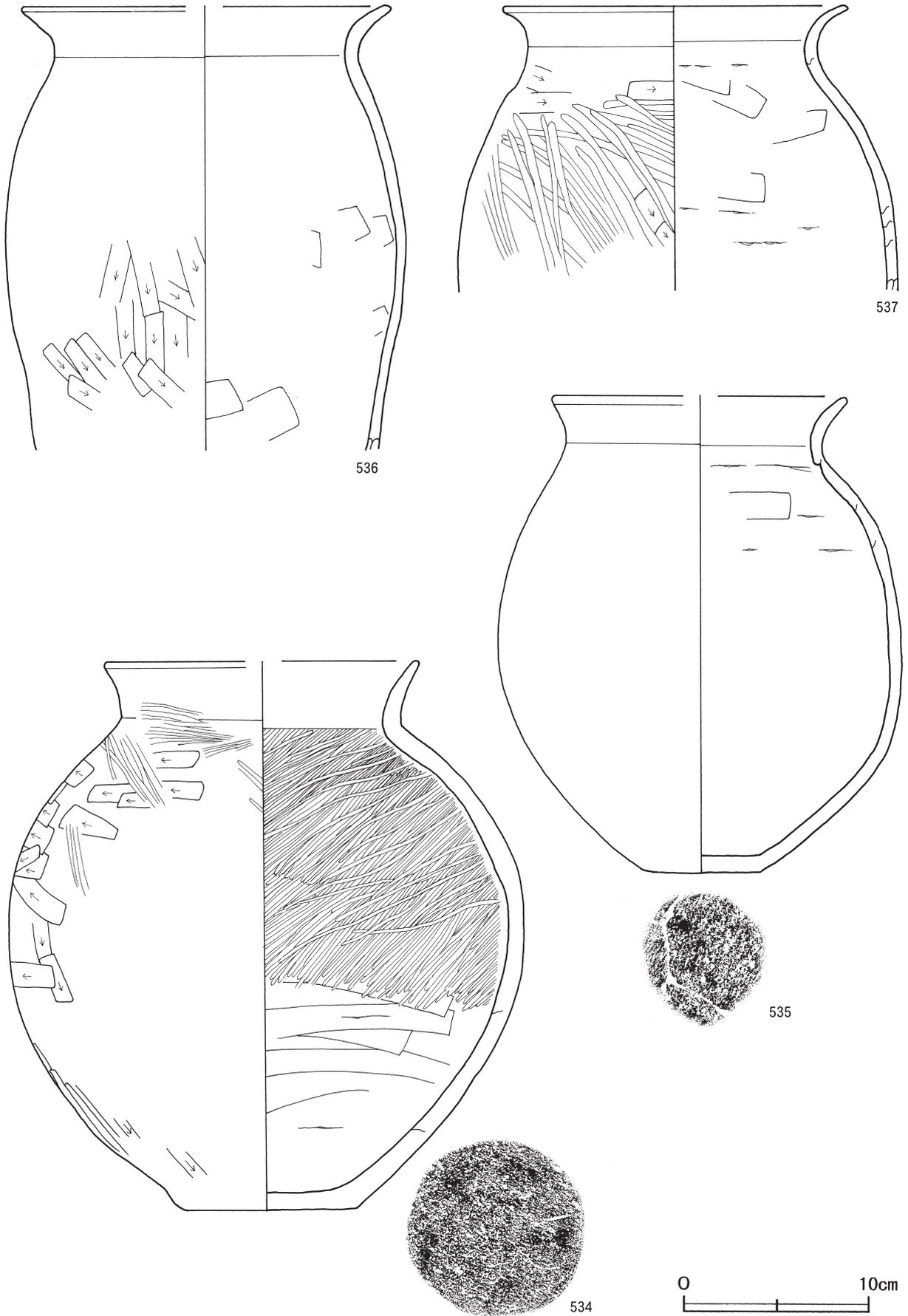
- | | | | | | |
|---|-----|---------------------|---|----|----------------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 2 | 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
|---|-----|---------------------|---|----|----------------|

遺物出土状況 土師器片1701点(坏246, 高坏47, 椀1, 鉢1, 甕1403, 甌3), 土製品4点(球状土錘, 管状土錘, 支脚2), 石器1点(砥石), 礫4点の他に、流れ込んだ弥生土器片18点, 須恵器片5点も出土している。高坏は、529が竈内から出土している他はすべて中央部の床面や床面に近い覆土下層から出土している。また、534は北コーナー付近の覆土下層から、539は竈右側の床面から逆位でそれぞれ出土している。535・536は竈内からの出土で、住居廃絶時には竈に掛けられた状態で遺棄された可能性が高いと考えられる。

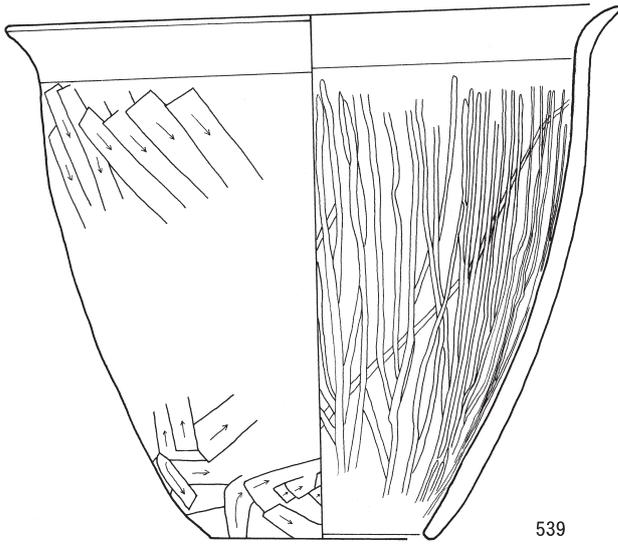
所見 床は2面あり、住居構築時の床の上に新たに貼床をしていることが確認できた。時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第85图 第86号住居跡出土遺物実測図(1)



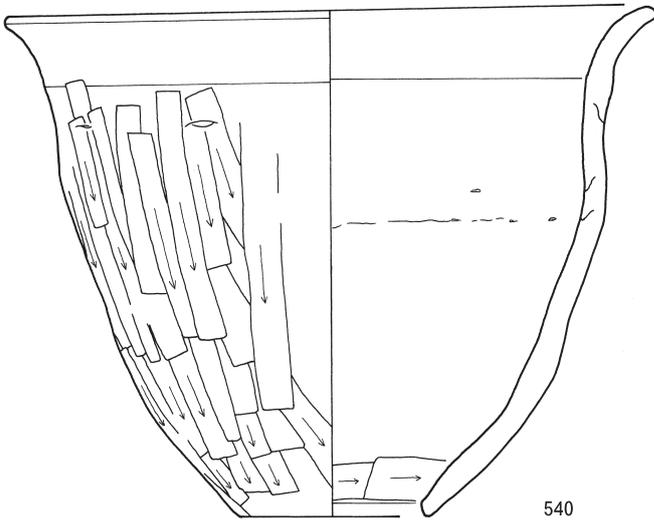
第86図 第86号住居跡出土遺物実測図(2)



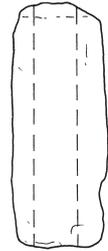
539



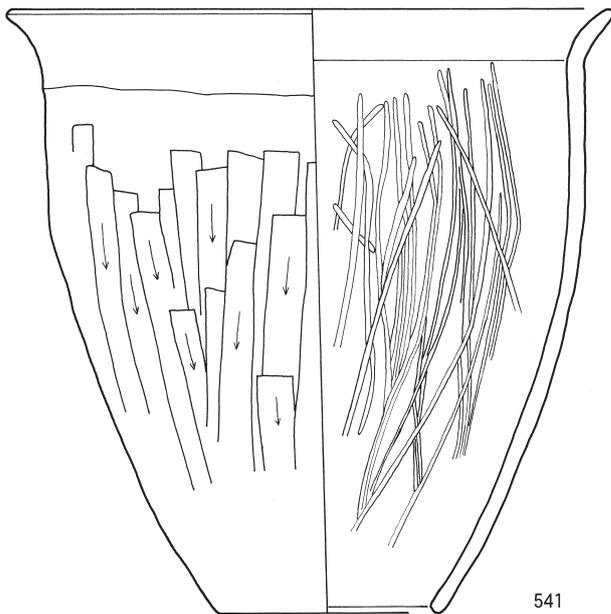
DP85



540



DP86



541



Q102



第87図 第86号住居跡出土遺物実測図(3)

第86号住居跡出土遺物観察表(第85～87図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
519	土師器	坏	15.2	5.0	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後丁寧なナデ	床面	95% PL25
520	土師器	坏	13.6	5.2	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後ナデ 内面ナデ	床面	70% PL25
521	土師器	坏	13.6	4.7	—	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後ナデ 内面ナデ	床面	75% PL25
522	土師器	坏	[14.8]	4.9	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後ナデ 内面ナデ	覆土下層	70% PL25
523	土師器	坏	—	(4.3)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後ナデ 内面ナデ 輪積痕	床面	75%
524	土師器	碗	16.8	8.1	5.5	長石・石英・雲母・赤色粒子・礫	灰褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ 輪積痕	覆土下層	95% PL29
525	土師器	高坏	15.1	9.4	11.2	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	坏部外面, 脚部内・外面へラ削り後ナデ 坏部内面へラ磨き	床面	90% PL30
526	土師器	高坏	15.6	10.0	[12.0]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	坏部外面, 脚部内・外面へラ削り後ナデ 坏部内面へラ磨き	覆土下層	60% PL30
527	土師器	高坏	14.0	9.7	10.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	坏部外面, 脚部内・外面へラ削り 坏部内面ナデ	覆土下層	60% PL30
528	土師器	高坏	[14.8]	10.0	11.7	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	坏部外面, 脚部内・外面へラ削り 坏部内面へラ磨き後ナデ	床面	60% PL30
529	土師器	高坏	[11.4]	(11.0)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	坏部外面, 脚部内・外面へラ削り 坏部内面ナデ	竈覆土下層	60%
531	土師器	高坏	—	(6.7)	12.1	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	脚部内・外面へラ削り後ナデ	覆土下層	40%
532	土師器	高坏	—	(5.9)	12.0	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	脚部内・外面へラ削り後ナデ	覆土下層	40%
533	土師器	鉢	[14.0]	11.5	9.1	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後ナデ 内面へラナデ 輪積痕 底部木葉痕	覆土下層	70% PL27
534	土師器	甕	[16.5]	29.7	9.8	長石・石英	にぶい橙	良好	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラ磨き 輪積痕	覆土下層	95% PL31
535	土師器	甕	[15.6]	25.9	6.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面摩擦調整不明 内面へラナデ 輪積痕	竈内	70%
536	土師器	甕	[19.7]	(24.0)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ	竈内	40%
537	土師器	甕	18.1	(15.5)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラナデ 輪積痕	覆土上層～下層	40%
538	土師器	小形甕	15.2	13.4	7.7	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後ナデ 内面ナデ 輪積痕 底部木葉痕	床面	90% PL27
539	土師器	甗	24.3	21.4	8.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	良好	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	床面	100% PL32
540	土師器	甗	25.3	20.3	7.7	長石・石英・礫	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ 単孔部へラ削り 輪積痕	覆土下層	95% PL32
541	土師器	甗	23.8	24.2	8.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土中層	60%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP85	球状土錘	3.2	0.7～0.8	2.8	(29.3)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP86	管状土錘	3.9	1.7～1.8	9.7	(175.0)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	ナデ	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q102	砥石	(17.0)	5.0	4.0	(397.7)	凝灰岩	砥面2面	覆土下層	

第93号住居跡(第88～90図)

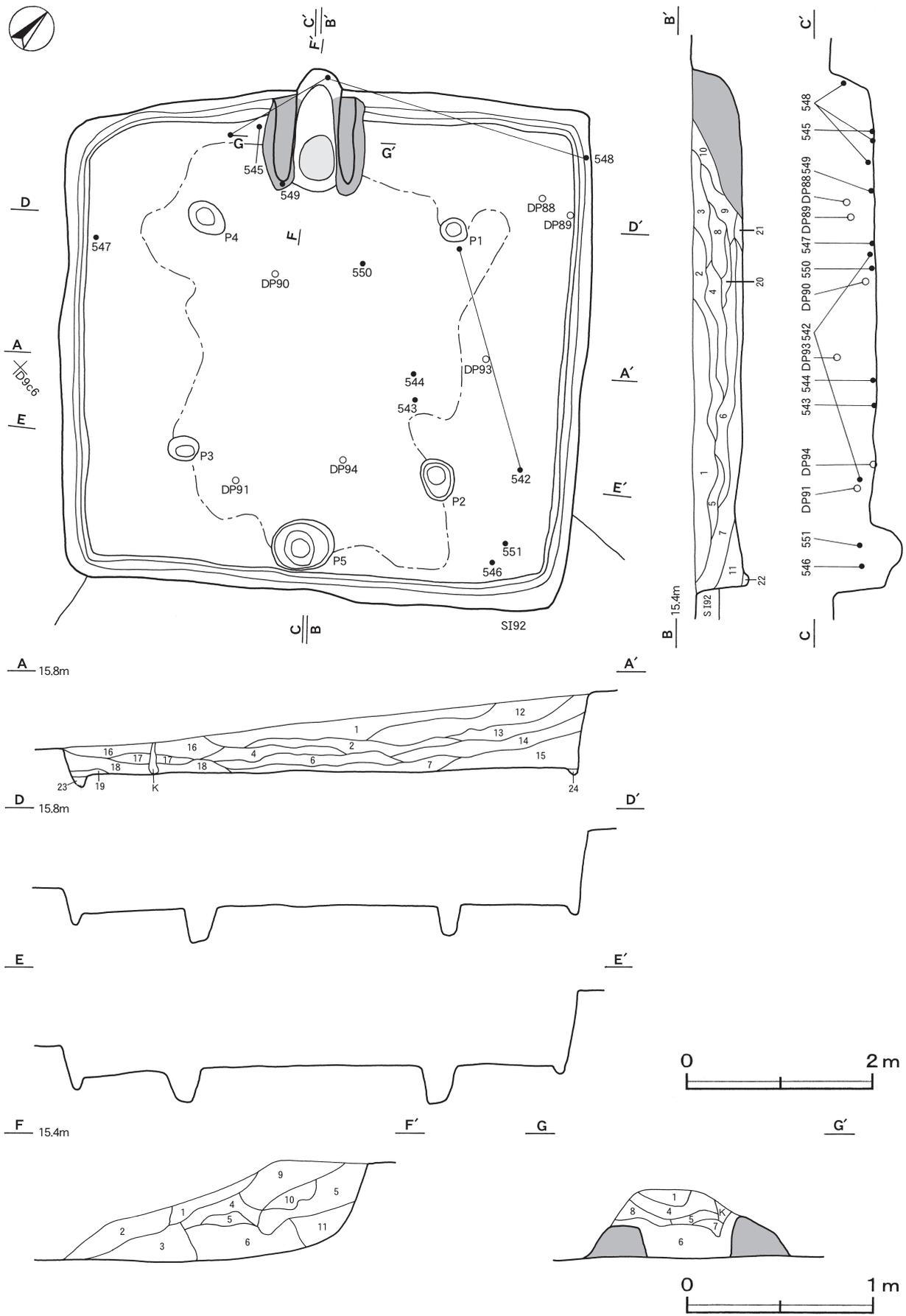
位置 調査区西部のD9b6区で、標高15.4mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第92号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.70m、短軸5.54mほどの方形で、主軸方向はN-44°-Wである。壁高は30～78cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで134cmである。袖部幅は112cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、床面とほぼ同じ高さの地山面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ22cm掘り込まれ、火床面から急激に立ち上がっている。第5層は天井部の崩落層と考えられる。



第88图 第93号住居跡実測図

竈土層解説

1 極暗褐色	炭化物・砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量	7 灰褐色	焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
2 黒褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量	8 にぶい赤褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量, ローム粒子微量
3 にぶい赤褐色	焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量	9 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量, 焼土粒子微量
4 極暗褐色	炭化粒子・砂質粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量	10 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
5 にぶい黄褐色	砂質粘土ブロック中量, 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量	11 暗赤褐色	焼土ブロック中量, 炭化粒子少量, ローム粒子・砂質粘土粒子微量
6 にぶい赤褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子少量		

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ32～42cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ35cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

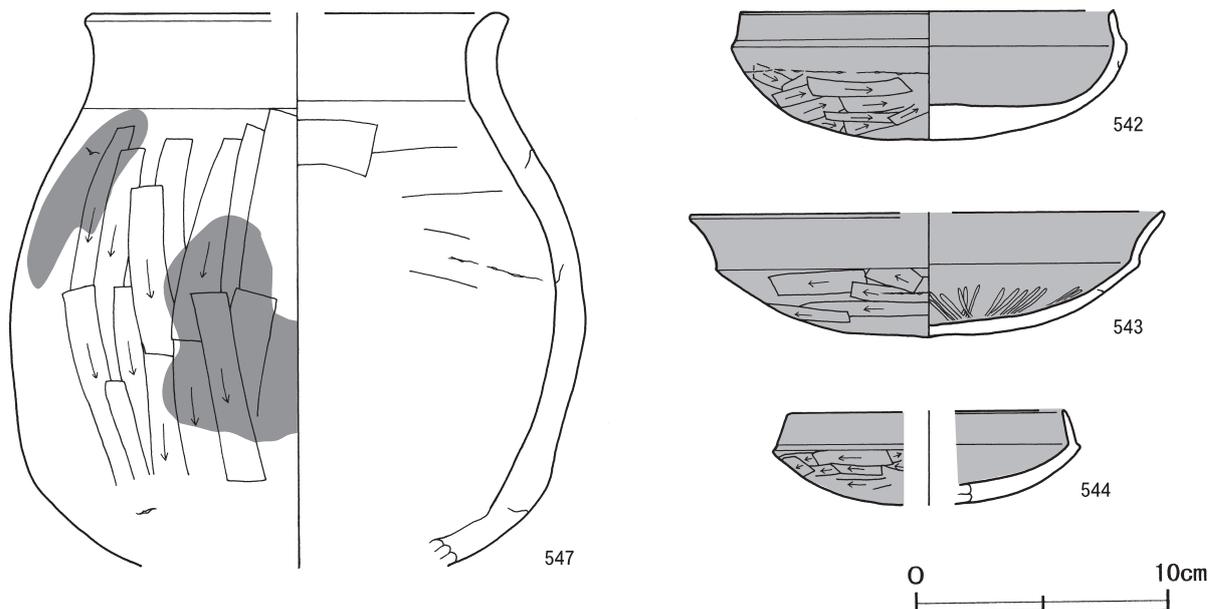
覆土 24層に分層される。周囲から土砂が流入し、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

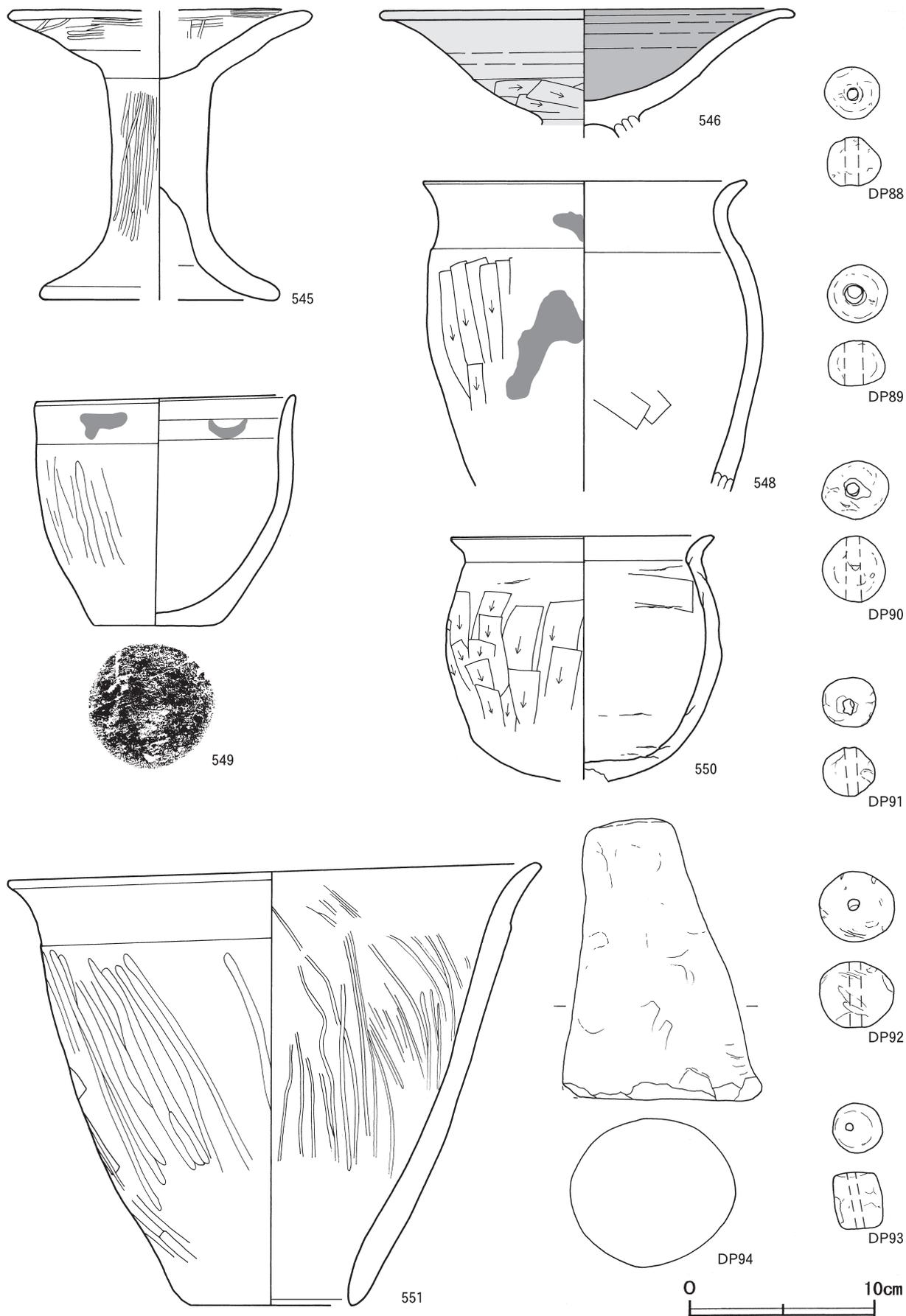
1 黒褐色	ロームブロック・炭化物微量	13 極暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量, 炭化物微量	14 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	15 黒褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	16 暗褐色	ローム粒子少量
5 暗褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量	17 暗褐色	ロームブロック少量, 炭化物微量
6 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	18 極暗褐色	ロームブロック少量
7 黒褐色	ロームブロック微量	19 暗褐色	ロームブロック微量
8 灰褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	20 にぶい褐色	砂質粘土粒子中量, ロームブロック微量
9 黒褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子微量	21 灰褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
10 黒褐色	砂質粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	22 暗褐色	ロームブロック少量
11 黒褐色	炭化粒子少量, ローム粒子微量	23 極暗褐色	ローム粒子少量
12 暗褐色	ローム粒子少量, 炭化物微量	24 褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片1052点（坏302, 高坏16, 甕733, 甑1）, 土製品8点（紡錘車1, 球状土錘5, 管状土錘1, 支脚1）, 礫1点の他に、流れ込んだ縄文土器片21点, 弥生土器片4点, 須恵器片7点も出土している。543・544・550は中央部, 545は北西壁の竈左側, 547は南西壁際の床面からそれぞれ出土している。549は竈左袖部の補強材として使用されていたと考えられ、逆位の状態で出土している。548は北西壁際の覆土下層, 北側コーナー付近の覆土下層, 竈煙道部からそれぞれ出土したものが接合したもので、住居が埋没していく過程で流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第89図 第93号住居跡出土遺物実測図(1)



第90図 第93号住居跡出土遺物実測図(2)

第93号住居跡出土遺物観察表(第89・90図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
542	土師器	坏	14.7	5.0	—	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 輪積痕 体部外面へラ削り後丁寧なナデ 内面ナデ	覆土下層	80% PL25
543	土師器	坏	[18.6]	4.9	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 輪積痕 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	床面	70%
544	土師器	坏	[10.8]	(3.6)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 輪積痕 体部外面へラ削り後ナデ 内面ナデ	床面	50%
545	土師器	高坏	[15.4]	15.7	[12.4]	長石・石英・雲母	橙	普通	坏部外面, 脚部外面へラ削り後へラ磨き 坏部内面へラ磨き	床面	40%
546	土師器	高坏	21.6	(6.8)	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	坏部外面下端へラ削り 内面ナデ	覆土下層	30% 外面赤彩 内面黒色処理
547	土師器	甕	[16.0]	(22.1)	—	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 輪積痕 体部外面へラ削り 内面へラナデ	床面	70% 外面煤付着
548	土師器	甕	17.2	(16.7)	—	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 輪積痕 体部外面へラ削り後一部平行叩き 内面へラナデ	覆土上層～下層	40% 外面煤付着
549	土師器	小形甕	13.2	12.5	6.5	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 輪積痕 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面ナデ	床面	70%
550	土師器	小形甕	13.6	(13.2)	—	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 輪積痕 体部外面へラ削り 内面へラナデ	床面	70% PL36
551	土師器	甌	28.4	24.0	8.6	長石・石英・針状鉱物	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 輪積痕 体部内・外面へラ削り後へラ磨き	覆土下層	95% PL32

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP88	球状土錘	3.0	0.7	2.6	22.7	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	
DP89	球状土錘	3.2	1.0	2.4	22.7	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	
DP90	球状土錘	3.5	0.7~0.8	3.5	(36.8)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP91	球状土錘	2.8	0.6~0.7	2.7	19.3	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	
DP92	球状土錘	4.0	0.6	3.7	56.0	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	
DP93	管状土錘	2.8	0.4	3.1	26.2	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土上層	

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP94	支脚	15.3	4.2~10.7	(1098.0)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	全面ナデ 指頭痕	床面	PL41

第97号住居跡(第91・92図)

位置 調査区西部のD9g0区で、標高15.2mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第98号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.90m、短軸4.70mほどの方形で、主軸方向はN-18°-Wである。壁高は25~52cmで、外傾して立ち上がっている。

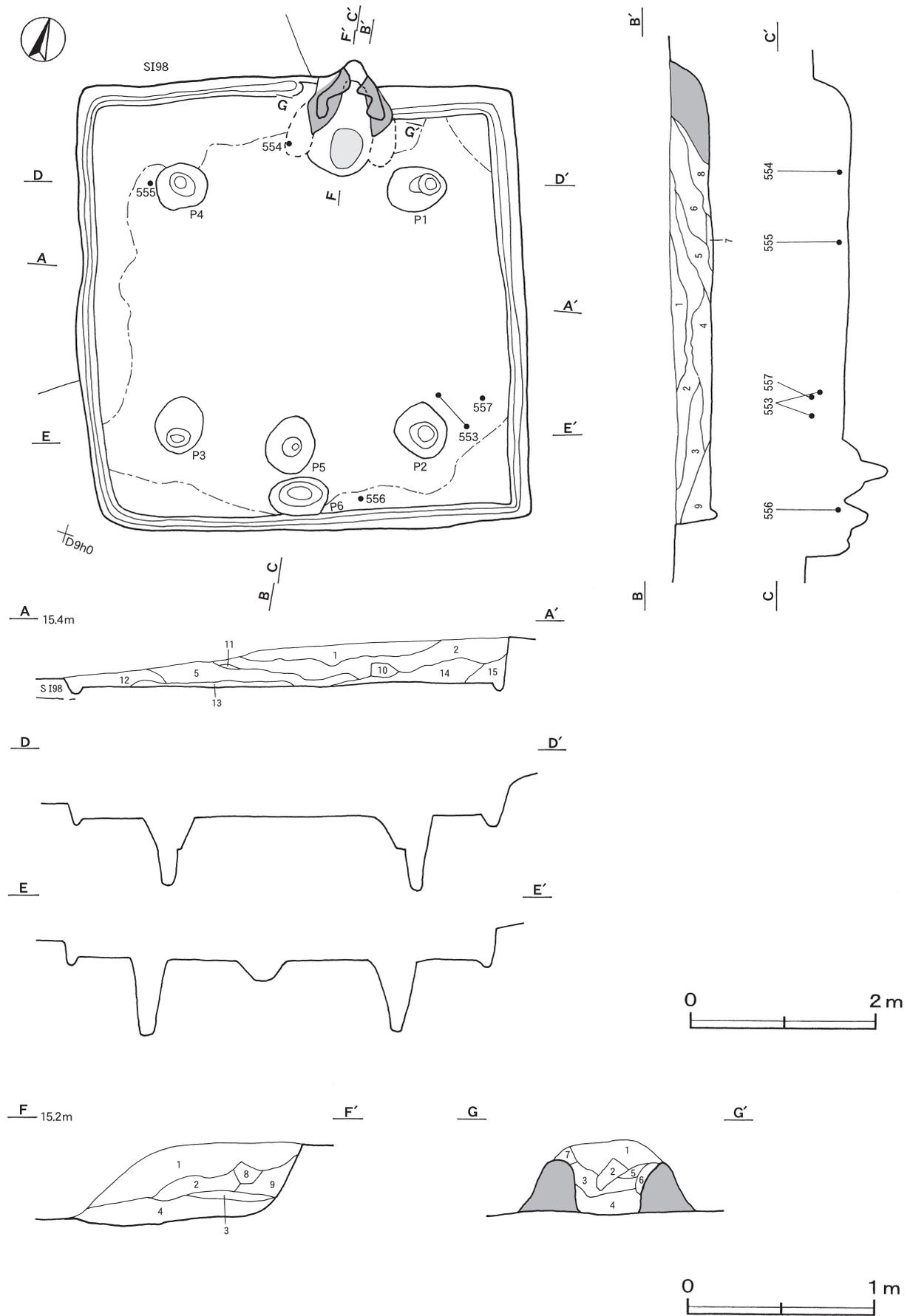
床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁のやや東寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで126cmである。袖部幅は96cmほどが遺存しており、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ21cmほど掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------------|-------|----------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 7 黄褐色 | 砂質粘土ブロック中量, ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量 | 8 褐色 | ローム粒子・砂質粘土粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土ブロック・炭化粒子少量 | 9 黒褐色 | 炭化粒子・砂質粘土粒子少量, 焼土ブロック微量 |
| 4 赤褐色 | 焼土粒子中量, ロームブロック・炭化粒子少量 | | |
| 5 黄褐色 | 砂質粘土ブロック中量, ローム粒子・焼土粒子微量 | | |
| 6 褐色 | 砂質粘土ブロック少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

ピット 6か所。P1~P4は深さ73~84cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ46cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ23cmで、配置から出入り口施設に伴う補助的な役割を果たした可能性があるが明確ではない。



第91图 第97号住居跡実測図

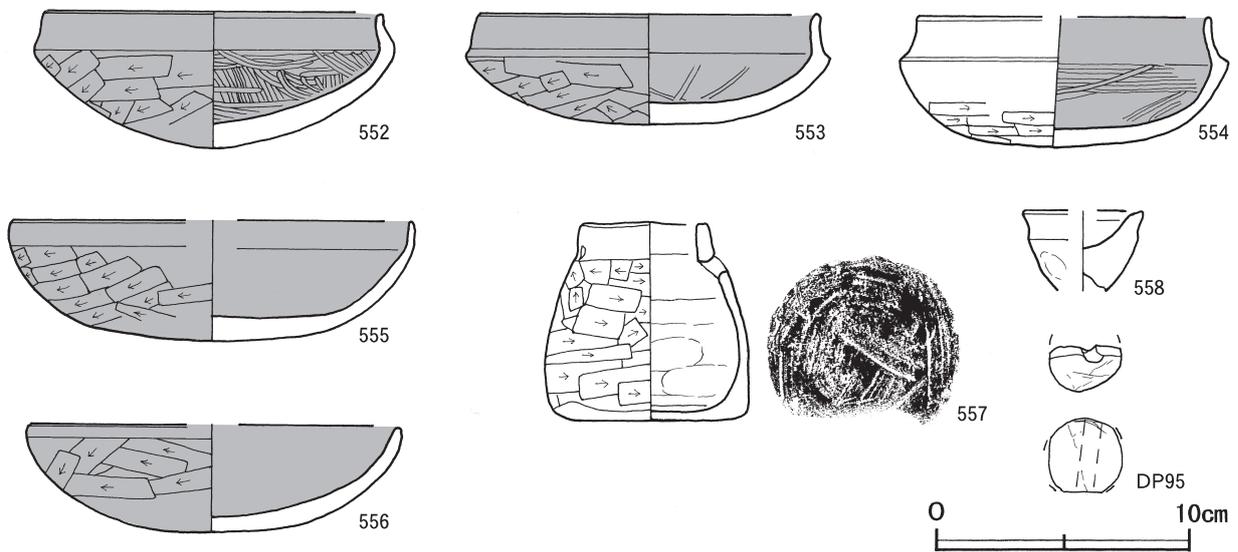
覆土 15層に分層される。周囲から土砂が流入し、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|---------------------------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量 | 9 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 褐色 粘土ブロック中量, ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 | 12 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 | 13 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 6 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 14 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 7 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 15 黒褐色 ロームブロック微量 |
| 8 暗褐色 ロームブロック・砂質粘土ブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片197点(坏52, 高坏2, 鉢1, 壺1, 甕141), ミニチュア土器1点(高坏カ), 土製品3点(球状土錘1, 不明2), 礫3点の他に, 流れ込んだ弥生土器片142点, 須恵器片4点も出土している。553は南東コーナー付近の覆土上層, 554は竈左側の覆土下層, 555は北西コーナー付近の覆土下層からそれぞれ出土している。557は覆土上層からの出土である。

所見 時期は, 出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第92図 第97号住居跡出土遺物実測図

第97号住居跡出土遺物観察表(第92図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
552	土師器	坏	13.1	5.4	—	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	95% PL25
553	土師器	坏	13.1	4.4	—	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	覆土上層	90% PL26
554	土師器	坏	[11.4]	5.1	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土下層	60%
555	土師器	坏	[15.6]	4.8	—	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土下層	50%
556	土師器	坏	[14.4]	4.2	—	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土下層	50%
557	土師器	小形壺	4.8	7.8	7.5	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部上位に相対する穿孔 体部外面ヘラ削り 内面指頭によるナデ	覆土上層	95% PL33
558	土師器	ミニチュア	[4.6]	(3.2)	—	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面指頭によるナデ 指頭痕 内面ナデ	覆土中	10% 高坏カ

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP95	球状土錘	(3.0)	[0.7]	2.9	(13.5)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	

第98号住居跡 (第93・94図)

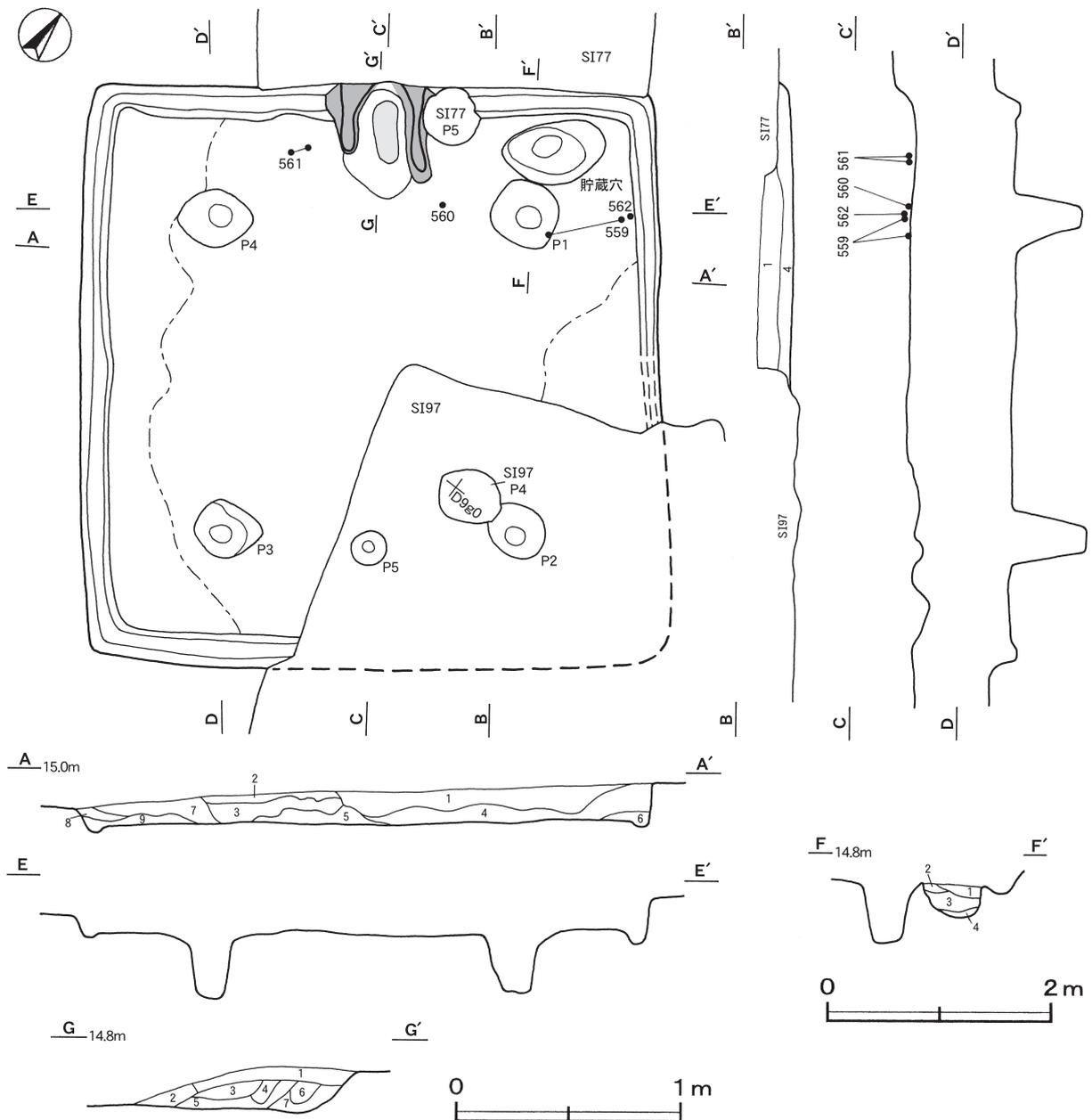
位置 調査区西部のD 9 f9区で、標高14.8mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第77・97号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.26m、短軸5.16mの方形で、主軸方向はN-34°-Wである。壁高は18~24cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分と重複部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで106cmである。右袖部は第77号住居のP5に掘り込まれているが、袖部幅は80cmほどが確認できた。袖部は、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、床面と同じ高さの地山面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、重複のための不明であるが、遺存状態から緩やかに外傾して立ち上がっていたものと考えられる。



第93図 第98号住居跡実測図

竈土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------------------|--------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子中量, 炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | 炭化粒子少量, 焼土粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 砂質粘土ブロック少量, 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 6 黄褐色 | 砂質粘土ブロック多量, 焼土粒子微量 |
| | | 7 極暗褐色 | 砂質粘土ブロック少量, 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |

ピット 5か所。P1～P4は深さ54～62cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ8cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 9層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------|-------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量 | 7 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 極暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 9 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 5 褐色 | 砂質粘土粒子中量, ローム粒子少量 | | |

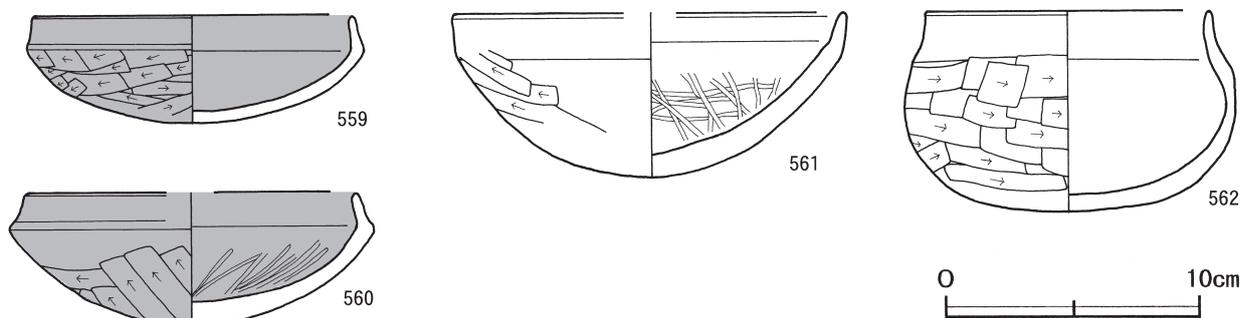
貯蔵穴 北東コーナー部に位置し、長径91cm、短径56cmほどの楕円形で、深さは35cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-----------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子少量, 焼土ブロック・ローム粒子微量 | 3 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片149点（坏28, 椀1, 甕120）の他に、混入した弥生土器片74点も出土している。560は北コーナー付近の床面、562は覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第94図 第98号住居跡出土遺物実測図

第98号住居跡出土遺物観察表(第94図)

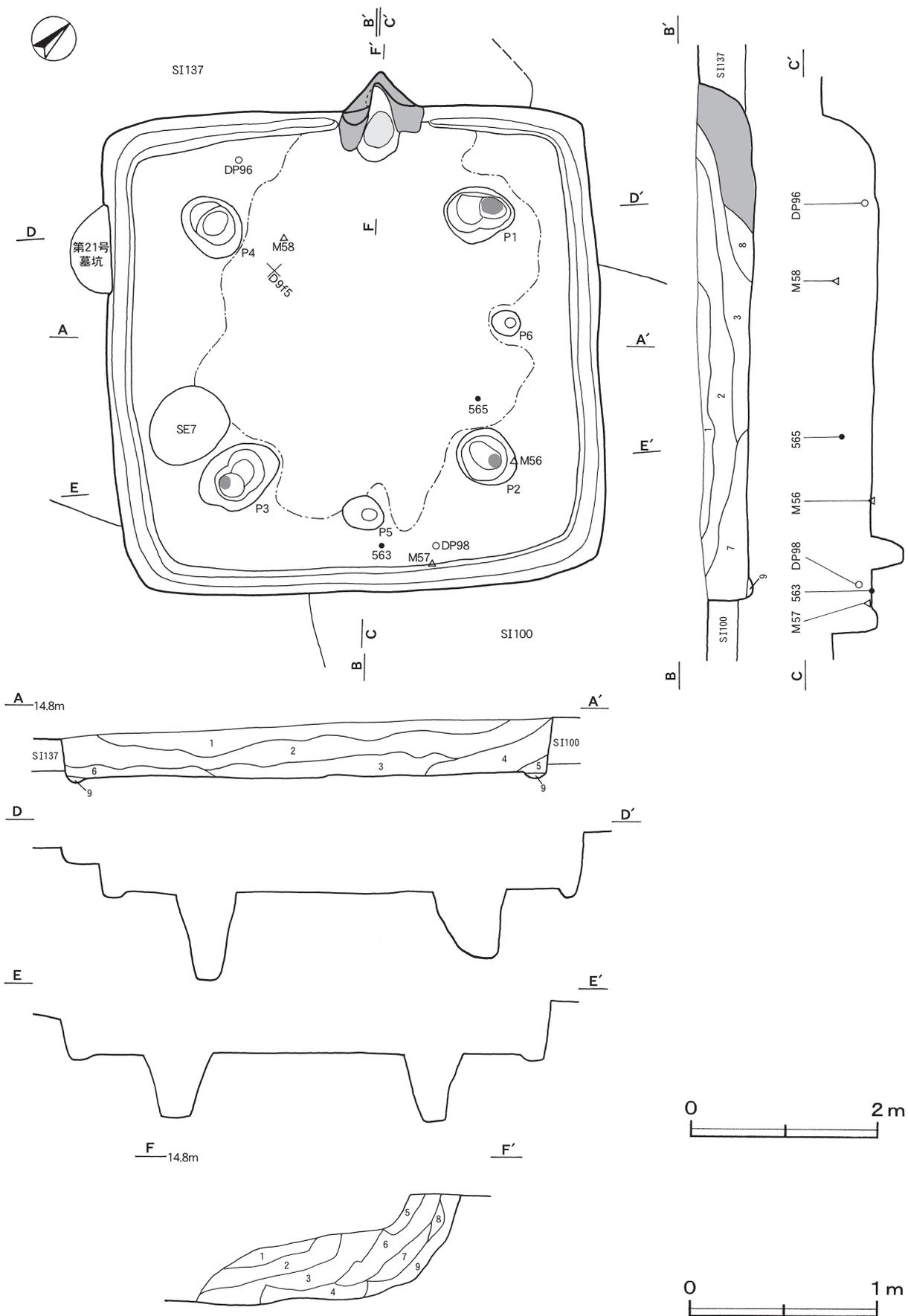
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
559	土師器	坏	12.5	4.2	—	長石・石英	にぶい褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後ナデ 内面ナデ	覆土下層	70% PL25
560	土師器	坏	[13.0]	5.2	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	床面	60%
561	土師器	坏	[15.2]	6.4	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土下層	70%
562	土師器	椀	11.2	7.9	—	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	覆土下層	100% PL29

第99号住居跡 (第95・96図)

位置 調査区西部のD9e5区で、標高14.4mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第100号・137号住居跡を掘り込み、第21号墓坑、第7号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.26m、短軸5.15mの方形で、主軸方向はN-44°-Wである。壁高は35～60cmで、外傾して立ち上がっている。



第95图 第99号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北西壁のほぼ中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで96cmである。袖部幅は88cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、床面と同じ高さの地山面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ39cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------------|--------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、砂質粘土ブロック・焼土粒子微量 | 6 黄褐色 | 砂質粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 灰黄褐色 | 砂質粘土ブロック中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 炭化粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量 | 8 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量、砂質粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 9 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | 砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

ピット 6か所。P1～P4は深さ70～93cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ35cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ40cmで、主軸に沿って主柱穴と直線的に配置されていることから補助柱穴の可能性が想定される。P1～P3には柱痕跡が認められ、その対角線上の内側に柱抜き取りのための掘り方が確認された。

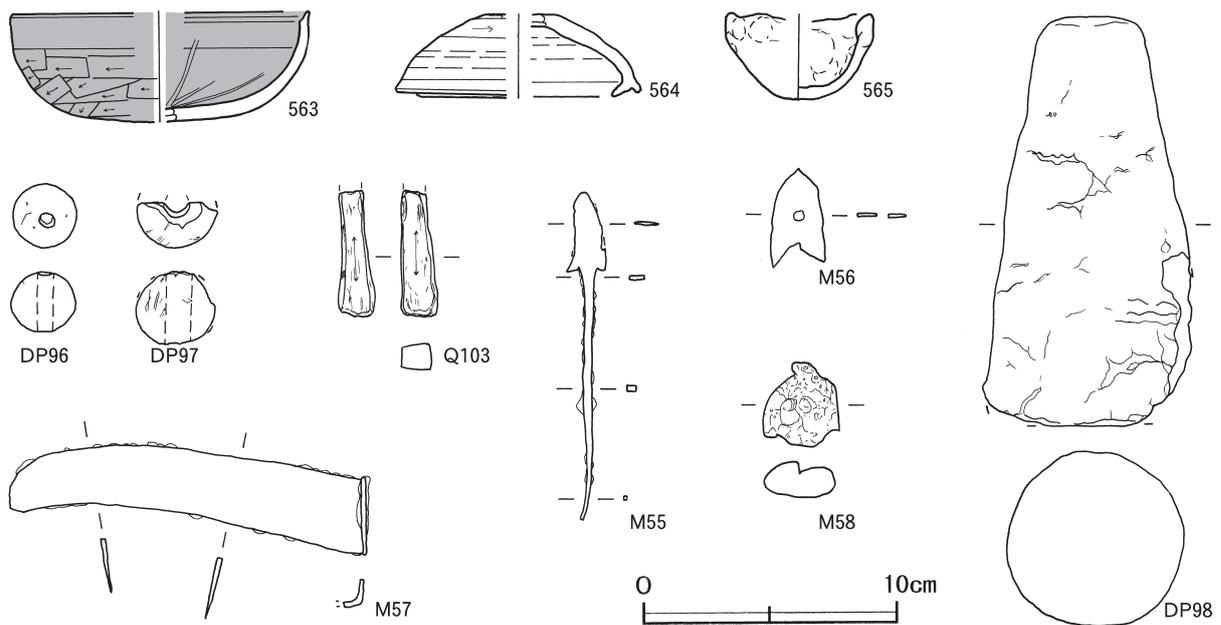
覆土 9層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|-------------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 極暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・砂質粘土粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 9 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片885点（坏217，高坏7，壺1，甕660），手捏土器1点（坏形カ），土製品3点（球状土錘2，支脚1），鉄製品4点（鎌2，鎌1，椀状滓1），礫13点の他に、流れ込んだ弥生土器片195点、須恵器片5点も出土している。563は南東壁際の床面から出土している。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、時期は、出土土器から7世紀前半と考えられる。



第96図 第99号住居跡出土遺物実測図

第99号住居跡出土遺物観察表(第96図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
563	土師器	坏	[11.6]	4.2	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	床面	40%
564	須恵器	蓋	[8.2]	(3.3)	—	長石	灰	良好	天井部右回りのヘラ削り	覆土中	20%
565	土師器	手捏土器	[5.6]	3.4	—	長石・石英	にぶい褐	普通	口辺部・内面指頭痕 体部外面ナデ 輪積痕	覆土上層	50%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP96	球状土錘	2.5	0.6	2.4	13.4	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP97	球状土錘	(3.2)	1.0	2.9	(13.4)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP98	支脚	16.2	3.4～(7.8)	(770.0)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	全面ナデ 指頭痕	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q103	砥石	(5.0)	1.4	1.5	(120.0)	凝灰岩	砥面2面	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M55	鉄鏃	13.0	1.5	0.3～0.5	1.9	鉄	長頭三角鏃 鏃身部三角形 棘状関	覆土中	PL43
M56	鉄鏃	4.0	2.1	0.1	2.9	鉄	無頭五角鏃 断面平型 中央に径0.4mmの透かし	床面	PL43
M57	鏃	14.1	4.3	0.2	50.7	鉄	弓状に彎曲 端部全面折り返し 断面形は三角	床面	PL43
M58	腕状滓	3.3	3.0	1.3	15.4	鉄	表面に赤錆付着 凹凸有り	覆土上層	

第101号住居跡(第97～99図)

位置 調査区西部のD9d4区で、標高14.6mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第137号住居跡を掘り込み、第104号住居、第3号掘立柱建物、第161号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.36m、短軸5.14mの方形で、主軸方向はN-30°-Wである。壁高は38～90cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分と北西コーナー部を除いて壁溝が周回している。

竈 北西壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで131cmである。袖部幅は89cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面に皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ38cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|----------------------------------|-------|------------------------------|
| 1 黒褐色 | 砂質粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | 砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 にぶい黄褐色 | 砂質粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、砂質粘土ブロック・炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子微量 |
| | | 7 暗褐色 | ローム粒子少量、砂質粘土粒子微量 |

ピット 5か所。P1～P4は深さ36～64cmで、配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ26cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 9層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

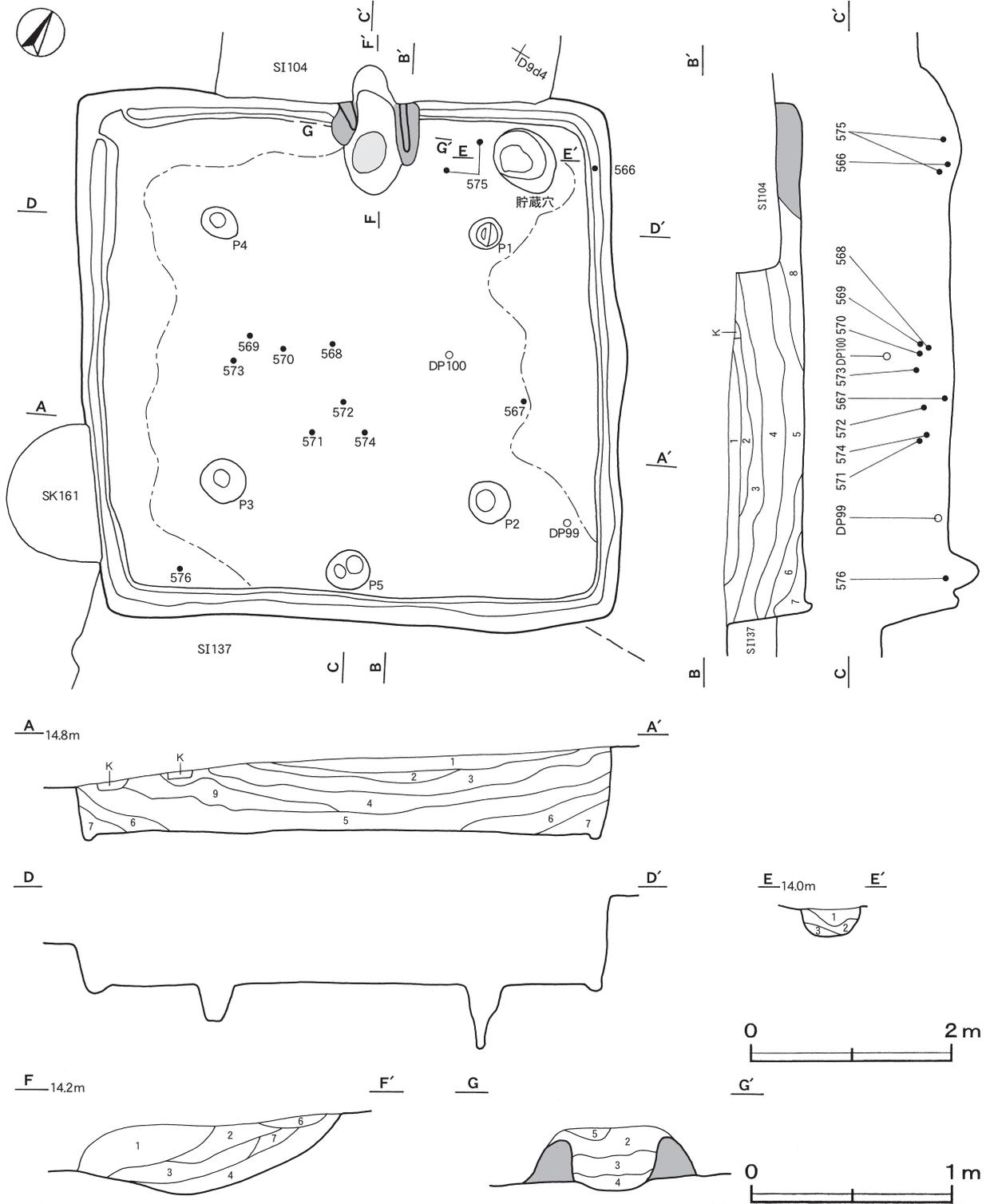
土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|-------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 極暗褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 4 極暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 9 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | | |

貯蔵穴 北側コーナー部に位置し、長径67cm、短径56cmほどの楕円形で、深さは30cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

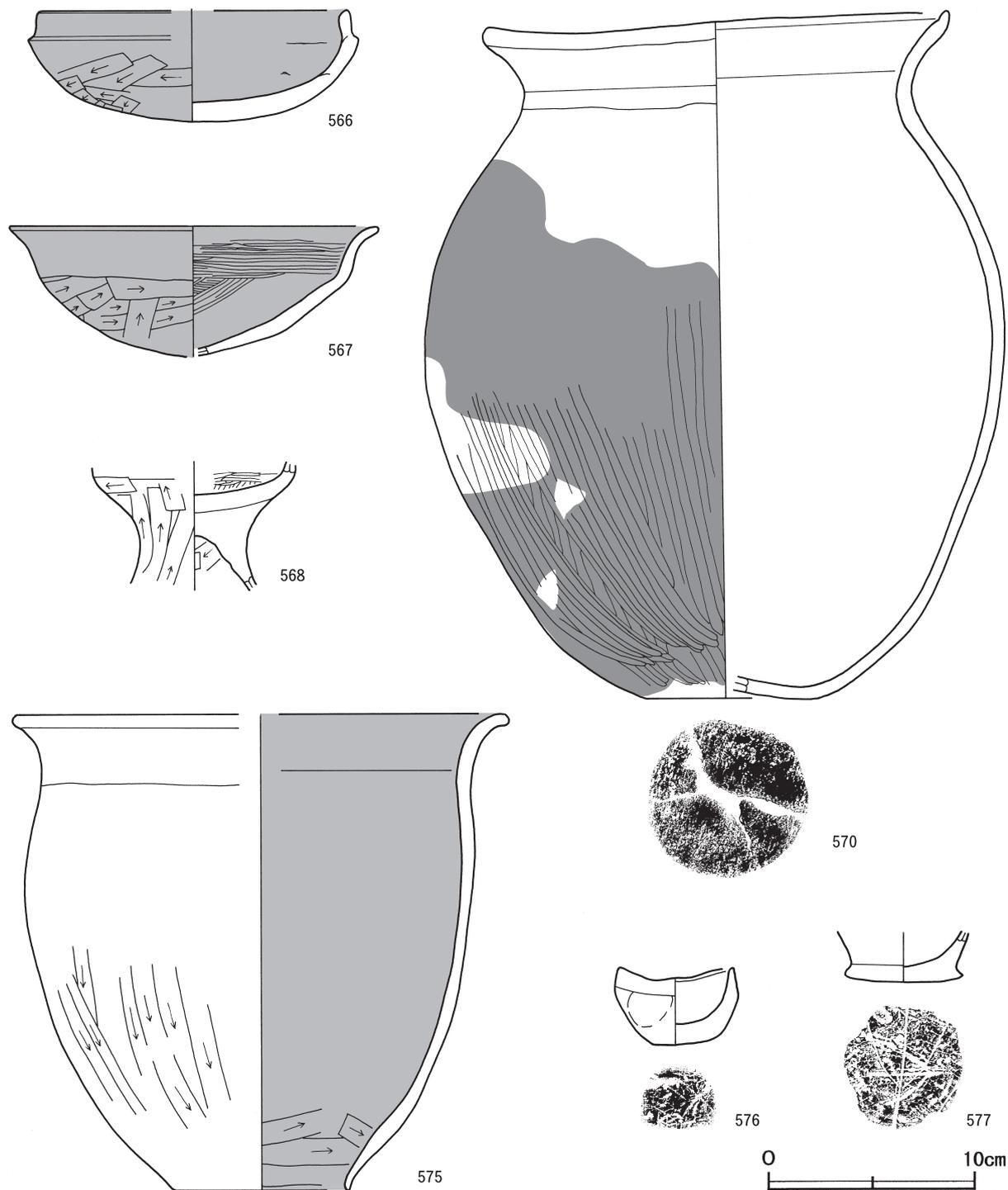
- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量



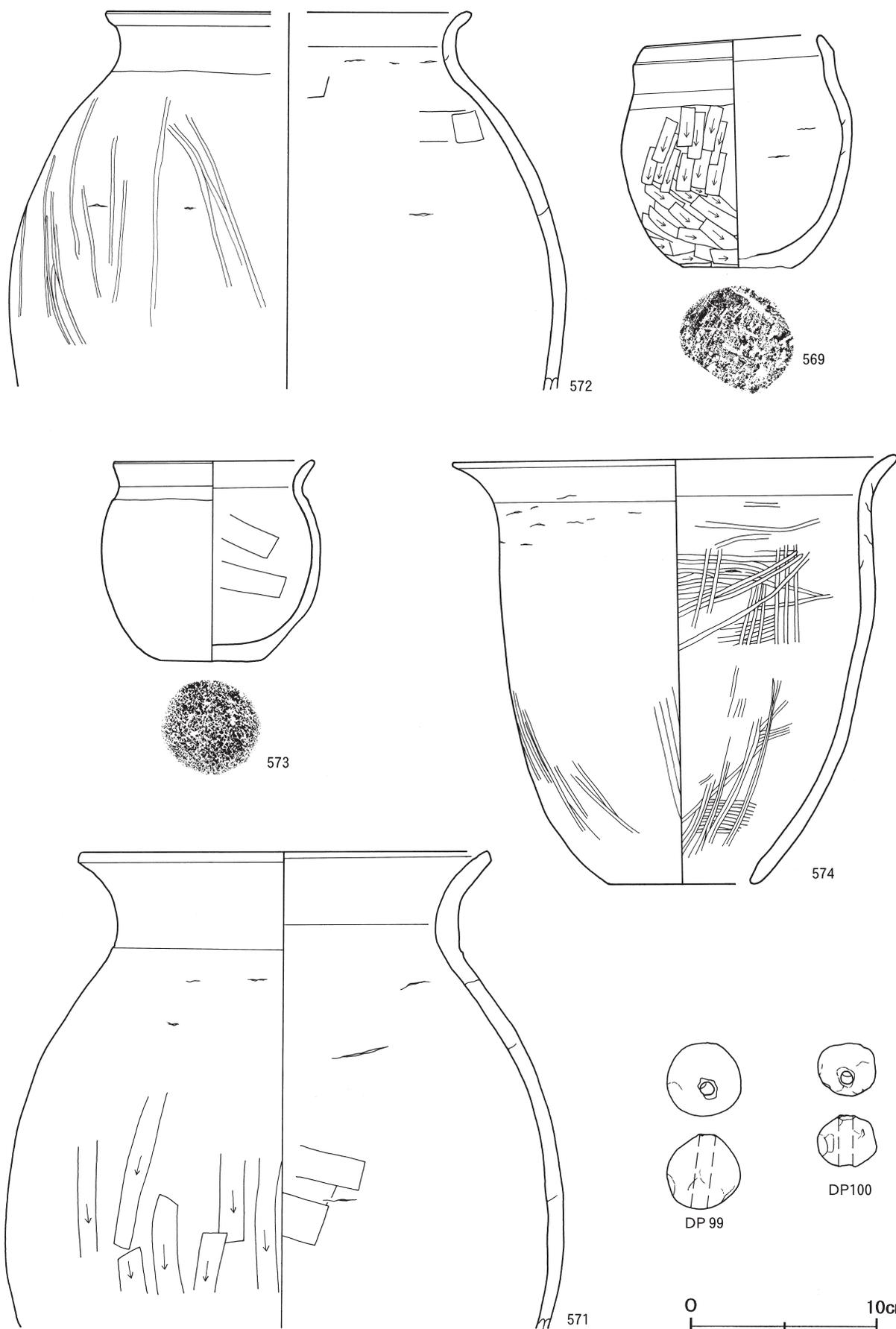
第97図 第101号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片1098点（坏310，高坏19，壺1，甕764，甑4），手捏土器2点（坏形カ），土製品6点（球状土錘2，支脚4），石器1点（敲石），鉄製品1点（鉄滓カ），礫5点の他に，流れ込んだ縄文土器片3点，弥生土器片140点，須恵器片19点も出土している。566は北コーナー部の壁溝内，568～574は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 出土した遺物のほとんどが覆土第3・4層内から出土しており，住居廃絶後の窪みに投棄されたものと考えられる。時期は，出土土器から7世紀前半と考えられる。



第98図 第101号住居跡出土遺物実測図(1)



第99图 第101号住居跡出土遺物実測図(2)

第101号住居跡出土遺物観察表(第98・99図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
566	土師器	坏	[14.7]	5.4	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面摩減調整不明 輪積痕	壁溝内	90%
567	土師器	坏	17.7	(6.2)	—	長石・石英	にぶい褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土下層	40%
568	土師器	高坏	—	(6.8)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	坏部外面, 脚部内・外面へラ削り 坏部内面へラ磨き	覆土中層	20%
569	土師器	小形壺	9.3	12.5	5.7	長石・石英	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 輪積痕	覆土中層	70% PL28
570	土師器	甕	22.0	32.3	7.4	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面中位から下端へラ磨き	覆土中層	80% 外面煤付着 PL31
571	土師器	甕	21.6	(25.7)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ 輪積痕	覆土中層	50%
572	土師器	甕	[19.6]	(20.1)	—	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラナデ 輪積痕	覆土中層	30%
573	土師器	小形甕	10.7	10.8	5.6	長石・石英	にぶい褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面摩減調整不明 内面へラナデ	覆土中層	90% PL28
574	土師器	甌	23.4	23.0	8.1	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 体部内面へラナデ後へラ磨き	覆土中層	70%
575	土師器	甌	[23.6]	23.0	8.4	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 体部外面単孔部横ナデ 内面下端へラ削り	覆土下層	60% 煤付着
576	土師器	手捏土器	5.5	3.8	2.1	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面指頭によるナデ 内面ナデ	覆土下層	70% PL33
577	土師器	手捏土器	—	(2.4)	5.6	長石・雲母・赤色粒子	褐灰	普通	指頭によるナデ 底部木葉痕	覆土中	10%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP99	球状土錘	4.0	0.9	4.0	59.2	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方方向からの穿孔	覆土下層	
DP100	球状土錘	3.2	0.8	2.8	21.7	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方方向からの穿孔	覆土上層	

第106号住居跡(第100・101図)

位置 調査区西部のD9c1区で、標高14.1mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第105号住居跡を掘り込み、第1号・第2号掘立柱建物、第10号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.56m、短軸4.47mの方形で、主軸方向はN-49°-Eである。壁高は23~46cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部から竈前付近にかけてが踏み固められている。

竈 北東壁のやや南寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで91cmである。袖部幅は96cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ14cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------------|----------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 黄褐色 | 砂質粘土ブロック中量, 焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 7 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 4 黒褐色 | 焼土粒子少量, 砂質粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 8 褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| | | 9 暗オリーブ色 | 砂質粘土粒子多量, 焼土粒子微量 |
| | | 10 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |

ピット 5か所。P1~P4は深さ30~60cmで、配置から支柱穴と考えられる。P2・P4からは柱立て替えの痕跡が確認され、それぞれの内側に柱痕跡が確認された。P5は深さ46cmで、柱建て替え以前の支柱穴と考えられる。

覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |

貯蔵穴 東側コーナー部に位置し、長径91cm、短径56cmほどの楕円形で、深さは42cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

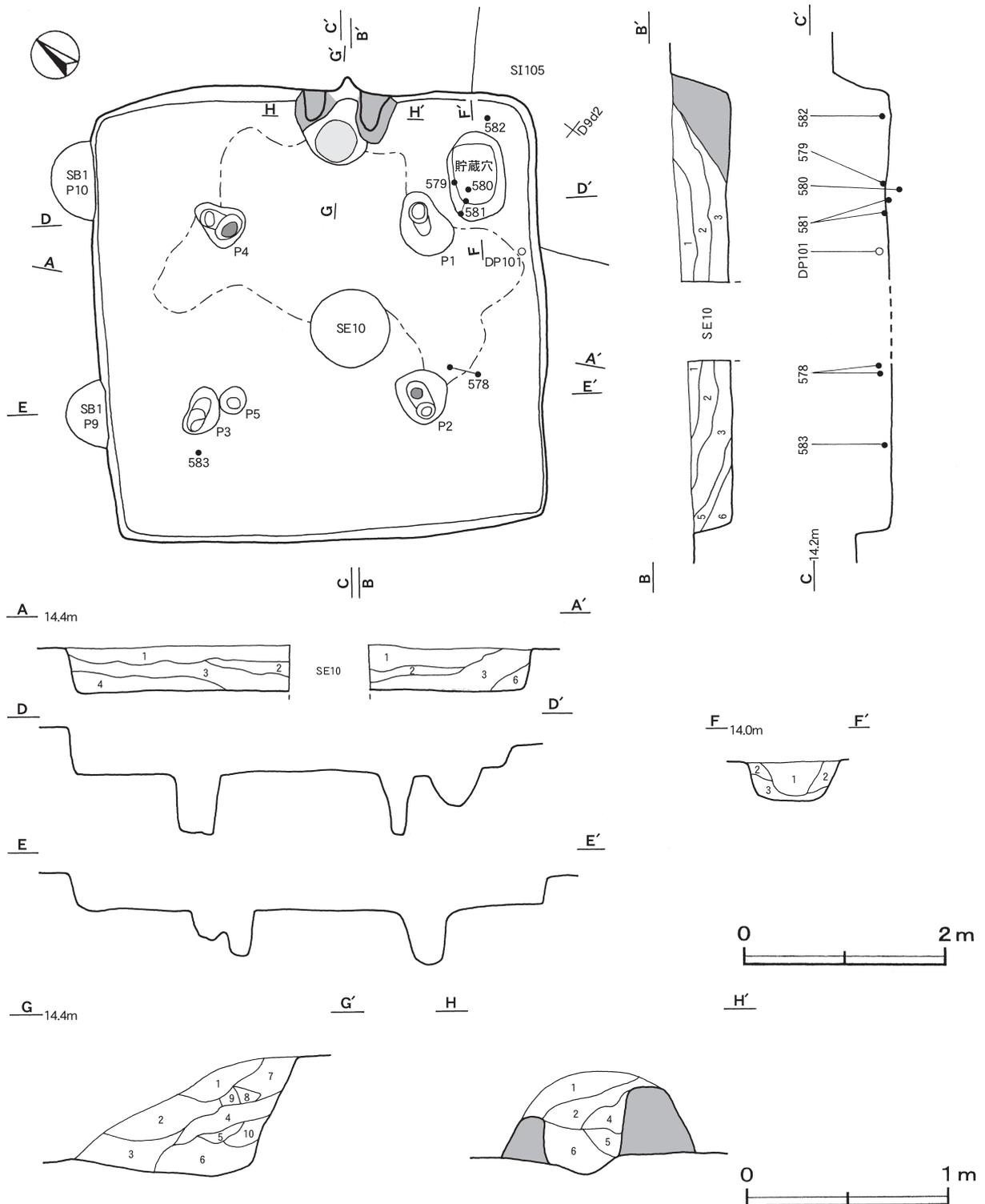
貯蔵穴土層解説

- 1 黒色 炭化粒子少量, ローム粒子微量
- 2 黒色 ロームブロック・炭化粒子少量

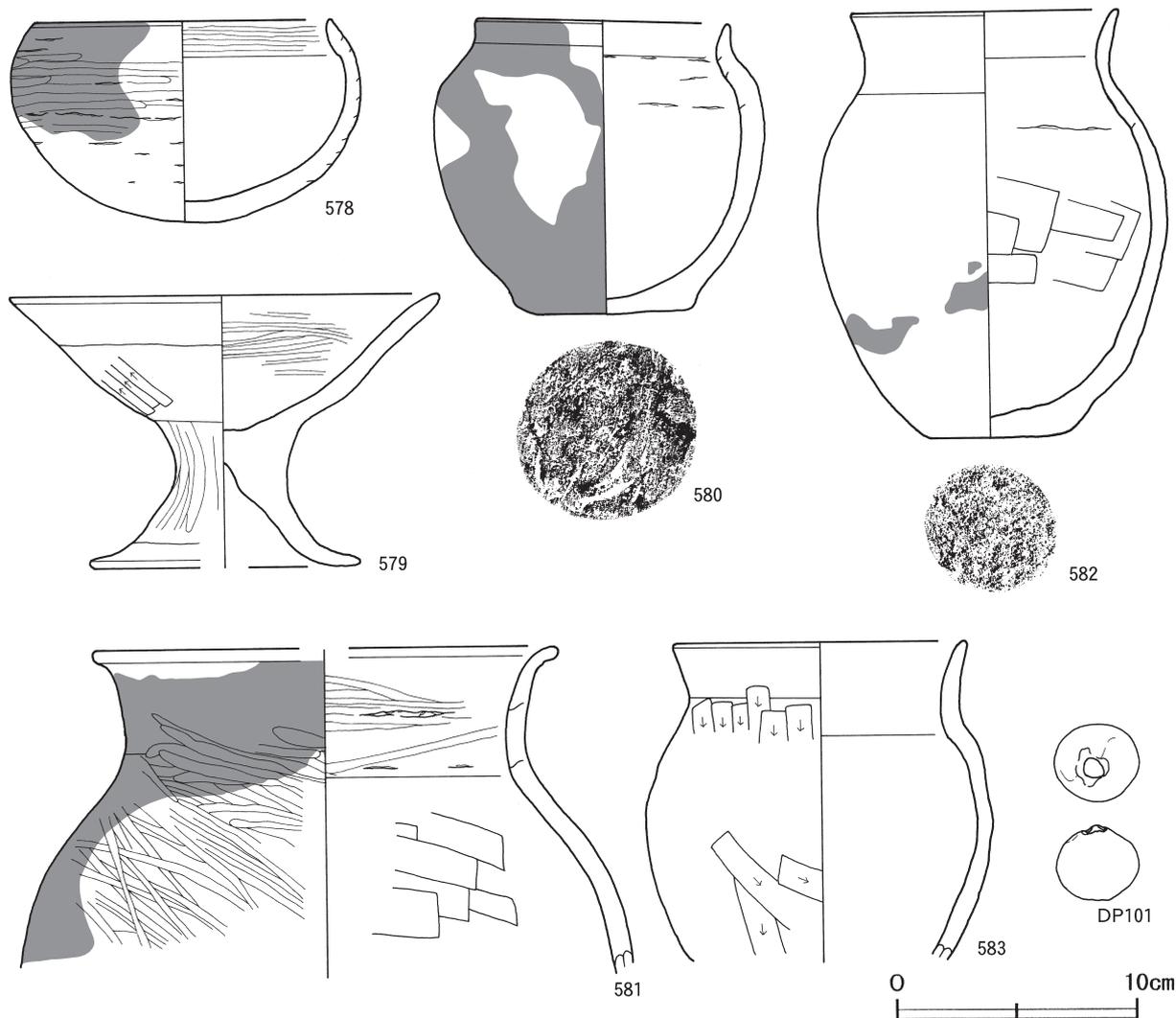
- 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片686点(坏94, 器台2, 高坏7, 壺1, 甕579, 甌3), 土製品1点(球状土錘), 鉄滓1点, 礫16点の他に, 流れ込んだ弥生土器片115点, 須恵器片5点も出土している。578は南コーナー寄りの覆土下層, 579は東コーナー寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。580は貯蔵穴内からの出土である。

所見 時期は, 出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第100図 第106号住居跡実測図



第101図 第106号住居跡出土遺物実測図

第106号住居跡出土遺物観察表(第101図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
578	土師器	椀	12.3	8.4	—	長石・石英	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ後内面ヘラ磨き 体部外面ヘラ磨き 輪積痕	覆土下層	70% 外面煤付着 PL29
579	土師器	高杯	17.4	11.3	[11.2]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	坏部口辺部内・外面横ナデ 坏部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き 脚部外面ヘラ磨き	覆土下層	70%
580	土師器	小形壺	10.4	12.4	7.5	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ナデ 輪積痕	貯蔵穴内	95% 外面煤付着 PL28
581	土師器	甕	[19.0]	(13.7)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き 輪積痕	床面～貯蔵穴内	15% 外面煤付着
582	土師器	小形甕	11.0	17.7	5.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面摩滅調整不明 内面ヘラナデ 輪積痕	覆土下層	70% 外面一部煤付着
583	土師器	小形甕	12.0	(13.2)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土下層	50%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP101	球状土鏝	3.5	0.8~0.9	3.1	28.4	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	

第116号住居跡 (第102・103図)

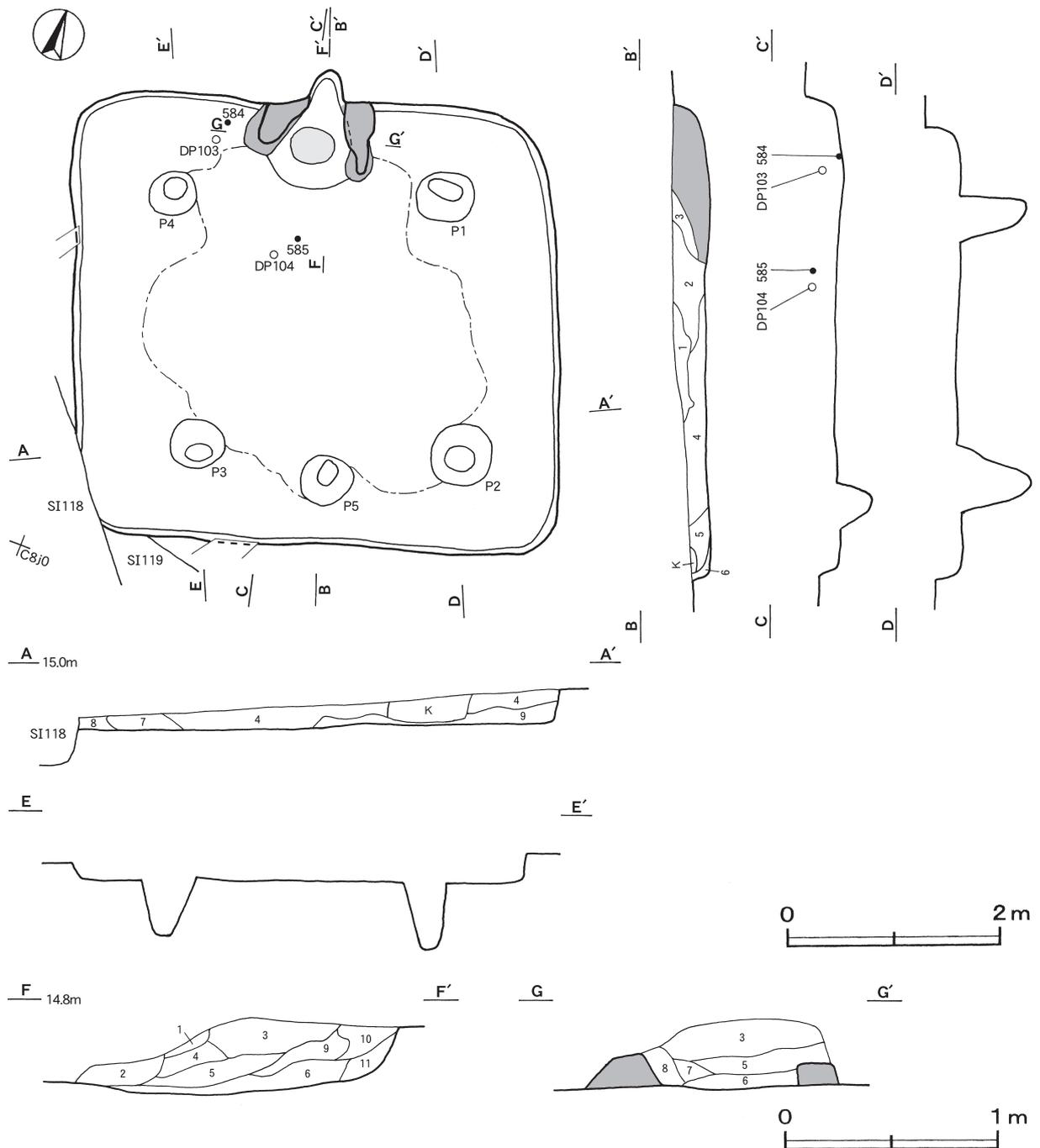
位置 調査区西部のC 8 i0区で、標高14.7mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第119号住居跡を掘り込み、第118号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.58m，短軸4.26mほどの方形で，主軸方向はN-21°-Wである。壁高は20~32cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。

竈 北壁の中央部に付設されており，焚口部から煙道部まで117cmである。袖部幅は118cmほどで，床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は，地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており，火を受けて赤変硬化している。煙道部は，壁外へ28cm掘り込まれ，火床面から外傾して立ち上がっている。第3・8層は天井部や袖材の崩落層と考えられる。



第102図 第116号住居跡実測図

竈土層解説

- | | | | |
|----------|--------------------------|----------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 7 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 にぶい褐色 | 砂質粘土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 8 黄褐色 | 砂質粘土粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黄褐色 | 砂質粘土粒子多量, 焼土粒子微量 | 9 灰褐色 | 砂質粘土粒子中量, 炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | 焼土粒子少量, 砂質粘土ブロック・ローム粒子微量 | 10 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 11 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 6 にぶい赤褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子中量, 炭化粒子微量 | | |

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ58～68cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ34cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

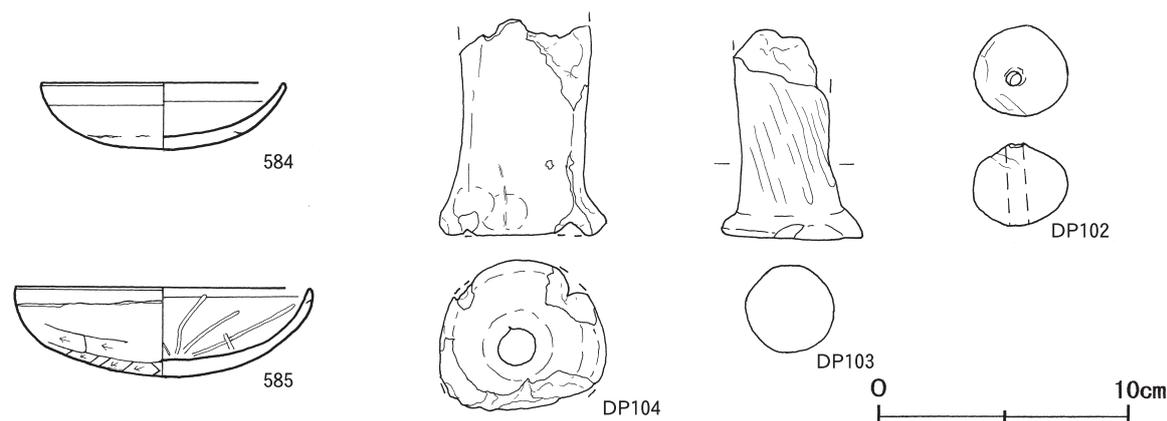
覆土 9層に分層される。周囲から土砂が流れ込んだ様相を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------|--------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 7 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 3 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 8 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 4 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量 | 9 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片374点(坏45, 高坏2, 甕類327), 土製品3点(球状土錘, 支脚, 羽口), 礫5点の他に、流れ込んだ弥生土器片48点, 須恵器片20点も出土している。584は竈左側の床面から出土している。

所見 時期は, 出土土器から7世紀後半と考えられる。



第103図 第116号住居跡出土遺物実測図

第116号住居跡出土遺物観察表(第103図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
584	土師器	坏	9.6	2.7	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ 輪積痕	床面	70% PL28
585	土師器	坏	11.7	3.6	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き 輪積痕	覆土上層	60% PL28

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP102	球状土錘	3.8	0.7	3.3	42.2	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	

番号	器種	長さ	径	底径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP103	支脚	(8.4)	3.5~3.8	5.6	(152.1)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	へラ磨き	覆土中層	

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP104	羽口	(8.6)	4.3~2.8	1.4~2.8	(230.0)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	外面ナデ	覆土上層	

第119号住居跡（第104・105図）

位置 調査区西部のC8j0区で、標高14.3mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第116・118号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.95m、短軸4.30mほどの長方形と推定され、主軸方向はN-10°-Eである。確認された壁高は60cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦であるが、硬化面などは確認できなかった。

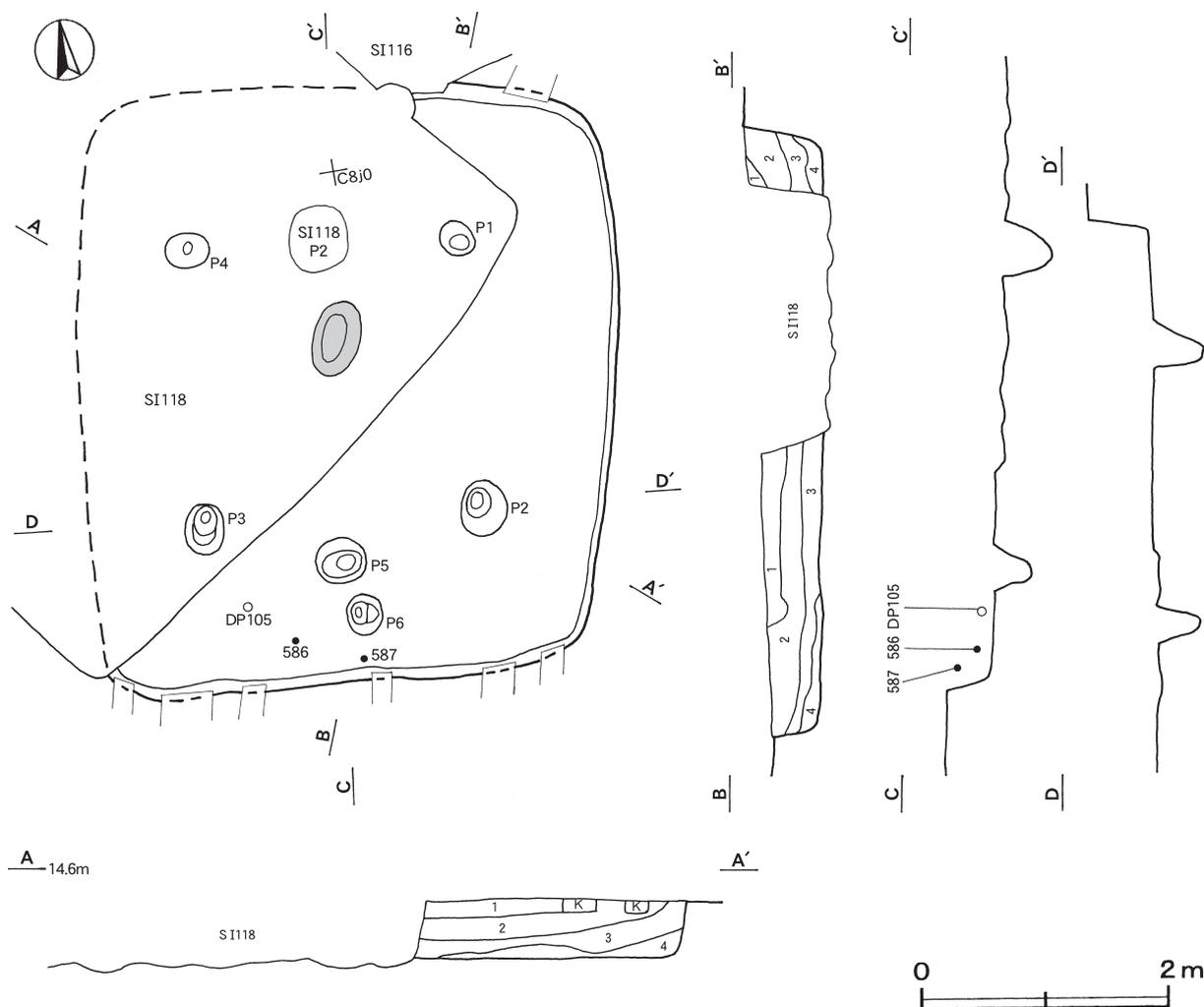
炉 中央部やや北寄りに確認され、長径63cm、短径39cmほどの楕円形と推定される。第118住居の掘り方に壊されているため、赤変部分は確認されなかったが、皿状にややくぼんだ状態でロームが熱を受けて硬化している。

ピット 6か所。P1～P4は深さ33～39cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ29cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ36cmで、配置から出入り口施設に伴う補助的な役割を果たした可能性があるが明確ではない。

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

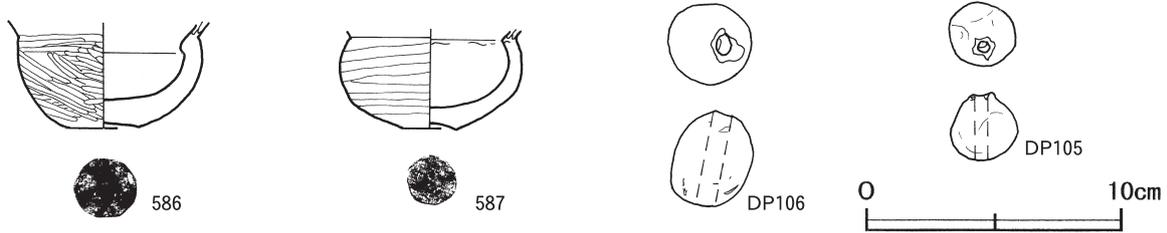
- | | | | |
|-------|-------------------|--------|--------------|
| 1 黒色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック微量 |



第104図 第119号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片70点（坏20，埴2，甕48），土製品2点（球状土錘），礫5点の他に，流れ込んだ弥生土器片65点も出土している。586は南壁際の覆土下層から，587は覆土中層から出土している。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが，時期は，出土土器から4世紀代と考えられる。



第105図 第119号住居跡出土遺物実測図

第119号住居跡出土遺物観察表(第105図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
586	土師器	埴	-	(4.2)	2.6	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面へラ磨き 内面ナデ	覆土下層	50% PL33
587	土師器	埴	-	(3.9)	2.0	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面へラ磨き 内面ナデ 輪積痕	覆土中層	50% PL33

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP105	球状土錘	2.7	0.5	2.7	17.0	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP106	球状土錘	3.4	0.7	3.9	37.6	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	

第122号住居跡（第106・107図）

位置 調査区西部のD 8 a7区で，標高13.9mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第124・125・126号住居跡を掘り込み，第22号墓坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.24m，短軸5.05mの方形で，主軸方向はN-39°-Wである。壁高は14~30cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められており，竈右側部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北西壁のやや北寄りに付設されている。第22号墓坑に右袖部が掘り込まれているため，煙道部までの82cmだけが確認された。遺存している袖部幅は117cmほどで，床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は，床面と同じ高さの地山面を使用しており，火を受けて赤変硬化している。煙道部は，壁外へ59cm掘り込まれ，火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

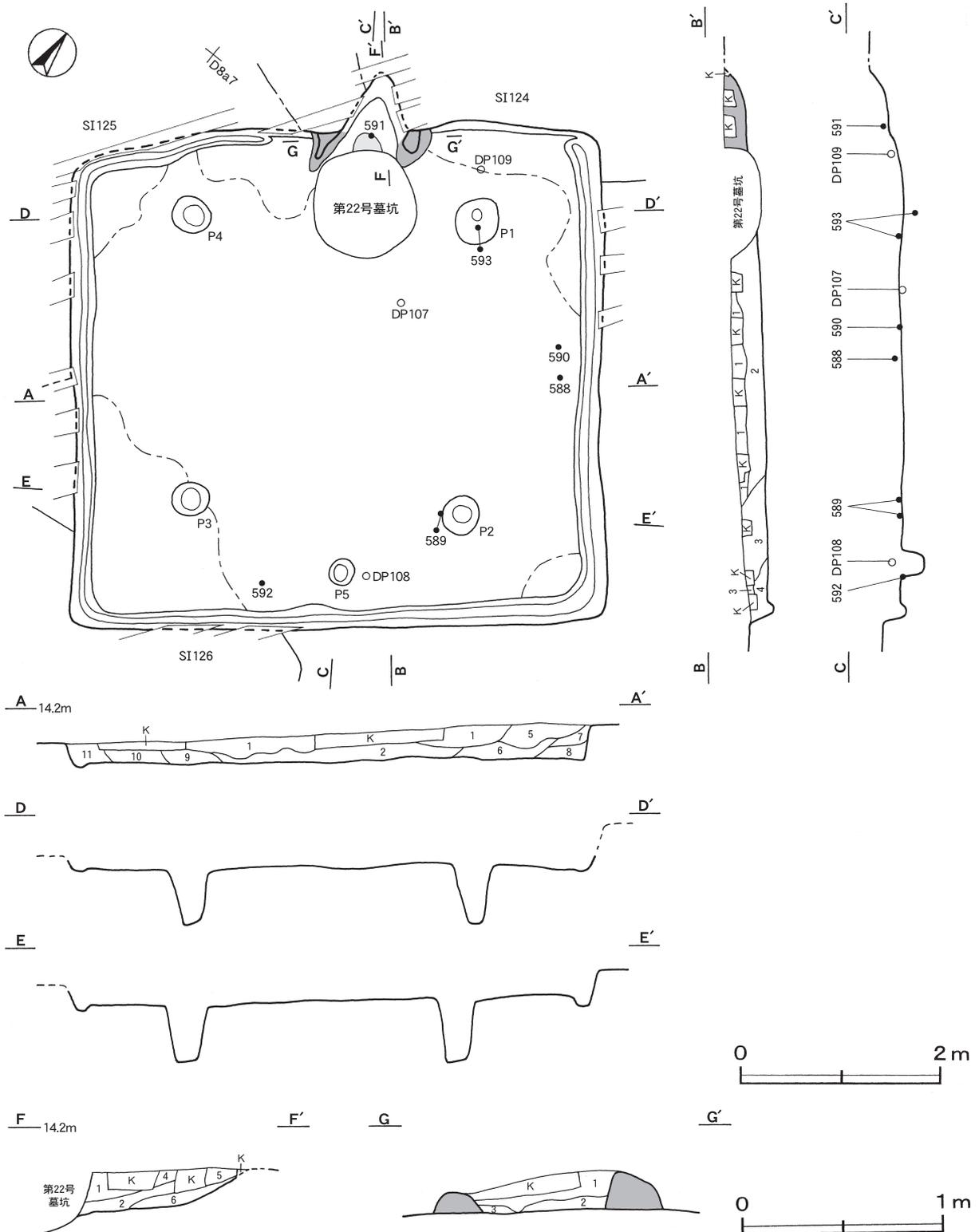
- | | |
|---|-----------------------------------|
| 1 黒褐色 砂質粘土粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 暗赤褐色 焼土粒子・砂質粘土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量，砂質粘土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 極暗赤褐色 焼土ブロック中量，炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 3 にぶい黄褐色 砂質粘土粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 暗赤褐色 焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量 |

ピット 5か所。P 1~P 4は深さ57~62cmで，配置から支柱穴と考えられる。P 5は深さ26cmで，配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 11層に分層される。壁際はブロック状の堆積状況を示す人為堆積で，中央部はレンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

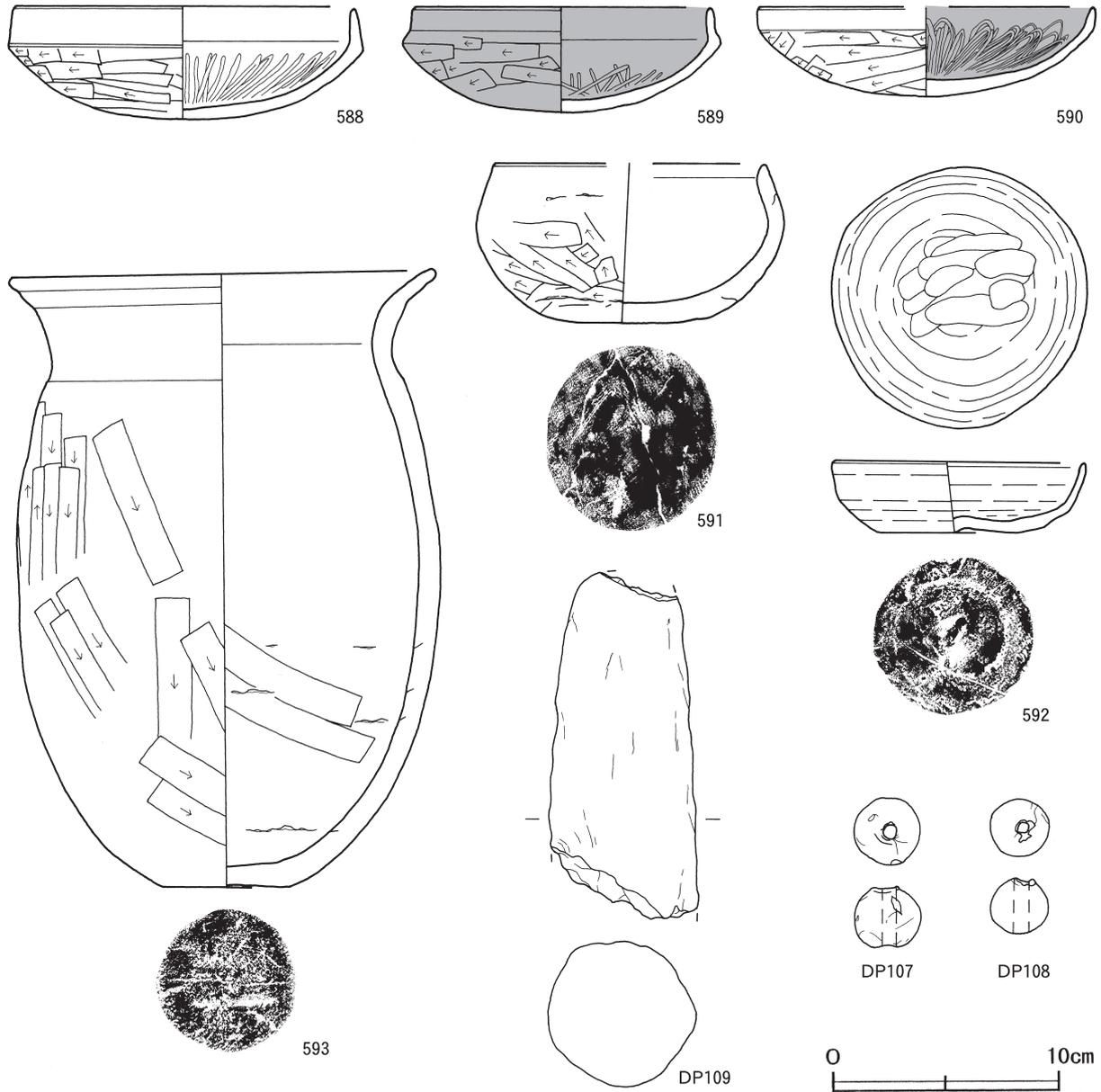
土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|--------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 極暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 9 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 10 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 6 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | | |



第106図 第122号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片365点（坏48，高坏1，甕316），須恵器1点（坏），土製品3点（球状土錘2，支脚1），礫9点の他に，流れ込んだ弥生土器片63点，須恵器片10点も出土している。588・590は北東壁際の覆土下層，589はP 2付近の覆土下層，592は南東壁際の床面からそれぞれ出土している。593はP 1付近の床面とP 1覆土中層から出土した土器片が接合しており，住居廃絶により柱の抜き取り穴に流れ込んだものと考えられる。
所見 時期は，出土土器から7世紀前半と考えられる。



第107図 第122号住居跡出土遺物実測図

第122号住居跡出土遺物観察表(第107図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
588	土師器	坏	15.1	5.0	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土下層	100% PL26
589	土師器	坏	13.0	4.7	—	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き 輪積痕	覆土下層	80% PL26
590	土師器	坏	[14.6]	3.9	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土下層	70%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
592	須恵器	坏	11.0	3.2	7.2	長石・石英	灰	良好	底部回転ヘラ切り 内面仕上げナデ	床面	100% P128 筥書
591	土師器	椀	[11.8]	7.1	7.0	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ナデ 輪積痕	竈内	60%
593	土師器	甕	18.5	27.4	5.6	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 輪積痕	床面～P1 覆土中層	70%

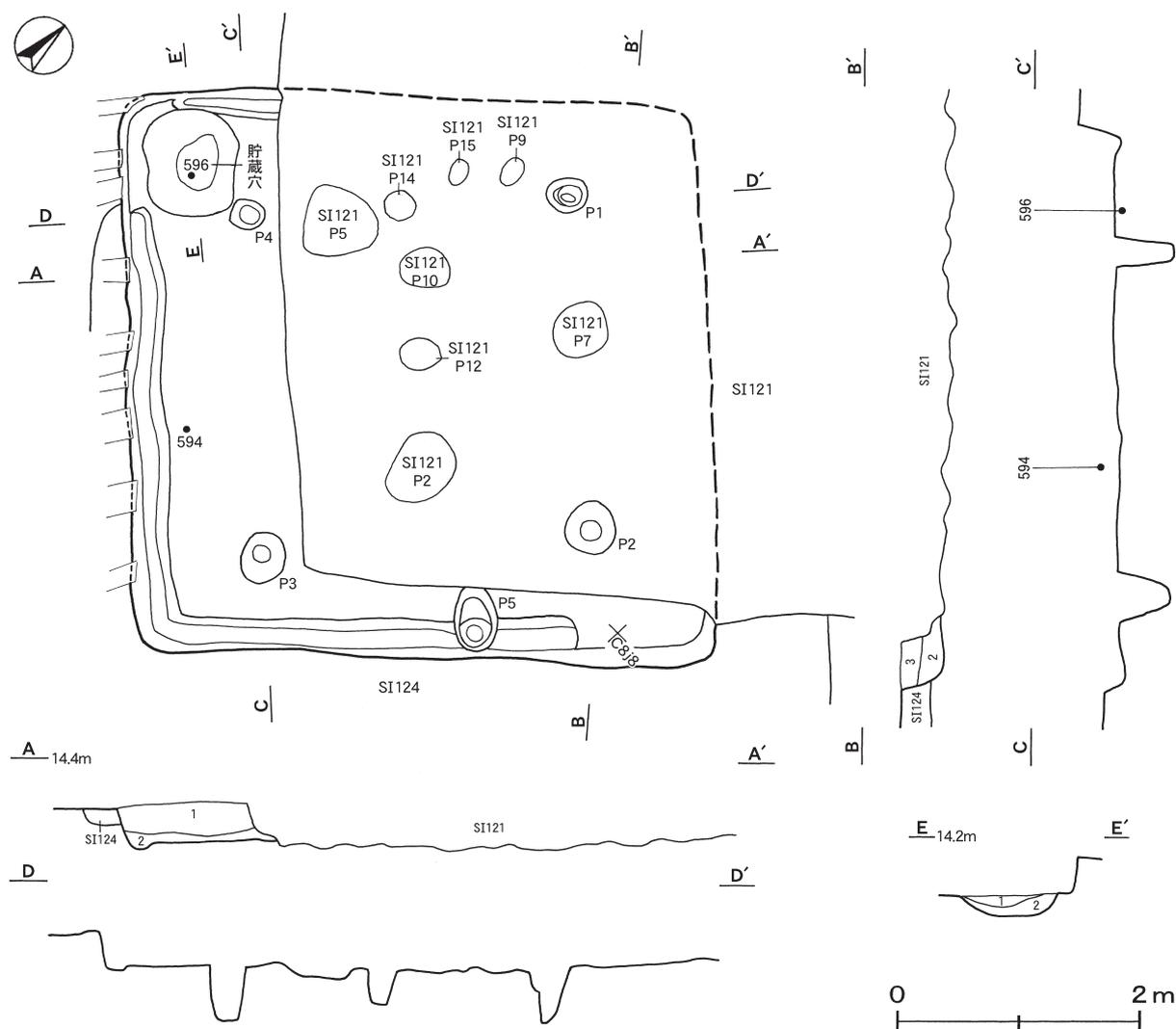
番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP107	球状土錘	2.9	0.6	2.7	(25.1)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	床面	
DP108	球状土錘	2.6	0.6～0.7	2.4	13.8	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP109	支脚	(15.4)	4.6～6.5	(511.8)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	指頭によるナデ	覆土下層	

第123号住居跡 (第108・109図)

位置 調査区西部のC 8 j7区で、標高14.1mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第124号住居跡を掘り込み、第121号住居に掘り込まれている。



第108図 第123号住居跡実測図

規模と形状 遺存している壁や柱穴の配置から、N-47°-Wを主軸方向とする一辺が4.80mほどの方形と推定される。確認された壁高は13~29cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦と考えられる。南コーナー部を中心に両側へ壁溝が延びている。

ピット 5か所。P1~P4は深さ40~49cmで、配置から支柱穴と考えられる。P5は、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 3層に分層される。ロームブロックや焼土ブロックを含む人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

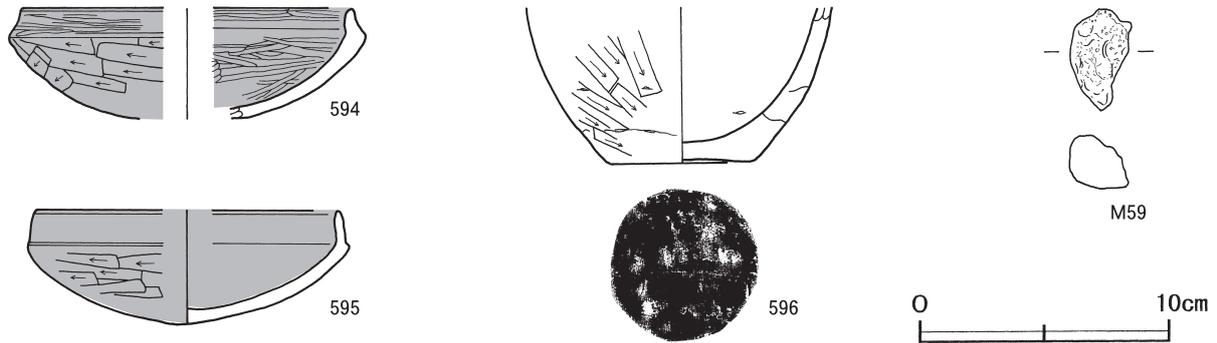
貯蔵穴 西側コーナー部に位置し、長径88cm、短径70cmの楕円形で、深さは18cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片174点（坏20, 高坏1, 器台1, 甕152）、鉄製品2点（鉄滓, 不明）、礫1点の他に、混入した弥生土器片15点、須恵器片6点も出土している。594は南西壁際の覆土下層、596は貯蔵穴からそれぞれ出土している。

所見 本跡は大部分を第121号住居に掘り込まれており、時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第109図 第123号住居跡出土遺物実測図

第123号住居跡出土遺物観察表(第109図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
594	土師器	坏	[13.2]	(4.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	口辺部内・外面へラ磨き 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土下層	30%
595	土師器	坏	[12.0]	4.5	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	覆土中	30%
596	土師器	甕	-	(6.2)	5.9	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り 輪積痕	貯蔵穴内	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M59	椀状滓	4.1	2.4	2.1	25.7	鉄	表面に赤錆付着 凹凸有り	覆土中	

第124号住居跡 (第110・111図)

位置 調査区西部のC 8 j7区で、標高14.1mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第121・122・123号住居に掘り込まれている。

規模と形状 遺存している壁や柱穴の配置から、N-44°-Wを主軸方向とする長軸6.00mほど、短軸5.70mほどの方形と推定される。確認された壁高は6~29cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦と考えられる。

ピット 4か所。深さは47~65cmで、配置から主柱穴と考えられる。

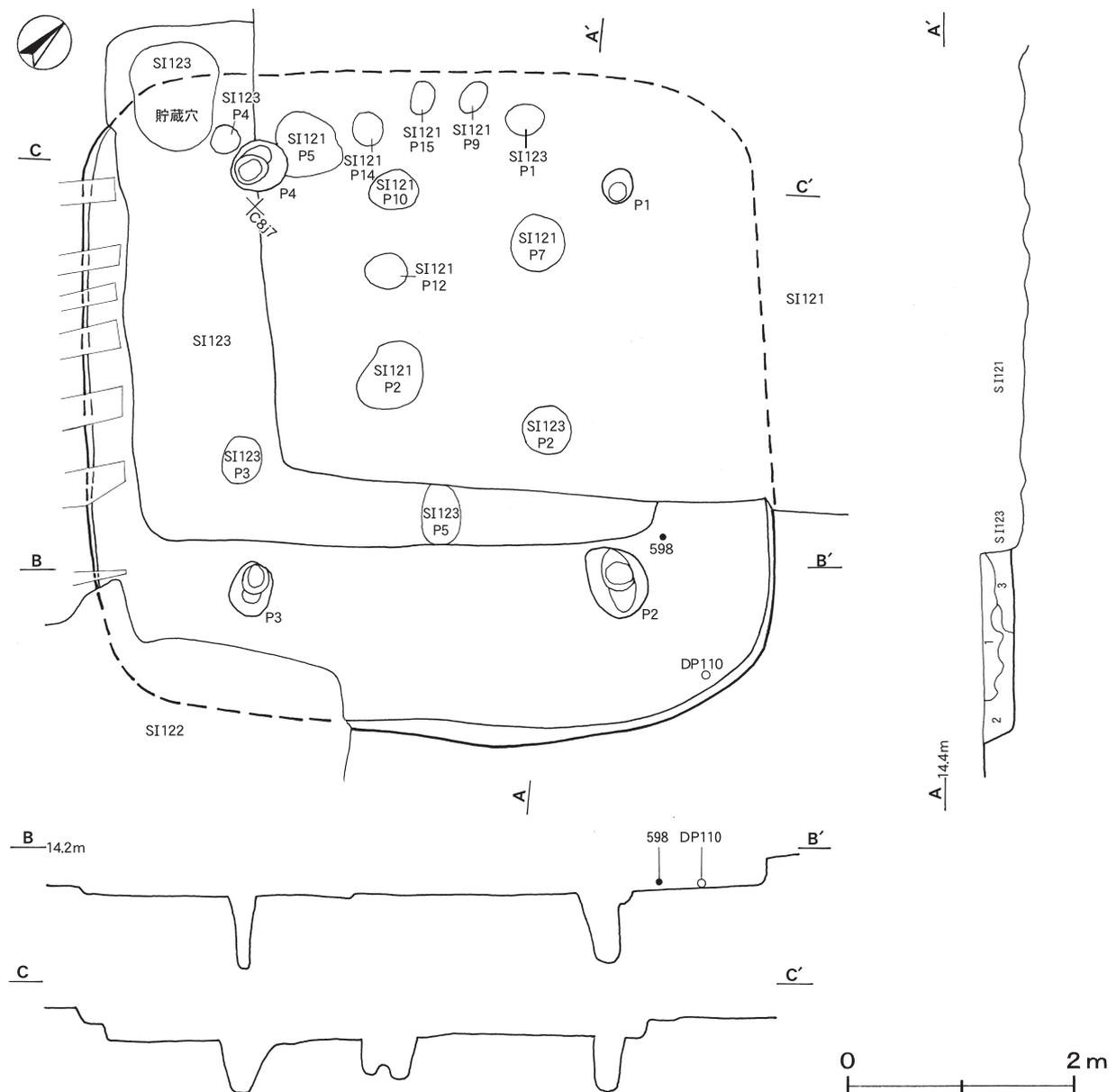
覆土 3層に分層される。不規則な堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

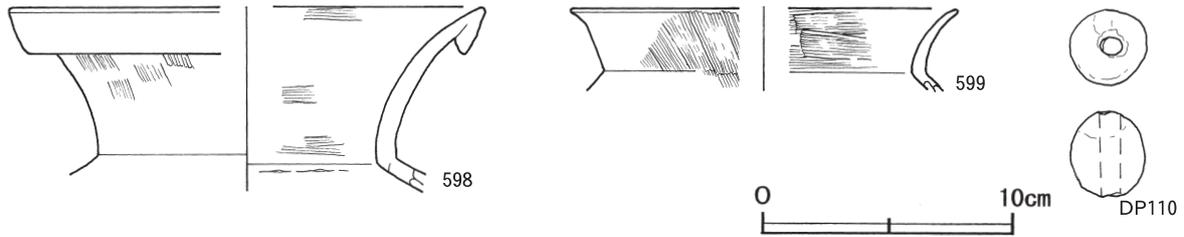
- 1 黒褐色 炭化物・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片26点（高坏8，器台1，甕17），土製品1点（球状土錘），礫3点の他に、流れ込んだ弥生土器片18点も出土している。598は東コーナー付近の覆土下層から出土している。

所見 大部分は第121・122・123号住居に掘り込まれているため、時期を特定できる遺物が少ないが、4世紀代と考えられる。



第110図 第124号住居跡実測図



第111図 第124号住居跡出土遺物実測図

第124号住居跡出土遺物観察表(第111図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
598	土師器	壺	[18.8]	(7.4)	—	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	口辺部内・外面ハケ目調整後擦り消し 輪積痕	覆土下層	10%
599	土師器	甕	[15.3]	(3.2)	—	長石・石英・雲母	褐	普通	口辺部内・外面ハケ目調整	覆土中	5%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP110	球状土錘	3.1	0.7~0.8	3.4	31.2	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	

第125号住居跡 (第112・113図)

位置 調査区西部のD 8 a6区で、標高13.8mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第122号住居、第168・169号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.60m、短軸3.80mの長方形で、主軸方向はN-55°-Wである。壁高は20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、遺存している部分には、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北西壁中央部に付設されている。耕作による攪乱を受けており、焚口部から煙道部までは82cmほどと推定される。袖部幅は88cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しているが、赤変や硬化部分を検出することはできなかった。煙道部は、壁外へ10cmほど掘り込まれていると推定され、火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|-----------------------------------|--------------------------------------|
| 1 暗褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 7 黄褐色 砂質粘土粒子中量、焼土粒子微量 |
| 2 にぶい黄褐色 砂質粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 3 にぶい赤褐色 焼土粒子・砂質粘土粒子中量、炭化粒子微量 | 9 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 10 にぶい黄褐色 砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 にぶい赤褐色 焼土粒子中量、砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 11 黒褐色 炭化粒子少量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 6 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | |

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ25～51cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ19cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

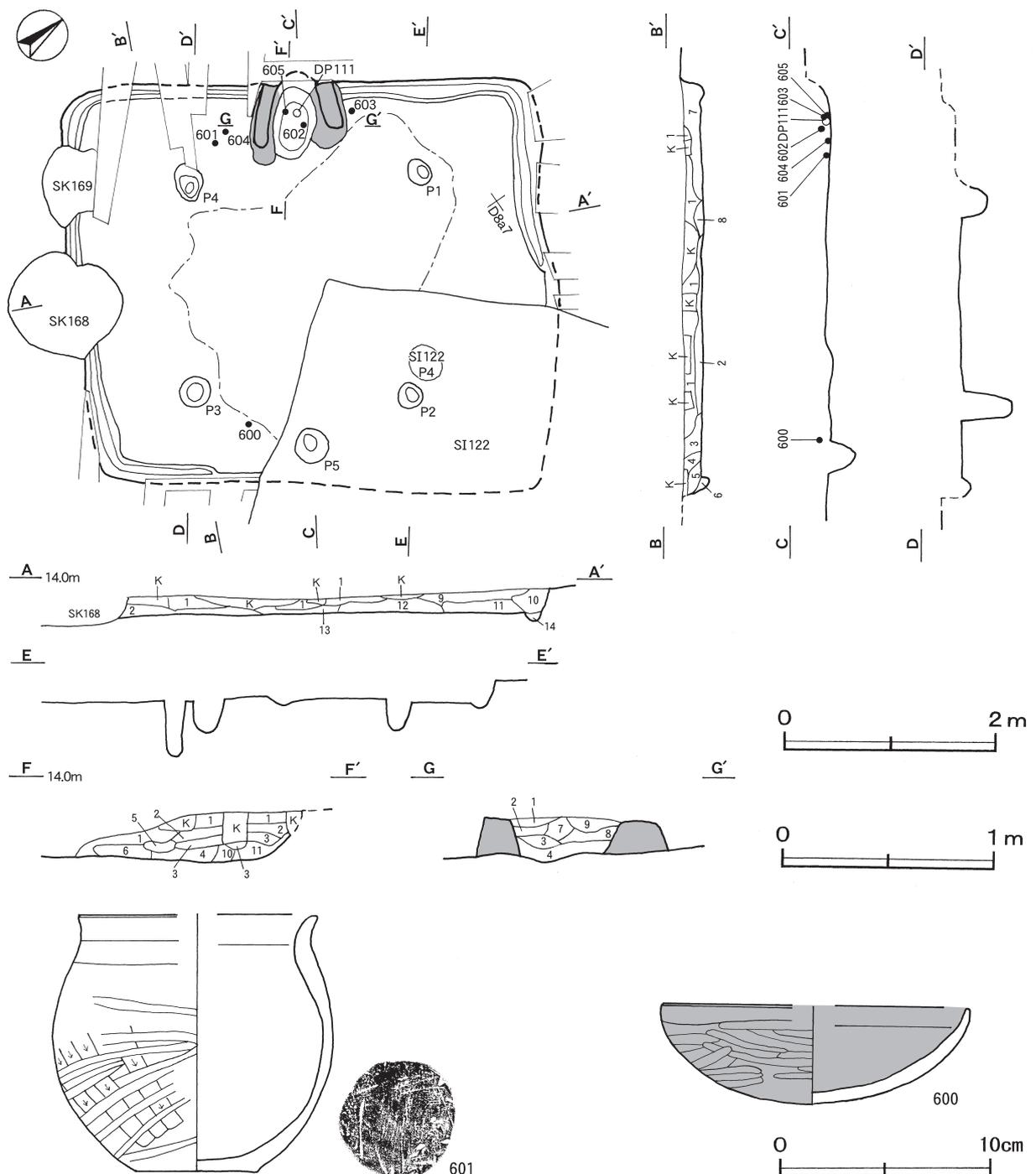
覆土 14層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

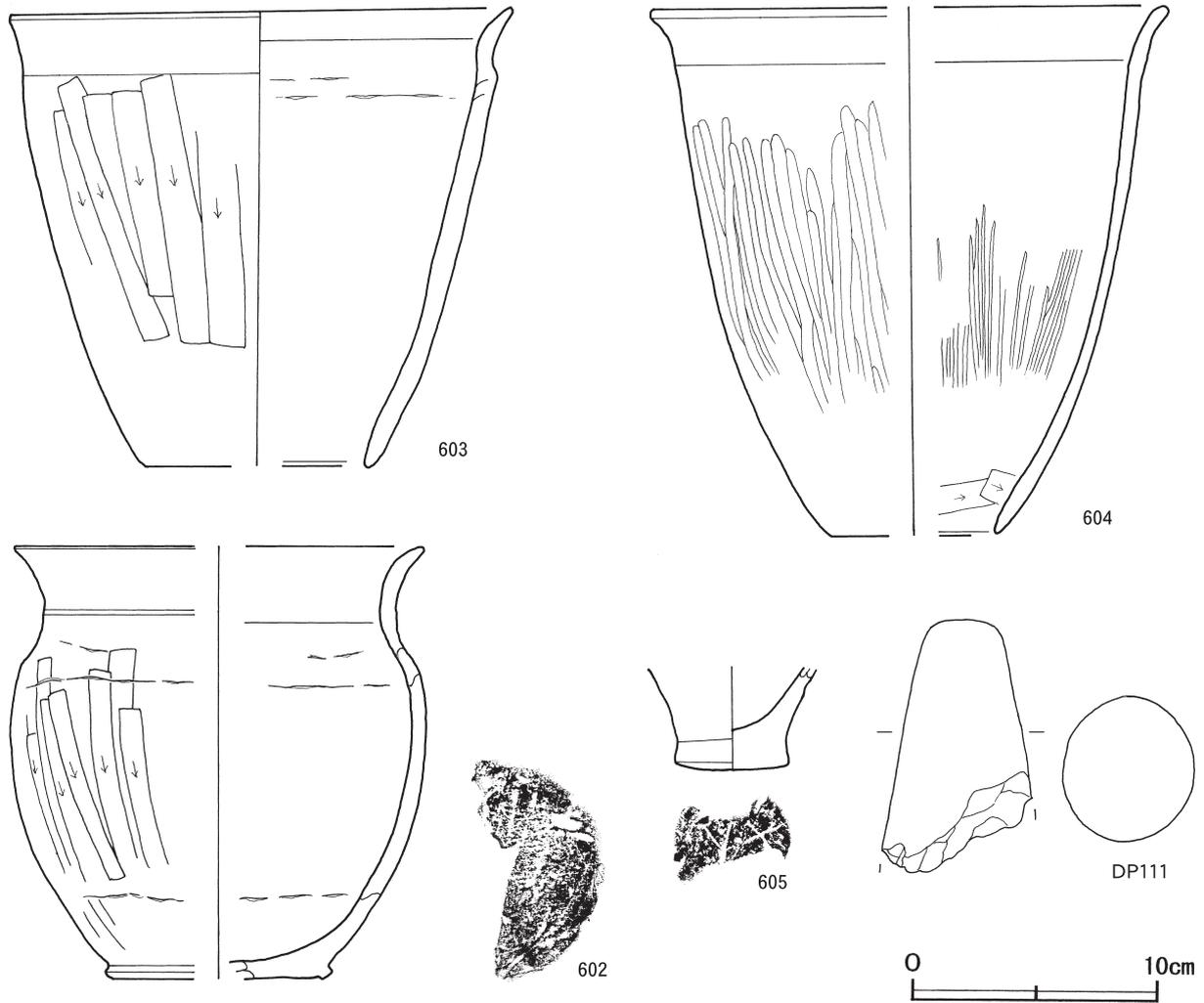
- | | |
|--------------------------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物微量 | 8 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量 | 9 黒褐色 ロームブロック微量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 10 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 4 極暗褐色 ロームブロック微量 | 11 極暗褐色 ロームブロック少量 |
| 5 暗褐色 ロームブロック少量 | 12 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 6 褐色 ローム粒子中量 | 13 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 7 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック微量 | 14 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片160点（坏35，高坏2，壺1，甕121，甑1），手捏土器1点（甕カ），土製品2点（支脚），礫2点の他に，耕作時の攪乱により混入した須恵器片2点も出土している。600は出入り口付近の覆土下層から出土している。その他の遺物は竈付近を中心に出土しており，601・604は竈左側の床面，603は竈右側の床面からの出土である。602・DP111は竈内から重なるように出土しており，住居廃絶時には竈に掛けられた状態で遺棄された可能性が高い。また，605も竈内からの出土で，住居の廃絶時に竈に関わる祭祀的な行為の可能性も考慮できる。

所見 時期は，出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第112図 第125号住居跡・出土遺物実測図



第113図 第125号住居跡出土遺物実測図

第125号住居跡出土遺物観察表(第112・113図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
600	土師器	坏	[14.4]	(4.7)	—	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き	覆土下層	80%
602	土師器	甕	[16.5]	17.7	[8.5]	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 輪積痕	竈内	40%
601	土師器	小形甕	[11.2]	12.2	5.8	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 底部へラ削り	床面	50%
603	土師器	甌	20.3	18.7	[8.9]	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 輪積痕	床面	50%
604	土師器	甌	[21.0]	21.6	[6.8]	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラ磨き 単孔部内面へラ削り	床面	45%
605	土師器	手捏土器	—	(4.2)	4.7	長石・石英・雲母	褐	普通	体部外面ナデ	竈内	70%

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP111	支脚	(10.3)	3.0~6.0	(284.4)	土(長石・石英・雲母)	丁寧なナデ	竈内	

第126号住居跡 (第114図)

位置 調査区西部のD 8 b7区で、標高13.7mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第122号・127号住居に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による攪乱のため床面まで削平された状態で検出され、長軸4.50m、短軸4.40mほどが確認

された。遺存している床面や炉の位置などから判断して、 $N-8^{\circ}-W$ を主軸方向とする方形と推定される。

床 平坦であるが、削平により硬化面は確認できなかった。

炉 北寄りに2か所確認された。炉1は中央部の北側に位置し、長径78cm、短径57cmの楕円形で、床面を掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。炉2は北側のやや東寄り位置し、長径41cm、短径33cmの楕円形で、床面を掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

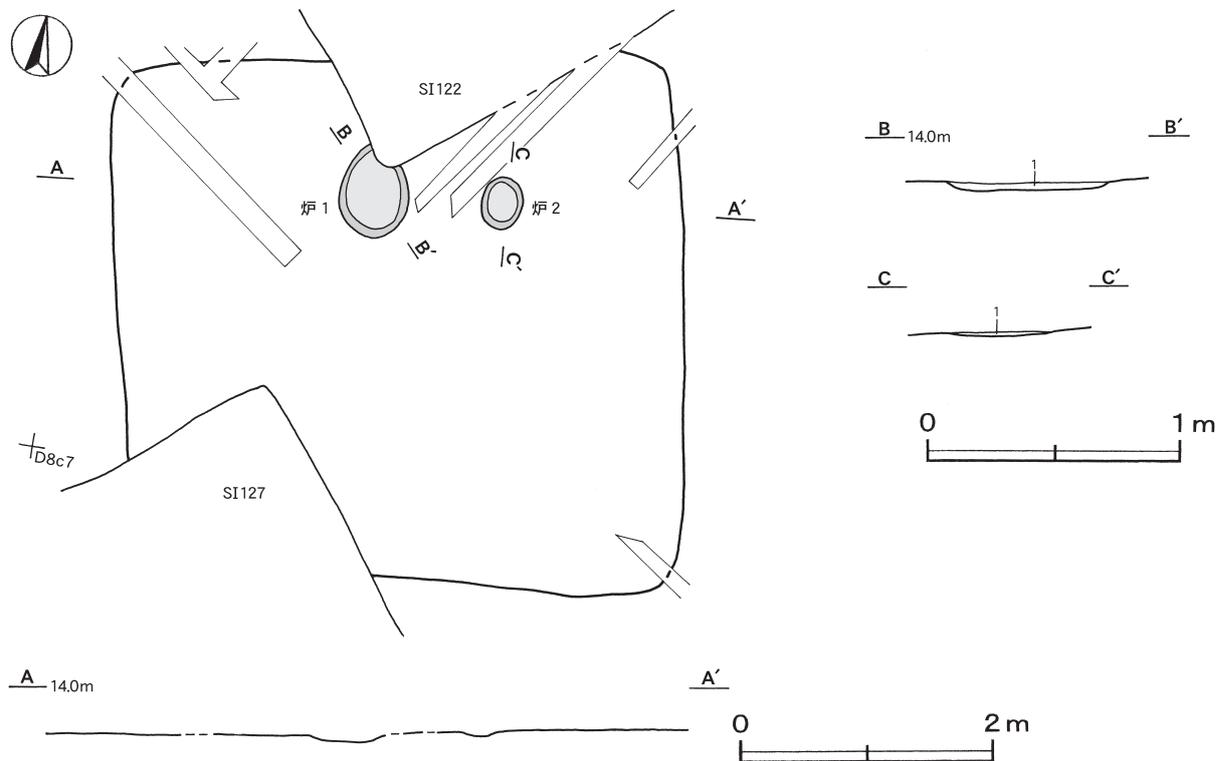
炉1土層解説

1 暗赤褐色 焼土粒子中量

炉2土層解説

1 極暗赤褐色 焼土粒子少量

所見 遺物が出土していないため、時期は不明であるが、第122・127号住居に掘り込まれ、また、炉を有することなどから5世紀以前と想定される。



第114図 第126号住居跡実測図

第127号住居跡 (第115図)

位置 調査区西部のD8c7区で、標高13.7mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第126号住居跡を掘り込み、第9号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 大部分は攪乱を受けており、長軸6.20mほど、短軸2.60mほどが確認された。平面形は方形または長方形と推定され、主軸方向 $N-37^{\circ}-W$ である。壁高は50cm前後で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、北西壁と南東壁に壁溝が周回している。

ピット 1か所。深さは51cmで、配置から支柱穴と考えられる。

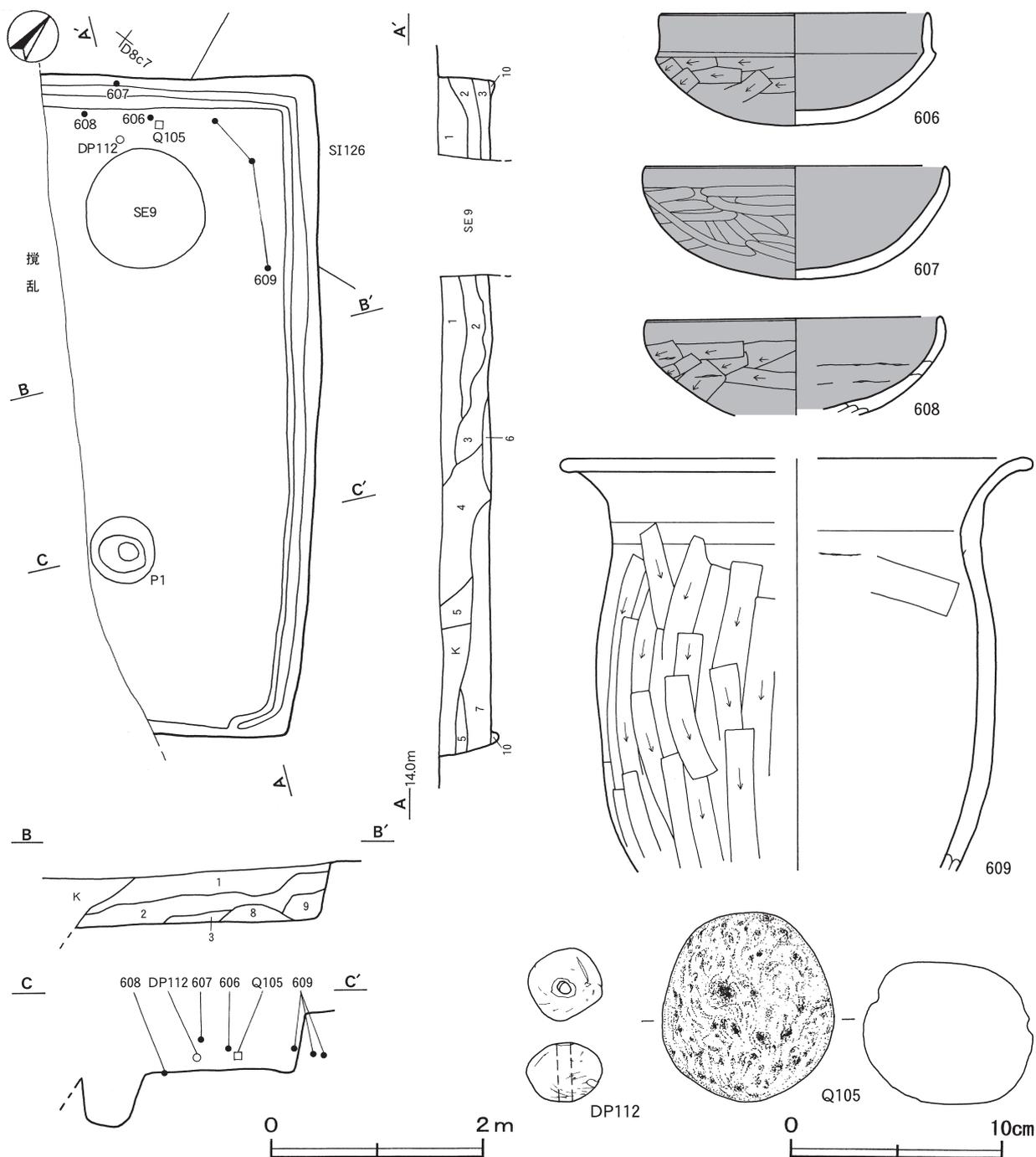
覆土 10層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------|--------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化物・焼土粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 9 褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 5 極暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 | 10 黒褐色 | ロームブロック微量 |

遺物出土状況 土師器片352点(坏141, 甕211), 土製品2点(球状土錘), 石器1点(磨石), 礫2点の他に, 混入した弥生土器片32点, 須恵器片6点も出土している。606・609・DP112・Q105は北コーナー付近の覆土下層, 608は床面から出土している。

所見 時期は, 出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第115図 第127号住居跡・出土遺物実測図

第127号住居跡出土遺物観察表(第115図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
606	土師器	坏	12.4	5.3	—	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	覆土下層	95% PL26
607	土師器	坏	14.2	5.2	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	黒褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面ナデ	覆土中層	80% PL26
608	土師器	坏	13.8	(4.6)	—	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ 輪積痕	床面	50%
609	土師器	甕	[21.8]	(19.5)	—	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ 輪積痕	覆土下層	30%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP112	球状土鏝	3.4	0.6	2.9	31.3	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q105	不明	9.0	8.0	6.6	152.3	軽石	研磨痕	覆土下層	浮子カ PL42

第128号住居跡 (第116図)

位置 調査区西部のC9h1区で、標高15.1mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 耕作による攪乱のため床面の一部が削平されており、長軸3.80m、短軸3.40mほどが確認された。遺存している壁や検出された炉の位置などから判断して、N-48°-Wを主軸方向とする長方形と推定される。遺存している壁高は8cm前後で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部のやや北西寄りに位置している。長径68cm、短径47cmの楕円形で、床面を5cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量

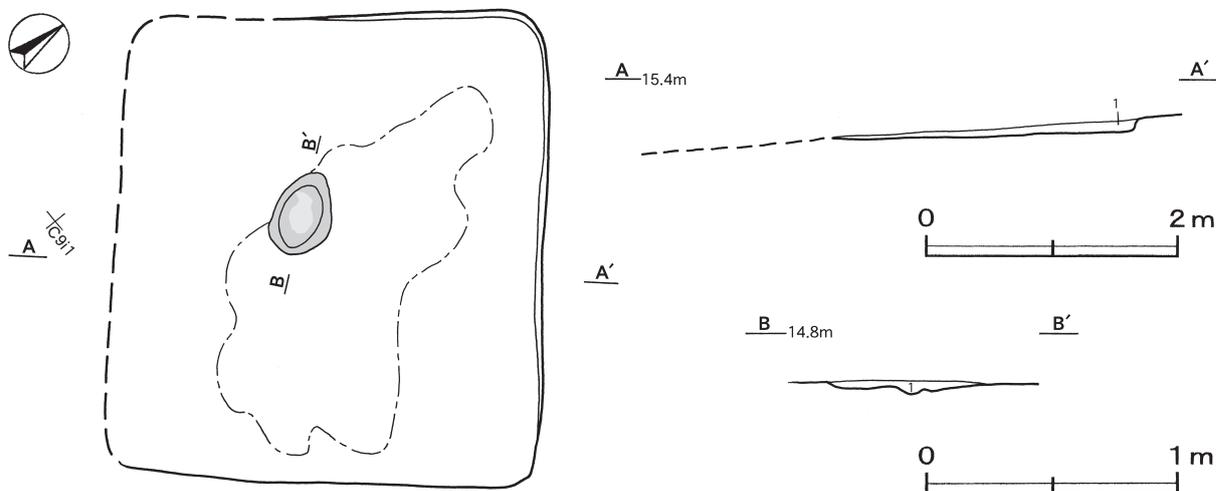
覆土 単一層であるため、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片43点(埴1, 甕42)が出土しているが、細片のため図示することはできない。

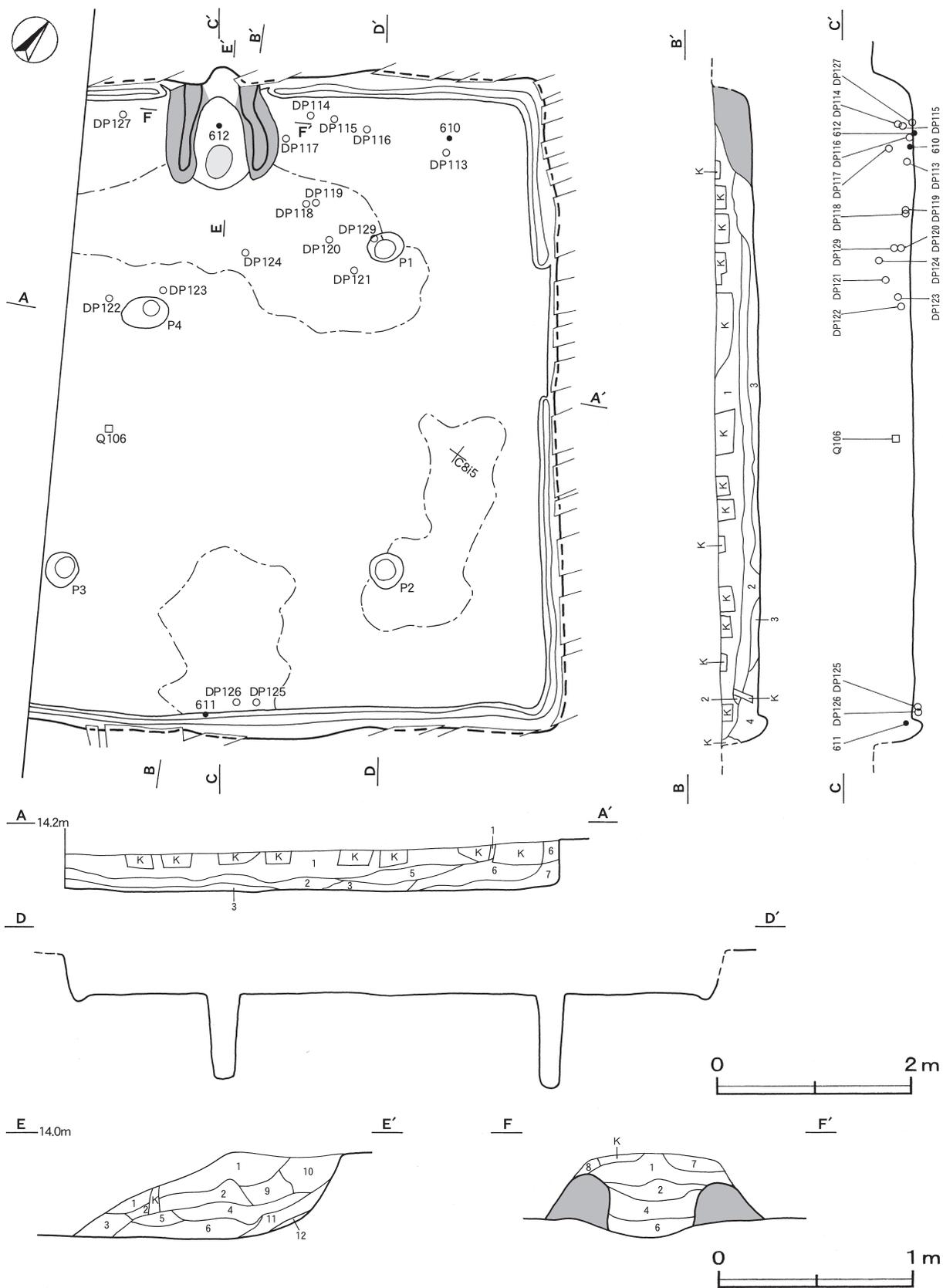
所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土遺物や遺構の形態などから4世紀代と考えられる。



第116図 第128号住居跡実測図

第130号住居跡（第117～119図）

位置 調査区西部のC 8 i4区で、標高13.9mほどの中位段丘上に位置している。



第117図 第130号住居跡実測図

規模と形状 南西側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、長軸6.82m、短軸は5.40mほどが確認された。平面形は方形または長方形と推定され、主軸方向はN-35°-Wである。壁高は40~44cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前や出入り口付近が踏み固められている。竈部分と北東壁の一部を除いて壁溝が周回している。

竈 北西壁中央部に付設されていると考えられ、焚口部から煙道部まで126cmである。袖部幅は114cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ18cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。第9層は天井部の崩落層と考えられる。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|---------------------------|-----------|----------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | 砂質粘土ブロック・ローム粒子少量 | 8 極暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 にぶい赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 9 黄褐色 | 砂質粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 灰褐色 | 砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量 | 10 にぶい黄褐色 | 砂質粘土粒子中量、ローム粒子少量、炭化物微量 |
| 5 赤褐色 | 焼土ブロック中量、砂質粘土ブロック・ローム粒子少量 | 11 暗褐色 | 炭化粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 12 黒褐色 | 炭化物・砂質粘土ブロック少量、ローム粒子微量 |

ピット 4か所。P1~P3は深さは92~102cmで、配置から支柱穴と考えられる。P4は深さ37cmで、性格は不明である。

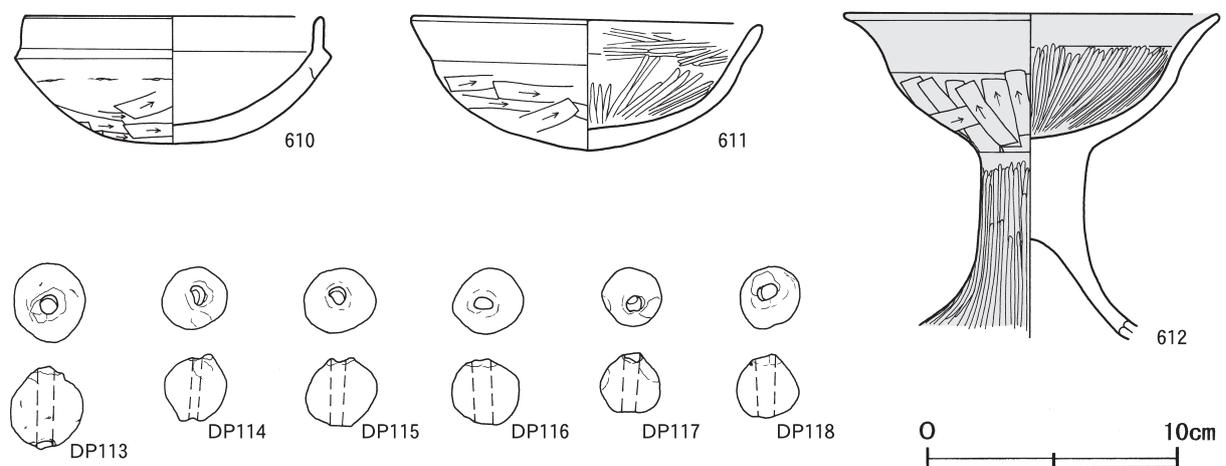
覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

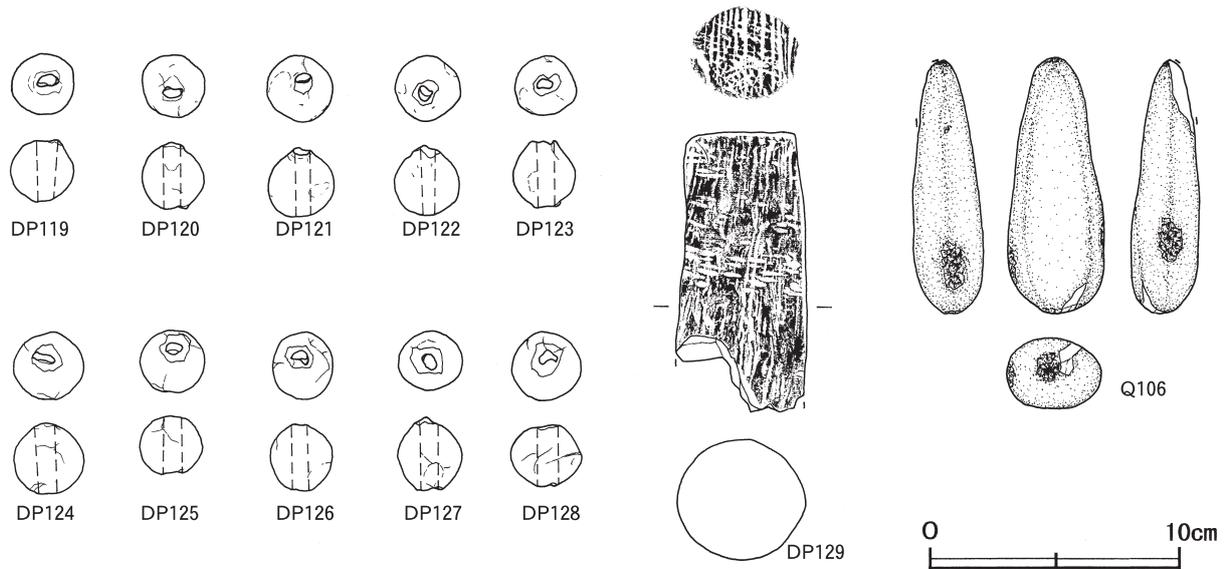
- | | | | |
|--------|----------------|---------|----------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 6 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子少量 | 7 にぶい褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 褐色 | ローム粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片584点（坏47、高坏6、甕529、甌2）、土製品23点（球状土錘19、支脚3、不明1）、石器1点（敲石）、鉄滓1点、礫6点の他に、混入した弥生土器片125点、須恵器片22点も出土している。610は北コーナー部の床面から出土している。612は竈内の火床面よりやや奥まった位置から逆位の状態で出土し、二次焼成を受けていることから支脚として転用された可能性が高い。

所見 時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第118図 第130号住居跡出土遺物実測図(1)



第119図 第130号住居跡出土遺物実測図(2)

第130号住居跡出土遺物観察表(第118・119図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
610	土師器	坏	11.7	5.1	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ 輪積痕	床面	100% PL26
611	土師器	坏	13.9	5.2	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	覆土下層	90% PL27
612	土師器	高坏	14.7	(12.9)	—	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	坏部口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 脚部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラ磨き	竈内	80% 赤彩 PL30

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP113	球状土錘	2.9	0.6	3.3	24.3	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP114	球状土錘	2.5	0.3	2.7	(15.2)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP115	球状土錘	2.8	0.5~0.6	2.7	18.5	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP116	球状土錘	2.8	0.7	2.6	(18.4)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP117	球状土錘	2.4	0.5~0.6	2.4	(10.3)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	
DP118	球状土錘	2.5	0.6~0.8	2.5	(12.7)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP119	球状土錘	2.5	0.6~0.8	2.5	15.1	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP120	球状土錘	2.5	0.7	2.7	15.9	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP121	球状土錘	2.7	0.6	2.7	(18.7)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	
DP122	球状土錘	2.6	0.4~0.6	2.8	17.0	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP123	球状土錘	2.5	0.7	2.6	15.6	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP124	球状土錘	2.9	0.7~0.8	2.8	18.6	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土上層	
DP125	球状土錘	2.6	0.7	2.3	14.2	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	床面	
DP126	球状土錘	2.7	0.6	2.6	16.3	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	床面	
DP127	球状土錘	2.5	0.7	2.9	14.7	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP128	球状土錘	2.9	0.9	2.5	(17.1)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	竈覆土中	

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP129	支脚	(11.3)	4.1~(5.2)	(306.6)	土(長石・石英・雲母)	格子状の叩き目	覆土中層	

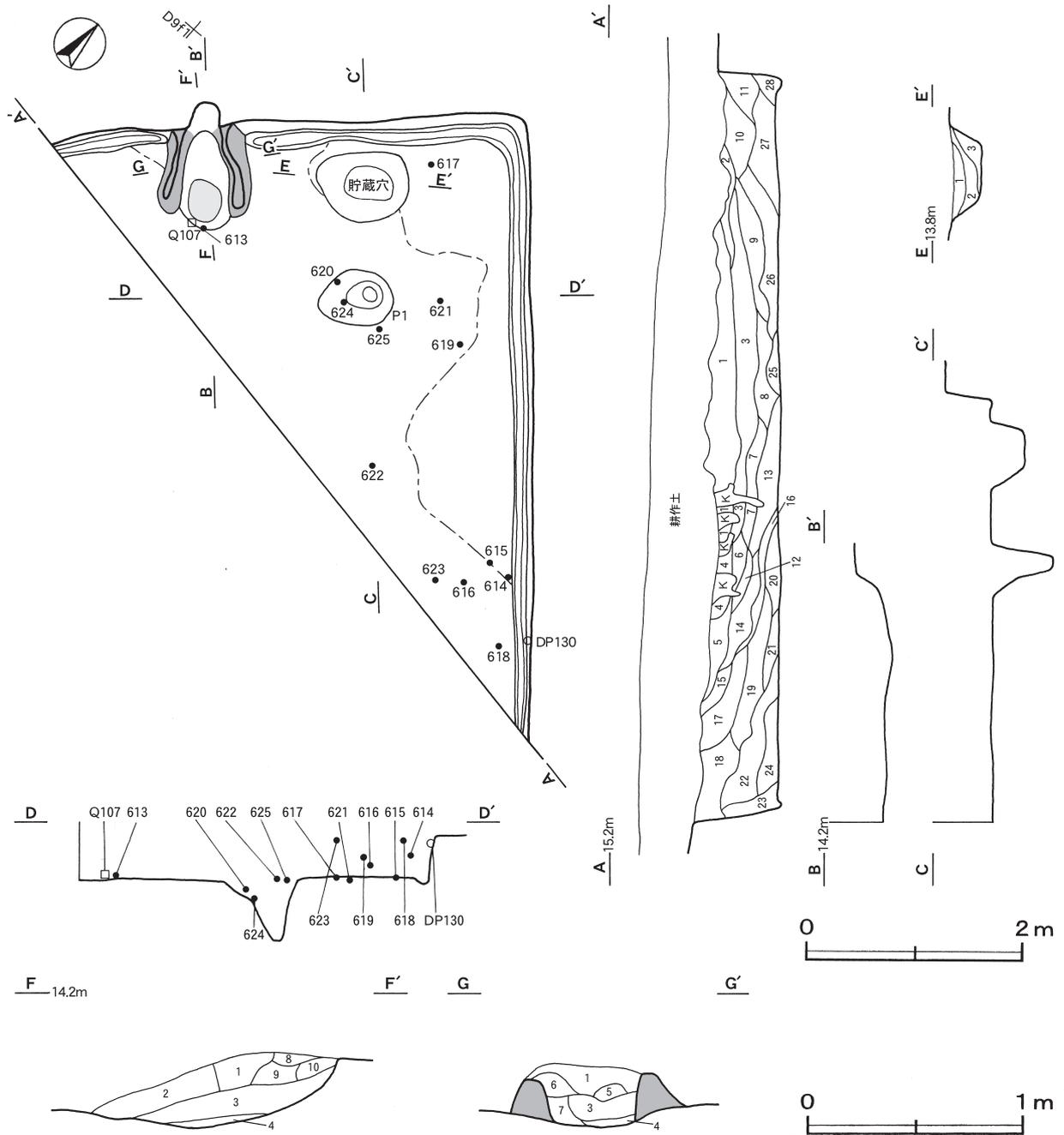
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q106	敲石	10.2	3.8	2.7	(138.2)	砂岩	両端部と両側部に敲打痕	覆土中層	

第132号住居跡 (第120~122図)

位置 調査区西部のD9f2区で、標高14.2mほどの中位段丘上に位置している。

規模と形状 南側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、長軸5.80m、短軸4.48mほどが確認できた。竈や柱穴の位置などから判断して、 $N-42^{\circ}-W$ を主軸方向とする方形または長方形と推定される。確認できた壁高は39~78cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、遺存している部分には、竈部分を除いて壁溝が周回している。



第120図 第132号住居跡実測図

竈 北西壁の中央部に付設されていると考えられ、焚口部から煙道部まで120cmである。袖部幅は88cmほどで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ24cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 黒褐色	ロームブロック、炭化粒子・砂質粘土粒子微量	6 にぶい赤褐色	砂質粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量
2 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子少量	7 にぶい赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ロームブロック微量
3 極暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ロームブロック微量	8 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4 にぶい赤褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・砂質粘土ブロック微量	9 極暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量
5 暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量	10 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 1か所。深さは60cmで、配置から支柱穴と考えられる。

覆土 28層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック微量	15 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 極暗褐色	ローム粒子少量	16 暗褐色	ロームブロック・砂質粘土粒子少量、炭化物・焼土粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	17 褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック微量
4 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	18 褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
5 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	19 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
6 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	20 極暗褐色	ロームブロック少量
7 極暗褐色	炭化粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量	21 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量
8 極暗褐色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量	22 褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
9 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	23 黒褐色	ローム粒子微量
10 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	24 暗褐色	ローム粒子少量
11 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	25 黒褐色	ロームブロック少量
12 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	26 極暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量
13 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	27 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量
14 にぶい赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、ローム粒子微量	28 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量

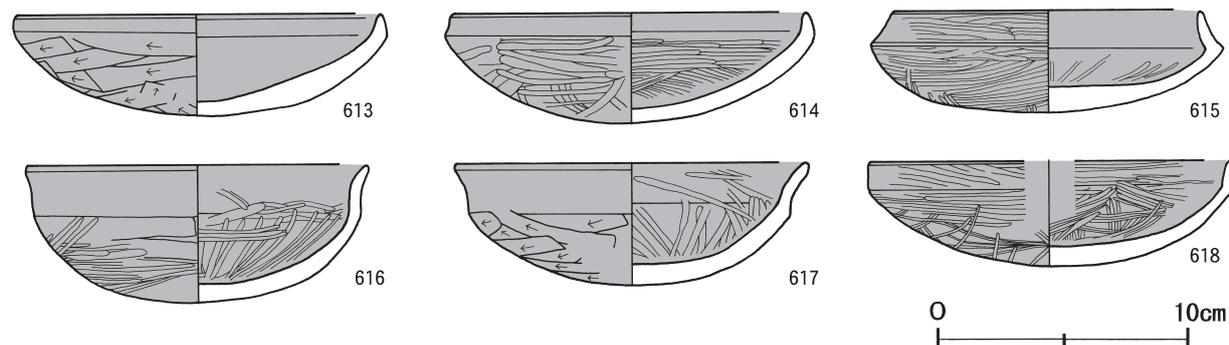
貯蔵穴 北側コーナー部に位置し、長径85cm、短径66cmの楕円形で、深さは31cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

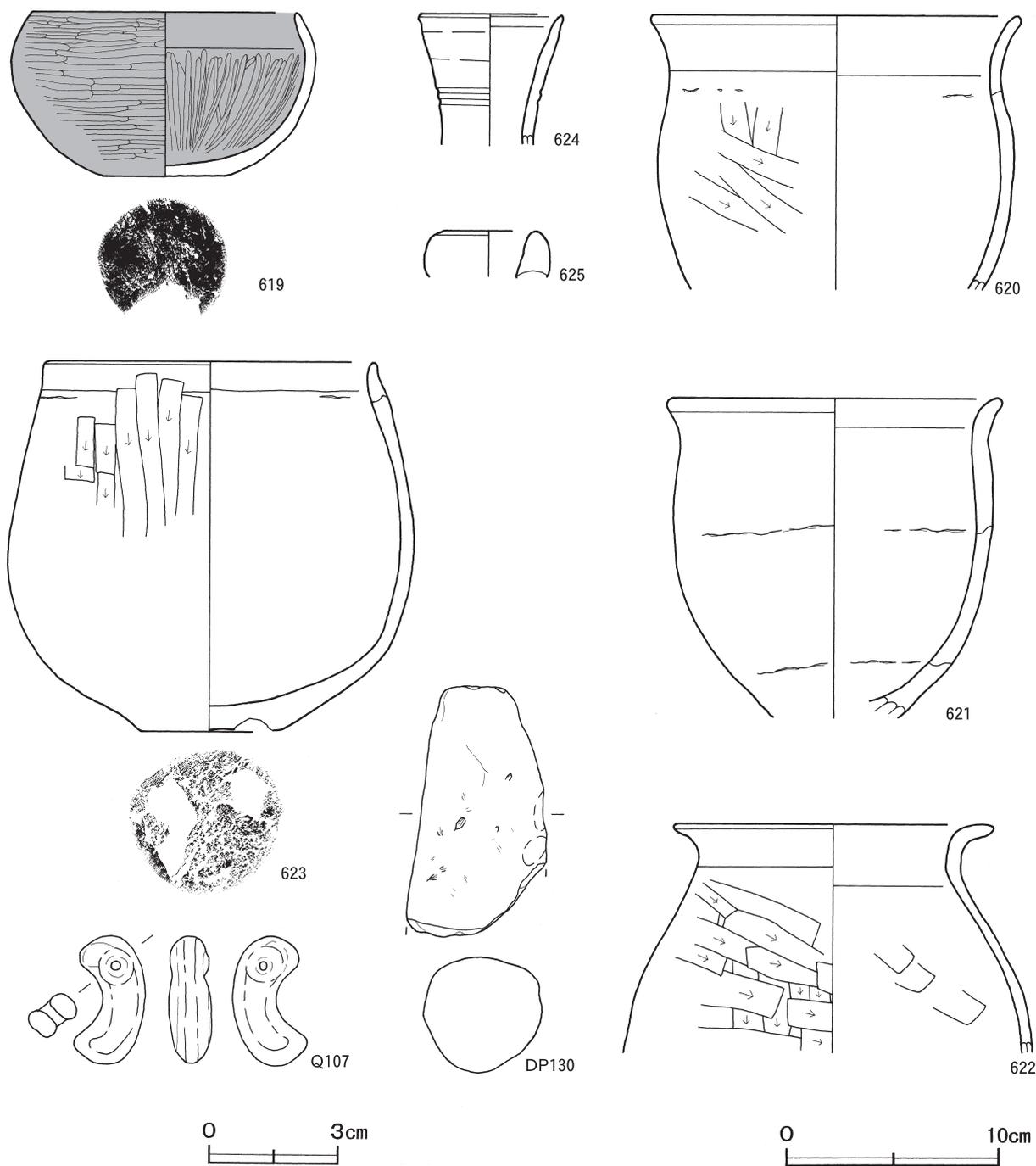
1 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	3 暗褐色	ロームブロック少量
2 黒褐色	ローム粒子少量		

遺物出土状況 土師器片218点（坏37、椀1、甕179、甌1）、須恵器片1点（瓶類）、手捏土器1（坏カ）、土製品1点（支脚）、石製品1点（勾玉）、礫1点の他に、流れ込んだ弥生土器片26点も出土している。613は竈前、615は北東壁際、617は北コーナー部、621はP 1付近の床面からそれぞれ出土している。624はP 1覆土上層から出土している。南東壁際の遺物は比較的高い位置から出土しており、埋没過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第121図 第132号住居跡出土遺物実測図(1)



第122図 第132号住居跡出土遺物実測図(2)

第132号住居跡出土遺物観察表(第121・122図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
613	土師器	坏	14.5	4.3	—	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	床面	85% PL26
614	土師器	坏	13.9	4.4	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラ磨き	覆土中層	90% PL26
615	土師器	坏	12.2	4.0	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	暗赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラ磨き	床面	85% PL26
616	土師器	坏	13.5	5.5	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラ磨き	覆土下層	75% PL27
617	土師器	坏	13.9	4.9	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	黒褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	床面	70% PL26
618	土師器	坏	[14.4]	4.2	—	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラ磨き	覆土上層	50%
619	土師器	碗	12.4	7.7	5.7	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラ磨き 底部へラ削り	覆土中層	85% PL29

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
620	土師器	甕	17.2	(12.9)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 輪積痕	P1 覆土上層	60%
622	土師器	甕	14.6	(10.7)	—	長石・石英	浅黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ	床面	30%
623	土師器	甕	15.4	17.4	6.6	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 輪積痕	覆土上層	30%
621	土師器	小形甕	15.2	(15.0)	—	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部内・外面摩滅調整不明 輪積痕	床面	60%
624	須恵器	瓶類	6.5	(6.2)	—	長石・石英	褐灰	良好	口縁部に2条の平行沈線	P1 覆土上層	9%
625	土師器	手捏土器	4.4	(2.2)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	ナデ	床面	40%

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP130	支脚	(11.8)	2.9~(6.6)	(361.6)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子・緑)	指頭によるナデ 粗痕	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q107	勾玉	3.0	1.6	1.0	6.0	滑石	一方向からの穿孔 孔径0.2mm	覆土下層	PL42

第133号住居跡（第123・124図）

位置 調査区西部のD 8 e9区で、標高13.7mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第134号住居跡を掘り込み、第6号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 南側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、N-38°-Wを主軸方向とする長軸6.70m、短軸6.60mほどの方形と推定される。壁高は35~37cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、全体が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北西壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで146cmである。袖部幅は106cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ32cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|----------------------------|----------|------------------------------|
| 1 暗褐色 | 砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子中量、炭化粒子微量 | 6 にぶい赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 3 にぶい赤褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 4 極暗褐色 | 砂質粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | | |

ピット 7か所。P 1~P 3は深さは22~41cmで、配置から支柱穴と考えられる。P 4は深さ16cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P 5~P 7の性格は不明である。

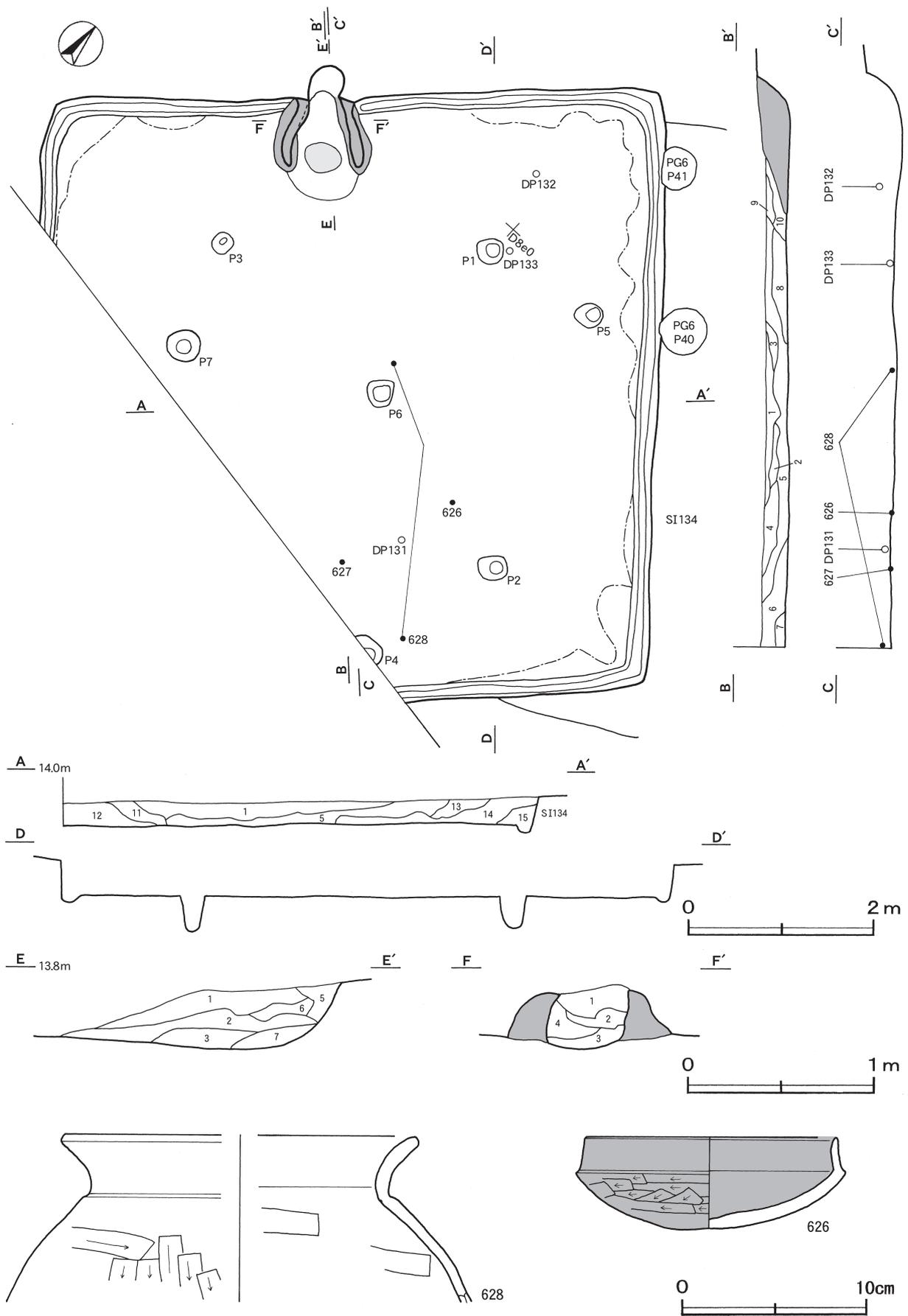
覆土 15層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

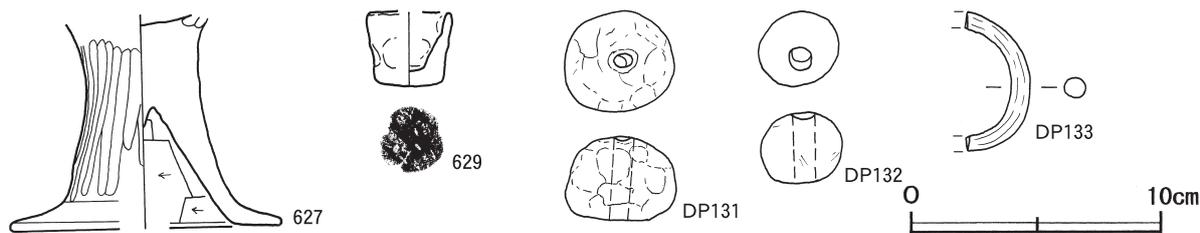
- | | | | |
|--------|----------------------------|---------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量 |
| 2 黒色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 10 褐色 | ローム粒子・砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 極暗褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 12 極暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 極暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 13 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 6 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 14 褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量 |
| 7 暗褐色 | ローム粒子少量 | 15 黒色 | 炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 8 黒褐色 | 砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片649点（坏17，高坏7，甕624，甌1），手捏土器1（壺カ），土製品4点（球状土錘2，紡錘車1，不明1），礫2点の他に、流れ込んだ弥生土器片106点，須恵器片11点も出土している。626・627は中央部南東寄りの床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第123图 第133号住居跡・出土遺物実測図



第124図 第133号住居跡出土遺物実測図

第133号住居跡出土遺物観察表(第123・124図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
626	土師器	坏	13.4	5.0	—	長石・石英・雲母	黒	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	床面	90%
627	土師器	高坏	—	(8.5)	[10.8]	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	脚部外面へラ削り後へラ磨き 脚部内面へラ削り	床面	25%
628	土師器	甕	[18.6]	(9.0)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ	覆土下層	15%
629	土師器	手捏土器	[3.2]	2.9	2.1	長石・石英・雲母	黒褐	普通	指頭によるナデ 指頭痕	覆土中	70%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP131	球状土錘	4.4	0.7	3.3	63.7	土(長石・石英・雲母)	指頭痕 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP132	球状土錘	3.3	0.9	2.9	27.2	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP133	不明土製品	(5.4)	(2.6)	0.8	(6.2)	土(長石・石英・雲母)	全面丁寧なナデ	覆土下層	

第136号住居跡 (第125・126図)

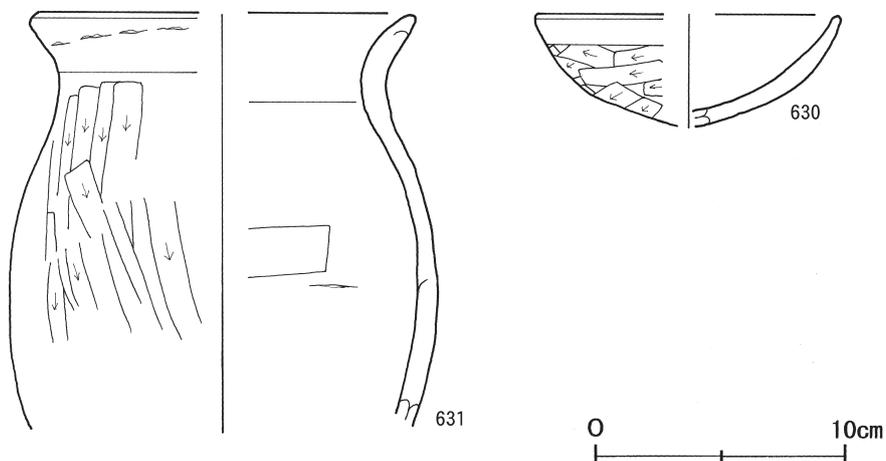
位置 調査区西部のC 8 h8区で、標高14.9mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第120号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、N-34°-Eを主軸方向とする一辺が5.80mほどの方形と推定される。壁高は50~80cm前後で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、南側部分が踏み固められている。

ピット 3か所。深さは64~74cmで、配置から支柱穴と考えられる。



第125図 第136号住居跡出土遺物実測図

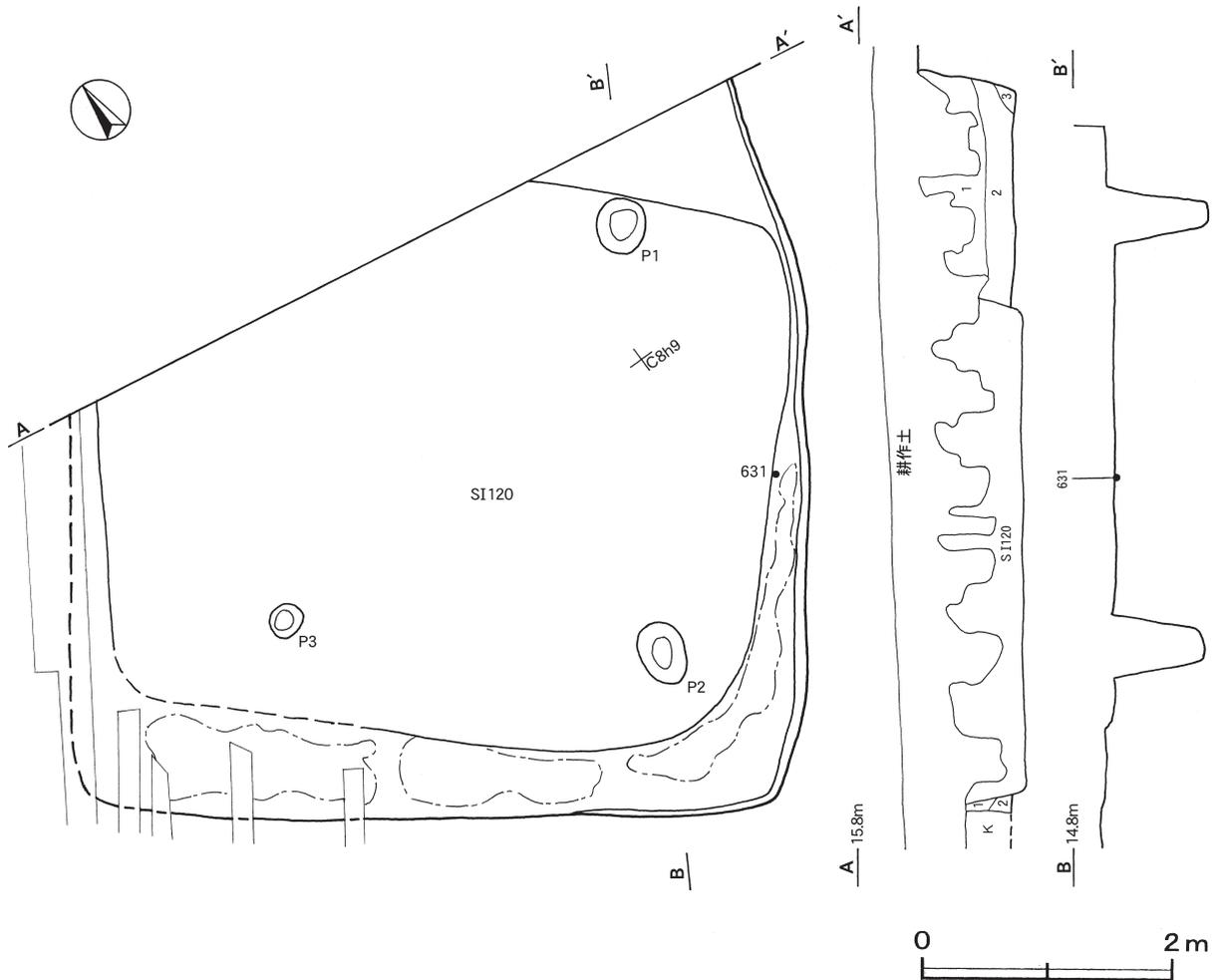
覆土 3層に分層されるが、耕作による攪乱が激しいため堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片65点 (坏13, 高坏5, 甕47), 礫1点の他に, 流れ込んだ弥生土器片12点も出土している。631は南東壁寄りの床面から出土している。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが, 出土土器から6世紀代と考えられる。



第126図 第136号住居跡実測図

第136号住居跡出土遺物観察表(第125図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
630	土師器	坏	[12.0]	(4.5)	-	長石・石英・雲母	黒	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土中	25%
631	土師器	甕	[15.0]	(16.6)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 輪積痕	床面	40%

第138号住居跡 (第127図)

位置 調査区中央部のD10c9区で, 標高22.6mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第8号溝に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による攪乱が激しいため遺構全体の確認はできなかったが、N-7°-Wを主軸方向とする長軸3.23m、短軸3.18mの方形と推定される。遺存している壁高は23cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されているが、第8号溝に掘り込まれているため煙道部は検出できなかった。遺存している袖部幅は85cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 砂質粘土粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 灰褐色 鹿沼パミス少量, ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック・砂質粘土粒子微量

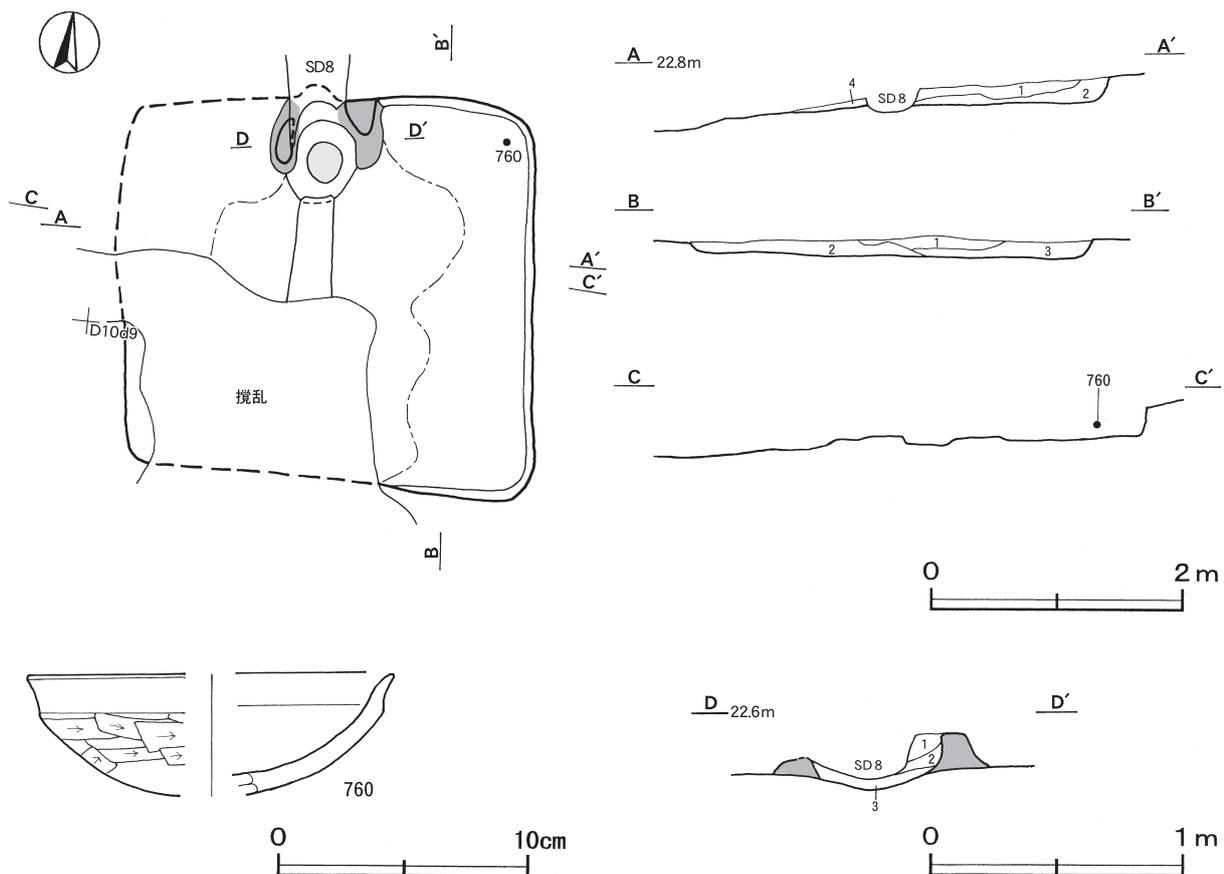
覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・鹿沼パミス微量
- 2 褐色 ローム粒子少量, 焼土ブロック・鹿沼パミス微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・鹿沼パミスブロック・砂質粘土粒子微量
- 4 暗褐色 鹿沼パミスブロック少量, 焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片10点(坏1, 甕9)の他に、流れ込んだ縄文土器片1点, 弥生土器片3点も出土している。760は北東コーナー部の覆土下層から出土している。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、第139号住居跡と規模や主軸方向がほぼ同じであり、出土遺物の特徴も酷似することから7世紀前半と考えられる。



第127図 第138号住居跡・出土遺物実測図

第138号住居跡出土遺物観察表(第127図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
760	土師器	杯	[14.6]	(4.8)	—	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土下層	40%

第139号住居跡 (第128・129図)

位置 調査区中央部のD10c0区で、標高23.0mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 長軸3.42m、短軸3.30mの方形で、主軸方向はN-21°-Wである。壁高は4~26cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁のほぼ中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで83cmである。袖部幅は89cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ31cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

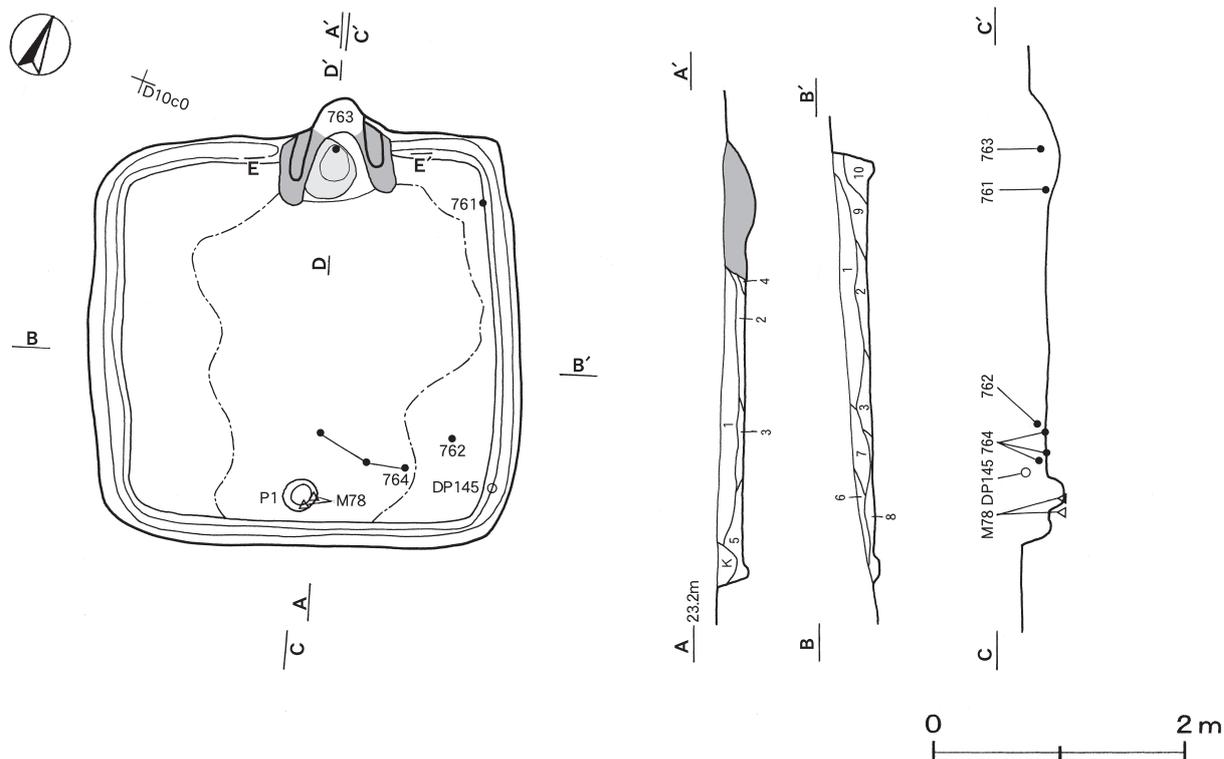
- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 にぶい赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 にぶい赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス少量

ピット 1か所。深さは13cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 10層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

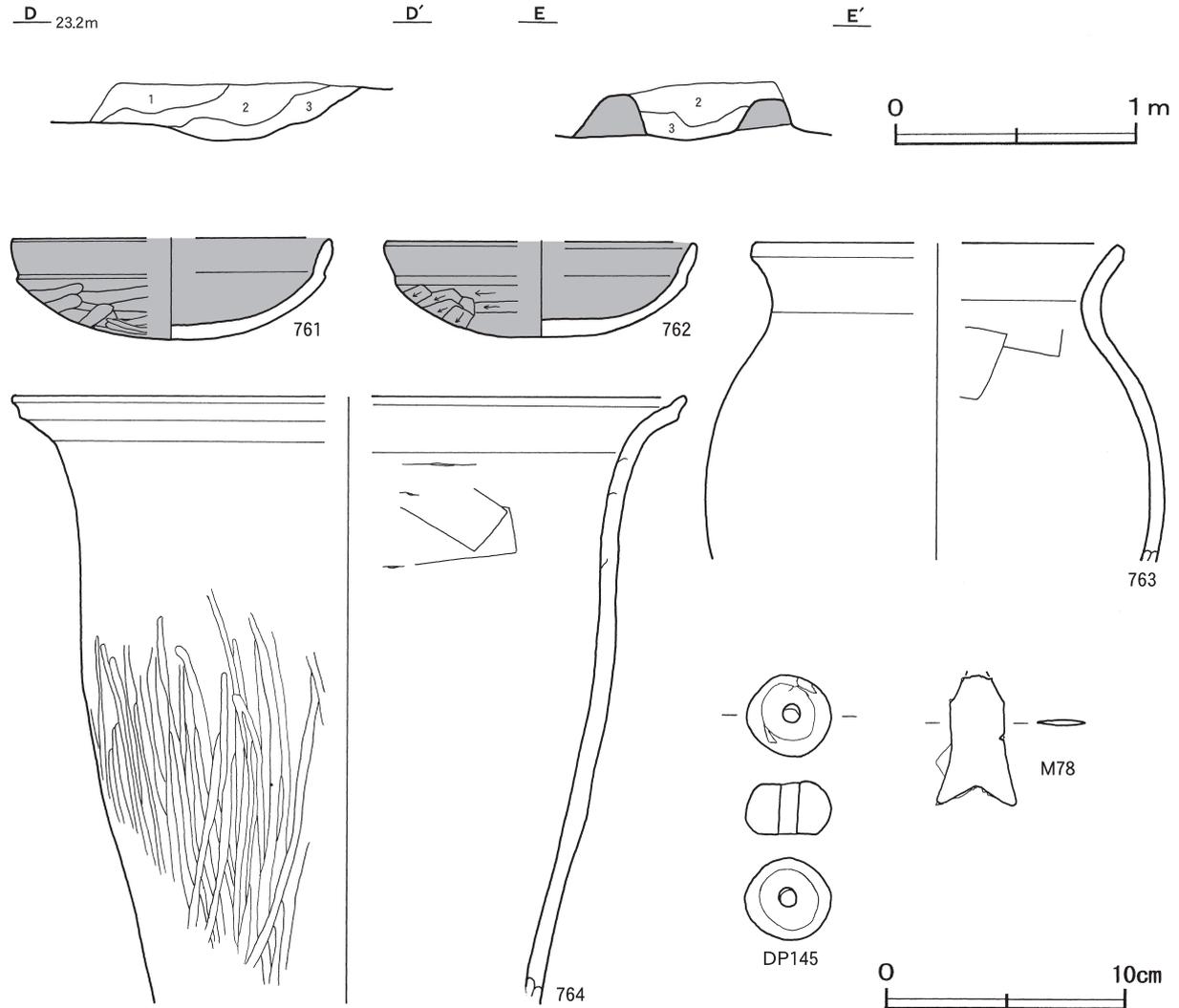
- 1 暗褐色 鹿沼パミス少量, ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子・鹿沼パミス微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子・砂質粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子・鹿沼パミス少量, 炭化物微量
- 6 極暗褐色 炭化物・ローム粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量, 鹿沼パミス微量
- 8 褐色 ローム粒子中量, 鹿沼パミスブロック微量
- 9 褐色 鹿沼パミス中量, ローム粒子少量
- 10 褐色 ローム粒子・鹿沼パミス少量



第128図 第139号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片42点（坏4，甕37，甌1），土製品1点（紡錘車），鉄製品1点（鉄鏃），礫5点の他に，流れ込んだ弥生土器片12点も出土している。761は北東コーナー部の覆土下層，762は南東コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。764は南東コーナー寄りの床面から覆土下層にかけて出土している。M78はP1の底面近くから出土している。

所見 時期は，出土土器から7世紀前半と考えられる。



第129図 第139号住居跡・出土遺物実測図

第139号住居跡出土遺物観察表(第129図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
761	土師器	坏	[13.2]	4.2	—	長石・石英・雲母	にぶい・褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面ナデ	覆土下層	50%
762	土師器	坏	[12.8]	4.0	—	長石・石英・雲母	にぶい・黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	覆土下層	40%
763	土師器	甕	[15.0]	(13.2)	—	長石・石英・雲母	にぶい・赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面摩擦調整不明 内面へラナデ	竈内	20%
764	土師器	甌	[27.8]	(25.3)	—	長石・石英・雲母	にぶい・橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラナデ 輪積痕	床面	40%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP145	紡錘車	3.6	0.7	2.3	30.0	土(長石・石英・雲母)	ナデ	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M78	鉄鎌	(5.5)	3.3	0.3	(8.5)	鉄	無茎5角鎌 断面平型	P1内	

第140号住居跡（第130図）

位置 調査区中央部のD11d1区で、標高23.4mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 長軸3.52m、短軸3.16mの長方形で、主軸方向はN-7°-Wである。壁高は10~26cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁のほぼ中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで75cmである。袖部幅は99cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ18cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

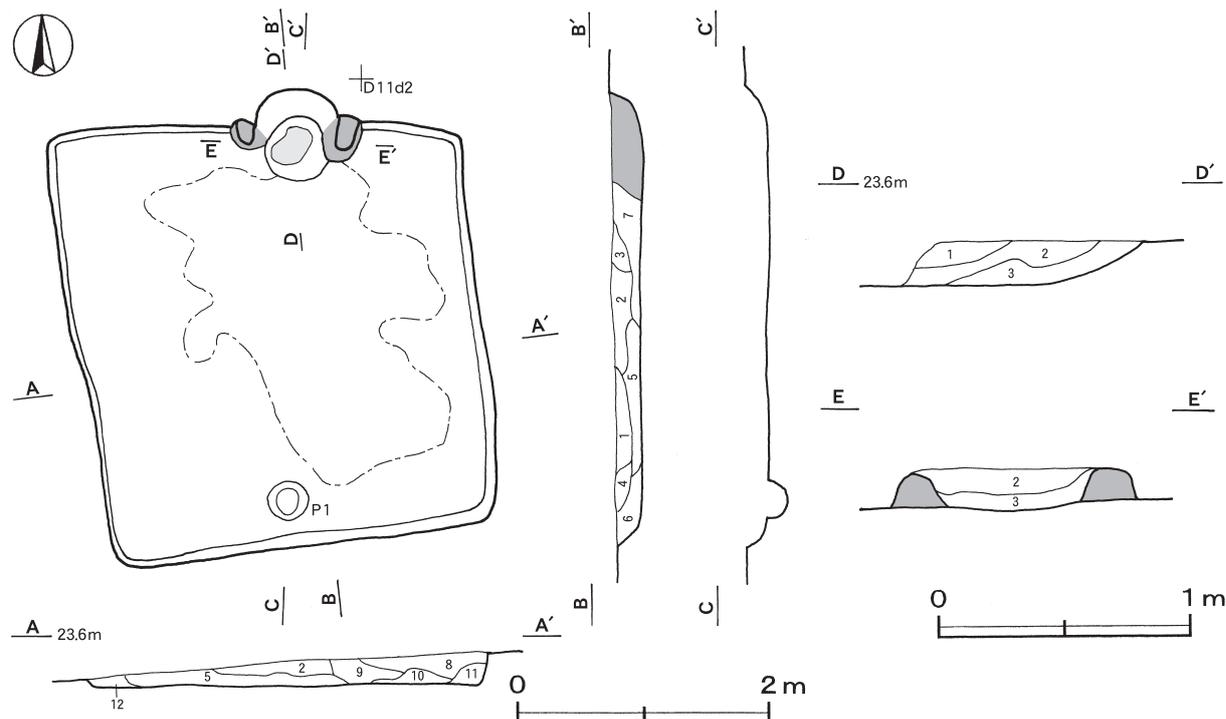
- | | | | |
|--------|---------------------------------|-------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 | 砂質粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 3 黒褐色 | 焼土ブロック少量、炭化物・ローム粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量 | | |

ピット 1か所。深さ16cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 12層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------------|--------|-------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、鹿沼パミス微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック少量、鹿沼パミスブロック微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子微量 | 9 暗褐色 | ローム粒子少量、鹿沼パミスブロック微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック少量、鹿沼パミス微量 | 10 暗褐色 | ローム粒子少量、鹿沼パミス微量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化物微量 | 11 暗褐色 | ロームブロック中量、鹿沼パミス微量 |
| 6 褐色 | ロームブロック少量、炭化物・鹿沼パミスブロック微量 | 12 褐色 | ローム粒子少量、鹿沼パミス微量 |



第130図 第140号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片13点（甕）の他に、流れ込んだ弥生土器片4点も出土しているが、細片のため図示することはできない。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、第139号住居跡と規模や主軸方向がほぼ同じであり、出土遺物の特徴も酷似することから7世紀前半と考えられる。

第142号住居跡（第131・132図）

位置 調査区中央部のD10f0区で、標高23.0mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第141号住居跡を掘り込み、第7号溝に掘り込まれている。

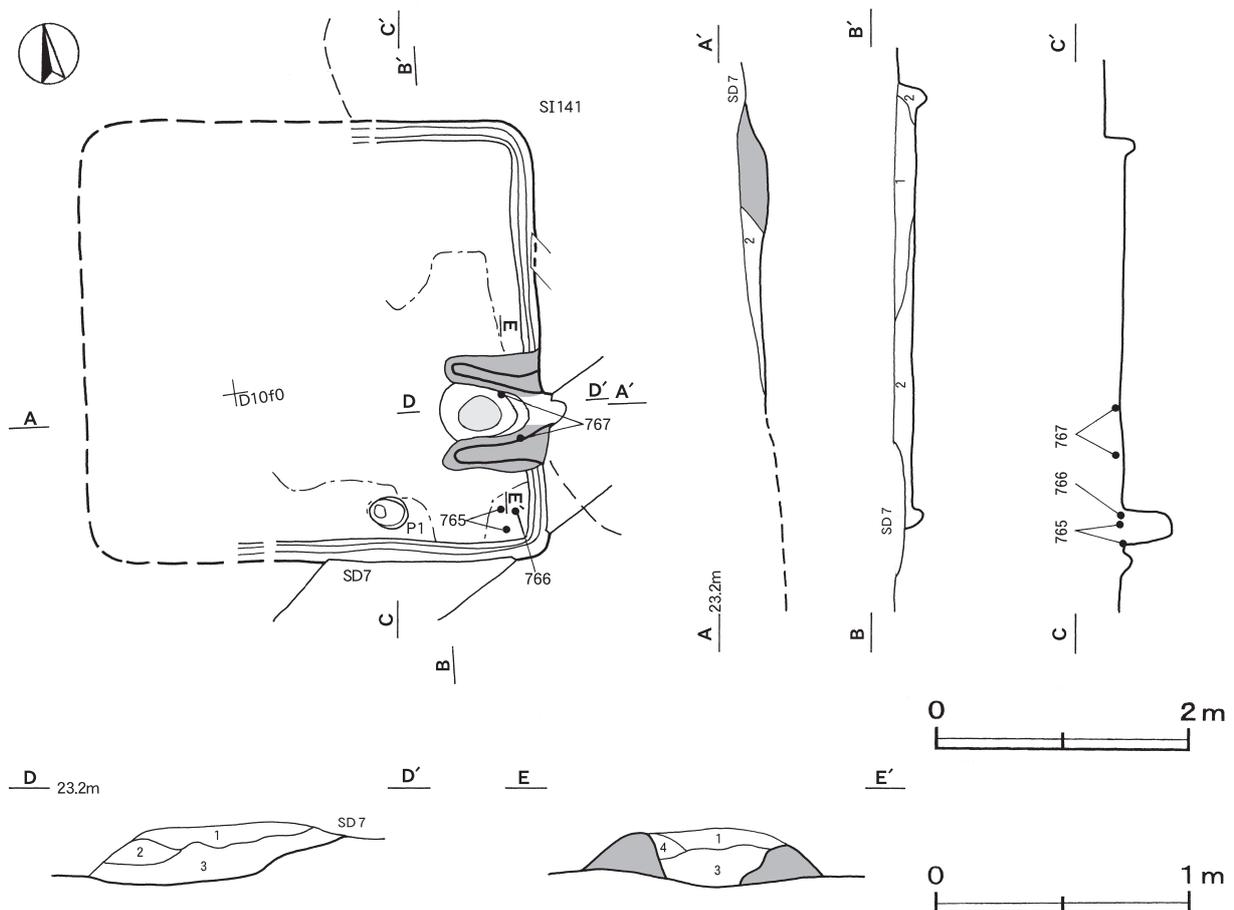
規模と形状 耕作による攪乱が激しく、遺構全体の確認はできなかったが、東西長2.30mほど、南北長3.50mほどが確認できた。遺存している竈や壁からN-97°-Eを主軸方向とする方形と推定される。壁高は6～15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部から竈付近が踏み固められており、遺存部分には竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 東壁の南寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで101cmである。袖部幅は93cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ18cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|-------------------------|-------------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土粒子少量，砂質粘土粒子微量 | 3 暗赤褐色 焼土ブロック少量，砂質粘土粒子微量 |
| 2 にい赤褐色 焼土粒子中量，砂質粘土粒子少量 | 4 にい黄褐色 砂質粘土粒子中量，焼土ブロック・炭化物微量 |



第131図 第142号住居跡実測図

ピット 1か所。深さ38cmで、性格は不明である。

覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

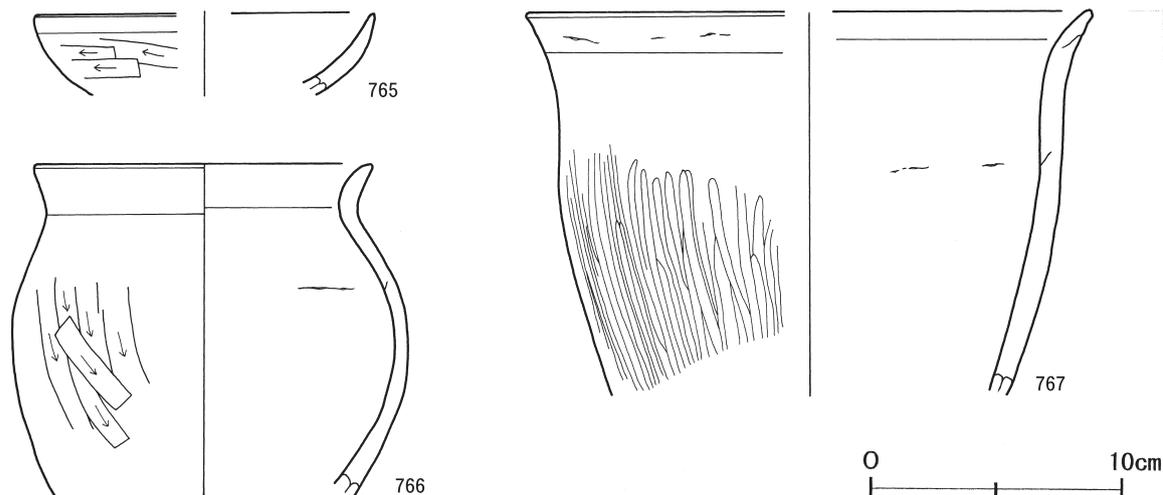
土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化物少量 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片60点（坏4，甕55，甌1），礫2点の他に，流れ込んだ弥生土器片6点も出土している。

765・766は南東コーナー部の床面から出土している。

所見 時期は，出土土器から7世紀前半と考えられる。



第132図 第142号住居跡出土遺物実測図

第142号住居跡出土遺物観察表(第132図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
765	土師器	坏	[13.4]	(3.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	床面	20%
766	土師器	甕	13.4	(13.2)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 輪積痕	床面	70%
767	土師器	甌	[22.2]	(15.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 輪積痕	竈内	15%

第144号住居跡（第133・134図）

位置 調査区中央部のD11e3区で、標高23.7mほどの台地上の平坦部に位置している。

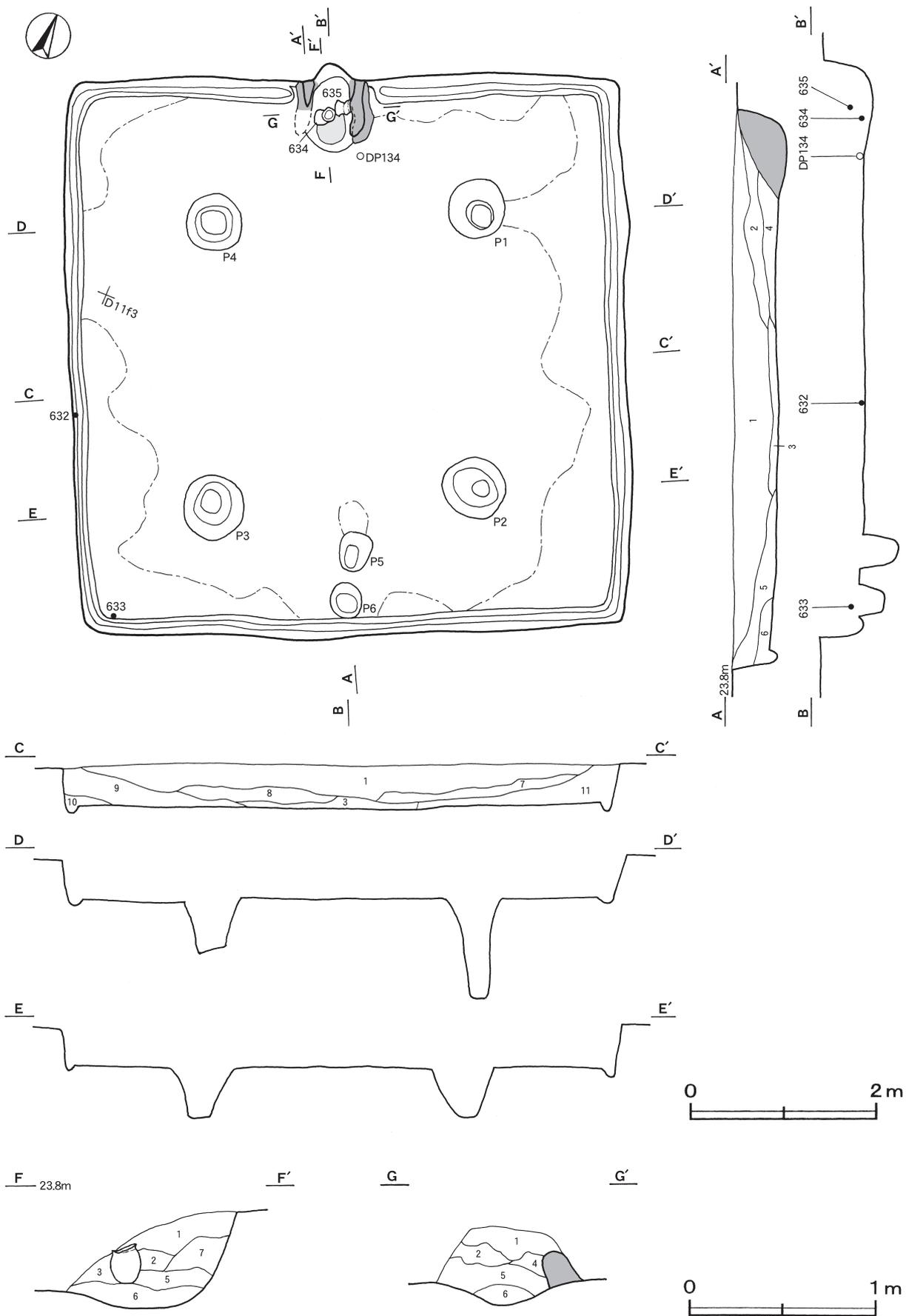
規模と形状 一辺が6.00mほどの方形で、主軸方向はN-25°-Wである。壁高は41~45cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁のやや中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで96cmである。袖部幅は76cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ19cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

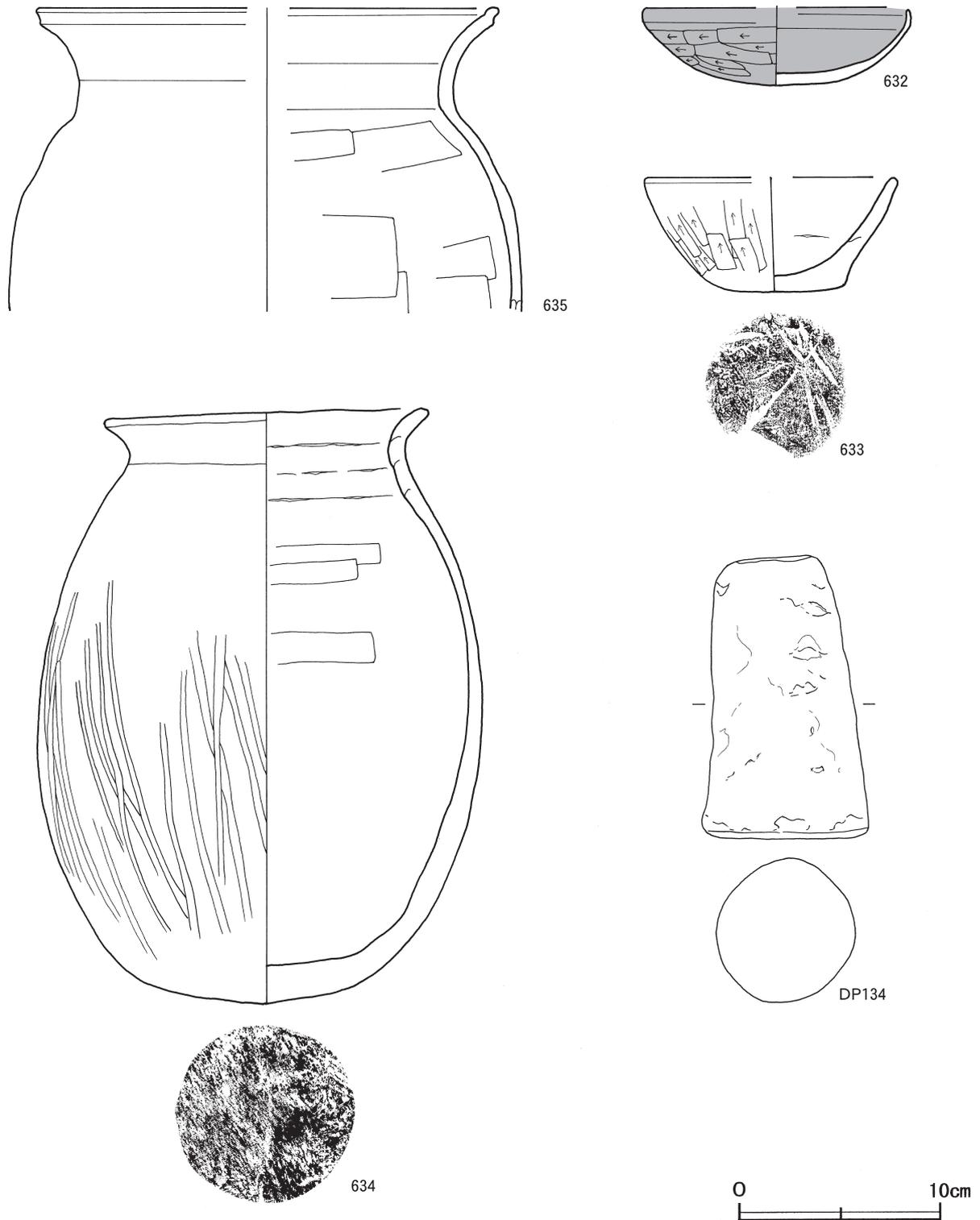
竈土層解説

1 にぶい黄褐色 砂質粘土粒子少量，ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 4 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
 2 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子微量 5 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子少量
 3 暗褐色 砂質粘土粒子少量，焼土ブロック・ローム粒子微量 6 暗赤褐色 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量
 7 極暗赤褐色 炭化物少量，焼土ブロック・砂質粘土粒子微量



第133图 第144号住居跡実測図

ピット 6か所。P 1～P 4は深さ57～106cmで、配置から支柱穴と考えられる。P 5は深さ44cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6は深さ32cmで、覆土上層部分に多少のしまりが確認されたことから、P 5以前の出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第134図 第144号住居跡出土遺物実測図

覆土 11層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------------|--------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量 | 6 極暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化物微量 | 8 極暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子微量 | 9 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 | 10 黒褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| | | 11 褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片315点（坏51，鉢1，甕263），土製品1点（支脚），礫18点の他に、流れ込んだ弥生土器片1点も出土している。632は南西壁際の覆土下層，633は南コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。634・635は竈内からの出土で、住居の廃絶時には竈に掛けられた状態で遺棄された可能性が高い。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。

第144号住居跡出土遺物観察表(第134図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
632	土師器	坏	[13.0]	3.8	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土下層	50%
633	土師器	鉢	[12.3]	5.6	6.8	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り 輪積痕	覆土下層	50%
634	土師器	甕	15.6	29.4	8.4	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラナデ 輪積痕	竈内	100% PL32
635	土師器	甕	[22.6]	(15.0)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	竈内	20%

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP134	支脚	(14.1)	5.5~8.2	(860.6)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子・礫)	指頭によるナデ 初痕	床面	PL41

第145号住居跡（第135・136図）

位置 調査区中央部のD11g6区で、標高23.8mほどの台地上の平坦部に位置している。

規模と形状 北東側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、長軸5.50m，短軸5.00mほどが確認され，N-23°-Wを主軸方向とする方形または長方形と推定される。確認された壁高は32~40cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められており，竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁中央部に付設されていると推定され，焚口部から煙道部まで102cmである。袖部幅は92cmで，床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は，地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており，熱を受けて硬化しているが赤変部分は確認できなかった。煙道部は，壁外へ28cm掘り込まれ，火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。第3層は天井部の崩落層と考えられる。

竈土層解説

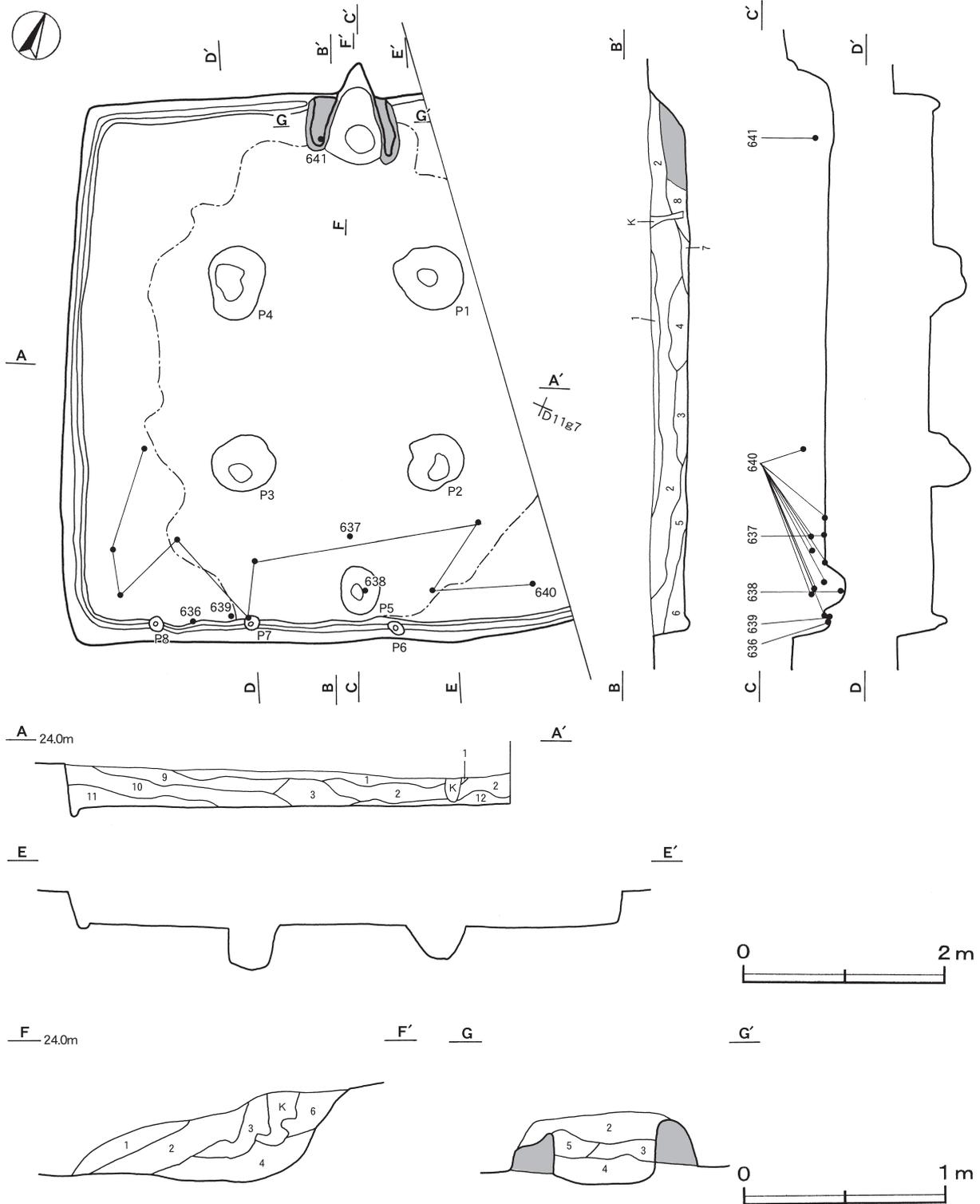
- | | | | |
|----------|---------------------------------|----------|----------------------------|
| 1 暗褐色 | 炭化粒子・砂質粘土粒子少量，ロームブロック・焼土粒子微量 | 4 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 砂質粘土ブロック中量，ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子・砂質粘土粒子少量，焼土粒子微量 |
| 3 オリーブ褐色 | 砂質粘土粒子多量，焼土ブロック・炭化物微量 | 6 にぶい黄褐色 | 砂質粘土ブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量 |

ピット 8か所。P1~P4は深さ33~44cmで，配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ23cmで，配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6~P8は深さ12~14cmで，壁柱穴と考えられるが明確ではない。

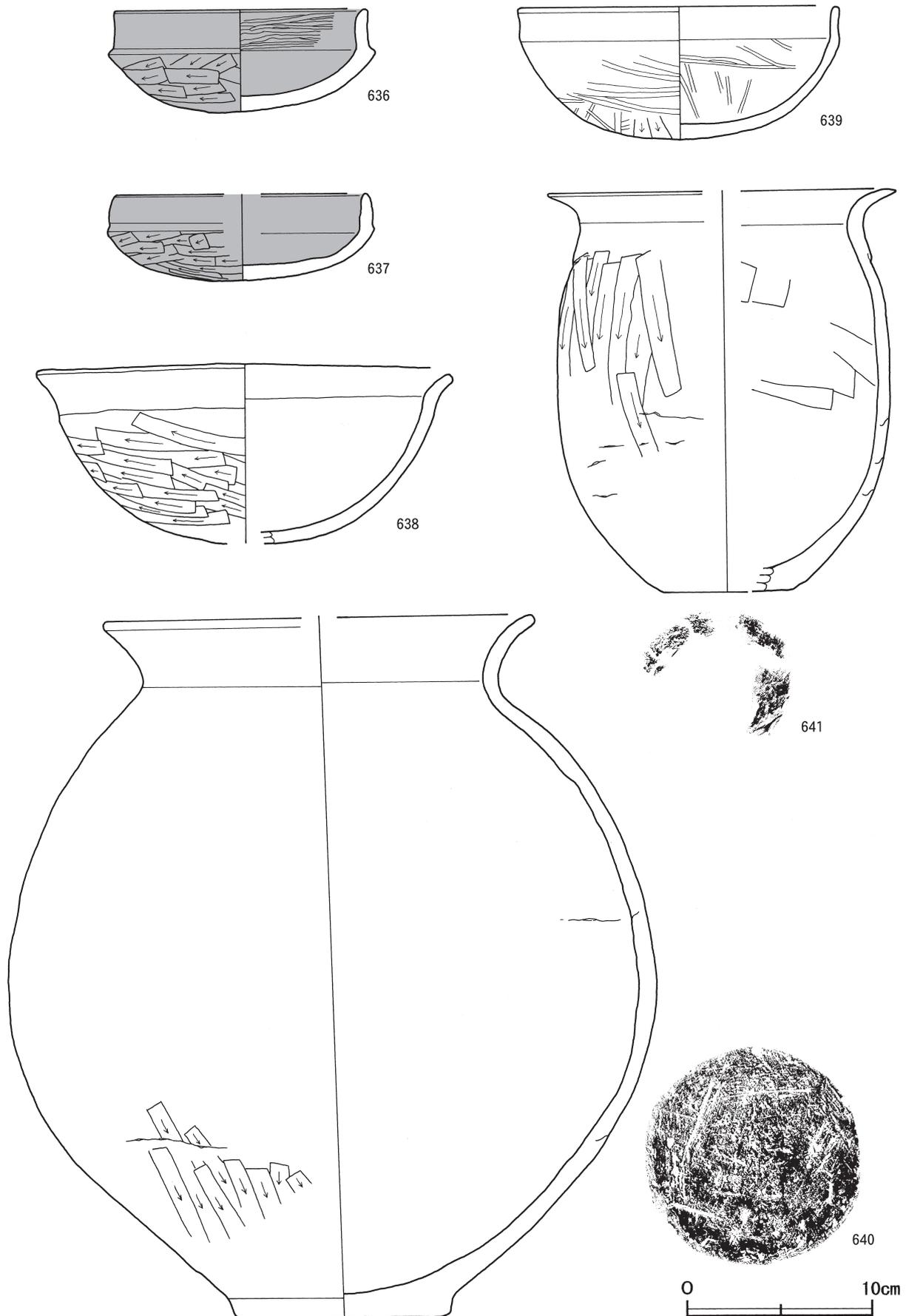
覆土 12層に分層される。一部の層はレンズ状の堆積状況を示しているが，遺物の出土状況や接合関係などから人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|---------|------------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子少量, ローム粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化物・砂質粘土粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック・炭化物・砂質粘土ブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | 9 極暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 10 極暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量, 焼土粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 11 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化物微量 | 12 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |



第135図 第145号住居跡実測図



第136图 第145号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片164点(坏38, 碗2, 甕124), 礫4点の他に, 流れ込んだ弥生土器片137点も出土している。636は南側の壁溝, 637は出入り口ピット付近の床面からそれぞれ出土している。638は底部が穿孔されており, 出入り口ピットの底面から逆位で出土している。640は南寄りの覆土中層から床面より出土していることから, 埋没の過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から6世紀中葉と考えられる。

第145号住居跡出土遺物観察表(第136図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
636	土師器	坏	13.4	5.6	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ後内面ヘラ磨き 体部外面ヘラ削り	壁溝	100%
637	土師器	坏	[13.4]	4.6	—	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ナデ	床面	50%
638	土師器	坏	22.0	(9.7)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ナデ	P5内	95% PL29
639	土師器	坏	17.0	7.1	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラ磨き 体部	床面	75% PL29
640	土師器	甕	[22.8]	38.0	11.4	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 輪積痕	覆土中層～床面	60%
641	土師器	甕	[18.4]	21.6	7.1	長石・石英	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 輪積痕	竈内	40%

第146号住居跡 (第137・138図)

位置 調査区中央部のD11i8区で, 標高23.6mほどの台地上の平坦部に位置している。

重複関係 第148・149号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北東側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが, 長軸5.96m, 短軸5.70mの方形で, 主軸方向はN-12°-Wである。確認された壁高は42~52cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められており, 竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁中央部に付設されていると考えられ, 焚口部から煙道部まで110cmである。袖部幅は97cmで, 床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は, 床面と同じ地山面を使用しており, 火を受けて赤変硬化している。煙道部は, 壁外へ19cm掘り込まれ, 火床面から急激に立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------------|---------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | 砂質粘土粒子少量, ローム粒子微量 | 4 暗赤褐色 | 砂質粘土粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | 砂質粘土粒子中量, 炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量 | 5 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 砂質粘土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 砂質粘土粒子中量, 焼土粒子少量, ローム粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子・砂質粘土粒子少量, 焼土粒子微量 |
| | | 7 極暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |

ピット 5か所。P1~P4は深さ76~90cmで, 配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ27cmで, 配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

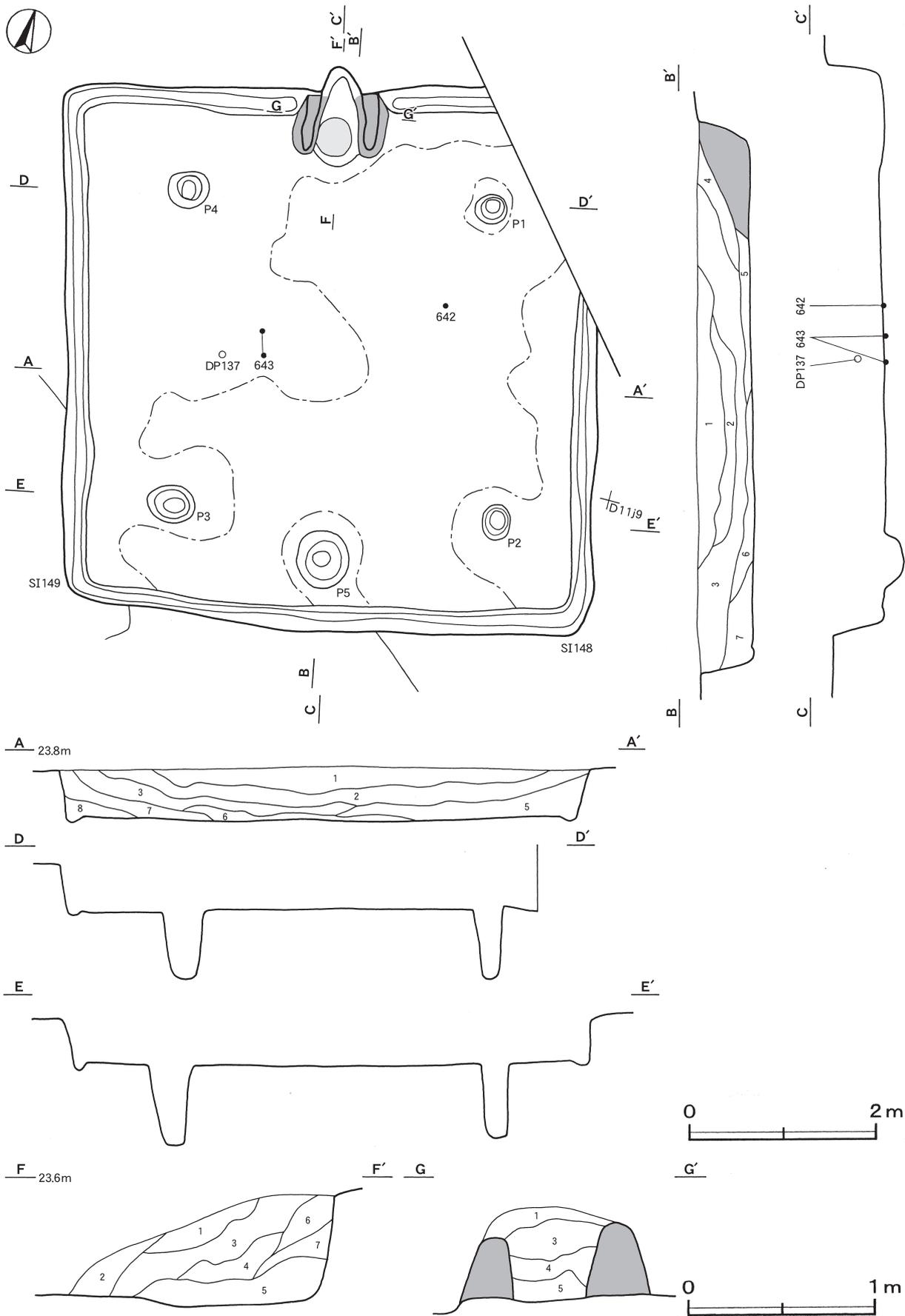
覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

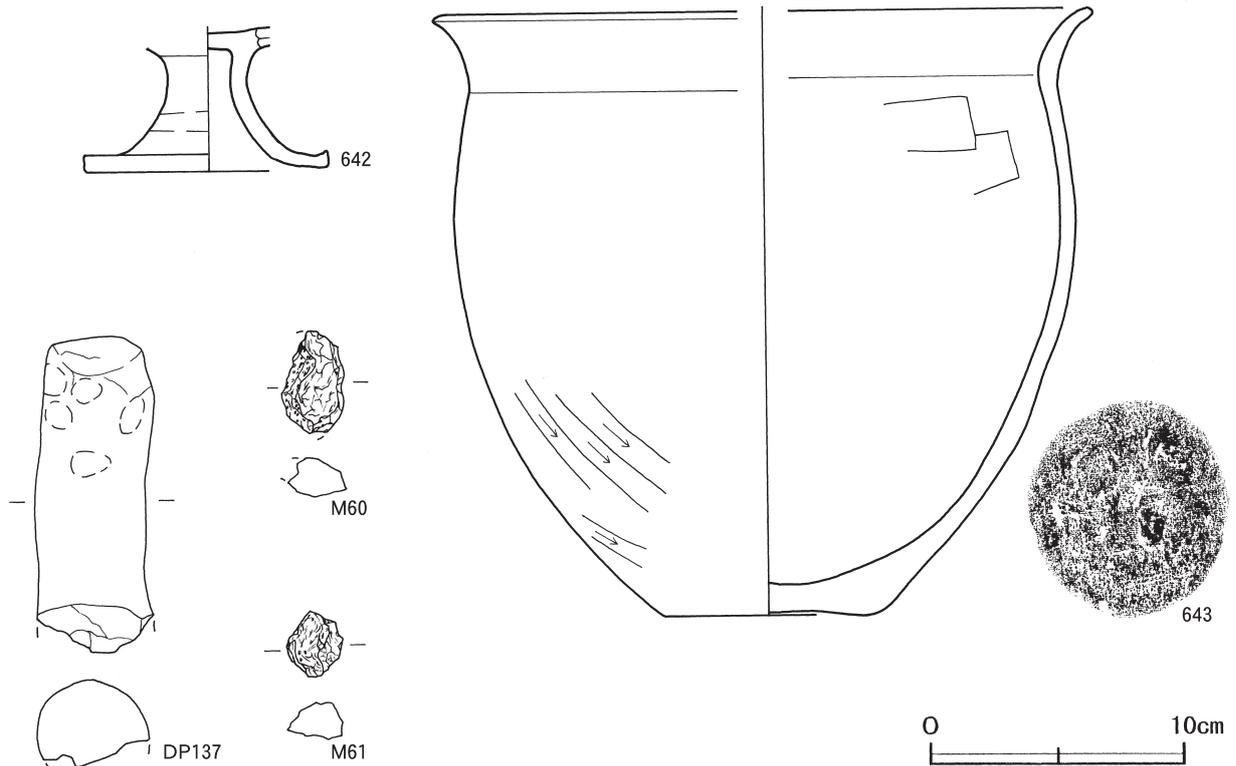
- | | | | |
|--------|------------------------|-------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量, 焼土粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化物微量 | 6 灰褐色 | ロームブロック中量, 炭化物少量, 焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 8 褐色 | ローム粒子少量, 炭化物微量 |

遺物出土状況 土師器片388点(坏90, 甕298), 須恵器1点(高坏カ), 土製品6点(支脚1, 不明5), 鉄滓2点, 礫20点の他に, 流れ込んだ弥生土器片261点も出土している。642・643は中央部の床面から出土している。

所見 時期は, 出土土器から6世紀代と考えられる。



第137图 第146号住居跡実測図



第138図 第146号住居跡・出土遺物実測図

第146号住居跡出土遺物観察表(第138図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
642	須恵器	高盤	—	(5.7)	9.7	長石・石英	褐灰	普通	脚部内・外面クロナゲ	床面	45%
643	土師器	甕	[25.6]	23.9	8.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナゲ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナゲ	床面	50%

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP137	支脚	(12.4)	4.8	(253.6)	土(長石・石英・雲母)	ナゲ 指頭痕	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M60	椀状滓	(4.0)	(2.6)	1.5	(20.7)	鉄	表面に赤錆付着 凹凸有り	覆土中	
M61	椀状滓	2.6	2.3	1.6	6.4	鉄	表面に赤錆付着 凹凸有り	覆土中	

第147号住居跡 (第139～142図)

位置 調査区中央部のE11a9区で、標高23.6mほどの台地上に位置している。

規模と形状 北東側と南西側が調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、長軸4.90m、短軸3.82mほどが確認された。竈や柱穴の位置などから判断して、N-42°-Wを主軸方向とする方形または長方形と推定される。確認できた壁高は40～62cmで、外傾して立ち上がっている。

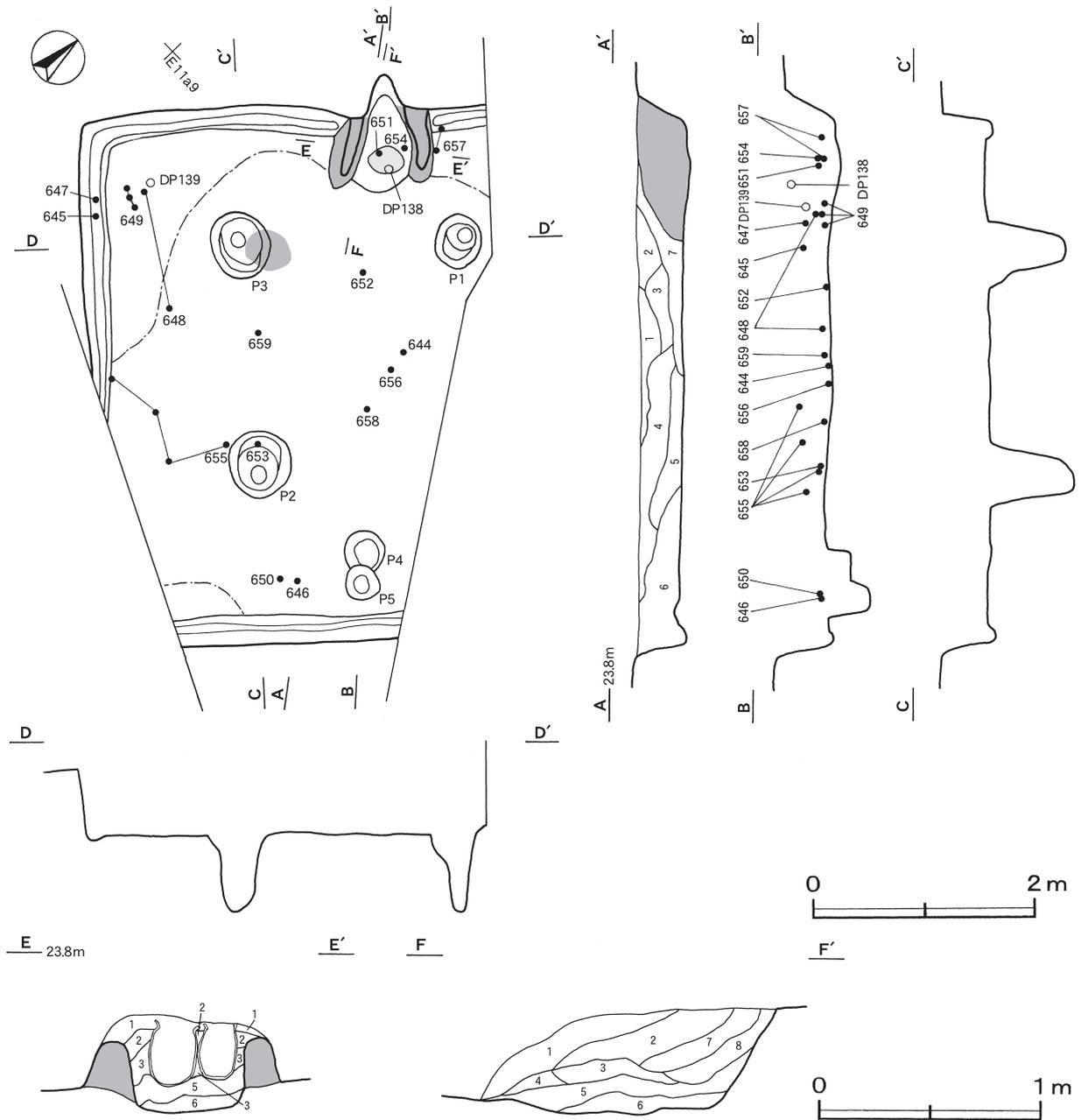
床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に付設されていると考えられ、焚口部から煙道部まで107cmである。袖部幅は93cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ28cm掘り込まれ、火床面から急激に立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------|-------|--------------------------------|
| 1 暗褐色 | 砂質粘土粒子少量，ロームブロック・焼土ブロック | 5 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量，ロームブロック・砂質粘土粒子微量 |
| 2 灰黄褐色 | 砂質粘土粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック | 6 黒褐色 | 砂質粘土粒子少量，焼土ブロック・ローム粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子中量，砂質粘土粒子少量 | 7 暗褐色 | 砂質粘土粒子少量，炭化物微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 8 暗褐色 | 炭化物・焼土粒子・砂質粘土粒子微量 |

ピット 5か所。P1～P3は深さ70～74cmで、配置から支柱穴と考えられる。P4は深さ24cm，P5は深さ42cmで、配置からいずれも出入り口施設に伴うピットと考えられるが、土層断面からP5が新しいことが確認された。



第139図 第147号住居跡実測図

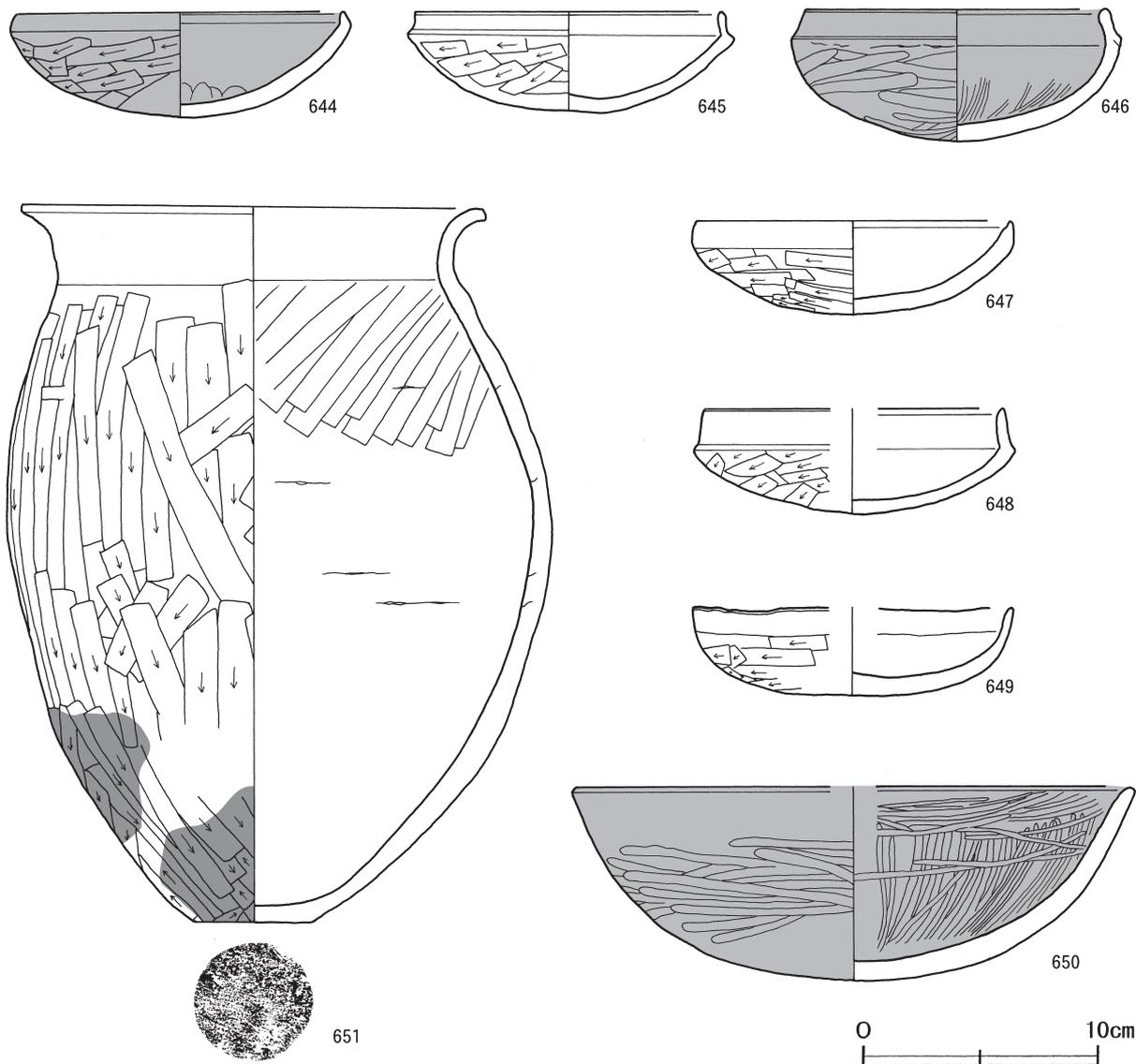
覆土 7層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

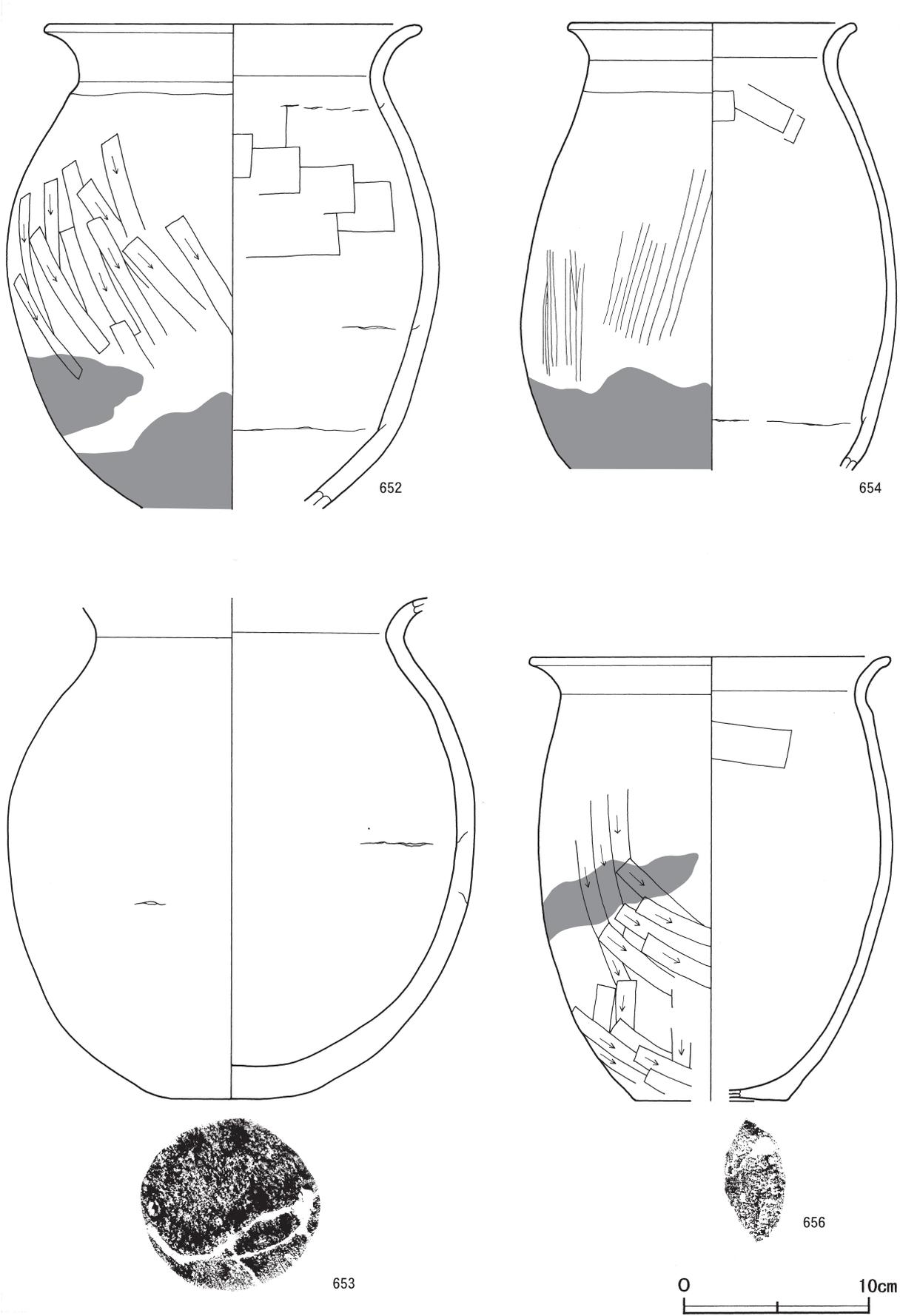
- | | | | |
|--------|----------------------------|--------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 4 極暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子・砂質粘土粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 3 極暗褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量, ロームブロック微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 |
| | | 7 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土ブロック・砂質粘土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片396点(坏70点, 碗1, 高坏1, 甕324), ミニチュア土器2点(壺, 甕), 土製品2点(球状土錘, 支脚), 礫14点の他に, 流れ込んだ弥生土器片97点も出土している。粘土塊はP3に流れ込むような状態で検出された。遺物は覆土中全体から出土しており, 平面的にも散らばりが認められることから, 住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。644は中央部の床面, 645は南西壁際の覆土中層, 646・650は出入り口ピット付近の床面からそれぞれ出土している。651・654は竈内からの出土で, 住居廃絶時には竈に掛けられた状態で遺棄された可能性が高い。654については激しい2次焼成を受けており底部の復元が不可能であった。658は中央部のほぼ床面, 659は中央部P3寄りの床面からそれぞれ出土している。

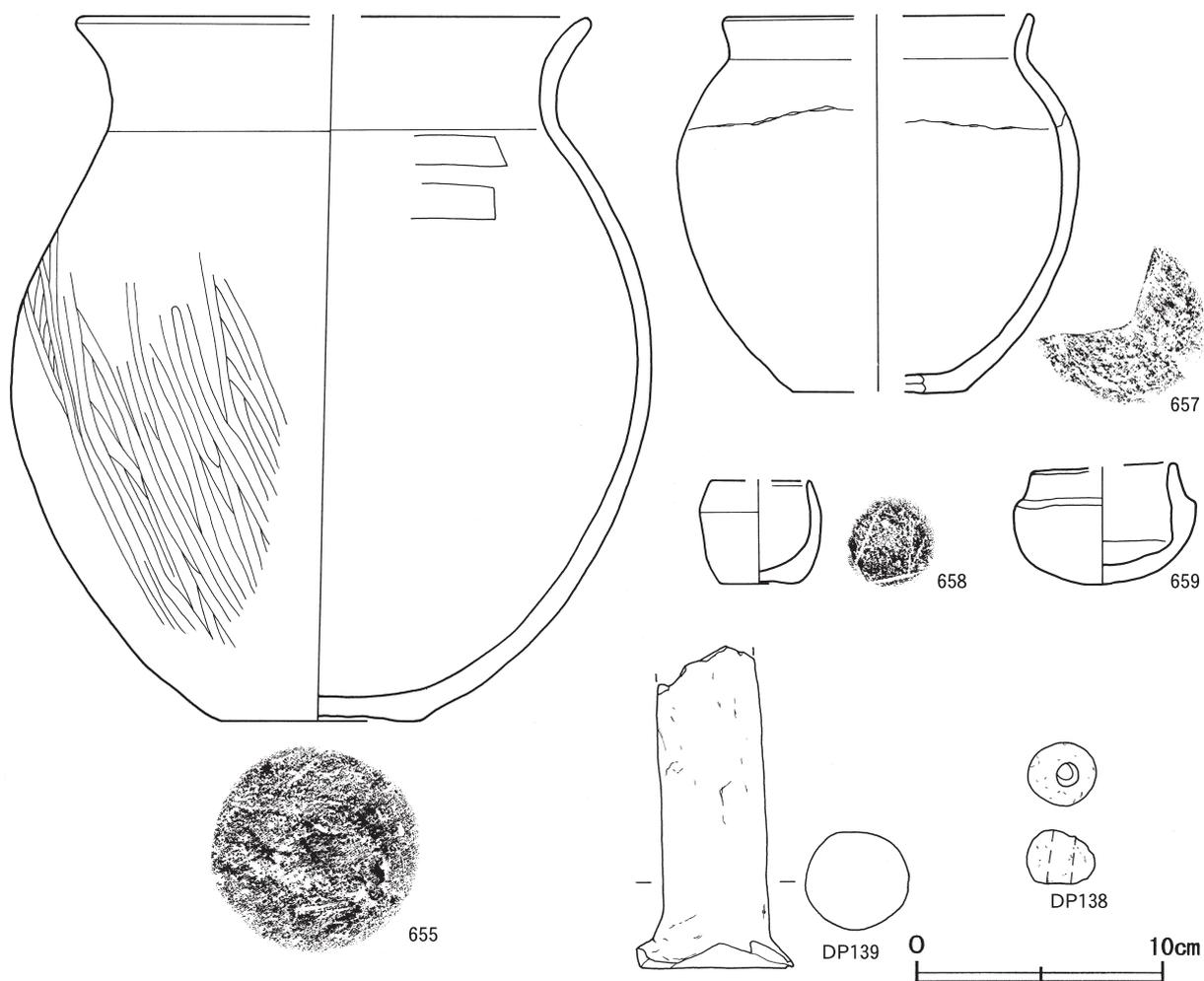
所見 時期は, 出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第140図 第147号住居跡出土遺物実測図(1)



第141图 第147号住居跡出土遺物実測図(2)



第142図 第147号住居跡出土遺物実測図(3)

第147号住居跡出土遺物観察表(第140~142図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
644	土師器	坏	13.9	4.5	—	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ後仕上げナデ	床面	100% PL27
645	土師器	坏	13.0	4.4	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	覆土中層	90%
646	土師器	坏	12.7	5.6	—	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラ磨き	床面	90%
647	土師器	坏	13.4	3.9	—	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	覆土中層	90% PL27
648	土師器	坏	[12.6]	4.5	—	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	覆土下層	75%
649	土師器	坏	[13.6]	3.8	—	長石・石英	灰黄褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	覆土下層	50%
650	土師器	坏	[23.6]	8.3	—	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラ磨き	床面	50%
651	土師器	甕	19.4	30.7	5.0	長石・石英・雲母・礫	にぶい黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ 輪積痕	竈内	95% 外面煤付着 PL32
652	土師器	甕	19.8	(26.3)	—	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラナデ 輪積痕	床面	80% 外面煤付着
653	土師器	甕	—	(27.1)	9.3	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部内・外面摩減調整不明 輪積痕	床面	80%
654	土師器	甕	15.1	(24.2)	—	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラナデ 輪積痕	竈内	75% 外面煤付着
655	土師器	甕	[20.4]	28.6	8.0	長石・石英	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 体部内面へラナデ	覆土中層	50%
656	土師器	甕	19.0	24.1	[8.2]	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	床面	50% 外面煤付着
657	土師器	小形甕	[12.2]	15.2	[6.8]	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部内・外面摩減調整不明 輪積痕	覆土下層	50%
658	土師器	ミニチュア	[4.0]	4.2	3.2	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ナデ 内面ナデ	床面	95% 甕型カ内面紅殻付着 PL33
659	土師器	ミニチュア	[5.8]	5.0	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ナデ 内面ナデ	床面	55% 碗型カ内面紅殻付着

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP138	球状土錘	2.8	0.9~1.0	2.1	13.3	土(長石・石英・雲母)	一方向からの穿孔	覆土上層	

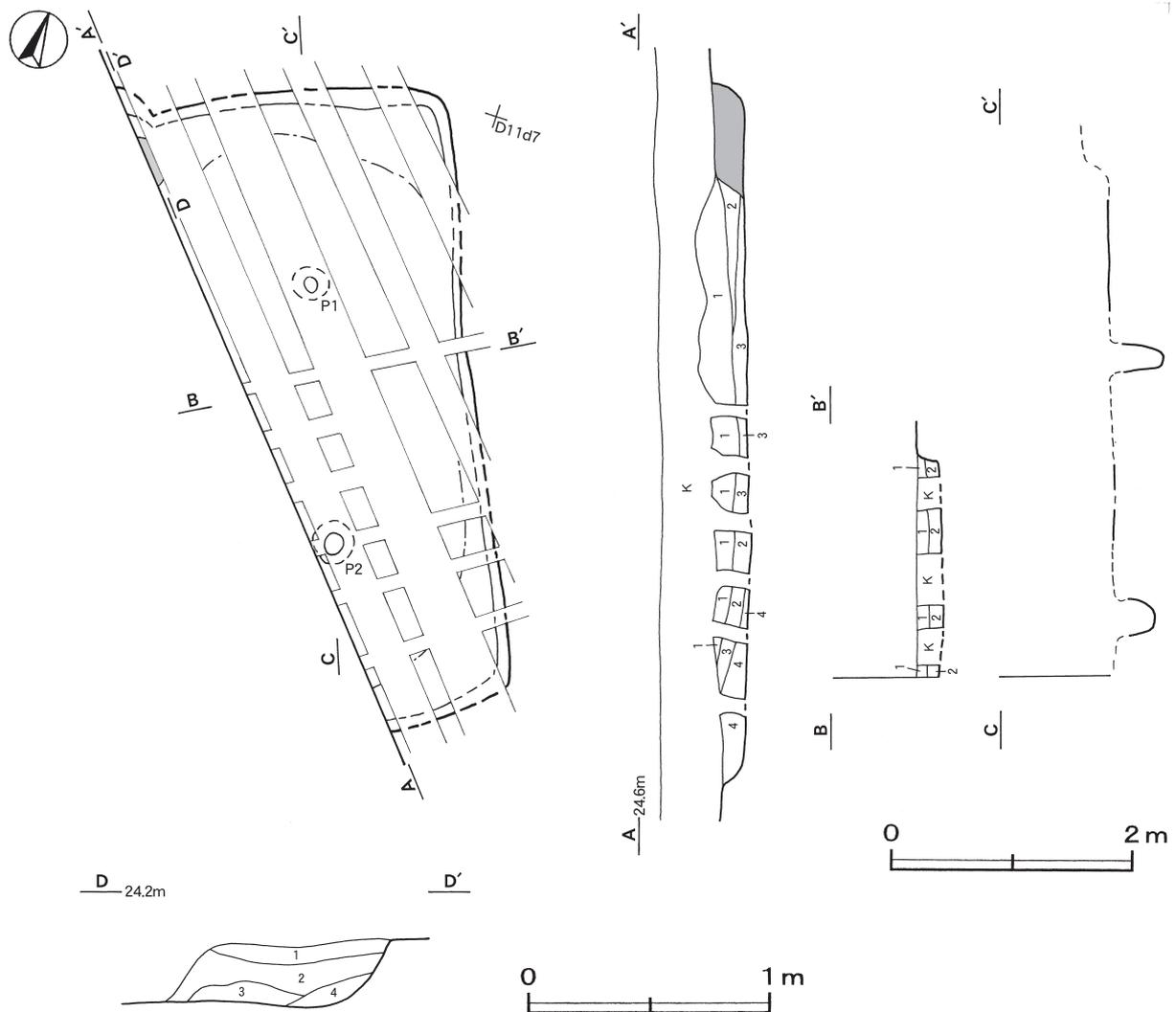
番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP139	支脚	(13.0)	(4.1)~6.4	(287.0)	土(長石・石英・雲母)	ナデ	覆土中層	

第150号住居跡 (第143図)

位置 調査区中央部のD11d6区で、標高24.0mほどの台地上の平坦部に位置している。

規模と形状 南西側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、長軸5.40m、短軸2.60mほどが確認された。確認できた壁や柱穴から判断して、N-26°-Wを主軸方向とする方形または長方形と推定される。確認できた壁高は16cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。



第143図 第150号住居跡実測図

竈 検出された状況から北東壁の中央部に付設されていると考えられ、焚口部から煙道部まで100cmほどが確認された。耕作による攪乱により袖部は遺存しておらず、構築状況については不明である。火床部は、床面と同じ高さの地山面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ26cm掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|------------------------------|---------|-------------------------------|
| 1 褐色 | 砂質粘土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子少量 | 3 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 砂質粘土粒子少量, 炭化物・ローム粒子微量 |
| 2 極暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量, 炭化物・ローム粒子微量 | 4 濃い黄褐色 | 砂質粘土粒子少量, ロームブロック・炭化物微量 |

ピット 2か所。深さは35～43cmで、配置から主柱穴と考えられる。

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------|-------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量, 炭化粒子微量 | 4 灰褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片4点(坏1, 甕3), 礫1点の他に、流れ込んだ弥生土器片1点も出土している。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土遺物や遺構の形態などから6世紀代と考えられる。

第151号住居跡 (第144図)

位置 調査区中央部のD11e8区で、標高23.5mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 南西側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、長軸5.50m, 短軸5.40mの方形で、主軸方向はN-39°-Wである。壁高は12～28cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北西壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで115cmである。耕作による攪乱が激しく右袖部の一部しか遺存していない。袖部は、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されていたと考えられる。火床部は、床面と同じ高さの地山面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ42cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|----------------------------|--------|----------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子中量, 炭化物微量 | 4 黒褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量, 炭化物微量 |
| 2 暗オリブ色 | 砂質粘土粒子多量, 焼土粒子少量 | 5 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 炭化物・砂質粘土粒子微量 |
| 3 濃い黄褐色 | ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量, 炭化物微量 | | |

ピット 6か所。P1～P4は深さ46～60cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ31cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ52cmで、覆土上層部分に多少の硬化面が確認されたことから、P5以前の出入り口施設に伴うピットと考えられる。

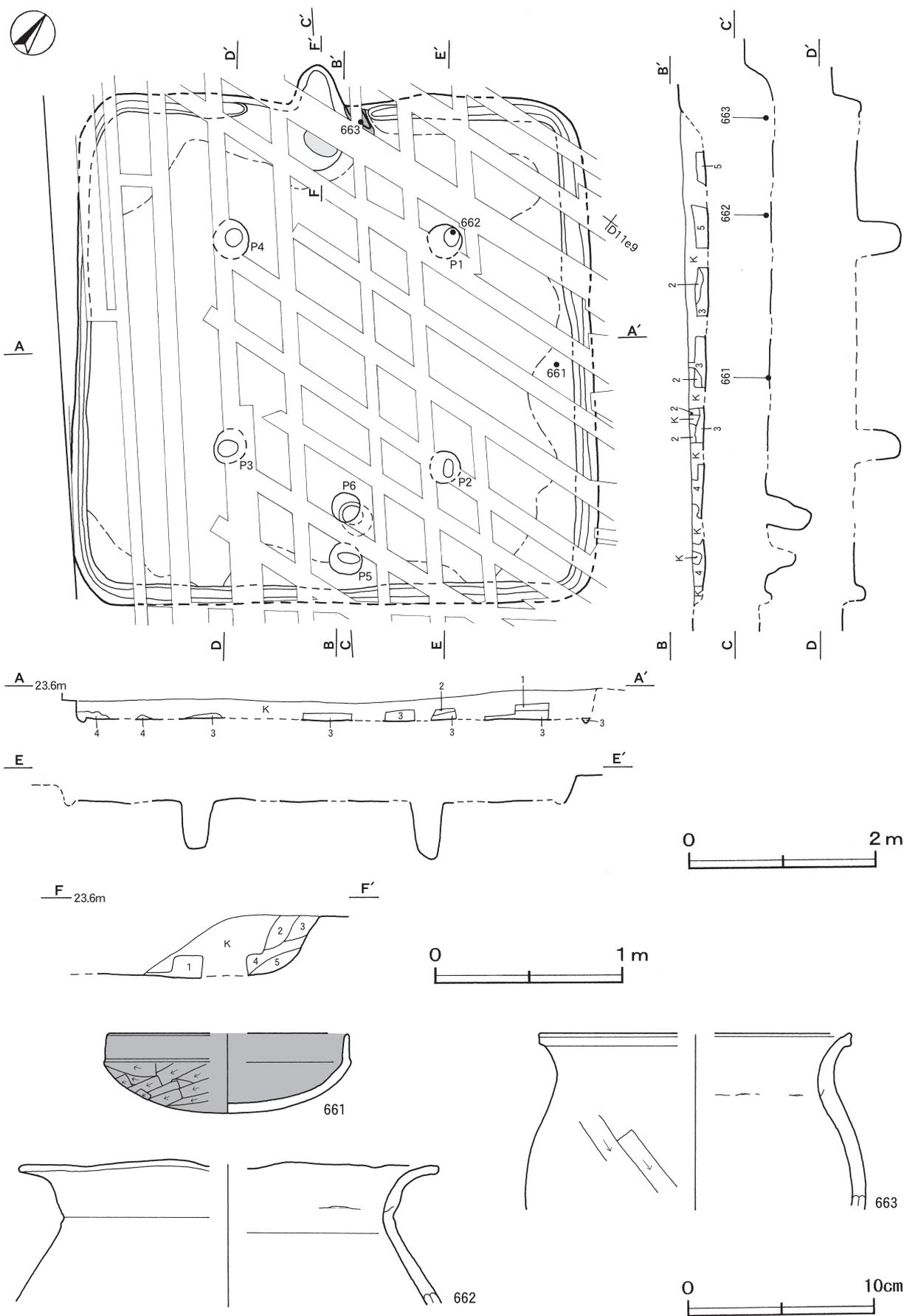
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 4 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片87点(坏55, 甕32)の他に、流れ込んだ弥生土器片53点も出土している。661は北東壁際の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第144图 第151号住居跡・出土遺物実測図

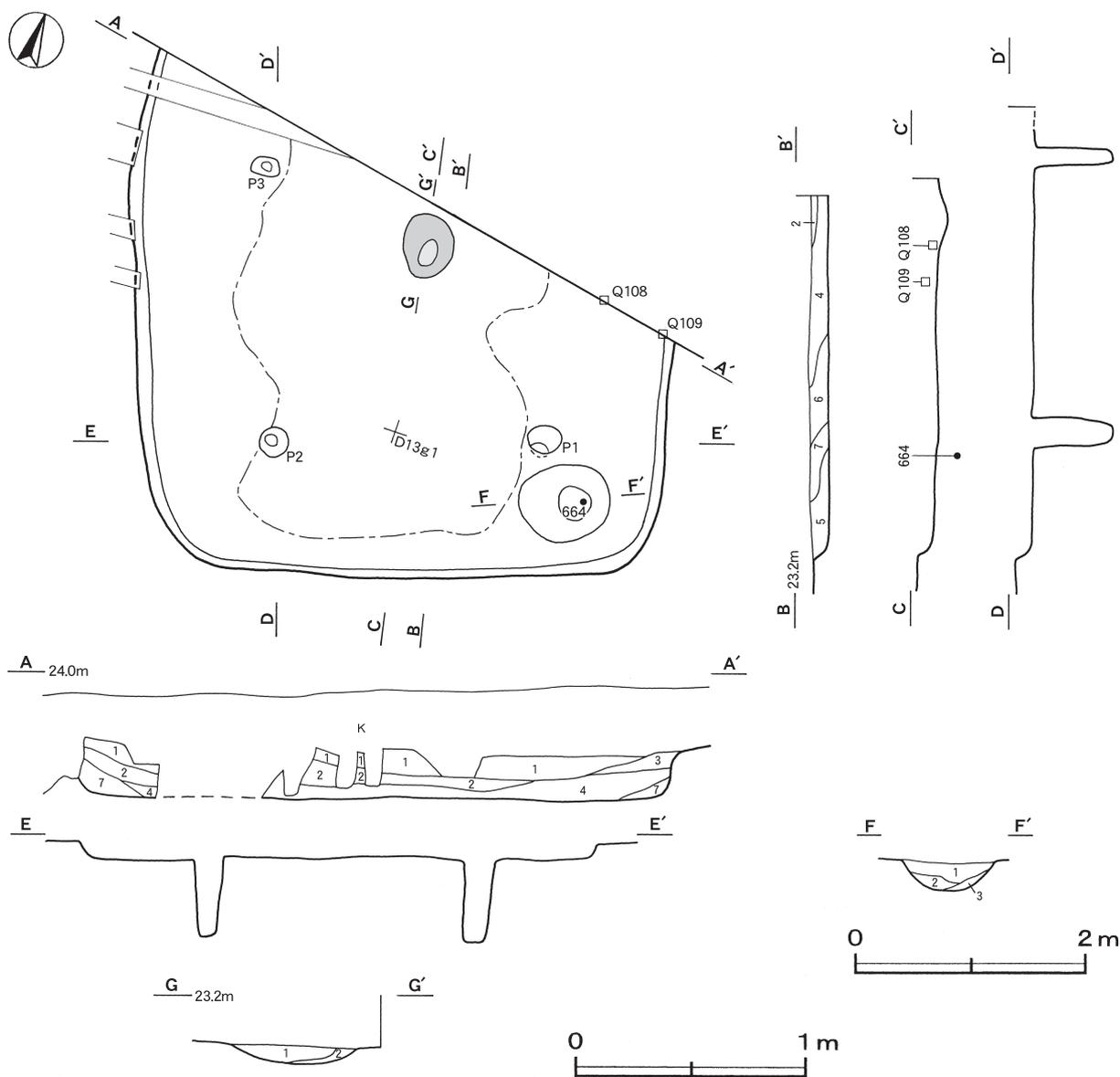
第151号住居跡出土遺物観察表(第144図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
661	土師器	坏	[12.8]	4.3	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	床面	40%
662	土師器	甕	[21.8]	(7.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部内・外面ナデ 輪積痕	床面	10%
663	土師器	甕	[16.6]	(9.5)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ 輪積痕	覆土下層	10%

第157号住居跡 (第145・146図)

位置 調査区東部のD12f0区で、標高23.0mほどの台地上の平坦部に位置している。

規模と形状 北側は調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、長軸4.60m、短軸4.50mほどが確認された。確認できた壁や柱穴から判断して、N-17°-Wを主軸方向とする隅丸方形または隅丸長方形と推定される。確認できた壁高は12~38cmで、外傾して立ち上がっている。



第145図 第157号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 柱穴との位置関係から、中央部のやや北西寄りに位置していると考えられ、長径55cm、短径45cmの楕円形で、床面を7cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 2 暗赤褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 3か所。深さ69～74cmで、配置から支柱穴と考えられる。

覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 5 極暗褐色 ローム粒子少量
 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 6 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
 3 極暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 7 黒褐色 ローム粒子少量
 4 暗褐色 ローム粒子少量

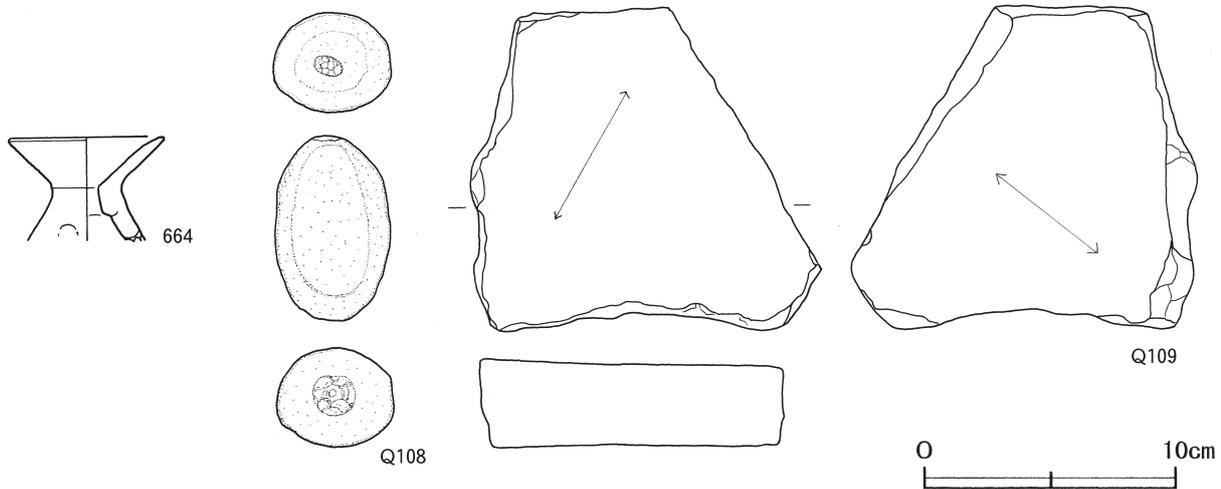
貯蔵穴 南東コーナー部に位置し、長径80cm、短径68cmの楕円形で、深さは24cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
 2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片35点（坏3，高坏1，器台1，甕30），石器2点（敲石，砥石）の他に、流れ込んだ弥生土器片29点も出土している。664は貯蔵穴内から出土している。Q108・Q109は東壁側の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀代と考えられる。



第146図 第157号住居跡出土遺物実測図

第157号住居跡出土遺物観察表(第146図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
664	土師器	器台	6.0	(4.1)	—	長石・石英・雲母	明黄褐	普通	坏部内・外面ナデ 輪積痕	貯蔵穴内	60%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q108	敲石	7.4	4.6	4.0	197.6	石英	全面に擦痕 両端部に敲打痕	覆土下層	PL42
Q109	砥石	(12.9)	(13.9)	3.6	(1015.1)	砂岩	砥面2面	覆土下層	

表4 古墳時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設							覆土	主な出土遺物	時期	新旧関係 (旧→新)
							壁溝	柱穴	出入口	ピット	竈	貯蔵穴	貯蔵穴				
72	D10g3	N-5°-E	[長方形]	3.52×[3.00]	50	平坦	—	—	—	—	—	—	不明	土師器	7世紀前半		
77	D9f9	N-28°-W	方形	3.60×3.52	4~12	平坦	—	—	1	—	竈1	—	自然	土師器, 手捏土器, 礫	6世紀後葉	SI98→本跡	
79	D9d8	N-18°-W	方形	4.80×4.80	20~66	平坦	全周	4	1	—	竈1	—	人為	土師器, 須恵器, 土製品, 石器, 鉄製品, 礫	6世紀中葉	SI80・90→本跡	
80	D9c9	N-20°-W	方形	7.70×7.40	8~58	平坦	全周	4	2	—	竈1	1	自然	土師器, ミニチュア土器, 土製品, 礫	6世紀後葉	SI90・92→本跡→SI79	
81	C9j8	N-47°-W	方形	4.55×4.42	24~66	平坦	全周	4	2	—	竈1	1	人為	土師器, 手捏土器, 土製品	6世紀中葉	SI84→本跡	
84	D9a8	N-62°-E	不明	(3.10×2.20)	—	平坦	—	—	—	—	竈1	—	自然	土師器, 土製品, 礫	6世紀後葉	本跡→SI81	
86	C9i5	N-46°-W	方形	6.68×6.46	24~66	平坦	全周	4	1	2	竈1	1	自然	土師器, 土製品, 石器, 礫	6世紀後葉		
93	D9b6	N-44°-W	方形	5.70×5.54	30~78	平坦	全周	4	1	—	竈1	—	自然	土師器, 土製品, 軽石	6世紀後葉	SI92→本跡	
97	D9g0	N-18°-W	方形	4.90×4.70	25~52	平坦	全周	4	1	1	竈1	—	自然	土師器, ミニチュア土器, 土製品, 礫	6世紀後葉	SI98→本跡	
98	D9f9	N-34°-W	方形	5.26×5.16	18~24	平坦	ほぼ全周	4	1	—	竈1	1	人為	土師器	6世紀後葉	本跡→SI77・97	
99	D9e5	N-44°-W	方形	5.26×5.15	35~60	平坦	全周	4	1	1	竈1	—	自然	土師器, 手捏土器, 土製品, 鉄製品, 礫	7世紀前半	SI100・137→本跡→第21号墓坑・SE7	
101	D9d4	N-30°-W	方形	5.36×5.14	38~90	平坦	ほぼ全周	4	1	—	竈1	1	自然	土師器, 手捏土器, 土製品, 石器, 鉄製品, 礫	7世紀前半	SI137→本跡→SI104・SB3・SK161	
106	D9c1	N-49°-E	方形	4.56×4.47	23~46	平坦	—	5	—	—	竈1	1	自然	土師器, 土製品, 鉄滓, 礫	6世紀前葉	SI105→本跡→SB1・2・SE10	
116	C8i0	N-21°-W	方形	4.58×4.26	20~32	平坦	—	4	1	—	竈1	—	自然	土師器, 土製品, 礫	7世紀後半	SI119→本跡→SI118	
119	C8j0	N-10°-E	[長方形]	4.95×[4.30]	60	平坦	—	4	1	1	炉1	—	自然	土師器, 土製品, 礫	4世紀代	本跡→SI116・118	
122	D8a7	N-39°-W	方形	5.24×5.05	14~30	平坦	ほぼ全周	4	1	—	竈1	—	人為 自然	土師器, 須恵器, 土製品, 礫	7世紀前半	SI124・125・126→本跡→第22号墓坑	
123	C8j7	N-47°-W	[方形]	[4.80×4.76]	13~29	平坦	一部	4	1	—	—	1	人為	土師器, 鉄製品, 礫	6世紀後葉	SI124→本跡→SI121	
124	C8j7	N-44°-W	[方形]	[5.98×5.69]	6~29	平坦	—	4	—	—	—	—	人為	土師器, 土製品, 礫	4世紀代	本跡→SI121・122・123	
125	D8a6	N-55°-W	長方形	4.60×3.80	20	平坦	一部	4	1	—	竈1	—	人為	土師器, 手捏土器, 土製品, 礫	6世紀後葉	本跡→SI122・SK168・169	
126	D8b7	N-8°-W	方形	4.50×4.40	—	平坦	—	—	—	—	炉2	—	不明	—	5世紀以前	本跡→SI122・127	
127	D8c7	N-37°-W	[方形・長方形]	6.20×(2.56)	50	平坦	ほぼ全周	1	—	—	—	—	人為	土師器, 土製品, 石器, 礫	6世紀後葉	SI126→本跡→SE9	
128	C9h1	N-48°-W	[長方形]	3.80×[3.40]	8	平坦	—	—	—	—	炉1	—	不明	土師器	4世紀代		
130	C8i4	N-35°-W	[方形・長方形]	6.82×(5.40)	40~44	平坦	ほぼ全周	4	—	—	竈1	—	自然	土師器, 土製品, 石器, 鉄滓, 礫	6世紀前葉		
132	D9f2	N-42°-W	[方形・長方形]	(5.80)×(4.48)	39~78	平坦	ほぼ全周	1	—	—	竈1	1	人為	土師器, 須恵器, 手捏土器, 土製品, 石製品, 礫	6世紀後葉		
133	D8e9	N-38°-W	[方形]	6.70×6.60	35~37	平坦	ほぼ全周	3	1	3	竈1	—	人為	土師器, 手捏土器, 土製品, 礫	6世紀中葉	SI134→本跡→PG6	
136	C8h8	N-34°-E	[方形]	[5.80]×(5.80)	50~80	平坦	—	3	—	—	—	—	不明	土師器, 礫	6世紀代	本跡→SI120	
138	D10c9	N-7°-W	方形	3.23×3.18	23	平坦	—	—	—	—	竈1	—	自然	土師器	7世紀前半	本跡→SD8	
139	D10c0	N-21°-W	方形	3.42×3.30	4~26	平坦	全周	—	1	—	竈1	—	人為	土師器, 土製品, 鉄製品, 礫	7世紀前半		
140	D11d1	N-7°-W	長方形	3.52×3.16	10~20	平坦	—	—	1	—	竈1	—	人為	土師器	7世紀前半		
142	D10f0	N-97°-E	[方形]	3.50×[2.30]	6~15	平坦	ほぼ全周	—	—	1	竈1	—	自然	土師器, 礫	7世紀前半	SI141→本跡→SD7	
144	D11e3	N-25°-W	方形	6.00×6.00	41~45	平坦	全周	4	2	—	竈1	—	自然	土師器, 土製品, 礫	6世紀中葉		
145	D11g6	N-23°-W	[方形・長方形]	5.50×(5.00)	32~40	平坦	ほぼ全周	4	1	3	竈1	—	人為	土師器, 礫	6世紀中葉		
146	D11i8	N-12°-W	方形	5.96×5.70	42~52	平坦	一部	4	1	—	竈1	—	自然	土師器, 須恵器, 土製品, 鉄滓, 礫	6世紀代	SI148・149→本跡	
147	E11a9	N-42°-W	[方形・長方形]	4.90×(3.82)	40~62	平坦	ほぼ全周	3	2	—	竈1	—	人為	土師器, ミニチュア土器, 土製品, 礫	6世紀後葉		
150	D11d6	N-26°-W	[方形・長方形]	5.40×(2.60)	16	平坦	—	2	—	—	竈1	—	自然	土師器, 礫	6世紀代		
151	D11e8	N-39°-W	方形	5.50×5.40	12~28	平坦	全周	4	2	—	竈1	—	自然	土師器	6世紀中葉		
157	D12f0	N-17°-W	[隅丸方形・隅丸長方形]	4.60×(4.50)	12~38	平坦	—	3	1	—	炉1	1	自然	土師器, 石器	4世紀代		

4 奈良時代・平安時代の遺構と遺物

今回の調査では、中位段丘上から奈良時代・平安時代の住居跡11軒と掘立柱建物跡3棟が確認された。

以下、遺構と遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

第74号住居跡 (第147図)

位置 調査区西部のD10f2区で、標高16.2mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 耕作による攪乱のため床面の一部が削平された状態であり、長軸3.10m、短軸2.50mほどが確認された。遺存している壁や検出された竈の位置などから判断して、N-120°-Eを主軸方向とする方形と推定される。遺存している壁高は4cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前付近が踏み固められており、竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで74cmである。袖部幅は79cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を若干皿状に掘りくぼめて使用している。煙道部は、壁外へ23cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|-------------------------------------|--------------------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子少量 | 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量, 炭化粒子・砂質粘土粒子少量, 小石微量 |
| 2 に近い赤褐色 焼土ブロック中量, 炭化粒子少量, 砂質粘土粒子微量 | 5 暗赤褐色 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量, 小石微量 | |

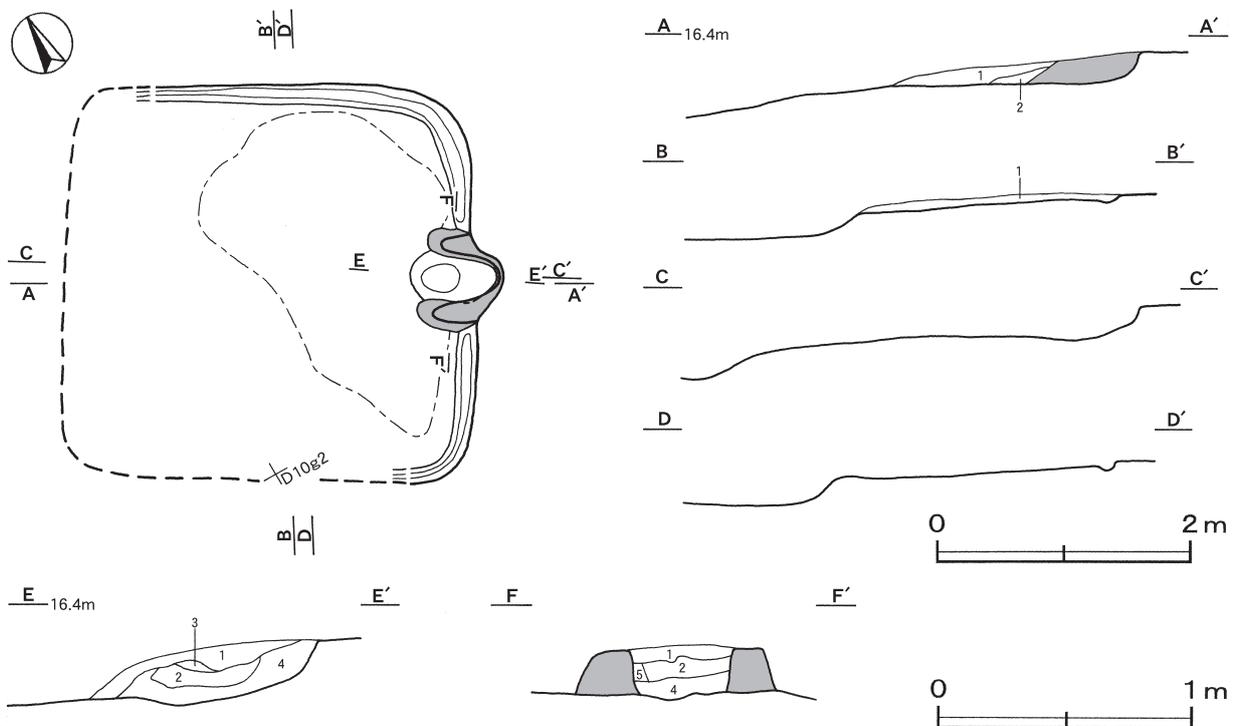
覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-----------------------------------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 炭化粒子・砂質粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量 | 2 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
|-----------------------------------|---------------------------------|

遺物出土状況 土師器片9点(坏3, 甕6)の他に、流れ込んだ弥生土器片6点も出土しているが、細片のため図示することはできない。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが、出土土器から9世紀代と考えられる。



第147図 第74号住居跡実測図

第76号住居跡 (第148・149図)

位置 調査区西部のD10e1区で、標高15.8mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 耕作による攪乱のため床面の一部が削平された状態であり、長軸3.24m、短軸3.08mほどが確認された。遺存している壁や検出された竈の位置などから判断して、N-0°を主軸方向とする方形と推定される。遺存している壁高は11~30cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで103cmである。袖部幅は110cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用している。煙道部は、壁外へ50cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

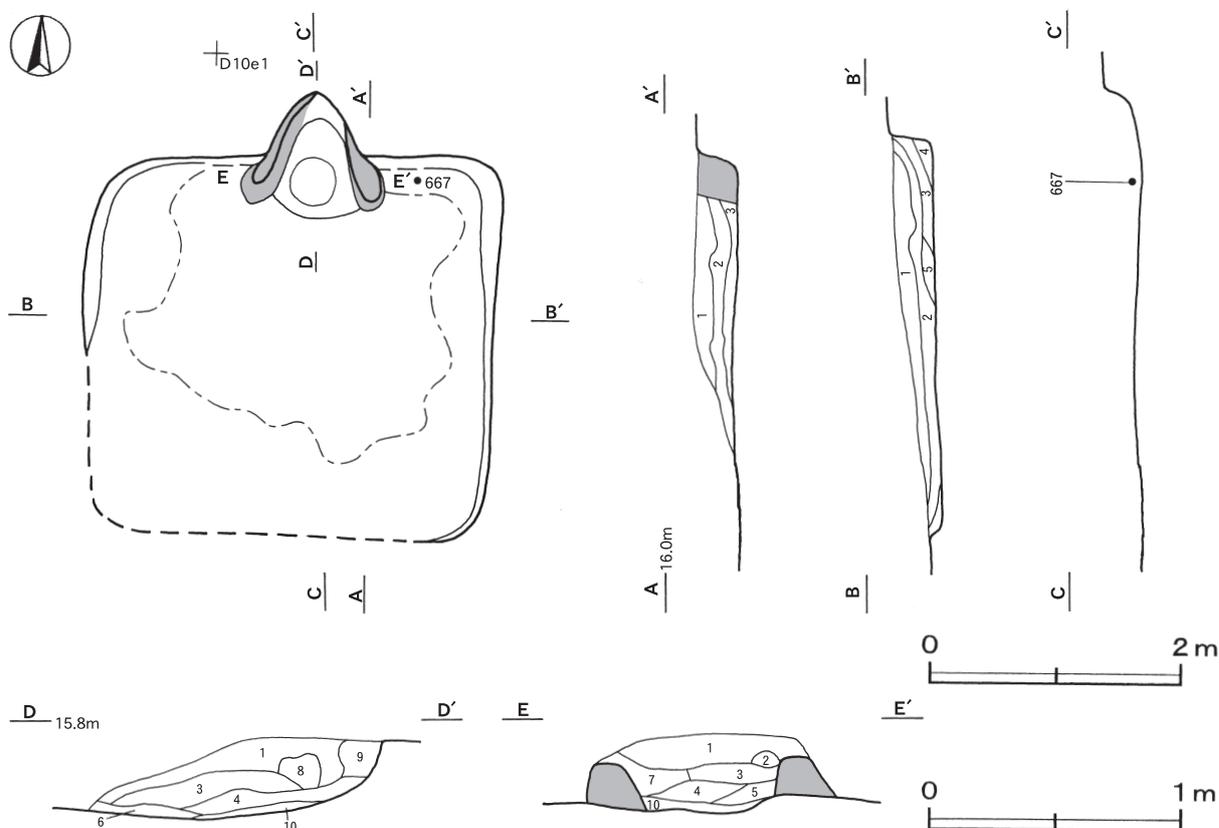
竈土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------------|----------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、砂質粘土ブロック微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | 砂質粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 黒色 | 炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 3 灰赤褐色 | 焼土ブロック・炭化物中量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化物少量、砂質粘土粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 8 暗赤褐色 | 砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量 |
| | | 9 極暗赤褐色 | 砂質粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| | | 10 極暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量 |

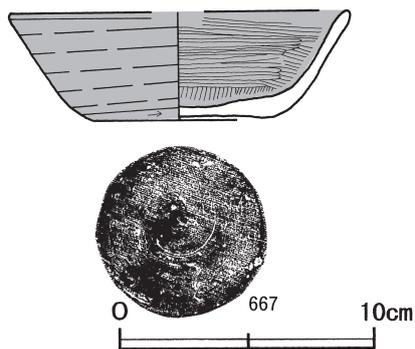
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 5 灰褐色 | 砂質粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子微量 | | |



第148図 第76号住居跡実測図



第149図 第76号住居跡出土遺物
実測図

第76号住居跡出土遺物観察表(第149図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
667	土師器	坏	[13.2]	4.2	6.7	長石・石英・赤色 粒子	黒褐	普通	底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土下層	90%

第78号住居跡 (第150・151図)

位置 調査区西部のD 9 a0区で、標高16.7mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 長軸4.93m、短軸3.45mの長方形で、主軸方向はN-37°-Wである。壁高は10~24cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前が踏み固められている。

竈 北西壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで86cmである。右袖部は遺存していないが、床面に砂質粘土がわずかに確認されたことから、袖部幅は95cmほどと推定され、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、床面と同じ高さの地山面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ57cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 暗褐色	焼土粒子少量, ローム粒子・砂質粘土粒子微量	7 暗赤褐色	焼土ブロック少量, 炭化物・砂質粘土粒子微量
2 黒褐色	砂質粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量	8 にぶい赤褐色	焼土粒子・ローム粒子少量, 砂質粘土粒子微量
3 黒褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック・ローム粒子少量	9 灰褐色	焼土粒子中量, 砂質粘土粒子少量, ローム粒子微量
4 にぶい赤褐色	焼土粒子中量, 砂質粘土粒子少量	10 極暗赤褐色	焼土粒子少量, 砂質粘土粒子微量
5 灰褐色	焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子微量	11 暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子少量, 砂質粘土粒子微量
6 にぶい赤褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量, ローム粒子微量	12 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子微量

覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	4 黒褐色	炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量	5 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	6 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

貯蔵穴 東側コーナー部に位置し、長径94cm、短径80cmほどの楕円形で、深さは38cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

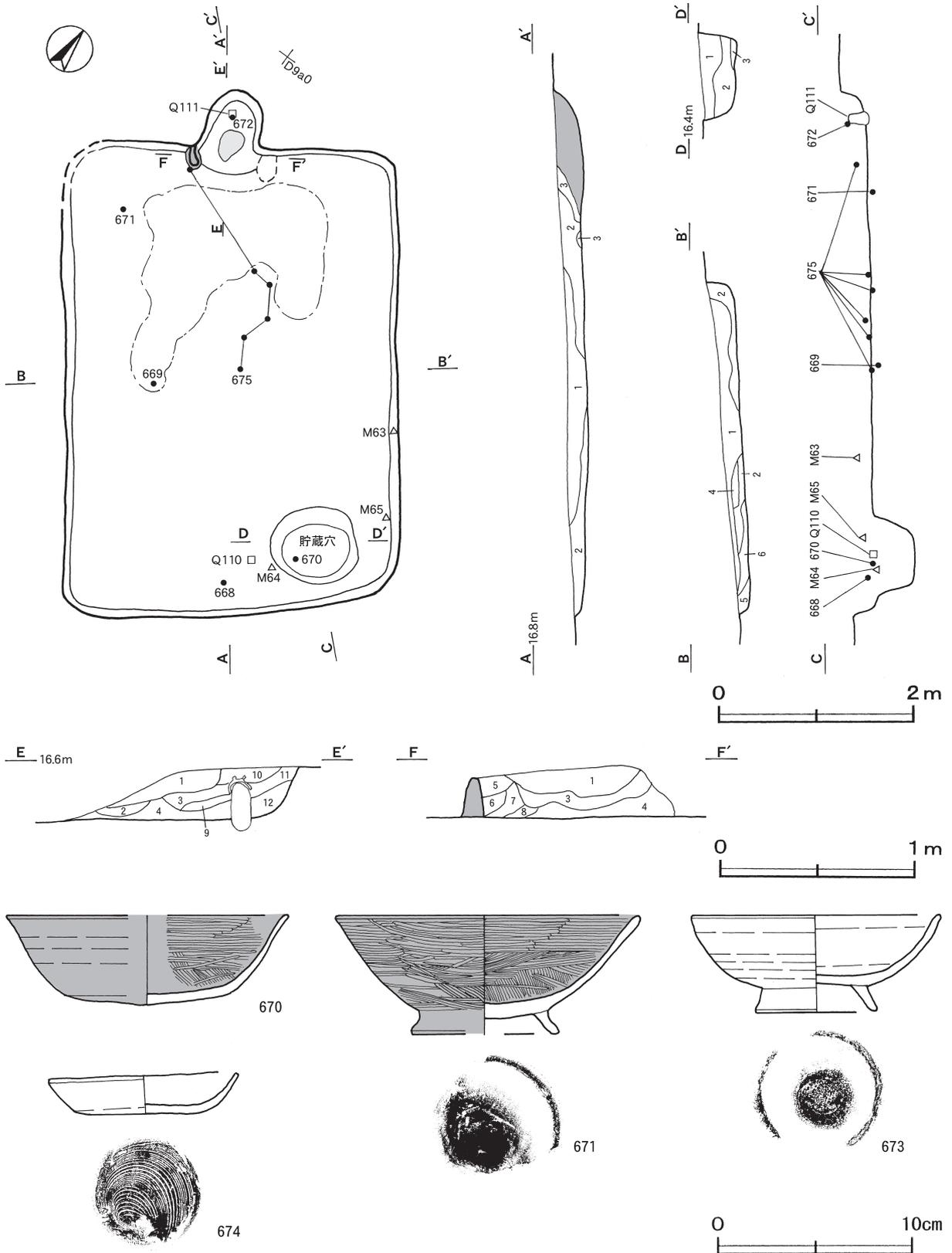
貯蔵穴土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量	3 にぶい褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量
2 黒褐色	炭化粒子少量, ロームブロック微量		

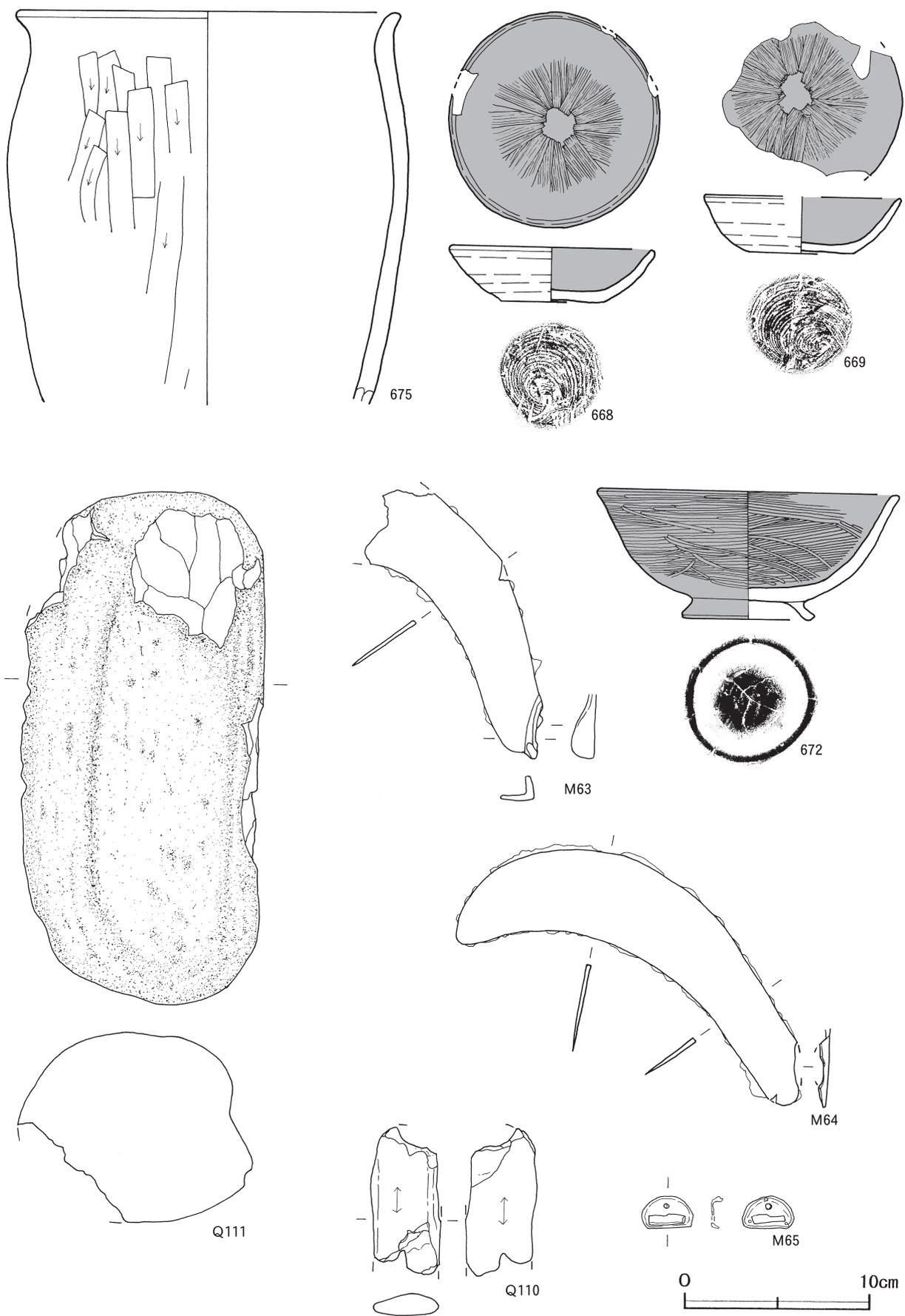
遺物出土状況 土師器片144点(坏52, 高台付坏5, 甕87), 土師質土器1点(小皿), 鉄製品2点(鎌), 銅製品1点(帯金具), 石器1点(砥石), 礫10点の他に、流れ込んだ弥生土器片35点, 須恵器片34点も出土している。668は南東壁寄りの床面, 669は中央部の床面, 671は西コーナー寄りの床面からそれぞれ出土している。672は竈内の出土で、Q111の上から逆位で出土し、二次焼成も受けているため支脚として使用されていた可能性が

高い。M63・M65は東壁際の覆土中層，M64は貯蔵穴付近の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は，出土土器から10世紀後半と考えられる。



第150図 第78号住居跡・出土遺物実測図



第151图 第78号住居跡出土遺物実測図

第78号住居跡出土遺物観察表(第150・151図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
668	土師器	坏	10.8	3.0	5.5	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい 褐	普通	底部回転糸切り 内面放射線状にヘラナデ	床面	100% PL36
669	土師器	坏	[10.6]	3.1	5.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい 橙	普通	底部回転糸切り 内面放射線状にヘラナデ	床面	50%
670	土師器	坏	[14.4]	4.7	—	長石・雲母・赤色粒子	にぶい 黄褐	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ 内面ヘラ磨き	貯蔵穴内	40%
671	土師器	高台付椀	15.7	6.1	[7.6]	長石・石英・雲母	黒褐	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け 体内内・外面ヘラ磨き	床面	90% PL36
672	土師器	高台付椀	16.0	7.0	6.6	長石・石英・雲母	にぶい 橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け 体内内・外面ヘラ磨き	竈内	85% PL36
673	土師器	高台付椀	12.6	5.1	6.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい 黄褐	不良	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け 内・外面摩擦調整不明	覆土中	70% PL36
674	土師質土器	小皿	9.7	2.2	5.4	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	底部回転糸切り 内面指頭によるナデ	覆土中	85% PL36
675	土師器	甕	20.3	(21.5)	—	長石・石英・雲母	にぶい 黄橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土下層	50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q110	砥石	(8.0)	3.7	1.2	(73.7)	凝灰岩	砥面2面 削痕有り	床面	
Q111	支脚	28.0	13.0	10.3	(526.2)	斑礫岩	熱による剥離痕有り	竈内	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M63	鎌	(9.6)	(14.5)	0.3	(84.2)	鉄	弓状に彎曲 断面形は三角 一部欠損	覆土中層	
M64	鎌	13.9	(18.6)	0.25	(118.0)	鉄	弓状に彎曲 断面形は三角 一部欠損	床面	PL43

番号	器種	縦	横	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M65	丸鞘	1.8	2.8	0.7	(3.5)	鉄	丸鞘表金具 裏面に3か所の鋸足の内1か所欠損 中央に穿孔 2次加工カ	覆土中層	PL43

第104号住居跡 (第152図)

位置 調査区西部のD 9 d3区で、標高14.2mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第101号住居跡を掘り込み、第173号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.00m、短軸3.30mの長方形で、主軸方向はN-157°-Eである。壁高は18~42cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 南壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで101cmである。袖部幅は90cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ38cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。第4・9・14層は、天井部の崩落層と考えられる。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|------------------------------|-----------|------------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量 | 8 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 9 黄褐色 | 砂質粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 赤黒色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 4 にぶい黄褐色 | 砂質粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 5 極暗赤褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 12 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子・ローム粒子微量 |
| 6 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 13 明赤褐色 | 焼土ブロック多量、炭化粒子微量 |
| 7 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 14 明黄褐色 | 砂質粘土粒子多量、炭化粒子微量 |
| | | 15 黒褐色 | 炭化粒子少量、焼土粒子微量 |

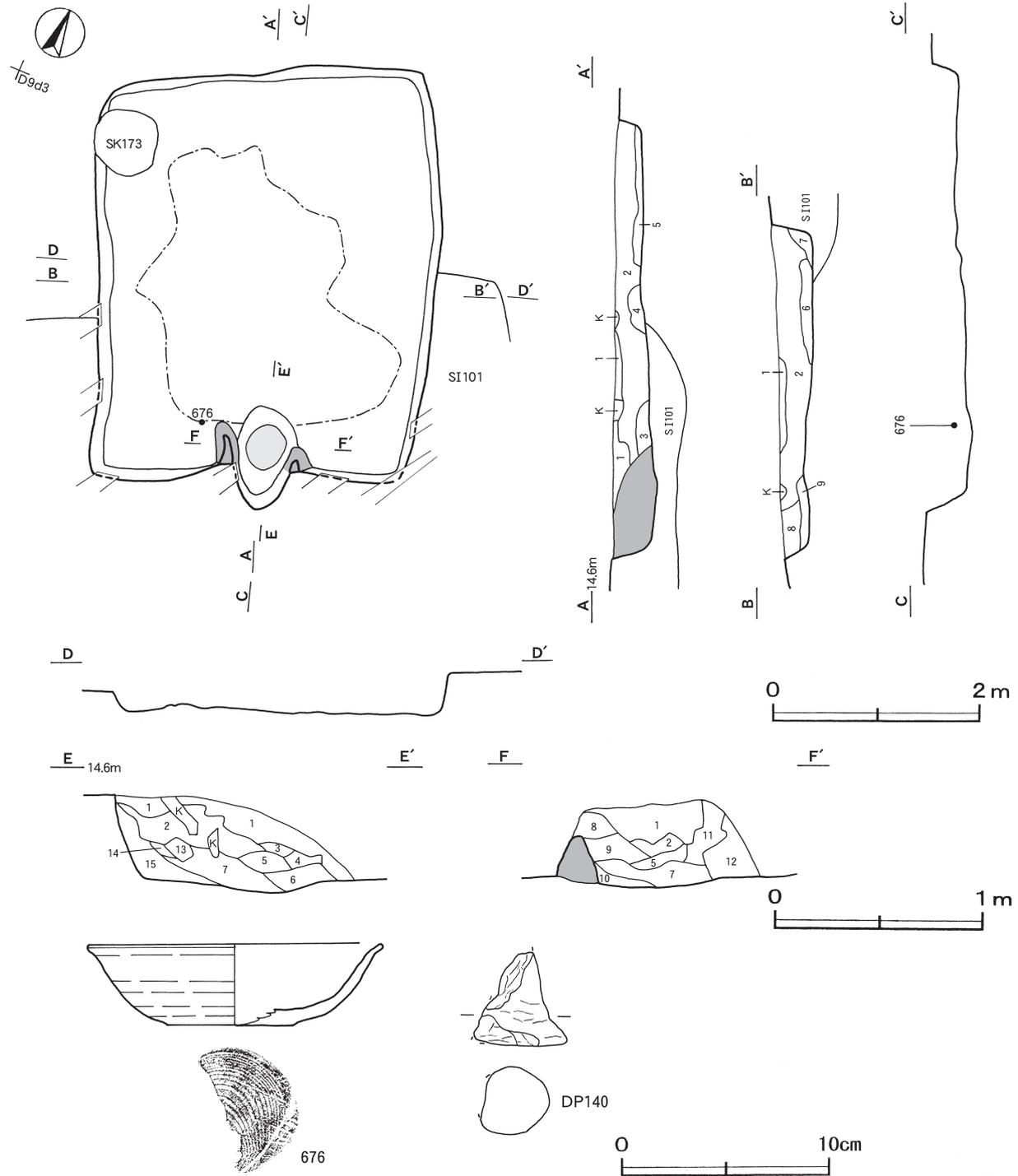
覆土 9層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 極暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 極暗褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック微量 | 8 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| | | 9 黒褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片97点（坏45，高台付坏1，甕51）の他に，流れ込んだ弥生土器片36点，須恵器片24点も出土しているが，遺物の大半は細片のため図示することはできない。676は竈右袖近くの床面から出土している。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが，出土土器から10世紀前半と考えられる。



第152図 第104号住居跡・出土遺物実測図

第104号住居跡出土遺物観察表(第152図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
676	土師器	坏	14.2	3.9	6.2	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	底部回転糸切り 内・外面ナデ	覆土下層	70%

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP140	支脚	(4.5)	(4.5)	(52.6)	土(長石・石英・雲母)	全面ナデ	覆土中	

第107号住居跡 (第153・154図)

位置 調査区西部のD 8 b0区で、標高14.2mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第109・110号住居跡を掘り込み、第6号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 耕作による攪乱のため床面の一部が削平された状態であり、長軸2.55m、短軸2.50mほどが確認された。遺存している壁や検出された竈の位置などから判断して、N-71°-Eを主軸方向とする方形と推定される。遺存している壁高は12cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部から竈前部分が踏み固められている。

竈 東壁の南寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで73cmである。袖部は遺存していないが床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されていたと推定される。火床部は、地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ58cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

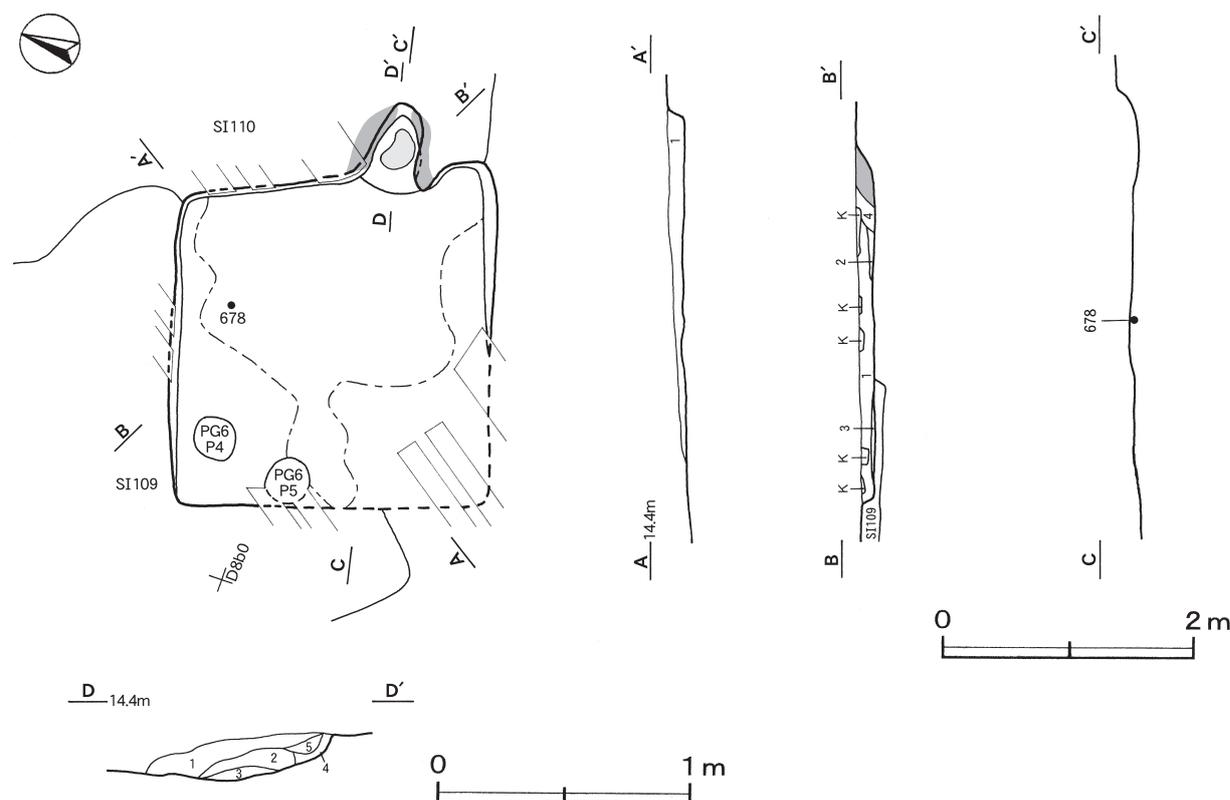
竈土層解説

- | | |
|-------------------------------|------------------------|
| 1 ぶい赤褐色 焼土粒子・砂質粘土粒子中量 | 4 黒褐色 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 5 暗赤褐色 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量 |
| 3 赤褐色 焼土粒子多量、砂質粘土粒子微量 | |

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

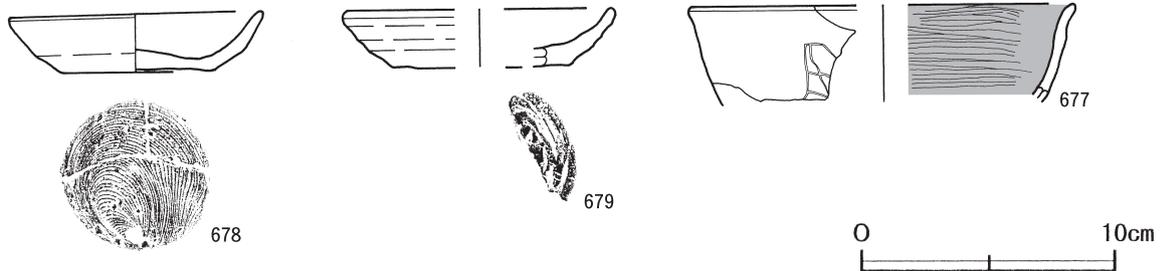
- | | |
|----------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |



第153図 第107号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片96点（坏10，高台付坏1，甕85），土師質土器2点（小皿）の他に，流れ込んだ弥生土器片4点，須恵器片24点も出土しているが，遺物の大半は細片のため図示することはできない。678は北壁寄りの床面から出土している。

所見 時期を特定できる遺物が少ないが，出土土器から10世紀後半と考えられる。



第154図 第107号住居跡出土遺物実測図

第107号住居跡出土遺物観察表(第154図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
677	土師器	坏	[15.0]	(3.8)	—	長石・雲母	黒褐	普通	内面へラ磨き	覆土中	5% 刻書「口」
678	土師質土器	小皿	10.0	2.4	6.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り 内・外面ナデ	床面	100% PL36
679	土師質土器	小皿	[10.8]	2.2	[7.0]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り 内・外面ナデ	覆土中	30%

第109号住居跡（第155・156図）

位置 調査区西部のD 8 a0区で，標高14.2mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第110号住居跡を掘り込み，第107号住居，第6号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.72m，短軸3.22mの長方形で，主軸方向はN-46°-Eである。壁高は9～14cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。

竈 北東壁中央部に付設されており，焚口部から煙道部まで85cmである。袖部幅は92cmで，床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されており，左袖部には土師器甕，右袖部には須恵器甕がそれぞれ竈材として転用されていた。火床部は，地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており，火を受けて赤変硬化している。煙道部は，壁外へ29cm掘り込まれ，火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|------------------------------|---------------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土粒子中量，砂質粘土粒子微量 | 7 にぶい赤褐色 砂質粘土粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量 |
| 2 にぶい赤褐色 焼土粒子・砂質粘土粒子少量，炭化物微量 | 8 極暗赤褐色 焼土粒子・砂質粘土粒子少量，炭化粒子微量 |
| 3 極暗褐色 焼土粒子・砂質粘土粒子微量 | 9 極暗赤褐色 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量，炭化粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 焼土粒子少量，炭化粒子微量 | 10 灰褐色 砂質粘土粒子中量，焼土粒子少量 |
| 5 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 11 褐灰色 焼土粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 6 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量 | |

覆土 4層に分層される。焼土ブロックや炭化材を含む人為堆積と考えられる。

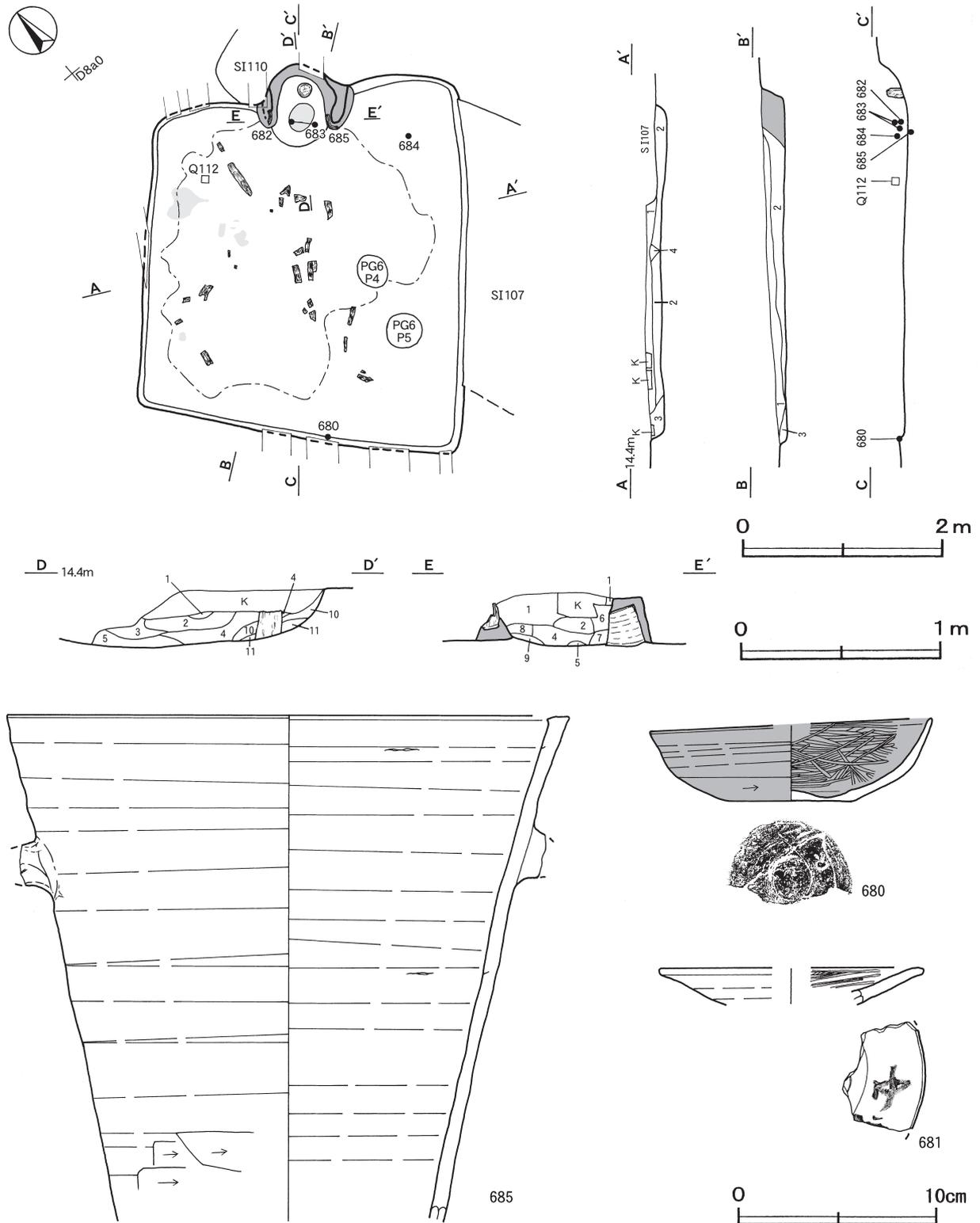
土層解説

- | | |
|----------------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量 | 3 極暗褐色 焼土ブロック少量，炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 焼土ブロック・炭化物少量，ローム粒子微量 | 4 黒褐色 炭化粒子微量 |

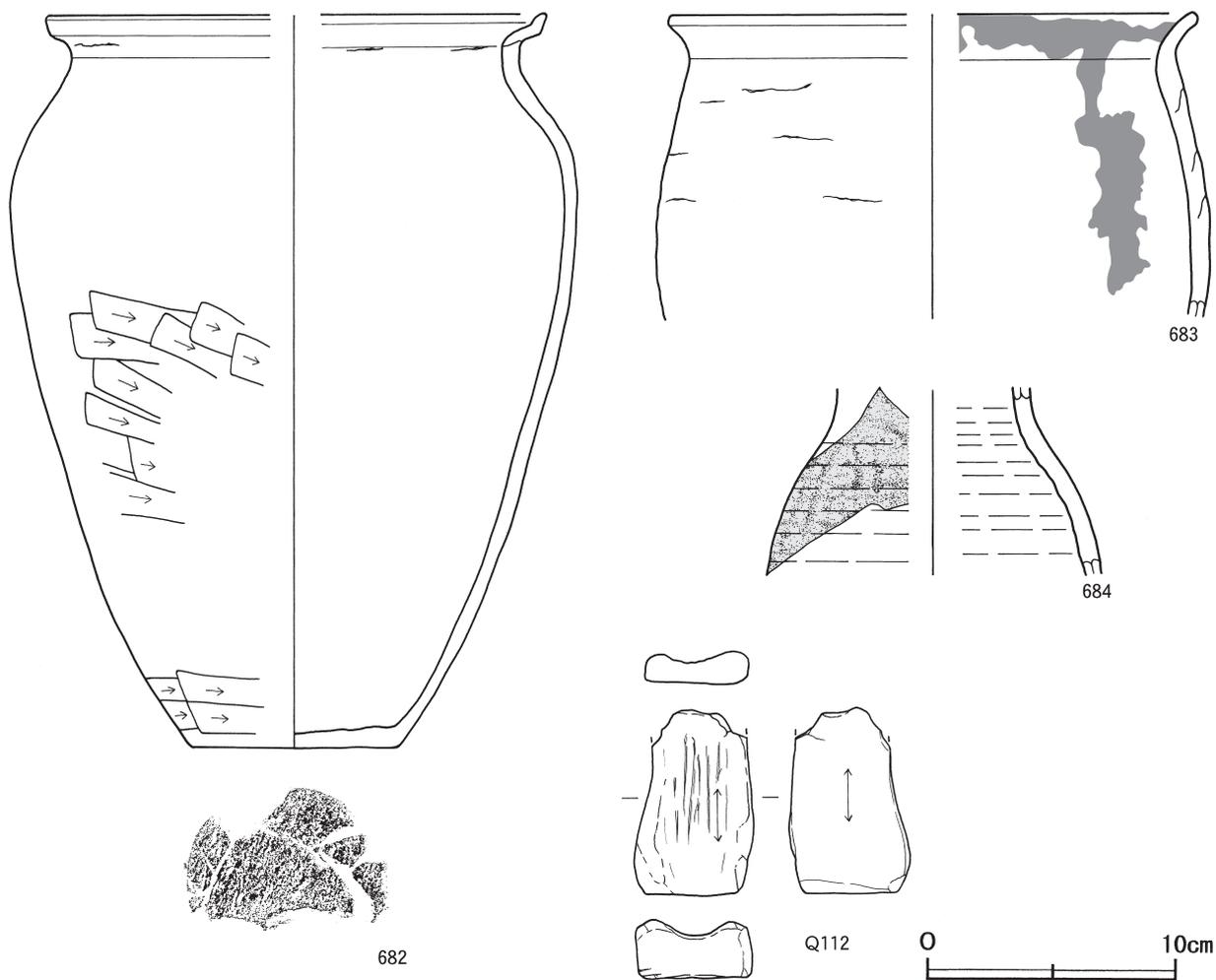
遺物出土状況 土師器片267点（坏29，高台付皿1，甕237），須恵器片7点（坏5，短頸壺1，甕1），灰釉陶器1点（瓶類），石器1点（砥石），鉄製品1点（不明）の他に，混入した弥生土器片16点も出土している。680は南西壁際の覆土上層から出土している。682は竈左袖部，685は竈右袖部からそれぞれ逆位で出土しており，

袖部の補強材として転用されたものである。また、多量の炭化材と焼土が出土していることから焼失住居と考えられるが、火を受けて赤変した床面を確認できなかった。

所見 時期は、出土土器から9世紀後半と考えられる。焼失時期は、焼土や炭化材が床面から検出されていることから廃絶後間もない時期と考えられる。



第155図 第109号住居跡・出土遺物実測図



第156図 第109号住居跡出土遺物実測図

第109号住居跡出土遺物観察表(第156図)

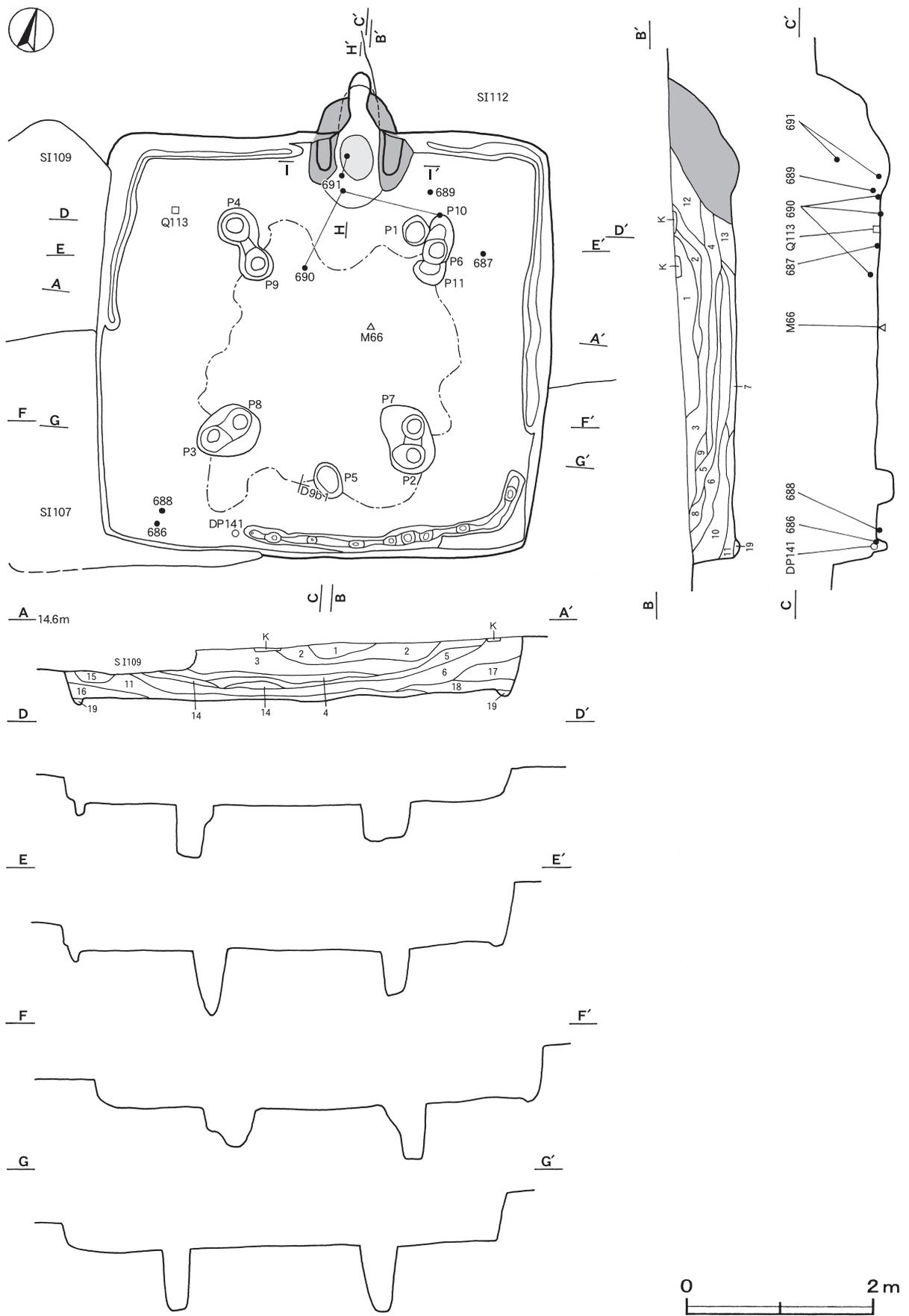
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
680	土師器	坏	[14.2]	4.2	6.2	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土中層	50%
681	土師器	高台付皿	[13.2]	(1.8)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き	覆土中層	10% 墨書「中□」 PL37
682	土師器	甕	[19.8]	29.7	8.4	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ 輪積痕	竈左袖部	40%
683	土師器	甕	[21.0]	(12.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ナデ 輪積痕	竈内	10% 内面煤付着
684	灰釉陶器	瓶類	-	(7.6)	-	長石・石英	灰白	良好	体部外面口クロナデ	覆土中層	10%
685	須恵器	甗	28.0	(25.9)	-	長石・石英・雲母・針状鉱物	灰黄褐	良好	体部外面下端ヘラ削り 把手剥離痕 内面ナデ 輪積痕	竈右袖部	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q112	砥石	(7.5)	5.0	2.4	(73.7)	凝灰岩	砥面2面	覆土中層	

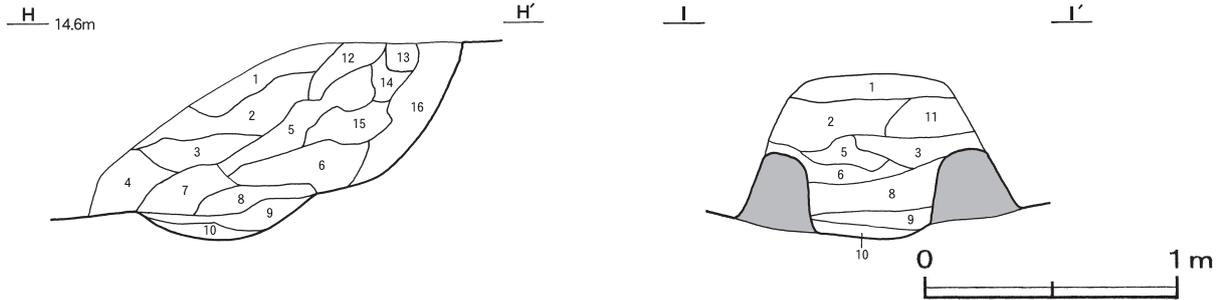
第110号住居跡 (第157~160図)

位置 調査区西部のD 8 a0区で、標高14.3mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第112号住居跡を掘り込み、第107・109号住居に掘り込まれている。



第157图 第110号住居跡実測図(1)



第158図 第110号住居跡実測図(2)

規模と形状 長軸4.70m，短軸4.61mの方形で，主軸方向はN-8°-Wである。壁高は45~65cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められており，南西コーナー及び竈部分を除いて壁溝が周回している。

竈 北壁のほぼ中央部に付設されており，焚口部から煙道部まで147cmである。袖部幅は108cmほどで，床面と同じ高さの地山面を掘り込んでから砂質粘土で構築している。火床部は，地山面を皿状に掘りくぼめて使用しており，火を受けて赤変硬化している。煙道部は，壁外へ64cm掘り込まれ，火床面から外傾して立ち上がっている。第5層は天井部の崩落層と考えられる。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------------|----------|----------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 にい赤褐色 | 焼土粒子中量，ローム粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 極暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 11 暗赤褐色 | 焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 4 極暗褐色 | 炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量 | 12 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 5 灰黄褐色 | 砂質粘土粒子多量，炭化粒子微量 | 13 にい黄褐色 | 砂質粘土粒子少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 14 にい黄褐色 | 砂質粘土粒子少量，焼土粒子微量 |
| 7 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 15 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 8 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量，炭化粒子・砂質粘土粒子少量 | 16 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |

ピット 11か所。P 1~P 4は深さ42~73cmで，配置から支柱穴と考えられる。P 5は深さ21cmで，配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6~P 9は深さ42~72cmで，柱建て替え以前の柱穴と考えられる。P 10・P 11の性格は不明であるが，柱建て替え時の掘り方の可能性も想定できる。

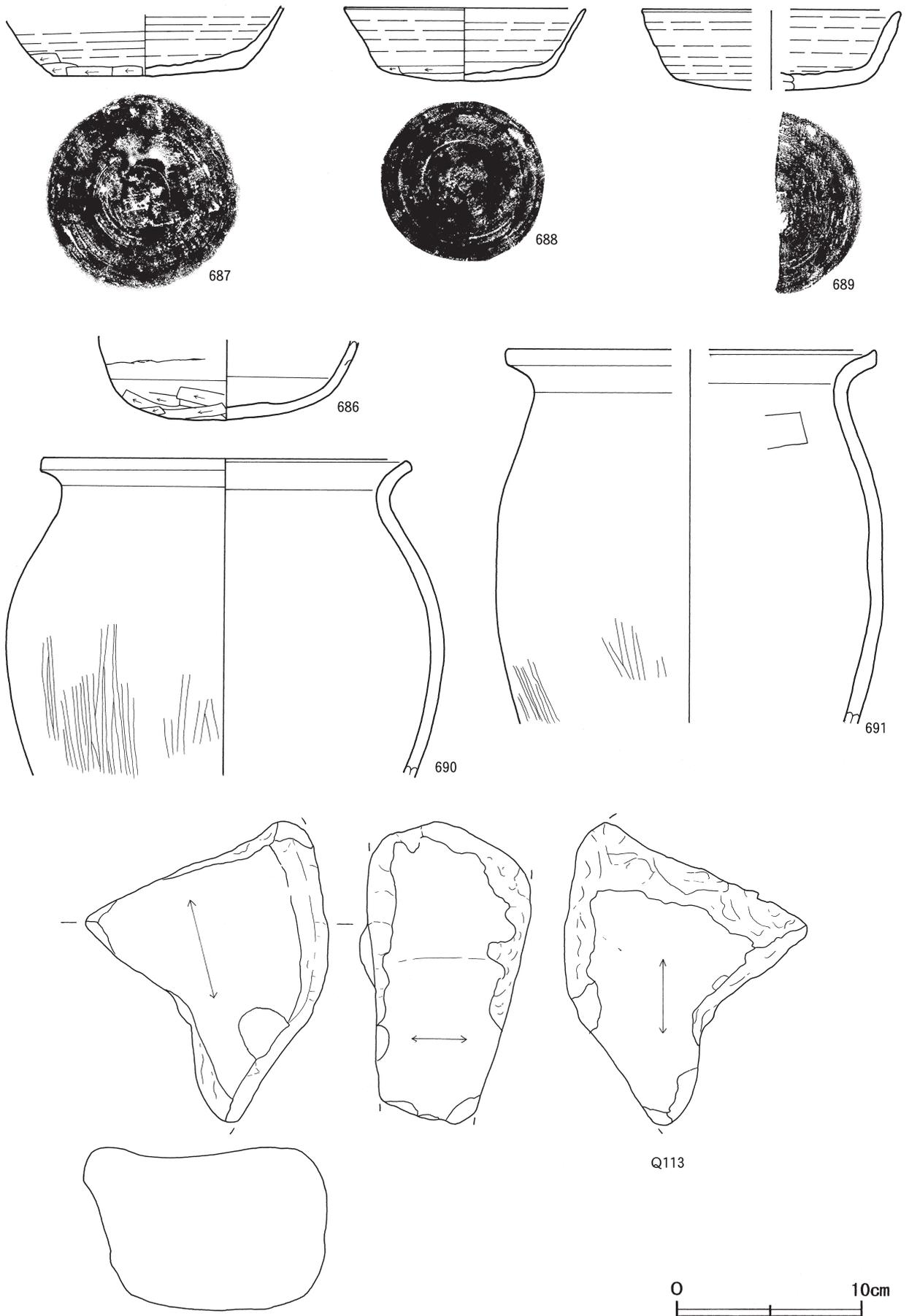
覆土 19層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

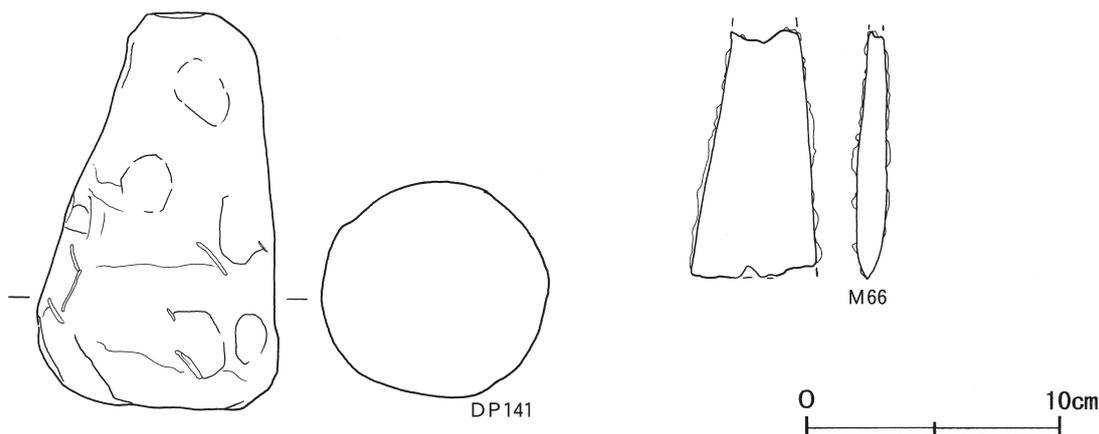
- | | | | |
|--------|---------------------|---------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量 | 11 極暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 12 極暗褐色 | ローム粒子少量，焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量 | 13 暗褐色 | ローム粒子少量，焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 14 黒色 | 炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 5 黒褐色 | 炭化粒子中量，ローム粒子・焼土粒子微量 | 15 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量 |
| 6 黒褐色 | 炭化粒子少量，ローム粒子微量 | 16 黒褐色 | ローム粒子少量，炭化粒子微量 |
| 7 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 17 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 8 褐色 | ロームブロック少量，炭化粒子微量 | 18 極暗褐色 | ローム粒子少量，炭化粒子微量 |
| 9 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 19 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 10 黒褐色 | ローム粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片570点(坏50，高坏1，器台1，甕518)，須恵器片28点(坏25，蓋1，甕2)，土製品1点(支脚)，石器1点(砥石)，鉄製品3点(鉄鏃，刀子，鉄斧)の他に，流れ込んだ縄文土器片2点，弥生土器片102点も出土している。686・688は南西コーナー一部の床面，687は北東コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は，出土土器から8世紀後半と考えられる。



第159图 第110号住居跡出土遺物実測図(1)



第160図 第110号住居跡出土遺物実測図(2)

第110号住居跡出土遺物観察表(第159・160図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
686	土師器	坏	-	(4.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ 輪積痕	床面	85% 二次利用 PL36
687	須恵器	坏カ	-	(3.7)	10.3	長石・石英	灰	普通	底部回転へラ切り 回転へラ削り後一方向のへラ削り 体部下端手持ちへラ削り	床面	90%
688	須恵器	坏	13.0	3.9	8.6	長石・石英・針状鉱物	灰黄褐	良好	底部回転へラ切り後回転へラ削り 体部外面下端回転へラ削り	床面	90% PL34
689	須恵器	坏	[13.7]	4.4	[10.0]	長石・石英・針状鉱物	褐灰	良好	底部回転へラ切り後回転へラ削り	覆土下層	40%
690	土師器	甕	19.6	(17.1)	-	長石・雲母・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面ナデ	覆土下層	20%
691	土師器	甕	[19.6]	(20.2)	-	長石・雲母・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラナデ	竈内	20%

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP141	支脚	15.7	5.0~(9.4)	(1055.5)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 指頭痕	床面	PL41

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q113	砥石	(16.4)	(13.0)	9.2	(1835.2)	砂岩	砥面3面	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M66	鉄斧	(9.8)	(4.9)	1.1	(181.6)	鉄	刃部はやや幅広	床面	PL43

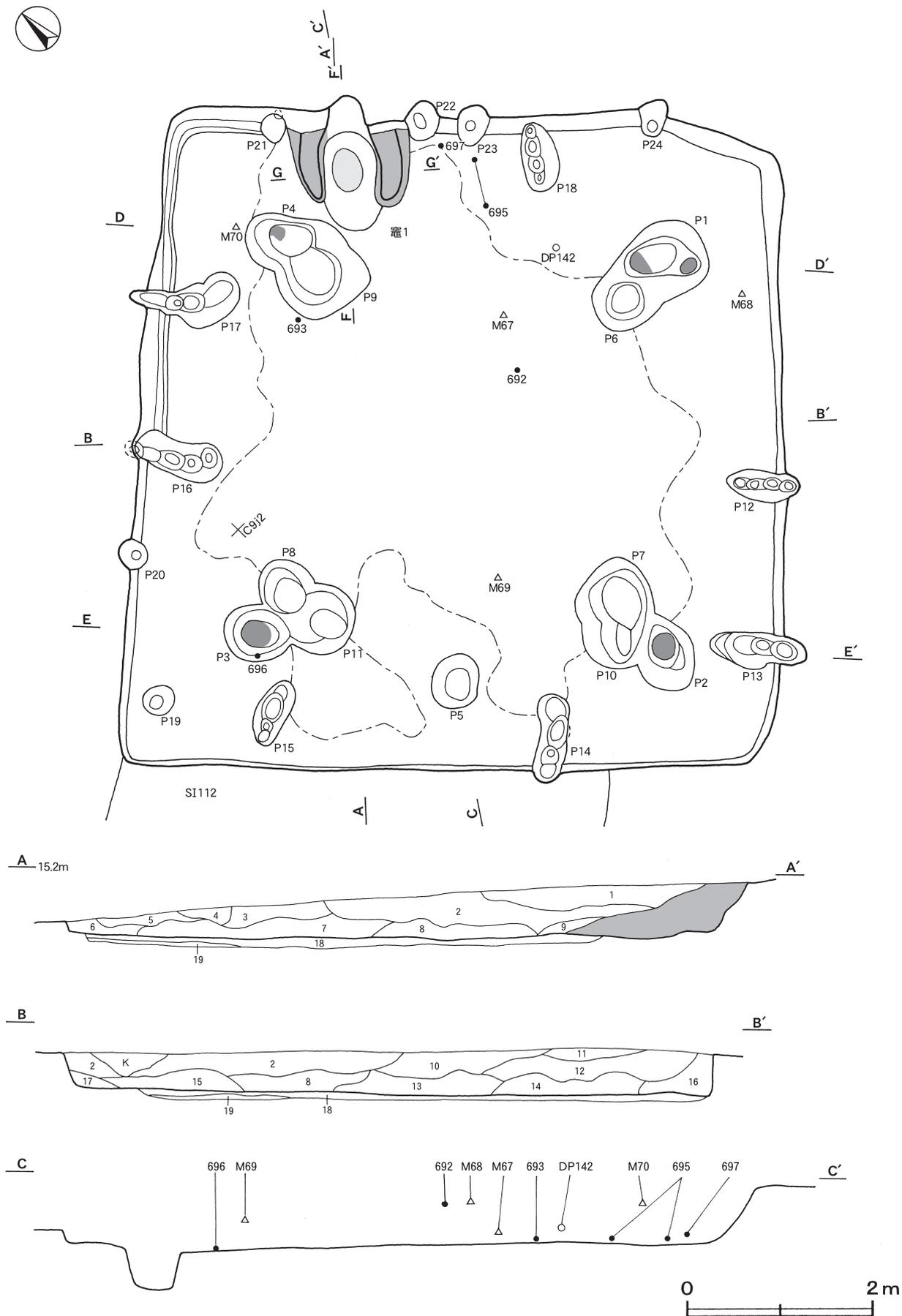
第111号住居跡 (第161~164図)

位置 調査区西部のC 9 j2区で、標高15.0mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

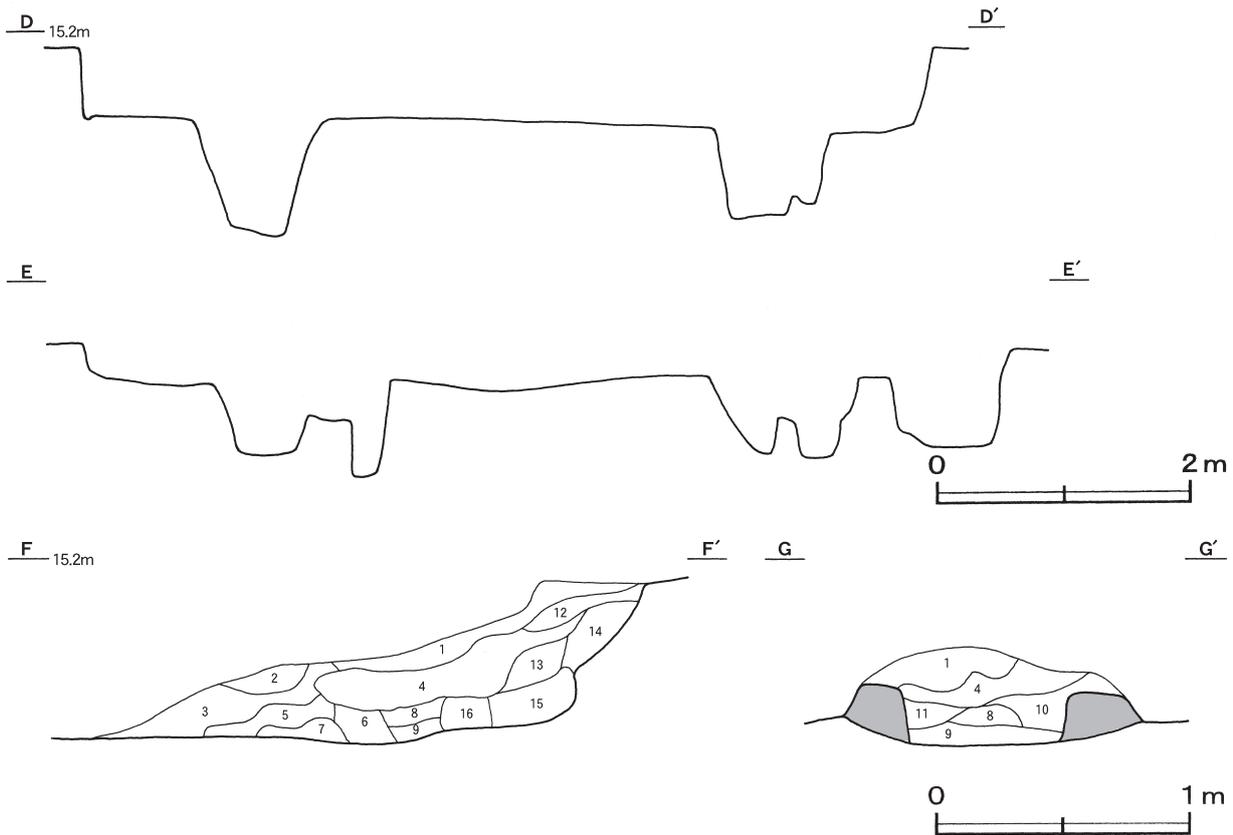
重複関係 第112号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸7.08m、短軸6.88mの方形で、主軸方向はN-49°-Eである。壁高は18~65cmで、外傾して立ち上がっている。また、掘り方調査の結果、竈痕跡が検出され、柱穴も対角線上に移動していることから本跡は四壁が拡張されている。拡張以前の長軸は6.50mほど、短軸6.20mほどの方形と想定される。

床 掘り方を調査した結果、床面は2面あることが確認された。廃絶時の床面(第2次面)はほぼ平坦で、中央部と竈前付近が踏み固められており、第1次面上に覆土土層第18・19層を客土して構築している。第1次面は拡張以前の床面で、中央部と竈前付近が踏み固められている。



第161图 第111号住居跡実測図(1)



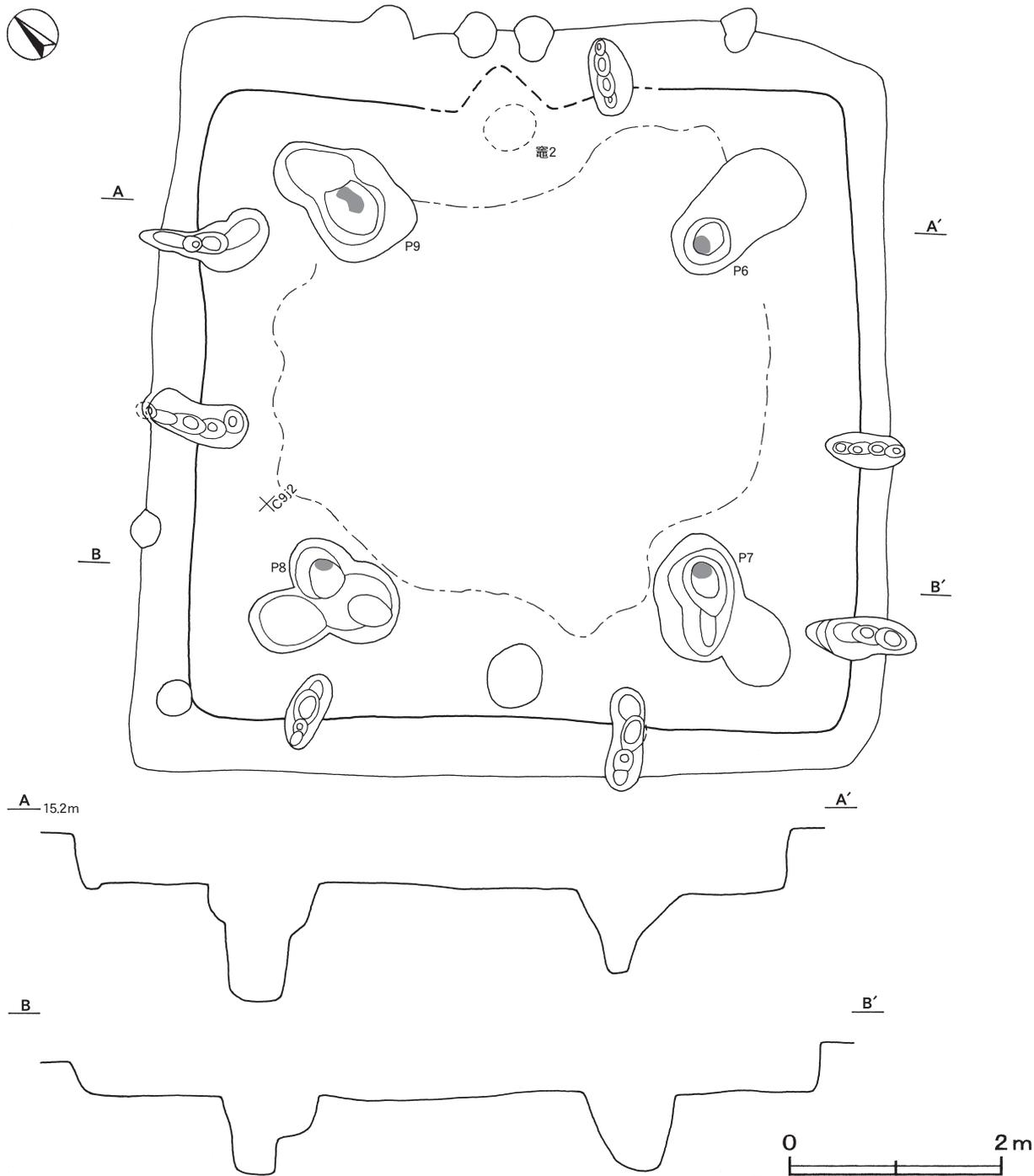
第162図 第111号住居跡実測図(2)

竈 拡張後の竈は、北東壁の左寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで148cmである。袖部幅は127cmほどで、床面と同じ高さの地山面を掘り込んでから砂質粘土で構築している。火床部は、床面と同じ高さの地山面を使用しており、火を受けて赤変硬化している。煙道部は、壁外へ18cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。拡張以前の竈は、北東壁の中央部に付設されており、火床部が遺存しているだけで、袖部の痕跡は確認できなかった。

竈1土層解説

- | | | | |
|---------|-------------------------------|----------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量, 炭化粒子微量 | 9 赤褐色 | 焼土粒子中量, 砂質粘土粒子少量, 炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | 砂質粘土粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 10 褐色 | 砂質粘土ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量, ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 11 にい赤褐色 | 砂質粘土粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 炭化粒子・砂質粘土粒子少量 | 12 黒褐色 | 砂質粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量, 炭化粒子微量 | 13 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量 |
| 6 にい赤褐色 | 砂質粘土粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 14 黒褐色 | 砂質粘土粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 7 黒色 | 炭化粒子多量, ロームブロック・焼土粒子微量 | 15 暗赤褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量, 灰微量 |
| 8 にい橙色 | 砂質粘土ブロック中量, 焼土粒子少量, 炭化物微量 | 16 明赤褐色 | 焼土ブロック多量, 砂質粘土粒子微量 |

ピット 24か所。P 1～P 4は深さ58～95cmで、配置から廃絶時の支柱穴と考えられる。P 5は深さ37cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。また、P 6～P 11は深さ75～113cmで、配置から拡張以前の支柱穴と想定される。P 12～P 24は深さ46～116cmで、住居を取り囲むように壁際に配置されていることから壁柱穴と考えられ、中でもP 12～P 18は、拡張に伴って柱を移動したと想定される。また、P 21・P 22は、竈を挟むように北東壁際に位置していることから、竈の付属施設の柱穴と考えられる。

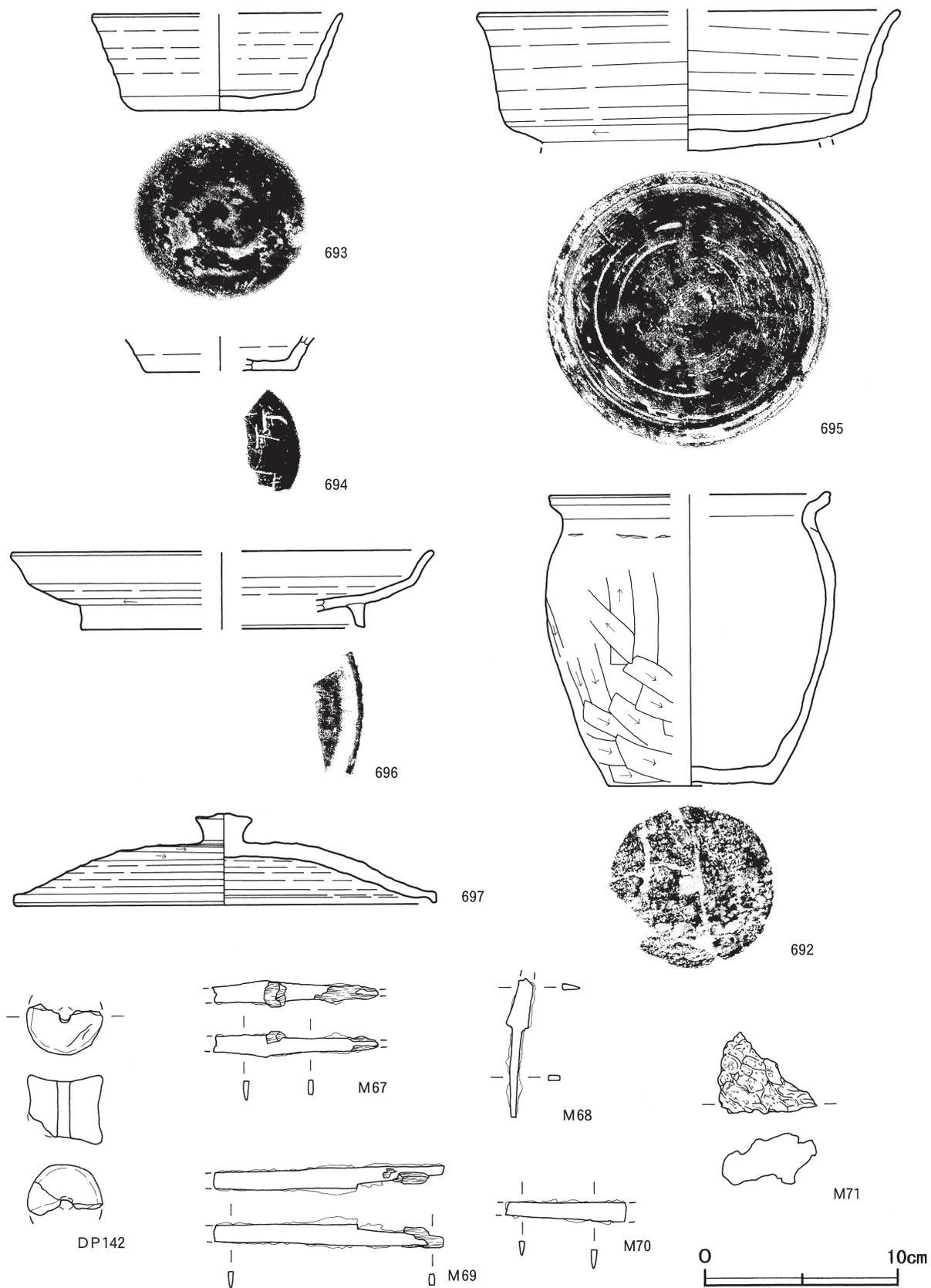


第163図 第111号住居跡実測図(3)

覆土 17層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。第18・19層は第2次面の床である。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	10 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量, 炭化物・焼土粒子微量	11 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	12 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子微量	13 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
5 極暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	14 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
6 極暗褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量	15 極暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
7 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子微量	16 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
8 黒褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量	17 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土ブロック・砂質粘土粒子微量
9 黒褐色	焼土粒子少量, ロームブロック・砂質粘土ブロック微量	18 黒褐色	ロームブロック中量, 焼土ブロック微量
		19 極暗褐色	ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量



第164图 第111号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片1412点（坏124，高坏8，埴1，甕1274，甌5），須恵器片113点（坏35，高台付坏4，盤26，高盤3，蓋45），土製品12（紡錘車1，支脚11），鉄製品5点（刀子4，不明1），鉄滓1点，礫62点の他に，流れ込んだ縄文土器片5点，弥生土器片211点も出土している。693はP4付近の覆土下層，695・697は北東壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。いずれの遺物も覆土下層より上から出土しており，住居に伴わないと判断される。

所見 廃絶時期は，出土土器から8世紀後半と考えられる。また，拡張以前の時期については，1次面の床面調査や掘り方調査でも遺物が出土していないため明確ではないが，廃絶時期からはそれほど遡らないと考えられる。

第111号住居跡出土遺物観察表(第164図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
693	須恵器	坏	[12.8]	5.0	9.0	長石・石英・針状鉱物	にぶい黄橙	良好	底部回転ヘラ切り	覆土下層	60%
694	須恵器	坏	—	(1.8)	[7.8]	長石・石英	灰黄褐	良好	底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り	覆土中	10% 窠書き「上・上・□」カ PL37
695	須恵器	高台付坏	[21.5]	(7.2)	—	長石・石英・針状鉱物	灰	良好	底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り 高台貼り付け 体部外面下端回転ヘラ削り	覆土下層	70% PL35
696	須恵器	盤	[21.4]	4.0	[14.6]	長石・石英	褐灰	良好	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け 体部外面下端回転ヘラ削り	覆土下層	20%
697	須恵器	蓋	21.6	4.7	—	長石・石英・針状鉱物	灰	普通	天井部右回りのヘラ削り	覆土下層	60% PL35
692	土師器	小型甕	[14.2]	15.0	8.4	長石・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ナデ 輪積痕	覆土上層	50%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP142	紡錘車	3.7	0.6	3.6	(36.5)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	全面ナデ	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M68	鉄鎌	(7.2)	1.4	0.3	(6.3)	鉄	長頸鎌群 鎌身部片刃形	覆土上層	PL43
M67	刀子	(8.5)	1.4	0.4~0.5	(8.4)	鉄	刀身の一部 切先・茎尻欠損 茎の一部に木質遺存	覆土下層	PL43
M69	刀子	(11.8)	1.0	0.3	(13.4)	鉄	刀身の一部 切先・茎尻欠損 茎の一部に木質遺存	覆土中層	
M70	刀子	(6.2)	1.0	0.3	(6.1)	鉄	刀身の一部 切先・茎欠損	覆土上層	
M71	鉄滓	4.2	5.1	2.7	39.2	鉄	表面は暗赤褐色 凹凸有り	覆土中	

第118号住居跡（第165～172図）

位置 調査区西部のC8i9区で，標高14.5mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第116・119号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.40m，短軸5.18mの方形で，主軸方向はN-38°-Wである。壁高は35～60cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，南東壁側が踏み固められている。

竈 北西壁の中央部に付設されており，焚口部から煙道部まで148cmである。袖部幅は138cmほどで，床の上に砂質粘土で構築されている。火床部は，地山面を15cm前後掘り込み，竈土層第13～15層に相当する土を入れて使用していたと考えられるが，赤変硬化部分は検出されなかった。煙道部は，壁外へ42cm掘り込まれ，火床面から緩やかに立ち上がっている。第3層は，天井部の崩落層と考えられる。第16層～19層は床構築材，第20層～26層はP7・P8の覆土である。

竈土層解説

1 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量	15 褐色	ローム粒子中量, 焼土ブロック微量
2 暗褐色	焼土粒子少量, ローム粒子微量	16 明褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
3 灰黄褐色	砂質粘土ブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子微量	17 暗褐色	ロームブロック少量・砂質粘土粒子微量
4 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量	18 灰褐色	ロームブロック少量, 焼土ブロック・砂質粘土粒子微量
5 褐色	砂質粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量	19 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・砂質粘土粒子微量
6 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子微量	20 褐色	ロームブロック中量, 焼土ブロック・砂質粘土ブロック微量
7 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	21 暗褐色	ロームブロック・砂質粘土ブロック・焼土粒子微量
8 黒褐色	砂質粘土ブロック少量, ローム粒子・焼土粒子微量	22 褐色	ロームブロック少量, 砂質粘土ブロック・焼土粒子微量
9 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	23 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量
10 褐色	砂質粘土ブロック少量, 焼土粒子微量	24 褐色	ローム粒子少量, 砂質粘土ブロック・焼土粒子微量
11 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量	25 暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
12 灰黄褐色	砂質粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	26 褐色	砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量
13 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量		
14 明褐色	ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量		

ピット 8か所。P 1～P 4は深さ72～89cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5・P 6は深さ89～99cmで、壁柱穴の可能性も考えられるが明確ではない。P 7・P 8は深さは27～34cmで、竈袖部の断ち割りの際、両袖部下の貼り床をはがした時点で検出されている。竈の作り替え以前の竈に関わる付属施設の柱穴と考えられるが明確ではない。また、検出状況から床の張り替えが想定される。

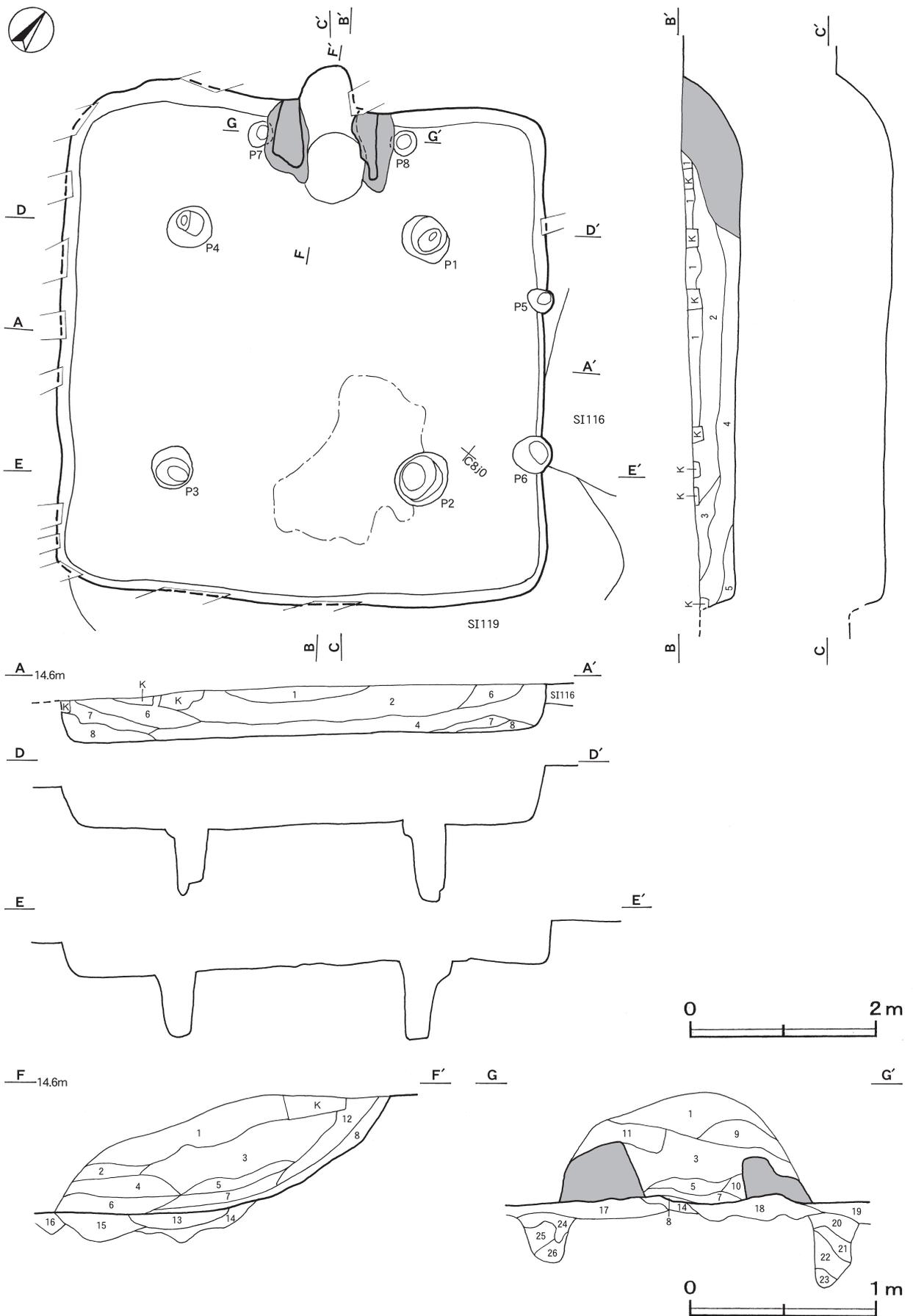
覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状況を示しているが、遺物の出土状況などから人為堆積と考えられる。

土層解説

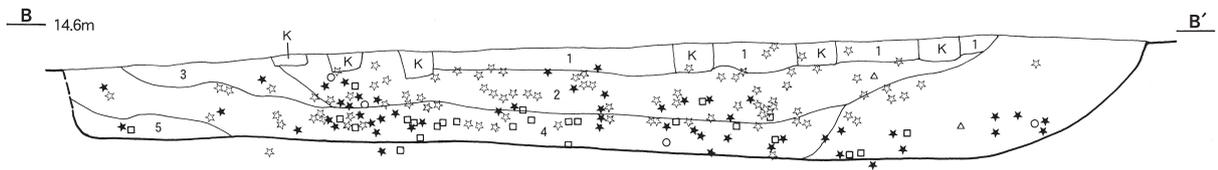
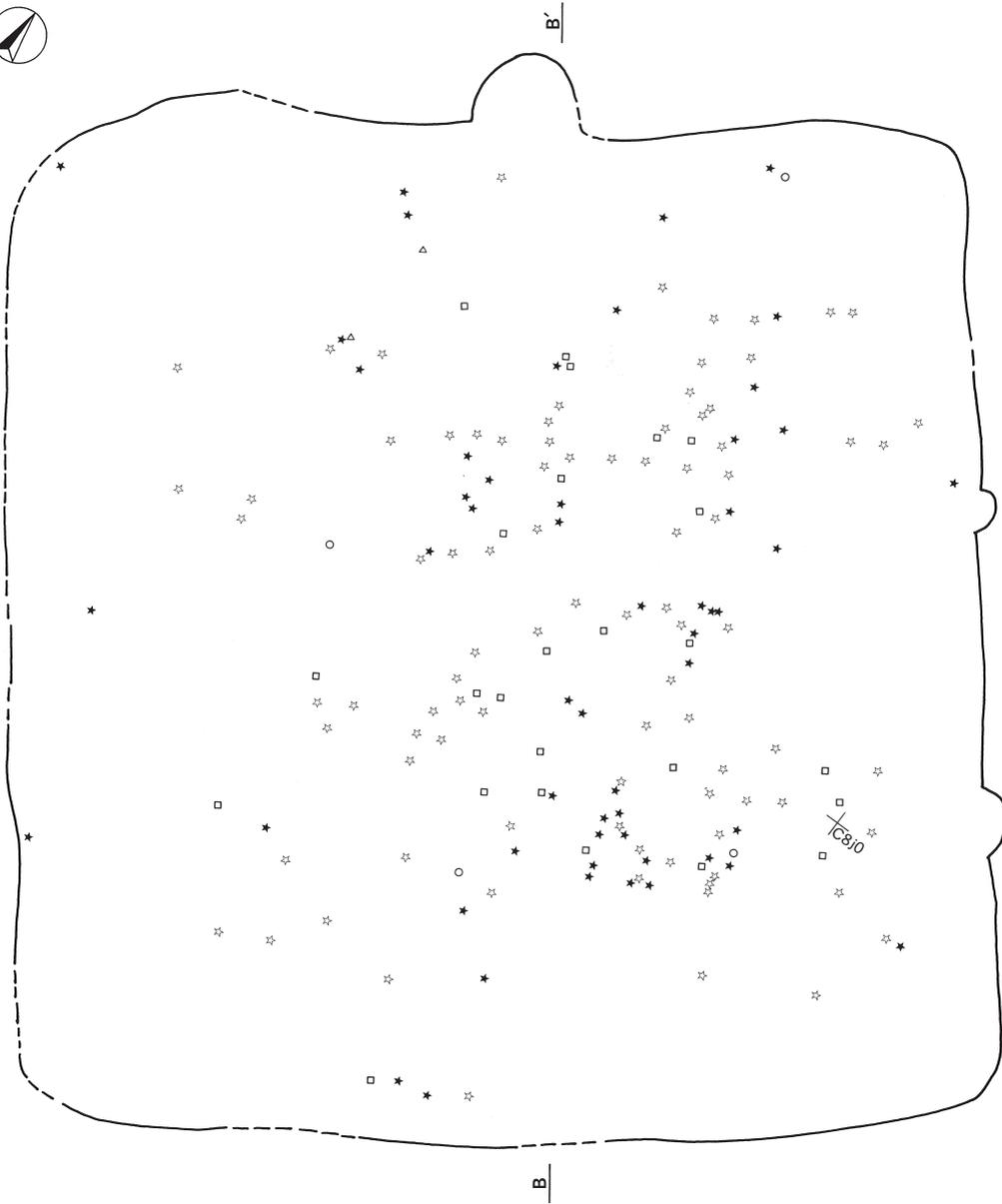
1 黒褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量	5 黒褐色	砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量
2 黒褐色	炭化粒子少量, 焼土ブロック・ローム粒子微量	6 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	7 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
4 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	8 黒褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片2190点（坏570, 高坏9, 器台1, 甕1610）, 須恵器片771点（坏490, 高台付坏33, 盤15, 高盤7, 蓋59, 短頸壺35, 長頸壺11, 有耳壺1, 壺類9, 甕110, 円面硯1）, 手捏土器2点, 土製品6点（支脚2, 不明4）, 石器2点（砥石）, 鉄製品2点（刀子）, 鉄滓2点, 礫55点の他に、流れ込んだ弥生土器片166点や古墳時代の土師器も出土しており、埋没の過程で流れ込んだものと考えられる。土師器片は、覆土上層からの出土はなく、すべてが覆土中層以下からの出土で、特に覆土下層からの出土割合が高く、住居が廃絶された後の早い段階から投棄され始めたものと想定される。中でも、竈付近から北コーナー部にかけて出土している土師器片は、散在はしているが、須恵器片より下層から出土しているものが多く、始めの段階では北側から投棄されたと考えられる。一方、南東コーナー寄りから出土している土師器片は、覆土中層・下層から須恵器片に混じって出土しており、南東コーナー側から投棄されている様子を読み取ることができるとともに、竈付近や北コーナー部からの投棄時期よりやや遅れて投棄され始めたことが想定される。須恵器片は、広範囲に散らばりが認められるが、南西壁側では比較的出土が少ない傾向にある。土師器片同様に、竈付近を中心とする北コーナー側と南東コーナー側に集中地点が認められ、覆土第4層と第2層との層界付近から第1層にかけて出土しており、第4層が堆積した後から投棄され始めたと考えられる。土師器も須恵器のいずれも完形に復元できたものではなく、大部分の土師器や須恵器は近接する位置から出土したものが接合しているが、708・733・735・741のように比較的離れた位置から出土したものや出土層位が違うものが接合している例もあることから、覆土は土器片を投棄する過程で人為的に堆積していることを裏付けている。701は中央部の覆土中層、716はP 1付近の覆土中層、698・699・704・706はP 2付近の覆土中層、700はP 4付近の覆土中層からそれぞれ出土している。718は中央部南東壁寄りの覆土下層、744はP 3付近の覆土下層からそれぞれ出土している。Q114は中央部の床面、M72は竈左側の覆土中層から出土している。

所見 出土遺物は、やや長期間にわたって投棄されたと考えられ、土師器甕は口縁部の形状から8世紀後葉から9世紀初頭の時期と考えられる。また、出土土器の大部分を占める須恵器も器形的な特徴から同時期ものと考えられ、廃絶時期は9世紀以前と考えられる。



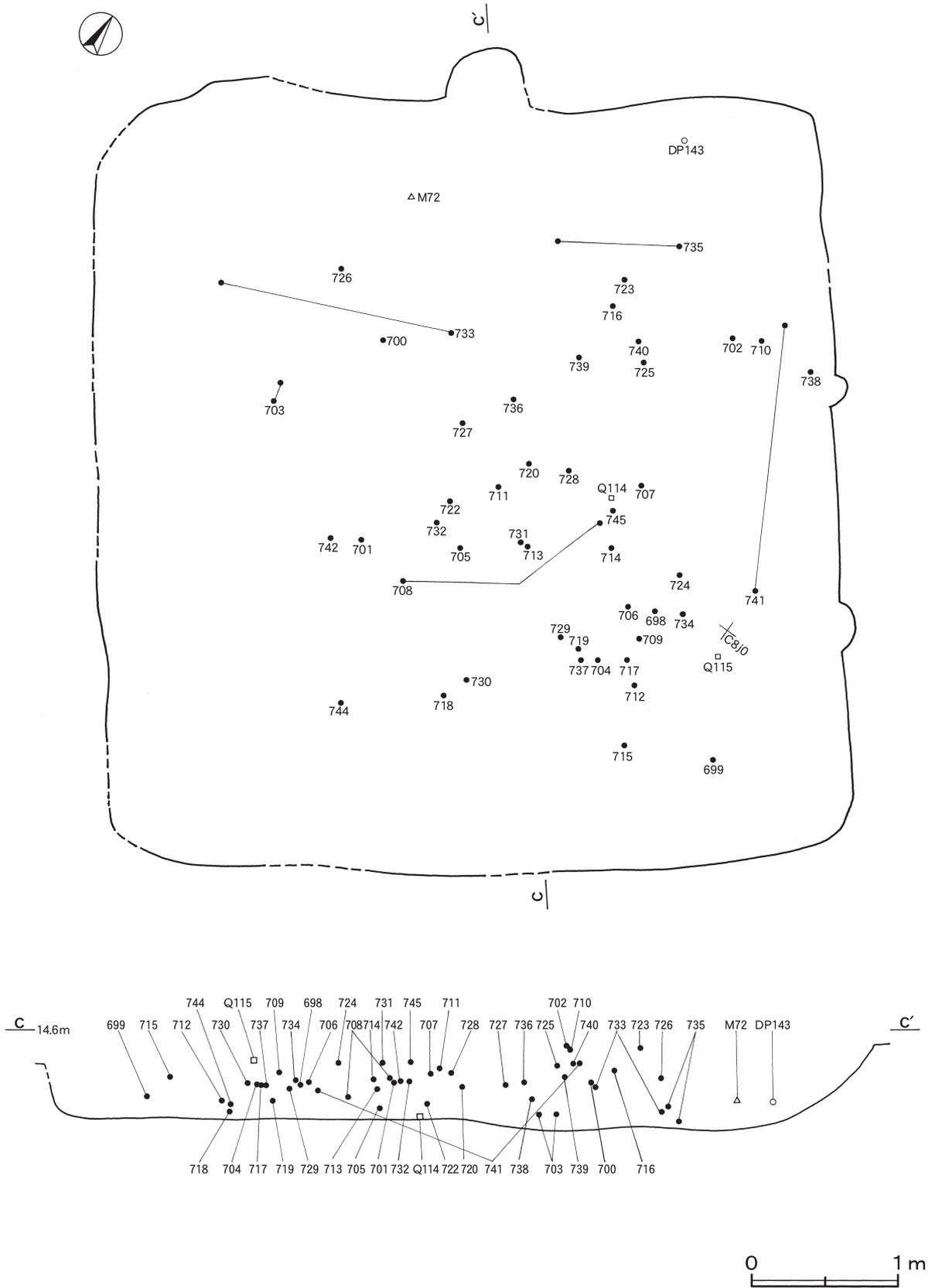
第165图 第118号住居跡実测图(1)



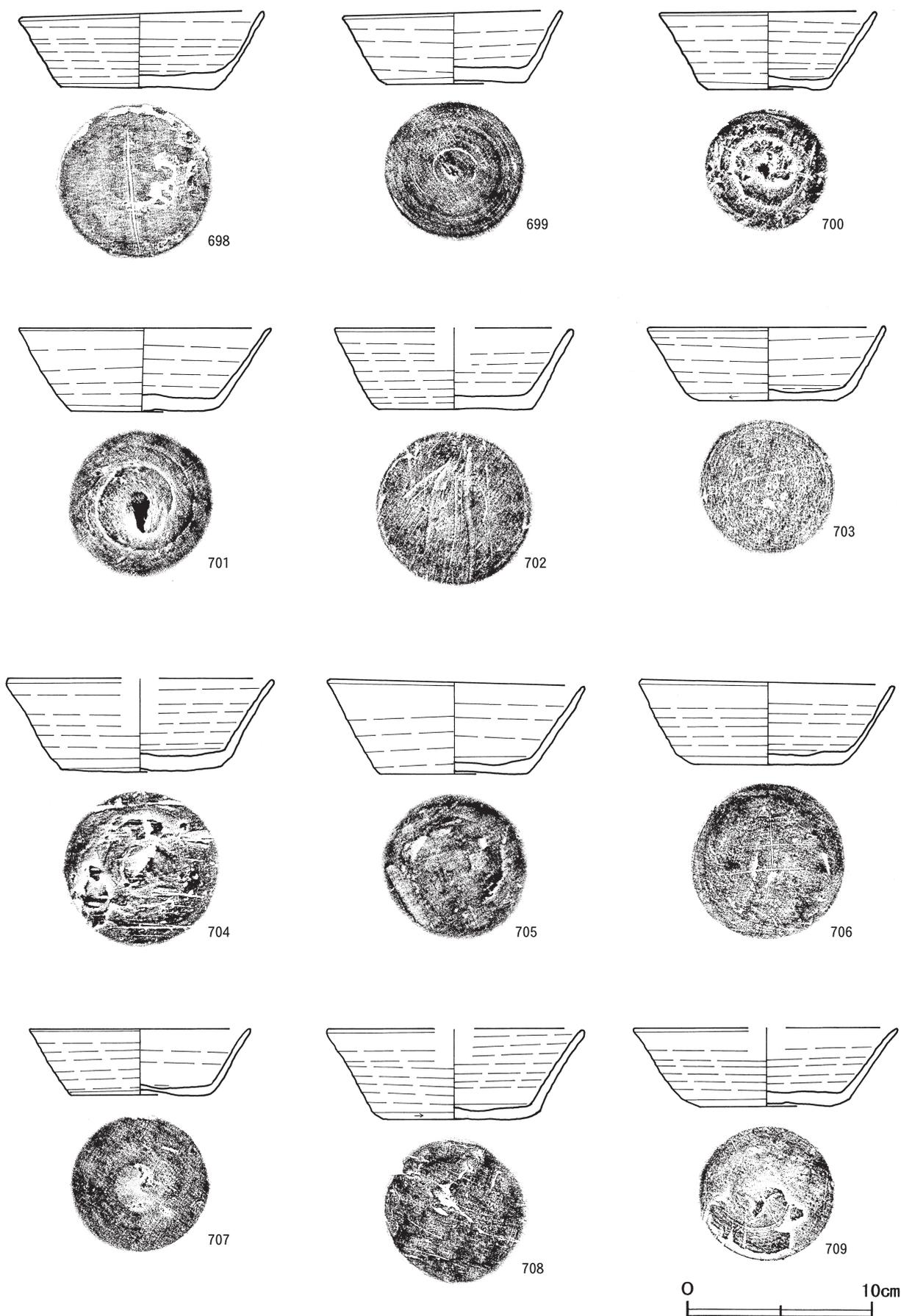
★ 土師器 ☆ 須恵器 ○ 土製品 □ 石器



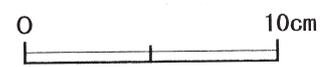
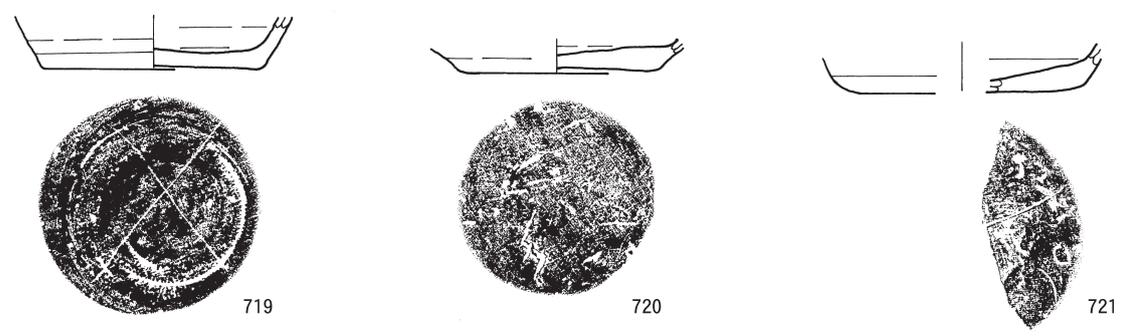
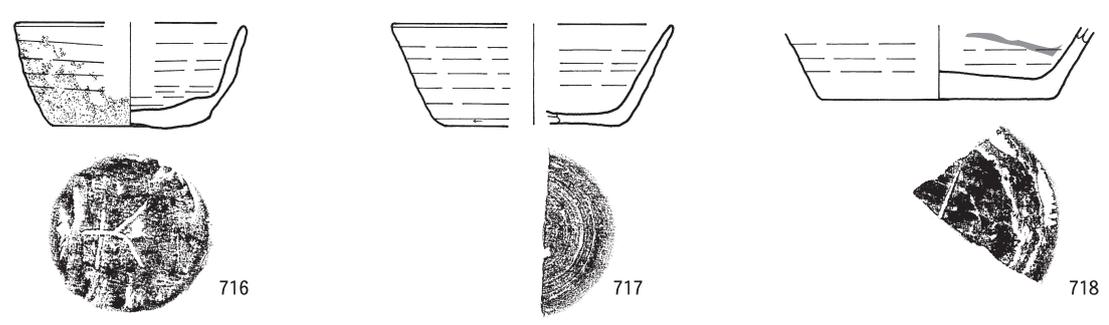
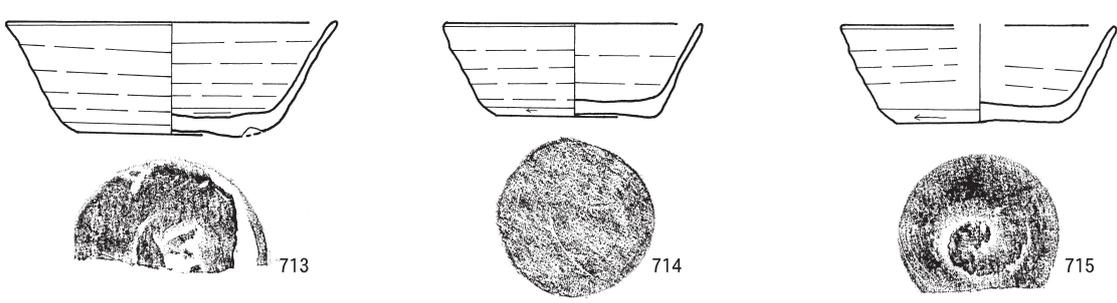
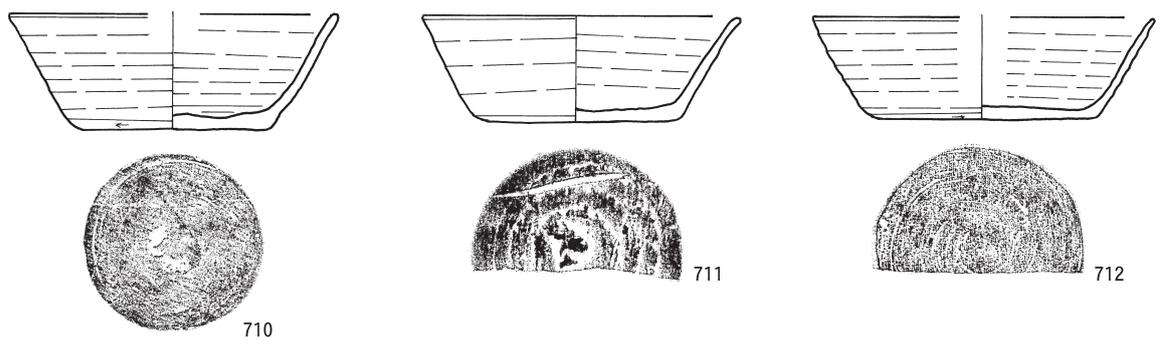
第166図 第118号住居跡実測図(2)



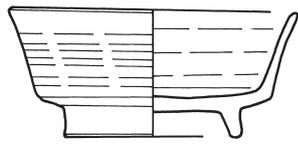
第167图 第118号住居跡実測図(3)



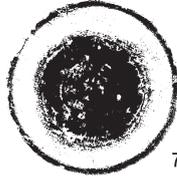
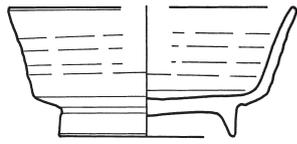
第168图 第118号住居跡出土遺物実測図(1)



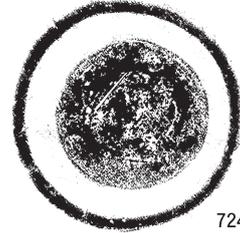
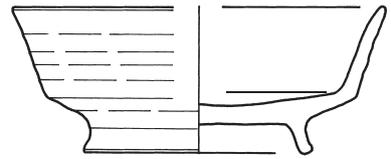
第169図 第118号住居跡出土遺物実測図(2)



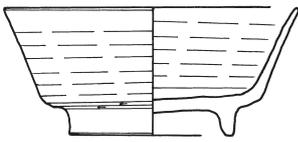
722



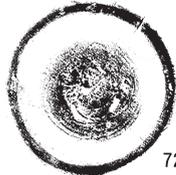
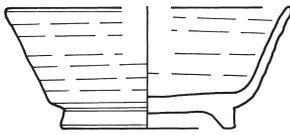
723



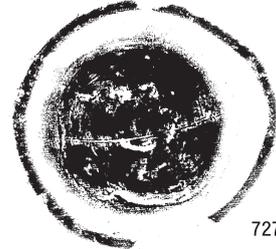
724



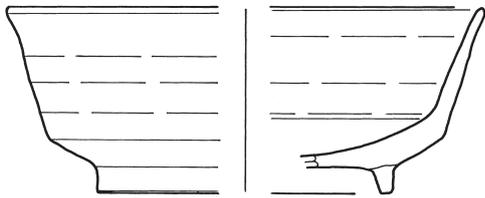
725



726



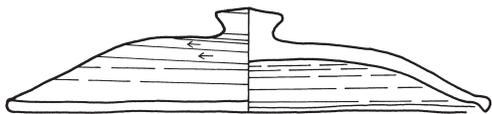
727



728



729



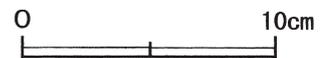
730



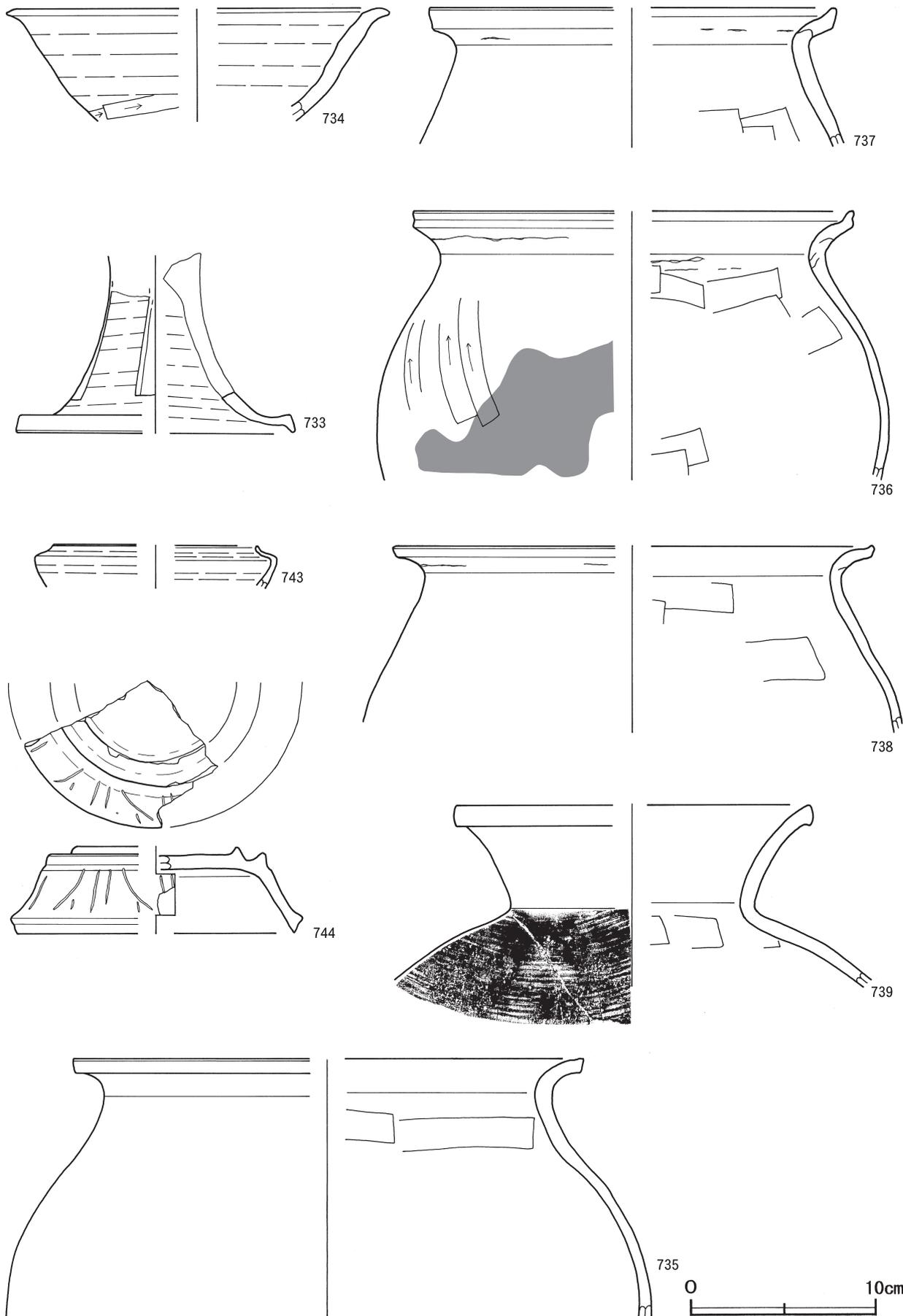
731



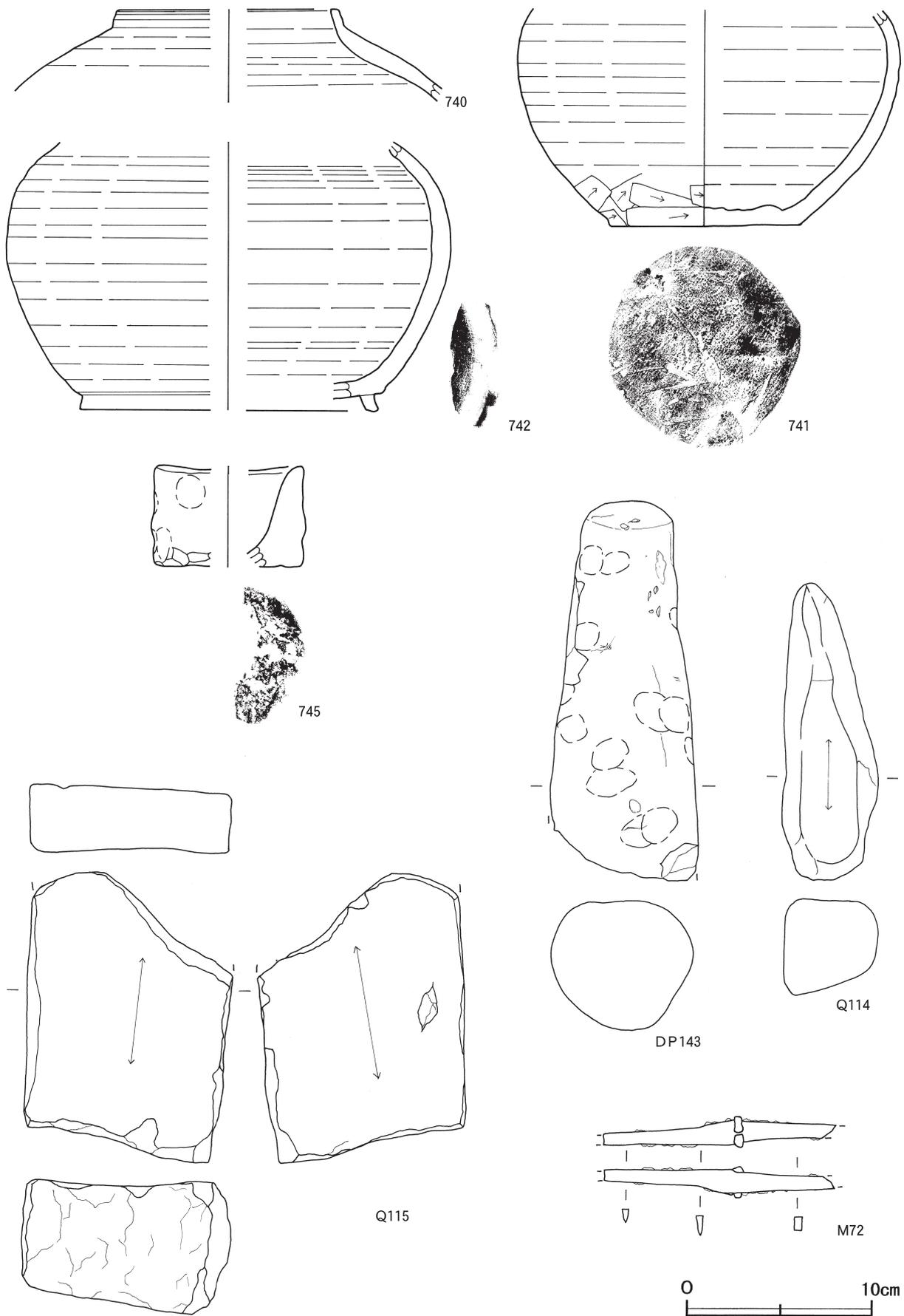
732



第170图 第118号住居跡出土遺物実測図(3)



第171图 第118号住居跡出土遺物実測図(4)



第172图 第118号住居跡出土遺物実測図(5)

第118号住居跡出土遺物観察表(第168～172図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
698	須恵器	坏	13.0	4.2	8.1	長石・石英・針状鉱物	黄灰	良好	底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り	覆土中層	95% 筥書「一」 PL34・37
699	須恵器	坏	11.7	3.9	7.4	長石・石英・針状鉱物	灰	良好	底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り	覆土中層	90% PL34
700	須恵器	坏	11.6	4.2	6.4	長石・石英・針状鉱物	褐灰	良好	底部回転ヘラ切り	覆土中層	80% PL34
701	須恵器	坏	13.5	4.5	7.7	長石・石英・針状鉱物	灰白	良好	底部回転ヘラ切り	覆土中層	80%
702	須恵器	坏	[12.6]	4.5	8.4	長石・石英・針状鉱物	灰白	良好	底部回転ヘラ切り後多方向のヘラ削り	覆土上層	70%
703	須恵器	坏	12.8	4.1	7.2	長石・石英	黄灰	良好	底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り 体部外面下端回転ヘラ削り	覆土中層	80% PL34
704	須恵器	坏	[14.2]	5.0	8.6	長石・石英	灰	良好	底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り	覆土中層	70%
705	須恵器	坏	13.7	5.2	7.8	長石・石英・針状鉱物	灰黄褐	普通	底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り	覆土下層	70%
706	須恵器	坏	13.4	4.6	8.0	長石・石英	黄灰	良好	底部回転ヘラ切り後多方向のヘラ削り	覆土中層	70% 筥書「キ」 PL34・37
707	須恵器	坏	11.9	3.6	7.4	長石・石英・針状鉱物	褐灰	良好	底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土中層	70%
708	須恵器	坏	[13.8]	4.9	7.5	長石・石英	黄灰	良好	底部回転ヘラ切り後多方向のヘラ削り 体部外面下端回転ヘラ削り	覆土中層	60%
709	須恵器	坏	[14.2]	4.2	7.2	長石・石英・針状鉱物	灰	良好	底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り	覆土中層	55%
710	須恵器	坏	[12.8]	4.7	7.2	長石・石英	灰黄	良好	底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り 体部外面下端回転ヘラ削り	覆土上層	55%
711	須恵器	坏	12.6	4.3	8.3	長石・石英・針状鉱物	灰	良好	底部回転ヘラ切り後多方向のヘラ削り	覆土上層	50% 筥書「一」
712	須恵器	坏	[13.6]	4.1	8.4	長石・石英・針状鉱物	灰	良好	底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り 体部外面下端回転ヘラ削り	覆土下層	50%
713	須恵器	坏	13.0	4.6	7.4	長石・石英	黄灰	良好	底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り	覆土中層	50%
714	須恵器	坏	10.1	3.8	6.2	長石・石英	灰黄	良好	底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り 体部外面下端回転ヘラ削り	覆土中層	80% PL34
715	須恵器	坏	[10.8]	3.9	6.4	長石・石英・針状鉱物	灰	良好	底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り 体部外面下端回転ヘラ削り	覆土中層	60%
716	須恵器	坏	[9.0]	4.1	6.3	長石・石英	暗灰黄	良好	底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り 外面降灰による自然釉	覆土中層	60% 筥書「天」 PL34
717	須恵器	坏	[11.0]	4.1	[6.6]	長石・石英	灰	良好	底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り 体部外面下端回転ヘラ削り	覆土中層	40%
718	須恵器	坏	—	(2.9)	[9.2]	長石・石英	暗灰黄	良好	底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り	覆土下層	20% 筥書「一」 内面煤附着
719	須恵器	坏	—	(2.1)	8.8	長石・石英	灰黄褐	良好	底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り	覆土下層	40% 刻書「十」 PL37
720	須恵器	坏	—	(1.3)	8.1	長石・石英・針状鉱物	灰	良好	底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土中層	41% 筥書「山」カ PL37
721	須恵器	坏	—	(2.0)	[9.6]	長石・石英・針状鉱物	灰白	良好	底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り	覆土中	20% 筥書「一」
722	須恵器	高台付坏	11.2	5.1	7.0	長石・石英・針状鉱物	灰	良好	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	覆土下層	70% PL35
723	須恵器	高台付坏	[11.2]	5.1	7.0	長石・石英・針状鉱物	黄灰	良好	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	覆土上層	60% PL35
724	須恵器	高台付坏	[14.6]	5.8	9.0	長石・石英・針状鉱物	灰	良好	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	覆土中層	60% 筥書「一」 PL35
725	須恵器	高台付坏	11.4	5.1	6.4	長石・石英・針状鉱物	灰	良好	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け 体部外面下端回転ヘラ削り	覆土中層	60% PL35
726	須恵器	高台付坏	[11.2]	4.8	6.8	長石・石英・針状鉱物	灰	良好	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	覆土中層	60% PL35
727	須恵器	高台付坏	—	(4.7)	10.2	長石・石英・針状鉱物	灰	良好	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	覆土中層	40% 筥書「一」 PL37
728	須恵器	高台付坏	[18.6]	7.3	[11.6]	長石・石英	褐灰	良好	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	覆土中層	40%
729	須恵器	盤	[21.6]	5.3	13.4	長石・石英	灰	良好	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	覆土中層	50%
730	須恵器	蓋	18.7	4.2	—	長石・石英	褐灰	良好	天井部左回りのヘラ削り	覆土中層	60% PL35
731	須恵器	蓋	[16.2]	3.7	—	長石・石英・針状鉱物	明褐	良好	天井部右回りのヘラ削り	覆土上層	40%
732	須恵器	蓋	[13.2]	3.1	—	長石・石英	灰	良好	天井部に降灰による自然釉 釉だれ	覆土中層	30%
733	須恵器	高盤	—	(9.7)	[14.6]	長石・石英・針状鉱物	灰	良好	脚部にヘラ切りによる透かし4か所	覆土中層 ～下層	30%
734	須恵器	鉢	[19.8]	(6.1)	—	長石・石英・針状鉱物	赤灰	良好	体部外面下位ヘラ削り	覆土中層	20%
735	土師器	甕	[27.2]	(14.1)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ	覆土下層	20%
736	土師器	甕	[23.6]	(14.5)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラナデ 輪積痕	覆土中層	20% 外面煤附着
737	土師器	甕	[21.6]	(7.4)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ 輪積痕	覆土中層	20%
738	土師器	甕	[25.6]	(10.1)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ 輪積痕	覆土下層	15%
739	須恵器	甕	[19.0]	(9.8)	—	長石・石英	にぶい黄褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面横位の平行叩き 内面ヘラナデ	覆土中層	20%
740	須恵器	短頸壺	[11.8]	(5.0)	—	長石・石英	灰	良好	ロクロナデ	覆土上層	20%
741	須恵器	壺	—	(11.8)	10.4	長石・石英	黄灰	良好	底部回転ヘラ削り後多方向のヘラ削り 体部下端ヘラ削り	覆土上層 ～中層	30%
742	須恵器	壺	—	(14.5)	[15.8]	長石・石英	灰	良好	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	覆土中層	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
743	須恵器	短頸壺	[11.0]	(2.3)	—	長石・石英	灰	普通	ロクロナデ	覆土中	10%
744	須恵器	円面硯	[8.6]	4.7	[14.8]	長石・石英	オリーブ黒	良好	体部外面に刻み 自然釉	覆土下層	30% PL34
745	土師器	手捏土器	[7.8]	5.5	[8.0]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内・外面ナデ 指頭痕	覆土上層	40%

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP143	支脚	(20.7)	4.9~(7.7)	(1071.4)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 指頭痕	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q114	砥石	16.1	5.2	5.3	653.4	砂岩	砥面1面	床面	
Q115	砥石	(15.7)	11.3	7.2	(1336.7)	砂岩	砥面2面	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M72	刀子	(12.5)	1.7	0.3~0.4	(15.7)	鉄	刀身の一部 切先・茎尻欠損 縁金具遺存	覆土下層	PL43

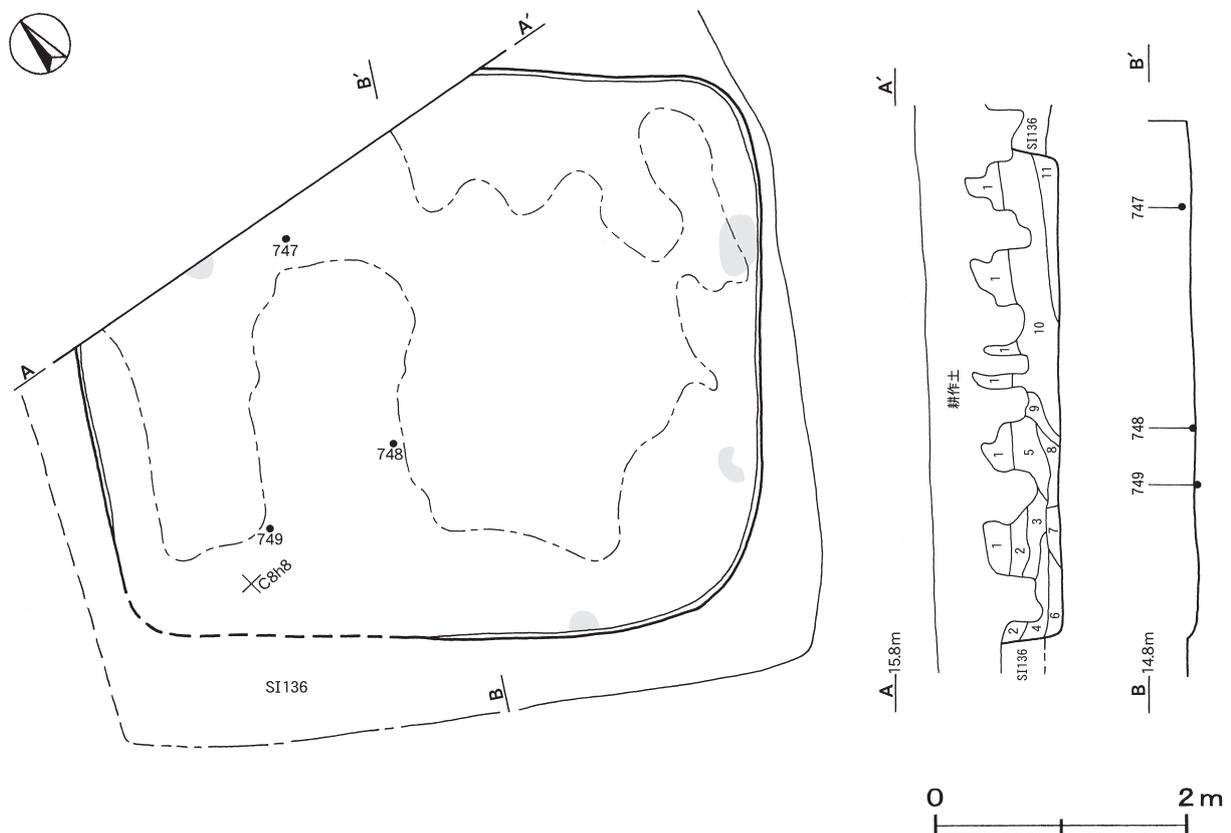
第120号住居跡（第173・174図）

位置 調査区西部のC 8h8区で、標高15.3mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第136号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.39m、短軸4.45m長方形で、主軸方向はN-47°-Wである。壁高は10~51cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部の一部を除いて踏み固められている。



第173図 第120号住居跡実測図

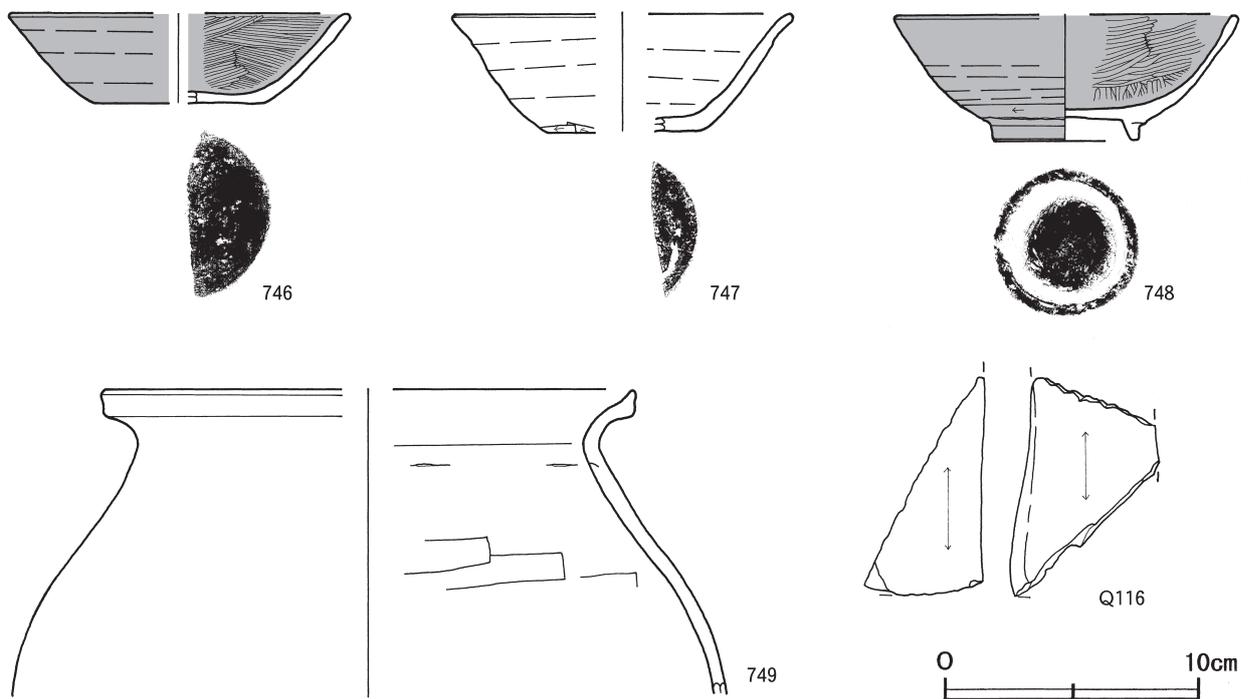
覆土 11層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|--------|---------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | 砂質粘土粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 | 砂質粘土ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 暗褐色 | 砂質粘土粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化物・焼土粒子微量 | 10 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 11 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 6 暗褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量, 炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片281点(坏62, 高台付坏1, 高坏2, 甕216点), 須恵器片28点(坏16, 蓋1, 甕11), 石器1点(砥石), 礫8点の他に, 流れ込んだ弥生土器片54点も出土している。748は中央部の床面から出土している。北側と東側の壁際に焼土が検出され焼失住居の可能性はあるが明確ではない。

所見 時期は, 出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第174図 第120号住居跡出土遺物実測図

第120号住居跡出土遺物観察表(第174図)

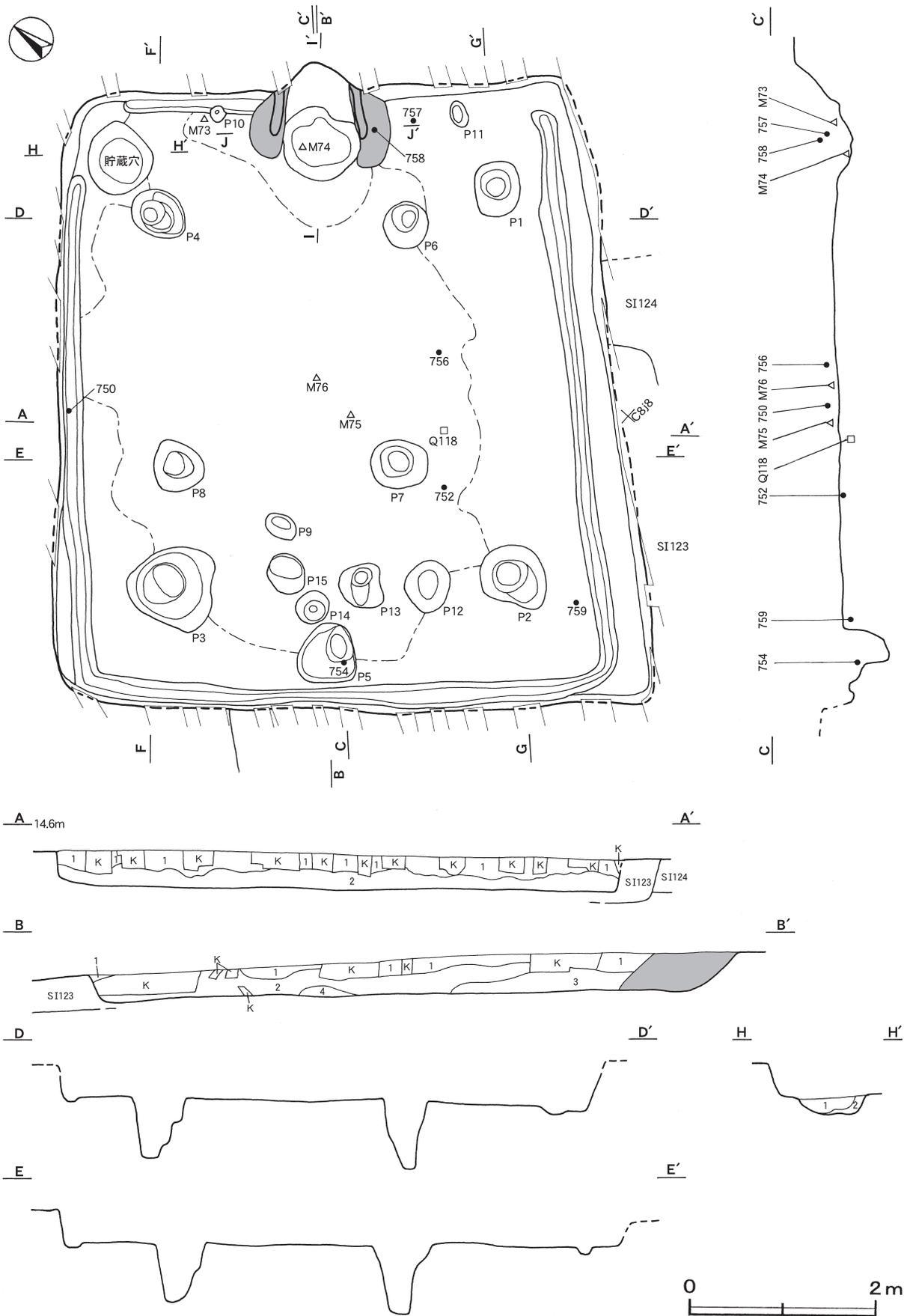
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
746	土師器	坏	[13.2]	3.5	[6.8]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土中	40%
747	須恵器	坏	[13.2]	4.6	[6.0]	長石・石英・雲母・針状鉱物	灰	普通	底部回転ヘラ切り 体部下端手持ちヘラ削り	覆土下層	30% 筥書「□」
748	土師器	高台付坏	[13.3]	4.9	5.6	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼付 内面ヘラ磨き	床面	50%
749	土師器	甕	[20.6]	(12.1)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ 輪積痕	床面	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q116	砥石	(8.6)	(5.8)	(4.7)	(110.5)	凝灰岩	砥面2面	覆土中	

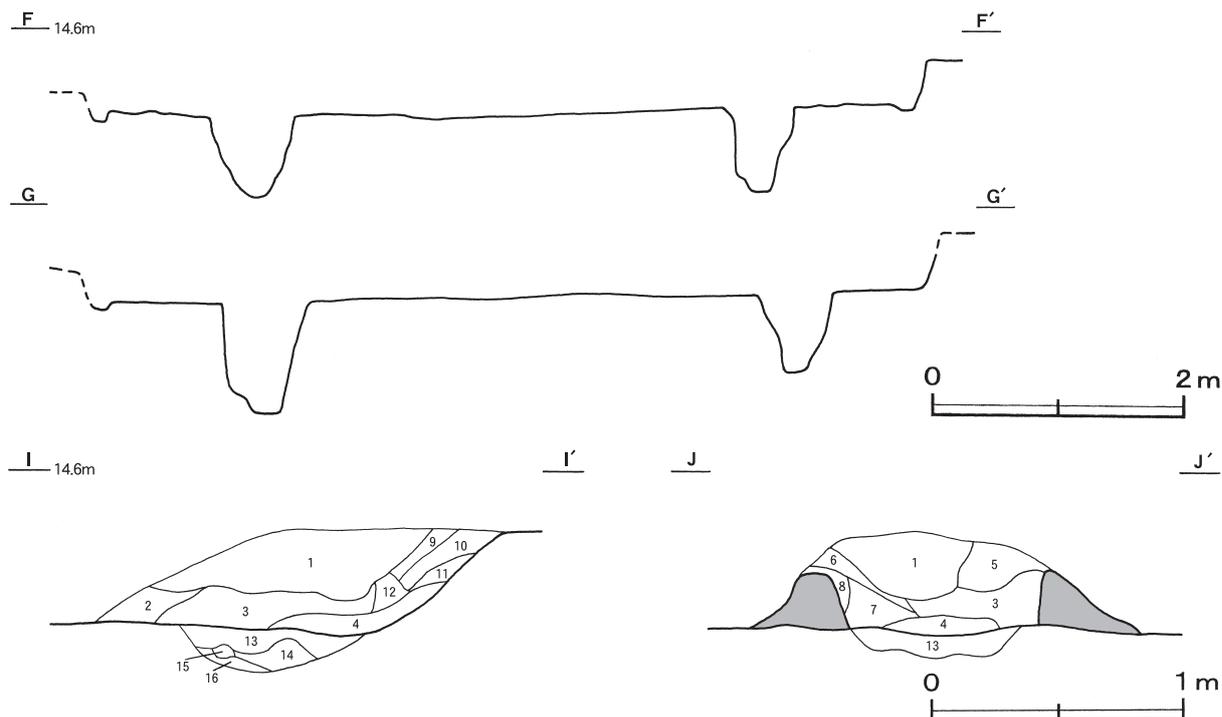
第121号住居跡 (第175~178図)

位置 調査区西部のC 8 i7区で, 標高14.3mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第123・124号住居跡を掘り込んでいる。



第175图 第121号住居跡実測图(1)



第176図 第121号住居跡実測図(2)

規模と形状 長軸6.74m, 短軸5.90mほどの長方形で, 主軸方向はN-49°-Eである。壁高は30~41cmで, 外傾して立ち上がっている。また, 拡張以前の柱穴が検出され, 南東側と南西側の二辺が拡張されている。

床 ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められており, 壁溝はほぼ周回している。

竈 北壁中央部に付設されており, 焚口部から煙道部まで126cmである。袖部幅は153cmほどで, 床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は, 地山面を皿状に掘りくぼめた後, 竈土層第13~16層を充填して使用していたと考えられるが, 赤変や硬化部分は検出されなかった。煙道部は, 壁外へ28cm掘り込まれ, 火床面から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|---------------------------------|---|
| 1 黒褐色 砂質粘土ブロック中量,炭化粒子少量,焼土粒子微量 | 10 黒褐色 炭化物中量, 焼土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 11 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 3 褐灰色 焼土ブロック・炭化粒子少量,砂質粘土粒子微量 | 12 暗褐色 焼土粒子少量,炭化粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 4 にい赤褐色 焼土粒子中量,炭化粒子微量 | 13 にい黄褐色 砂質粘土ブロック多量,ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 14 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量,焼土粒子微量 |
| 6 黒褐色 焼土粒子・砂質粘土粒子少量,炭化粒子微量 | 15 黄褐色 ロームブロック中量,焼土粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 7 暗赤褐色 焼土粒子中量,炭化物・砂質粘土ブロック少量 | 16 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量,焼土ブロック微量 |
| 8 暗赤褐色 砂質粘土粒子少量,焼土ブロック・炭化粒子微量 | |
| 9 暗赤褐色 焼土ブロック中量,砂質粘土ブロック・炭化粒子微量 | |

ピット 15か所。P1~P4は深さ63~88cmで, 配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ46cmで, 配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。また, P6~P8は64~75cmで, 配置から拡張以前の主柱穴と考えられる。P9は深さ32cmで, 配置から拡張以前の出入り口施設に伴うピットと考えられる。P10・P11は深さ42~49cmで, 竈を挟むように北東壁際に位置していることから, 竈の附属施設の柱穴と考えられる。P12~P15は性格は不明である。

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|------------------------------------|-----------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量 | 4 褐色 ロームブロック中量,炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | |
| 3 極暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子少量,炭化物微量 | |

貯蔵穴 北コーナー部に位置し、長径80cm、短径69cmほどの楕円形で、深さは18cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

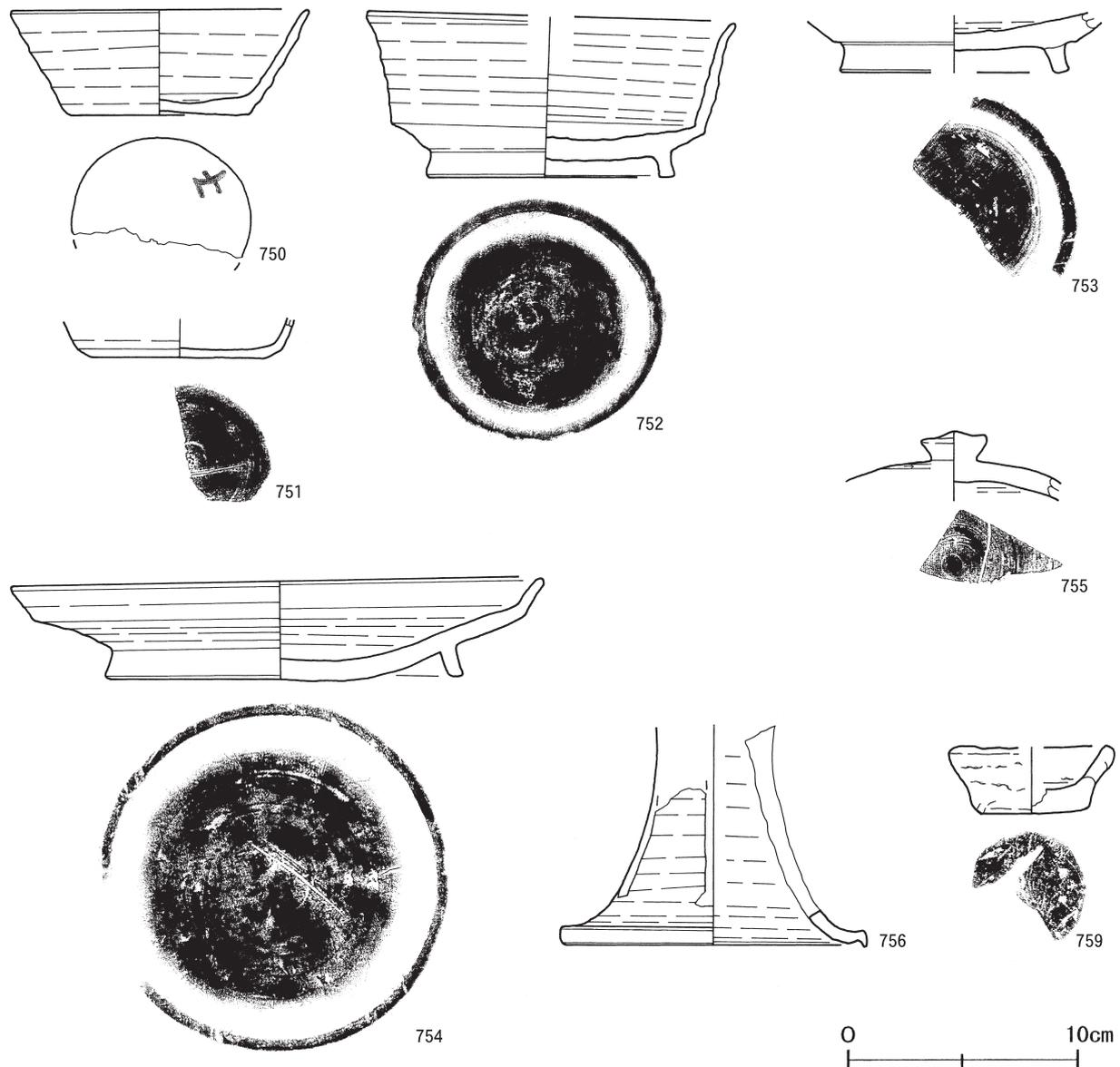
貯蔵穴土層解説

1 極暗褐色 ロームブロック少量

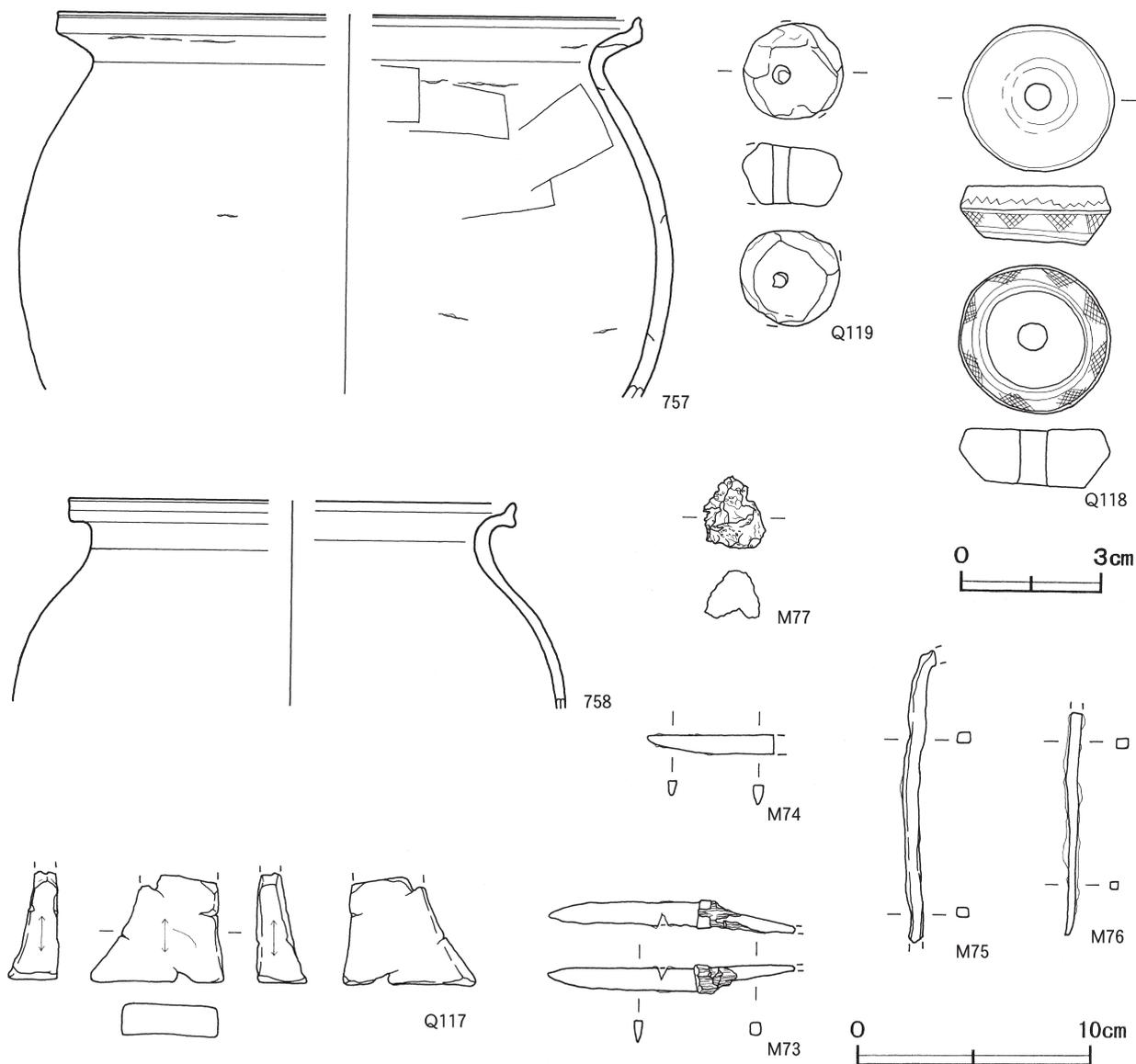
2 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片1181点（坏119, 高坏3, 甕1059）、須恵器片118点（坏89, 高台付坏4, 盤15, 高盤1, 蓋9）、土製品4点（紡錘車1, 支脚3）、石器1点（砥石）、石製品2点（紡錘車）、鉄製品4点（刀子2, 釘2）、鉄滓1点、手捏土器1点、礫21点の他に、流れ込んだ縄文土器片1点、弥生土器片125点、耕作により混入した陶器片1点も出土している。752は中央部の床面、754はP5内からそれぞれ出土している。M73は北東壁際の床面から、M74は竈の火床面からの出土である。Q118は第123号住居跡の調査の際に本跡の掘り方から出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀後半と考えられる。



第177図 第121号住居跡出土遺物実測図(1)



第178図 第121号住居跡出土遺物実測図(2)

第121号住居跡出土遺物観察表(第177・178図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
750	須恵器	坏	12.8	4.7	7.8	長石・石英・針状鉱物	灰黄褐	普通	底部回転ヘラ切り後多方向のヘラ削り	覆土下層	50% 墨書「土」カ PL37
751	須恵器	坏	-	(1.8)	7.6	長石・石英	黄灰	良好	底部回転ヘラ切り後回転ヘラ切り	覆土中	10% 鏡書「一」カ
752	須恵器	高台付坏	15.9	6.8	10.5	長石・石英・針状鉱物	灰	良好	底部回転ヘラ切り後高台貼付	床面	70% PL35
753	須恵器	高台付坏	-	(2.5)	[9.6]	長石・石英	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け 高台部に刻み	覆土中	20%
754	須恵器	盤	23.0	4.6	15.3	長石・石英	灰黄褐	良好	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	P14内	80% 鏡書「一」 PL35
755	須恵器	蓋	-	(3.0)	-	長石・石英	灰黄	良好	天井部右回りのヘラ削り	覆土中	5% 鏡書「一」カ
756	須恵器	高盤	-	(9.6)	13.2	長石・石英・針状鉱物	灰	良好	脚部にヘラ切りによる透かし4か所	覆土下層	30%
757	土師器	甕	[25.0]	(16.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘラナデ 輪積痕	覆土下層	10%
758	土師器	甕	[19.2]	(8.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部内・外面ナデ	覆土下層	10%
759	土師器	手捏土器	[6.6]	2.9	4.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰黄褐	普通	内・外面ナデ 輪積痕	床面	50% PL36

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q117	砥石	(4.7)	5.8	1.4	(52.6)	凝灰岩	砥面3面		掘り方

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q118	紡錘車	3.2	0.5	1.8	22.0	滑石	両面及び側面に線刻有り 両方向からの穿孔	掘り方	PL40
Q119	紡錘車	(4.4)	0.6~0.8	(2.7)	(57.7)	安山岩	自然面を利用して加工 両方向からの穿孔	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M73	刀子	(10.6)	(1.4)	0.4~0.5	(7.5)	鉄	茎尻欠損 緑金具遺存 茎の一部に木質遺存	床面	PL43
M74	刀子	(5.5)	0.9	0.4~0.5	(3.8)	鉄	刀身の一部	竈内	
M75	釘	(12.6)	0.8	0.5	(13.3)	鉄	断面は方形の棒状 角釘カ	覆土下層	
M76	釘	(9.6)	0.5	0.4	(9.6)	鉄	断面は方形の棒状 角釘カ	覆土下層	
M77	鉄滓	3.1	2.6	2.0	17.8	鉄	表面は暗赤褐色 凹凸有り	覆土中	

表5 奈良時代・平安時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設						覆土	主な出土遺物	時期	新旧関係 (旧→新)
							壁溝	主柱穴	出入口	ピット	竈	貯蔵穴				
74	D10f2	N-120°-E	[方形]	(3.10 × 2.50)	4	平坦	—	—	—	—	1	—	自然	土師器	9世紀代	
76	D10e1	N-0°	[方形]	3.24 × 3.08	11~30	平坦	—	—	—	—	1	—	自然	土師器, 須恵器	9世紀中葉	
78	D9a0	N-37°-W	長方形	4.93 × 3.45	10~24	平坦	—	—	—	—	1	1	自然	土師器, 土師質土器, 鉄製品, 銅製品, 石器, 礫	10世紀後半	
104	D9d3	N-157°-W	長方形	4.00 × 3.30	18~42	平坦	—	—	—	—	1	—	人為	土師器	10世紀前半	SI101→本跡→SK173
107	D8b0	N-71°-E	[方形]	2.55 × 2.50	12	平坦	—	—	—	—	1	—	自然	土師器, 土師質土器	10世紀後半	SI109-110→本跡→PG6
109	D8a0	N-46°-E	長方形	3.72 × 3.22	9~14	平坦	—	—	—	—	1	—	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 石器, 鉄製品	9世紀後半	SI110→本跡→SI107-PG6
110	D8a0	N-8°-W	方形	4.70 × 4.61	45~65	平坦	ほぼ全周	8	1	2	2	—	自然	土師器, 須恵器, 土製品, 石器, 鉄製品	8世紀後半	SI112→本跡→SI107-109
111	C9j2	N-49°-E	方形	7.08 × 6.88	18~65	平坦	一部	10	1	13	1	—	人為	土師器, 須恵器, 土製品, 鉄製品, 鉄滓, 礫	8世紀後半	SI112→本跡
118	C8i9	N-38°-W	方形	5.40 × 5.18	35~60	平坦	—	4	—	4	1	—	人為	土師器, 須恵器, 手捏土器, 土製品, 石器, 鉄製品, 鉄滓, 礫	9世紀以前	SI116-119→本跡
120	C8h8	N-47°-W	長方形	5.39 × 4.45	10~51	平坦	—	—	—	—	—	—	自然	土師器, 須恵器, 石器, 礫	9世紀中葉	SI136→本跡
121	C8i7	N-49°-E	長方形	6.74 × 5.90	30~41	平坦	ほぼ全周	7	2	6	1	1	自然	土師器, 須恵器, 手捏土器, 土製品, 石器, 石製品, 鉄製品, 鉄滓, 礫	8世紀後半	SI123-124→本跡

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第179図)

位置 調査区西部のD9C2区で、標高14.4mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

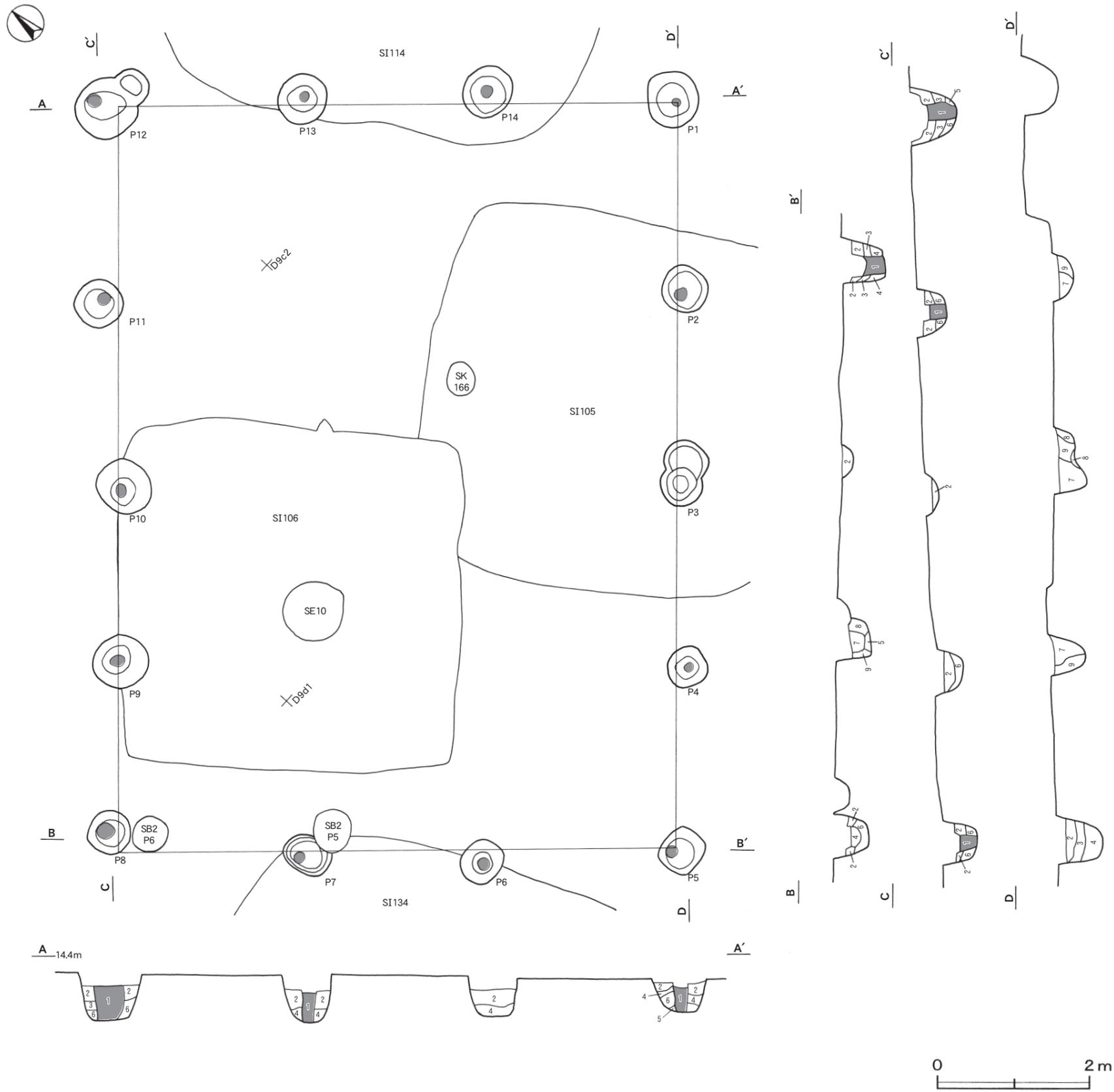
重複関係 第105・106・114・134号住居跡を掘り込み、第2号掘立柱建物、第10号井戸、第166号土坑、第6号ピット群に掘り込まれている。

規模と構造 桁行4間、梁行3間の側柱建物跡で、桁行方向N-48°-Eの東西棟である。規模は、桁行9.68m(32尺)、梁行7.26m(24尺)で、柱間寸法は桁行・梁行ともに2.42m(8尺)である。なお、桁行・梁行ともに柱筋の通りが悪い。

柱穴 14か所。平面形は円形を基調とし、深さは48~64cmである。土層の第1層が柱痕跡に相当し、締まりの弱い黒褐色土である。第2~7層は掘り方の埋土で、ローム土を主体とした褐色系の土であるが、強く突き固めた痕跡は認められない。その他の層は柱抜き取り後の覆土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量, ロームブロック・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 | 9 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化物微量 |
| 5 褐色 | ロームブロック少量 | | |



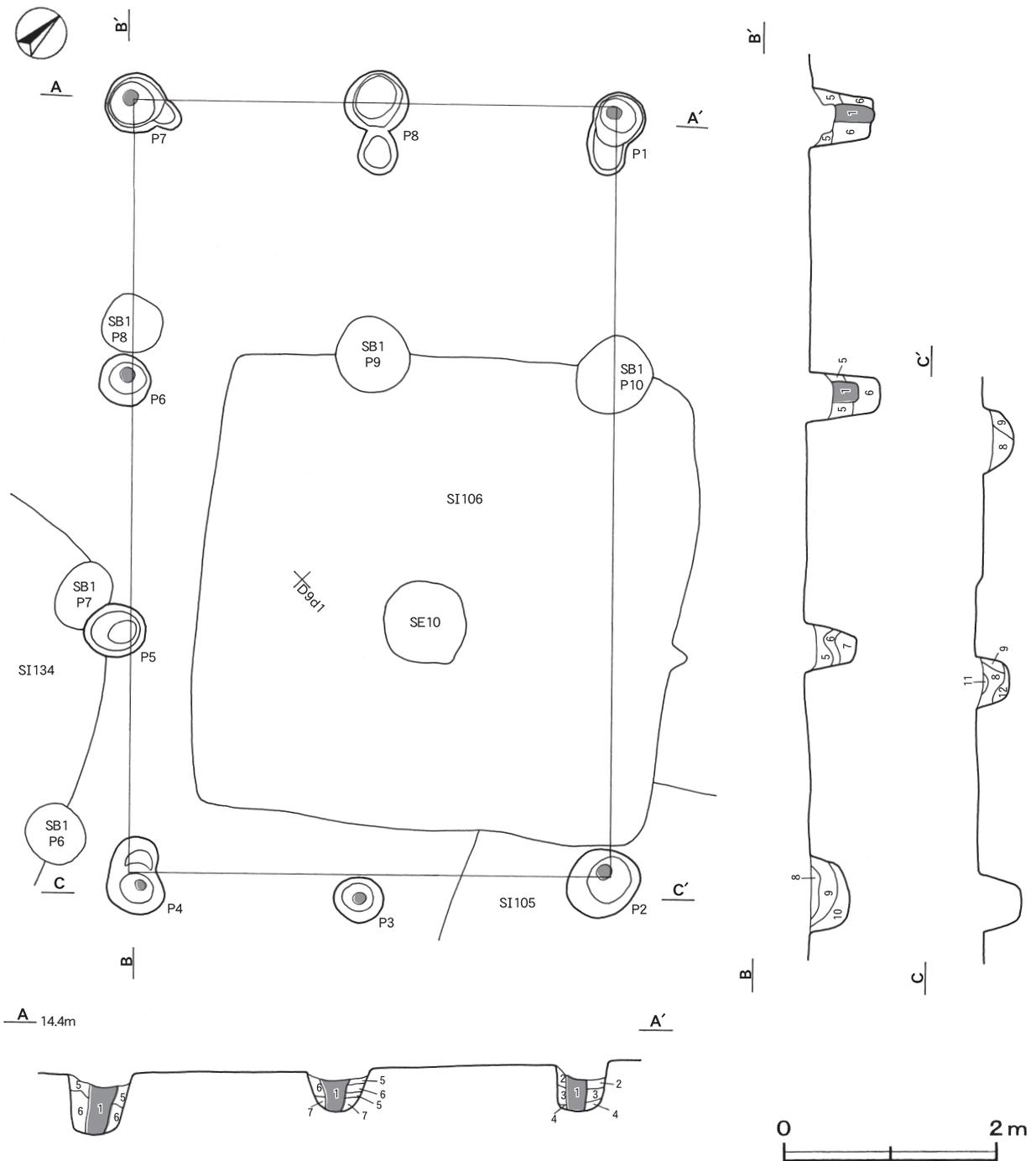
第179图 第1号掘立柱建物跡実測図

遺物出土状況 弥生土器片32点，土師器片53点，須恵器片5点が出土しているが，いずれも細片のため図示することはできない。

所見 第2号掘立柱建物に掘り込まれているが，時期判断できる遺物が出土していないため明確ではないが，8～9世紀代と想定される。

第2号掘立柱建物跡 (第180図)

位置 調査区西部のD 8 c0区で，標高14.1mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。



第180図 第2号掘立柱建物跡実測図

重複関係 第105・106・134号住居跡，第1号掘立柱建物跡を掘り込み，第10号井戸，第6号ピット群に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間，梁行2間の側柱建物跡で，桁行方向N-46°-Wの南北棟である。規模は，桁行7.26m(24尺)，梁行4.54m(15尺)で，柱間寸法は，桁行2.42m(8尺)，梁行2.27m(7.5尺)である。南妻筋の通りが悪いが，その他はほぼ柱筋が通っている。

柱穴 8か所。平面形は円形を基調とし，深さは36~71cmである。土層は第1層が柱痕跡に相当し，締まりの弱い黒褐色土である。第2~7層は掘り方の埋土で，ローム土を主体とした褐色系の土であるが，強く突き固めた痕跡は認められない。その他の層は柱抜き取り後の覆土である。

土層解説

- | | |
|------------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量 | 7 黒褐色 ロームブロック少量，炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量 | 8 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック少量 | 9 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 4 にぶい褐色 ロームブロック少量 | 10 黒褐色 ロームブロック微量 |
| 5 褐色 ロームブロック少量 | 11 黒褐色 炭化粒子少量，ロームブロック微量 |
| 6 暗褐色 ロームブロック少量，炭化粒子微量 | 12 暗褐色 ロームブロック中量，炭化粒子微量 |

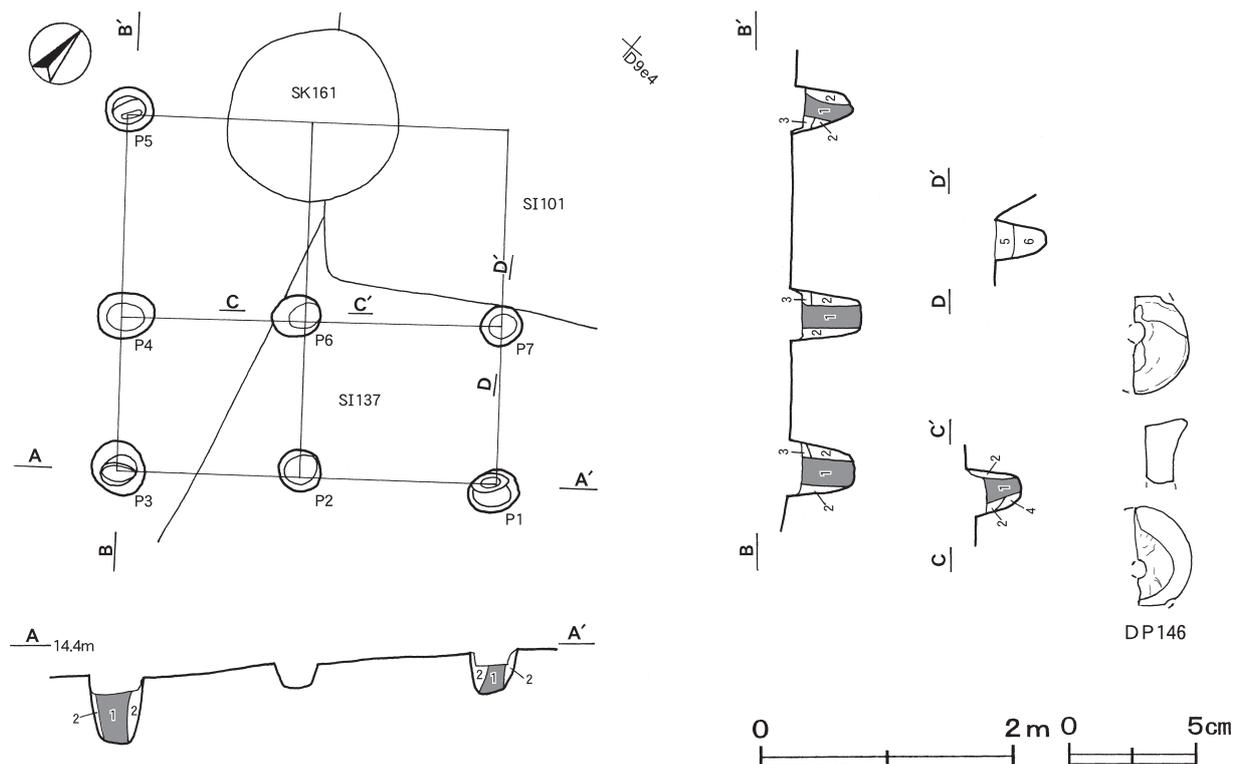
遺物出土状況 弥生土器片2点，土師器片5点，須恵器片1点が出土しているが，いずれも細片のため図示することはできない。

所見 第1号掘立柱建物跡を掘り込んでいるが，時期判断できる遺物が出土していないため明確ではないが，8~9世紀代と想定される。

第3号掘立柱建物跡 (第181図)

位置 調査区西部のD9e3区で，標高14.4mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第101・137号住居跡を掘り込み，第161号土坑に掘り込まれている。



第181図 第3号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

規模と構造 確認できた桁行・梁行は2間の総柱建物である。桁行方向N-48°-Eの東西棟である。規模は桁行3.02m(10尺)、梁行2.87m(9.5尺)で、柱間寸法は桁行1.51m(5尺)、梁行は南間1.21m(4尺)、北間1.51m(5尺)で、南の柱間が狭い。おおむね桁行・梁行ともに柱筋が通っている。

柱穴 7か所。平面形は円形を基調とし、深さは21~59cmである。土層は第1層が柱痕跡に相当し、締まりの弱い黒褐色土である。第2~4層は掘り方の埋土で、ローム土を主体とした褐色系の土であるが、強く突き固めた痕跡は認められない。その他の層は、柱抜き取り後の覆土である。

土層解説

- | | | | |
|--------|--------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片2点、須恵器片1点、土製品1点(紡錘車)が出土している。DP146はP6の埋土中から出土している。その他の土器片は細片のため図示することはできない。

所見 他の掘立柱建物跡とは異なる小形の総柱建物跡であるが、時期判断できる遺物が出土していないため明確ではないが、第1・2号掘立柱建物跡と時期差がない8~9世紀代と想定される。

第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第181図)

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP146	紡錘車	[4.4]	[0.8]	(2.5)	(14.5)	土(長石・石英・雲母)	丁寧なナデ	P6埋土中	

表6 掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数 桁×梁(間)	規模 桁×梁(m)	面積 (㎡)	桁行柱間 (m)	梁行柱間 (m)	柱穴(cm)				主な出土遺物	備考 (新旧関係・時期など)
								構造	柱穴数	平面形	深さ		
1	D9c2	N-48°-E	4×3	9.68×7.26	70.27	2.42	2.42	側柱	14	円形	48~64	弥生土器, 土師器, 須恵器	SI105・106・114・134→本跡→SB2・SE10・SK166・PG6
2	D8c0	N-46°-W	3×2	7.26×4.54	32.96	2.42	2.27	側柱	8	円形	36~71	弥生土器, 土師器, 須恵器	SI105・106・134・SB1→本跡→SE10・PG6
3	D9e3	N-48°-E	(2×2)	(3.02×2.87)	(8.66)	1.51	1.21(南) 1.51(北)	総柱カ	7	円形	21~59	土師器, 須恵器, 土製品	SI101・137→本跡→SK161

5 近世の遺構と遺物

今回の調査では、中位段丘上から近世の墓坑2基の他に井戸跡4基が確認された。以下、遺構と遺物について記載する。

なお、墓坑については既に報告されている『茨城県教育財団文化財調査報告書第216集 大戸下郷遺跡』(以下、『大戸下郷遺跡1』と略す)の判断基準に従い「底面や壁面に粘土が貼られているもの、土層中に粘土を多く含んでいるもの」を墓坑と判断した。

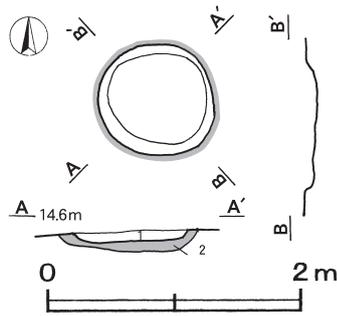
(1) 墓坑

第21号墓坑(第182図)

位置 調査区西部のD9f4区で、標高14.5mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第99・137号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.96m、短径0.90mの円形で、深さは8cmである。壁は外傾して立ち上がっており、底面は平坦で、粘土が貼り付けられている。



第182図 第21号墓坑実測図

覆土 単一層であるため、堆積状況は不明である。第2層は貼り付けられた粘土層である。

土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子微量 礫中量
- 2 にぶい黄色 粘土ブロック多量、ローム粒子微量

所見 底面に粘土が貼られていることから墓坑の可能性はある。時期は、遺物が出土していないため明確ではないが、『大戸下郷遺跡1』で報告されている墓坑と特徴が似ていることから近世以降と考えられる。

第22号墓坑 (第183図)

位置 調査区西部のD 8 a7区で、標高14.0mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第122号住居跡を掘り込んでいる。

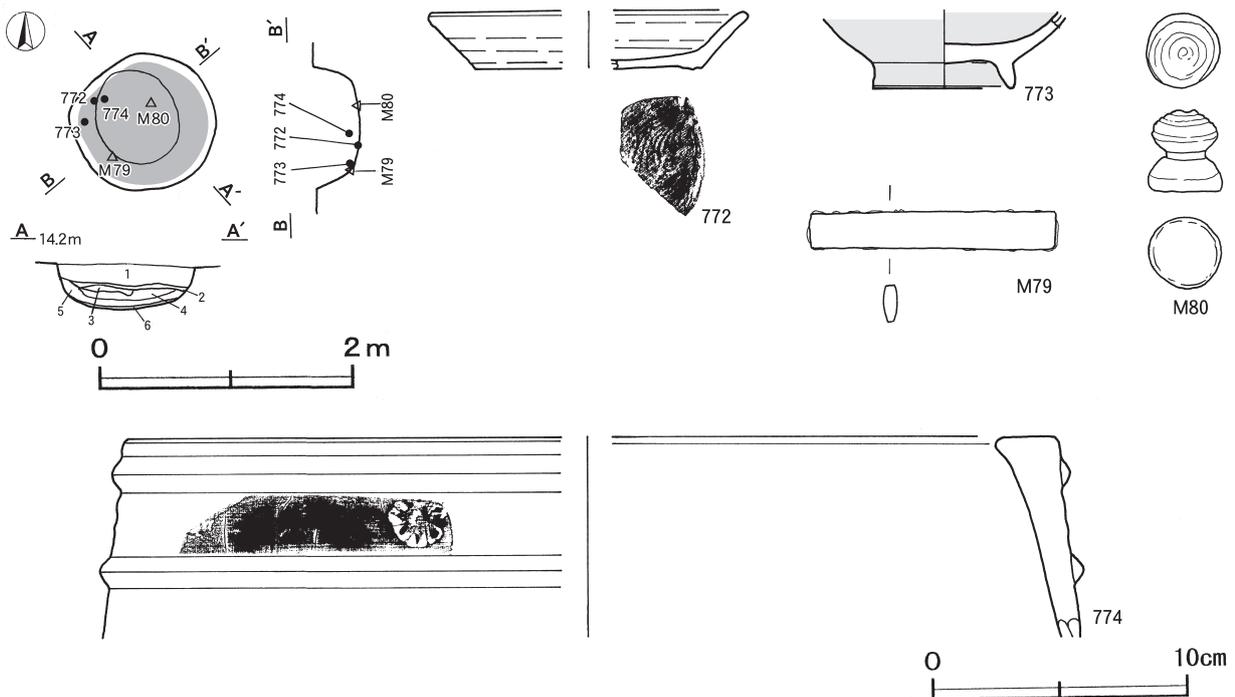
規模と形状 長径1.10m、短径1.09mの円形で、深さは35cmである。壁は外傾して立ち上がっており、底面は中央部が緩やかにくぼみ粘土が貼り付けられている。

覆土 6層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。第6層は底面に貼り付けられた粘土層である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 3 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量、炭化物・ローム粒子少量
- 4 暗褐色 炭化物・ローム粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 灰オリーブ色 粘土多量、砂粒少量、ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 陶器片1点(丸碗), 土師質土器片2点(小皿), 瓦質土器片7点(火舎), 銅製品2点(小柄, 分銅), 骨片2点(部位不明), 礫66点の他に、混入した土師器片5点, 須恵器片2点も出土している。772・774, M



第183図 第22号墓坑・出土遺物実測図

80はやや北寄り，773はやや西寄り，M79は南寄りからそれぞれ出土しており，いずれも底面に密着した状態で出土している。骨片も同様にやや南寄りの位置から出土しているが，細片のため図示することはできない。骨粉も中央部から検出されている。

所見 底面に粘土が貼られており，また骨片や骨粉が検出されたことから墓坑と判断した。時期は，出土陶器が17世紀後半に位置づけられることから，それ以降と考えられる。

第22号墓坑出土遺物観察表(第183図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
772	土師質土器	小皿	[12.4]	2.3	[8.8]	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	底部回転糸切り 内・外面ナデ	覆土中	15%
774	瓦質土器	火舎	[36.8]	(8.0)	—	長石・石英・雲母	褐灰	普通	2条の隆帯 隆帯間に花文刻印	底面	10%
773	陶器	碗	—	(3.1)	5.5	砂粒	淡黄	良好	畳付以外全面に透明釉 細かい貫入	底面	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M79	小柄	9.6	1.6	0.5	24.4	銅	調整不明	底面	

番号	器種	高さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M80	分銅	3.3	3.0	2.9	96.6	銅	上部に3条の沈線	底面	PL43

表7 墓坑一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
21	D9f4	N-0°	円形	0.96×0.90	8	外傾	平坦	人為	—	SI99・137→本跡
22	D8a7	N-0°	円形	1.10×1.09	35	外傾	平坦	人為	陶器, 土師質土器, 瓦質土器, 小柄, 分銅, 骨	SI122→本跡

(2) 井戸跡

第7号井戸跡(第184図)

位置 調査区西部のD9f5区で，標高14.5mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

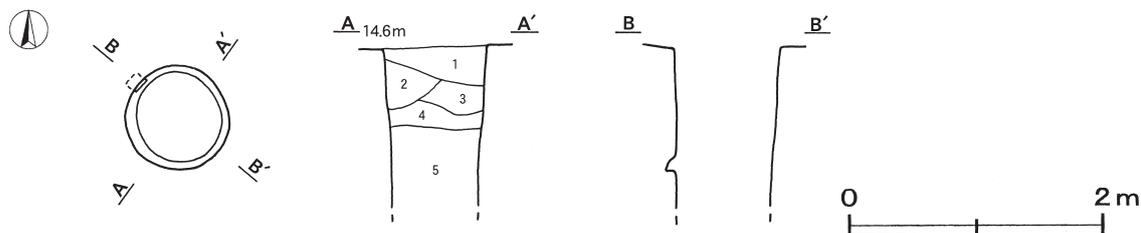
重複関係 第99号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.83m，短径0.80mの円形の素掘り井戸で，確認された深さは125cmであるが底面までは調査できなかった。壁は直立しており，壁面に足場穴が1か所確認された。

覆土 5層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 細礫少量，ロームブロック微量 | 4 黒褐色 ロームブロック・細礫微量 |
| 2 極暗褐色 細礫少量，ローム粒子微量 | 5 褐色 細礫中量，ロームブロック・砂粒少量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック少量，細礫微量 | |



第184図 第7号井戸跡実測図

所見 遺物が出土していないため、時期は不明であるが、規模や形状がほぼ同じである第10号井戸跡が近世であることから、同時期と考えられる。

第8号井戸跡 (第185図)

位置 調査区西部のD 9 a2区で、標高14.5mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

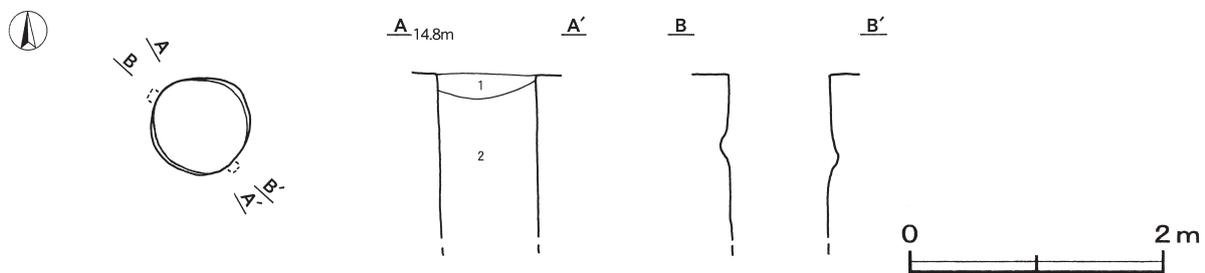
規模と形状 長径0.80m、短径0.78mの円形の素掘り井戸で、確認された深さは126cmであるが底面までは調査できなかった。壁は直立しており、足場穴が2か所確認された。

覆土 2層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック・細礫・焼土粒子・ 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・小礫少量、炭化粒子微量

所見 遺物が出土していないため、時期及び性格は不明であるが、規模や形状がほぼ同じである第10号井戸跡が近世であることから、同時期と考えられる。



第185図 第8号井戸跡実測図

第9号井戸跡 (第186図)

位置 調査区西部のD 8 c7区で、標高13.7mほどの中位段丘上に位置している。

重複関係 第127号住居跡を掘り込んでいる。

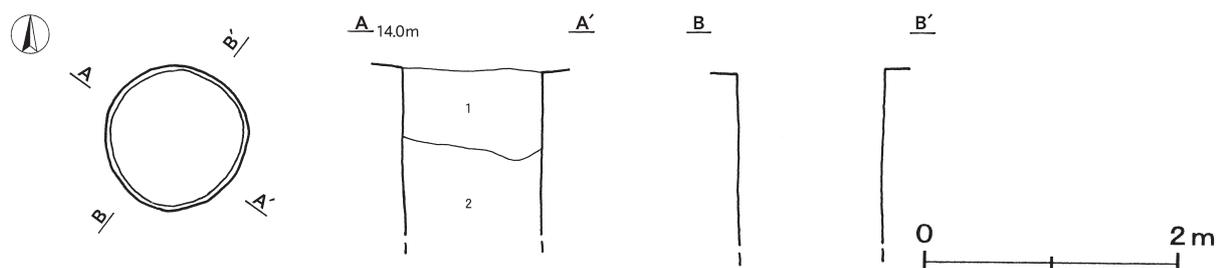
規模と形状 長径1.14m、短径1.10mの円形の素掘り井戸で、確認された深さは135cmほどであるが底面までは調査できなかった。壁は直立して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。ロームブロックや粘土ブロックを含む人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物・細礫微量 2 濃い黄褐色 砂粒多量、細礫中量、ロームブロック少量、粘土ブロック微量

所見 遺物が出土していないため、時期及び性格は不明であるが、形状がほぼ同じである第10号井戸跡が近世であることから、同時期と考えられる。



第186図 第9号井戸跡実測図

第10号井戸跡 (第187・188図)

位置 調査区西部のD9c1区で、標高14.1mほどの中位段丘上の南西斜面部に位置している。

重複関係 第106号住居跡、第1・2号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.80m、短径0.78mの円形の素掘り井戸で、確認された深さは190cmほどであるが底面までは調査できなかった。壁は直立しており、足場穴が2か所確認された。

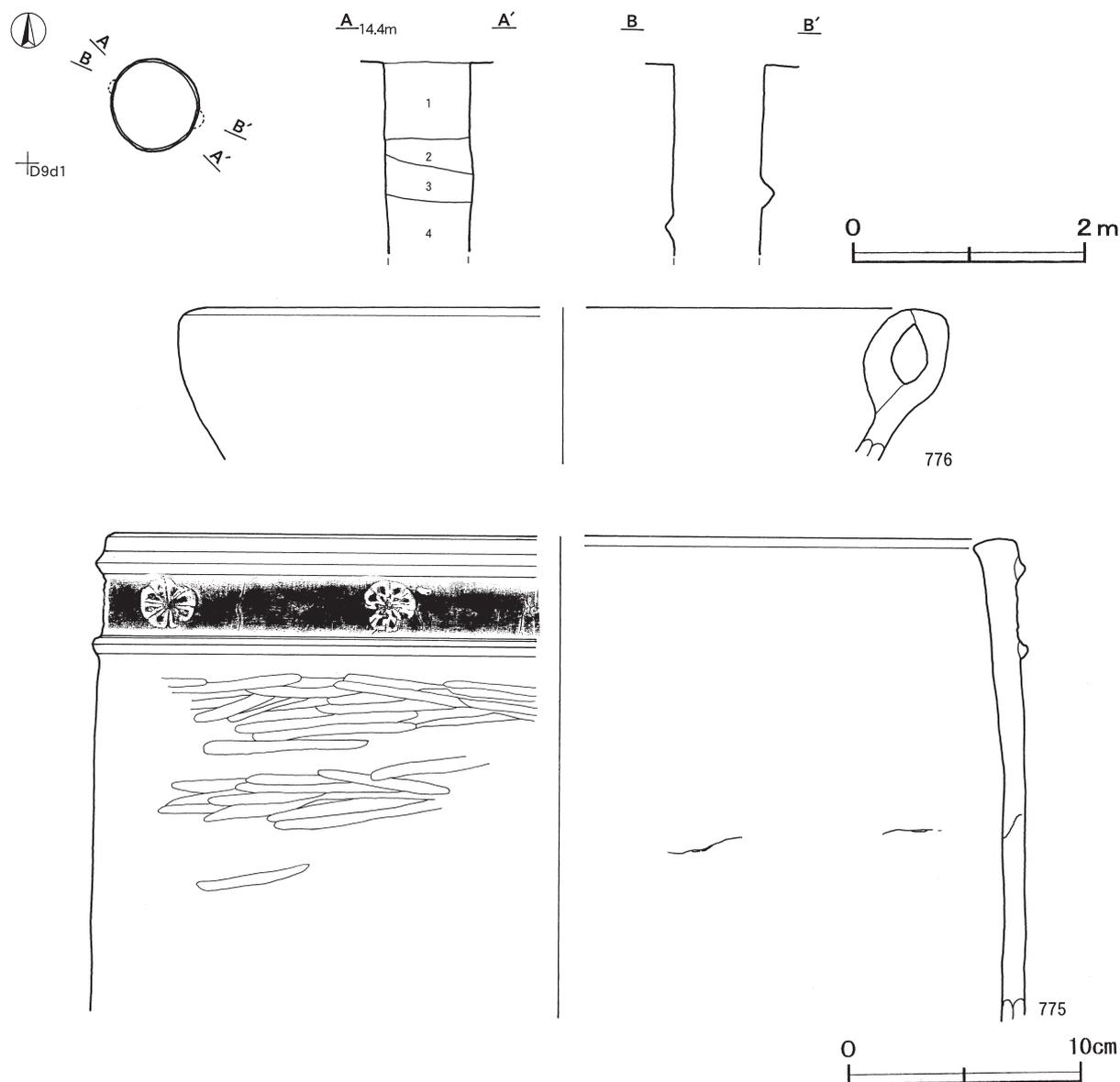
覆土 4層に分層される。ロームブロックや粘土ブロックを含む人為堆積と考えられる。

土層解説

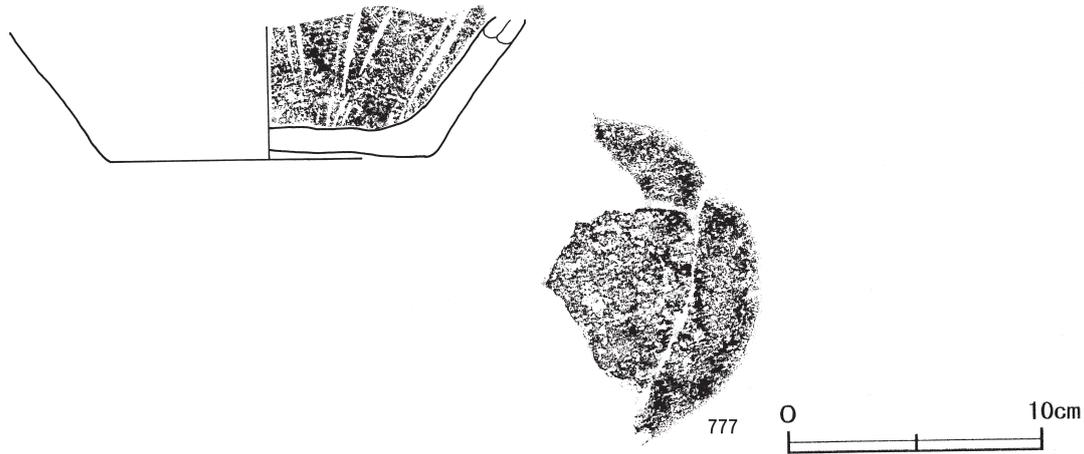
- | | | | |
|---------|-------------------------|------|----------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量 | 3 黒色 | ローム粒子微量 |
| 2 濃い黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック・炭化物少量、焼土 | 4 褐色 | 砂粒多量、粘土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師質土器片2点(内耳鍋), 瓦質土器片4点(播鉢1, 火舎3), 礫1点の他に、混入した土師器片6点も出土している。いずれの遺物も覆土中からの出土である。

所見 時期は、出土土器から近世と考えられる。



第187図 第10号井戸跡・出土遺物実測図



第188図 第10号井戸跡出土遺物実測図

第10号井戸跡出土遺物観察表(第187・188図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
776	土師質土器	内耳鍋	[30.6]	(6.7)	—	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	1内耳残存 内面から口縁部外面横ナデ	覆土中	10%
775	瓦質土器	火舎	[38.0]	(21.0)	—	長石・石英・雲母 針状鉱物	灰	普通	2条の隆帯 隆帯間に花文刻印 外面へラ磨き	覆土中	15%
777	瓦質土器	播鉢	—	(5.4)	[12.6]	長石・石英	灰	普通	4条1単位の播り目	覆土中	10%

表8 井戸跡一覧表

番号	位置	主軸方向 (長軸方向)	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
7	D9f5	N-0°	円形	0.83×0.80	(125.0)	垂直	不明	人為	—	SI99→本跡
8	D9a2	N-0°	円形	0.80×0.78	(126.0)	垂直	不明	人為	—	
9	D8c7	N-0°	円形	1.14×1.10	(135.0)	垂直	不明	人為	—	SI127→本跡
10	D9c1	N-0°	円形	0.80×0.78	(190.0)	垂直	不明	人為	土師質土器, 瓦質土器, 礫	SI106, SB1・2→本跡

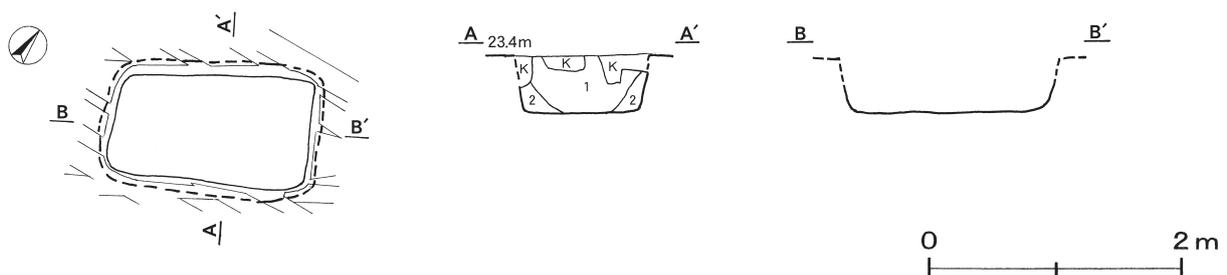
6 その他の遺構と遺物

今回の調査では、時期及び性格を判断することができなかった方形竪穴遺構2基、土坑25基、溝跡4条、ピット群3か所が確認されている。以下、遺構と遺物について記述する。

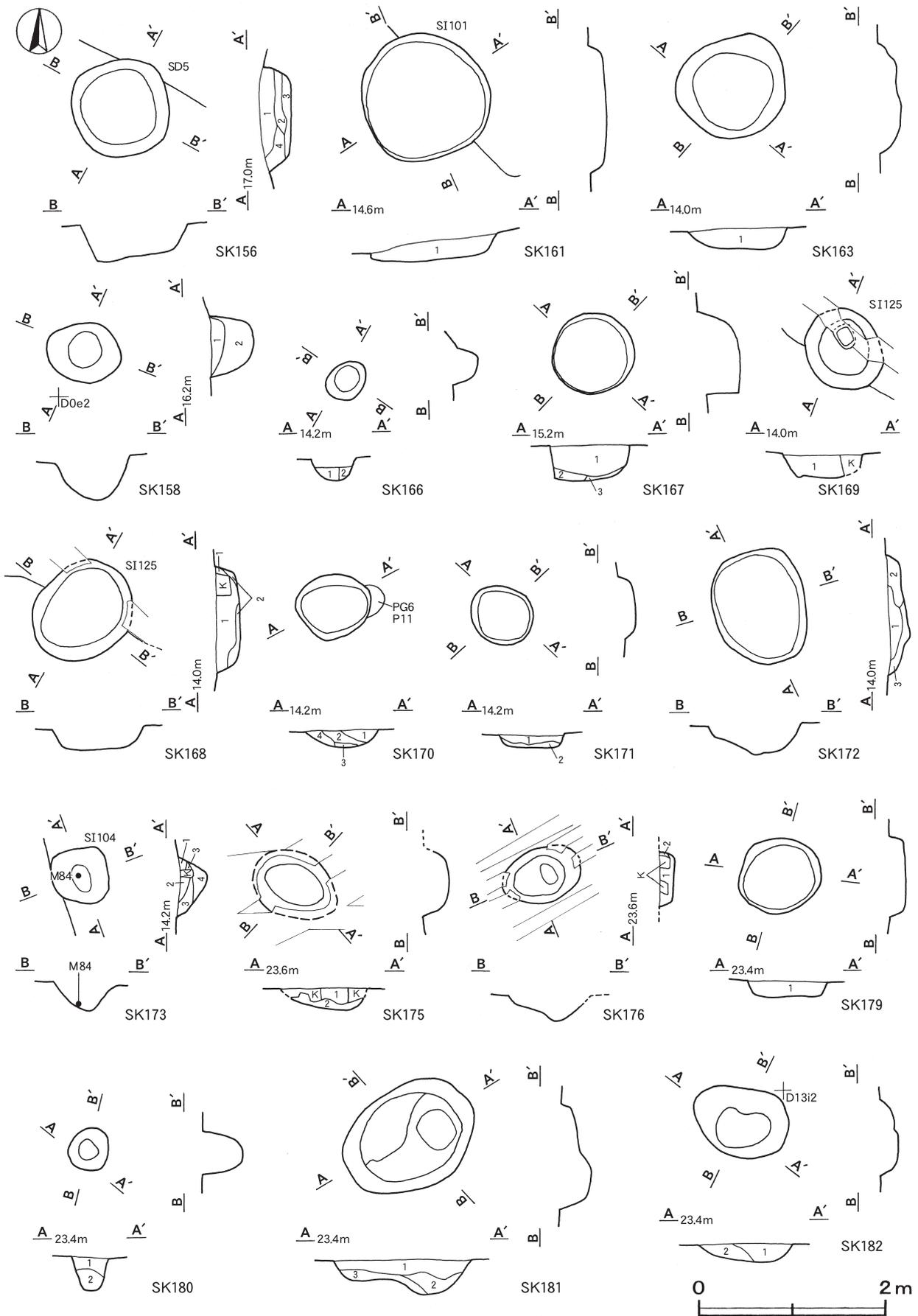
(1) 方形竪穴遺構

第1号方形竪穴遺構 (第189図)

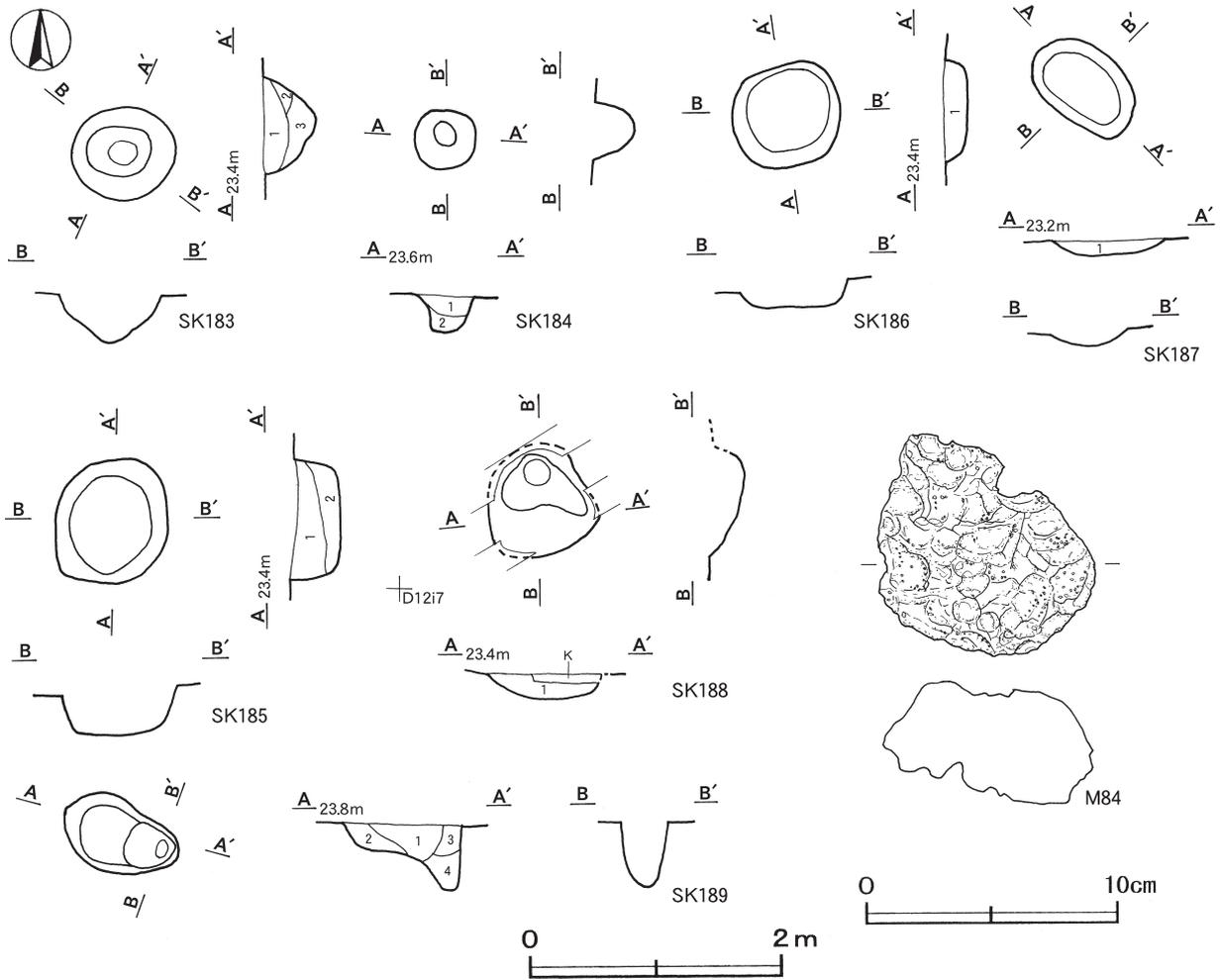
位置 調査区東部のD12f6区で、標高23.3mほどの台地平坦部に位置している



第189図 第1号方形竪穴遺構実測図



第191図 その他の土坑実測図



第192図 その他の土坑・出土遺物実測図

第156号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量

第158号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 炭化物・ローム粒子微量

第161号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

第163号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量

第166号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第167号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 極暗褐色 ローム粒子微量

第168号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第169号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第170号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 4 極暗褐色 ローム粒子少量

第171号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量

第172号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第173号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量

第175号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第176号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第179号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量

第180号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量

第181号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第182号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第183号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化物微量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第184号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量

第185号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 極暗褐色 鹿沼パミス少量, ロームブロック微量

第186号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック・鹿沼パミス少量, 炭化物微量

第187号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量

第188号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量

第189号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

第173号土坑出土遺物観察表(第192図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M84	鉄滓	8.9	8.8	4.9	319.1	鉄	表面は暗赤褐色 凹凸有り	底面	

表10 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
156	C9j9	N-0°	円形	1.13	27~38	緩斜	皿状	人為	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器	SD5→本跡
158	D10d2	N-72°-W	楕円形	0.80×0.67	44	緩斜	平坦	自然	—	
161	D9e3	N-0°	円形	1.38	18	緩斜	皿状	不明	弥生土器, 土師器, 須恵器	SI101・SB3→本跡
163	D8b6	N-0°	円形	1.18	22	緩斜	皿状	不明	土師器, 須恵器	
166	D9c2	N-52°-E	楕円形	0.46×0.38	25	緩斜	皿状	人為	—	SI105・SB1→本跡
167	D9a5	N-0°	円形	0.88	45	垂直	皿状	人為・自然	弥生土器, 土師器, 礫	SI88→本跡
168	D8a6	N-45°-E	楕円形	1.17×0.98	23	緩斜	皿状	自然	弥生土器, 土師器, 須恵器, 礫	SI125→本跡
169	D8a6	N-41°-W	楕円形	1.00×0.90	24	緩斜	皿状	不明	弥生土器, 土師器, 須恵器	SI125→本跡
170	D8b0	N-13°-W	(楕円形)	(0.80)×0.70	16	緩斜	皿状	人為	—	PG6→本跡
171	D8a8	N-0°	円形	0.70×0.64	14	緩斜	皿状	自然	土師器, 須恵器, 礫	
172	D8c9	N-17°-W	楕円形	1.26×1.00	34	緩斜	皿状	人為	—	
173	D9d3	N-51°-W	円形	0.70×0.65	28	緩斜	平坦	人為	鉄滓	SI104→本跡
175	D12g4	N-57°-W	(楕円形)	(0.97×0.73)	32~50	緩斜	皿状	自然	—	
176	D12h5	N-67°-E	楕円形	(0.86)×0.62	10~23	緩斜	皿状	人為	—	
179	D12i6	N-57°-E	円形	0.90×0.84	16	緩斜	皿状	不明	—	
180	D12j7	N-40°-E	円形	0.48×0.42	42	外傾	平坦	人為	—	
181	D12h9	N-55°-E	楕円形	1.48×1.10	14~32	緩斜	皿状	人為	—	
182	D13i1	N-65°-W	楕円形	1.06×0.78	18	緩斜	皿状	人為	—	
183	D13h1	N-80°-W	円形	0.84×0.74	34	緩斜	平坦	人為	—	
184	D12h6	N-0°	円形	(0.48)	30	緩斜	平坦	人為	—	
185	D10g0	N-30°-E	円形	1.04×0.91	37	緩斜	皿状	人為	—	
186	D10e0	N-0°	円形	0.92	19	緩斜	皿状	不明	—	SI141→本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
187	D10e0	N-50°-W	楕円形	0.90×0.61	11	緩斜	平坦	不明	—	SI141→本跡
188	D12h7	N-29°-E	不整形	(0.98×0.92)	26	緩斜	皿状	不明	—	
189	D11h7	N-70°-W	楕円形	0.97×0.60	20~50	外傾	平坦	人為	—	

(3) 溝跡

第5号溝跡 (第193図)

位置 調査区西部のC 9 i9~D10c4区で、標高17.2mほどの中位段丘上の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第156号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北西側と南東側が調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、D10c4区から北西方向(N-48°-W)へほぼ直線的に延びている。確認された長さは25.70mで、上幅0.40~1.80m、下幅0.21~0.62m、深さ19~44cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がっており、底面は平坦である。

覆土 2層に分層される。ロームブロックや粘土ブロックを含んでいるがレンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

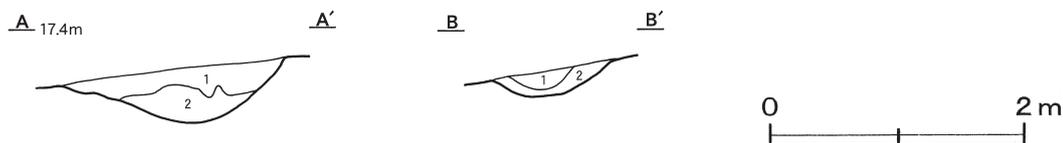
土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 弥生土器片1点、土師器片6点、須恵器片1点、礫1点が出土しているが、細片のため図示することはできない。

所見 時期判断できる遺物が出土していないため時期は不明である。また、軸方向が傾斜に沿っていることから排水溝と考えられるが明確ではない。



第193図 第5号溝跡実測図

第6号溝跡 (第194図)

位置 調査区中央部のD10c7~D10c8区で、標高21.7mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

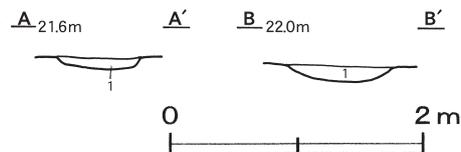
規模と形状 東西方向(N-86°-W)へほぼ直線的に延びている。確認された長さは5.35mで、上幅0.60~0.92m、下幅0.50~0.84m、最深部は12cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がっており、底面は平坦である。

覆土 単一層で、堆積状況は不明である。

土層解説

1 極暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量

所見 遺物が出土していないため時期は不明である。また、軸方向が傾斜に沿っていることから排水溝と考えられるが明確ではない。



第194図 第6号溝跡実測図

第7号溝跡 (第195図)

位置 調査区中央部のD10f0～D11d4区で、標高23.8mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第141・142号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北東側が調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、D11d4区から南西方向(N-117°-W)へほぼ直線的に延びている。確認された長さは20.01mで、上幅0.75～1.60m、下幅0.60～1.32m、最深部は16cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がっており、底面は平坦である。

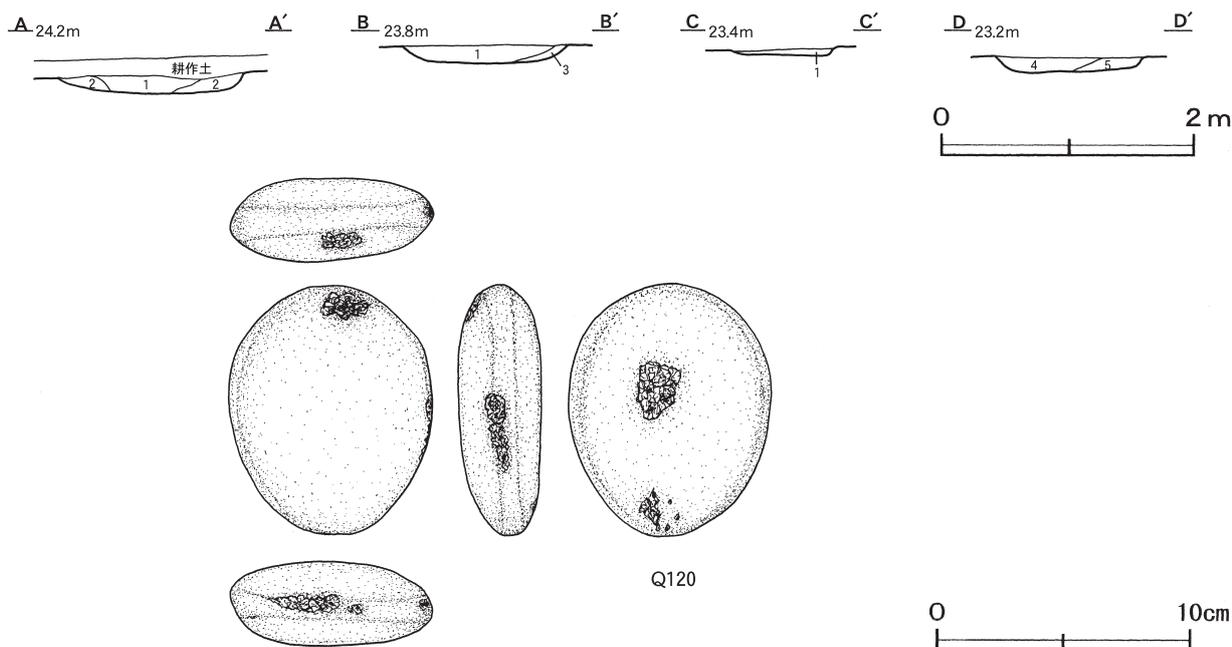
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|---------------|-------|----------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | 4 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・鹿沼パミス微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 5 褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化物微量 | | |

遺物出土状況 弥生土器片3点、土師器片2点、須恵器片8点、石器1点(敲石)、礫22点が出土している。Q120は覆土中から出土している。その他の土器片は細片のため図示することはできない。

所見 時期判断できる遺物が出土していないため時期は不明である。また、軸方向が傾斜に沿っていることから排水溝と考えられるが明確ではない。



第195図 第7号溝跡・出土遺物実測図

第7号溝跡出土遺物観察表(第195図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q120	敲石	9.9	8.0	3.3	382.8	砂岩	敲打痕5か所	覆土中	

第8号溝跡 (第196図)

位置 調査区西部のD10b9～D10e9区で、標高22.5mほどの台地縁辺部の南西緩斜面部に位置している。

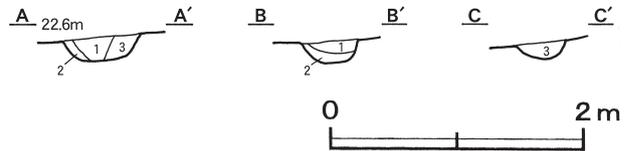
重複関係 第138号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北側が調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、D10b9区から南方向（N-172°-E）へほぼ直線的に延びている。確認された長さは13.80mで、上幅0.34~0.58m、下幅0.23~0.38m、深さ12~18cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がっており、底面は平坦である。

覆土 3層に分層される。ロームブロックや鹿沼パミスブロックを含む人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・鹿沼パミスブロック微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、鹿沼パミスブロック微量



遺物出土状況 礫2点しか出土していない。

所見 時期判断できる遺物が出土していないため時期は不明である。また、軸方向が傾斜に沿っていることから排水溝と考えられるが明確ではない。

第196図 第8号溝跡実測図

第9号溝跡（第197図）

位置 調査区東部のD14i5~E14c7区で、標高22.2mほどの台地縁辺部の東斜面部に位置している。

規模と形状 北側と南側が調査区域外へ延びているため遺構全体の確認はできなかったが、D14i5区から南南東方向（N-160°-E）へほぼ直線的に延びている。確認された長さは19.00mで、上幅2.00~3.20m、下幅0.42~1.76m、深さ20~104cmである。壁は外傾して立ち上がっており、底面は平坦である。

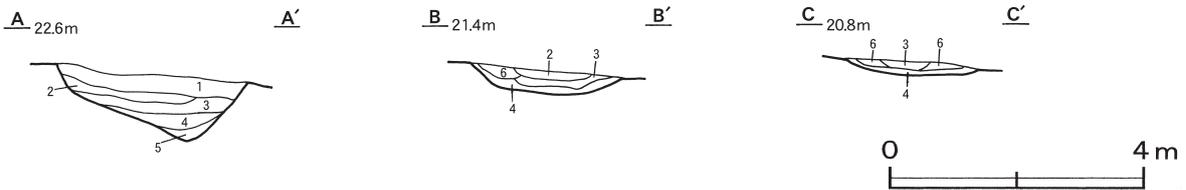
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 縄文土器片1点、弥生土器片16点、土師器片20点、須恵器片4点、土製品1点、鉄滓1点、礫6点が出土しているが、細片のため図示することはできない。

所見 時期判断できる遺物が出土していないため時期は不明である。また、軸方向が傾斜に沿っていることから排水溝と考えられるが明確ではない。



第197図 第9号溝跡実測図

表11 時期不明溝一覧表

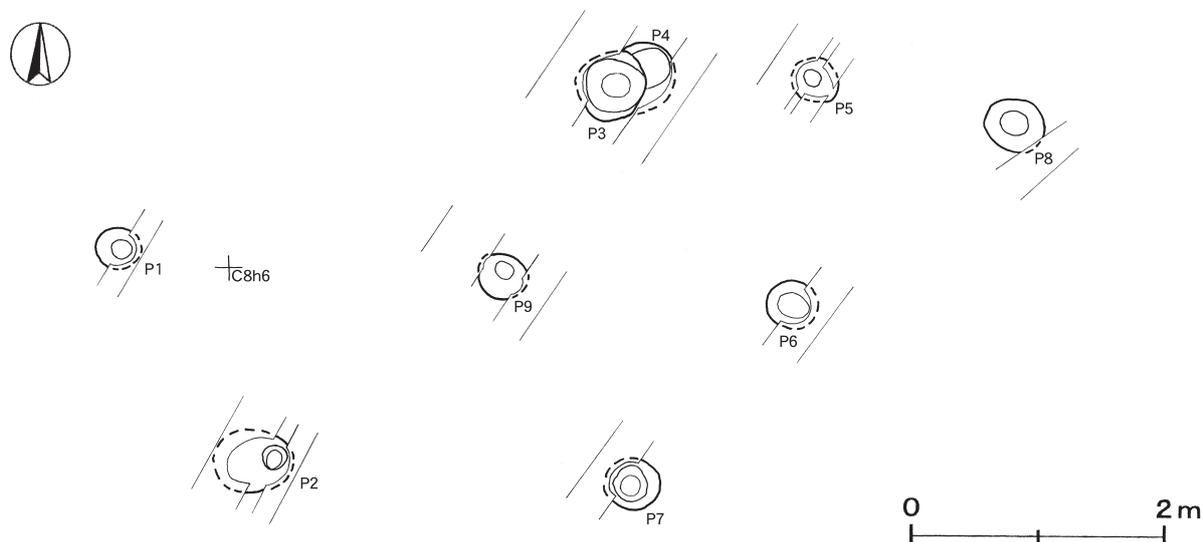
番号	位置	方向	形状	規模				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				確認長(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
5	C9i9~D10c4	N-48°-W	直線状	25.70	0.40~1.80	0.21~0.62	19~44	緩斜	平坦	自然	弥生土器, 土師器, 須恵器, 礫	本跡→SK156
6	D10c7~D10c8	N-86°-W	直線状	5.35	0.60~0.92	0.50~0.84	12	緩斜	平坦	不明	—	
7	D10f0~D11d4	N-117°-W	直線状	20.01	0.75~1.60	0.60~1.32	16	緩斜	平坦	自然	弥生土器, 土師器, 須恵器, 石器, 礫	SI141・142→本跡

番号	位置	方向	形状	規模				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				確認長(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
8	D10b9～D10e9	N-172°-E	直線状	13.8	0.34～0.58	0.23～0.38	12～18	緩斜	平坦	人為	礫	SI138→本跡
9	D14i5～E14c7	N-160°-E	直線状	19.00	2.00～3.20	0.42～1.76	20～104	外傾	平坦	自然	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器, 土製品, 鉄滓, 礫	

(4) ピット群

第5号ピット群 (第198図)

調査区西側のC 8 h6区付近から9か所のピットが検出された。平面形は径36～62cmほどの円形または楕円形と推定され、深さは25～62cmである。P 1～P 3, P 6からは土師器片(甕類)が, P 7からは弥生土器片と土師器片が出土しているがいずれも細片である。時期判断できる遺物が出土していないため時期は不明である。また、ピットの配置に掘立柱建物跡などの規則性を見つけることができないためピット群として扱った。以下、各ピットの一覧表を記載する。



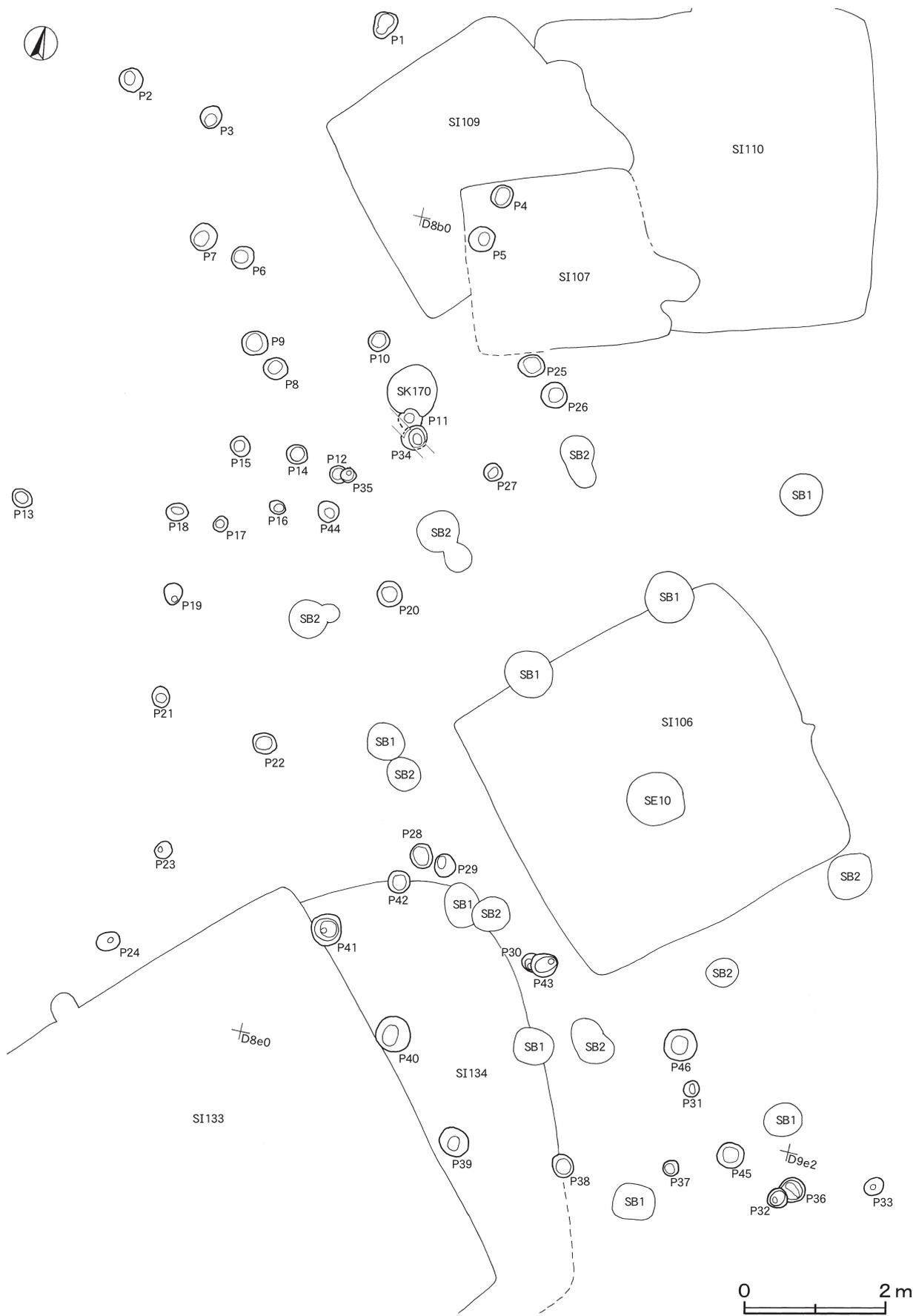
第198図 第5号ピット群実測図

第5号ピット群ピット計測表(第198図)

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)												
1	[38]	32	38	4	[52]	[48]	32	6	[40]	37	48	8	49	42	30
2	[62]	[51]	35	5	[36]	34	25	7	[44]	41	31	9	[38]	33	33
3	54	[52]	62												

第6号ピット群 (第199図)

調査区西側のD 8 a8～D 9 e2区から46か所のピットが検出された。平面形は径22～53cmほどの円形または楕円形で、深さは7～54cmである。P 24, P 30からは弥生土器片(壺類)が, P 40・P 41からは弥生土器片と土師器片が, P 3, P 6, P 9～P 11, P 34からは土師器片が, P 7からは土師器片と須恵器片が出土しているがいずれも細片である。時期判断できる遺物が出土していないため時期は不明である。また、ピットの配置に掘立柱建物跡などの規則性を見つけることができないためピット群として扱った。以下、各ピットの一覧表を記載する。



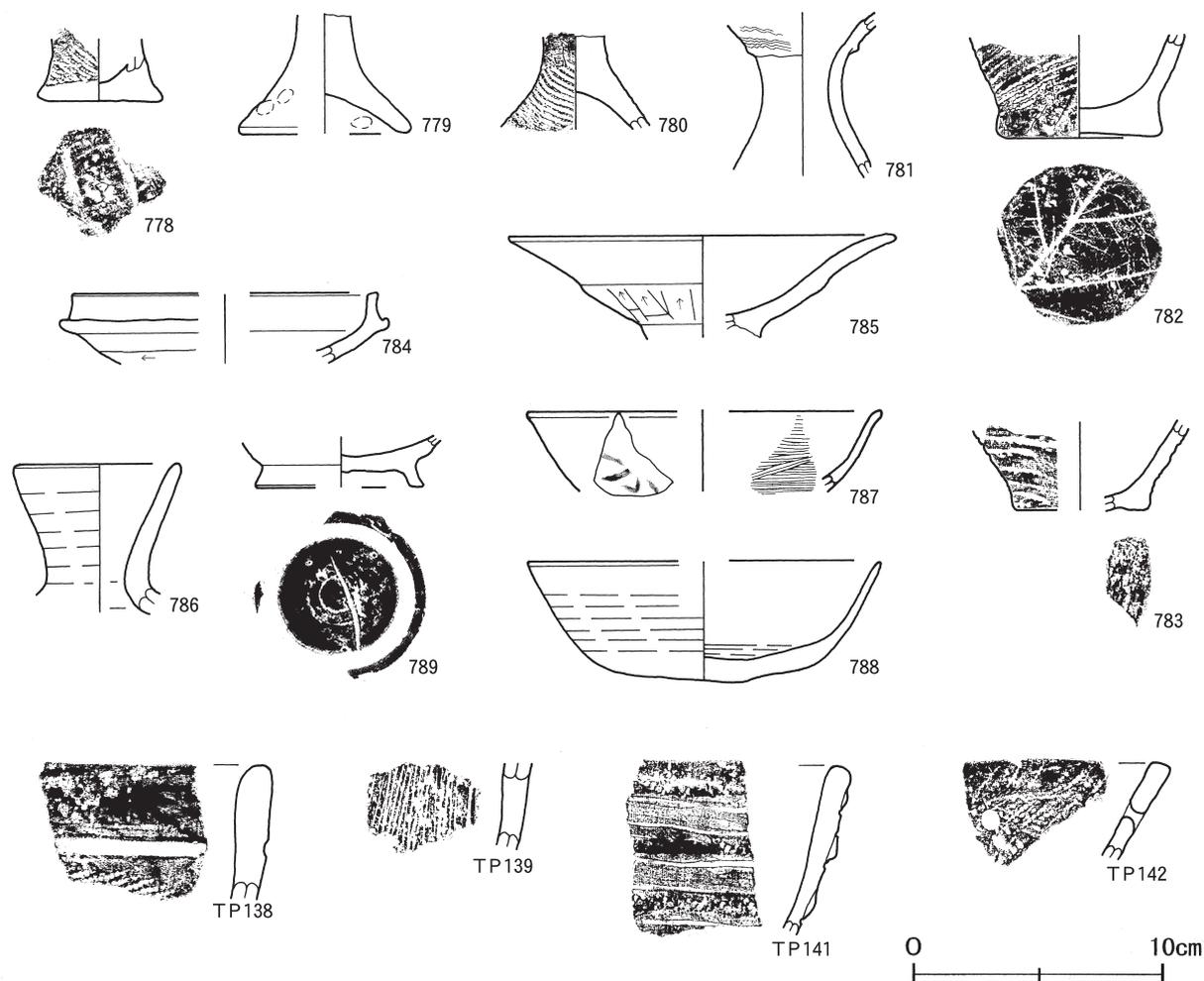
第199図 第6号ピット群実測図

第6号ピット群ピット計測表(第199図)

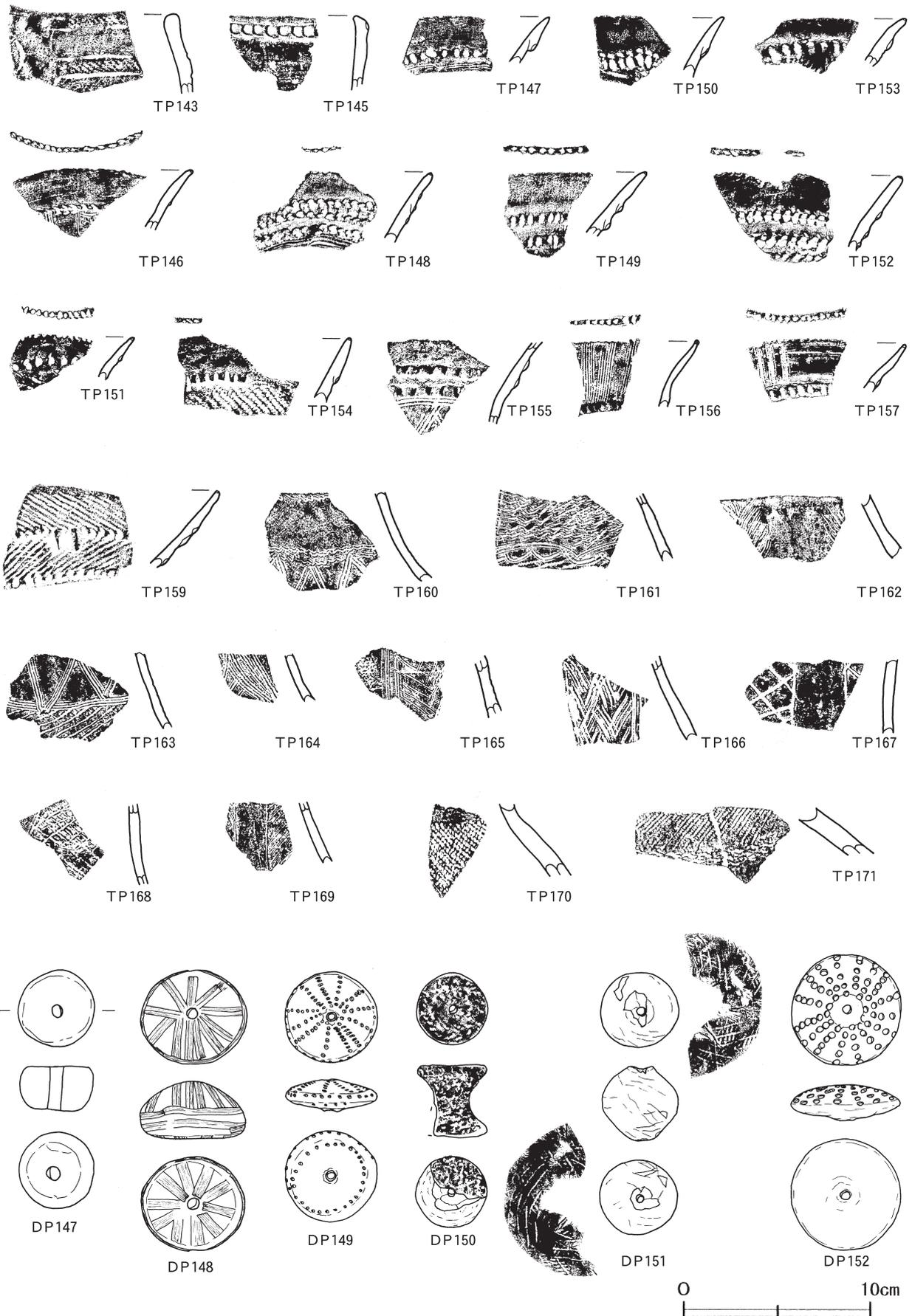
番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)												
1	42	35	25	13	30	23	14	25	40	32	28	37	23	22	28
2	35	33	32	14	30	30	30	26	39	37	34	38	35	29	17
3	33	31	24	15	29	27	10	27	27	24	14	39	43	38	30
4	34	32	16	16	23	19	32	28	35	32	30	40	53	50	30
5	37	35	28	17	24	20	38	29	35	30	41	41	45	40	44
6	36	33	32	18	31	28	17	30	28	[26]	54	42	34	30	24
7	40	36	26	19	30	23	31	31	24	22	20	43	38	32	30
8	32	31	38	20	37	35	30	32	30	27	26	44	32	31	7
9	36	35	24	21	30	23	26	33	29	23	24	45	39	37	28
10	30	29	22	22	31	30	27	34	[34]	32	38	46	52	47	23
11	[38]	30	36	23	26	24	26	35	22	21	35				
12	26	[26]	24	24	34	24	24	36	35	[31]	21				

(5) 遺構外出土遺物

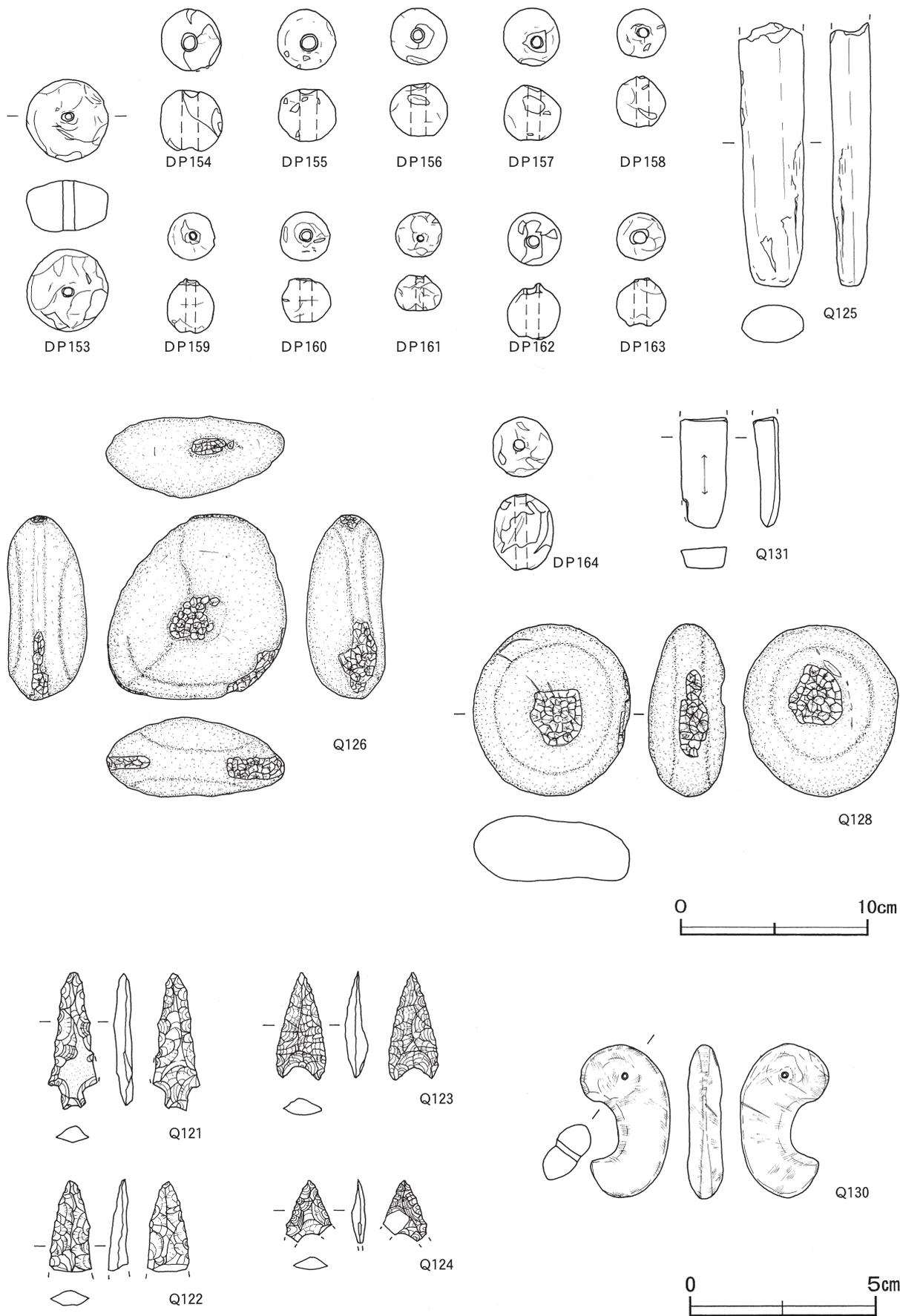
当遺跡から出土した遺構に伴わない遺物について、実測図及び出土遺物観察表で記載する。



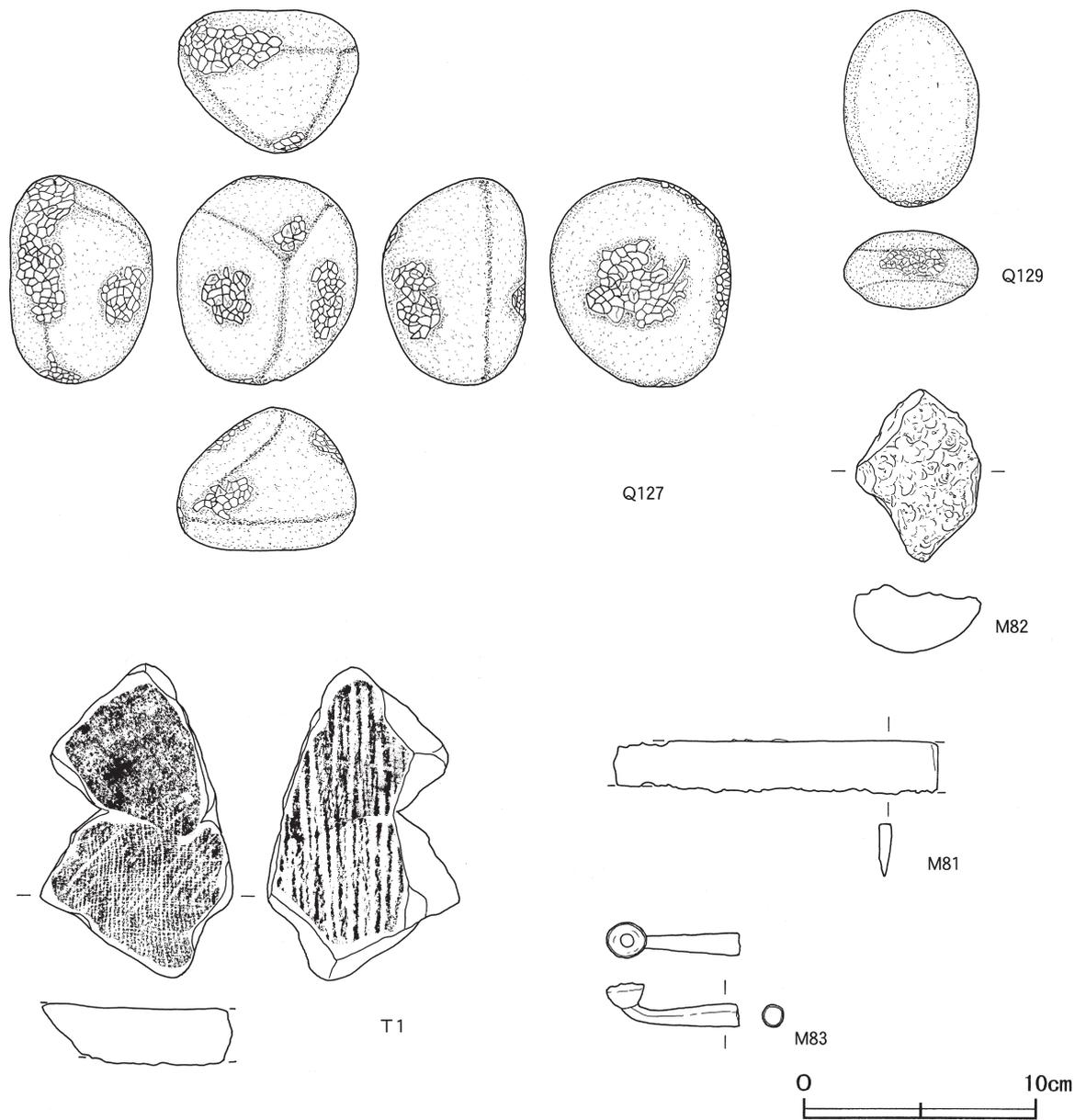
第200図 遺構外出土遺物実測図(1)



第201图 遺構外出土遺物実測図(2)



第202図 遺構外出土遺物実測図(3)



第203図 遺構外出土遺物実測図(4)

遺構外出土遺物観察表(第200~203図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
778	弥生土器	高坏カ	—	(2.5)	4.5	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部に附加条一種(附加2条)の縄文 底部木葉痕	D9a区	10%
779	弥生土器	高坏カ	—	(4.7)	[6.6]	長石・石英・雲母	灰黄	普通	脚部内・外面指頭痕	D11i8区	30%
780	弥生土器	高坏カ	—	(3.7)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	脚部外面に附加条一種(附加2条)の縄文	D9a区	20%
781	弥生土器	片口壺カ	—	(6.5)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部下端に櫛歯状工具(4本)による波状文 頸部無文	D9b6区	20%
782	弥生土器	広口壺	—	(4.1)	6.6	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部に附加条一種(附加2条)の縄文 底部木葉痕	D10c9区	10%
783	弥生土器	広口壺	—	(3.5)	[7.4]	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	胴部に附加条二種(附加1条)の縄文 底部に初痕	D8a0区	5%
785	土師器	高坏	15.3	(4.1)	—	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	坏部口辺部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り	D9b9区	50%
784	須恵器	坏	[12.0]	(2.8)	—	長石・石英・雲母	明褐灰	普通	口辺部内・外面横ナデ 体部外面回転へラ削り	D9a6区	10%
786	須恵器	提瓶	6.4	(6.0)	—	長石・石英・雲母	黄灰	普通	口辺部外面クロナデ	C9j8区	10%
787	土師器	坏	[14.2]	(3.2)	—	長石・石英	橙	普通	体部外面クロナデ 内面へラ磨き	C9i3区	5% 墨書「本」カ

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
788	須恵器	坏	[14.0]	4.8	8.0	長石・石英	灰黄	良好	底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り	C8h8区	60%
789	須恵器	高台付坏	-	(2.0)	[6.8]	長石・石英	赤褐	良好	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	D8b0区	30% 鏡書「一」
TP138	縄文土器	深鉢	-	(5.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	太い沈線による区画内にLRの単節縄文施文	D9e9区	5% PL38
TP139	縄文土器	深鉢	-	(3.5)	-	長石・石英	にぶい黄褐	普通	櫛歯状工具による縦位の状線文	D9d9区	5% PL38
TP141	縄文土器	深鉢	-	(6.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	帯縄文間をヘラ研磨	D9c7区	5% PL38
TP142	縄文土器	深鉢	-	(3.9)	-	長石・石英	黒褐	普通	LRの単節縄文施文 補修孔1か所	D9a7区	5% PL38
TP143	縄文土器	深鉢	-	(4.8)	-	長石・石英・雲母	黄橙	普通	帯縄文と杵状文 突起貼り付け	C9j9区	5% PL38
TP145	縄文土器	深鉢	-	(3.9)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部上位に押圧のある隆帯 紐線文	D13i6区	5% PL38
TP146	弥生土器	広口壺	-	(3.3)	-	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口唇部に原体押圧 口辺部無文 原体押圧で口辺部と区画 櫛歯状工具(4本)による縦区画後波状文充填	C8h4区	5% PL38
TP147	弥生土器	広口壺	-	(2.5)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部無文 複合口縁 下端に棒状工具による押圧 頸部に櫛歯状工具(本数不明)による施文	D11j7区	5%
TP148	弥生土器	広口壺	-	(3.8)	-	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	口唇部に原体押圧 口辺部無文 頸部上位に原体押圧のある隆帯3条 櫛歯状工具(本数不明)による施文	E11a9区	5%
TP149	弥生土器	広口壺	-	(3.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部に原体押圧 口辺部無文 頸部上位に原体押圧のある隆帯2条 頸部櫛歯状工具(本数不明)による施文	D11e3区	5% PL38
TP150	弥生土器	広口壺	-	(3.2)	-	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口辺部無文 頸部上位に原体押圧のある隆帯1条 頸部に附加条二種(附加1条)の縄文	D11d3区	5%
TP151	弥生土器	広口壺	-	(2.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部に棒状工具による押圧 口辺部無文 頸部上位に原体押圧のある隆帯1条 頸部に附加条二種(附加1条)の縄文	D11f6区	5% PL38
TP152	弥生土器	広口壺	-	(4.0)	-	長石・石英・雲母	赤褐	普通	口唇部に原体押圧 口辺部無文 頸部上位に原体押圧のある隆帯3条以上	D11i8区	5% PL38
TP153	弥生土器	広口壺	-	(2.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部無文 頸部上位に原体押圧のある隆帯1条 頸部に櫛歯状工具(本数不明)による施文	D11e3区	5%
TP154	弥生土器	広口壺	-	(3.4)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部に軽い押圧 口辺部無文 頸部上位に棒状工具による押圧のある隆帯1条 頸部にRLの単節縄文	D11i8区	5%
TP155	弥生土器	広口壺	-	(4.9)	-	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	口辺部無文 頸部上位に軽い押圧のある隆帯2条 頸部に櫛歯状工具(3本)による直状文と山形文	D11i8区	5% PL38
TP156	弥生土器	広口壺	-	(3.5)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口唇部にヘラ状工具による押圧 小突起 口辺部に櫛歯状工具(6本)による縦区画 頸部上位に隆帯	D9d3区	5% PL38
TP157	弥生土器	広口壺	-	(2.6)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部に原体押圧 口辺部に櫛歯状工具(4本)による縦区画 頸部上位に棒状工具による押圧のある隆帯	E14区	5%
TP159	弥生土器	広口壺	-	(4.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	2段の複合口縁 口辺部附加条1種(附加2条)の縄文 上段部下端端貼り付け 上下段とも下端に縄文原体による押圧	E14区	5% PL38
TP160	弥生土器	広口壺	-	(4.7)	-	長石・石英・雲母	明褐	普通	頸部下位に櫛歯状工具(3本)による波状文 櫛歯状工具(2本)による山形文	D11f3区	5% PL39
TP161	弥生土器	広口壺	-	(3.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	頸部に櫛歯状工具(4本)による波状文 頸部下位に上向き・下向きの変連弧 胴部に附加条二種(附加1条)の縄文	D10f6区	5% PL39
TP162	弥生土器	広口壺	-	(3.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	櫛歯状工具(3本)によるV字文	D11i8区	5% PL39
TP163	弥生土器	広口壺	-	(4.0)	-	長石・石英・雲母	褐	普通	頸部下位に櫛歯状工具(4本)による山形文と直状文 胴部に附加条二種(附加1条)の縄文	D9c8区	5% PL38
TP164	弥生土器	広口壺	-	(2.5)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	櫛歯状工具(4本)による山形文	D11j8区	5%
TP165	弥生土器	広口壺	-	(3.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	櫛歯状工具(6本)により縦区画され格子状文施文 区画内に波状文充填	C8j10区	5%
TP166	弥生土器	広口壺	-	(4.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	櫛歯状工具(4本)により縦区画され山形文施文	D11c3区	5% PL39
TP167	弥生土器	広口壺	-	(3.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ヘラ状工具により縦区画され格子状文施文	D9e4区	5% PL39
TP168	弥生土器	広口壺	-	(4.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	櫛歯状工具(4本)により縦区画され格子状文施文 胴部に附加条二種(附加1条)の縄文	D13i3区	5% PL39
TP169	弥生土器	広口壺	-	(3.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ヘラ状工具により縦区画され格子状文施文	D13i3区	5%
TP170	弥生土器	壺	-	(3.8)	-	長石・石英・黒色粒子	褐	普通	附加条二種(附加2条)の縄文	D9b7区	5% 赤彩 PL39
TP171	弥生土器	壺	-	(2.5)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	附加条二種(附加2条)の縄文 S字状結節文で文様帯を区画	D9c7区	5% 赤彩 PL39

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP147	紡錘車	4.0	0.7	2.5	49.2	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	D9d5区	PL40
DP148	紡錘車	5.6	0.6	3.0	81.7	土(長石・石英・雲母)	両面に櫛歯状工具(本数不明)による放射状の施文 側面に同工具による横走文2条 一方向からの穿孔	D9b6区	PL40
DP149	紡錘車	4.9	0.5	1.7	36.4	土(長石・石英・雲母)	片面に棒状工具による放射状の刺突 側面から底面に渦巻き状に刺突文を配列 一方向からの穿孔	D11g7区	PL40
DP150	紡錘車	4.8	0.5	4.9	(34.2)	土(長石・石英・雲母)	両面及び側面に半截竹管による刺突	D11j7区	PL40
DP151	紡錘車	4.2	0.5	4.0	(61.2)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	D8a1区	PL40
DP152	紡錘車	5.9	0.5	2.0	61.9	土(長石・石英・雲母)	片面に棒状工具による放射状の刺突 一方向からの穿孔	C9j3区	PL40
DP153	紡錘車	4.5	0.6	2.8	(54.1)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	C8i7区	
DP154	球状土錘	3.2	0.8	3.3	(35.2)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	D10e1区	
DP155	球状土錘	3.1	0.9	2.8	(28.0)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	D9d8区	
DP156	球状土錘	3.1	0.8	2.8	(27.0)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	C9i2区	
DP157	球状土錘	3.0	0.7	3.0	(28.8)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	C9j3区	

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
DP158	球状土錘	2.7	0.7	2.8	(19.1)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	D9d8区	
DP159	球状土錘	2.5	0.5	2.9	(18.6)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	D9a7区	
DP160	球状土錘	2.7	0.7	2.4	(19.2)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	C7j9区	
DP161	球状土錘	2.5	0.4	1.9	11.6	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	C9i7区	
DP162	球状土錘	2.9	0.7	3.1	(22.9)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	D8b7区	
DP163	球状土錘	2.7	0.7	2.7	(16.8)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	D8b7区	
DP164	球状土錘	3.2	0.6	4.1	(42.9)	土(長石・石英・雲母)	ナデ 一方向からの穿孔	C7j9区	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q121	有茎尖頭器	3.6	(1.3)	0.5	(1.8)	チャート	両面剥離調整 一部自然面を残す	D9f0区	PL42
Q122	石鏃	(2.5)	(1.1)	(0.5)	(1.2)	安山岩	両面剥離調整	D9f9区	尖頭器カ PL42
Q123	石鏃	2.9	1.3	0.6	1.5	チャート	凹基無茎鏃 両面剥離調整 押圧剥離	C8j0区	PL42
Q124	石鏃	(1.7)	(1.2)	0.4	(0.4)	頁岩	凹基無茎鏃 両面剥離調整 押圧剥離	D9b1区	PL42
Q125	石棒	(14.3)	3.5	2.1	(177.6)	粘板岩	丁寧な研磨成形	D9d8区	
Q126	敲石	9.9	10.0	4.4	549.9	砂岩	敲打痕4か所	D11f4区	PL42
Q127	敲石	10.0	7.8	6.2	577.1	砂岩	敲打痕7か所	D9a5区	
Q128	敲石	9.3	8.5	3.5	433.0	砂岩	敲打痕3か所	D11i8区	PL42
Q129	敲石	8.5	5.8	3.4	242.8	砂岩	敲打痕1か所	C7i9区	PL42
Q130	勾玉	4.2	2.4	0.9	12.5	滑石	一方向からの穿孔 孔径0.15mm	D9d9区	PL42
Q131	砥石	(6.0)	2.5	1.3	(26.7)	凝灰岩	砥面1か所	D8a7区	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
M81	小刀	(14.0)	2.2	0.5	(61.0)	鉄	刀身の一部 平棟平造り	E14a7区	
M83	煙管	5.8	1.6	1.9	6.1	銅	雁首 脂反し急	D10f8区	
M82	椀状滓	(7.4)	(5.3)	2.9	(127.0)	鉄	表面に赤錆付着	C9区	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎 土	色 調	焼 成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
T1	平瓦	(13.5)	(8.4)	2.7	(2.5)	長石・石英	灰オリーブ	普通	凹面布目痕 凸面繩叩き	D9c3区	10%

第4節 ま と め

1 はじめに

大戸下郷遺跡は、平成13・14年度に一次調査として6,418㎡が調査され、『茨城県教育財団文化財調査報告書第216集 大戸下郷遺跡』¹⁾として報告されている（以下、『大戸下郷遺跡1』と略す）。平成16年度の二次調査では6,208㎡の調査（本報告分を『大戸下郷遺跡2』と略す）が行われ、延べ12,626㎡が調査された。

一次調査では、竪穴住居跡62軒（縄文5，弥生8，古墳39，奈良6，平安4），墓坑20基（古墳1，近世19），土坑106基（弥生2，平安1，中世1，近世7，時期不明95），井戸跡6基（近世），溝跡3条（時期不明），ピット群4か所が検出されている。二次調査では、竪穴住居跡69軒（弥生21，古墳37，奈良4，平安7），掘立柱建物跡3棟（奈良時代～平安時代），墓坑2基（近世），土坑26基（弥生1，時期不明25），井戸跡4基（近世），方形竪穴遺構2基（時期不明），溝跡5条（時期不明），ピット群2か所が検出されている。

ここでは、二次にわたる調査で検出された遺構について時代順に概略を述べ、簡単な考察を加えてまとめとしたい。

※ 調査区域概念

『大戸下郷遺跡1』では、調査区を8区に分けているが、調査1区から3区（遺構確認面の標高が13m以下）を「低位段丘部」、調査4区から8区（遺構確認面の標高が13～15m）を「中位段丘部」とする。それをふまえ、『大戸下郷遺跡2』での遺構確認面の標高13～18mを「中位段丘部」に加え、遺構確認面の標高が20m以上を「台地上」とする。

2 縄文時代

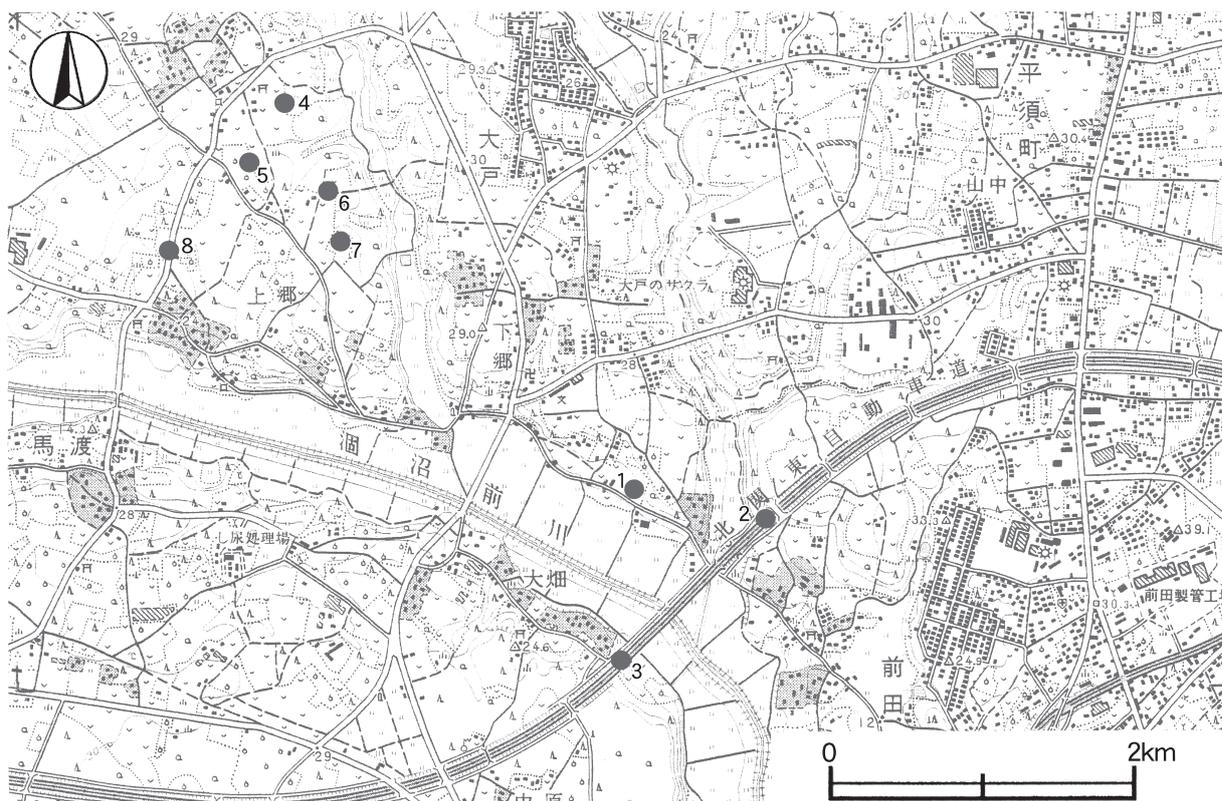
二次にわたる調査の結果、縄文時代の住居跡5軒、陥し穴8基が確認されている。5軒の住居跡は、いずれも「低位段丘部」で確認されており、それ以外の場所では検出されていない。「中位段丘上」から「台地上」にかけて行われた今回の二次調査では該期の住居跡は検出されず、「低位段丘上に当遺跡における縄文時代の集落が存在した可能性が考えられる。」という『大戸下郷遺跡1』の指摘の通り、涸沼前川という水場へ比較的近い場所が選地されて集落が営まれていたと考えられる。また、土器片についても「低位段丘上の表面採集や後世の遺構内からも、流れ込みや混入と考えられる前期前葉（関山期）の破片が出土している。（中略）中央部から東側に至る3区から8区の中位段丘上の住居跡などからの縄文土器片の検出は少なくなる」とあり、『大戸下郷遺跡2』でも後世の住居跡への流れ込みや表土中などから少数の確認しかできず、土器片の出土も『大戸下郷遺跡1』と同様の傾向を示している。

「台地上」に位置している陥し穴8基は、第8号陥し穴が南東側にやや離れて位置しているものの、その他の7基は10mほどの範囲内に分布しており、特に、第2・3・5・6号陥し穴は標高23.1mラインにほぼ同間隔で直行して並んでいる。遺構の形態から縄文時代の陥し穴と判断したが、いずれも遺物が出土しておらず、明確な時期は特定できなかった。

遺跡周辺の地形を考え合わせると、低位段丘上に集落を形成した場合、遺跡南部を東流する涸沼前川を水場及び内水性漁業として利用し、集落の後背地となる台地上は植物質食料の採集及び狩猟が可能となる森林として利用されていた事を想定したい。

3 弥生時代

涸沼前川流域に分布する多くの遺跡は「大戸遺跡群」²⁾(第205図参照)と呼ばれ、当遺跡を含む大畑遺跡³⁾(10軒、矢倉遺跡⁴⁾(31軒)、その支群である「桜の郷遺跡群」⁵⁾の宮後遺跡⁶⁾(5軒の内、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭⁷⁾4軒)、大塚遺跡1⁸⁾・大塚遺跡2⁹⁾(28軒の内、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭12軒)、綱山遺跡¹⁰⁾(弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭12軒)、石原遺跡¹¹⁾(23軒の内、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭6軒)、木戸遺跡¹²⁾(2軒)の8遺跡が報告または調査されており、該期及び後続する時期の良好な資料を提供している。



第204図 大戸遺跡群遺跡分布図 1 大戸下郷遺跡 2 矢倉遺跡 3 大畑遺跡 4 宮後遺跡
5 大塚遺跡 6 綱山遺跡 7 石原遺跡 8 木戸遺跡

(1) 遺構と遺物について

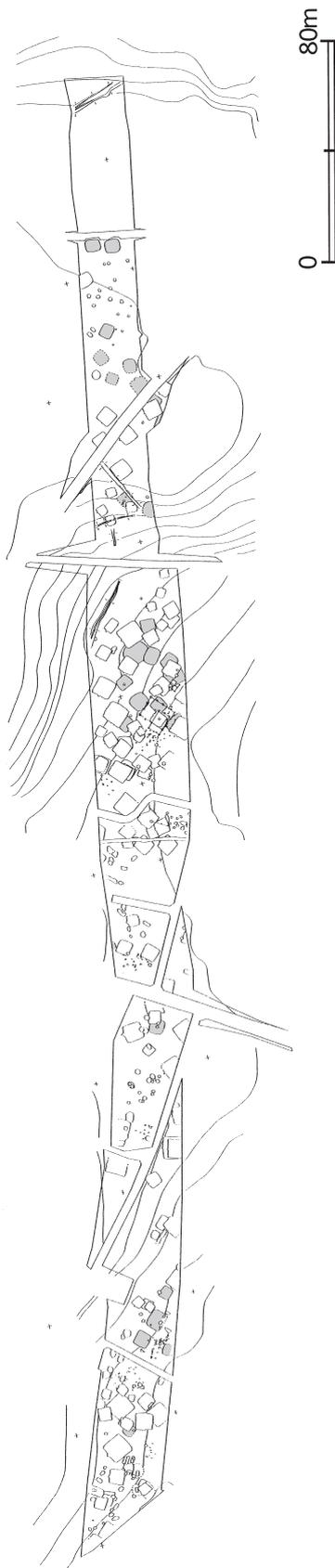
『大戸下郷遺跡1』での該期の遺構は竪穴住居跡8軒（他に十王台式土器と土師器が共伴している古墳時代初頭の住居跡1軒と第1号墓坑が検出されている）の他に、土坑2基が報告されている。『大戸下郷遺跡2』の竪穴住居跡21軒、土坑1基を合わせると、竪穴住居跡29軒、土坑3基が確認されたことになる。

住居跡は、「低位段丘部」に5軒、「中位段丘部」に13軒、「台地上」では11軒が確認され、調査区全体に分布しており、出土土器（十王台式土器）から弥生時代後期後半と捉えた。

以下、「低位段丘部」、「中位段丘部」、「台地上」の3か所に分けて遺構と遺物について概観する。

まず、「低位段丘部」の5軒（第14・28・33・35・37号住居跡）は、標高11～12mの南西緩斜面に位置しており、斜面地のため後世の耕作の影響を受けていずれも遺存状態が悪く、覆土も薄い。形状は隅丸方形あるいは隅丸長方形で、主軸方向は北から西へ37～47°の範囲に収まっている。規模は4～5mが多いが、

弥生時代後期後半



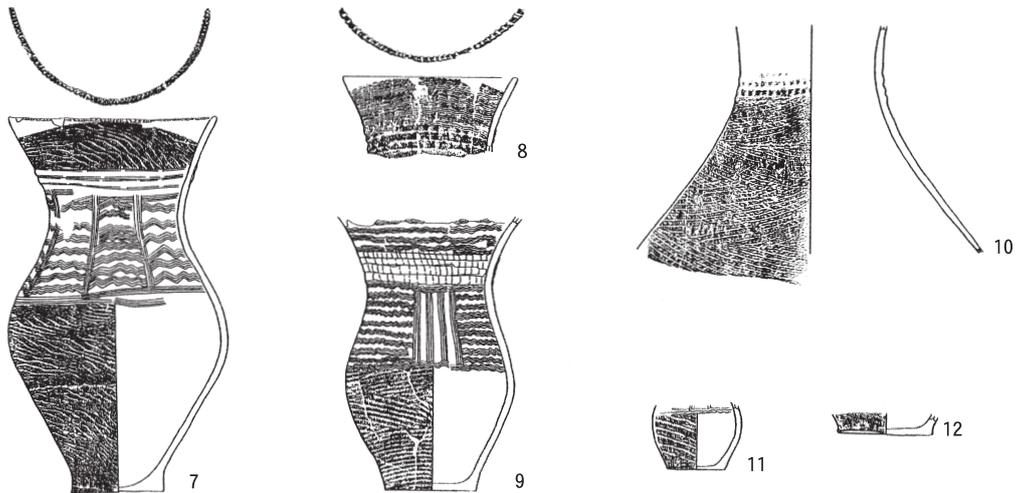
第205図 弥生時代遺構配置図

第33号住居跡は長軸6.67m，短軸5.32mで，「低位段丘部」の中では最大である。5軒の住居跡の中で，比較的多く遺物が包蔵されていたのは第28・33・37号住居跡である。第28号住居跡からは，群馬県方面を中心に分布する樽式土器（第206図1）が覆土下層から出土しており，『大戸下郷遺跡1』では「廉状文がなく胴部が球胴化しており，Ⅲ期またはⅣ期に該当するものと推定される」と報告されている。第33号住居跡からは，口辺部に附加条二種（附加1条）を施文して頸部上位に2条の隆帯を表出し，頸部には縦区画充填波状文を施した広口壺（第206図7）が出土しているが，口辺部に附加条二種（附加1条）を施文したものや縦区画充填波状文を施した土器の出土は少ない傾向にある。第37号住居跡からは，広口壺（第206図13）と小形広口壺（第206図15）が出土している。15は第33号住居跡から出土した7と同様に口辺部は附加条二種（附加1条）の施文であり，この土器の頸部文様帯の施文が雑になっていることを認めることができる。また，茨城県において該期を代表する十王台式土器と上稲吉式土器の文化圏においては，炉跡に炉石を伴う例が比較的多いという指摘¹³⁾がなされており，第14号住居跡は安山岩が，第33号住居跡は粘土塊がそれぞれ火床面から検出されている。

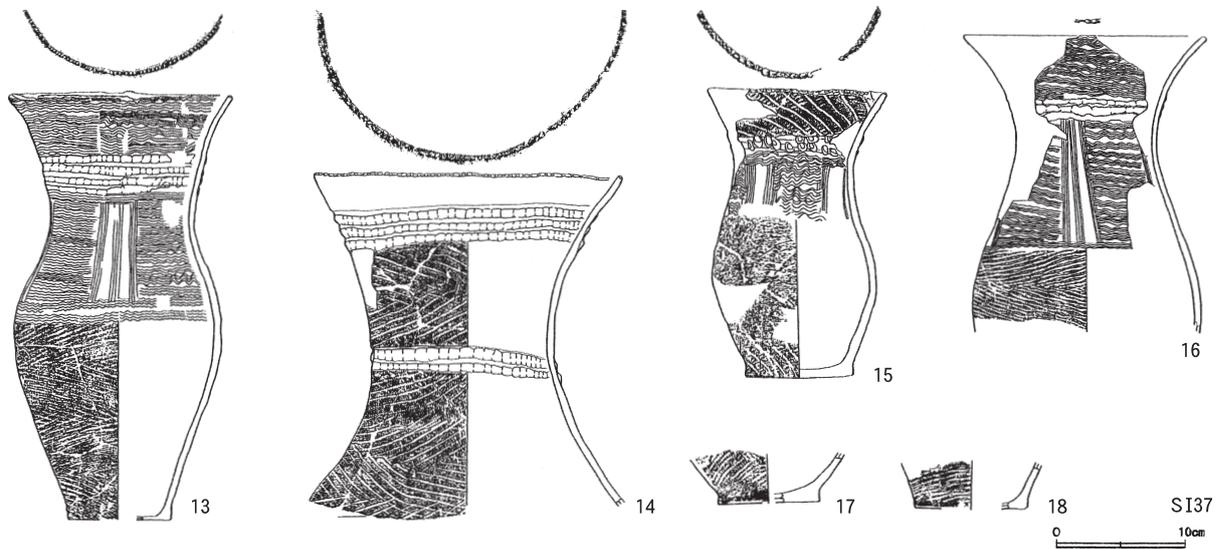
次に「中位段丘部」の13軒（第61・63・70・88・90・92・96・100・105・112・114・134・137号住居跡）について述べる。これら13軒の中の，第61号住居跡は大部分が調査区域外であり，第70号住居跡は後世の住居跡に掘り込まれているため，遺構は一部しか確認されていない。それらを除く11軒の形状は，第92号住居跡が円形であり，他の10軒が隅丸方形と隅丸長方形である。主軸方向は北から西へ2～62°の範囲にあり，このことは「中位段丘部」では長い期間にわたって主軸方向を変えながら集落が営まれてきたことを物語っているのではないだろうか。規模は，長軸が6mを超える住居跡が5軒検出され，「低位段丘部」とは異なる様相を示している。第92号住居跡は，長径8.30m，短径7.90mの円形で，該期の中では最大規模である。水戸市二の沢B遺跡（古墳群）¹⁴⁾でも同様な形状を示すものや八角形の形状を示す住居跡が複数報告されており，単なる住居ではなくそれ以外の性格を



SI28



SI33

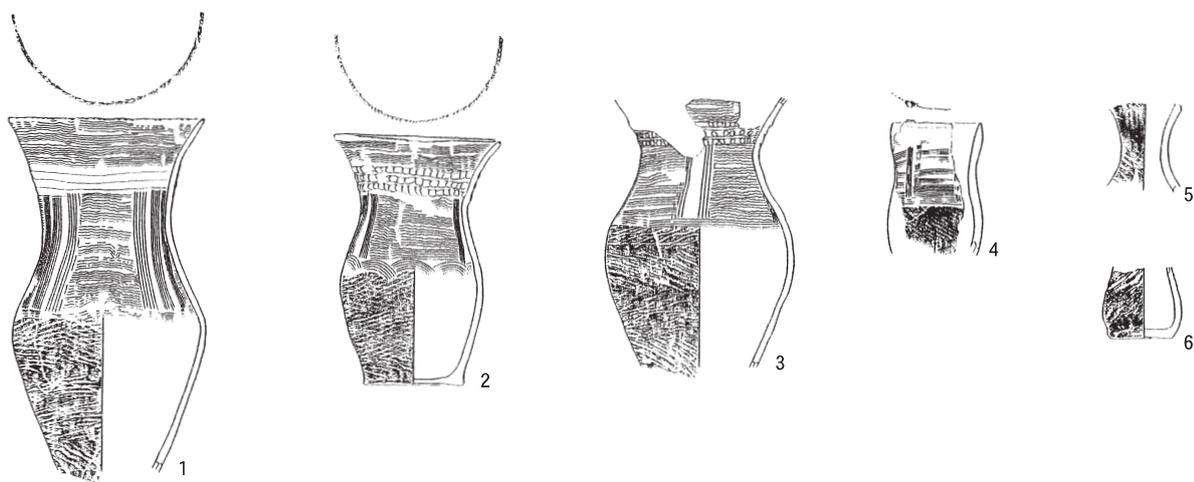


SI37

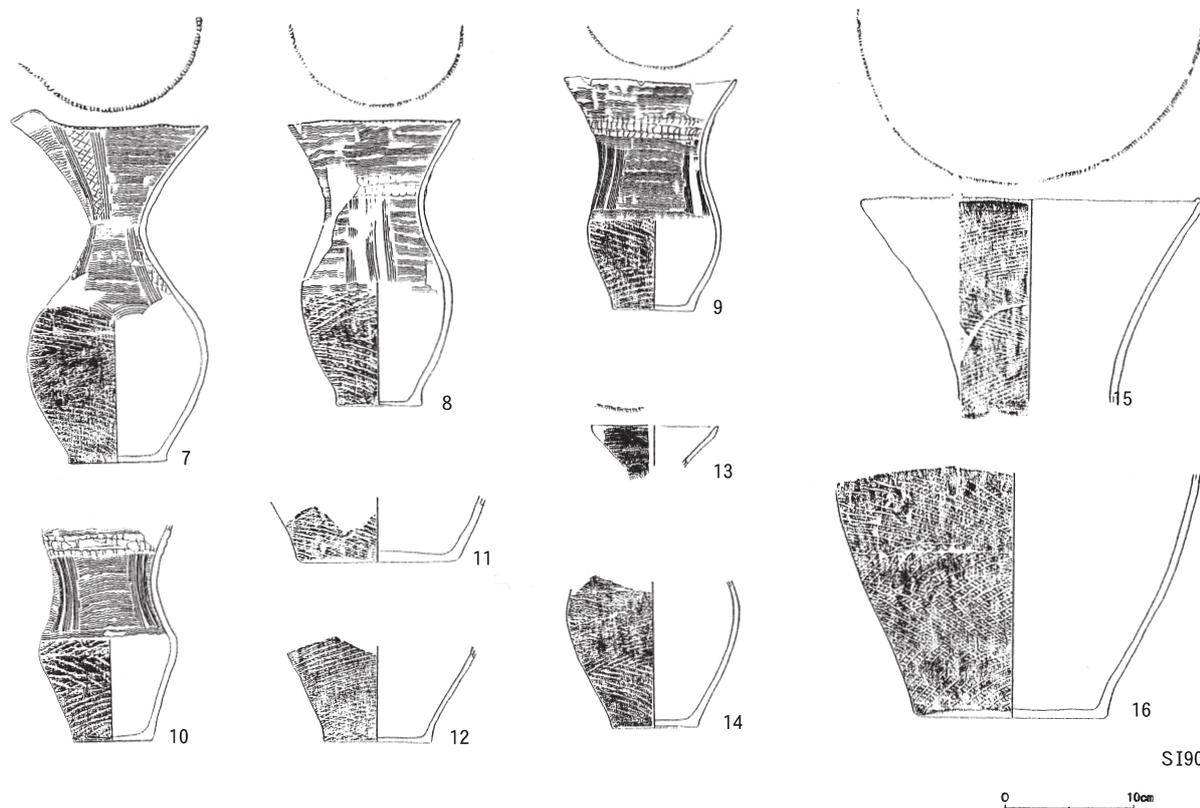
第206図 第28・33・37号住居跡出土土器

考慮する必要もあるが、調査例が少ないため不鮮明な部分も多く、今後の類例の増加を待ちたい。

「中位段丘部」の13軒の住居の中で、比較的良好な状態で弥生土器が出土している住居跡は、第88・90・96・100・105・112・114・134号住居跡である。第92・134号住居跡からは完形の小形広口壺（第208図8，第209図26）が出土しており、頸部下端に廉状文が施され胴部に附加条一種（附加2条）が施されていることから、栃木県東部や茨城県西部を中心に分布する二軒屋式土器と考えられる。また、第100号住居跡からは口辺部から頸部の大部分を欠損しているものの、胴部に附加条一種（附加2条）の縄文が施されている広口壺（第208



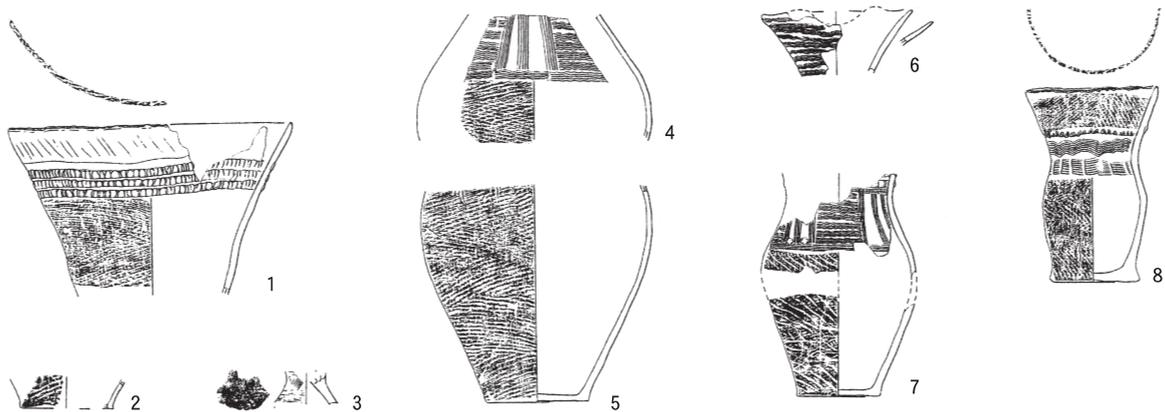
SI88



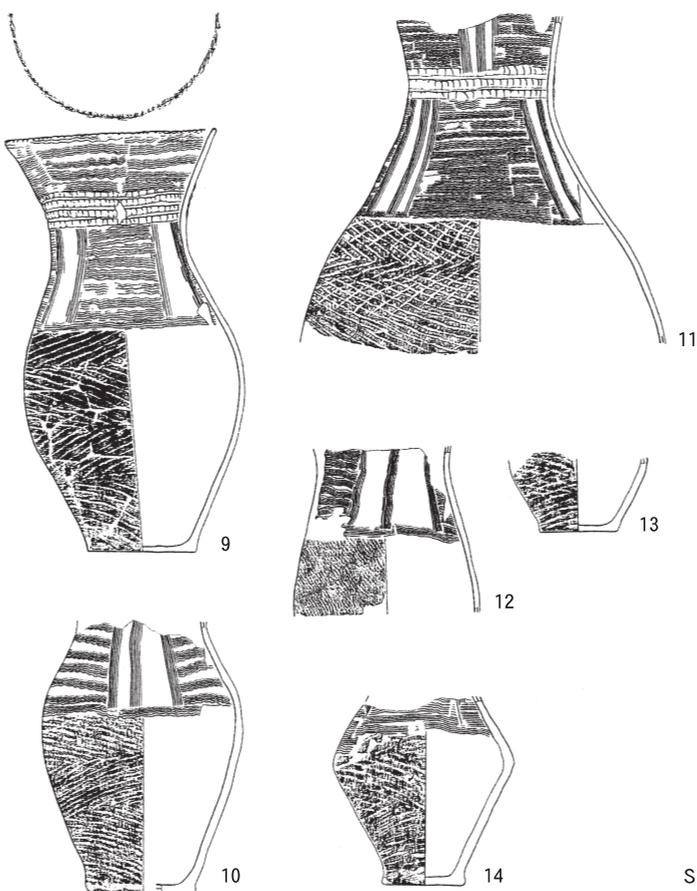
SI90

第207図 第88・90号住居跡出土土器

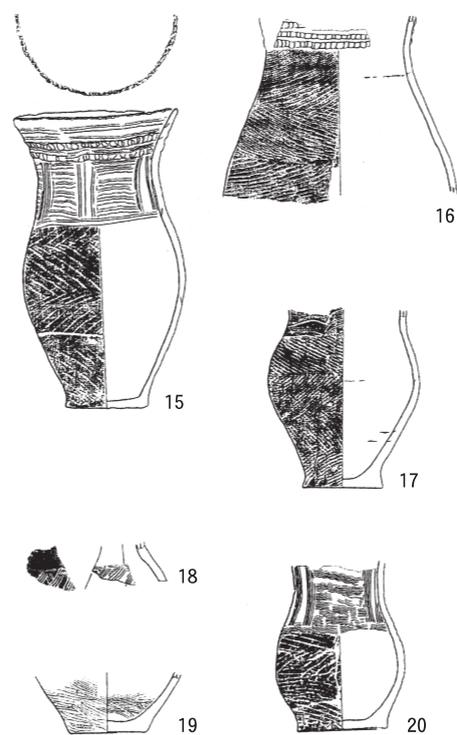
図17) が出土しており、これも二軒屋式土器と考えられる。同様の特徴を備える破片は、第90・112・114号住居跡からも出土している。第100号住居跡からは、樽式と思われる体部内・外面及び底部がへら磨きされた土器(第208図19)が出土しているが、底部近くのわずかな部位のため明確ではない。第114・134号住居跡からは、埼玉県北部や群馬県東部、栃木県南西部に分布する吉ヶ谷式土器¹⁵⁾(第209図21・25)が出土している。21は口縁部片で、口唇部に縄文原体による押圧、口辺部には意図的に輪積痕を残しRLの単節縄文が施されている。25は口唇部にRLの単節縄文を回転押圧し、口辺部上位は輪積痕を残したうえで丁寧にナデが施されている。さらに、口辺部中位から頸部にかけては3段に分けて帯状の指頭痕が認められ、口辺部中位から胴部上位にかけて口唇部と同じRLの単節縄文が施文されている。また、第134号住居跡から出土している22・23(第



SI92



SI96



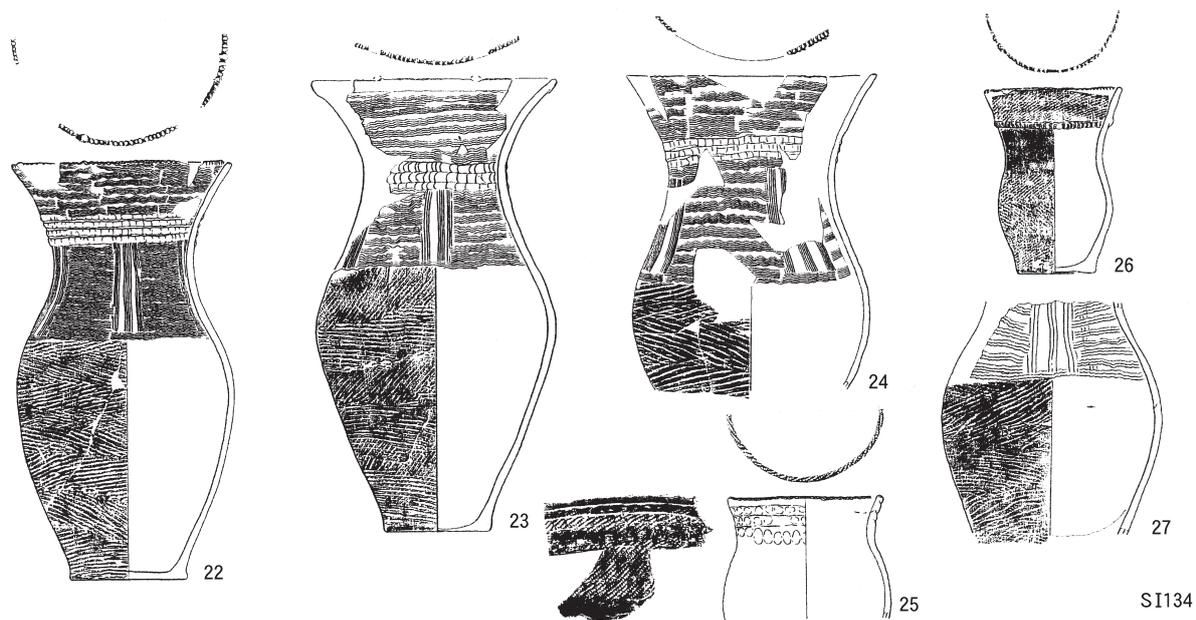
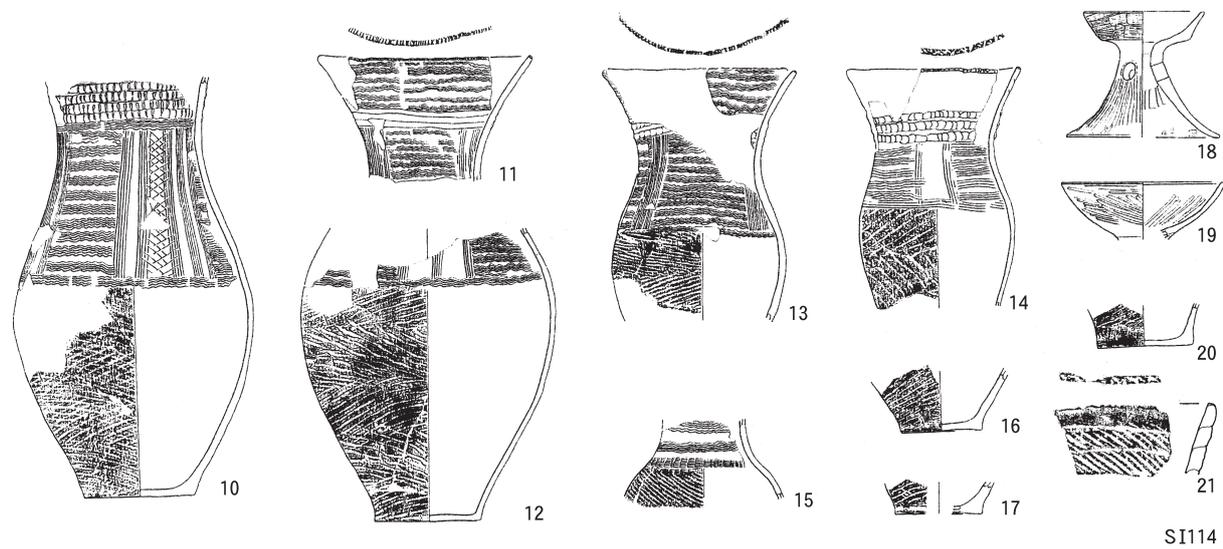
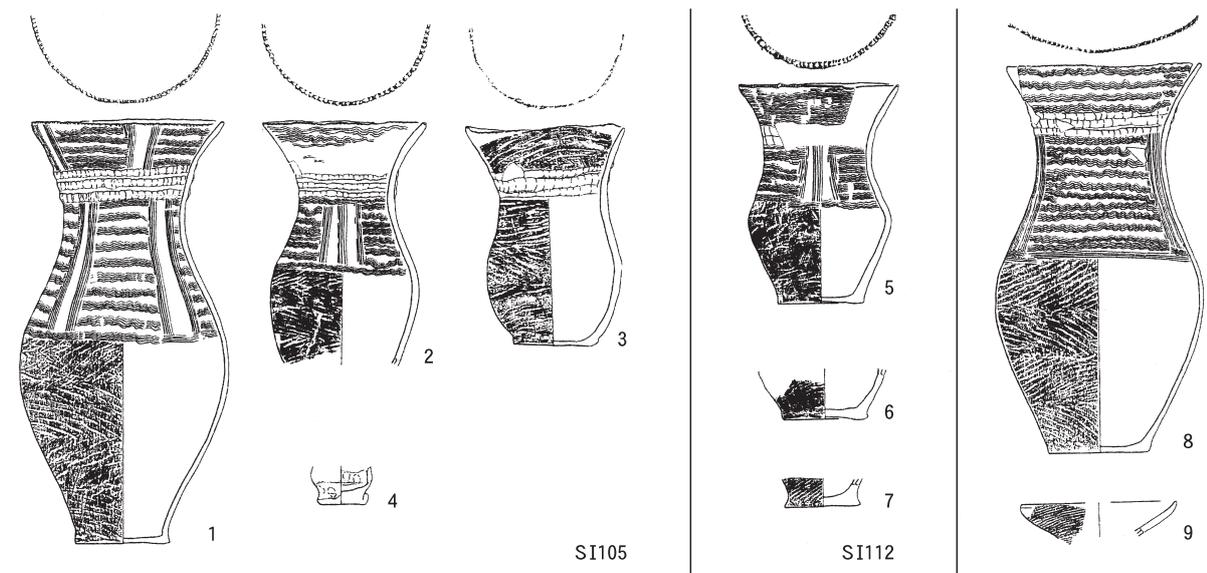
SI100



第208図 第92・96・100号住居跡出土土器

209図)の文様構成や器形は十王台式土器と同様であるが、胴部に附加条一種(附加2条)の縄文が施文されており、23は複合口縁であることから他地域の影響を受けていると考えられる。『大戸下郷遺跡1』では、当区域の第100号土坑から「2段の複合口縁を有し、胴部に羽状構成をとる附加条一種(附加2条)の縄文が施された上稲吉式土器が出土している」と報告されている。

以上、「中位段丘部」の住居から出土した他地域の土器について述べてきたが、十王台式土器についても良好な遺存状態を示している。第88(第207図1～6)・96(第208図9～14)・105(第209図1～4)・112(第209図5～7)・134号住居跡(第209図22～27)は、文様構成や施文の特徴などから同時期のものと考えられる。また、第100号住居跡からも良好な資料(第208図15)が出土しているが、前述の時期より一段階古いものと判断され



第209图 第105·112·114·134号住居跡出土土器

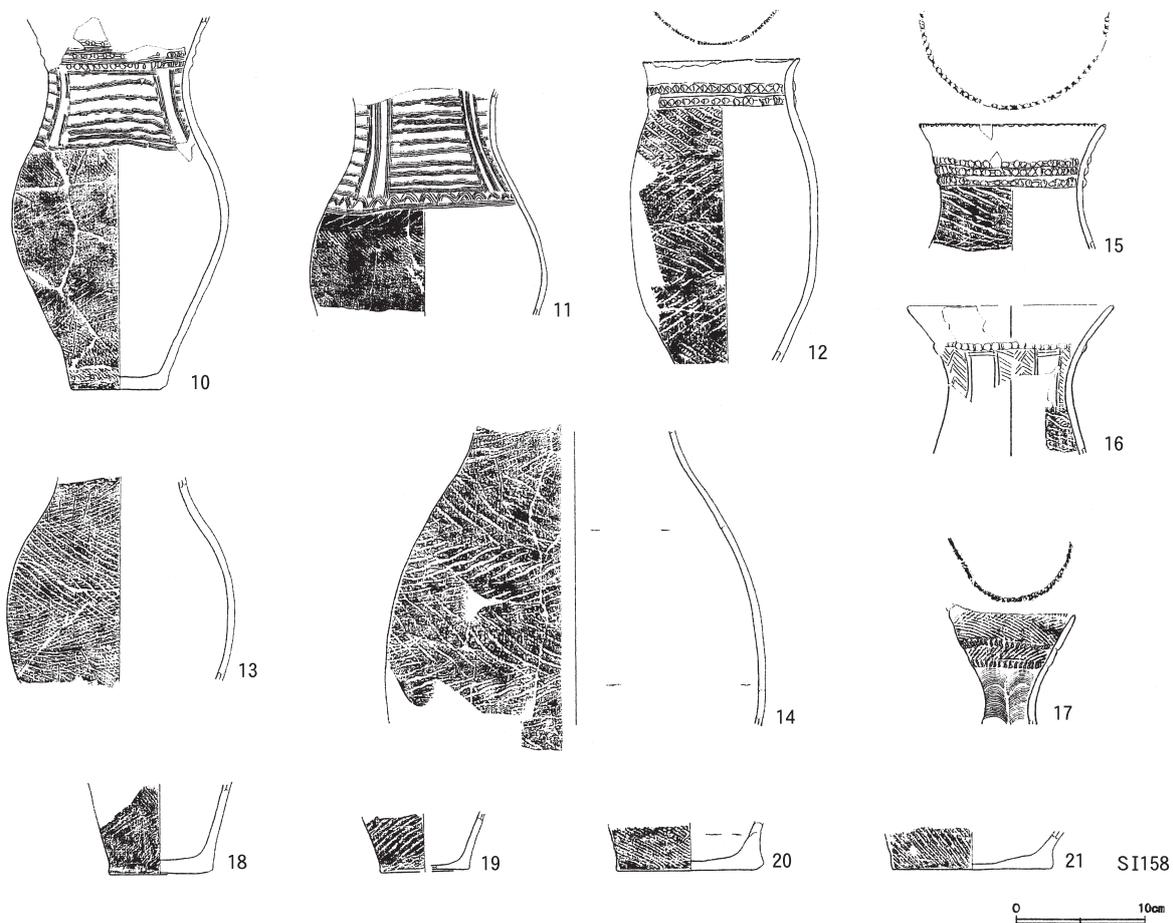
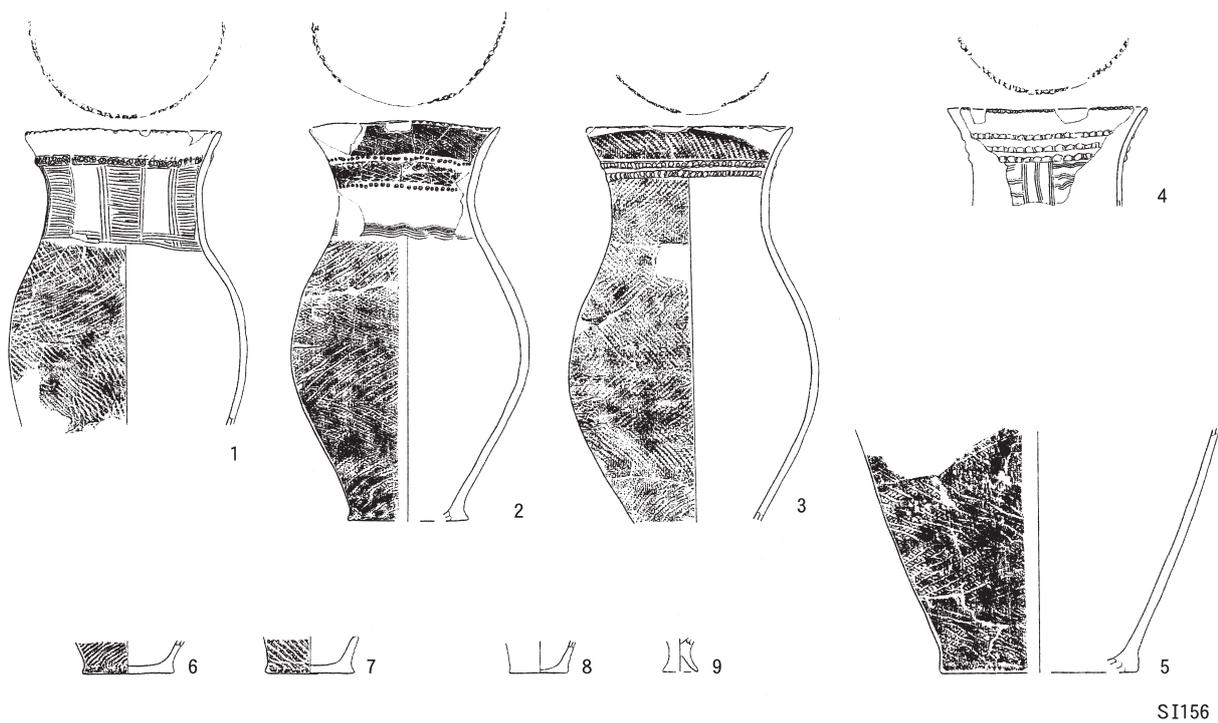
0 10cm

る。第114号住居跡の覆土中層からは「帯状に刺突された区画文」を有する土器（第209図10）が出土しており、投棄されたと判断できる。この土器は、中位段丘部の十王台式土器の中では最新段階¹⁶⁾に属するものと考えられ、同じ覆土中層からは土師器高坏（第209図19）も出土している。特徴的な土器は、頸部文様帯と胴部文様帯を区画する下向きの連弧文が施文された土器である。第88号住居跡からは小形広口壺（第207図2）、第90号住居跡からは片口壺（第207図7）がそれぞれ出土しており、久慈川流域の影響を受けている可能性が高い¹⁷⁾。炉跡に炉石が据えられていた住居跡は第88号住居跡（粘土塊）と第96号住居跡（凝灰岩）の2軒である。

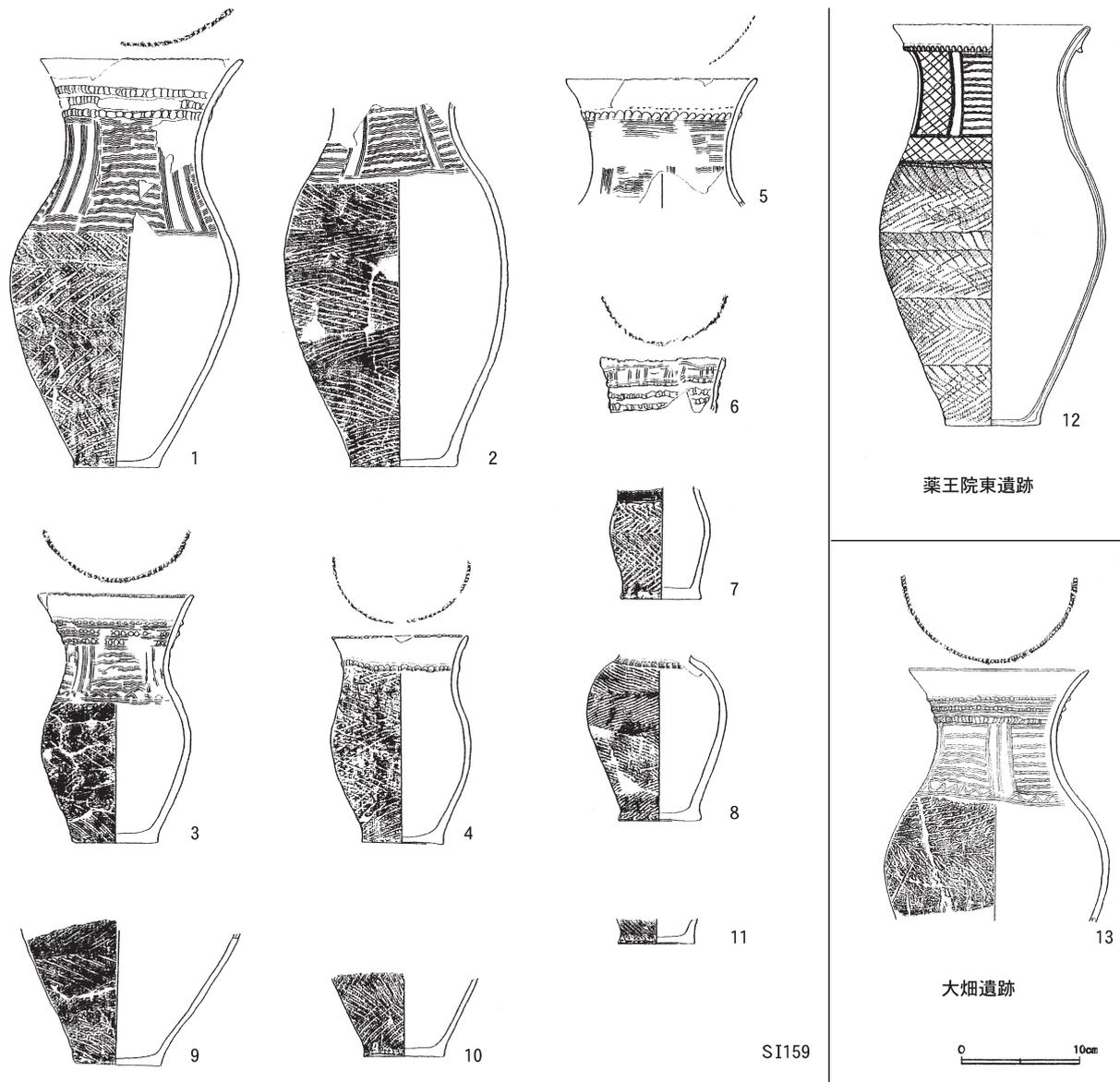
「台地上」では、前述したように11軒（第141・143・148・149・152～156・158・159号住居跡）が検出されている。その中で第141～155号住居跡は耕作による攪乱を受けていたり、大部分が調査区外のものもあり、遺存状態が良くない。形状は、隅丸方形あるいは隅丸長方形で、主軸方向は、第141・149号住居跡が北から西へ20°未満、第143・148・149・153・156号住居跡が北から西へ40～55°の範囲に収まり、第154・155・158・159は東寄りであり、3パターンが認められる。規模は、ほぼすべての住居跡が当遺跡内での平均的な大きさを示している。

「台地上」の11軒の住居群の中で、特徴的な遺物が出土しているのは第156（第210図1～9）・158（第210図10～21）・159（第211図1～11）号住居跡である。第156号住居跡では口辺部が無文の土器が出土している。1は、口辺部が無文で縄文原体による刺突のある隆帯が1条巡り、頸部文様帯の施文幅が狭い。類似する土器は水戸市薬王院東遺跡¹⁸⁾（第211図12）から出土している。また、2・3は文様構成から粗製土器と考えられ、2は口辺部及び頸部と胴部に付加条二種（付加1条）が施文され、頸部上位には縄文原体による刺突列が2条、頸部下端には無文帯を有し、頸部と胴部を櫛歯状工具による波状文で区画している。全体的な器形は十王台式土器と思われるが、施文の手法は上稲吉式土器の様相を示している。しかし、口辺部上位に貼瘤が無いこと、頸部下端の無文帯に櫛描文を有していること、付加条二種（付加1条）が施文されていることが上稲吉式土器との違いとしてあげられる。同様の土器は土浦市根鹿北遺跡¹⁹⁾や大洗町長峯遺跡²⁰⁾からも出土しており、十王台式文化圏と上稲吉式文化圏の交流を示す好資料と考える。第158号住居跡から出土した11は、頸部と胴部の文様帯を波状文と直状文で分割している。同様の土器は涸沼前川を挟んで南に位置する大畑遺跡²¹⁾（第211図13）からも出土している。また、10は口辺部が無文で、隆帯には棒状工具による押圧、隆帯間には櫛歯状工具による横走文が施されており、頸部文様帯の施文幅が狭く古い段階の様相を示している。第159号住居跡から出土した2も口辺部を欠損するものの第158号住居跡の10と同様の文様構成で、古い様相を示している。口辺部が無文の土器は、第159号住居跡からも数個帯が出土しており、1には古い段階から新しい段階への過渡期の様相を認めることができる。3は小形の広口壺で、口辺部は無文、隆帯間に櫛歯状工具による横走文を有している点は第158号住居跡の11と共通し、頸部文様帯の文様構成は第158号住居跡の11と共通している。

「台地上」においても他地域の弥生土器は検出されている。第158号住居跡からは、胴部下端に付加条一種（付加2条）が施文された底部片（第210図20・21）、口唇部は縄文原体押圧で、2段の複合口縁下端には原体による刺突、頸部には櫛歯状工具による下向きの連弧文が施文された片口壺の口辺部片（第210図17）、第159号住居跡からは頸部が無文帯で胴部に付加条一種（付加2条）が施文された小型広口壺（第211図7）、頸部下端に連状文、胴部には付加条一種（付加2条）が施文された壺（第211図8）、胴部下端に付加条一種（付加2条）が施文された底部片（第211図11）などが出土しており、二軒屋式土器の様相を示している。炉跡に炉石が据えられていたのは、第154・159号住居跡でいずれも砂岩である。第154号住居跡の炉石は、後世の耕作機械の影響を受けている可能性がある。また、第159号住居跡では「L字状」に設置されており、当遺跡における唯一の例である。



第210图 第156·158号住居跡出土土器



第211図 第159号住居跡・薬王院東遺跡・大畑遺跡出土土器

(2) 集落の変遷

ここでは、出土遺物から該期の時期分けを行い、集落の変遷についてまとめてみたい。

「台地上」では、第156号住居跡から出土した1（第210図参照）は、口辺部幅が無文で狭く、隆帯が1条であり、頸部の文様帯幅が狭いなどの特徴から薬王院東遺跡（第211図12）と時期が同じかそれに後続する時期への過渡期の土器と考えられ、当遺跡における該期の中でもっとも古い段階の大戸下郷Ⅰ期とする。

第158・159号住居跡から出土している土器では10（第210図参照）・1・3（第211図参照）が特徴的で、いずれも口辺部幅が狭く無文であり、頸部の文様帯幅も狭い。中でも、3は小形広口壺で、大畑遺跡の第1号住居跡から出土した土器（第211図13）と大きさが違うが、同様の文様構成が認められ、第158号住居跡の11（第210図参照）も同様である。大畑遺跡の土器（第211図13）は、十王台式土器群の中で第2段階にあることがすでに明らかになっており²²⁾、同様の文様構成を示す第158・159号住居跡の出土土器を大戸下郷Ⅱ期とする。

「中位段丘部」では「台地上」に続く段階の土器が見られる。第100号住居跡の出土土器では、15や20(第208図参照)が時期判断の対象となろう。15は、粗いながらも口辺部に櫛歯状工具による波状文が施文されており、大戸下郷Ⅱ期とは違った様相を示している。また、頸部の文様帯幅が狭いことも特徴といえよう。20は口辺部が欠損しているため明確ではないが、15同様に頸部の文様帯幅が狭いことが時期判断の対象となり、第100号住居跡から出土した土器を大戸下郷Ⅲ期とする。第92号住居跡の出土土器もこの時期に含まれると考える。

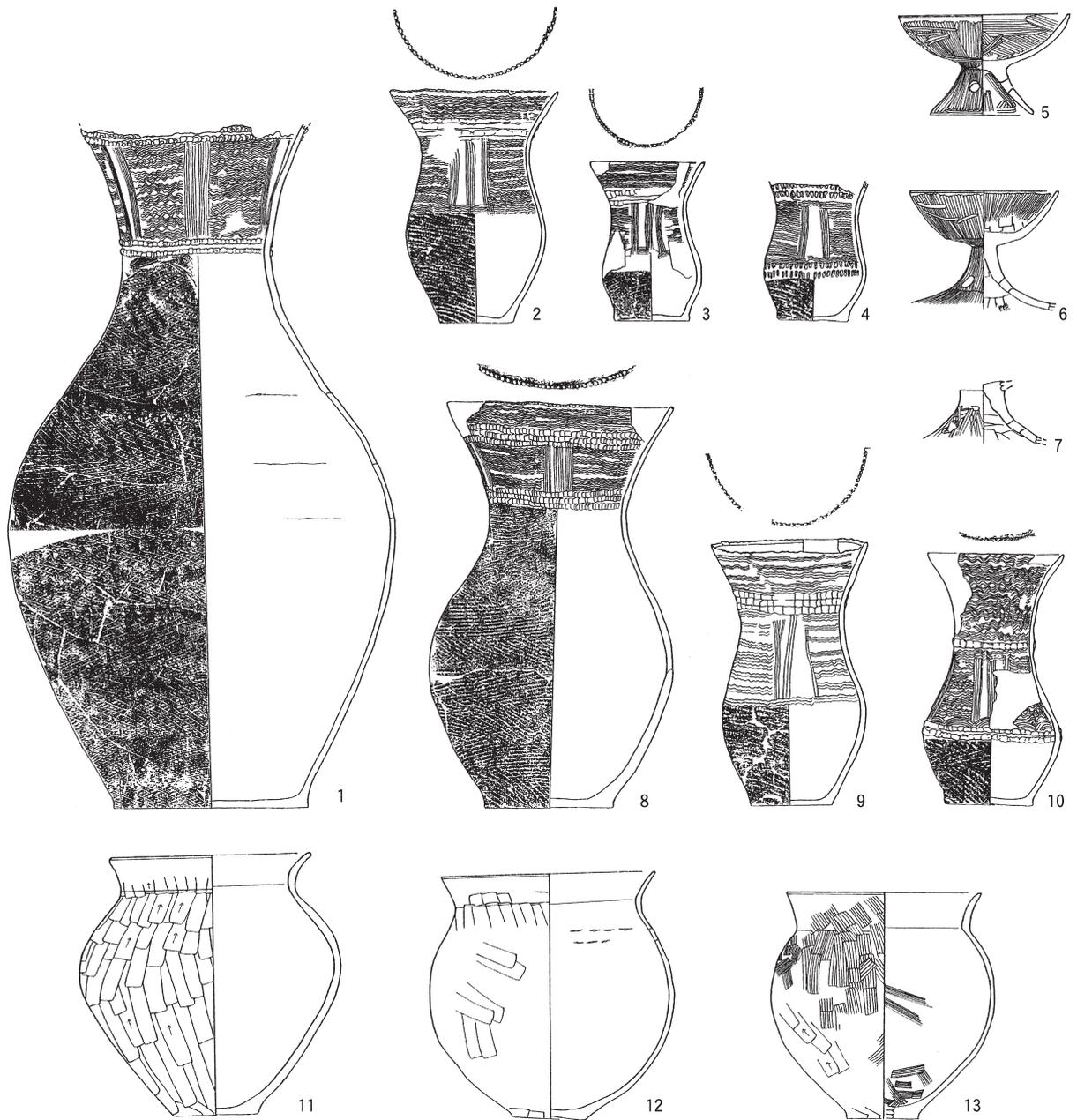
次いで第88・90・96・105・112・114・134号住居跡からの出土土器であるが、第88号住居跡では1と2(第207図参照)が目立つ。1は底部を欠損する中型の広口壺であるが、頸部の文様帯幅が大戸下郷Ⅲ期より広くなり、小形の広口壺の2も文様構成は1と同様である。このような傾向は、第114号住居跡から出土した8や13(第209図参照)、第112号住居跡から出土した5(第209図参照)にも同様の傾向を認めることができる。次いで第90号住居跡から出土した8・9・10(第207図参照)は、頸部の文様帯幅がさらに広がり、下端が胴部最大径近くまで広がっている。第96号住居跡から出土した9(第208図参照)は口辺部幅も頸部文様帯の幅も広くなり、第134号住居跡から出土した22・23・24(第209図参照)も同様である。さらに、第105号住居跡から出土した1(第209図参照)は、頸部の文様帯幅がより広がる傾向が認められる。また、第105号住居跡から出土した3(第209図参照)の文様構成から粗製土器と考えられるが、施文の退化傾向が認められる。これらの住居跡から出土した土器は、文様構成の特徴などから大戸下郷Ⅳ期とする。

最後に「低位段丘部」について概観してみる。「低位段丘部」では、明確な時期を特定できる住居跡が少ないが、第28・33・37号住居跡の遺物を抽出してみる。第33号住居跡から出土した7(第206図参照)は、隆帯に押圧が認められないため退化傾向にあると考えられ、9(第206図参照)は頸部の文様帯幅が胴部最大径近くまで広がっている。同様の傾向は第28号住居跡から出土した4(第206図参照)や第37号住居跡から出土した13(第206図参照)にも認められ、頸部文様帯の下端が胴部最大径まで確実に拡大している。さらに、第37号住居跡から出土した15(第206図参照)には、頸部文様帯の施文に粗さが目立ち、これも退化傾向の一つと捉えることができる。これら3軒の土器群は、前述した特徴から「中位段丘部」の第88・90・96・105・112・114・134号住居跡と同時期と考えられ、大戸下郷Ⅳ期に含むことにする。

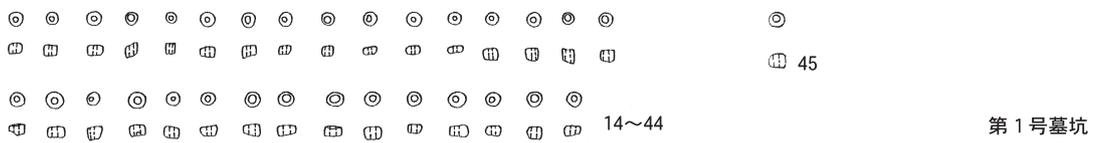
この「低位段丘部」では第21号住居跡²³⁾が検出されている。第21号住居跡は、当遺跡における土師器との唯一の相伴住居であり、「弥生土器と土師器の相伴が見られることから、弥生時代末から古墳時代初頭にかけて生活が営まれた住居であると推定される」と『大戸下郷遺跡1』で報告されている。出土土器(第212図参照)の中には、頸部と胴部に「帯状に刺突された区画文」を持つ土器(第212図4)が出土している。これらの特徴を備えた弥生土器は古墳時代前期の土師器と相伴する例が認められるとの指摘²⁴⁾もあり、第21号住居跡も同じ出土傾向を示していると考えられる。同様の土器は「桜の郷遺跡群」の綱山遺跡²⁵⁾や宮後遺跡²⁶⁾などからも出土しており、「弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭」と位置づけられている。また、10(第212図参照)のように、十王台式土器としての器形が崩れてきている土器も出土している。

第21号住居跡を掘り込んでいた第1号墓坑については、「第21号住居の廃絶時期と埋葬時期の時間差はあまりないと考えられ、古墳時代初頭のこの集落の有力者の墓と想定される」と『大戸下郷遺跡1』で報告されている。墓坑からは威信財のガラス製小玉31点(第212図14~44)と琥珀玉1点(第212図45)が出土しており、『十王台式最後の墓壙』との指摘²⁷⁾もあり、第21号住居跡・第1号墓坑を大戸下郷Ⅴ期とする。

以上、簡単にではあるが「台地上」「中位段丘部」「低位段丘部」について出土土器から個々の住居跡の時期について概観してきた。「台地上」「中位段丘部」「低位段丘部」のいずれからでも該期の住居跡が複数検出されているが、そのすべてが同時期に存在したのではなく、出土土器の時期差や遺構形状の違いなどから、小集団

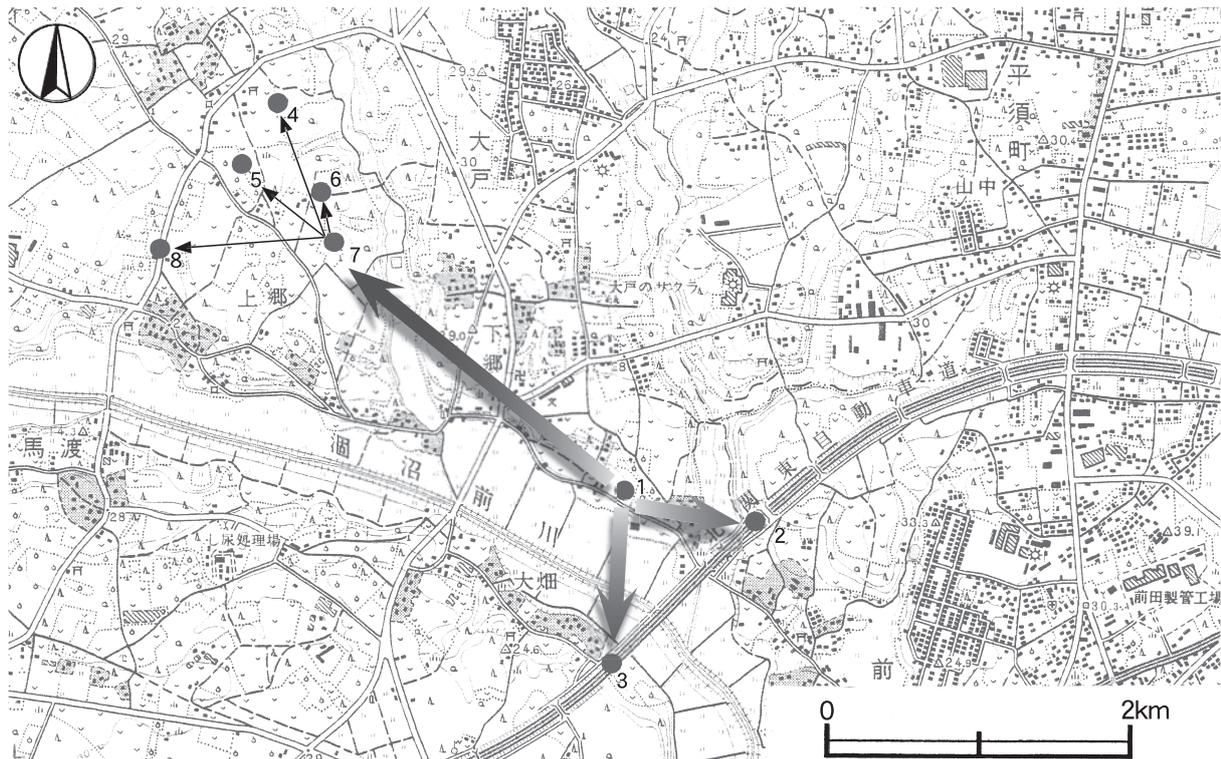


SI21



第212図 第21号住居跡・第1号墓坑出土遺物

の移動や住居の建て替えが継続的に行われてきたことが想定され、大戸下郷Ⅰ～Ⅴ期に分けることが可能となる。つまり、「台地上」には古い段階の十王台式土器を持つ住居が所在し、「中位段丘部」ではそれに後続する時期、さらに、「低位段丘部」では「中位段丘部」と同じ時期かそれよりも新しい時期の住居の存在が確認され、時期が下るにつれて「台地上」から「低位段丘部」へと集落が移動する傾向を示していることが指摘できるのである。



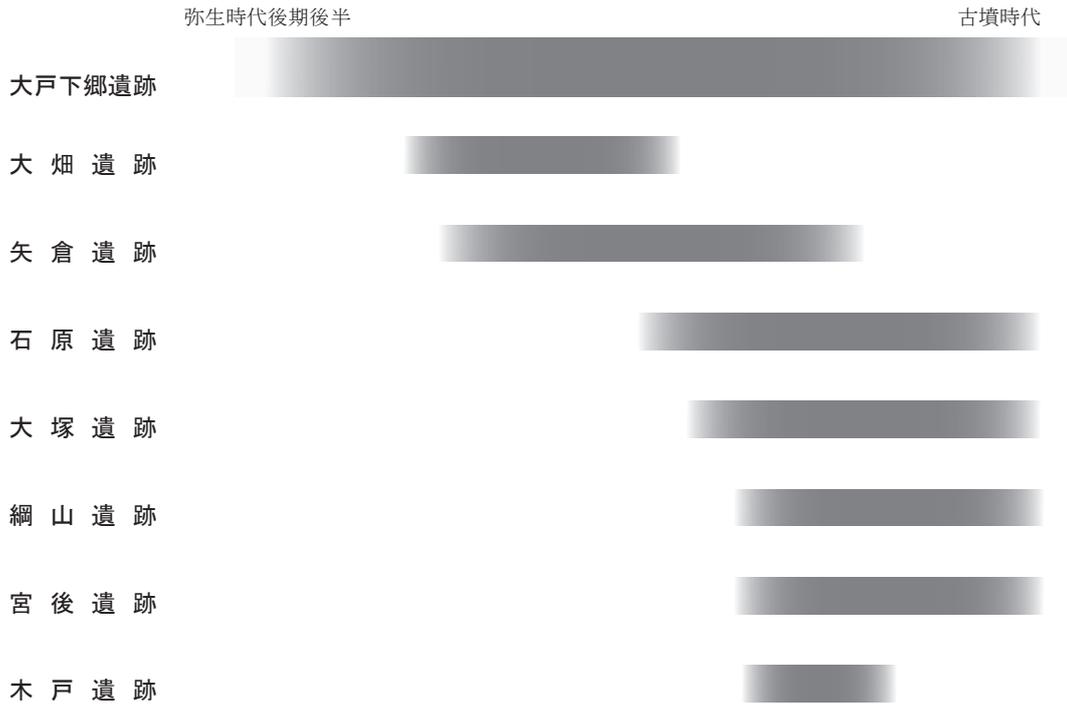
第213図 「大戸遺跡群」集落変遷概念図 1 大戸下郷遺跡 2 矢倉遺跡 3 大畑遺跡 4 宮後遺跡
5 大塚遺跡 6 綱山遺跡 7 石原遺跡 8 木戸遺跡

(3) 「大戸遺跡群」との関わり

「大戸遺跡群」全体の様相を見ると、「大戸遺跡群」は、大戸下郷遺跡と大畑遺跡、矢倉遺跡、さらには宮後遺跡、大塚遺跡、綱山遺跡、石原遺跡、木戸遺跡（桜の郷遺跡群）をも含んでいる。これまでの調査結果から、「大戸遺跡群」においては「大畑遺跡→矢倉遺跡→石原遺跡→大戸下郷遺跡」という集落の変遷が想定されていた²⁸⁾が、今回の調査結果から次のような新たな想定が可能となる。つまり、第156号住居跡の弥生土器（大戸下郷Ⅰ期）は、大畑遺跡のそれよりも1段階古く、葉王院東遺跡と酷似しており、後続する時期（大戸下郷Ⅱ期）の土器は当遺跡にも大畑遺跡にも認められることから、この段階において「大戸下郷遺跡→大畑遺跡」という「集団の移動または分派」の想定が可能となる。さらに、当遺跡の東に位置する矢倉遺跡についても大畑遺跡と同様の想定が可能である。矢倉遺跡で初出する古い時期の土器は大戸下郷Ⅲ期に相当し、この段階において「大戸下郷遺跡→矢倉遺跡」という「集団の移動または分派」があったと想定される。

「桜の郷遺跡群」では、「一部の集団が支流の小橋川を遡って「桜の郷遺跡群」最初の十王台式集落である石原遺跡に至った²⁹⁾という指摘のように、石原遺跡では大戸下郷Ⅲ期に相当する時期から集落が営まれたことが明らかになっており、この時期に「大戸下郷遺跡→石原遺跡」という「集団の移動または分派」が想定できる。その後の「桜の郷遺跡群」内での集落変遷については「石原遺跡の集落が存続している期間に大塚遺跡の該期集落が形成されたものと考えられる。（中略）そして、大塚遺跡を拠点として、宮後遺跡と綱山遺跡に集落が広がっていったものと考えられる³⁰⁾という指摘の通りといえよう。

もちろん、大戸下郷遺跡からの「集団の移動・分派」だけではなく、各時期においては「各遺跡→大戸下郷遺跡」という想定も可能であろう。しかし、大戸下郷Ⅰ期の住居は「大戸遺跡群」の中では当遺跡だけで



第214図 「大戸遺跡群」における集落変遷模式図

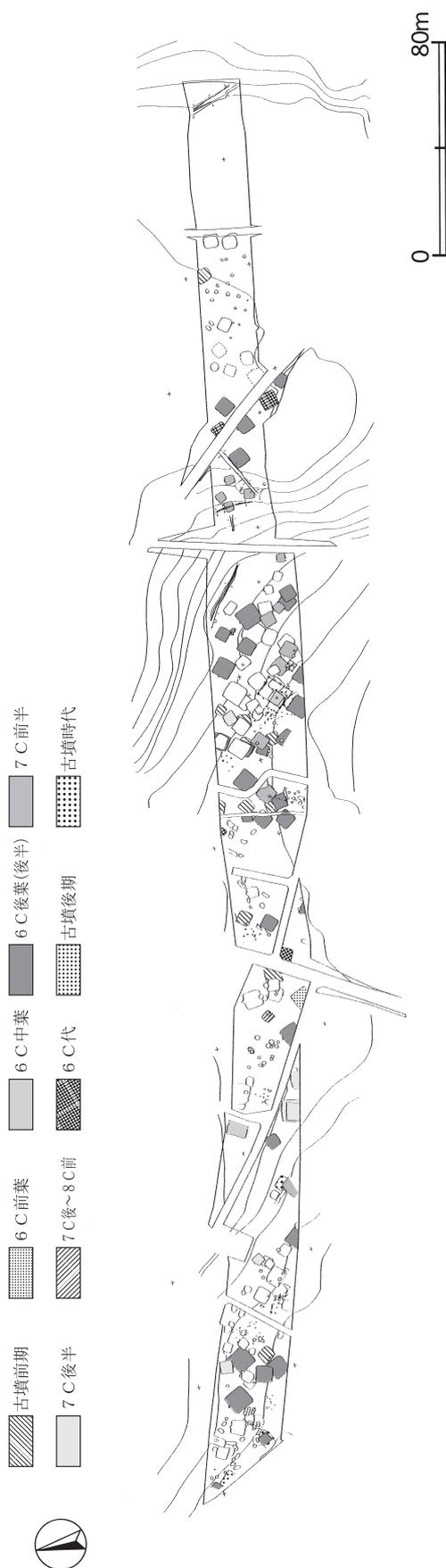
あり、それに後続する時期の集落が当遺跡も含めた周辺部にも所在していることから、該期の中心が大戸下郷遺跡であり、長期間存続した拠点的な集落であったという想定され、大戸下郷遺跡からの移動や分派により、周辺地域で同時に集落が存在したと考えられる。また、当遺跡において該期における他地域の土器（上稲吉式土器、二軒屋式土器、樽式土器、吉ヶ谷式土器、南関東系の土器）が揃って出土していることも拠点的な集落であったことを裏付けていると考える。

石原遺跡への「集団の移動または分派」が想定される時期後も、当遺跡における該期の集落は、大戸下郷Ⅳ期・Ⅴ期と存続してはいるものの、住居数が減少して集落の衰退傾向を読みとることができる。「桜の郷遺跡群」では「弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭」の住居数が40軒（宮後遺跡4軒、大塚遺跡18軒、綱山遺跡12軒、石原遺跡6軒）存在し、後続する「古墳時代前期」の住居数に至っては103軒（宮後遺跡9軒、大塚遺跡25軒、綱山遺跡53軒、石原遺跡16軒）を数え、かなりの規模で集落が存続するのに対し、当遺跡では「弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭」に相当する住居跡は1軒であり、「古墳時代前期」と判断できる住居数も11軒と少ないことから、当遺跡は大戸下郷Ⅳ期からⅤ期にかけて衰退期を迎えたと考えられる³¹⁾。

4 古墳時代

該期における住居数は76軒である。そのうち前期は11軒（14.4%）に対して後期³²⁾は62軒（81.5%）と最も多く、その他に出土遺物や重複関係から3軒（約4%）が古墳時代と判断されている。62軒の古墳時代後期の住居跡は、「低位段丘部」で11軒（17.7%）、「中位段丘部」で41軒（66.1%）であり、「台地上」では西側縁辺部に10軒（約16.1%）が確認されたに留まっている。

ここでは、当遺跡の中心時代と考えられる古墳時代の中でも、特に古墳時代後期の62軒に焦点を絞り、若干の考察を述べることにする。



第215図 古墳時代遺構配置図

古墳時代後期の住居跡は、大きく6世紀代(62.9%)と7世紀代(32.2%)に分けられ、1軒だけが7世紀後葉から8世紀前葉とされ、出土土器と遺構の形状などから5期に分けられる。内訳は、6世紀前半(前葉と中葉を含む)が2軒(I期)、6世紀後半(後葉を含む)が33軒(II期)、7世紀前半が13軒(III期)、7世紀後半(7世紀後葉から8世紀前葉を含む)は8軒(IV期)である。その他に、遺構の検出状況が悪く、遺物が少ない4軒は6世紀代とされ、残りの2軒は重複関係や出土土器などから古墳時代後期と判断している。

(1) 古墳時代後期第I期

この時期の住居跡は2軒(第46・106号住居跡)である。第46号住居跡は「中位段丘部」西寄りの標高14mのやや広がった平場に位置しており、焼失住居である。出土遺物もわずかで、6世紀前葉の特徴を示す坏2点と須恵器の甕などが出土している。『大戸下郷遺跡1』では、「甕は出土状況から投棄された」と報告されている。第106号住居跡は「中位段丘部」の中央部に位置している。主軸方向は古墳時代後期の中では数少ない東向きである。

この時期、当遺跡にはまだ大きな集落が出現していなかった可能性が想定されるが、南側の緩やかな傾斜をもつ平坦部などに集落の広がりを求めることも可能であろう。

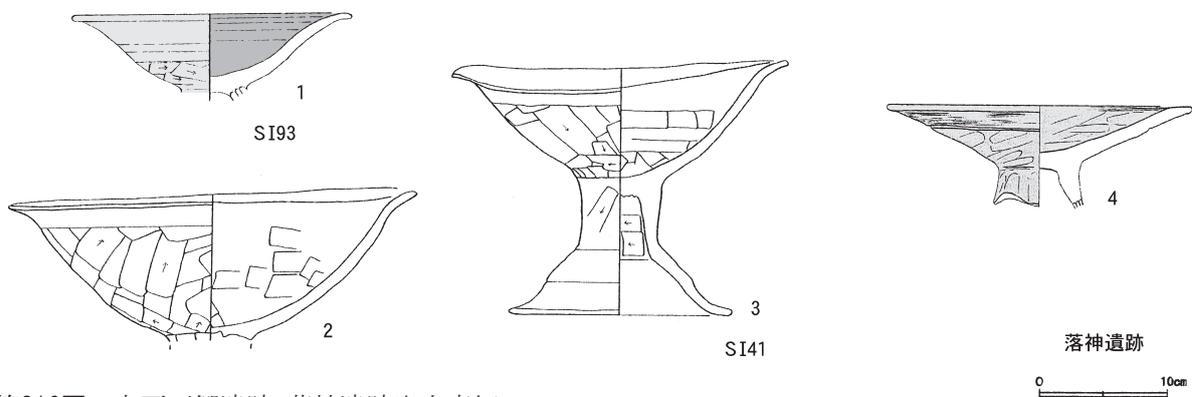
(2) 古墳時代後期第II期

この時期の住居跡は33軒(第5・9・13・16・19・22・32・41・43・53・56・57・62・65・66・80・81・84・86・93・97・98・123・125・127・130・132・133・136・144・145・147・151号住居跡)である。I期が2軒であるのに対し、住居数が増加して集落が拡大した時期と捉えられる。検出された地区も「低位段丘部」から「台地上」にわたっており、住居跡の分布は、集落が急激に拡大したことを裏付けている。該期の住居跡は、第57・84号住居跡を除いてすべてが北西方向を主軸としている。遺構全体が確認された住居跡の規模は3~8mで、「低位段丘部」では第5号住居

跡が当遺跡の中での最大規模の長軸8.08m，短軸7.98mである。第16号住居跡も長軸7.60m，短軸7.43mで大型に属している。この2軒は隣り合っており，第19号住居を含めて同時期に機能していた可能性が高い。

「中位段丘部」では，第80号住居跡の長軸7.70m，短軸7.40mが大きく，出土土器や遺構の配置，主軸方向などから第97号住居跡との同時性が指摘できる。

「台地上」でも同様で，第144・145号住居跡が形状，規模，主軸方向などが同規模である。遺物が少なく，遺構の形態などから6世紀代と判断した第150号住居跡も第144・145号住居跡と形状や規模，主軸方向を同じくしており，同時に機能していた可能性が高い。その他にも第81・86・93号住居跡や第132・133号住居跡などをもまとまりとして見ることができ，「低位段丘部」から「台地上」にかけてそれぞれに2～3軒程度のまとまりがあったと考えられる。



第216図 大戸下郷遺跡・落神遺跡出土高坏

第Ⅱ期住居群の中で，特徴的な遺物は第41号住居跡の高坏（第216図2・3）である。『大戸下郷遺跡1』では6世紀後葉と判断しており，「口径約32cmの県内では希な大形の高坏の坏部と口径約27cmの高坏が出土しており，当地域のこの時期の権力者の存在を窺わせる」と述べている。2・3の坏部の調整は，体部外面にヘラ削りが認められ，内面は共にナデ調整である。『大戸下郷遺跡2』でも，「中位段丘部」に位置している第93号住居跡（6世紀後葉）から口径約22cmの高坏の坏部（第216図1）が出土しており，体部外面下端にヘラ削りが認められるが内面のナデ調整は認められない。また，外面には赤彩が施され，内面は黒色処理されており，第41号住居跡の1・2とは様相を異にしている。涸沼前川流域を含む当遺跡周辺ではこのような大型の高坏の出土例がなく，大洗町落神遺跡³³⁾の第58号住居跡から出土した高坏の坏部（第216図4）に類例を求めることができる。落神遺跡の例は6世紀後半と判断されており，他の出土土器からも当遺跡の第41・93号住居跡と同時期と考えられる。4は口径は約24cmで，体部外面にはヘラ削りやナデ調整が認められる。また，内・外面は赤彩されており，器形や調整など，当遺跡の第93号住居跡から出土した3との類似点が多い。落神遺跡では，4が竈東側袖部に寄り添うように逆位で出土していることから「竈祭祀」との関連性を指摘しているが，当遺跡ではそのような出土状況は認められない。しかし，このような高坏は県内でも希であることから，限られた供献具として限定的に製作・使用されたものと考えられる。

この時期の住居群の中で，竈内から遺物が出土する住居跡が10軒（第16・32・65・66・81・86・122・130・144・147号住居跡）確認されている。第16号住居跡では2個体の甕が出土し，第32号住居跡では口辺部が欠損した甕が横位で出土している。第65号住居跡では，甕と小形甕が支脚上に並ぶような状態で出土している。第

66号住居跡では、坏・甕（2個体）・支脚の4点が出土し、「支脚上から倒れたと思われる甕がつぶれた状態で出土している」と『大戸下郷遺跡1』で報告されている。第81号住居跡では甕に坏が乗った状態で斜位で出土しており、支脚は焚き口付近から出土している。第86号住居跡でも甕が横位の状態で1個体出土している。第144・147号住居跡からはそれぞれ甕が2個体出土しており、中でも第147号住居跡は、甕が正位の状態で2個体並んで出土している。これらの住居跡では、住居の廃絶時には竈に甕が掛けられた状態で遺棄された可能性が高く、その後の崩落で位置が動いたため斜位や横位で出土したと想定される。

一方、第122号住居跡では椀が出土しており、出土状況から意図的に竈内に遺棄したものと考えられる。第130号住居跡では、竈内から赤彩された高坏が逆位で出土しており、裾部が意図的に打ち欠かれていることから、支脚として転用された可能性も考えられるが、強く二次焼成を受けていないことから、住居の廃絶時に何らかの祭祀的な行為がなされたとも想定される。

竈に遺棄された遺物について述べてきたが、第Ⅱ期の33軒の中で、住居の廃絶時に竈に甕を掛けたまま遺棄されていたと判断できる住居跡は8軒である。後続する第Ⅲ期からも2軒確認されている。当時、律令期の竈神祭祀などのような信仰はあるものの、竈に甕を掛けたまま遺棄することが日常的に行われていたことなのか、または何らかの目的を持つ行為なのかは調査からも究明することができなかった。今後の類例の増加を待ちたい。

(3) 古墳時代後期第Ⅲ期

この時期の住居跡は13軒（第36・45・68・72・77・79・99・101・122・138・139・140・142号住居跡）であり、「低位段丘部」から「台地上」まで住居跡の広がり認められるが、最盛期を迎えた第Ⅱ期と比べると住居の規模や構成が縮小傾向にあり、衰退期を迎えていると想定される。特に、台地縁辺部の4軒（第138・139・140・142号住居跡）と「中位段丘部」の東部の2軒（第72・77号住居跡）などは小規模のものであり、集落の中心的な存在ではないと想定される。しかし、第36号住居跡から須恵器の提瓶・壺が出土し、第68号住居跡からは須恵器の壺、第79号住居跡でも須恵器の提瓶・小形壺が出土しており、集落の衰退期の中であっても優位性をもつ集団がいたことは容易に想定できる。

この時期でも竈内から遺物が出土する住居跡が2軒確認されている。第79号住居跡では、竈内から2個体の甕が出土し、出土状況から住居廃絶時には竈に掛けられたまま遺棄されたと考えられる。第125号住居跡では、耕作機械による攪乱を受けてはいたが、竈内から甕と手捏土器、支脚が出土しており、甕は住居廃絶時に竈に掛けられたまま遺棄されたと想定されるが、手捏土器については竈崩落後に流れ込んだ可能性が高いと考えられる。

(4) 古墳時代後期第Ⅳ期

この時期の住居跡は8軒（第17・27・29・30³⁴⁾・38・44・67・116号住居跡）であり、第Ⅲ期に引き続き衰退傾向が続いている。住居は「低位段丘部」と「中位段丘部」に散らばっている。該期の中では、第27・29・30号住居跡の軸がほぼ同じで規模も大きく、優位性をもつ住居であると想定される。また、遺構には伴わないと判断したが、須恵器高坏（第27号住居跡）や須恵器筒型器台（第30号住居跡）が出土していることは、これらを使用できる優位性をもつ中心的な住居が付近にあったことを裏付けている。また、第116号住居跡からは羽口が出土しており、鍛冶炉や鉄滓など具体的な遺構・遺物は見つかっていないが、この時期の前後に鉄関連の手工業が当集落において始まっていたと想定できる。

大戸下郷遺跡の中心である古墳時代後期の住居跡62軒を4期に分け、各時期を概観した。「大戸遺跡群」の他の遺跡には、古墳時代後期の住居が極端に少ないか皆無であるなか、当遺跡だけに該期の住居数が多いことは、この時期の中心が大戸下郷遺跡であったことを示していると考えられる。

該期の大戸下郷遺跡は、一部台地上に遺構が所在するとはいえ、その大部分は「南西緩斜面部」という傾斜地に立地している。集落を営むのに平坦地を占地するのが当然と考えられるが、あえて傾斜地を集落とした背景には、当遺跡の南側には涸沼前川とその支流である小橋川が合流してできた氾濫原（＝可耕地）が確保できることもひとつの要因と考えられる。農業を営み、その収穫を基本にそれなりの規模で生活するためには、当遺跡は目前に可耕地を持つという絶好の立地条件を兼ね備えており、その絶頂期を古墳時代後期第Ⅱ期に迎えるのである。しかし、より大規模な集落を営むためには平坦地であることが必須条件であり、その必須条件が満たされないことから第Ⅲ～Ⅳ期にかけて衰退していったと推察できる。特に、7世紀後半の律令期直前期には、当遺跡での生活を継続する集団と、他の地での生活を求める集団とに分かれ、分派集団は「桜の郷遺跡群」へ進出したと想定されるが、それは権力的な移住とも推察できる。彼らはそこで律令期を迎えるが、残留した集団は「桜の郷遺跡群」へ進出していった集団に主導権を奪われていくと考えられる。

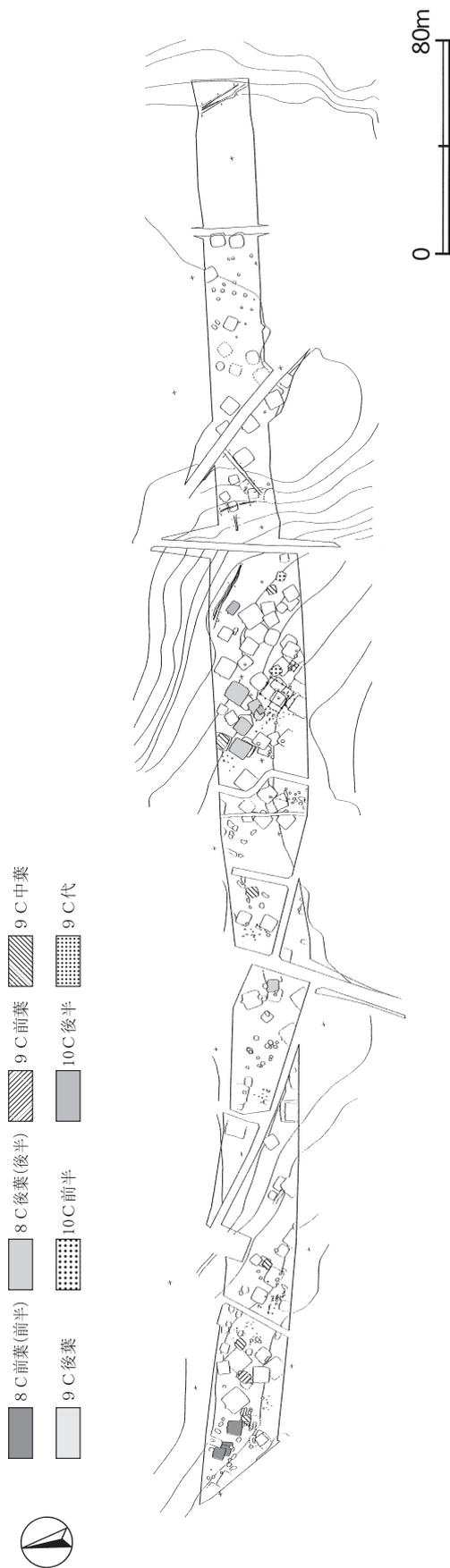
5 奈良時代・平安時代

該期の住居は21軒で、8世紀前半（前葉を含む）4軒、8世紀後半（後葉を含む）5軒、9世紀前葉1軒、9世紀中葉6軒、9世紀後葉1軒、10世紀前半1軒、10世紀後半2軒である。そのほか、出土土器が少量であり、住居の規模や主軸方向などから9世紀代と判断される住居跡が1軒である。以下、各時期ごとに概略を述べる。

8世紀前半の住居跡は4軒（第1～4号住居跡）で、「低位段丘部」の西に位置している。住居の規模は4～5mで、第4号住居跡が長軸5.25m、短軸5.15mの最大規模である。主な出土土器は須恵器坏で、これらの中には胎土に針状鉍物を含むものが多いことから、『大戸下郷遺跡1』では「木葉下窯産の可能性が考えられる」と報告されている。また、第1・2号住居跡については「出土遺物に時期差がなく、建て替えの可能性も考えられる」と指摘されているように、この時期は小規模な集落構成と想定される。

8世紀後半の住居跡は5軒（第51・110・111・118・121号住居跡）で、「中位段丘部」に位置している。第110・111・118・121号住居跡は、「中位段丘部」のやや東寄りに集中して位置しているのに対し、第51号住居跡はやや西寄りに単独で位置していることから、調査区南側の緩斜面地にも同時期の住居が分布していたと思われる。検出された中の第111・121号住居跡は、規模の違いはあるものの主軸方向が同じであり、出土土器などから判断して同時期に機能していた可能性が極めて高いと考えられる。また、この2軒は建て替えが行われている。第111号住居跡は4辺が拡張され、第121号住居跡は2辺の拡張であり、拡張以前の住居は同様の規模であることが調査の結果判明している。出土遺物でも類似点が見られ、第111号住居跡からは須恵器高台付坏（口径21.5cm）・須恵器盤（口径21.4cm）・須恵器蓋（口径21.6cm）が出土しており、第121号住居跡では須恵器盤（口径23.0cm）が出土している。さらに、刀子も同様に出土していることから、この時期における中心的な住居であったと考えられる。

また、この時期の中では第118号住居跡も特徴的である。「中位段丘部」の東寄りに位置し、長軸5.40m、短軸5.18mの方形で、主軸方向はN-38°-Wであり、他の同時期の住居跡とは規模も軸方向も異なっている。住居跡からは土師器片2190点、須恵器片771点の他に、土製品、石器、鉄製品、鉄滓、手捏土器などが出土



第217図 奈良時代・平安時代遺構配置図

している。土師器片は、覆土中層以下からの出土割合が多く、住居廃絶後の早い段階に北側から投棄され始めたものと想定される。また、南東コーナー側からも投棄されており、北側からの投棄時期よりやや遅れて投棄されたと推察できる。須恵器片については、広範囲での散在が認められ、覆土中層以上から出土するものが多く、土師器片より遅れて投棄されたと考えられる。土器片のほとんどは近接する位置から出土したものが接合する傾向にあるが、わずかに比較的離れた位置から出土したものや出土層位が違うものが接合している例もある。しかし、完形に復元できるものがないことから、土器片を投棄する過程で人為的に埋め戻しをしていると想定される。さらに、出土状況からこれらの出土遺物は住居に伴わないと判断され、これらを使用していた人々の住居跡は調査区域外にあるものと考えられる。また、「大」とヘラ書きされた小形の坏や円面硯なども出土しており、文字を書ける人物の存在が想定される。

9世紀前葉の住居跡は1軒（第8号住居跡）で、「低位段丘部」に位置しており、竈の両脇に棚状施設を有しており、この形状を示した住居跡は当遺跡において1軒である。近隣遺跡では、宮後遺跡³⁵⁾で5軒、大塚遺跡³⁶⁾で4軒、綱山遺跡³⁷⁾で4軒、木戸遺跡³⁸⁾で1軒確認されている。棚状施設を有する住居跡については、「斉一性の強い様相を呈することから、その背景には同一の集団が関わっていたものと推測され、(中略)非農業民である特定工人集団の関与を(中略)示している³⁹⁾という論説もあるが、当遺跡では特定工人集団に結びつくような遺構の検出は認められていない。

9世紀中葉の住居跡は6軒（7・12・39・64・76・120）である。これらは「低位段丘部」から「中位段丘部」にかけてまばらに検出されており、細々と集落が営まれていたと想定される。また、『大戸下郷遺跡1』では「第12号住居跡からは、「㊦」と墨書された土師器高台付皿や「川九万カ」と墨書された須恵器坏が出土している。第39号住居跡からも「㊦」と墨書された土師器坏が出土しており、字体も同一と考えられることから、両住居跡の同時性など密接な関係が想定される」と報告されている。

9世紀後葉の住居跡は1軒（第109号住居跡）で、多量の炭化材と焼土が出土していることから焼失住居と考えられる。竈右袖部からは須恵器甌，左袖部からは土師器甕がそれぞれ竈袖部の補強材として出土しており，当遺跡では唯一の出土例である。また，灰釉陶器も1点（瓶類。水瓶カ）出土しており，これも唯一の出土例である。

10世紀前半の住居跡は1軒（第104号住居跡）で，当遺跡では唯一の南竈であり，底部を回転糸切りされた土師器坏が出土している。

10世紀後半の住居跡は2軒（第78・107号住居跡）である。第78号住居跡の竈からは，黒色処理でへラ磨きされた土師器高台付坏が自然石の支脚上から逆位で出土している。貯蔵穴寄りの壁際から丸柄の表金具が出土し，中央部上位が二次利用を目的に穿孔されており，本来の意味とは異なった使い方がされていたと想定される。また，鎌が2点出土しており，形状の特徴などから草刈り用として使用されたと考えられる。

以上，奈良時代から平安時代にかけて簡単に述べてきたが，古墳時代後期Ⅲ期から始まった衰退の傾向は奈良時代・平安時代に入っても止まらなかった。その背景は，古墳時代後期Ⅲ期に「桜の郷遺跡群」方面へ移住していった集団の集落が「大戸遺跡群」の中での中心集落へと発展したことに大きく影響されていると考えられる。つまり，「桜の郷遺跡群」での大塚遺跡や宮後遺跡が行政的な主体となり，その他は周辺部の集落となって規模が小さくなったのではないかと考えられる。

6 終わりに

当遺跡は，縄文時代ではわずかに低位段丘部に住居が散らばるだけであったのが，弥生時代後期後半以降は集落が継続し，他の遺跡への「集団の移動または分派」が想定されるまでに充実する。その後，古墳時代前期や中期において衰退期や断絶期を迎えるが，古墳時代後期（6世紀後半）には再び隆盛期を迎え，周辺遺跡を圧倒するかのように集落が発展する。しかし，当遺跡が斜面地に立地しており，大規模集落を営めるだけの立地条件を備えていないのに対して，台地平坦部を占有する「桜の郷遺跡群」が「大戸遺跡群」の中心集落へと変わる中，当遺跡の衰退傾向は止まることはなかった。その結果，当遺跡は「桜の郷遺跡群」の衛星的な集落へと変わっていくのである。その後，大戸下郷遺跡は断絶期を経た後，中世や近世では墓域として利用されるのである。

これら「大戸遺跡群」における各遺跡の盛衰については，地理的環境が影響していることも想像できる。前述したように，当遺跡は緩斜面地に立地し，集落の立地としては決して適しているとは思えないが，立地要因のひとつに耕地の問題もあると考えられる。当遺跡の南には，涸沼前川とその支流である小橋川の合流点の広い氾濫原があり，水田耕作のための可耕地が十分に確保できる。大戸下郷の人々は，「斜面地」という“デメリット”よりも涸沼前川に面した氾濫原（＝可耕地）を利用するという“メリット”を選択したかのようなのであるが，その意図は不鮮明である。一方，宮後遺跡，大塚遺跡，綱山遺跡，石原遺跡，木戸遺跡を含む「桜の郷遺跡群」は，大戸下郷遺跡と同様に涸沼前川に面しているとはいえ，可耕地までの距離が遠く，また，遺跡群の南東側に入り込んでいる小橋川は氾濫原が狭く可耕地を十分に確保できないという“デメリット”が考えられる。つまり，広い可耕地と狭い可耕地では，それぞれの地理的条件（可耕地や居住地の許容範囲）に見合った集落の規模が自ずと決まる。その結果として，弥生時代後期後半の拠点的な集落の出現を見，古墳時代後期Ⅱ期における大規模集落の形成につながると考えられる。しかし，それは稲作のための水田開発や経営が小規模で行われていた時期内に留まるであろう。水田耕作のための技術や労力が組織的に編成され，集団内に首長的な人物が現れるようになると，当遺跡の斜面地では可耕地や居住地の許容が不足

し、必然的により広い可耕地や居住地を求めようになるはずである。それが「桜の郷遺跡群」であると思われる。弥生時代後期に「桜の郷遺跡群」へ「集団の移動または分派」という形で移り住んだ集団は、石原遺跡を起点に「集団の移動または分派」を繰り返す、その後わずかの間に大塚遺跡、宮後遺跡、綱山遺跡、木戸遺跡などへ集落を拡大していったのではないだろうか。「弥生時代」の項でも触れたように、「桜の郷遺跡群」では「弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭」の住居数が40軒あり、後続する「古墳時代前期」の住居数が103軒を数えるのに対して、当遺跡では「弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭」の住居跡は1軒で、「古墳時代前期」の住居数も11軒に留まることから、可耕地や居住地の許容が不足している当遺跡よりも、首長的な人物の出現に伴いより広い可耕地と居住地が確保できる「桜の郷遺跡群」が中心になっていったと考えるのである。

律令期に入ると国衙を頂点とした班田収授による効率的な税の確保を目的とした計画的な可耕地の確保とその整備がはかられ、大塚遺跡の掘立柱建物跡群が示しているように、郡衙ないしは郷衙的な役割を担う建物群が建てられ隆盛を迎えていることから、奈良時代・平安時代においても当遺跡と「桜の郷遺跡群」との優劣関係は変わらないのは明らかである。「桜の郷遺跡群」では、高盤や灰釉陶器、鉄製品、帯金具などの優位性を表す遺物が多く出土しているのに対して、当遺跡でのそれは非常に少ないことから裏付けられるのである。

以上、大戸下郷遺跡について『大戸下郷遺跡1』と『大戸下郷遺跡2』を元に時代順に概略を述べてきたが、「大戸遺跡群」の中で当遺跡がどのような盛衰を繰り返してきたかについて、多少の光を当てることができたように思う。しかし、事実の羅列に徹してしまったことは否めず、弥生時代後期後半や古墳時代後期第Ⅱ期のように、「大戸遺跡群」の中で当遺跡が拠点的な集落へと発展した背景の解明など不十分な点が多い。さらに、「大戸遺跡群」の中での当遺跡と周辺遺跡との関わりについては憶測の域を出ていない面も事実である。

近年、羽黒山遺跡や大戸富士山遺跡が調査されており、今回触れることはできなかったが、「桜の郷遺跡群」と当遺跡との相関関係についての新たな課題も見えてきた。今後は「大戸遺跡群」全体の歴史的な評価が行われるであろうが、今回の報告がそのための一助となれば幸いである。

註

- 1) 近藤恒重「大戸下郷遺跡 主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第216集 2004年3月
- 2) 鈴木素行「仙湖の辺—「武田式」以前の「十王台式」について—」『茨城県史研究』第86号 茨城県立歴史館 2002年2月
- 3) 長谷川聡「北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 大作遺跡・大畑遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第136集 1998年3月
- 4) 飯島一生「北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 矢倉遺跡・後口原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第135集 1998年3月
- 5) 荒蒔克一郎・田中幸夫「綱山遺跡 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅵ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第243集 茨城県教育財団 2005年3月
「桜の郷遺跡群」という呼称については「茨城県最新発掘情報」（瓦吹堅「茨城県最新発掘情報」『考古学ジャーナル』46 2000年7月）が初出であり、「綱山遺跡」ではそれを準拠しつつ「当遺跡群は、矢倉遺跡、大畑遺跡、大戸下郷遺跡を含めた酒沼前川流域に分布する大戸遺跡群の北西端に位置する「支群」である」と述べている。
- 6) 川又清明・浅野和久「宮後遺跡3 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第241集 2005年3月
- 7) 「桜の郷遺跡群」に関わる報告書では、十王台式土器と土師器が共伴する住居跡には「弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭」の呼称を用い、十王台式土器のみが出土している住居跡については「弥生時代後期後半」として区別している。
- 8) 長谷川聡・田中幸夫・小野克敏「大塚遺跡1 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第242集 2005年3月

- 9) 井上琢哉・小林健太郎「大塚遺跡2・木戸遺跡 主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書V」『茨城県教育財団文化財調査報告』第258集 2006年3月刊行予定
- 10) 前掲5) に同じ
- 11) 村上和彦「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書I 石原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第163集 2000年3月
- 12) 前掲9) に同じ
- 13) 鶴見貞雄「炉石住居覚書—茨城県の弥生・古墳時代の住居例から—」『研究ノート』5号 財団法人茨城県教育財団 1996年6月
- 14) 江幡良夫・黒澤秀雄「十万原新住宅市街地開発事業・都市計画道路十万原東西線街路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書 二の沢A遺跡・二の沢B遺跡(古墳群)・ニガサワ古墳群」『茨城県教育財団文化財調査報告』第208集 2003年3月
- 15) 柿沼幹夫「関東の方形周溝墓 北関東①埼玉県」同成社 1996年12月
- 16) 鈴木素行「武田石高遺跡における十王台式土器の編年について—「十王台式」分析のための基礎的な作業—」『武田石高遺跡旧石器・縄文・弥生時代編』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第15集 1998年3月
- 17) ア. 鈴木素行「武田西埜遺跡における十王台式土器の分析—「小祝式土器」と「武田式土器」の誕生—」『武田西埜遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第21集 2001年3月
 イ. 鈴木素行「ぼんぼり山遺跡における十王台式土器の分析—「小祝式椀巾段階」と「武田式西埜段階」の土器群—」『ぼんぼり山遺跡・猪谷津遺跡』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第27集 2003年3月
 鈴木氏は、第21集で久慈川流域の土器群を「小祝式土器」と設定した上で、第27集で「小祝式」に典型的な文様が施文されながらも、胎土・焼成・色調、他の文様などから、那珂川流域の製作と想定される土器も見られる。土器群の搬入、製作技法の導入として捉えられる現象は、久慈川流域からの移住がもたらしたものではないかと考えている。」と述べている。第207図2も同様の観点から「久慈川流域の影響を受けている可能性が高い」という表現にとどめた。
- 18) 井上義安「薬王院東遺跡 千波中学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査広告書」水戸市薬王院東遺跡発掘調査会 1990年3月
- 19) 関口満ほか「根鹿北遺跡・栗山窯跡 土浦市今泉霊園拡張工事業地内埋蔵文化財調査報告書」土浦市遺跡調査会 1997年3月
- 20) 井上義安ほか「茨城県大洗町長峯遺跡」大洗町教育委員会 1973年12月
- 21) 前掲3) に同じ
- 22) 鈴木素行「遺跡群として表現される集落の移動—那珂川流域の十王台式土器と集落」『図説水戸・笠間の歴史』郷土出版社 2004年4月
- 23) 前掲1) に同じ
 第21号住居跡は十王台式土器を伴う住居跡であるが、土師器と共存していることから『大戸下郷遺跡1』では古墳時代前期に位置づけられている。
- 24) 前掲16) に同じ
- 25) 前掲5) に同じ
- 26) 前掲6) に同じ
- 27) 飯島一生氏は、第1号墓壙からガラス玉が出土していることに着目し『十王台式最後の墓壙』であると予察している。
- 28) 前掲22) に同じ
- 29) 前掲5) に同じ
- 30) 前掲5) に同じ
- 31) 「大戸遺跡群」の各遺跡において、調査面積における各時期の住居跡の検出数を比較した。遺跡全体の何%を調査したのかによっても検出数は違って来るであろうし、大戸下郷遺跡、矢倉遺跡、大畑遺跡は道路幅の調査、「桜の郷遺跡群」の各遺跡は面での調査であり、単純には比較できないがあえて検討材料とした。以下に表を掲載する。

表12 「大戸遺跡群」各遺跡の調査面積における住居跡検出数

遺跡名	面積(m ²)	弥生時代後期後半(軒)	弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭(軒)
大戸下郷遺跡	12,626	29	1
矢倉遺跡	9,430	31	0
大畑遺跡	10,879	10	0
宮後遺跡	39,064	1	4
大塚遺跡	26,799	16	12
綱山遺跡	1,046	1	11
石原遺跡	10,414	17	6
木戸遺跡	3,226	1	0

- 32) 古墳時代後期の時期判別は下記によった。
 榎村宣行・浅井哲也「常陸地域の鬼高式土器—久慈川・那珂川流域を中心として」『考古学ジャーナル』342 1992年1月
 基本的には『大戸下郷遺跡1』の時期判別に従っている。しかし、『大戸下郷遺跡1』で報告されている「6世紀前半」や「6世紀後葉から7世紀前葉」の一部には、平成16年度の調査（『大戸下郷遺跡2』報告分）による類例の増加により帰属時期を再検討し、修正を加えることとなったが、その時期修正に懸かる責は本稿の筆者にある。
- 33) 井上義安ほか「落神遺跡」『大貫台埋蔵文化財発掘調査報告書』第4冊 大洗町大貫台埋蔵文化財発掘調査会 2001年6月
- 34) 第30号住居跡が掘り込んである第31号住居跡については、住居跡総数には加えたが、『大戸下郷遺跡1』で「第31号住居跡を拡張して第30号住居跡を構築したと推定され」とあることから、ここでは第30号住居跡として扱うこととする。
- 9) 井上琢哉・小林健太郎「大塚遺跡2・木戸遺跡 主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書V」『茨城県教育財団文化財調査報告』第258集 2006年3月刊行予定
- 35) 前掲6)に同じ
- 36) 前掲8)・9)に同じ
- 37) 前掲5)に同じ
- 38) 前掲9)に同じ
- 39) 桐生直彦「棚状施設をもつ竪穴建物の性格(2) —都市と農村の比較—」『國學院大學考古学資料館紀要』第18 2002年3月

参考文献

- ・今村啓爾『縄文文化の研究(2) 生業』「陥穴(おとしあな)」雄山閣 1983年2月
- ・中村博信「溝型陥し穴研究序説」『栃木県考古学会誌』第19集 栃木県考古学会 1993年3月
- ・弥生時代研究班「茨城後期弥生土器編年の検討(I) 十王台式土器について」『研究ノート』創刊号 財団法人茨城県教育財団 1992年7月
- ・弥生時代研究班「茨城後期弥生土器編年の検討(II) 十王台式土器について」『研究ノート』2号 財団法人茨城県教育財団 1993年7月
- ・弥生時代研究班「茨城後期弥生土器編年の検討(III) 十王台式土器について」『研究ノート』3号 財団法人茨城県教育財団 1994年6月
- ・飯島一生「十王台式土器の相違を考える—矢倉遺跡と大畑遺跡の観察から」『研究ノート』8号 財団法人茨城県教育財団 1999年6月
- ・飯島一生「茨城町矢倉遺跡・大畑遺跡—溜沼前川を挟んで対峙する集落—」十王台式土器制定60周年記念シンポジウム『茨城県における弥生時代研究の到達点—弥生時代後期の集落構成から—』茨城県考古学協会・十王町教育委員会 1999年11月
- ・飯島一生「十王台式期における異系土器文化圏との交流—溜沼前川流域における十王台式土器と樽式土器の出土例から—」『領域の研究』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会 2003年3月
- ・鈴木素行「半分山遺跡における十王台式土器の分析—「小祝式梶巾段階」と「武田西塙・石高段階」の土器群—」『半分山遺跡』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第30集 2004年3月
- ・浅井哲也「茨城県における古墳時代前期の土器」『領域の研究』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会 2003年3月
- ・高橋一夫「古墳時代の研究2 集落と豪族居館」雄山閣 1994年6月
- ・鶴間正昭「武蔵国における鉄鎌の形式分類とその編年の予察」『法政考古学』第10集—記念論文集— 1985年3月
- ・大木紳一郎「群馬北辺の弥生社会—後期弥生集落の分析から—」『研究紀要22—創立25周年記念論文集—』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004年3月

付 章

大戸下郷遺跡から出土した炭化材の樹種について

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

茨城県茨城町に所在する大戸下郷遺跡では、縄文時代の陥し穴、弥生時代の土坑、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代の竪穴住居跡、近世の墓坑、時期不明の掘立柱建物跡、溝跡、土坑、井戸跡等の遺構が検出されている。このうち、弥生時代の第141号、第143号、第156号住居跡では、炭化材が良好な状態で出土している。

本報告では、各住居跡から出土した炭化材の樹種同定を実施し、弥生時代の木材利用に関する資料を得る。また、部材の形状による樹種の違いが見られるか等についても検討する。

1 試料

試料は、弥生時代の竪穴住居跡から出土した炭化材9点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

2 分析方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3 結果

樹種同定結果を表1に示す。炭化材は、針葉樹1種類、広葉樹2種類に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

- ・ カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁には2本が対をなしたらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

- ・ ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

- ・ キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科キハダ属

環孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～4細胞幅、1～40細胞高。

4 考察

炭化材はいずれも竪穴住居跡の床面直上から出土しており、住居構築材に由来する可能性が考えられている。第141号住居跡と第143号住居跡の炭化材は、いずれも丸材の可能性はあるが、第143号住居跡で床面が赤変し、焼土が検出されているのに対し、第141号住居跡では赤変および焼土は認められない。一方、第156号住居跡の炭化材は板材の可能性が考えられている。これらの炭化材の樹種は、第143号住居跡が全点カヤ、第156号住居跡が全点ケヤキであった。一方、住居跡はカヤ、ケヤキ、キハダの3種類が認められ、住居によって種類構成が異なる。このことは、住居、部材などにより樹種利用が異なっていたことに由来する可能性もある。

本遺跡周辺では、隣接する矢倉遺跡でも弥生時代終末の竪穴住居跡から出土した炭化材の樹種同定が実施されており、クヌギ節、ケンボナシ属、モミ属、ヤマグワ、クリの5種類が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1998）。矢倉遺跡では、本遺跡で確認された種類が1種類も認められず、種類構成に違いが認められる。木材利用が異なる背景には、住居の大きさ、構造、部位の違いや、木材を伐採した場所の地形などに起因する局地的な植生の違いなどが推定される。ただし、同時期の木材利用に関する資料は少なく、今後継続した資料蓄積を行うことが望まれる。

表1. 樹種同定結果

遺構	出土位置	形状	試料番号	樹種	備考
第141号住居跡	床面直上	丸材か	①	ケヤキ	遺物取り上げNo. 8
			②	カヤ	遺物取り上げNo. 9
			③	キハダ	取り上げNo. 10
第143号住居跡	床面直上	丸材か	①	カヤ	取り上げNo. 1
			②	カヤ	取り上げNo. 2
			③	カヤ	
第156号住居跡	床面直上	板材か	①	ケヤキ	
			②	ケヤキ	
			③	ケヤキ	

引用文献

- ・ パリノ・サーヴェイ株式会社、1998、矢倉遺跡から出土した炭化材の樹種。「茨城県教育財団文化財調査報告書第135集 北関東自動車道（友部～水戸）建設地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 矢倉遺跡・後口原遺跡」、日本道路公団東京第一建設局・財団法人茨城県教育財団、149-150.

写 真 图 版



調査区全景



調査区全景（西側上空から）

PL 2



遺構確認状況



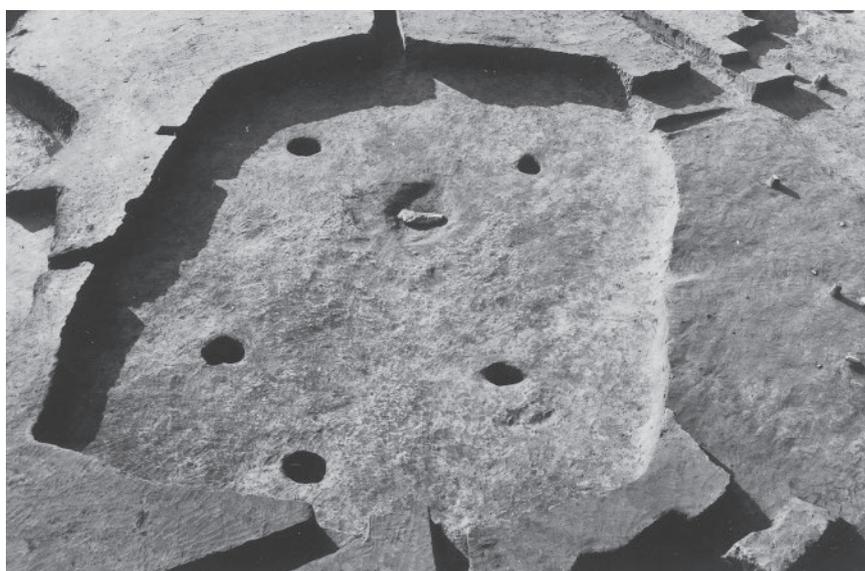
遺構完掘状況



陥し穴完掘状況

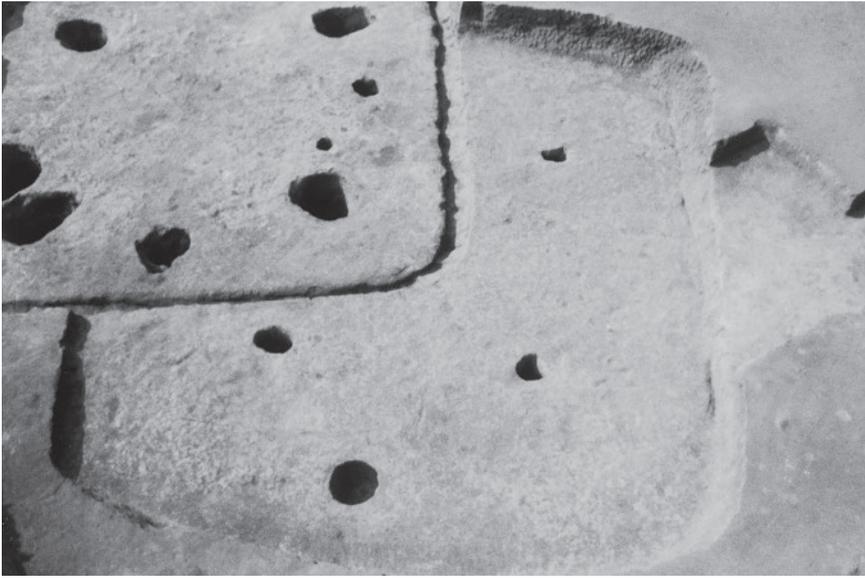


第92号住居跡
完掘状況

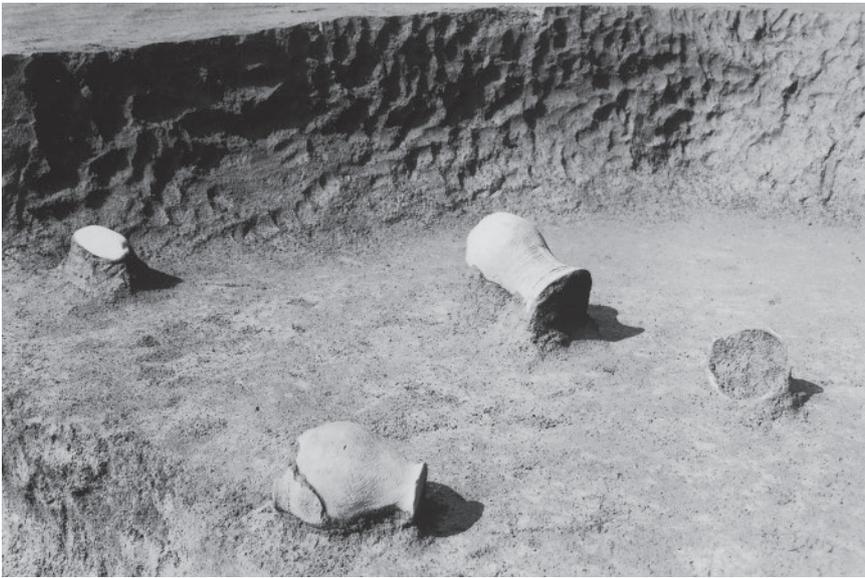


第96号住居跡
完掘状況

PL 4



第100号住居跡
完掘状況



第100号住居跡
遺物出土状況



第105号住居跡
完掘状況

第 105 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況



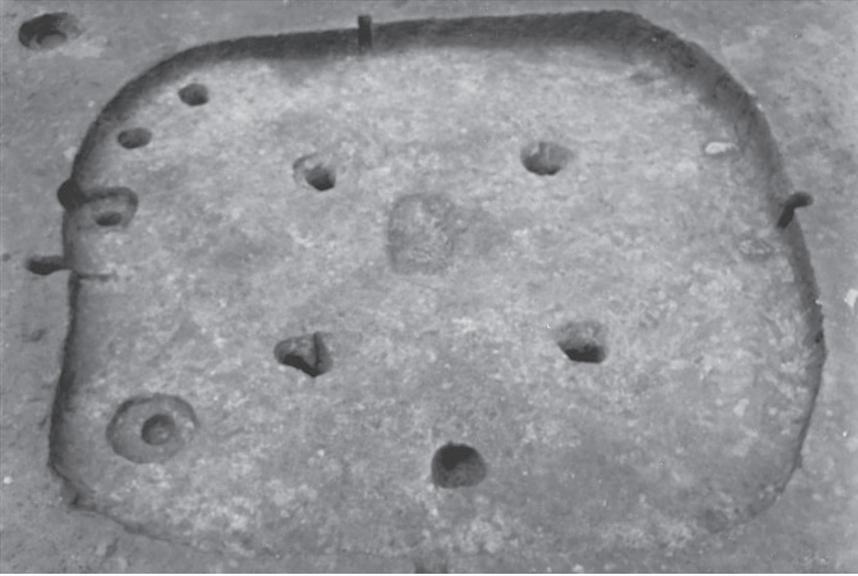
第 156 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 156 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況



PL 6



第 114 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 114 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況

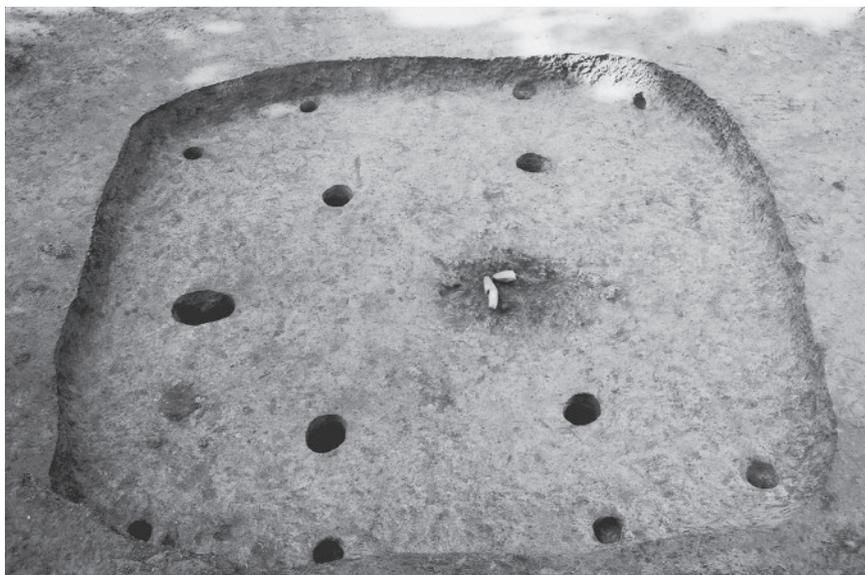


第 114 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況

第 158 号 住 居 跡
完 掘 状 況

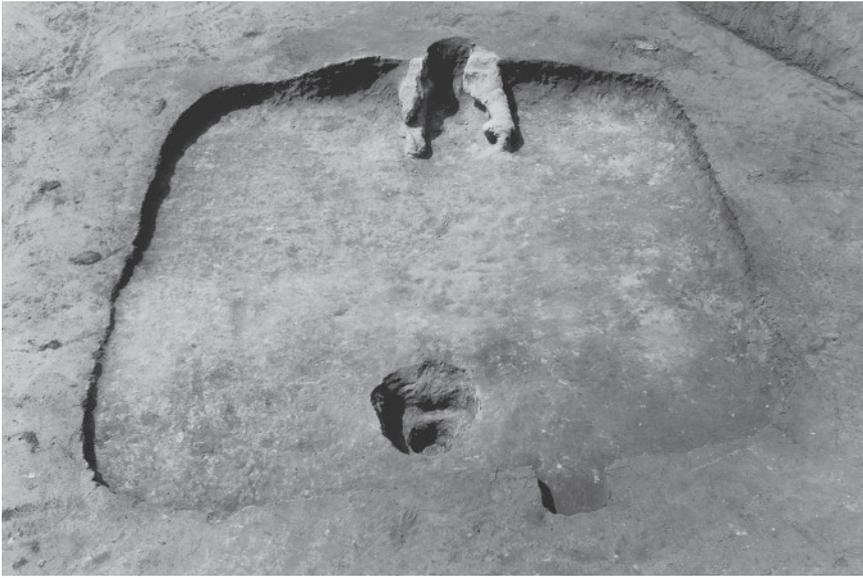


第 159 号 住 居 跡
完 掘 状 況

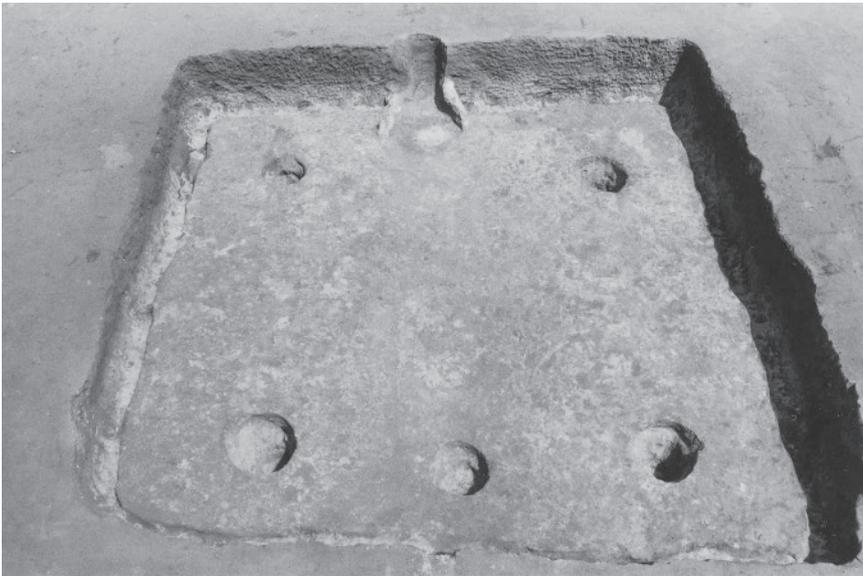


第 159 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況





第 77 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 79 号 住 居 跡
完 掘 状 況

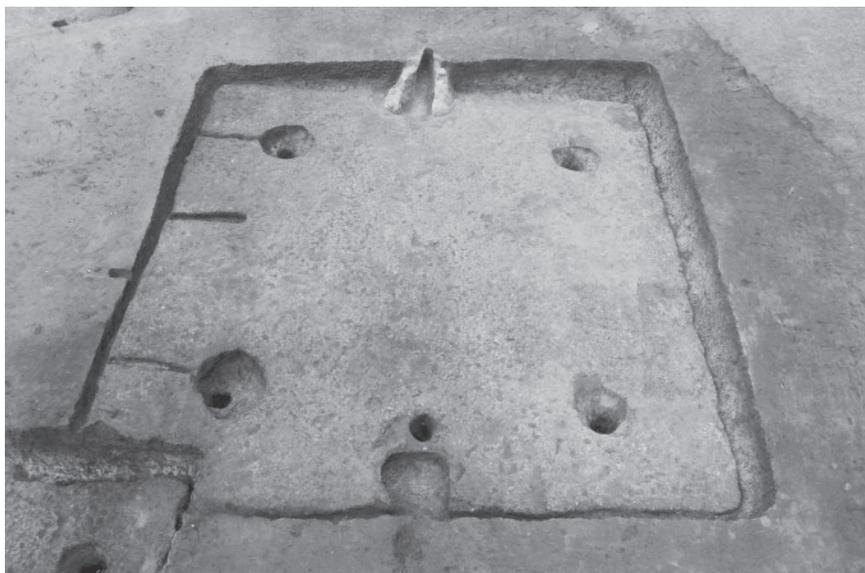


第 79 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況

第79号住居跡
竈遺物出土状況



第80号住居跡
完掘状況



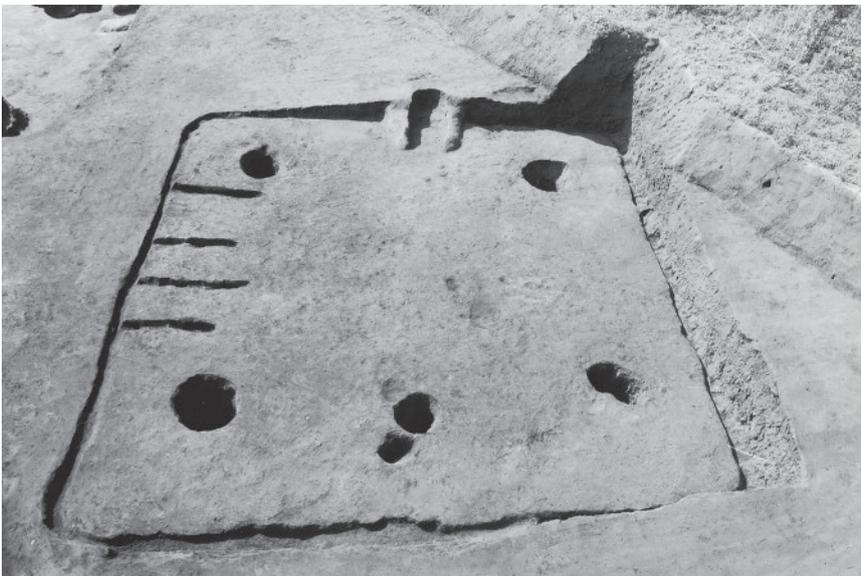
第81号住居跡
完掘状況



PL10



第 81 号 住 居 跡
竈 遺 物 出 土 状 況



第 86 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 86 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況

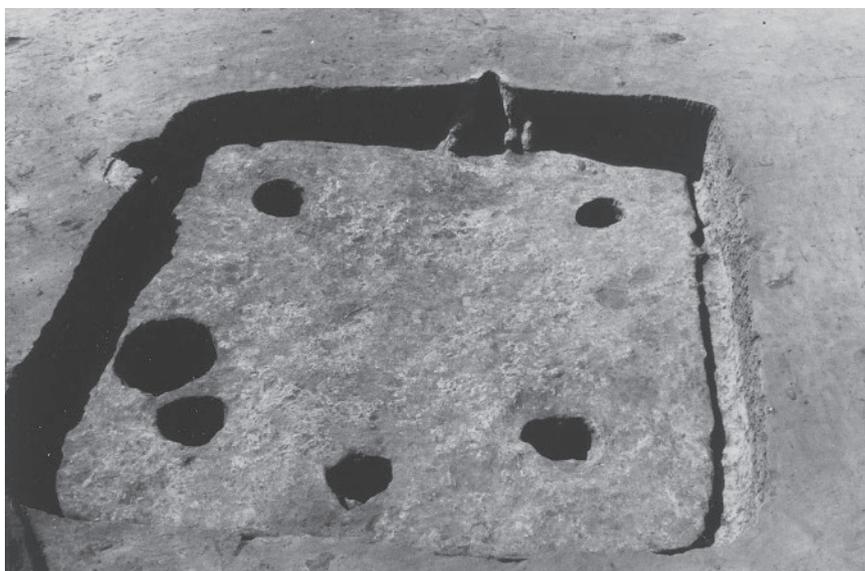
第 97 号 住 居 跡
完 掘 状 況



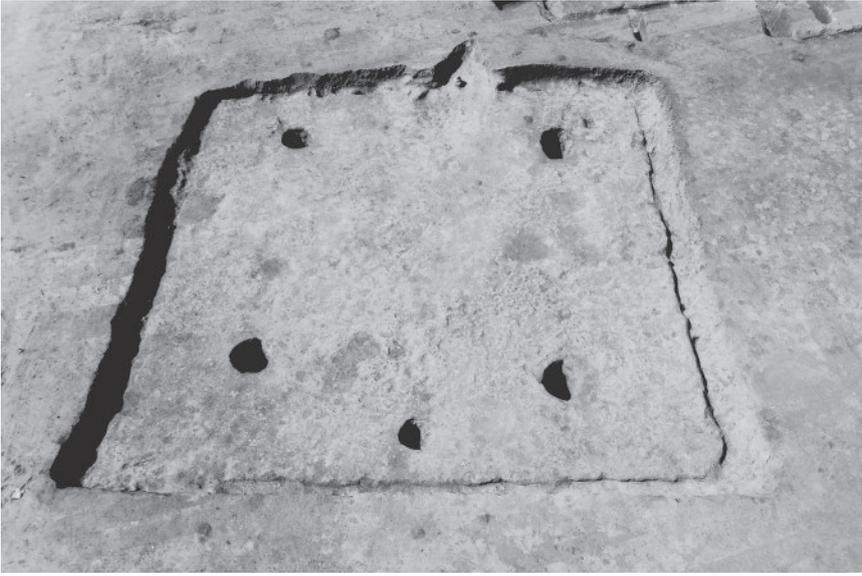
第 98 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 99 号 住 居 跡
完 掘 状 況



PL12



第 122 号 住 居 跡
完 掘 状 況

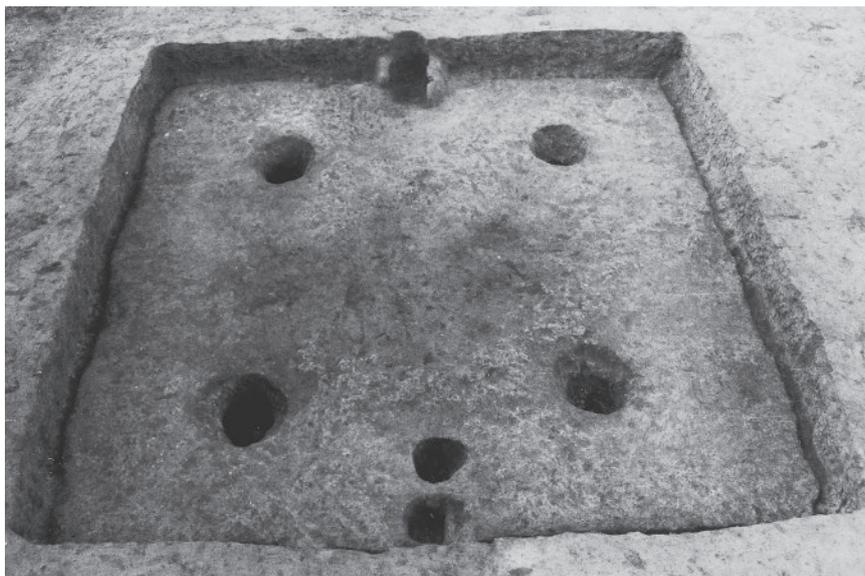


第 130 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 130 号 住 居 跡
竈 完 掘 状 況

第144号住居跡
完掘状況



第144号住居跡
竈遺物出土状況



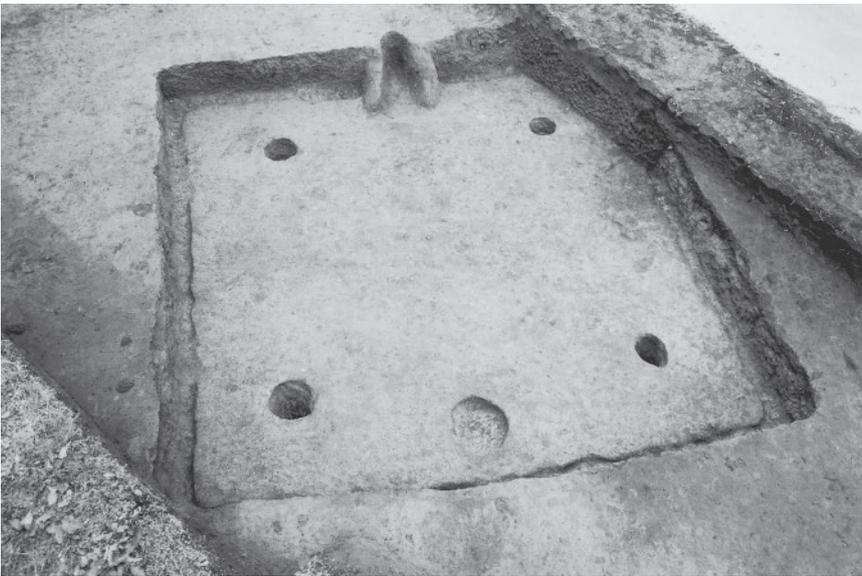
第145号住居跡
完掘状況



PL14



第 145 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況



第 146 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 147 号 住 居 跡
完 掘 状 況

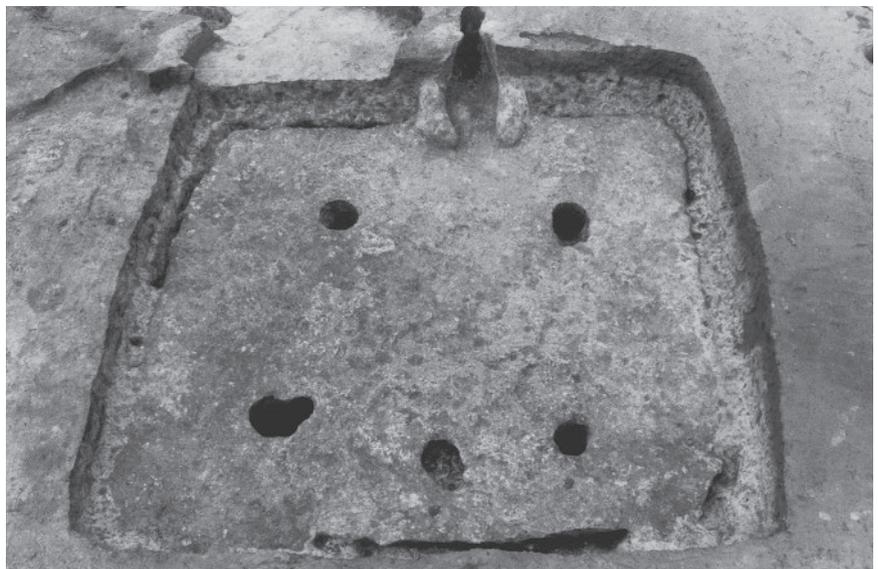
第147号住居跡
竈遺物出土狀況



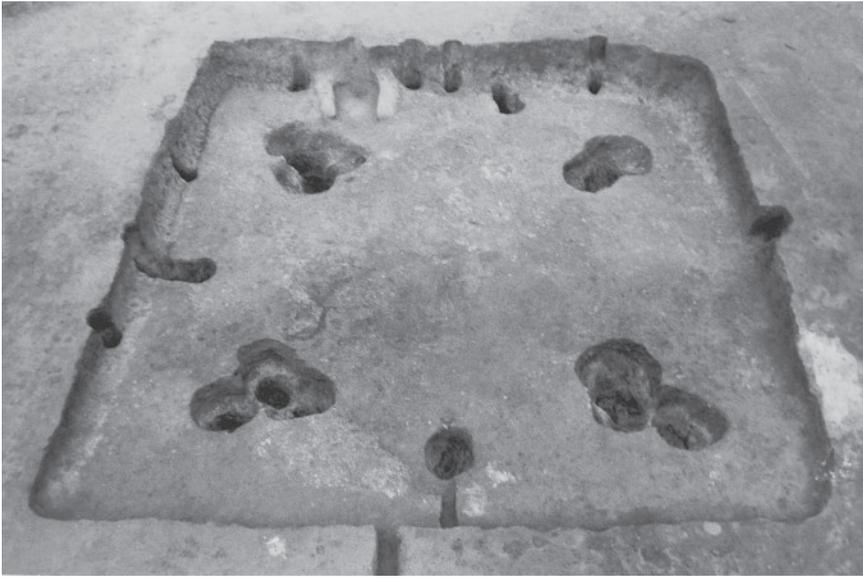
第104号住居跡
完掘狀況



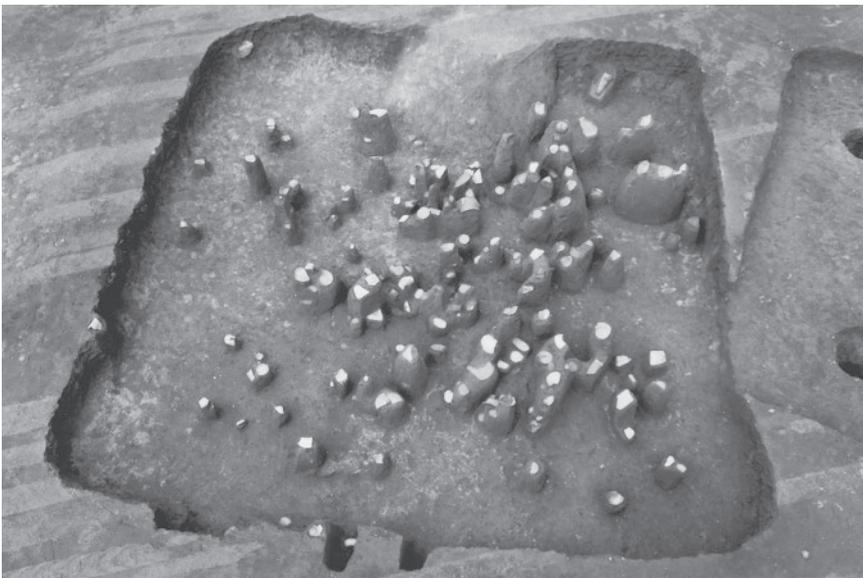
第110号住居跡
完掘狀況



PL16



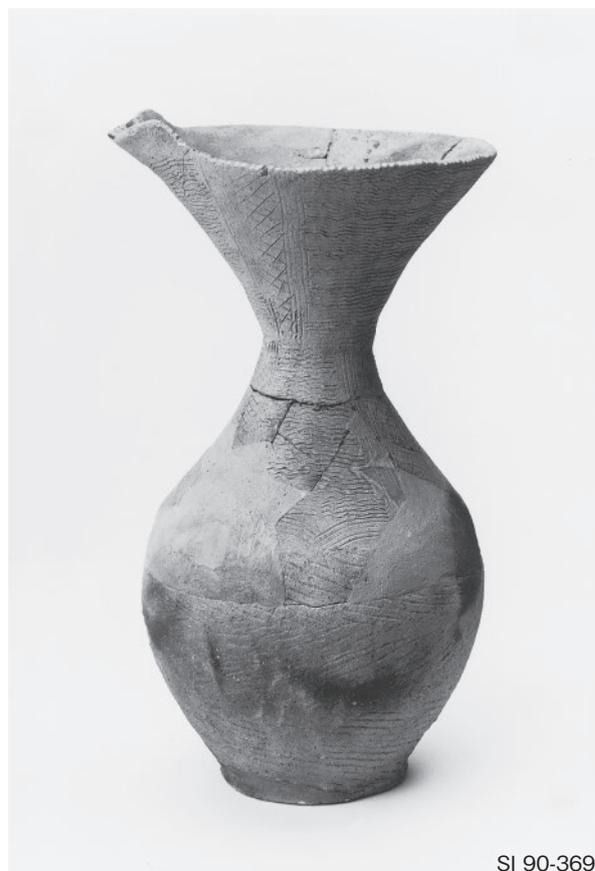
第 111 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 118 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況



第 121 号 住 居 跡
完 掘 状 況



PL18



第96・105・114・134号住居跡出土土器



PL20



第96・105・114・134号住居跡出土土器



SI 134-416



SI 158-454



SI 158-450



SI 96-379



SI 90-361



SI 90-362

PL22



SI 105-392



SI 90-367



SI 112-395



SI 88-357



SI 105-393



SI 100-385

第88・90・100・105・112号住居跡出土土器



PL24



第79・80・81・84号住居跡出土土器



SI 98-559



SI 84-515



SI 80-487



SI 86-521



SI 97-552



SI 93-542



SI 86-520



SI 86-519



SI 81-506



SI 86-522

PL26



SI 127-606



SI 130-610



SI 132-615



SI 97-553



SI 122-589



SI 132-613



SI 132-614



SI 132-617



SI 122-588



SI 127-607

第97・122・127・130・132号住居跡出土土器



SI 147-647



SI 147-644



SI 132-616



SI 130-611



SI 86-533



SI 86-538



SI 80-495



SI 80-496

PL28



SI 116-584



SI 116-585



SI 122-592



SI 101-573



SI 101-569



SI 106-580



SI 80-501

第80・101・106・116・122号住居跡出土土器



SI 81-511



SI 98-562



SI 145-639



SI 81-510



SI 145-638



SI 132-619



SI 86-524

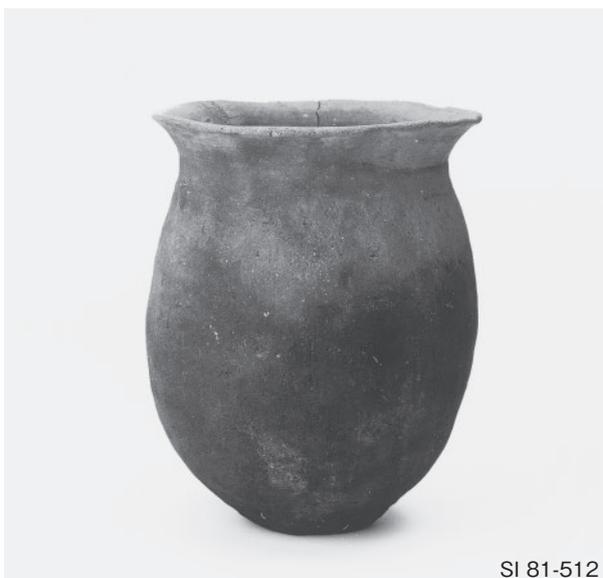


SI 106-578

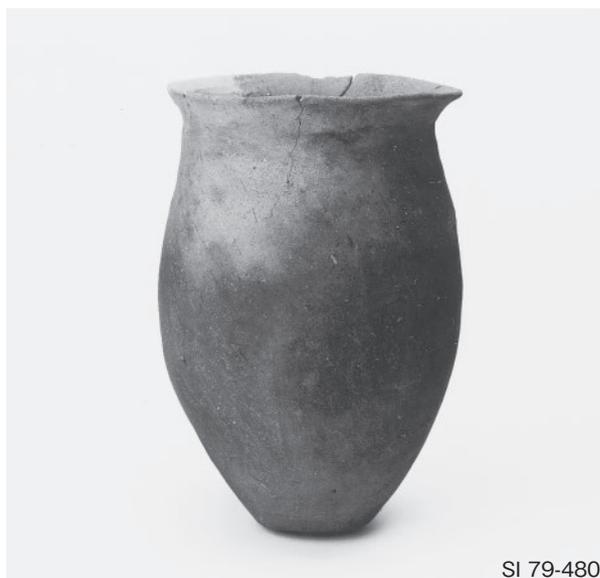
PL30



第79・86・130号住居跡出土土器



SI 81-512



SI 79-480



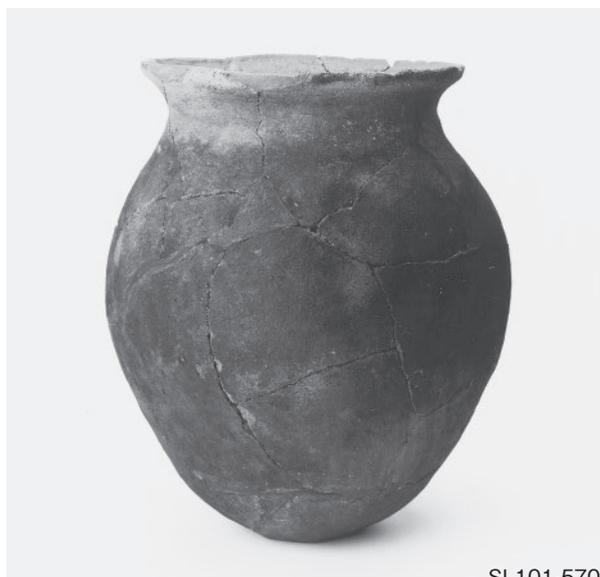
SI 79-477



SI 86-534



SI 80-499



SI 101-570

第79・80・81・86・101号住居跡出土土器

PL32



SI 144-634



SI 147-651



SI 86-540



SI 86-539



SI 79-482



SI 93-551

第79・86・93・144・147号住居跡出土土器



PL34



第110・118号住居跡出土土器



SI 111-697



SI 118-730



SI 118-726



SI 118-722



SI 118-725



SI 118-723



SI 121-752



SI 118-724



SI 111-695



SI 121-754

PL36



第78・93・107・110・121号住居跡出土土器



SI 111-694



SI 109-681



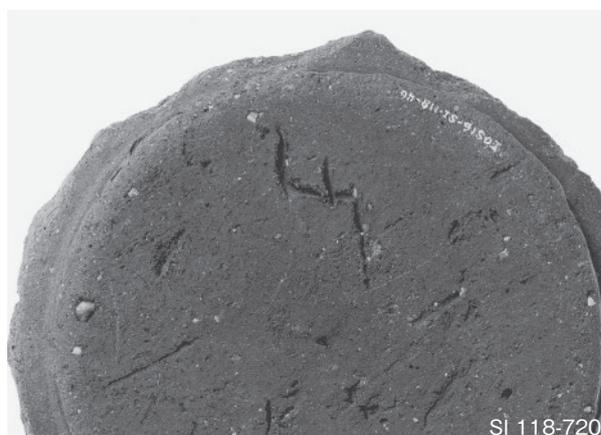
SI 121-750



SI 118-698



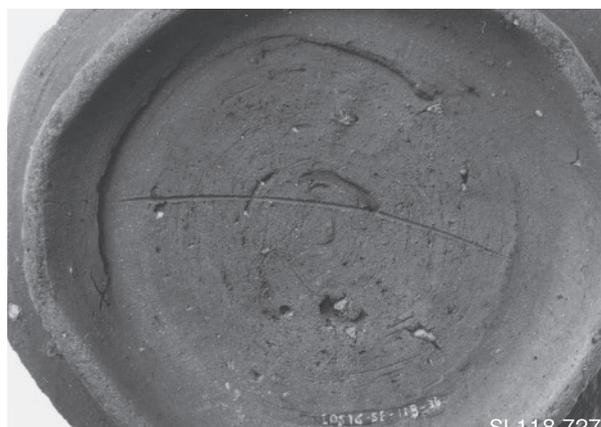
SI 118-719



SI 118-720

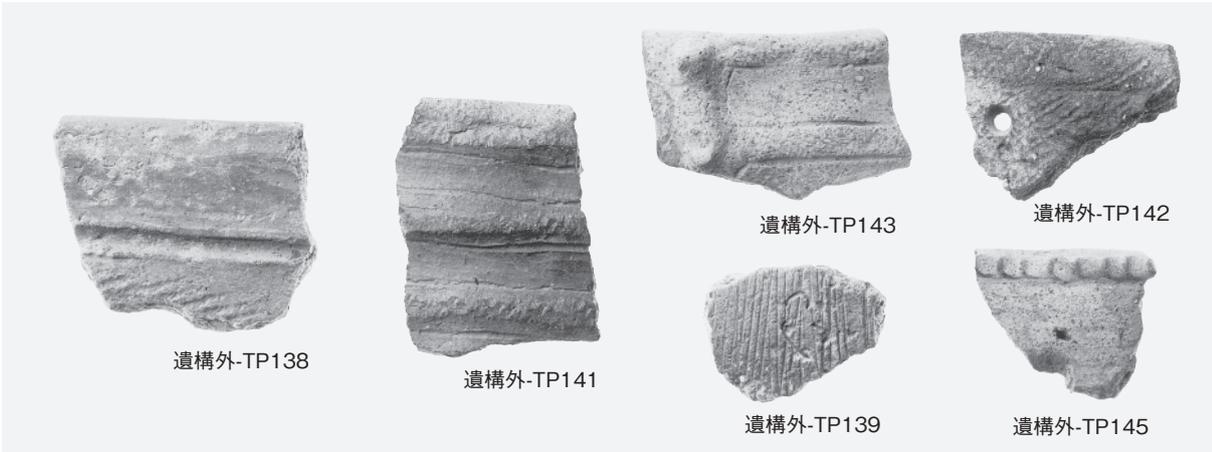


SI 118-706

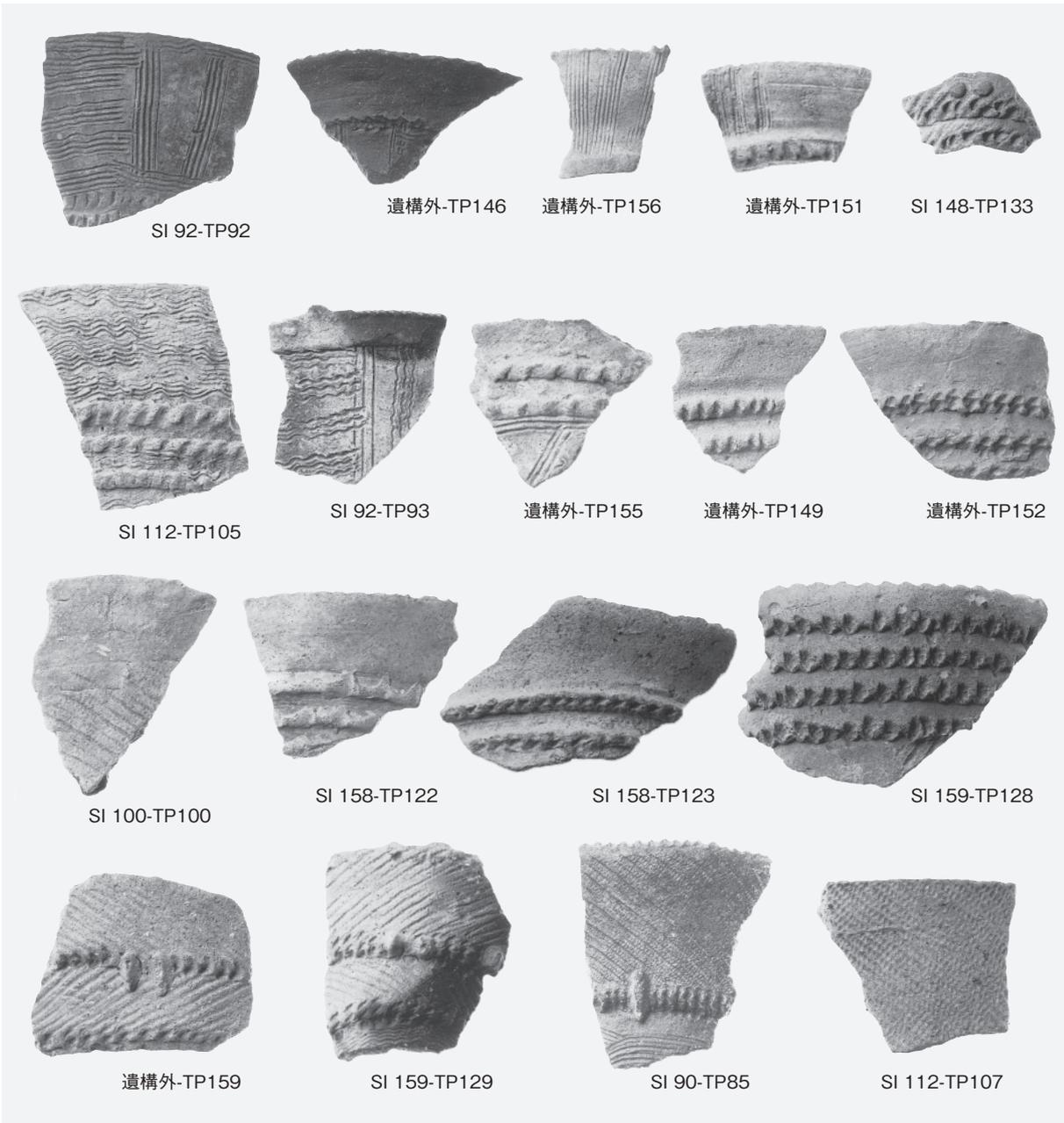


SI 118-727

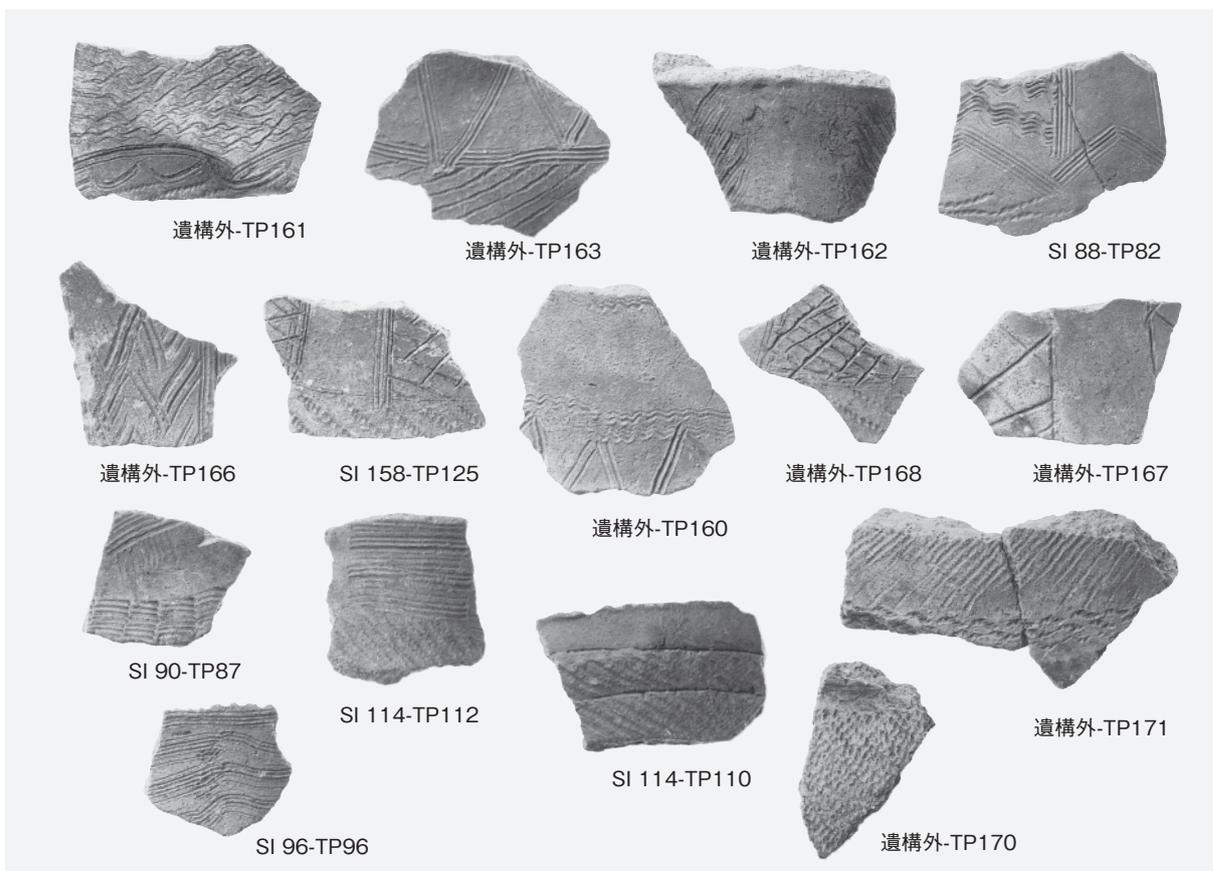
第109・111・118・121号住居跡出土土器



出土繩文土器



出土弥生土器



出土弥生土器



弥生時代住居跡，遺構外出土紡錘車

PL40



出土土製品・石製品（紡錘車）



弥生～古墳時代住居跡出土球状土錘



SI 90-DP54



SI 144-DP134



SI 110-DP141

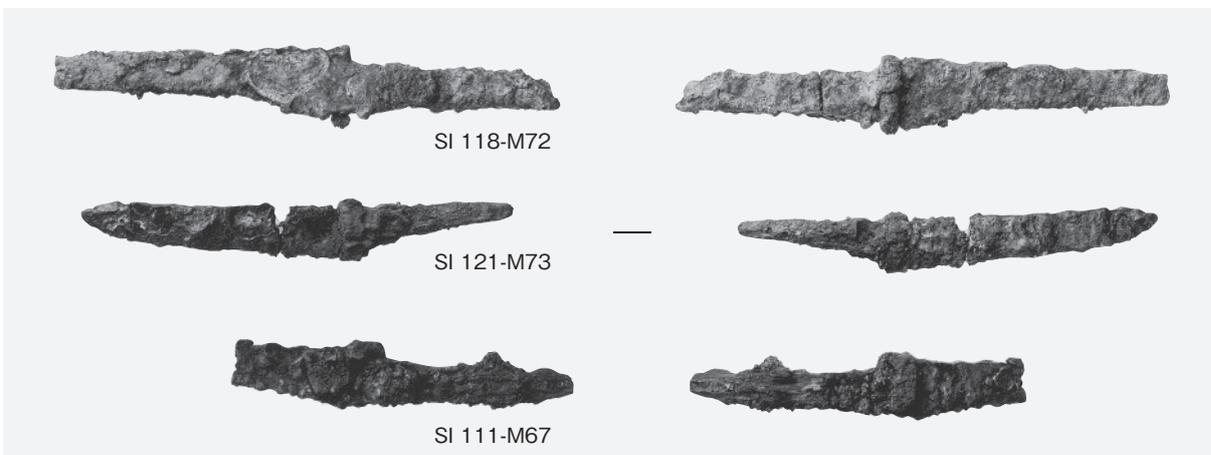
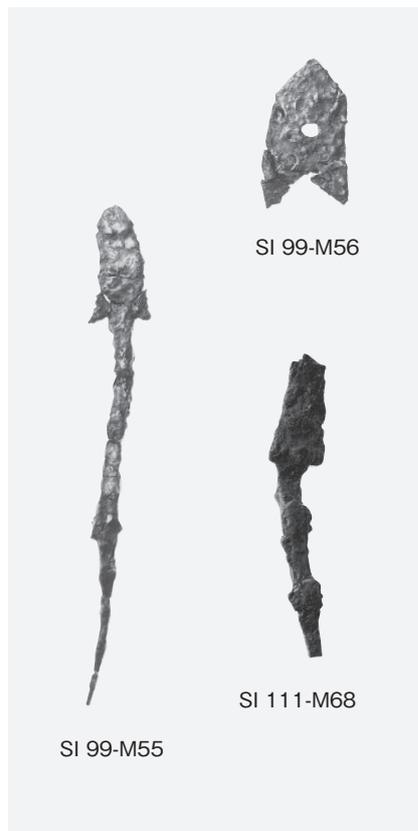


SI 93-DP94

出土土製品 (球状土錘・不明土製品・支脚)

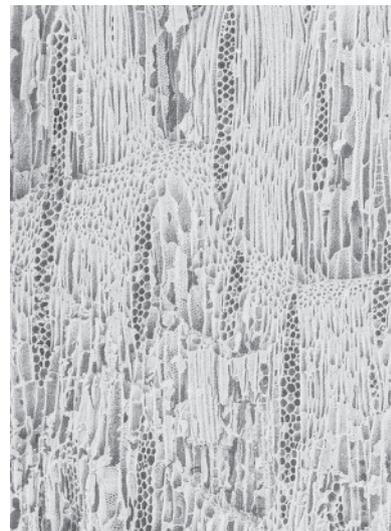
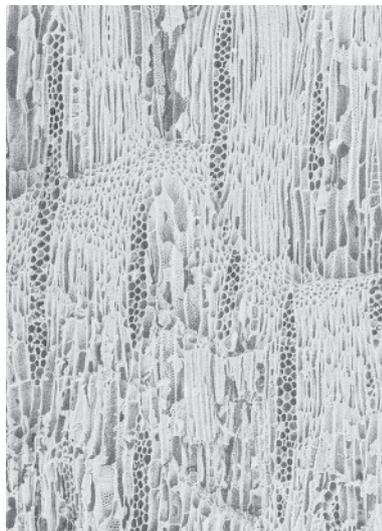
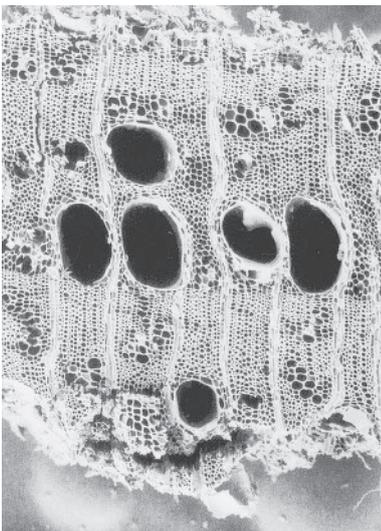
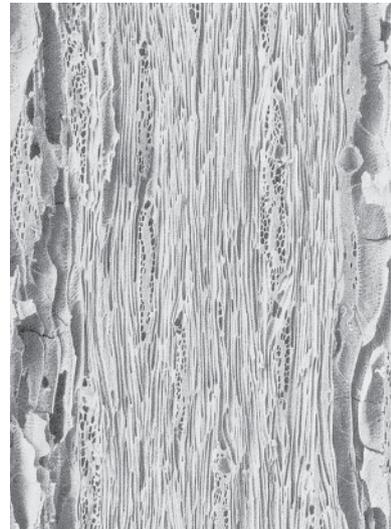
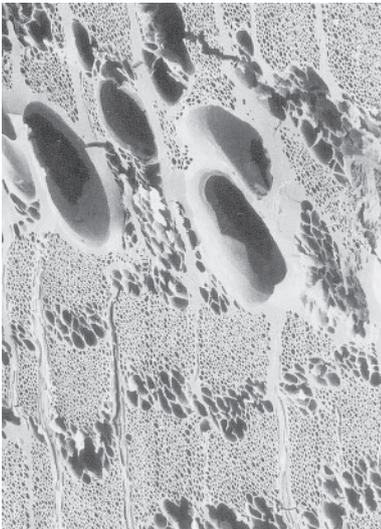
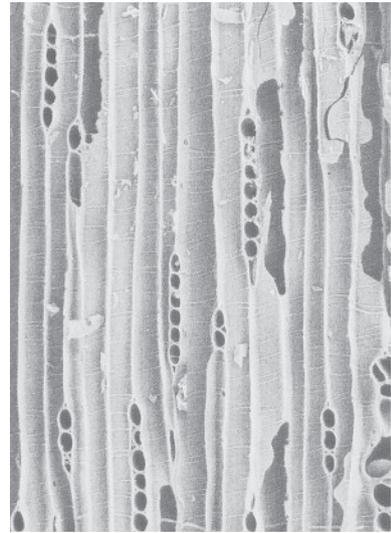
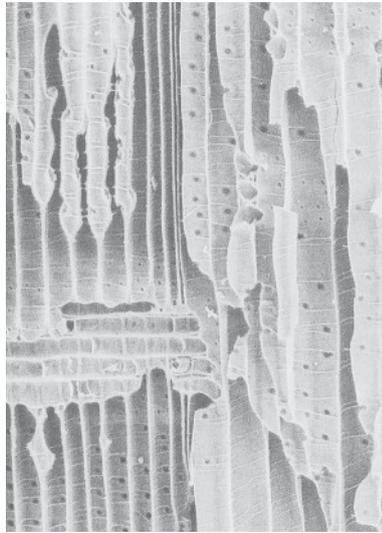
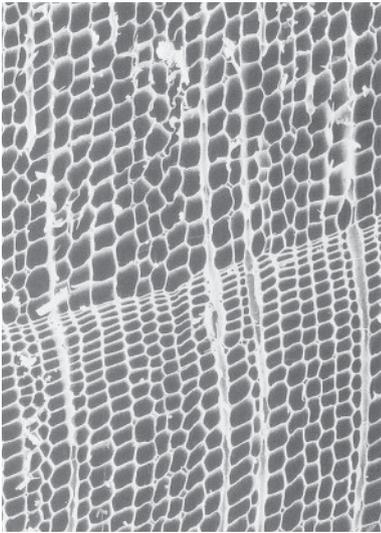


住居跡・遺構外出土石器・石製品 (石鏃・勾玉・磨製石斧・敲石・砥石)



住居跡・墓坑出土鉄製品・銅製品 (鎌・鍬・刀子・鉄斧・丸柄・分銅)

図版 1 炭化材



- 1. カヤ(第143号住居跡③)
 - 2. ケヤキ(第156号住居跡①)
 - 3. キハダ(第141号住居跡③)
- a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μm: 2・3a
200 μm: 1a, 2・3b, c
100 μm: 1b, c

茨城県教育財団文化財調査報告第257集

大戸下郷遺跡 2

主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

平成 18(2006) 年 3月 20日印刷

平成 18(2006) 年 3月 24日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 山三印刷株式会社
〒311-4153 水戸市河和田町4433の33
TEL 029-252-8481

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第257集

大戸下郷遺跡 2 遺構全体図

